

---

# 『水面の記憶』

ZZZZ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『水面の記憶』

### 【コード】

N3270N

### 【作者名】

ZZZZ

### 【あらすじ】

---

普通の女の子が高校生となったのをきっかけに、

高校生活で起きた出来事や、思ったことを綴るブログ日記

）  
）  
）

自分の望まない色を持つ少女達。

何色にも変化する玉虫色を持つ少女、こうさか高坂 かなえ香奈恵

あらゆる色とも混ざり変色してしまう白い色を持つ少女、にしな仁科 なつめ棗

全ての色を飲み込む黒い色を持つ少女、まみや間宮 みこと命

）  
）  
）

彼女たちは、色を持たない少女、みさき三崎 みなも水面と出会い、

それを転機として、自分の求める色を見出していく。

2009年 4月(前書き)

変更履歴

2011/04/06	記述修正	〜、て	〜って
2011/04/10	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3年	
2011/04/16	記述変更	(クラス)1組、2組、3組	
2011/04/18	記述統一	(期間)一日、二月、三年	
2011/04/21	誤植修正	新生活でで磨り減った	新
2011/04/22	記述統一	第一、第二、第三	第1、
2011/04/24	記述統一	1ヶ所、二ヶ月、二ヶ月	
2011/05/02	記述統一	一本、二本、三本	1本、
2011/05/03	記述統一	一回、二回、三回	1回、
2011/05/07	記述統一	一階、二階、三階	1階、
2011/05/09	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2011/06/09	誤植修正	始め	初め
2011/07/04	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2011/08/23	誤植修正	位	くらい
2011/09/17	誤植修正	話し	話

2009年 4月

4月1日 ブログ日記開始

はじめまして。

わたしは、水面と書いて「みなも」と言います。  
今日から高校生になったので、これをきっかけに、  
ブログの日記を始めてみることにしました。

わたしは特に、すごい人生を送っていることもないので、  
面白いことはあまり書けないと思います。

だけど、見てもらえると、とてもうれしいです。

ひとつだけ、自慢なのは、髪の毛の長さです。

幼稚園の頃からずっと短くしないで来ました。

今は、一番長いところが膝の裏のちよつと上くらいあります。

でも小学校の四年生の時くらいから、

背中くらいのロングに見えるようにまとめてるから、

普段は、見てもとても長いとは判りません。

これだとあまり自慢にはならないですね。

すいません。

中学の時も色々なことがあったけど、

今のわたしがあるのも、いろんな出来事のおかげだと思っています。

だから、高校でもわたしの正しいと思う考えをもって、

過ごしていききたいと思っています。

ふつつか者ではありませんが、どうかよろしくお願いします。

4月5日 制服

いよいよ明日が入学式です。

高校は、風高校という名前で、

この名前はかなり気に入っています。

何となく、かっこいいなあって。

わたしのレベルでは入れるかどうか怪しかったけど、

なんとか合格できました。

これからが勉強大変かもしれないけど……

今は、まだ考えたくない。

話は戻って、この風高の制服なんですけど、とても気に入っています。

ちよつと前の代で、地味な紺のブレザーから代わって、

冬服は、ベージュのセーラー服とブレザーがあって、

夏服は、セーラー服とポロシャツと普通のワイシャツがあるんです。

スカートは、デザインは、濃いベージュのチェック柄と、

色は同じ濃いベージュだけど無地の2つで、

夏服と冬服の違いは、生地の厚さが違うだけです。

わたしは、地味だけど無難なデザインのブレザーに、

チェック柄のスカートにしました。

もしかしたら、途中でセーラー服も欲しくなるかも知れない。

でもお金もないし、ブレザーも気に入っているので、  
当分はこれがんばります。

入学初日から遅刻したくないので、今日は早く寝ることにします。

それでは、おやすみなさい。

4月6日 入学式

入学式は、ちょっと予想外で驚きました。

校長先生の話が、たったの3分で終わったんです！

いかにも話好きっぽい、おじいちゃん風の人なんだけど、

「新入生の皆さん、これからの新生活をがんばって下さい」

と、もうちょっと何か言っただけで、

さあこれから長い引用が始まるってところで、

話が終わってびっくりしました。

まわりの人たちも予想外だったみたいで、

ちょっとざわざわしてました。

今までずっと、話は短くしてくれたほうが、

きくと生徒も、話を聞く気になると思っていたので、

あの校長先生は、若者の気持ちを理解してくれているんだ、  
と思いました。

でも、その他の先生達の説明とかは、ぜんぜん普通に長くて、  
ずっと立ったまま聞いているのは、ちょっと疲れしました。

一年のクラスは全部で5組あって、わたしはD組でした。ちなみに、教室は第2校舎の3階です。座席は、教室のちょうど真ん中で、周りが全員初対面なので、とても緊張します。

この日も、朝と講堂での入学式後のホームルームでも、先生の話を聞くのでいっぱいいっぱいでした。隣の人の顔もおぼえていません……

ホームルームの後は今日はもう解散で、オリエンテーションは明日からの予定です。

同じ中学の友たちがいる人たちは、別のクラスに様子を見に行ったり、もっと早くに終わった別のクラスの人が、うちのクラスを廊下から覗いたりしてました。

誰でもそうだと思っただけど、よそのクラスって、なんで入りづらいんだろう。昔から疑問に思っているんですけど、なぜだかぜんぜん分かりません。

わたしの中学の友達は、凧高には入っていないので、1人で帰ってきました。

明日に1人ずつ自己紹介とか、教科書の配布とか、校内の案内とかがあります。

自己紹介は、教壇のところ立って、1人ずつ、自分のことを最低5分間は話さないといけません。



そついうのがどちらかと言うと得意ではない、というかとても苦手です。  
とても緊張してしまい、声が小さくなってしまいました。  
今でも明日のことを考えるとそれだけでお腹がいたいです、とても気が重いです。

何の雑誌に、人の印象は9割第一印象で決まるって、書いてありました。

なんとか明日は、うまく話せるようにがんばります！

4月7日 自己紹介、撃沈

自己紹介、やっぱりうまく出来ませんでした。

私以外の人たちは、みんな何でもなく話していたので、自分もすつとできちゃうのでは、なんて思ったのに、いざ名前を呼ばれて、教壇に立って席を見渡した途端、頭が真っ白に……

先生に、どうしたの？ とか言われるし、  
クラスの人からは、笑われたりとか、  
早くしろとか怒られたりで、もう散々でした。  
なんとか、名前と「よろしくお願いします」だけは言えたけど、  
やっぱり大勢の人の前は駄目でした。

ちょっと泣きそうになってしまい、  
席についてからずつとうつむいていたら、後ろの席の人が、

『大丈夫だよ、元気出してねっ!』  
って、かわいいきれいな字で書いたメモをくれたんです。

しばらくして落ち着いた時にお礼を言おうとしたんだけど、この後すぐに教科書配布で、そのまま解散の予定になっていて、その人はすぐに席を取りにっしてしまっつて、お礼は言えませんでした。

本当にありがとう、後ろの席の人。  
明日こそ、ちゃんとお礼を言います。

今日はかなりへこんだけど、収穫もあつた良い日になりました。

4月8日 お礼を伝えました。

昨日のメモのお礼を後ろの席の、高坂さんへ、お礼を伝えることが出来ました。でも、高坂さんは忙しそうだったので、今日はそれ以上あまり話しは出来なかつた。

今日見た高坂さんの第一印象は、なんか結構すごい人なのかなあ、という感じです。

よくテレビで出ているようなギャルっぽい感じで、制服もまだ3日目なのに、かなり着崩して着こなしていて、かわいいです。  
こんなこと恐れ多くて本人には言えないけど、でも話し方はふつうでした。

携帯はずっと震えっぱなしのようで、  
後ろからずつとその音が聞こえてきました。  
どういうひとなんだらう。  
とても気になる。

4月9日 プール

今日はオリエンテーションの2日目で、  
まだ見ていない、学校の施設を見て回りました。  
プールは今年になって、新しくなったという話を聞いていたので、  
実際に見れるのを楽しみにしていました。

わたしは、泳ぐのが苦手だけど、  
水の中に入るのはとても好きです。

この学校は水泳ではちょっと有名な高校なので、  
プールもすごいのが出来るというのも、  
実は、ここに入学することに決めた理由として、  
これもちよつとあります。

実際に見学で見た時は、わたしの想像以上で、  
思わず声が出そうになってしまった。

広い！ 直線50メートルもある！  
わたしじゃ向こうまで泳ぎつかない！  
途中で溺れるかも……

まあ、泳げなくはないから大丈夫かな。

新しくきれいなプールに入れるのは、  
とても楽しみで、今から夏が待ち遠しいです。

4月13日 かなちゃん

かなちゃんとは、前に書いた後ろの席の高坂さんです。

この頃はだいぶ仲良くなつて、結構お話しするようになりました。  
高坂さんは、自分を呼ぶ時は、名前で呼んでもらいたいとのことで、  
周りの席の人たちも使っている呼び名の『かなちゃん』と決まりま  
した。

会ってからそれほど日が経っていないのに、名前で呼んでもらうな  
んて、

わたしにはハードルが高すぎる。

と、思っていたら、わたしのことは、

「『みなも』って呼ぶね」

と宣言されました。

名前で呼ばれるなんて、とても久しぶりなので、  
なんだか恥ずかしいような、うれしいような。

我ながら、よく分からない心境です。

かなちゃんは、前にもちよつと書きましたが、  
やはり、かなりすごい人のようです。

まず、友だちの数がすごいです。

各時限の休み時間と、昼休みと、登校時と下校時で、  
全部違うグループと話していたり、遊んでいたります。

わたしには考えられません、そんなうらやましい状態。本当に『ともだち百人できるかな』を、実践しています。

そして更に驚くのが、

その日の予定に応じて、服装やメイクが違います。

ギャルっぽい格好を見たあの日は、

中学の頃の友だちで、そういうグループがあつて、それに合わせたと言っていました。

他にも、クラス内でも成績の良いグループと約束がある日は、制服はもちろん、メイクだけでなく髪の色まで変わっていました。

あと伊達めがねもかけてた。

だいぶ雰囲気が変わって、大人っぽかった。

本人は、地がふけ顔なんだよ、なんて言ってたけど、

メイクが薄いととても美人なので、正直かなり羨ましいと思った。

あと制服はブレザーやセーラー服などの全種類を持っていて、

それとは別に、スカート丈を変えてるのが、

いじつである制服も数着持つてるんです！

毎回調整するのが面倒だから、

それぞれの用途に合わせて、仕立て直したらしいとか！

これには本当にびっくりしました。

かなちゃんって、お金持ちなんだろうか……

やっぱりかなちゃんは急がしそうで、

まだちよこちよこことしか話が出来ないけど、

機会があれば、色々聞いてみたいです。

4月16日 制服と風紀チェック

かなちゃん、制服の話聞いてから、  
周りの人の格好も気になり始めています。

登校や下校の時や、クラス内でも、  
ついで他の女の子の格好を見てしまいます。  
そうすると結構すでに、普通では着てない人が多いのに気づきました。  
やはり、スカートの丈は、みんなかなり短いです。

でも一番短いと思うのは、やっぱりかなちゃんです。  
階段とか、見えちゃうんじゃないのかなあと、  
同姓だけど気になります。

実は、わたしもちょっとだけ短くしていったんです。  
周りの人とかも見て、  
だいたい一番無難な膝上10センチくらいにして。

そしたら初日で、  
抜き打ちの風紀委員のチェックで指摘されてしまい、  
朝のホームルームで、注意されてしまいました。

他の女の子も何人かいたので、  
自己紹介の時みたいに、へこむことはなかったけど、  
せっかく挑戦したのになあ……

その後、かなちゃんから声がかかって、  
「今度は風紀チェックをスルーできるようにしといてあげるよ」  
って言われた。

どういう意味なんだろう。

そういえば、かなちゃんは1回も注意されてない！

なんか、裏技でもあるのかな。

教えてもらったら、また書きます。

4月20日 風紀チェックの真相

ちよつと遅くなりました。

風紀チェックのスルーの方法を聞きました。

実は、あれは全て学生が自主的に行っているもので、  
学校や、先生達主導のものではないのだそうです。

チェックするのも、

その結果を先生達に報告するのも、学生の委員なので、  
その委員の中に、スルーしてもらおうように頼んでおいたり、  
報告するリストから、名前を消してもらおうとかして、  
コネで上がらないようにするんだそうです。

ちなみにわたしの名前は、

かなちゃんがつてを使って頼んでくれたみたいで、

同じ格好で次の日も登校したけど、

となりを歩いていて、わたしより眺めの子は捕まって、

わたしは何もお咎めはありませんでした。

学校内と言えども、人脈って大切なんだなあって、今回はしみじみ思いました。

4月23日 担任の先生、他

なんか今更ですが、担任の先生のことを書きます。

名前は田中先生で、数学の男の先生です。

独身で、年は、36歳だそうです……ちよっと、かなり、残念な感じですよ。

最初の先生の自己紹介の時に、おなか周りが、自称『ぼつちゃり』だそうです、それを聞いた途端、後ろのほうの席の人が大声で、「ありえねえっ」と言って、クラス中が失笑でした。

でも先生はなんとも思ってたどころか、うまくいった的な不適な笑みをしていたので、この生徒からの突っ込みも込みのネタなんだなあ、と思って感心して聞いてました。

先生の話はこのくらいで、ゴールデンウィークが近づいてきました！



でも別に予定とかないのですけどね。  
でも朝起きなくてもいい日が3日以上続くのは、  
とても心が満たされるような思いです。

新しい髪のとめ方を研究しようかな。  
もっと自然に、セミロングに見えるとめ方とか、  
手早くまとめられる方法とか。

朝、早いと10分で支度出来るけど、  
絡まっていたりすると30分くらいかかってしまって辛い……

とりあえず、  
この1ヶ月の新生活で磨り減った心を、  
癒したいと思います。

4月28日 かなちゃんと下校

今日は、かなりうれしいことがありました！

かなちゃんと一緒に下校してきました！

実は、今まで一度も一緒に帰ったことはありませんでした。  
かなちゃんは常に誰かと一緒にいて、  
わたしからはどうせ無理だし、迷惑だろうと思って、  
帰りは声を掛けないようにしていました。

かなちゃん以外には、ちょっと話す回りの席の人たちも居るけど、  
みんな最寄の駅が違ったり、自転車や徒歩の人だったりして、

部活やってたりしてて、わたしとは合わなかったんです。

今日も帰ろうと教室を出て階段を下りていた時、なんと、かなちゃんが追いかけてきて、

「みなもは今日予定ある？」  
って言われて、特にないって伝えると、

「じゃあ、ちよつと買い物付き合ってくれない？」  
と誘われて、一緒に買い物へ行く事になったんです。

今日のかなちゃんの格好は、  
かなり大人しい感じで、

スカート丈もわたしよりちよつと短いくらいで、  
ブレザーも普通っぽかった。

もしかして、わたしに合わせてくれたのかな、  
なんて思ったり。

ちなみにかなちゃんは、わたしよりちよつと背が低くて、  
ちよつどわたしの視線が、かなちゃんの頭の上です。

だから、並んで歩くと、  
かなちゃんは、こっちに上目遣いになるんです。  
すごく、かわいいです。

表情とかも、ころころと変わって、見てて飽きない。  
この後に、自分の姿を鏡とかで見ちゃうと、  
大きくて高い壁を感じて、ため息が出ます。

同じ人間なのに、どうしてこうも違うんだろっ……

風高から駅までの道で、  
わたしたちはゆっくり歩いていたので、  
後から出てきた人たちに、どんどん抜かれていくのですが、  
けっこうな数の人が、かなちゃんに挨拶していくんです。  
数えてなかったけど、多分20人くらい。  
やっぱり顔が広いです。

かなちゃんの行きたいところは、風高から乗る最寄の駅を、  
帰る方向とは逆の電車に乗って、3駅となりの駅ビルでした。  
この駅は、わたしも今まで来たことがなくて、  
結構新しく、大きな駅ビルでした。

わたしは初めて来たことを伝えると、  
かなちゃんからも「わたしも初めてだよ」と返されて、  
行きたいお店があるんじゃないかとつげと、聞き返すと、  
実は、登校時に下りる駅を乗り越した時に、  
戻る電車を待つホームから、見えた看板のお店が、  
気になったのだそうです。

そのお店や、他のお店も何件か回って、  
アクセサリーを見たり、洋服やバッグを見たりしました。

わたしはブランドとかあまり良く知らなくて、  
なんとなく眺めていると、  
かなちゃんはわたしが見たものについて、  
色々説明してくれました。

あちこち見て回った後、  
ちよっと休んでから帰ろうということになって、  
それなら晩ごはんを食べていくことになりました。

「今日はこっちから誘ったからおごるよ、何にする？」  
と聞かれて、最初は遠慮したんだけど、  
付き合ってもらったお礼つてことで押し切られて、  
その代わり、みなもにお店を決めてほしいと言われました。

こういうのが即決出来ない性格のわたしは、  
考えても待たしてしまって悪いと思い、  
目の前にあったパスタ屋さんにしました。

すごく適当に決めてしまって、悪かったかなあと思い、  
そのことを誤ると、かなちゃんは笑顔で、

「もうちょよつとしたら、込み始める時間帯だったから、  
即決して正解だったと思うよ。」

それに、このお店は結構おいしいうってた子もいたし」  
なんて、フォローしてもらいました。

晩ごはんのパスタを食べながら、  
かなちゃんは、わたしの髪型に入学当初から興味があつて、  
いつか、どうやっていいのか聞こうと思つてたと言われました。

これはわたし的には、思わず泣きそうになつてしまふ程、  
とっても嬉しかった！！！！

きつとこれ以降のわたしの顔は、にやけっぱなしだったろうなあ。

それくらい、この言葉は嬉しかったんです。

この後は髪型の話を、このお店でずつとしてみました。

わたしはかなり夢中で話していたので、

今ではその時、何を言ったのかあんまり覚えていません。

覚えているのは、この髪がすごく長いことと、  
今度、下ろしたところを見せて欲しいと言われたことくらい。

もう、これだけで舞い上がってしまったんです。

でもみんなが、かなちゃんに集まってくる訳がよく分かりました。

かなちゃんは、とても聞き上手で、

掘り下げて欲しいところや、突っ込んで欲しいところを、  
的確についてくれるし、

わたしが一番話しやすいペースで会話を進めてくれるんです。

だから、とてもスムーズに話せて、

まるで、自分が話し上手になったような感覚になれます。

外見もかわいしいし、色々知ってるし、話し上手だし、

同姓のわたしでも惹かれるのだから、

こんな子が彼女だったら……

と、男の子なら、きつと思うんでしょうね。

こうやって話していると、お店の人にラストオーダーだと言われて、  
時計をみたら、もう10時半とかになってました。

その後慌ててお店を出て、急いで駅に行くと、

終電1本前の電車が、ちょうどベルがなったところで、  
ぎりぎり間に合いました。

かなちゃんの下りる駅は、わたしの降りる駅よりも遠くて、

わたしは駅に着いてから、かなちゃんを見送って、

家に帰ってきました。

今日は、本当に幸せな日になりました。

いい夢が見れそうです。

2009年 5月(前書き)

変更履歴

2011/03/20	誤植修正	かなちゃんがコスプレ?
かなちゃんがコスプレ?		
2011/03/21	記述修正	携帯 ケータイ
2011/03/22	記述統一	一所懸命 一生懸命
2011/04/06	記述修正	く、てく くってく
2011/04/18	記述統一	(期間) 一日、二月、三年
1日、2月、3年		
2011/04/28	記述統一	一枚、二枚、三枚 一枚、
2枚、3枚		
2011/05/06	記述統一	一位、二位、三位 一位、
2位、3位		
2011/05/10	記述統一	一つ、二つ、三つ 一つ、
2つ、3つ		
2011/07/05	記述統一	一人、二人、三人 一人、
2人、3人		
2011/08/24	誤植修正	位 くらい

2009年 5月

5月1日 航海堂

学校の帰りに、  
凧高の最寄駅から、2つ手前の駅前にある、  
画材を扱っているお店に寄ってきました。

わたしは趣味で、風景とかを描いたりしていて、  
青い色の絵の具が、なくなっていたのを思い出して、  
ちよつと、学校からの帰りに電車から見える、  
航海堂、という名前のお店に行きました。

そこは、書店と画材のお店が1つになっていて、  
書店に並んでいる本は、専門書が中心で、  
雑誌や、漫画とかは扱っていないお店でした。

ここに着いたのは、夕方でしたが、  
結構お客さんは多くて、美大生っぽい人が大半でした。

店内の雰囲気は、とても静かで、  
あまり、騒がしいのが苦手なわたしとしては、  
とても居心地が良いお店でした。

青い絵の具を探すと、  
今まで見たことがない程、いくつも種類があって、  
どれがいいのか、分からなかったんです。

その時に、荷物を運んでいた店員の女の人が、たまたま通ったので、



わたしはその店員さんに、質問すると、その人は荷物を置いて、色々詳しく教えてくれました。

同じ青色でも、描くものによって、絵の具を使い分けるそうで、

わたしが描くのは、空とか海とかの風景だと伝えて、それにあつたものを、選んでもらいました。

その店員の人は、わたしよりは短いけど、髪の毛の長い、いかにも美術やってます、と言う雰囲気の人でした。

しっかりしていて、なんかかっこいいなあ、と思いました。

目的の絵の具を買って、お店を出る時に、アルバイト募集の張り紙が、壁に張つてあるのに気づいて、ちょっと気になってよく見ると、

どうも、大学生を募集しているようで、バイト未経験で、高校一年のわたしじゃあ、ちょっと無理かな、と思って、この日はそのまま帰りました。

このゴールデンウィークが終わったら、そろそろバイトを探そうと、思っていたところなので、出来れば、あのお店でバイトで出来たらいいのになあ、とか思いました。

やっぱり無理かなあ……

5月2日 新しいまとめ髪

休みに入る前から、ちよつと予定していた、新しい、髪のとめ方を編み出そうと思い、まずは、家の近くの本屋さんへ行きました。

そこで、髪型の載っている本や雑誌を端から立ち読みして、わたしが求める、

『手早く、そして短く見える』  
ような髪型を探します。

良さげなものを見つけると、ひたすら読んで覚えます。

実は、お小遣いは高校生になったら、もらってなくて、休みに入る前に、中学の時までに残っていたお金を、使い果たしてしまい、

今は本当に、一文無しなんです。

この本屋さんにあった本を、一通り見終わると、使えそうなまとめ方を、いくつか記憶したので、忘れないうちに、家へと帰ります。

本屋さん、買わなくてごめんなさい。

お金が入ったら、必ず何か買いに来ますので、どうか勘弁して下さい。

家に帰って、さっそく覚えてきたのを実践してみたのですが、どうも手順が抜けているのか、単に不器用だからなのか、ぜんぜん上手くいかず、何度も試しているうちに、

髪が絡まって解けなくなってしまう、  
一時は、もう切るしかないのかとあきらめたりして、  
あせって1人で混乱してました。

そんなことをやっていたら、この日は夜になってしまいました。  
やっぱり、本を買わなかった、ばちが当たったのでしょうか。

残りの休みは、もっと有意義に過ごしたいと思います。

### 5月3日 噴水公園

昨日の失敗を反省して、有意義に時間を使おうと思って、  
午前中は、いいバイトがないかをチェックしてました。  
フリーペーパーを一通り見てみたけど、  
大変そうなのや、忙しそうなものばかりで  
あまり、良いがありませんでした。

まだ、時間はお昼前なので、  
昨日の晩ごはんの残りを、お弁当箱に詰めて、  
前から行ってみたかった、  
風高から、最寄り駅を超えた反対側にある、  
噴水がある大きな公園に、行ってみることにしました。

その公園は、池や大きな遊具や、芝生の原っぱもあり、  
駐車場もあるからかなのか、  
小さい子を連れた家族が、いっぱい来ていました。

この日は天気も良くて、風も気持ちがよく、

絶好の行楽日和だったから、たくさんの方が来ていたのかも。

わたしがここに来た理由は、  
この公園の名前にもなっている、  
大きな噴水を見てみたかったからで、  
いい被写体を探すために、この公園を見に来ました。

とりあえず、空いているベンチに座って、お弁当を食べた後、  
噴水や池などの水辺を中心に、色々と物色して回りました。

やっぱり、河とか海じゃないと、  
いまいち創作意欲が湧いて来ない……

それと、わたしは、風景しか描けないので。  
人が多すぎるのも、いまいちでした。  
でも、いい運動にはなりました。

この日は、もう夕方になっていたので、帰って来ました。

帰りの電車から、航海堂が見えて、  
アルバイトのことを思い出しました。

やっぱり、あのお店で働きたいなあ。  
聞くだけ聞いてみようかなあ……

5月5日 御家河

今度は、昔から良く行っていた、

家から自転車で15分くらいのところにある、御家河と書いて『みけがわ』という名前の河へと、行ってきました。

このあたりでは、最も大きな河で、河沿いあるサイクリングコースを走って、被写体を探しつつ、サイクリングしてきました。

今日は上流方向へ向かいます。

下流の方が、河幅も大きくなって、流れは雄大になるのですが、

こちらの方は、道も良くなるせいか、ランニングしている人や、早い自転車の人が結構多くて、落ち着かないし、ぶつかりそうなので、あまり、下流の方には行きません。

この日は、いい感じで空に雲があって、空でも描こうかなと思い、デジカメを持って行きました。空と言うか、雲がある空を描く時は、必ず持つていくようにしています。

描きたい空を、デジカメで取っておかないと、雲が流れて、消えてしまうからです。

だから今日は、被写体とする空を撮りにきました。

自転車で走っては空を見上げて、いいなと思ったところで、自転車を降りては、写真を撮るのを、繰り返ししていると、

たまに、土手から落ちそうになったりします。

昔、中学の頃に一度、本当に落ちてしまって、何がなんだか分からなくて、ぼうっとしていたら、ふと気づくと、土手の上に人がいっぱい集まってました。

みんなで私を呼んでいて、そのうちに、男の人が数人降りてきて、助けてもらったんですけど、今思い出しても、とても恥ずかしいです。

この日は、まあまあいい感じな雲が撮れたので、それなりに、充実した日になりました。

#### 5月6日 バイトの面接

昨日撮った写真を描こうかな、と思っていたのですが、どうしても、航海堂のアルバイト募集が気にかかり、今日、玉砕覚悟で聞いてみようと思い、午前中に、お店へと向かいました。

見た目もちょっと気にして、持っている服の中では、大人っぽく見える、落ち着いた感じの服にしました。

履歴書をみれば、実年齢はすぐに分かっちゃうんですけどね。

バイト募集の張り紙が、まだ張ってあることを確認してから、店内へと入りました。

お店は、前に買い物に来た時よりも、お客さんが少なく、店員の人たちも、在庫の確認とか、商品の陳列とかしてました。

やはり、黙々と作業しています。

やっぱりみんな大学生とか、もっと歳が上の人たちばかりで、高校生っぽい人は居ません。

やっぱり、駄目かもしれない。

でも、聞くだけ聞いてみようかと決心して、レジへと向かいます。

わたしは、レジのところにいる若い男の人に、

バイトの募集について尋ねると、

その人は困ったような顔になり、ちょっと待っててと言いつつレジから出て、店の方へと走って行ってしまいました。

多分、バイトの人で、

店長さん呼びに行ったのかなと、考えていると、

男の人が、前に買い物をした時の、

女の人を連れて戻ってきました。

女の方は、男の人に指示を出した後、

わたしにレジの脇にある、奥の部屋へと、

ついてくるように言いました。

店長は、午後からしか来ないのことで、

この女の人に、話を聞いてもらうことになりました。

まず、あいさつをすると、

橘さん、女の方の名前です、に、

前に絵の具買ってた子だよ、  
と言われました。

どうやら、覚えられていたようです。

私は、事務机の前にある椅子に座ってから、  
持参した履歴書を出して、  
アルバイト募集の件を尋ねました。

橘さんは、履歴書は受け取ると、  
三崎さんって、3つの崎で、『みさき』さんなんだ、  
と言つて、  
履歴書はもう、ほとんど見ないで脇において、  
絵はどれくらいやっているのかを、訊かれました。

こういうお店だと、やっぱり知識とかがないと駄目だから、  
それを見る為の質問なんだろう、と思つて、  
わたしは趣味で、描いているだけで、  
誰かに習ったりしてないことを、正直に伝えました。

それから、主に水辺や空の風景を、水彩で描いていることと、  
雲の質感がなかなか描けなくて、苦労していることや、  
水に写りこむ風景が、とても難しい事などを一生懸命話しました。

それを聞いて、橘さんは何故か満足げに微笑んで、  
連絡先の確認を取ると、  
結果は後日連絡するから、2、3日待つて欲しいと言って、  
今日の面接は終わりました。

わたしは高校生で、大した知識も持っていないことを考えると、  
面接はきつと落ちたなあと、内心想いました。



また別のを探さないといけないけど、  
できれば、あのお店が良かったなあと、  
この日は気落ちしながら、家に帰りました。

5月7日 コスプレ！

ゴールデンウィーク、終わってしまいました。

5連休もあつたのに、

お休みは、あつという間に終わってしまいますね。

休み時間に、かなちゃんと別のグループの人たちが、話していて、  
わたしはそれほど親しくないのですが、

会話には入らずに、何となく聞いていました。

話は、ゴールデンウィークに何していたかになって、  
旅行に行ったとか、買い物しまくったとか、  
みんなお金があるんだなあ、と思って聞いていました。

かなは？、と他の人が、かなちゃんに尋ねると、

かなちゃんは、前半は誕生日のお祝いで、

後半はこれ、と言って携帯をいじる音が聞こえました。

何か撮った画像でも見せてんのかなと思っていたら、突然、

「これ、かななのっ！ コスプレじゃん！」

と大きな声が上がって大騒ぎに。

その声を聞きつけた、他の人も集まってきた、  
更に大騒ぎになってしまいました。

わたしは、周りが囲まれる前に、その場から退避しました。あつという間に、わたしの席はいろんな人に囲まれてしまいました。

かなちゃんがコスプレ？

すごく、気になるけど、

今はとても見れる状況じゃない。

戻っても、席には座れないので、

わたしはしばらく廊下に出て、

先生が来るまで、時間をつぶしていました。

やがて、先生が教室についたので、

それよりちょっと前に、教室へと戻りました。

相変わらず、かなちゃんの周りは、

人が集まっていますけど、

先生が注意して、みんな席に着きました。

次の授業の、終わり間際に、

かなちゃんが声をかけてきて、

「さっきは騒がせちゃってごめんね」

と言いながら、携帯を見せてくれました。

その写真は、

ゲームのイベントの撮影会に、出た時のもので、すごい格好をした、かなちゃんが写っていました。

何かのゲームのキャラだそうで、

手に大きな剣みたいなのを持って、

凛々しい表情でポーズとってて、

服はほとんどビキニ姿でした！

わたしはとにかく驚きました。  
かなちゃん守備範囲の広さと、  
そのスタイルの良さに。  
そしてそのエロさに。

ああ、ちょっと羨ましいです……

5月8日 バイト受けました！

お昼休みに、お弁当を食べ終わって片付けていた時、  
何気に携帯をみると、  
見慣れない番号の、着信があるのに気づきました。

登録してないから、高校の人ではないし、  
しばらく番号見ていたら、思い出しました。  
航海堂の電話番号だと！

着信は、ほんの10分前で、  
わたしはすぐに、携帯を持って廊下へ出て、  
窓際で、留守電を確認します。

すぐ電話に出なかったから、不合格とかはないだろうけど、  
なんか、マイナスの要素が増えたような気がしてしまい、  
ちょっとへこみました。

留守電は橘さんからで、やはり航海堂からでした。

その内容は、

「今週中に、都合のいい日にお店に来て下さい。  
その時は動きやすい格好してきてね。

あ、先に言うの忘れてた。

面接は合格です。

それじゃ、待ってまーす」

でした。

おおおおっ！

面接受かったっ！！

よ、良かったよおおっ！！！！

かなり予想外で、

思わず、小躍りしそうになるのをこらえつつ、

まずは、折り返さなくてはと、我に返り、

しばらく、心を落ち着かせてから、

こちらから電話しました。

電話に出たのは、橘さんで、

連絡を返したことを褒められました。

わたしは、明日にお店に行くことを伝えて、

よろしく願います、と言って、

電話を切りました。

午後の授業は、

ほとんど浮かれてしまって、記憶がなかったです。

かなちゃんにも、なんかいいことあったの？、と聞かれ、

わたしはきつと、にやにやしなから、

そのことを話していたと思います。

はたから見ると多分、かなり変だったに違いありません。

でも、いいんです、今日は。

明日は、バイトがんばるぞ！

5月9日 バイト初日

昨日の夜は、緊張してなかなか寝付けませんでした。

学校でも家でも、嬉しさで舞い上がっていて、

何も考えてなかったのですが、

布団に入ってから、冷静になって、

色々と気になり始めてしまっ……

今日も、朝早くに目が覚めてしまっ……

ずっとそわそわしていました。

動きやすい服で、とのことだったので、

長袖のシャツにパーカーを羽織って、下はジーンズにしました。

といっても、わたしのいつもの格好なんですけどね。

我ながら、ものすごく地味な格好です。

お店には午前中に来てくれれば良いよ、

と言われていたのですが、

早めの方が良いかと思い、開店前の時間には、

お店に到着してしまいました。

お店は、開店準備の途中で、見たことない店員の人が、たくさんいました。

お店に入ろうとすると、ちょうど橘さんが出てきて、あいさつも早々に、中へと招き入れられました。

開店前に来たから、

ちょうど良いので紹介だけ先にしちゃおうってことで、店員の人を全員集めて、紹介されました。

この日は全部で7人居て、

平日よりは、やはりちよっと多いのだそうです。

それぞれの人も、名前は紹介されたけど、顔も名前も、とても覚えられませんでした……

一番元気そうなのは橘さんで、他の店員の人たちに共通していたのは、物静かだということです。

わたしが紹介された時も、皆さん特にリアクションがなくて、それが逆に不安になりました。

その後、橘さんから店員の着る黒いエプロンと、名札を2つ渡されました。

1つは名前の『三崎』と書いてあって、もう1つは、『研修中』と書いてありました。

後は、事務室にあるタイムカードの説明と、事務室の更に奥にある、更衣室のロッカーの鍵をもらいました。

タイムカードは、今押しておくように言われて、生まれて初めて、タイムカードというものを使いました。

カードを挿すと、結構ガチャンとすごい音がするんだなあ、と思いつつカードを見てみると、印字がちょっと曲がっていました。

まっすぐになるように注意して差し込まないと、いけないようです。

ここで、今日は1日大丈夫？、とたずねられ、

事前に電話の時に、初日は1日研修になると言われていたので、大丈夫ですと答えると、橘さんの説明が始まりました。

まず、最初のうちは教育係として、橘さんがついてくれます。

お店では、橘さんの事は『忍さん』か『副店長』と、呼ぶように言われました。

これは、店長さんも『橘さん』なので、混同しないようにだそうです。

わたしは『忍さん』と呼ぶことにしました。

ちなみに、『副店長』は、正式な役職ではなく、

今いる店員の中で、店長の次に忍さんが、勤続年数が長いと言う理由と、

店長に継ぐ権力を持っている、という意味で呼ぶそうです。実は、忍さんも立場はバイトで、正社員ではありません。

そしてこの日の午前中は、ひたすら忍さんに張り付いて、

仕事を横で見つつ、簡単な内容のものを、手伝ったりしてました。

商品の整理とか、伝票の整理とか、在庫の整理とか、とにかく整理してました。

お昼は、みんな時間を微妙にずらして取っていて、わたしは忍さんと一緒にとりました。

コンビニで買ってきたものを、更衣室のテーブルで、一緒に食べました。

と言っても、忍さんは忙しくて、すごい速さでサンドイッチとおにぎりを食べつくすと、わたしに、時間までゆっくり食べてていいよ、と言い残し、事務室へと行ってしまいました。

わたしは、食べるのがかなり遅いので、時間一杯かかって、昼食を食べていました。

午後には店長さんが来たので、挨拶をしました。

店長さんは、非常に無口な初老の人で、忍さんとは親戚だそうです。

バイトの面接や、合否を決めるのは、今や忍さんがやっているらしいです。

なるほど、だから『副店長』なのか、納得です。



店長さんは、商品の仕入れや返品などの在庫と、金銭面の業務を主に行っていて、接客などの、お店で直接行う仕事はあまり行わなくて、これらは、すべて忍さんが管理しているそうです。

とりあえず今日のところは、午後の4時半くらいで、上がっていいよと言われて、午後は、忍さんとは別行動で、ひたすら、倉庫の在庫整理と掃除をしていました。

楽な仕事とは考えていなかったけど、緊張もあって、かなり、疲れてしまいました。

時計も見ないで、ひたすらモップで床を拭いていたら、忍さんが来て、もう5時だよと知らせてくれました。言われなかったら、ずっと床を磨いていたところでした。

忍さんは、わたしの顔を見て、一言、「どう、きついでしょ。」

ずっとこんな感じだけど、もう、やんなっちゃった？」と尋ねられました。

わたしは、きついはいきついですが、嫌になってはいない、と答えました。

忍さんは、にやつと笑って、

「うん、三崎さんは大丈夫そうだね。

結構このバイト、楽だと思ってくるやつが多いから、

最初に、重労働をさせることにしてるんだ。  
それで器量を見よってわけ。

君は根性がありそうだから、問題ないね」  
そういうと、来週からのシフトを決めるから、  
適当なところで切り上げて、  
上がってくるように言われました。

後は、来週のシフトを決めて、  
この日は上がりました。

来週からは、  
平日は3日学校から直行して、夜の閉店時間までと、  
土日はとりあえず、毎週土曜日に終日入れました。

店長さんと忍さんや、他の店員の人に一通り挨拶してから、  
お店を後にしました。

初日なので、色々なれない作業もあり、  
とても疲れたけど、  
なんとかやっていけそうな気がしました。

よかったよかった！

5月11日 体育祭の種目

来月の6日に、体育祭があります。

今日のホームルームで、

体育祭の出場種目を決めました。

わたしは運動は全般苦手です。  
水は好きでも、泳ぐのは下手だし、  
球技となると、全く駄目です。

だから、何に出場するかは死活問題です。  
なんとか注目されなくて、  
すぐに負けても、目立たないものを、  
選ばなくてはいけません。

水泳は、水に入れるのは良いけど、  
遅いと目立ちそうだし、  
間違っても、リレーとかにはならないようにしなければ……

走り幅跳びとか、走り高跳びとかだったら、  
まあまあ普通に出来るし、目立たなそうだなあ。

とか思っていると、  
けっこう、みんな勝つ気になっていて、  
体育の授業の順位を元に、  
体育会系のグループの人たちが指揮って、  
どんだん選手を決めています。

わたしは、戦力外と判断されていて、  
1位を狙わない種目の、走り高跳びに決められていました。  
これで、体育祭は無事に乗り切れそうです。

ちなみにかなちゃんは、  
短距離のタイムが良くて、

400メートルリレーになっていました。

かなちゃんは、運動神経も良いです。  
でも帰宅部なんですよね。

なんかもつたいない気がします。

なんで部活に入らないんだろう。

5月14日 チーズケーキ同好会

朝の登校途中で、

後ろから、かなちゃんに声を掛けられました。

わたしと、かなちゃんは、

登校する時間帯が、ちよつとずれているので、

普段はあまり、会うことはないんです。

かなちゃんは歩きながら、

カバンからお菓子を取り出すと、

「これ、まだ売ってない商品なんだよ、  
なくならないうちに渡しとくね」

と言って、わたしに1つ、くれました。

それはチーズケーキのお菓子で、

外側が、ベイクドチーズケーキで、

内側が、レアチーズケーキになっていて、  
とってもおいしかったです。

でも、なんでかなちゃんが、  
発売前の商品を持っていくんだろうと、尋ねると、  
かなちゃんは、お財布から1枚のカードを出して、  
見せてくれました。

それは、よくある紙のポイントカードみたいな物ではなく、  
銀行のキャッシュカードのような、ちゃんとしたもので、  
表には、

『チーズケーキ同好会会員証』

と書かれている、かなちゃんの顔写真入りのカードでした。

チーズケーキ同好会？

そんなのきいたことがないので、  
ちよつと固まっていたら、  
かなちゃんが、説明してくれました。

なんでも、その同好会は、  
大学生や、社会人が中心の集まりで、  
会員からの紹介がないと、入会出来ないものらしく、  
かなちゃんは、中学の先輩の、そのまた先輩の紹介で、  
特別に準会員として、入会させてもらったんだそうです。

この会は、けっこう高い年会費を払って、  
さまざまなチーズケーキや、  
チーズケーキに属するお菓子などの品評会や、  
チーズケーキに関する、  
新しい発見などを、発表しあったりするのだそうです。

簡単に言うと、

お取り寄せのチーズケーキが送られてきたり、  
みんなで集まって、色んなチーズケーキを食べる会なんだよ、  
とのこと。

費用はすべて、年会費に含まれていて、  
通常の集まりなどでは、お金はかからないのだそうです。

やはり、その会の参加メンバーは、  
お金持ちな人ばかりだそうで、  
かなちゃんも、やはりわたしと違って、  
お金持ちなんでしょうね。

わたしには、そんな貴族のような趣味は縁遠いです……

それにしても、かなちゃん、  
そんなにチーズケーキ大好きなのかな。

そんなにすごくこだわっているようには、  
見えないんだけどなあ……

5月18日 突き指

かなちゃんが、手に包帯を巻いて登校してきました。  
なんでも、昨日のバスケの試合で突き指した、との事。

でもかなちゃんは、バスケ部ではないのに試合？  
と知っているよ、

かなちゃんはクラブチームに入っていて、  
そこでたまたま、試合出場メンバーに欠員が出て、  
臨時で、試合に出れたんだそうです。

クラブチーム？

わたしは、スポーツはぜんぜん詳しくないので、  
そういうのが、学校以外にあることすら知りませんでした。  
でもなんで、学校のバスケット部には入らないんだろう。

わたしが疑問に思っていると、

他の人が、

「学校のバスケット部じゃだめなの？」

とそれを訊いて、かなちゃんは、

「部活だと、練習とか大変でしょ？」

あんまり自由な時間もなくなっちゃうしね。

色々やりたいことがあるから、

だから、部活には入れないんだよ」

と答えていました。

確かに、かなちゃんはとても手広く色々とやっていて、  
いろんな人と付き合い合っているから、

何か1つのものだけに、時間を割くのが嫌なんだろうな。

でも……

なんでかなちゃんは、

そんなに多くの人に、関わろうとするんだろうか。

単に人との付き合いが好きだっていうだけで、

そこまでするものなのかなあ。

わたしには、なんとなくだけでも、  
それだけの理由とは思えないなあ……

5月22日 かなちゃんの携帯

かなちゃんが、携帯を手にしながら、  
「ケータイ忘れたあっ！」  
と叫んでいました。

周りの人も、手に持っている携帯には気づいていて、  
「その手に持っているのは、なーに？」  
と突っ込まれていました。

でも、何か普段持っているのと違うような気が、  
と思っていると、

かなちゃんは、再び叫んで、

「本当にケータイを忘れたんだよ。」

これは中学時代に使ってたやつで、

高校のやつは色違いの別のなんだよ。

まじったなあ……」

と、とても困っていました。

かなちゃんって、携帯2つ持ってたんだあ。

それにしても、色違いの携帯を、

中学の時と高校とで使い分けらるってことは、  
メモリが一杯になるから？



わたしには、これ以外の理由が思い当たらなかった。

そんな悩みは全く不要なほど、  
メモリにとても余裕のあるわたしには、  
起こりえないことです。

結局かなちゃんは、  
この日、どうしても携帯が必要だったらしく、  
昼休みに、家へ携帯を取りに帰りました。

かなちゃんくらい、  
多くの人と関わっていると、  
やっぱり携帯は必須なんだなあ。

もしかして、かなちゃんは、  
携帯に依存してるのかなあ……

わたしなら、1日くらい、  
なくなっても、ぜんぜん困らないなあ。  
忘れたことにすら、気づかなそうだ……

5月23日 来週から中間試験

いよいよ、来週の26日から、  
中間試験が始まります……

テスト勉強は、そこそこにやりましたが、

体育祭へ向けて  
クラス全員参加に決まった、放課後の自主練で、  
走り高跳びの練習したり、  
バイトも色々忙しかったりして、  
家に帰ると、とても疲れちゃって、  
あんまり、勉強出来ませんでした。

数学がやばいです。

理科もやばいです。

英語は苦手です。

地理は何とかなるかなあ。

大丈夫そうなのは国語だけです。

今日からバイトもお休みして、  
最後の追い込みなので、  
短いけど、これで終わります。

次は、テストが終わった頃になりそうです……

5月28日 中間試験が終わりました

やっとテスト地獄から開放されました。

まだ結果は返ってきていませんが、

まあ、なんとか、しのいだつもりです。

後は、天に赤点でないことを祈ることにします。

かなちゃんも、かなり苦戦していたようです。

かなちゃんは、勉強の方は、

趣味や運動とは違って、普通の人と同じで、

むしろ、時間を勉強以外の事に、使い切っているせいか、色々大変だったみたいです。

でも、こういう時こそその、人脈フル活用で、

成績の良いグループの人に教えてもらったり、ノート借りたりして、がんばってました。

明日から、短いけど試験休みになって、

待望の4連休です。

でもこの4日間は、

ほとんどバイトをがんばりたいと思っています。

6月は、この長い髪のおかげで起こる、

湿気との戦いに備えて、

色々、買い込まないとならないので、

お金がいるんです。

あと、まとめ髪の本とかも、ほしい。

それと、いちいちまとめなくても済むような、

大きい帽子とかも欲しいなあ、とか。

これは、忍さんに教えてもらったんですけど、髪をセットするのが面倒な時は、適当に編んで丸めて、

帽子に押し込んで被っちゃえば

ボサボサだろうが、絡まっていようが、わかりやしないし、すごく楽だよって。

ちょっとコンビニとか、近所に買い物とか行くのに、今までは外へ出る時は、必ずまとめてたんですが、それは楽でいいなと思いました。

なので、バイトをがんばるお休みになりそうです。

2009年 6月(前書き)

変更履歴

2010/11/18	誤植修正	補修	補習
2011/03/29	記述統一	一週間、二日間、三時間	
1週間、2日間、3時間			
2011/04/16	記述変更	(クラス) 1組、二組、3組	
A組、B組、C組			
2010/04/16	記述修正	番号ごとに、	アルファベ
ットごとに、			
2011/04/18	記述統一	(期間) 一日、二月、三年	
1日、2月、3年			
2011/04/24	記述統一	1ヶ所、二ヶ月、二ヶ月	
1ヶ所、2ヶ月、3ヶ月			
2011/04/29	記述統一	二倍、三倍	2倍、3倍
2011/04/29	記述統一	一個、二個、三個	1個、
2個、3個			
2011/05/05	記述統一	一勝、二敗	1勝、2敗
2011/05/06	記述統一	一位、二位、三位	1位、
2位、3位			
2011/05/11	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/07/06	記述統一	一人、二人、三人	1人、
2人、3人			
2011/08/25	誤植修正	位	くらい
2011/09/11	誤植修正	確立	確率

2009年 6月

6月2日 テスト結果とか色々

中間テストの結果が発表されました。

夙高では、テストの結果が、  
掲示板に張り出されます。

上位50位までの、生徒の名前と総合得点と、  
補習の生徒の名前が載っている一覧の、2つです。

どちらに載るかで、  
運命は、天と地ほどに変わります。

わたしは、上位50人に入るわけもなく、  
補習も免れていました。

とりあえずは、第一の関門突破です。

先週のお休みは、バイト三昧で、  
そのおかげで、だいぶお金もたまりました。

これで、買いたい物も買えます。

前から欲しいと思っていた、  
湿気対策の装備は、色んな店を回って、  
一番安く売っていた、駅前のドラッグストアで買いました。

まとめ髪については、

一番色々載っていた雑誌を買って来て、

暇な時に、眺めているのですが、

ひねって丸めて、お団子にするとか、

まとめて、盛り髪みたいにするとか、

三つ編みでぐるぐる巻いて、バレリーナみたいなお団子とか、

わたしの求めるものとは、ちょっと違うんです。

あくまで、ストレートに見えるような、

まとめ方を探しているんですが、

なかなかそういうのがありません。

今は、背中までは垂らして、そこから先は上に上げて、

首の後ろまで上げたら、そこから先の髪を三つ編みにして、

まとめています。

これだと、髪はロングの長さで折り返しているので、

邪魔にならないし。

ぱっと見は、普通のロングに見えるんです。

でもこれは色々大変で、

冬はいいんですが、夏は首の後ろがめっちゃ暑いんです。

でも、顔の輪郭がはっきり見えるようなアップとか、

ポニーテールとかは、ちょっと嫌なんですよね。

まとめ髪については、

何かいいのがないかを、研究したいと思います。

帽子の方は、買わずに済みました。

忍さんに、お昼食べてる時に髪の話になって、お古の白いニットのキャスケットを、もらえる事になったんです。

で、実際に持ってきてもらったのを見ると、かなり大きなサイズで、頭のところは長く出来ていて、わたしの髪の量でも、全部入れても変じゃなさそうです。

それと、頭のとっぺんに、ぼんぼんがついていて、これが、首の後ろにだらんと下がって、その形もとても気に入りました。

忍さん的には、ぼんぼんはもうキャラ的に無理かな、と思って、新しいのを買ったそうなんですけど、わたし的には、全然そんな事は無いのになあ、と思いました。

けど、せっかく貰えるのですから、ありがたく、もらっておきました。

ありがとうございます、忍さん！

6月6日 体育祭

ついにこの日がやってきました。体育祭です。

天気予報では、雨になるのではと思っていたんですが、



梅雨入りは来週からのようで、  
何とか、間に合ってしまいました。

雨だったら来週に延期で、  
そこも雨なら、中止だったのにな……

この日は、体育祭の開催に相応しい晴天で、  
終日、天候は崩れる事無く晴れて、  
とても疲れた1日になりました。

A組からE組のアルファベットごとに、  
一年から三年までが、同じ色の組になっていて、  
わたしのクラスのD組は、白組でした。  
他には、赤組、青組、緑組、黄組がありました。

わたしの出場した競技は、個人種目が、走り高跳びで、  
集団種目は、全員リレーと、綱引きと、騎馬戦と、組体操です。

個人種目の走り高跳びは、やっぱり全然だめで、  
すぐにバーを引っ掛けて、落選です。  
参加者の中で、最初に落ちたグループに入ってしまった。  
練習ではもうちょっと跳べただけだなあ……

走り高跳びの開催場所は、校庭ではなく、テニスコートでした。  
凧高の体育祭は、団体競技が総当り戦が多いせいで、  
個人種目は、学校の色々な場所で同時に行われるんです。

だから、マイナーな競技は、  
ギャラリーも、ほとんど来ない場所でやっています。

おかげでわたしの出番は、一切注目されることなく、ひっそりと終わりました。

実は、背面跳びの方が高く跳べるとのこと、背面跳びをチャレンジしたんですけど、

わたしの場合、髪の毛のせいで頭が重いということをおぼろげに忘れていて、頭がバーよりも上がらず、頭からバーに激突しました。

他の練習してた人から、心配されるし、ちょっと笑われるし、もう大失敗でした。

背面跳びはもう二度とやりません……

全員リレーは、がんばって走ったんですけど、

わたしが走者の時に、だいぶ後ろの組に差を縮められてしまい、かなりあせりましたが、

次の人は足が早くて、挽回していたので助かりました。

リレーの順位は1位で、

クラスの人たちは、とても盛り上がっていました。

綱引きは、男女混合で、クラス単位での総当たり戦で、

うちのクラスは、3勝1敗で同着1位でしたが、

決勝戦で赤組のA組に負けてしまい、2位となりました。

A組は、体育会系の人が多かったので、

うちの組の1敗も、赤組相手に負けたから、

これは仕方が無かったと思いました。

騎馬戦は、男女別の組単位で、

わたし達一年としては、同級生だけでなく、上級生も、相手にすることになってしまい、騎手役の人たちは、怖がっていました。

でも、わたしは騎馬の右側を担当なので、比較的、気が楽でした。

わたしのチームは、1個も帽子が取れなかったけど、騎手の人と、騎馬の前の人がうまくて、最後まで生き残れました。

女子の方は、それほどでもなかったのですが、男子のチームによっては、

騎馬ごと体当たりされたり、半分けんかの掴み合いになっていたり、帽子を取るよりも、騎馬を崩す攻撃をされて、激突した時に、怪我している人とかも出てました。

組体操は、学年ごとの全員参加で、学年があがるごとに、難しいものをしていました。

わたしは、3人で組になる扇くらいでしたが、三年の男子では、五段円塔とかやってました。

見てて、かなりはらしましたが、最後は無事に、頂上の人が立ち上がって、この時、観客はみんな拍手してました。

あと、凧高ならではのものとして水泳の競技が体育祭で入っています。

体育祭で、水泳の種目があるのは、かなり珍しいと思います。

その理由は、水泳部が強くてかなり有名なので、一種の宣伝で、体育祭に組み込まれているらしいです。

まだ寒いんじゃないかと思ったんですが、開催場所は、水泳部が主に使う、室内プールでやっていたらしいです。

こちらは、屋外プールと違って、長さも25メートルで普通のサイズですが、温水プールだそうで、泳げないけど、ちょっと入ってみたいです。

こっちのプールは、普通の学生は使うことがないので、オリエンテーションの時の施設案内も、省略されていたらしいです。

見に行こうと思っていたのですが、校庭でやっているメインの競技に、夢中になっているうちに忘れてしまいました。

勝敗の結果は、

白組は、学年別順位は、赤組に及ばず2位でしたが、白組の三年がかなり強くて、ほとんどの種目で1位を取って、組別では、なんと1位になりました！

クラスの人たちは、最後の成績発表を聞いて、

大騒ぎして喜んでいました。

最初はめんどくさいし、運動も苦手だから、嫌だなあと思ってたけど、こんなに盛り上がるとは思っていませんでした。とても楽しかったです。

わたしも、もうちょっと組の勝利に貢献できれば、もっと良かったのですが……

次のイベントは、9月の球技大会になります。

この時は、少しは活躍できるといいなあ。

6月8日 湿気

いよいよ梅雨の季節の到来です。

髪の問題を除けば、

わたしは梅雨が、というより、雨が嫌いじゃありません。

しかし、この長い髪を持つ身としては、朝は時間との戦いです。

どれだけブラッシングしても、ぜんぜん、まとまらないし、蒸しタオルを巻いたりするのは、

手間と時間がかかってしょうがないし、髪を濡らしてどうにかしようすると、今度は、なかなか乾かない。

最終手段で、ヘアミストの出番なんですけど、これだと確かにまとめられるけど、髪の量的に毎日使うと、あっという間になくなってしまいます。

金銭的に余裕のないわたしとしては、出来るだけ、使いたくないのです……

こういう訳で、

雨の日は、目を覚ますと、

自分の髪の状態を見て、

どの手を使えば最短でかつ、

お金がかからない手段でまとまるかを考えて、

速やかに行動を取らないといけません。

そうしないと遅刻か、頭がめっちゃめっちゃで登校です。

梅雨時は、これが毎日続きます。

若い頃というか、

幼い頃には、ぜんぜん気にならなかったのになあ。

晴れだろうが、雨だろうが、

髪はつやつやでまっすぐだったのに。

やっぱり、あの頃とは髪の潤いが違うのかも。

これが、歳を取ったということなのかな。

歳を取るって言うのは、悲しいことだなあ、と、しみじみ思いました。

6月9日 バイトの近況

航海堂でバイトを始めてから、1ヶ月が過ぎました。

やっと『研修中』の名札を返上して、ついに、一人前のバイト店員になりました。

その他に、大きく変わったのが、わたしの呼ばれ方です。

最初は名札のとおり『三崎さん』だったんですが、もう1人、『岬』って言う苗字の男の人がいて、

『岬君』と『三崎さん』で区別できるから、気にならなかったようですが、

岬さんよりも下の人たちが呼ぶ時に、同じになってしまおうという声上がり、

歳が若いし、新米だからという事で、わたしの方を、名前で呼ぶことになりました。

で、名前を皆さんに教えたのですが、字を見た人のリアクションとしては、いつものことなんですけど、

最初に必ず、

『すいめん?』  
と言われてしまいます。

この字を見て、すぐに『みなも』と、  
読んでくれる人つて、あんまりいないです。  
それが、ちよつとだけ悲しいです。

結果的には、呼び名は、  
『みなもちゃん』に決まりました。

それにしても今年は、  
随分あちこちで、名前で呼ばれるなあ……

後、バイトの内容としては、  
最初は、倉庫や事務室で、  
ひたすら整理と片付けと掃除の日々でしたが、  
最近は、店内でのお仕事もさせてもらえるようになって、  
店内で、商品整理とか、清掃などをしています。

やっていることは、倉庫の時とあんまり変わってないです。

ただ、お店の中なので、  
お客さんにも挨拶したりするのが、とても緊張します。

他の店員の人たちを見て、  
そんなに大声出さなくても大丈夫だと思って、  
同じくらいの声のつもりで、挨拶していたのですが、  
忍さんに、

「もうちよつとはつきり喋ってね、  
何を言っているか、いまいち聞き取りづらいから」



と、注意されてしまいました。

声が小さいのは、他でもよく言われるので、注意していたつもりなんだけどなあ。

この日は、帰宅した後で、挨拶の練習をしました。

次は怒られないように、  
ちゃんと声出すように気をつけなくては……

6月12日 傘

もう1週間、連日雨が続いています。

わたしは、雨に降られるのも好きだし、  
雨に濡れるのも好きです。

でもちゃんと傘は差して歩きますよ。

この月は、持っている傘を毎日取り替えて、  
毎日違う傘で登校しているんです。

実は、わたしの趣味の1つが、傘収集なんです。

昔から、ちよつと変わった傘とか、  
気に入ったものを集めています。

今一番気に入っているのは、骨の数が24本あって、

差すと丸く見える傘です。

なんか和傘みたいな雰囲気、色も水色でとても気に入っています。

ただ、難点があつて、普通の傘よりもちょっと重いです。

骨が多いから、当たり前なんですけど、風が強い日なんかは、傘は丈夫なので壊れないけど、傘自体が飛ばされそうになったりします。

その他には、自転車に乗る時に差す、傘の布の1つの部分が、透明になっている傘で、これだと前が見えて安全です。

今欲しいのは、折畳みで、広げると大きいサイズだけど、折畳むと小さくなる傘です。

折畳みの傘って、何故か、みんな覆う面積が小さいのばかりで、ふつうの傘の大きさに広がる、折畳み傘がないかな、と思つて探しているんです。

たまに、大きめのも見つけるんですが、デザインが、明らかに男性用で、いまいち、かわいいのは無いんです。

あと、ちょっと値段も高いです。

安くて、かわいいのが、

どこかに売ってないかなあ……

6月15日 最近のかなちゃん

最近気づいたのですが、  
学校にいる時に、  
かなちゃんからの、お誘いの声がかかるのが  
なんだか、増えたような気がしています。

それは、わたしとして嬉しいことなのだけど、  
でも理由が分かりません。

別にわたしは、かなちゃんに特別何かをしたこともないし、  
かなちゃんから、何かを言われた訳でもないけど、  
明らかに、一緒にいる時間は増えています。

といっても、わたしの考える普通の友だちよりは、  
まだ少ないのですが、  
常に、色々な人たちのところへと渡り歩く、  
かなちゃんの水準から考えると、  
随分いっしょにいる気がします。

おかげで、わたしとは縁のなさそうなグループの人たちとも、  
ちよっとですけど、話をしたりする機会が出来ました。

それで、ひとつ気づいたんですが、  
かなちゃんは、どのグループの人たちと話をしても、  
周りの人たちとの関係が変わらないんです。

最初、かなちゃんを見ていた時は、それぞれのグループに姿や会話や行動を、合わせているのと思っていたのですが、表面的な見た目の部分や、会話での口調なんかは、それぞれの相手に合わせているものの、どのグループにいても、かなちゃんのポジションは同じで、グループの中心にいるんです。

これが、かなちゃんの持つ魅力のなせる業かと、わたしは感心して見ていました。

出しゃばっている訳でもなく、

色んなグループの中心にいるというのは、わたしには、とても出来そうもありません。

でも、何かに似ているなあ、

と思って考えていたら、

思い出したのが、大物政治家でした。

どこへ行っても、

「先生」と呼ばれて、

持ち上げられている感じが、何となく……

この例えは、かなちゃんに悪いかな？

これは、伝えないでおくことにします。

6月18日 夏服に衣更えです

今日から制服を、夏服に替えました。

理由としては、

クラスの人々の夏服と冬服の割合が、半々くらいになったので、夏服を着て行っても、目立たないからです。

早く、夏服を着てみたかったのですが、なかなか、夏服の割合が増えなかった。

風高は、衣更えの期間が6月の1ヶ月間あります。

この間は、冬服でも夏服でも、どちらで登校してもいいんです。

6月に入ると、組み合わせの違いで、

色んな制服のパターンの、生徒が入り乱れていて、

1つの学校の生徒しかいないようには、とても見えません。

わたしが持っている夏服は、

冬服のブレザーに合わせて、

半袖のワイシャツと無地のスカートです。

この時期は、まだちょっと寒かったりするので、

上にカーディガンを着ています。

このカーディガンも学校指定のもので、

ブレザーの下にしか着ないのであれば、

普通のお店で売っているものでも、

校則違反にはならないのですが、

上着を着ないと、学校指定のものではないと駄目なんです。

あと、セーターとどっちにするか迷ったのですが、  
ここは見た目よりも、実用性を選びました。

わたしの場合、前が開かない服だと、  
着るのは問題ないのですが、

脱ぐ時に、首のところでもとめた髪に引っかかってしまつて  
結構苦労してしまうので、カーディガンにしました。

それとタイは、リボンのを着けてます。

これは夏服も冬服も共用です。

わたしのリボンは癖がついているのか、  
どれだけまっすぐにつけても、

いつの間にか、ちょっと右上がりに傾いてしまいます。  
大したことじゃないけど、気になります。

リボンの他にも、ヒモタイやネクタイもありますが、  
やっぱりリボンがかわいいかな、と。

でも、めちゃめちゃ暑くなったら、  
リボンなしにするかも知れません。

セーラー服にリボンの組み合わせの人もいて、  
なかなかかわいくていいなあと、思ったりします。

女の子で、ネクタイにする人っているんだろうか。  
まだ1人も見たことないです。

それから、リボンやヒモタイ、ネクタイの色なんですけど、  
これは年代ごとに、ローテーションで決まっています、

今年是一年が青で、二年が緑、三年が赤です。

わたしたちの代は青で、

わたしの好きな色も青なので、これはラッキーでした。

ちなみになちゃんは、6月に入ってから、

2日連続で、同じパターンの制服を着て、

登校したことはありません。

5月と比べて、夏服と冬服で、

バリエーションは、2倍以上に増えています。

ただ、さすがにネクタイは持ってないらしいです。

逆に言えば、それ以外は全て持っているということになり、  
実に羨ましい限りです。

6月21日 長雨と御家河

もう2週間近く、雨続きです。

テレビでは、山間部の土砂崩れとか、

低地の床上浸水とかのニュースでやっていて、

そういう映像を見ると、大変だと思っ反面、

濁流になっている河が映ると、

おおっ！と、つい見入ってしまいます。

御家河もけっこう増水していて、

わたしは暇があれば、河を見に行っています。

今日も、河の具合を眺めに行って来ました。

普段は、釣りしている人たちがいる場所は、もう完全に水没していて、

河川敷に立っている、水位を表す黄色い棒も、半分くらいのところまで、水がきていました。

水の色は茶色く濁っていて、

流れもかなり速い濁流になっていました。

このまま大雨が続いたら、

もしかして、決壊しちゃうかも知れない。

そう思うと、怖いような、でもちよつと見てみたいような……

わたしとしては、

決壊寸前で、収まってくれるのを期待しています。

でも決壊寸前までは、いつて欲しいような、

そんな、荒れる御家河を、一度見てみたくもあります。

小さい頃から、河でしょつちゅう遊んでいたわたしは、増水した河を見るのも好きでした。

幼稚園の頃に、台風で近くの河が増水した時、

1人では行けないので、

母親にせがんで、河に連れて行ってもらい、

すごい大雨と強風の中、

荒れる河へと、連れて行ってもらったことがあります。

その時、わたし自身はあまり覚えていないのですが、



母親の話では、河岸に立っていた看板の柱にしがみついで、強風に耐えながら、身動きひとつせず、目をきらきらさせて、河を見つめていたそうです。

しばらく母親も待っていたけど、

いつまで経っても、動こうとしないので、

もう帰るよと言って、わたしを柱から引き離そうとしたのですが、まだここにいると、だだをこねて、柱から離れず、母親が、無理やり柱から引き離して、連れて帰ると、わたしはその日、ずっとわんわん泣いていたそうです。

わたしは、台風が来る度に、

この話を思い出して、

河好きなのは、小さい頃からなんだなあ、と、しみじみ、思ったりします。

やっぱり、河は私にとって、

一番、落ち着く居場所です。

6月25日 風邪気味です

どうも、風邪を引いたようで、頭が痛くて、くらくらします。

昨日、天気が久しぶりの曇りで、雨ではなかったから、傘を持って行かなかったんです。

そしたら、学校の授業が終わって下校する頃には、空がかなり暗くて、今にも雨が降りそうになっていました。

今日はバイトも入れていない日なので、急いで帰ったのですが、

家の最寄り駅に電車が着いた時には、もう降り始めていました。

夕立ならすぐに止むかと思ったけど、なかなか止まなくて、夕飯の買い物もあるので、それ以上待てずに、雨の中を走って家へと帰ってきました。

雨に濡れて帰るのは、

小学生の時に、良くやっていました。

わざと雨が降る日に、傘を忘れて学校に行き、傘が無いから、しょうがない事にして、雨にうたれながら帰ってきました。

何故、こんな事をしていたかと言うと、ただ単に、わたしが雨に濡れるのが好きだったからです。もちろん、家に帰ると母親には怒られました。

でもわたしは、この叱られている時でも、とても満足していて、それで思わず笑ってしまい、その態度にまた怒られる、という感じでした。

母親がここまで怒るのには理由があって、雨にうたれた翌日は、かなりの確率で風邪を引くんです。

頭痛くて、熱が出てしまうのがいつものパターンで、がんばって行こうとはするんですが、熱がひどい時は、学校はお休みです。

母親は、わたしが学校を休みたい為に、これをやっていると思っていて、熱が出て、唸っているわたしに対して、ズル休みしてはいけないと、怒っていました。

でもわたしは、学校を休みたくてやっている訳ではないから、反論しようとするのですが、頭痛くてそんな余裕もなく、とにかく謝っていました。

わざと雨に濡れるのは、小学校の高学年になってからは、もう止めていたので、その頃以来の出来事です。

今日は、夕食も簡単なものにして、お風呂で暖まって、早く寝る事にします。

6月29日 かなちゃんの誕生日と本心

実は、今日知ったんですが、かなちゃんの誕生日って、5月3日だったんです。

ゴールデンウィーク明けに、かなちゃんが話していた、誕生日のお祝いで、かなちゃん自身のだったとは……

てつきり、知り合いの誕生日会に行っただっていう、話だと思ってました。

これは、かなちゃんの後ろの席の人が、かなちゃんに誕生日を尋ねて発覚しました。

周りの人もわたしと同じように、驚いていました。

「言ってくればいいのに」

「なんで教えてくれなかつたの？」

などと、珍しくかなちゃんに対して、ブーイングが起きてました。

それに対して、かなちゃんは、

もう予定がいつぱいで、何かしてもらっても、

かなちゃんの方が、対応出来ないから、

それだと悪いので、あえて知らせなかつたんだそうです。

先月のゴールデンウィークのお祝いは、

去年の時から、予定されていたものらしいです。

みんなに謝った後、かなちゃんは、

お詫びに、みんなの誕生日には何かプレゼントすると約束して、そこにいた人たち全員の、誕生日を確認していました。

みんなはそれを聞くと、かなちゃんにお礼を言っていました。

わたしも誕生日を聞かれたので、一応答えましたが、

この時、かなちゃんのとつた対応は、納得いきませんでした。

まず誕生日を知らせずに、もう過ぎていたのは、

仕方ないことだとしても、それを会話の流れとして、伝えるべきタイミングで、はぐらかしておいて、後でそれが分かって、回りが不満を言ったら、お詫びにプレゼントあげるっていうのは、悪く言えば、

文句を言われたから、物で釣ってなだめたようにしか見えない。

それでみんな納得してしまったから、

この件は、この場にいた人たちが、

最終的に、得をしたみたいないな感じになってるけど、

かなちゃんの、この態度は……

わたしが思ったことを、見透かされたのか、この時わたしを見た、かなちゃんの表情は、一瞬でしたが、普段は周りに見せていない、可愛げのある、びっくりした表情ではなく、本当に驚いているような、顔つきになっていました。ほんの一瞬でしたけど。

わたしの中で、かなちゃんという人に対する考え方が、ちょっと変わってしまっ出来事になりました。

もしかして、かなちゃんは、自分の周囲にいる人たちを、友だちとは見ていないんじゃないの？

かなちゃんにとって、

取り巻きの人たちって、なんなんだろう。

取り巻きの人たちから、

かなちゃん自身は、どう思われているのか、  
かなちゃんは、分かっているのだろうか？

色々、かなちゃんに対する疑問を感じていますが、  
これらは、かなちゃんの事を、嫌いになったからではないです。

悪い人ではないと思うからこそ、  
なんでこんなことをするのが、すごく気になっています。

かなちゃんの本心が、知りたい……

2009年 7月 その1(前書き)

変更履歴

2011/01/03	誤植修正	以外	意外
2011/03/22	記述統一	一所懸命	一生懸命
2011/04/05	誤植修正	伺う	窺う
2011/04/18	記述統一	(期間)	一日、二月、三年
1日、2月、3年			
2011/04/30	記述統一	一匹、二匹、三匹	一匹、
2匹、3匹			
2011/05/03	記述統一	一回、二回、三回	一回、
2回、3回			
2011/05/12	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/07/07	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			
2011/08/21	誤植修正	最階位	最下位
2011/08/26	誤植修正	位	くらい

2009年 7月 その1

7月1日 待望のプールです

やっと、体育でプールに入ることが出来ました。

やっぱり、水に浸かっているのは、気持ちがいいです。  
何も考えずに、ただひたすらに漂っていたい……

だけど、水泳の授業なので、泳がないといけません。  
そこでわたしは、出来るだけゆっくりと泳ぎます。  
まあ、元々遅いですけど。

本来なら、早ければ6月上旬から、水泳の授業のはずが、  
梅雨のせいで、ずっと体育館での授業になっていたんです。

わたしはあの大きなプールに、とても期待していたので、  
とても残念でした。

水泳部なら、室内温水プールで、年中泳げるとは思ったのですが、  
やっぱり水泳部は無理そうだから、入部はやめときました。

もう今学期の授業では、  
あと1回しか、プールはありません。

あまりに悔しいので、ちょっと泳げる機会を増やす事にしました。  
したと言っより、増えそう、と言った方が正しいかも知れない。

あさってに、好きな泳ぎ方でタイムの測定があります。  
ここでタイムが遅い人は、夏休みの水泳補習になります。



他の人たちは、みんなブーイングで、  
補習なんか絶対嫌だとか、言ってますが、  
わたしにとっては、ただ泳げるのだから、  
願ったり叶ったりです。

ゆっくり泳ぐのには、かなり自信がありますから、  
絶対に補習になって、このプールを満喫します！

7月3日 プールの後の授業

水泳のタイム測定は、

見事に、クラスで最下位になってしまいました。

ちょっと、やりすぎました……

でもこれで、補習確定です。

それを思えば、先生からのお叱りの言葉も、  
全く、気になりませんでしたし、

「お前は河に浮かんでる水死体か？」

とか言われて、ちょっとムツとしましたが、  
そんなことは、すぐに忘れてしまいました。

この日の体育は4限目で、

次は昼休みです。

プールの後は、体が冷やされるせいか、  
なんだかとてもまったりして、心地いい感じです。

わたしは昼休み中、この感じを満喫していました。

中学時代では、この後に連続して授業があったから、この余韻に浸っていられなかつたのですが、一年の時間割では、ちょうど4限目が体育なので、心行くまで余韻に浸れて、ちょっと嬉しいです。

でもこの幸せは、今学期はこれで終わりです。来週からは、期末試験が始まります。

でも、ひとついい事を聞きました。今年みたいに、一学期の水泳の実施日数が少ない場合に、プールの授業は、二学期の上旬もやる場合があるらしいです。

これで、二学期も楽しみが増えました。

7月5日 明日から期末試験

ついに第二の関門がやってきました。

来週は、ずっとテストが続きます。

中間試験の時に比べれば、傾向が分かっているから、ちょっとは楽かなと思つたのですが、中間試験よりも教科が増えてるので、やっぱり大変です。

中間では、何とか赤点をしのぎはしましたが、

今回は危なそうです……

試験勉強に専念したいと思います。

7月10日 明日から試験休みです

やっと試験が全部終わりました。

またしてもですけど、後は神頼みです。  
近くの神社に、お参りしておきました。

試験休みは、バイト三昧です。  
ほぼ毎日、終日航海堂です。

そろそろレジとかやらして貰えるかも、とか思っているんですが、  
どうもこのお店のレジは、ちょっと面倒らしくて、  
なかなか整理と陳列係から、昇格できません。

その代わりに、書店の方の手伝いをお願いするかもと、  
前々から言われているので、  
この試験休みは、本屋さんの店員になっているかも知れません。

本や雑誌は、重そうだなあ……

7月の学校の間、かなちゃんには、  
結局突っ込んだ話は、出来ませんでした。

ずっと気になっていたけど、どう切り出しているかわからないし、

そもそも、そんなことを聞くのは、余計なお世話に思えてしまい、それを意識してしまうと、わたしのほうが、かなちゃんへ声をかけられず、

なんとなく、避けているような感じになってしまいました。

それに、かなちゃんは相変わらず急がしそうで、

普通に声をかける機会も、ほとんどありませんでした。

きっとわたしはそんなに器用でなくて、顔に出るタイプなので、かなちゃんには、感づかれていると思います。

でも、かなちゃんの態度には全く変わりなく、話しかけてきてくれます。

話は切り出せなかったけど、かなちゃんを見ていて、ひとつ、気づいたことがあります。

多くの人と、付き合っているかなちゃんですが、このクラスの全員と、仲がいい訳ではありません。

少数ですが、かなちゃんを避けているグループや人たちもいます。

これらの人たちに共通するのが、

よく言えば、自分の意見を持っていて、

それを主張する、周囲に流されないタイプ、

悪く言うと、わがままだったり、頑固だったり、

何を考えているか、分からない人たちだったりします。

多分、こういう人たちは、

かなちゃんの、誰にでも近づくやり方が、

合わないのだろうと思います。

でもこういう人たちに対しても、かなちゃんは、取り巻きの人と、同じように接しているんです。

普通なら、自分を良く思っていない相手は、

自然と避けると思うのですが、

かなちゃんは、そうはせずに、話しかけたりしています。

よく言えば、自分の苦手な人にも声をかけるようにしている、とも言えますが、

わたしには、そういう理由ではないように思えて、仕方が無いです。

まるで、懐柔する為に、努力しているように感じます……

周囲にいる人たちに対して、

その関係を、疑うようなことを言ったと思えば、

付き合いの望んでいない人たちに、一生懸命声をかけている、

あれだけ努力をして、友達を増やすことが、かなちゃんの目的なの？

それに一体、何の意味があるんだろう。

わたしには、

ますます、かなちゃんのやりたいことが、分からなくなりました。

やっぱり、かなちゃんの本心が気になるけど、

どうしたらよいか、分かりません……

7月13日 新しいまとめ髪

バイトが終わって、帰る仕度をしていたら、忍さんに、声を掛けられました。

何かミスでもしたかなと、考えていると、

「新しい髪型考えてみたから、試してみない？」  
とのことでした。

わたしはこの後、特に予定も無かったので、お願いすると、忍さんは、わたしの髪をほどいて、色々試し始めました。

「やっぱりかなり長いな、すごいね。

ていうか、手入れが大変だよね、これ」

とか言いながら、束ねたり、編んだり、丸めたり、手早く色々、試行錯誤していました。

軽く頭を引っ張られたりしていたら、わたしは、なんだか美容院にいるような気分になって、だんだん眠くなってきました。

思わず、居眠りしそうになった時に、

「できたよ、どうかかな？」

と、声がかかり、わたしはいつもより、

首の後ろが涼しいのに気づいて、

後ろに手をやると、いつもまとめていた、お団子がありません。

手をもうちよつと下に当てると、

そこで髪が、シュシュで束ねられているのが分かりました。

「みなもちゃんが求めるのとは、ちよつと違うとは思っけど、お手軽で、かつ、長さの調整が出来て、更に涼しいのは、これがベストじゃないかな」

と言いつつ、忍さんから手鏡を渡されました。

この更衣室に置いてある全身鏡の前に立って、後ろを見ると、ちよつと肩のところまで、一度括られていて、下は腰のところくらいまで、下ろしていました。

「肩のところから腰の所までで、髪を折り返してみたよ。

まとめる所が、いまいちきれいにならないんで、シュシュで括ってごまかしてる。

顔にかかる髪とかは、今までと変わらないから、前から見る分には、そんなに印象も変わらないと思うけど」

忍さんの説明を聞きながら、手鏡で後ろ姿を確認していたら、他の店員の人が入ってきて、わたしの髪の話になりました。

みんなの評価は、

「今までと前から見ると変わらない」

「言われるまで、気がつかなかった」

などなど、イメージチェンジとしては全然ですが、目立っていないという点では、わたしのいい感じですよ。

忍さんは、満足げにうなずいて、時計を確認したとたん、「うわっ、もうこんな時間か！」と叫んで、急いで事務室へ行ってしまった。

わたしは、事務室を通る時に、忍さんにお礼を言って、店を後にしました。

忍さんには、色々とお世話になりっぱなしです。

何か、お返しが出来ないかなあ……

7月16日 黒猫のヒヨウ

今日は天気も良くて、いい風景が見つかりそうな気がしたので、午前中、御家河へお弁当を作って、散歩がてら、スケッチへ行きました。

なかなかいい感じの空で、デジカメで撮った後に、スケッチブックに描いていると、足もとに何かの気配が。

たまにこの河原で出会う、黒い野良猫です。

名前は、ヒヨウと言います。

わたしが勝手にそう呼んでいます。

最初に会った時、

中学三年の夏の日で、突然雹が降ってきて、



高架下で止むのを待っていた時に、このヒョウちゃんがいました。

影の中に青い目だけが光っていて、最初びっくりしました。よく見ると、かなり大きな黒い猫で、毛が短いせいか、とてもやせているように見えました。

顔はシヤム猫っぽいような感じなんですが、とても野性味溢れる雰囲気で、

多分、シヤム猫と山猫みたいなのを混ぜたような、なんか猫というよりも、黒ヒョウっぽいです。

だから、ヒョウという名前にしました。

この時は、そのまま電が止んで、ヒョウちゃんは、すぐにどこかへ行ってしまいました。

その日から、わたしが河原を歩いていると、その姿を見かけたり、絵を描いていたりすると、近くで、こちらを様子を窺っていたりしました。

そのうち、ご飯を上げたら近くに来るかなと思い、わたしがその時に、持ってきていたお弁当のおかずを、あげてみたんです。

そしたら、近くにきて、匂いを嗅いだだけで、食べてくれませんでした……

この日の後も、機会がある度に、ヒョウちゃんに、色々あげてみたけど、

でも、とれも食べてくれません。

唯一、口にしたのは、  
飲み物が無くなって、仕方なく自販機で買った、  
硬水のミネラルウォーターだけです。

多分、ヒヨウちゃんは、  
お金持ちの家で、飼われていたに違いない。  
だから、庶民の家の残り物を詰めた、  
わたしのお弁当は、食べてくれないんだ。

なぜかこれに気づいた時は、  
ヒヨウちゃんに対して、敗北感を感じました。

出会ってから半年くらいになると、ヒヨウちゃんは自分から、  
わたしのそばへと、来るようになっていました。

でもヒヨウちゃんは、いつも長い尻尾を振り回しています。

一度、体を触ろうとした事があるんですが、  
思いつきり睨まれて、尻尾をブンブン振り回していたので、  
触るのは、やめときました。

猫って、犬と違って不機嫌だと尻尾を振るんてすよね。

なにがそんなに気に入らないのかなあ。  
やっぱり、ごはんかなあ……

わたしには、いつも黙ってそばにくるヒヨウちゃんですが、  
他の人や生き物が近づくと、

ものすごい唸り声で威嚇するんです。  
この時は、まるで猛獣のようです。

大抵の人や動物は、これを聞いたら逃げ出してしまいます。

ヒヨウちゃんが、わたしといる時以外は、  
いつも1匹でいるところしか見たこと無いから、  
わたしは、一応認められているかなあ、とも思ったりします。

うちはアパートなので、猫を飼うのはできないし、  
ヒヨウちゃんが狭いうちで、  
素直に暮らすようにはとても思えないから、  
飼ってあげるのは、無理そうです。

そして、出会ってから1年くらい経ちますが、  
未だにごはんは食べてもらってません。

せめて、今年こそは、  
ごはんを食べてもらいたいと思っています。

その為には、がんばってバイトして、稼ぎます！

7月17日 終業式

試験休みも終わって、今日は終業式でした。  
この日、わたしはひとつ楽しみにしていたことがあります。

校長先生の話です。

入学式の時の、すごい短さに感動して、  
今回の話も、その時間に期待していました。

今回は、ちゃんとタイムも計ろうと、  
校長先生が話し始めたところから、  
時計をチエックして計測しました。

さすが校長先生です。

期待を裏切る事無く、高タイムです！

まさかの3分をきって、2分50秒でした！

タイムを計るのに夢中になっていて、  
何を話していたのかは、覚えていませんが、  
校長先生の話の長さの記録は、  
これからも挑戦して欲しいです。

夏休みは、試験休みと違って、

前半は、水泳補習、後半は夏期講習があり、  
バイトの方は、ちよっとシフトを緩めて、  
平日は夜だけ、

休日は、土日のどっちかを終日で組みました。

結局、かなちゃんの話は、全く進展しませんでした。

試験休みの間、かなちゃんとは一度も会いませんでしたし、  
話をする機会も、ありませんでした。

休日は、常に予定でいっぱいのはずだから、

と言つのもありますが、  
やっぱり、わたしの方が、ちょっと避けてしまっています。

でも、終業式が終わって教室へ戻って、  
ホームルームの時に、かなちゃんから、  
忍さんから教えてもらった、新しい髪型のことを褒められて、  
ちょっと嬉しかったです。

それと、夏休みにいっしょに遊ぼうよ、と言われて、  
予定をあわせてみると、  
7月31日の午後が、2人とも時間が空いていたので、  
この日に、会う事になりました。

かなちゃんは、  
「どこか行きたい所とかあるかな？」  
と尋ねてきたから、  
これは、絶好のチャンスだと思い、  
多分、かなちゃんという人を、理解する為に、  
一番確認したい場所である、  
かなちゃんの家に行ってみたい、と言いました。

かなちゃんは最初、  
ちよつと怪訝な表情をしましたが、  
すぐに笑顔で快諾して、  
午後の1時に、かなちゃんの家之最寄駅で、  
待ち合わせすることになりました。

わたしは、かなちゃんの行動の謎は、  
かなちゃんが育ってきた家庭を見れば  
分かるような気がしています。

別に心理学者でも、カウンセラーでもないけど、  
そこで、何か糸口になるものが判れば、  
それをきっかけにして、  
話を聞いてみる事だつて出来るはず、多分。

それに、かなちゃんの自宅なら、  
かなちゃんも、普段外では猫被っている部分も、  
ちよつとは、剥がれやすいんじゃないかとも、  
思っています。

上手く話が出来ればいいけど、  
失敗して、変に警戒されたりとか、  
すごく嫌われたりとか、  
しないように気をつけないとなあ……

7月21日 水泳補習

長い長い、夏休みが始まりました！

今日から、楽しい楽しい水泳補習です。

水泳補習には、期間が2つあって、  
前期と後期に分かれています。

わたしは、前期の割り当てなので、  
今日から8月10日までが、補習の期間になります。

平日の18日の間に、最低10日以上出席して、最後に、テストとしてタイム測定を行って、合格水準のタイムが出れば、補習完了になります。

やろうと思えば、初日でいきなりテストを受けて、合格してしまえば、もう来なくてもいいというシステムです。

逆にタイムが悪ければ、また再テストを受けなければいけなくて、最終日でタイムが悪ければ、補習不合格になってしまいます。

まあ、実際には、タイムが悪くても、努力している生徒なら、最後はおまけでOKになるらしいです。

わたしは、この補習プールは全ての日を出席する予定です。

プール入場時と退場時に、指導担当の先生に声をかけて、出席名簿に、チェックをしてもらいます。

この補習の内容ですが、コースごとに、クロール・平泳ぎ・バタフライ・背泳ぎなどが決められていて、自分が練習したいコースに並んで泳ぎ、また並ぶのを、ひたすら繰り返すだけです。

クロールと平泳ぎはコースが複数あって、泳ぐスピードが遅い人用と、早い人用に分けられています。

もちろんわたしは、遅い人用で、ゆるゆると泳いでました。

特に時間制限もなく、練習開始も終了も、各自の自由です。好きなだけ、泳いでいられます。

一番端のコースはテスト用コースで、試験担当の先生がついて、やはりこれも順番に並んで、テストを受けます。

テスト用コースの逆側の端のコースは、指導用コースで、指導担当の先生から、声を掛けられた生徒は、そのコースで指導を受けます。

ちなみにわたしは、注意をたくさん受けました。もっと早く手と足を動かせ、と。

それには適当に返事しておいて、時々プールの隅で休憩しながら、ただひたすら、気ままに泳いでました。

さすがに、10時から午後4時まで泳いでいたら、すっかり疲れてしまいました。

この後は、そのまま航海堂へと、バイトへ行きました。

忍さんを含めて、数人の店員の人から、「ふらふらしてるけど、大丈夫？」と、心配されてしまいました。

これでは、バイトの体力が持たないのが分かりました。

自分はもっと若いと思っていたのに、もう歳なんでしょうか。

明日からは、バイトの日は泳ぐ時間を自重しなくては……



7月24日 雹とヒヨウ

今日のプールは、午後から行きました。

終了時刻の、5時いっぱいまで泳いでから、今日はバイトもないので、夕飯の買い物をして帰ります。

スーパーで買い物を買わせて、家へと向かって歩いていた時に、  
天気が急に悪くなったと思ったら、  
突然、大きな雹が降ってきました。

大きさが、ピンポン玉くらいあるのもあって、  
さすがに当たったら、痛いだけで済みそうもないので、  
近くのコンビニに避難しました。

店の中は、同じように避難してきた人が多くいて、  
普段よりも、お客さんがいっぱい居ました。

わたし個人としては、気に入っているのですが、  
いつもガラガラなんです、このコンビニ。

やっぱりマイナーなチェーン店だからかなあ……

わたしは雑誌のコーナーから、適当な本を取ろうとしたけれど、  
立ち読みの人がいっぱいいて、手が届かなくて取れず、  
仕方がないので、出入り口脇のコピー機のところまで、  
雨が止むのを待っていました。

ふと、黒猫のヒヨウちゃんのことを思い出しました。  
こんな日はまたどこかで、雨宿りしてるのかな。  
いつもどおり不機嫌そうに。

でも、なんでいつも不機嫌そうなんだろう。

おいしいご飯に、ありつける機会が少なくくて、  
お腹が減っているのかなあ。

それとも、別の理由があるのかなあ。

やっぱり、きつとご飯に違いない、と思う。

この夏のバイト代入ったら、

ヒヨウちゃんが満足する、ご飯を買ってあげよう。

それで、ヒヨウちゃんに認めてもらおう、

ヒヨウちゃんが納得するくらいの食べ物だってわたしは買える事を！

そんなことを考えていたら、

いつの間にか、雹は止んでいました。

わたしは、そのお店のペットフード置き場を一通り眺めてから、  
家に帰りました。

キャットフードって、意外と高いんだなあ……

2009年 7月 その2(前書き)

変更履歴

2011/01/03	誤植修正	以外	意外
2011/04/18	記述統一	(期間)	一日、二月、三年
1日、2月、3年			
2011/04/26	記述統一	一台、二台、三台	1台、
2台、3台			
2011/04/28	記述統一	一枚、二枚、三枚	1枚、
2枚、3枚			
2011/05/03	記述統一	一回、二回、三回	1回、
2回、3回			
2011/05/07	記述統一	一階、二階、三階	1階、
2階、3階			
2011/05/13	記述統一	一つ、二つ、三つ	1つ、
2つ、3つ			
2011/05/23	誤植修正	二人で移っている写真が	
二人で映っている写真が			
2011/06/10	誤植修正	始め	初め
2011/07/08	記述統一	一人、二人、三人	1人、
2人、3人			
2011/08/27	誤植修正	位	くらい

2009年 7月 その2

7月31日 かなちゃんの家に行きました

とうとう約束の日がきました。

かなちゃんの自宅へ遊びに行く日です。

会った頃なら、純粹に楽しみだったろうけど、  
今では全く違う気分です。

仕事じゃないけど、こんな機会は今も無いかも知れないから、  
確認できることは、今日しなくちゃいけない。

わたしは意を決して、降りた事が無い、  
かなちゃんの家、最寄り駅の改札を出ました。

時間よりも30分早くて、いくらなんでも早すぎたなあ、  
と思っていたら、もうかなちゃんが来てました。

かなちゃんの私服を、初めて見ました。

上はキャミソールに、ひらひらな感じの丈の短い、  
すかし編みのチュニックで、

下はショートパンツに、素足にサンダルで、  
とてもかわいらしい、涼しげな格好でした。

「今日は、ラフに普段着です。」

メイクも髪も、ほとんどすっぴん」

と言って、何気にポーズとっているかなちゃん。

髪の色は、かなり薄くて金髪に近いくらい明るい色でした。普段は、暗く染めて調整しているんだなあ。

なんか、かなちゃんの髪がセミロングっぽくて長いような……エクステンション？

でも何もしてないっていったし、と思ってよく考えると、髪がいつもより、長く感じるのは、

いつもはゆる巻きだったり、外巻きだったり、内巻きだったり、ふわふわのエアリーっぽかったり、アップでまとめてたりと、色々といじっているから、

毛先がいつも、ボブくらいの長さに見えていたけど、

今日はほとんどストレートで、実際の長さでみただけのよう。結構髪長かったんだなあ、とまじまじと見てしまいました。

かなり、すっきりしていて、新鮮な感じを受けます。

やっぱりかわいいなあ、でも……

かなちゃんとは、並んで歩きたくない、と言う、女としての感情が湧いてきます。

そんなわたしの気持ちは、きつとお構いなしに、かなちゃん曰く、

「多分、みなもちゃんは早く来ると思って、更に早く来たよ。」

やっぱり、早く来たね」  
だそつで。

こういったところは、すごい人だなあ、と関心してしまいます。

早速、かなちゃんに連れられて、  
お家へ行くかと思ったら、

「先にお昼食べていこうよ。

おいしいお店があるから」  
いうことで、お昼ご飯となりました。

かなちゃんが向かったお店は、  
なんと、焼肉屋さんでした。

小さいお店で、よくあるチェーン店ではなく、  
何だか高そうなお店です。

その服、匂いとかいいのかな、とかわたしの心配をよそに、  
さっさと入ってしまった、わたしも後に続きます。

かなちゃんは、ここのお店の常連さんなのか、顔見知りなのか、  
かなり気軽に、店員さんや店長さんとかに声をかけていました。

店の中の一番奥にある、4人がけの個室へと案内されて、  
わたしはただ、後に付いていくだけです。

席に着くと、かなちゃんは笑顔になって、

「まさか焼肉？って顔してたね、みなもちゃん。

焼肉もおいしいから、

みなもちゃんがそっちがいいならそうしようか？

どれでも好きな物選んでくれていいよ、今日はおごるから」  
と、メニューを広げてくれました。

貧乏性のわたしは、まず値段を確認してしまいます。

ランチメニューで一番安いのが、2000円？

全然、自慢にならないけど、

一食で4桁の金額の食事をした事、無いです……

安いを選んで、高いの選んでも、なんか申し訳ないから、わたしはかなちゃんに、お任せする事にしました。

すると、かなちゃんは、

「ここに来たのは、これを食べてもらおうと思って、来たんだよ」と、冷麺を指差してました。

すかさず値段を見てしまうのが、わたしの悲しさです。

2500円。

2500円あれば、安売りの鶏肉が、豚コマが、もやしがいっぱい、かなちゃんはお金持ちなんだと理解しました。

「みなもちゃんも、これでいい？」

わたしは無言で頷きました。

冷麺の他に、デザートに杏仁豆腐をつけて、注文し終わると、

かなちゃんがバッグとか、持っていないことに気づいて、尋ねると、

「ああ、お昼食べて、すぐ家だから、

これしか持って来てないんだよ」

と言ってショートパンツのポケットから、携帯だけ出しました。

ああ、お財布ケータイなんですネ。

わたしの携帯には出来ない芸当です。

しばらくして、注文したものが運ばれてきました。

「どうかな、おいしい？」

最近暑いから、夕食はここで食べてるんだ。

けっこはまってて、週に1回は、ここ来てるかなあ、

帰り道の途中にあるから、すぐ寄れるしね」

冷麺は、今まで食べたことが無いほどに、おいしかったです。  
杏仁豆腐も、とてもおいしかったです。

多分、素材が違うんだなあ。

わたしは、かなちゃん言葉に同意しつつ、  
その言葉の中に、ひっかかるものを感じていました。

かなちゃんは、自宅でご飯食べないんだ……

多分、ここで食べるのは1人で帰ってきた時で、  
他の人たちと、付き合っている時は、  
その人たちと一緒に、食べているんだろうから、  
家で夕食を食べる事は、ほとんど無いのかな。

ここではあえて、その点は聞きませんでした。

お店を出ると、歩いて15分くらいで、  
かなちゃんの自宅に着きました。

周囲は、大きな家が立ち並ぶ、高級住宅街で、  
駐車場は、2台くらいのスペースがあつて、  
高そうな車ばかりとまっています。



それと、みんな大きな庭があつて、その奥に家が建っています。

その中でも、家の大きさでは一番大きかったのが、かなちゃんの家でした。

多分、3階建てで、庭はそれほど広くは無いけど、その分駐車場のスペースが広くて、5台くらい止められそうです。でも今は1台もとまっていなくて、空っぽでした。

真っ白い箱を、いくつも積み重ねたような外観で、わたしの住んでいるアパートとは大違いです……

かなちゃんに連れられて、門を通過して玄関に入ります。

「誰もいないから、挨拶とはしなくていいよ」

なので、かなちゃんに聞こえるように、お邪魔します、と行って上がりました。

まず、2階までの吹き抜けになつて、いる玄関を通過して、広いリビングへと案内されました。

そこで、ちょっと待っててと言われ、大人しく待つてました。やたら広いリビングで、大きなテレビと、U字型のソファと、高そうな絵とかが飾ってありました。

大きなテレビの反対側には、プロジェクターらしい機械が、天井に1付いていたり、高そうなオーディオの機器が置いてあつたりして、

かなちゃんはもしや、ただのお金持ちじゃなくて、  
すごいお金持ちだったのかな？

とか思いましたが、それよも気になったのは、  
この部屋には、まるで生活感がありません。

ものすごくきれいに、

掃除や整頓されているからだからか、とも思いましたが、  
それだけではなく、人がここを使っている感じがしないんです。

きれいなモデルルームを見ているような、  
そんな感じに似ていました。

かなちゃんが、紅茶を運んできたので、  
わたしはソファーに座って、一口飲みました。

おいしい、なにこれ、今まで飲んだことない味だ……

ちょっと、おいしくて気が遠くなりそうになったけど、  
何とか踏みとどまって、本来の目的にかかりました。

しばらく淹れてもらった紅茶を飲みながら、  
まずは、今日ご家族の人は出かけているのと、尋ねました。

すると、かなちゃんは、

「両親は共働きだから、家には居ないんだ。

忙しくて帰りも遅いから、夕飯はうちにいても1人なんで、  
ここでは食べないんだよ」

わたしは相槌をうちながら、  
かなちゃんって一人っ子だったけと聞きました。

「ううん、兄と姉が3人いるよ。  
だから4人兄弟だね」

かなちゃんに兄弟が居たなんて話、初めて聞きました。  
学校では触れられなかったから、話してないだけかなあ。

そんなに兄弟がいて、  
こんなに人の気配や、生活感がないのは何故だろう。

わたしは、兄弟のことをかなちゃんに尋ねました。

「今はみんな、この家には住んでないんだよ。  
結婚して出て行ったり、留学してたり、  
遠くの学校で、寮に住んでたりするから」

どことなく、兄弟のことを語るかなちゃんは、  
浮かない感じを受けます。

かなちゃんには悪いけど、  
ここは、突っ込んで確認すべきところだと、  
わたしの直感が告げているので、後で確認することにして、  
もう1つ、別の疑問、これだけ広い家を、  
かなちゃんが掃除しているのかを尋ねました。

かなちゃんは笑って、

「そんなの無理だよ。今はね、週に3回、  
家事代行サービスの人が、午後に来るんだ。

その人が、炊事と掃除と洗濯をしてくれるから、  
炊事は朝ごはんの準備だけだけどね」

ということとは、かなちゃんはこの家では、ほとんど家族どころか、人に接すること自体がない暮らしなんだ。だから、友だちを増やしたがっているのかな。

でもそれだけだと、今までの行動の説明はつかないから、まだ別の理由があるのかなあ。

とか、わたしが考えていたら、

「みなもちゃん、変なことばかり訊くね。

なんだか、そういう質問は、

なんていうか、ちよっと答えづらいな」

と、かなちゃんは、呟いて、

伏せ目がちに、自分の髪をいじってます。

普段のかなちゃんは、人と話す時は、

必ず相手を見ているし、

髪をいじりながら、話すなんて事はしません。

何かの雑誌の特集で、

自分の体や衣服とか、髪を触るのは、

不安の表れだと、書いてあった気がします。

これが演技でないのなら、

やはり、この家の人間関係の何かが、

かなちゃんを、人集めに駆り立てている理由に繋がるはず。

ここで畳み掛けるように聞くのは、ちよっと悪いかと思い、わたしは、話を一旦変えるために、

かなちゃん部屋の部屋について聞き、  
お部屋を見せてもらう事にしました。

かなちゃんの部屋は、2階で、通りに面した角部屋でした。  
その広さは、わたしの住むアパートより広いかも知れない……

押入れは無いけど、  
ウォークインクローゼットが部屋にあって、  
そこはうちの台所くらいの広さです……

かなちゃんは、これも想像通りですが、  
大量の服を持っていて、  
前に聞いていた、複数の制服もそこにありました。

聞いていたよりも数が多いような気が、  
と思って尋ねると、

「あれから、ちょっと買い足したんだ。  
ネクタイも結局買った。」

「二期は、ネクタイデビューする予定なんだ」  
とのことで、学校の制服とか、夏服のシャツとかだけで、  
十数着ありました。

ちなみに、かなちゃんが持っている色んな制服は、  
似たような服を買っているのではなく、  
普通の制服を買い足して、それをお店に出して、  
仕立て直してもらっているのだそうです。

かなちゃん曰く、  
出来合いの類似品だと、作りが雑だったり、  
生地が薄かったりして、安っぽいくて嫌だから、

そうしているそうぞうで。

あの仕立て直した制服、一体いくらなんだろう……

部屋には、大きな三面鏡のドレッサーがあったり、縦と横の長さが同じ正方形のベッドがあったり、

やけにかっこいい机があったり、

なんかすごく薄くて大きいノートパソコンがあったり、

客間のよりは小さいけど、十分大きな液晶テレビや、

ソファとテーブルのセットがあつて、

この部屋だけで、十分居心地よく住めそうなお部屋でした。

この大きなベッドなんですけど、

まだ、かなちゃん小さい時に、大きいベッドがいいとせがんで、

そのお店にあつた一番大きい、キングサイズっていうんですね、

これにしてもらったそうぞうです。

これなら、そうとう寝相が悪くても大丈夫そうだなあ。

机の上には、同じ型で色違いの携帯が、

2つ並んで置いてありました。

かなちゃんは、携帯2つじゃなくて、3つ持ってたんだ……

ここで元の調子に戻ったかなちゃんは、唐突に、

「あ、そういえば、前に買い物付き合ってもらった時に、

髪解いて見せてくれるって言ってたよね？」

と、目の前に顔を寄せて言ってきました。

顔が、近い！

ちょっとこれにはびっくりしました。

かなちゃんは、相手が意識する距離、パーソナルスペースっていいましたっけ、をわきまえて、それに踏み込まない距離をとって、人と常に接していたので、この行動は、通常のかなちゃんの心理からは、出てこないはず。

今までの質問攻めの仕返しなのかも、と思いつつ、わたしは頷いて、忍さん流まとめ髪を解きます。

かなちゃんは、わたしの髪を見て、

「うわあ、すごく長いねえ！」

ここまで伸ばしたことないなあ、

やっぱ、髪の量が多いんだね。

長い割に、あんまり痛んでなくてきれいだなあ、

大変でしょ、これ維持するの」

と、色々言われながら、髪を梳かしています。

かなちゃんも、忍さんと同じく、

人の髪の扱いは、丁寧でなので、

安心して預けていられます。

ただ、こうやって髪をいじられていると、

だんだん眠くなってしまいます……

かなちゃんは、楽しそうに、

わたしの髪を、アップのまとめ髪にしてみました。

「こういうのは、みなもちゃん好きじゃないんだっけ？」

前は垂らして、ここはまとめて、横は……」

とか何とか言いながら、更にアレンジして、結局、軽く盛り髪な感じの、わたしのセンスでは出来ないまとめ髪になりました。

でもかなちゃんは、まだ納得していない様子で、

「うーん、顔周りだけ、レイヤー入れて、

もうちょっと前上がりになると、

決まりそうなんだけど……」

と呟いていました。

その意見は、

次にカットする時に、参考にさせてもらおう事にして、再び、わたしからの質問を再会しました。

お兄さんやお姉さんの部屋も、こんなに広いの？

と尋ねると、表情は変わらずに、

「部屋見てみる？」

と返されて、部屋へと案内されました。

どうやら、全ての兄弟の部屋の鍵を預かっているらしく、中の物も自由に使っていいと、言われているそうです。

子供部屋は、全て同じ2階にあって、

最初は、二番目のお兄さんの部屋に、案内されました。

広さは、かなちゃんの部屋と同様で、

部屋の中は、一言で言うと『トレーニングジム』でした。



部屋の至る所に、様々な筋力トレーニングの器具が置かれていて、後は、主に球技のスポーツの道具が、色々と置いてありました。

バスケの時のボールなどは、ここから借りていくそうです。

次に、お姉さんの部屋へ行くと、

今度は『楽器屋さん』でした。

音楽室にあるような、大きなピアノが真ん中であって、

その周囲には、ガラス棚に入った、

高そうなヴァイオリンなどの弦楽器や、

別のガラス棚に入った、

フルートなんかの管楽器が、ずらりとしまっていてあって、

高そうなオーディオと、

レコードやCDも、たくさん置いてありました。

あれは、ほとんどクラシックだから、

あんまり、借りたこと無いんだ、

と、かなちゃんと言いつつ、次の部屋へ。

最後は、上のお兄さんの部屋です。

この部屋は、一言では言い表せませんでした。

あえて言うなら、『おもちゃ屋さん』でしょうか。

飛行機や車やヘリコプターのラジコンが、

天井から吊るされていて、

棚には、モデルガンや、プラモデルが並べられていて、

大きな本棚には、漫画や雑誌がきれいに並んでました。

すごく大きな机には、

3つの大きなディスプレイが、並べて置いてあって、机の脇には、大きなパソコンが、何台か並んでいました。

あの本棚の漫画とかは、結構価値がある物らしいそうです。

これで、かなちゃんを含めた、兄弟全員の部屋を見せてもらい、かなちゃんの家へと戻りました。

普通の家ならありそうだけど、

この家では、まだ一度も見ていない物がありました。

それは、家族の写真です。

今まで見てきた部屋の、どこにもありませんでした。

単に、飾っていないだけかも知れないので、

わたしは、かなちゃんが両親のどっちに似ているのかを尋ねて、写真とか無いのと、尋ねました。

すると、無いことも無いけど、昔の写真だよ、と言って、

デジカメで撮ったのもあった様な気がするけど、間違っただけ消しちゃったらしくて、

机のとなりの、本棚の奥から、

かなり古そうなアルバムを持ってきました。

そのアルバムには、

黄色い帽子を被っている、小学生の低学年のかなちゃんと、兄弟の誰かの、2人で映っている写真がありました。

お父さんやお母さんとの写真は、1枚もありません。

かなちゃんとお兄さんやお姉さんは、かなり歳が離れているようで、更に、顔はあまり似ていませんでした。

家族全員の写真は、1枚も無く、どうも撮っている場所が、家の中のものばかりです。

かなちゃんは、

「この頃は、まだ兄や姉が家に居たから、食事とか、たまに一緒に食べたりしていたなあ。

その時に撮ってもらった写真だよ」と言って、懐かしそうに見ていました。

わたしはかなちゃんに、

お兄さんやお姉さんは、やさしかったと聞くと、「うん」

と、あまり関心がなさそうに、一言だけ答えました。

かなちゃんは、この写真に写った兄弟を慕っていて、居なくなってしまうから、寂しくて、

ああいう行動をとったんだと、わたしは考えていたのですが、兄弟の部屋を見せてもらった時の態度や、

今の質問に対する、答え方をみると、

兄弟に対して、思い出がある訳ではなさそうに見えます。

あの写真を撮ったのは、写っていない両親のどちらかかと思いい、それを尋ねると、意外な回答が帰ってきました。

「もうこの時から、両親は忙しかったから、

一緒にご飯を食べた事は無いよ」

じゃあ、誰がこの写真を撮ったんだろう。

なぜ、小学校の低学年までしかないんだろう。

ここで、さつき客間で聞いた、

かなちゃんの言葉を思い出しました。

家事代行の人が来るって話していた時の、

『今は』ってところが、とても気になっていました。

これが核心なんじゃないかと、わたしの直感が感じています。

わたしは意を決して、写真を撮った人について尋ねました。

この写真を撮った人って、

かなちゃんにとって、どういう人だったの、と。

かなちゃんは、この質問のされ方が、

全く予想していなかったようで、

いつもなら、どんなむちゃぶりでも、リアクションを返すのに、この時は即答できず、ちよっと黙っていました。

かなちゃんは、こちらを見ずにアルバムに目を落としたまま、

「佐藤さん」

と、呟いた後、言い直して、

「写真を撮った人は、前にいた住込みの家政婦の佐藤さん。

その人は、あたしが大きくなったら、

うちの仕事はやめたんだ。

その後から、家事代行のサービスの人が、

週に3日だけ、来るようになったよ」と、教えてくれました。

でも、この時のかなちゃんは、普通に話すように、努力してはいましたが、無理して普通を装っている風に見えました。

この家政婦の、佐藤さんの存在が、何かかなちゃんに、動揺させるものがあるんだと、わたしは感じました。

わたしが佐藤さんについて、訊こうと思ったその時、かなちゃんの携帯がなりました。

時計を見ると、もう5時になっていて、わたしはバイトが、かなちゃんも、予定があると言っていた時刻です。

かなちゃんは、駅までの道を送ってくれました。

でもその道中でも、やはりかなちゃんの態度は、取り繕っている風に見えて、わたしは追求するのをためらってしまい、これ以上は、何も聞けませんでした。

改札前で、かなちゃんに見送ってもらい、わたしは、色々お礼を言ってから別れて、バイトへと向かいました。

ちょっと悪いことをしてしまったかなあ……

いたずらに追い詰めたつもりは無かったけど、結果として、そうなってしまった……

バイト先では、

わたしの髪をみた人がみんな、

イメージが違って見えたど、

ちよつと驚いていましたが、

でもわたしは、それどころではありませんでした。

この日はバイトも上の空で、

今までで、一番注意された日になってしまい、

忍さんにも、怒られるのではなく、

心配されてしまいました。

わたしは、やはり間違っただことをしたのでしょうか。

決して興味本位でしたことではないけど、

かなちゃんにとっては、

望んでいたことではないのは、間違いないと思います。

でも、わたしは、どうしても今のかなちゃんが

あるべき姿には見えないんです。

きつと、今の、装っているかなちゃんからすれば、

嫌がられることだと思うけど、

出来ることなら、装ったかなちゃんではなく、

素のかなちゃんになって、自分の本心に従って欲しいんです。

でもそれを上手く、かなちゃんに伝える自信は、全くありません。

とりあえず、謝った方がいいような気もするけど、でもそれだと、わざとああいう嫌がらせをしたと、認めただけになってしまふような気がします……

しばらく、どうすればいいか、  
ゆっくり考えてみたいと思います……

2009年 8月 その1 (前書き)

変更履歴

2011/03/29	記述統一	一週間、二日間、三時間	
1週間、2日間、3時間			
2011/04/15	記述統一	(回数) 1度、2度、3度	
一度、二度、三度			
2011/04/28	記述統一	一枚、二枚、三枚	1枚、
2枚、3枚			
2011/05/02	記述統一	一本、二本、三本	1本、
2本、3本			
2011/07/09	記述統一	一人、二人、三人	1人、
2人、3人			



2009年 8月 その1

8月2日 スケッチ場所の下見

今日は曇り空で、いつもよりちょっと涼しかったので、プール補習を早めに上がって、御家河の土手へ散歩に行きました。

雨が降りそうな天気なので、自転車ではなく歩きです。

天気の良いか、いつもより人が少なく、私としては歩きやすくて、良かったです。

実は、この夏休みに、1枚大作を描こうと決めているんです。

いつも、鉛筆画ばかりなので、

水彩画で、この河原からの風景を描く予定で、

今日は、その場所を決めようと思って、ここに来ました。

描こうと思っている場所は、

河原からの、土手の位置が高くて、

御家河が、ずっと川上まで見えて、

対岸の遠くにある、浄水施設の白い煙突とか、

更にそれよりも遠くの、上流の方の山脈とか、

見晴らしが良くて、周囲が一望出来る所です。

その辺一帯から、描きたい方角を眺めて、

どの場所から見て描くかを、決めてきました。

いつもは自転車なので、それほど遠く無いと思ったら、

歩くと意外と遠くて、結構時間がかかってしまいました。

それと、いつもよりは涼しいとは言っても、真夏日には変わりなくて、

その場所に着く頃には、すっかり汗だくです。

持ってきた水も、飲みつくしてしまったので、普段は、出来るだけ買わないようにしている、自販機の水を買いました。

写生する場所の、すぐ近くにある自販機なのですが、この自販機、ちょっと壊れているみたいなんです。

中学の頃、この自販機でお茶を買った時に、お金を入れてから、買いたい飲み物のボタンを押した後、買った飲み物が出てくるまで、妙に時間がかかっていて、ちゃんと押せてなかったのかなと思って、もう一度ボタンを押したら、なんと2本出てきました。

たまたまかと思ったんですけど、別の日に、ここを通った時にもう一度、今度は別の飲み物で試したら、

やっぱり、ボタンを押した飲み物が2本とも出てきたんです！

でも、運が良かったのはここまでで、それ以降、三度目の奇跡はまだ起きていません。

でも、つい期待して、この近くまで来た時には、ここで飲み物を買っています。

今日もやつぱり、普通に1本しか出てきませんでした。  
見た目は変わっていないけど、  
もう、修理されちゃったのかも知れません。

この自販機の品揃えは、偏っていて、  
水とお茶とブラックのコーヒーばかり入っています。  
ここの水のうちの1本が、ヒョウちゃんには好評の、  
わたしにはあんまり美味しくない、  
硬水のミネラルウォーターです。

わたしはそこで買った、硬水のミネラルウォーターを呑みながら、  
ヒョウちゃんがいないかなと、あちこち見ながら帰ってきたけど、  
ヒョウちゃんには会いませんでした。

遅しそうなヒョウちゃんは、  
とても、暑さでやられそうな感じはしないけど、  
最近はあんまり姿を見かけていないので、  
ちょっと心配です……

8月5日 プールでおぼれました

今日は朝からとても暑くて、  
テレビの天気予報では猛暑日で、今年最高の暑さとか。

なので、プール補習へは開放時間の10時から行きました。

かなちゃんや、ヒョウちゃんの事などが、  
つい頭を過ぎってしまい、その事を考えながら泳いでいたら、

突然、右足が攣ってしまいました。

攣った事に驚いて、息継ぎのタイミングがずれて、一気に水が肺に入ってしまった、息が出来なくなつて、溺れてしまったんです。

しかし、クロールのレーンを泳いでいたので、日頃の下手な泳ぎ方が災いして、気づいてもらえず……

余計な時には見ている先生は、肝心な時に見ていなくて、これで溺れ死んだら、化けて出てやると本気で思いました。

もうほんとに駄目だと、パニックになつて、とても苦しくて、何とか空気を吸おうと、必死にもがいていたら、唐突に足が治つて、プールの底に足が着いて、何とか助かりました。

気温はものすごく暑いのに、わたしは震えが止まらず、上がった後に今さら怖くなって、涙も止まらなくなつてしまい、タオルを被つて、休んでいる風にしてごまかしながら、しばらく、落ち着くまでじっとしていました。

この時に、小学生の頃、溺れた時のことを、思い出していました。

その時はまだ、わたしは髪をまとめていなくて、下ろしていました。

プールでは、髪をまとめて帽子を被らなくてはいけないと、

母に言われていたけど、  
その頃のわたしは、帽子も嫌いだったし、  
髪をまとめるのも、嫌がっていました。

母に連れて行って貰った、流れるプールで、  
母から離れた隙に、帽子が脱げた振りをして、脱いだんです。

そしたら、プールの排水溝に、髪が巻き込まれてしまって、  
水中に引きずり込まれてしまいました。

わたしは必死で、そばにあった梯子にしがみついて、  
抵抗したんだけど、

水の流れの方が、幼い子供の力よりも強くて、  
とんどん吸い込まれてしまって……

息も出来なくなって、もう駄目だと思った時に、

監視員の人気づいて、完全に髪が吸い込まれる前に、  
わたしを捕まえて、

その後、数人の人が来て、引っぱり出してもらって、  
助け出されました。

この後、駆けつけた母は、監視員の人に、  
なんで目を離れたんだと、とても怒られて、  
その後、わたしは、何で帽子を脱いだんだと、  
母からめちゃくちゃ怒られました。

この時に、結構自慢だった髪は、ボロボロに痛んでしまい、  
短くするしかなく、泣く泣く切りました。

これ以降、わたしは髪を一定の長さで、

必ずまとめるようになったんです。

この日は休んで落ち着いた後、  
またゆったりと泳いでから帰りました。

こんな怖い思いをしても、何故か水に入る事は大好きです。

前世は魚とか、水棲生物だったのかも知れません……

8月9日 髪を切りました

最近あまりにも暑いので、

暑さ対策で、髪を切りに美容院へ行ってきました。

別に、ばつさりとしョートにしたとかではなく、

かなちゃんのアドバイスに従って、

サイドの髪にレイヤーを入れて、ちょっと軽くしてみました。

ちょっと切ってもらっただけのつもりで行ったのに、

パーマはどう巻きましようかとか、カラーはどんな感じでとか、  
美容師さんに色々聞かれてしまい、断るのに苦労しました。

この長さをお店で染めてもらったら、いくらかかるかと思うと、  
恐ろしくて、とても頼めません。

今までは、長さも後ろの髪と同じで、結構輪郭が隠れていたから、  
なんか、すっきりしちゃって、ちょっと落ち着かないです。

そよ風で、自分の髪がゆれるのが見えるのは、久しぶりです。

この日に、美容師さんに言われて、初めて気づいたのですが、髪の色を、今よりもうちよっと明るい色に変えると、雰囲気が変わりますよ、と言われて、

いつの間にか、黒かったはずが、かなり栗色になっていました。

どうもプールで脱色されてしまったようです。

思わぬところで、茶髪デビューです……

8月10日 水泳のテスト

ついに、私の憩いの場だった、

プール補習との、お別れの時が来てしまいました。

といっても、来月もありそうだから、ちょっとの辛抱だし、どうしても泳ぎたくなったら、

市営プールとかに行けば、良いだけなんですけどね。

でも、この出来たばかりの、きれいな大きいプールは、とても良かったです。

ちなみに、テストの結果についてですが、最後は、本気で泳ぎました。

ほとんど全部出席した成果を、見せ付けてやる！と、意気込んでいったのですが、

結果は、全然遅かったです……

テストに立ち会った先生が、出席名簿を見ながら、「お前は、水中を移動するように出来ていないんだな」なんて言われてしまいました。

判定結果は、出席日数最多に免じて合格でした。

この体育の先生は、いつも口が悪くて、わたしは、ひどい事ばかり言われている気がします。

でも事実だから、仕方がないなあ。

水泳部に入るのはやめといて、本当に良かったと思いました。

8月11日 夏期講習

夏期講習が始まりました。

といっても、塾とかに行くのではなく、学校へ行きます。

これは風高でやっているもので、

夏休み前に申込しておく、希望者が受けることが出来るんです。

夏期講習用のクラス分けがされて、

10日間、そのクラス単位で授業を受けます。

対象の教科は、中間試験のあった5教科で、



時間割は、日単位で教科が分けられていて、私のように、全ての教科を受ける人は、まるで、普通の学校の日みたいに、毎日、朝から午後まで、学校にいる事になりますが、大半の人は、教科を特定しているので、選択していない教科の日は、お休みです。

内容は、進学塾などとは違いますから、一学期の復習で、定員がオーバーしている時は、成績が高い人から、順に外されますが、わたしは残念ながら、無事に全ての教科を受けられます。

わたしは、家で1人でいると、どうしても、勉強に集中出来ないんです。

どんなに頑張ろうと思っても、つい、窓から空を眺めてしまったりしてしまいます。

図書館に行ってみた事もあるけど、無意識のうちに、絵の本とかを手にしてしまい、気がつくと、それを読んでいました。

なので、本当は塾に行けばいいんですが、経済的にその余裕は無く、これに申し込みました。

せっかくの夏休みなのに、登校しなくちゃいけないのは、なんだか、もつたいないような気もしますが、大して賢くもないわたしは、

ここで、人並みの成績が取れるようになっておきたいのです。

この夏期講習が終われば、後はこうだった予定はなく、普通に夏休みの予定です。

この10日間は、  
真面目に勉強を頑張りたいと思います。

8月15日 花火大会

航海堂からの帰りに、  
御家河の方から、大きな音が聞こえてきました。

今夜は、どこかで花火大会をやっているようです。

河の方を眺めてみると、建物の上に、  
ちよつとだけ、花火が見えました。

花火大会には、小さい頃、まだここに引っ越してくる前、  
田舎に住んでいた頃には、良く見に行っていました。

確か、家の近くの川原でやっていて、  
わたしは、空に上がった花火よりも、  
水面に反射してみえる、揺らいだ花火を見るのが好きでした。

花火を見に来たのに、ずっと下を見ているわたしを、  
母は、不思議に思っていたようですが、  
父は、そんなわたしの心境を理解してくれていて、  
上に花火が上がっているよと、言う母をとめて、  
そのまま、河を見続けているわたしに、

構わずにいてくれたのを覚えています。

父との思い出は、この家の近くに流れていた川、  
ながらがわ乍川で、一緒に過ごしたものがほとんどです。

父はこの田舎で、病で亡くなりました。

それは、わたしが幼稚園の頃で、  
父が亡くなった後、しばらくして、  
今のところに引っ越してきました。

ちょうど、小学校からこっちに住んでいます。

この田舎で過ごしていたのは、  
父の最期の希望で、わたしとの思い出を作りたかったのだと、  
後ほど、わたしが大きくなってから、母に教えてもらいました。

わたしが、とても河を好きなのは、多分乍川で一緒に遊んだ、  
父との思い出があるからだろうと、思っています。

普段はあまり、思い出すこともないのですが、  
もうすぐ、父の命日なので、  
ふと、昔のことを思い出してしまいました……

お墓参りには、来月に行く予定です。

8月18日 飲み会に行ってきました

航海堂の店員の人達は、親睦を深めるといふ趣旨で、定期的に、飲み会をやっているのだそうです。

で、今日行くとういう話が、昨日から出ていたけど、

わたしは何かの集まりとかが、落ち着かなくて、苦手だったし、第一わたしは未成年だから、呼ばれはしないなと思っていました。

そしたら、昨日のバイトの終わり間際に、忍さんから声がかかり、「みなもちゃんも、明日の夜は空いてる？」

社員もバイトも全員参加だからさ、もちろんみなもちゃんも。

もう、予定があるんなら、しょうがないけど」

とのことで、特に予定は無いですが、

わたしは未成年だし、そういうのに参加したことないけど、大丈夫ですかと、訪ねました。

そしたら、軽く笑い飛ばされて、

「別に、取って食われやしなから平気だよ。

飲み会って言っても、飲めない奴とか、

私みたいに、車で来てて飲まないのもいるから、

そんなに心配しなくてもいいよ。

単に、居酒屋で、夕飯食へに行くつもりでいてくれれば」と、わたしの心配は、考えすぎのようでした。

そついうことなら、と参加すると伝えて、今日が当日です。

場所は、駅前にある、

結構他でも、あちこちで見かける居酒屋さんでした。

この居酒屋の中は、大学生っぽい人たちばかりでした。

わたしは、ああは言われはしたけど、  
やっぱり、何となく不安で、忍さんのそばにいました。

忍さんもそれを判ってくれていたのか、  
席も隣にしてくれて、周りの人が色々席が替わっても、  
ずっとわたしのそばにいて、相手をしてくれました。

「食べたいものあったら、好きな頼んでね。

残しても、誰かが食べるし、支払いは偉い人たちがするんで、  
とりあえず頼んじゃって、値段も気にしないでいいから。

このお店はねえ、刺身が意外と美味しいよ」

と、忍さんに進められ、お言葉に甘えて、

あんまり値段も見ずに、

わたしは、食べてみたいものを、どんどん注文しました。

そしたら、いつの間にか、わたしは注文係になっていて、

注文の品を、テーブルへ回したり、

ビールとかも、注いで回ったりして、

初めて、そういうことをしたけど、

これはこれで、意外と楽しかったです。

いつも、航海堂ではみんな物静かで、

きつと、大人しい人たちだと思っていたのに、

お酒が入った途端に、みんな態度ががらっと変わって、  
びっくりしました。

わたしが驚いていると、横の忍さんが、

「まあ、酒が入ればこんなもんだよ。

みんな、二十代ばかりで若いから。

ま、みなもちゃんよりは、歳食ってるけどね」

と言って、笑っていました。

酔った勢いで、絡んできそうな人もいましたが、そこは忍さんがフオローしてくれて、助けられました。

途中で、わたしの話が誰かから出てきて、

「みなもちゃん、いまどきの女子高生とは違うよねえ」という話になり、

話は、いまどきの女子高生談義になっていました。

皆さんが持っている、女子高生のイメージは、とても現実離れしているのに、驚きました。

どうも、テレビやドラマで見るような、

すごい派手なイメージがあるようで、

わたしみたいな、地味なのは、

ほとんどいないと思われているようです。

「酔っ払いのネタだから、

真に受けないで、適当に流しとけばいいよ。

すぐに話変わるから」

忍さんの言うとおり、しばらく適当に相槌をうつっていると、もう話は、別の話題に変わっていました。

それから、忍さんの話に話題が移った時に、

誰かが、忍さんがわたしのことを、

随分可愛がっているという話になりました。

確かに、わたしから見ても、面倒見てもらっているなあ、とは思っていたので、忍さんがなんて切り返すのか、

気になって聞いていました。

でも、忍さんは、

「そりゃあ、この航海堂始まって以来の若手だし、

みなもちゃんはおかしいから、私のお気に入りなんだよ。

大事にしてあげないとねえ」

と言いつつ、わたしの頭を撫でて、

お茶を濁して、やり過ごしていました。

でも、この時、

忍さんが、こつちを見ていた時の表情には、

普段は見せない、悲しげな顔に見えて、

何か、別の理由があるような気がしました。

そのうち、それが聞けそうな時が来たら、

尋ねてみようと思います。

飲み会は、9時前にお開きになってお店を出て、

そこで、二次会に行く人たちと、

買える人たちに分かれて、解散になりました。

わたしは、同じ方向の人たちと一緒に、駅へと向かって、

そこで他の人たちと別れて、1人で帰ってきました。

行く前は、気乗りしなかったけど、

普段食べないような、珍しい物が食べられたし、

あんまり話をしない人から、声を掛けられたり、

無口と思っていた人から、矢継ぎ早に質問されたりして、

色々ありました。この飲み会は、

わたしにとって、とてもいい経験になりました。

どんなことでも、

まず、やってみなくては判らないこともあるから、何事も、とりあえず挑戦することが大切なんだと、感じました。

8月21日 夏期講習が終わりました

やっと、2週間近く続いた、

夏休みなのに、登校する日々が終わりました。

プールの時とは大違いで、

楽しくもないし、時間の制約もあるしで、

やっと終わって、ほっとしました。

でも、一学期の授業で、分かった様な気がしていたところや、なんとなく、通り過ぎていたところとかも分かって、

改めて、自分が理解出来ていなかった箇所が、

沢山あったのに気づかされました。

この講習で、そうだったところは、理解出来た、と思うので、有意義だったと思っています。

夏期講習の最後に、

中間や期末の試験と、似ている問題のテストを行って、どのくらい理解出来たかを、成果として確認するのですが、わたしは全般的に、中間や期末の結果よりも、

出来が良かったので、きつと学力は上がったのだと、思っています。



この夏期講習では、普段のクラスではなく、講習用の特別クラスだったので、普段別の暗くの人たちが、たくさんいました。

その知らない人たちの中に、うちのクラスの人じゃないけど、どこかで見覚えがあるような人が、1人いたんです。

肩に髪が付かないくらいの、きれいな黒い髪のボブで、華奢な感じの、色白な人だったんですが、名前とか、ぜんぜん出てきません。

どうも、この学校で見たような気がしてなくて、どこでその人を見たのか、思い出せないんです。

わたしがその人を見ている時に、一度振り向かれてしまい、目が合ってしまったって、ちょっと気まずかったです。

向こうは、ちょっと驚いているようにも見えたから、やっぱりわたしのことを、知っていたのかも知れない。

結局、思い出せずじまいで、

その人は、その日以降の教科を選択していなかったらしく、その後は、もう姿を見る事はありませんでした。

わたしは、そんなに多くの知り合いとかいないので、前に話したこととかあれば、あんまり忘れないんだけどなあ……



2009年 8月 その2(前書き)

変更履歴

2011/04/18	記述統一	(期間)	一日、二月、三年
1日、2月、3年			
2011/04/28	記述統一	一枚、二枚、三枚	1枚、
2枚、3枚			
2011/05/14	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/06/26	誤植修正	今だ	未だ

2009年 8月 その2

8月23日 変な夢を見ました

今朝は珍しく、朝寝坊してしまいました。

家では、わたしが朝食の当番だから、という理由もありますが、規則正しい生活を送る事にかけては、自信があつて、学校がある日でも、休みの日でも、普段は、寝坊とか絶対しないんです。

寝坊の訳は、昨日見た夢がとても気になる内容で、その夢の意味を考えていたら、そのまま、二度寝してしまったようです。

その夢は、まるで童話のような感じで、大体こんな内容でした……

あるところに、小さな女の子がいました。

その子は人形集めが好きで、今日も人形探しの為に、からっぽのかばんと道具箱を持って、一本道を歩いています。

しばらく進むと、道の真ん中に人形が落ちていました。

女の子はそれを拾うと、かばんにしまいました。

かばんはちよつとだけ大きくなつたけど、

まだまだ入れられそうです。

またしばらく進むと、今度は道から外れた藪の中に、人形が落ちているのを見つけます。

しかし女の子には、その藪に入っていくことは出来ないので、人形を取ることが出来ません。

そこで女の子は、道具箱からマジックハンドを取り出すと、それを使って人形を藪から引っ張り出して、かばんにしまいました。

かばんは前よりちよつとだけ大きくなつたけど、まだまだ入れられそうです。

またしばらく進むと、今度は道の脇にある大きな木の枝に、人形が引っかかっているのを見つけます。

しかし女の子には、木の上には手が届かないので、人形を取ることが出来ません。

そこで女の子は、道具箱から長い棒を取り出すと、それを使って人形を木の枝から落として、かばんにしまいました。

かばんは前よりちよつとだけ大きくなつたけど、まだまだ入れられそうです。

またしばらく進むと、今度は道の脇にある小さな池の底に、人形が沈んでいるのを見つけます。

しかし女の子には、池の底には手が届かないので、人形を取ることが出来ません。

そこで女の子は、道具箱から釣竿を取り出すと、それを使って池の底から人形を釣り上げて、かばんにしまいました。

かばんは前よりちよつとだけ大きくなつたけど、まだまだ入れられそうです。

またしばらく進むと、今度は道の上の宙に、人形が浮かんでいるのを見つけます。

しかし女の子には、宙には手が届かないので、人形を取ることが出来ません。

そこで女の子は、道具箱からパチンコを取り出すと、それを使って人形を撃ち落して、かばんにしまいました。

かばんは前よりちよつとだけ大きくなったけど、まだまだ入れられそうです。

またしばらく進むと、今度は道の脇にある家の中に、人形が置いてあるのを見つけます。

しかし女の子には、その家の扉が閉まっけて入れないので、人形を取ることが出来ません。

そこで女の子は、道具箱からトンカチを取り出すと、それで扉を壊して家の中の人形を取り、かばんにしまいました。

かばんは前よりちよつとだけ大きくなったけど、まだまだ入れられそうです。

またしばらく進むと、今度は道の真ん中を、てくてく歩いている人形を見つけます。

女の子は走って追いつこうとしましたが、追いつくことが出来ません。

そうこうしているうちに、

人形は道を外れて藪の中に入ってしまった。

そこで女の子は、道具箱にある、

マジックハンドを使って捕まえようと思いますが、

人形は動き回っていて、捕まえることが出来ません。

そうこうしているうちに、

人形は藪を出て木の上に登ってしまいました。

そこで女の子は、道具箱にある、  
長い棒を使って落とそうとしますが、

人形は棒より高く登ってしまい、落とすことが出来ません。

そうこうしているうちに、

人形は木から下りて池の底に潜ってしまいました。

そこで女の子は、道具箱にある、

釣竿を使って釣り上げようとしたが、

人形は釣り糸を切ってしまい、釣り上げることが出来ません。

そうこうしているうちに、

人形は池から上がり宙に浮かんでいつてしまいました。

そこで女の子は、道具箱にある、

パチンコを使って撃ち落そうとしましたが、

人形は玉を避けてしまい、撃ち落すことが出来ません。

そうこうしているうちに、

人形は宙から下りて煙突から家に入っていつてしまいました。

そこで女の子は、道具箱にある、

トンカチを使って扉を壊して中へ取りにいきましたが、

人形は窓から逃げてしまい、取ることが出来ません。

そうこうしているうちに、

人形は道を離れて丘の上へと向かっていきます。

そこで女の子は、

道具箱もかばんも放り投げて、

急いで走って人形のところへ向かいます。

そして人形に向かって思いっきり飛びついて、

人形を捕まえますが、人形は女の子の手をすり抜けてしまい、

捕まえることが出来ません。

人形はちよつと離れたところで立ち止まり、

女の子の方に振り返ります。

その人形は、女の子のお母さんにそっくりな顔をしていました。

その後人形は丘の上のお墓の中へと入っていきました。

人形の消えたそのお墓は、お母さんのお墓でした。

ここで女の子は、人形を集めていた、

本当の理由を思い出します。

女の子は、いなくなったお母さんが見つからなくて、

その代わりになる人形を探していたのです。

女の子は悲しくなって、代わりの人形なんて要らないから、

お母さんを返して欲しいと、泣きながら叫びます。

しかし、消えてしまった幻のお母さんの人形も、

いなくなった本当のお母さんも、

再び女の子のところに帰ってくることはありませんでした。

この頃、気にかかっている事が、

夢として、現われたんでしょうか……

私としては、この女の子のようになる前に、

かなちゃんに、本当の目的に気づいて欲しいです。

でも未だに、どう切り出したらいいいのか判らないままで、

ここまで、日にちが経ってしまいました。

なんだが、日が経つごとに、

話しづらくなっているような気がしています。

この夢を、神様のお告げと思って、



残りの休みの間に、決断したいと思います。

8月25日 スケッチに行ってきました

今日から、日中は御家河でスケッチです。

天気予報は、日中は大丈夫だけど、夕方くらいに、夕立に注意と言っていたので、デザインはいまいちだけど、大きな傘を持ってきました。

目標は、夏休みの間に水彩で完成させることですが、鉛筆でも1枚描いておきたいので、まず、2枚、この風景をスケッチする予定です。

普段は、B4サイズのクロッキー帳で描きますが、今回は1枚は水彩なので、もっと大きいF8サイズの、水彩用のスケッチブックにも、スケッチします。

二冊のスケッチブックと、水彩用の道具一式は、中学の頃から使っている、絵の道具を入れる専用の、大きなトートバッグに、全部入れています。

これは、近所にあったかばん屋さんの閉店セールで、たたき売りしていたのを、見つけて買いました。

生地は、とてもしつかりした幌布で、ポケットもたくさん付いていて、

デザイン的には、ごつくてあれでしたが、

道具一式入れても、まだ余裕があつて、とても気に入っています。

ただ、元の色が白っぽい色だったので、今では絵具や鉛筆とかの、汚れがかなり目立ちます。

でも、一番目立つ汚れは、黒っぽい、多分、油か血のシミなんだと思います。

何で、多分なのは、わたしが、直接それが付くところを見ていないので、よく分からないからです。

これは、中学二年の頃の話になるのですが、今と同じように、河の絵を描こうと思って、このトートを持って、土手を歩いていたら、後ろから、原付バイクで来たひつたくりに、取られてしまつたんです。

走って追いかけたけど、バイクに追いつくはずもなく、仕方なく、あきらめて家に帰りました。

中身のスケッチブックにも、色々描いてあつたし、バッグ自体も、とても気に入っていたので、その日は、悲しいのと悔しいのが半々で、夜も、ずっと泣いていました。

朝になって、家の外へ新聞を取りに行くと、わたしの自転車のハンドルに、

取られたトートバッグが、引っ掛けてありました。

外側はかなり、泥とかで汚れていたけど、  
中身は、何もなくなっていなかったんです。

後で、バッグの汚れを落とそうと洗っても、  
黒っぽい大きなシミと、点々と付いている小さなシミだけは、  
どうしても、落ちませんでした。

これを返してくれた人は、誰なんだろうと思って、  
探してみようかと思っただけど、探す手段がなくて、  
結局、判らずじまいになりました。

今では、もつと色々な色で、汚れてきているので、  
あんまり目立たなくなってきているけど、  
このシミを見ると、取られたことを思い出して、  
一体誰が返してくれたのかと、ふと考えたりもします。

このトートバッグに、  
絵の道具一式と、晩の残り物を詰めた昼のお弁当と、  
自分の飲み物の、水道水を詰めた水筒と、  
ヒョウちゃん用に揃えた、  
値段はまあまあ高かった、まずい硬水のミネラルウォーターと、  
売っていた中で一番高かった、1つ188円もした高級猫缶と、  
水とご飯を入れる、2枚のお皿を入れて、  
これから絵が描き終わるまで、この場所に通います。

8月27日 ヒョウちゃんと夕立にあいました

昨日までで、2枚のスケッチは大体出来ました。

出来は、正直いまいちです。

集中して描こうとすると、

つい、かなちゃんの事が頭を過ぎります。

そうすると、手が止まってしまって、

なかなか、思うように進みませんでした。

でも、とりあえず、スケッチはこれでよしとして、

今日から、水彩の方に取り掛かりました。

まず青空を、雲以外のところを淡い感じに塗りつぶしてから、乾くのを待って、雲を塗る準備をしていると、足元に黒い物体が見えました。

それはヒヨウちゃんでした！

久しぶりに、やっとヒヨウちゃんに会えました！

ヒヨウちゃんは、

やっぱり、ご飯にありつけなかったのか、

以前にも増して、精悍な風貌になっていました。

早速、この日の為に用意していた、

わたしのご飯よりも高い、食事を準備します。

硬水を、持ってきたお皿に注いで、

猫缶を空けて、中身をもう1枚のお皿に入れました。

ヒヨウちゃんは、今日も相変わらずかなり不機嫌で、尻尾を振りっぱなしで、ご飯を見てもそれは止まりません。

水の方には、すぐに顔を近づけて飲んでくれましたが、猫缶には、匂いを嗅いでるばかりで、なかなか食べようとはしませんでした。

わたしは、188円もしたのに駄目なのか、と、涙目になって見つめていると、その心境を察してくれたのか、遂に、食べてくれました！

全然、喜んでいるようにも、美味しそうでもなくて、生きる為には仕方ない、というような、嫌々食べているみたいにしが見えなかつたけど、でも、食べてくれたことには変わりないので、とりあえずは、目標達成です！

ヒヨウちゃんは、猫缶を一口食べては水を飲むという、流し込んでいるかのような食べ方で、水だけは、どんどん飲んでました。

尻尾は、かなりの勢いで振り回してました。

それを見て、多分これと同じのは、もう食べてくれそうもないと、悟りました。

なくなる度に、水を継ぎ足していったら、  
ペットボトルの水が、半分くらい無くなりました。

ヒョウちゃんのお食事が終わった頃に、  
急に涼しい風が吹いてきて、

それと同時に、ヒョウちゃんは音もなく立ち去りました。

これは天気予報で言った、夕立の前兆だと思って、  
わたしも急いで片づけをして、帰ってきました。

家に着く頃には、雨は降り始めていて、  
あっという間に、土砂降りになっていました。

絵の進みはいまいちで、  
かなちゃんのこと、まだ迷っているけど、  
ヒョウちゃんの場合は、目標達成できて、  
とても嬉しかったです。

でも、次のご飯はどうしたらいいかについては、  
今後の課題にしようと思います……

8月29日 決断と雹の祝福

昨日までで、空と雲は大体完成して、  
その手前の、山脈や遠くの建物と、  
河や、河原や、河川敷のところ、  
大雑把には出来たので、

これから、細かいところを塗っていきます。

この頃は、夕方になると必ず夕立が降るので、あんまり遅くならないうちに、帰るようになっています。

そのせいもあるけど、

やはり、かなちゃんのこと、

どうしようかが、決めきれずにいて、

それが気にかかって、集中出来なくて、

思うように、描き進みません。

気分を変える為に、

鉛筆画の方を、やったりしてみるのが、

こちら、やはり途中で止まってしまいます。

どっちの絵も、なんだか中途半端になっ

てる、かなちゃんに対する、

わたしの態度を表しているようで、

イラつくような、情けないような、

なんともいえない気持ちです。

絵はともかく、

かなちゃんに対して、どうするのかは、

学校が始まる、あと3日のうちに、

決めなければいけない。

ここでわたしは、前に見た夢を思い出しました。

このまま、かなちゃんに何もしなければ、

あの夢の女の子と、同じになってしまっ

それを止めるのを、何故ためらうのかは、  
それが、余計なお世話かも知れないと思う、というより、  
そうする事によって、わたしが、  
かなちゃんから嫌われることを、恐れているだけではないか。  
自分が嫌われるかも知れないという、嫌な事から逃れる為に、  
かなちゃんを、救う事になるかも知れない行動をしないのは、  
逆に、かなちゃんに対して、いやもつと、  
ひどい事をしているのと、同じではないだろうか。

仮に、これがわたしの思い違いで、単にかなちゃんに対して、  
ひどい事を言ってしまっただけになったとしても、  
それはわたしが、その時に謝ればいい話で、  
たとえ、それで許してもらえなくても、  
かなちゃんに対しての心配は、勘違いだったと確認できたなら、  
それはそれで、納得出来る結果ではないだろうか……

それに、わたしは自分の直感だけは、何よりも信じている。  
だから、やっぱりわたしは自分の心に従って、  
わたしなりのやり方で、かなちゃんの本心を聞こうと、  
決めました。

帰って来る途中で、今日は雨ではなくて、雹が降ってきました。  
雹に降られるのは、随分久しぶりで、  
家の中からではなく、外で降り注ぐ雹の中において、  
自分の周りで、細かな氷の粒が、  
傘や、屋根や、地面で跳ね回っているのが、  
とても楽しかったです。



わたしにとって、この電は、

決断した事に対する、天からのお祝いのように感じました。

8月31日 明日から二学期です

始まった当初は、とても長く感じていた夏休みも、  
いよいよ、最終日になってしまいました。

明日は始業式で、二学期が始まります。

絵の方は、ぎりぎりまで頑張ってみました、  
結局、完成までには行きませんでした。

まあ、あくまで目標であったので、  
これからも、地道に続きを描いていこうと思います。

それ以外については、水泳補習も、夏期講習も、  
ヒヨウちゃんの事も、かなちゃんの事も、  
やるべき事はしたし、考えるべき事は考えて、  
それなりの結果や解答は、出たと思っています。

後は、やった事の成果を出すのと、  
決めた事を、実行していくだけです！

と、宣言しておかないと、  
怖気づきそうなので、宣言しました。

絵も、ヒヨウちゃんの次のご飯も、かなちゃんの事も、  
なんとか、上手くいくように、  
二学期も、努力して行こうと思います！

2009年 9月 その1(前書き)

変更履歴

2011/04/16	記述変更	(クラス) 1組、2組、3組
A組、B組、C組		
2011/04/19	記述統一	(期間) 一日、二月、三年
1日、2月、3年		
2011/05/06	記述統一	一位、二位、三位
2位、3位		1位、
2011/05/15	記述統一	一つ、二つ、三つ
2つ、3つ		一つ、
2011/07/10	記述統一	一人、二人、三人
2人、3人		1人、
2011/08/28	誤植修正	位 くらい

2009年 9月 その1

9月1日 始業式

二学期最初のイベントは、  
何と言っても、校長先生の話です。

前回の終業式では、2分50秒でした。

果たして、この記録を超えられるのか、  
わたしはただ、それだけが気になって、  
仕方ありませんでした。

そして、今回のタイムですが、  
惜しくも記録更新ならず、2分55秒でした……

今回は、マイクの調子が悪くなって、  
マイクの交換で、話が中断すると言う、  
アクシデントに見舞われての、このタイムでしたから、  
あれがなければ、記録更新は間違いなかったのに、  
とても残念です……

校長先生も、顔には出さないけど、  
きっと、悔しかったに違いないです。

やっぱり、今回もですけど、  
話の内容は、全く覚えていません。

でもいいんです、

確か、スポーツキャスターも言っていましたから、記憶よりも記録が大事だと。

教室では、夏休み明けで結構色々、二学期から、デビューしている人がいました。

夏休み前は、黒髪で色白だったのに、真っ黒で、茶髪になっている人とか、眼鏡かけていて、地大人しい感じだった人が、コンタクトにして、制服とかもいじって来た人とか。

そういうわたしも、茶髪デビューですけどね……

周りの人たちに、髪のことをちょっと突っ込まれました。

かなちゃんと言うと、自宅にお邪魔した時に宣言していた、ネクタイデビューをしました。

今日は、あちこちのグループから呼ばれていて、とても忙しそうにしている、

わたしが声をかけられる時間は、全くありませんでした。

そもそも、声をかけるタイミングがあつたとしても、まだ、どうやって切り出すかを、思いついていません。

早く、それを決めないと、

決心したのに、話が進まないなあ……

9月2日 再びプールです！

8月の下旬から、待ちに待っていた、  
念願の、プール授業がやって来ました！

今回は、大きな発見があつたんです。

今までは、息継ぎをする度に、速度が落ちている気がして、  
試しに、息継ぎの回数を、今までの半分にしてみたいです。

そしたら、タイムが結構上がりました！

やっぱり、わたしは息継ぎが下手で、  
泳ぐスピードが、落ちてしまっていたみたいです。

息を長く止めていても、肺活量が高いのか、  
あんまり苦しくないのも、

もう1つ、これも初の挑戦でしたが、  
潜水で、出来るだけ進んでみたら、  
なんと、今までで一番タイムが速かつたんです！

途中で、ちょっと苦しくなってきたので、  
顔を上げて、息継ぎしてしまっただけ、  
25mを、最後まで潜水でいければ、  
かなり良いタイムになりそうです。

今回は、もう1つ新たな初挑戦をして、  
タイムアップを狙います！

9月7日 球技大会の種目決めと席替え

HRで、今月の17日にある、  
球技大会の、参加種目を決めるのと、  
席替えがありました。

球技大会の種目は、  
男子は、サッカーとバスケットで、  
女子は、ソフトボールとバレーボールです。

全員参加なので、わたしもどちらかに入らないといけないなあ、  
とか思っていたら、体育祭の時と同様に、  
体育会系の人たちが、勝つ為のメンバー配置で、  
勝手に割り当てられてしまいました。

その結果、わたしは  
ソフトボールになっていました。

球技種目の中でも、一番苦手なものになってしまいました。

といっても、補欠要員です。

男女とも20人くらいいるので、どちらの種目のメンバーにも、  
レギュラーメンバーの他に、補欠メンバーが入っています。

どうやら、女子はバレーボールで高順位を狙って、  
ソフトボールは、無難な成績を狙う作戦らしいです。

ちなみに、かなちゃんの参加種目はバレーです。

背は高くないけど、サーブとレシーブとトスが上手くて、レギュラーに選ばれていました。

あれで背が高くて、アタックやブロックまで出来たら、言うこと無い選手です。

ここでもかなちゃんとは、別々になってしまい、更に話す機会が減ってしまった……

体育祭に続いて、またしても、わたしは戦力外です。

球技大会では、体育祭よりも、もうちょっと、がんばろうと思っていたけど、補欠なので、どうしたらいいんでしょうか……

これから、球技大会までの期間、休み時間や放課後や休日などで、各種目が練習出来るように、体育館とかが開放されるので、時間を作って、極力自主連に参加するようにとの、お達しも出ました。

わたしは、バイトを入れていない日は、出来るだけ、自主連に参加しようと思います。

席替えの方も、残念な結果になりました。

わたしの席は前の方だけど、窓際になれたのは良かったけど、かなちゃんの席は、廊下側の一番後ろで、席が、かなり離れてしまいました。



また次も、くつついた席になれるとは思っていなかったけど、教室の真逆と言ってもいいくらい、離れてしまつとは……

これだと、教室の後ろの出入り口を通る時か、ごみ箱がそこにあるから、ごみを捨てに行つた、ついでに声をかけるしか、かなちゃんのそばに、近づく機会はなさそうです。

でも、この教室の後ろの出入り口を使うのは、体育とか音楽や美術などの、教室移動する時くらいで、登下校で通るのも、昇降口に近い前側なので通りません……

もちろん、わたしの席の周りに、かなちゃんが、来るかも知れないけど、わたしの周りの人達は、あんまり、かなちゃんにくつついている人達ではないので、その可能性も、どうやら低そうです。

忙しいかなちゃんと、比較的色々会話出来ていたのは、前後の席で、近いおかげだったからで、もうこれからは、今までの様には話せなくなってしまうた。

ただでさえ、どう切り出すか悩んでいたのに、話す機会が減つたことで、更に、かなちゃんの本心を聞くのが、難しくなつてしまいました。

ハードルは上がっていくばかりです……

9月11日 今年最後のプール

まだ暑い日が続くので、プールも続くかなと思っていたら、  
今日が今学期最後のプールで、  
来週からは、球技大会の競技の練習になってしまいます。

で、最後にタイム測定をしました。

今回は、先週発見した、『ずっと潜水で泳ぐ』以外に、  
飛び込みにチャレンジしました。

小さい頃は、河やプールでよく遊んでいたけど、  
飛び込みは、させてもらえなかったし、  
大きくなったら、もう怖くて出来ませんでした。

でも、何だか上手く出来そうな気がしたんです。  
わたしは、自分の直感を信じています。

だから、一発勝負でタイム測定の際に、飛びました！

飛んだ直後、何が何だか判らなくなり、  
気づいたらもう水中でした。

お腹とか痛くなかったし、すごい音もしなかったから、  
上手くいったのかなあ、と思いつつ、  
あとはひたすら、潜水で進みました。

やっぱり、飛び込んだおかげでちょっと速かったのか、  
息も、25m持ちました。

プールの端について、水中から顔を上げると、みんなの視線がわたしに集まっていた、なんか、目立つ事したのかなと思って、帽子が脱げて、髪が解けたとかを心配になって、思わず、髪を確認してしまいました。

別に、髪は崩れていなかったのに、何だろうと思いなから、

プールから上がって、スタート地点へと戻ると、体育の先生が、とても驚いた顔をして、

「お前、まさに魚雷だな！」  
と、またしても、馬鹿にされたようなことを言われました。

なんと、タイムが今までの2倍近くに短縮されて、水泳部の選手くらいのタイムだったんです！

クラスでの順位は、水泳部員の男子の記録を抜いて、なんと、一番になりました！

でもこの後、先生に、  
「お前、一学期は手を抜き過ぎだ、初めから真面目に泳げ！」  
と、怒られました。

あまりのギャップに、手抜きしていたと思われたようです……

みんなが見ていた理由は、  
今までずっと、クラスで一番泳ぐのが遅かったから、  
飛び込みなんて、大失敗するだろうと思っていたら、  
飛び込みがすごくきれいで、ほとんど水飛沫が上がらないし、

その後の、潜水もすごく早かったから、みんな驚いていたんだよ、と、かなちゃんも、更衣室で教えてくれました。

でも残念ながら、わたしはどういう風に飛び込んだのか、自分で判っていません。

なので、もう一度やれと言われても、多分出来そうも無いです。

でもこれで、あの体育の先生を驚かすことが出来て、とっても気分が良かったです！

9月13日 休日の自主連

グラウンドの予約が、順番待ちで先週は練習出来ず、ほぼメンバー全員が集まったので、学校での練習はこれが初日です。

個々では、バッティングセンターに行ったりして、色々やっているみたいでしたが、わたしは補欠という事もあって、今日が初練習です。

ソフトボールのメンバーは、レギュラーは10人で、残りの2人が補欠です。

補欠のもう1人の人は、今日は来ていなくて、わたし1人だけです。

レギュラーのメンバーの中に、

ソフトボール部の人がいるので、その人がピッチャー兼監督です。

今日は、守備練習をメインに、  
キャッチボールや、バッティングをやっていました。

でも部員以外の人は、みんな初心者で、全然ボールが取れないし、  
投げ返しても、見当違いのところへ転がっていったりで、  
わたしは、そんなボールを回収する役でした。

監督の人は、かなり気合を入れていて、  
ずっと怒鳴りっぱなしで、  
それに対して、守備の人達は、  
走りまわされて、声も出なくなっていました。

そういうわたしも、珠拾いしかなかったけど、  
すっかり、くたくたになってしまいました。

普段、部活でやっていなければ、  
女の子は、キャッチボールとかしないから、  
全然ボールが取れなくても、仕方ないと思うんですけど、  
他のクラスも、このくらいのレベルなのかなあ。

試合として成り立つのかが、怪しいような気がしてきました。

これならきつと、まだバレーボールの方がましだろうなあ。

なるほど、だから、バレーボールの方を、  
勝ちに行くメンバーにしたのかも。

ソフトボールは、想像以上にハードです。

わたしはメンバーの練習の手伝いに、全力を注いで、当日はただただ、レギュラーの人たちが休んだり、怪我とかで、わたしに出番が来ないことを祈る事にします……

9月15日 放課後の自主連

前回の休日自主連から、レギュラーの人達には、教室に、ソフトボールとバットが用意されて、休み時間や昼休みも、監督の人の指示の元、キャッチボールや、素振りの練習を義務付けられました。

最初はみんな、ブーイングでしたが、監督の人の気迫と、他の体育会系の人達の無言の圧力で、しぶしぶ練習しています。

その効果が出てきたのか、キャッチボールも、だいぶ取れるようになっていて、バッティングも、それっぽいフォームになってきました。

そして今日は、放課後の自主連です。

今日は、メンバー全員が揃いました。

グラウンドを使える時は、出来るだけ守備練習をして、とにかくまともに守れるように、監督の人はしたいようです。

で、後は自分のピッチングで、押さえ込む作戦だそう。

今回は、休み時間の練習もあつてか、  
やっぱりミスは、いっぱいありますが、  
日曜日と比べると、格段に良くなつていて、  
その証拠にわたしも、日曜の半分も動かずに済みました。

わたしと同じ補欠の人は、球拾いが無い間は、  
一応、2人でキャッチボールしてました。

両方とも下手なので、なかなかまともに相手に届かなくて、  
お互い、相手に謝りっぱなしでした。

グラウンドの使える時間が終わった後、  
レギュラーの人達は、駅向こうにある、  
バッテリーセンターに行きました。

一緒に来るかと、聞かれたけど、  
わたし達補欠組は、後片付けをしとくからと伝えて、  
片づけを終えて、その人と一緒に帰りました。

この人は、成績優秀なグループの人で、  
勉強は苦手はないけど、運動全般は駄目なんだそうです。

わたしは今まで、話した事ありませんでした。

この人から帰り道に、気になる事を言われました。

どうも、周囲に対するかなちゃんの状態について、  
この人のグループの中でも、

あまり、良い印象を持っていない人達がいて、

あの子に付き合う必要があるのか、  
といった話が出たらしいです。

その意見を言った人は、  
やっぱり、付き合う相手を選んでいるタイプの人で、  
ある意味、かなちゃんの行動は、  
分かる人にはすでに、感づかれているのではないかと、  
ちよっと怖くなりました。

この人は、わたしをかなちゃんと親しい相手の1人と見て、  
親切で、忠告してくれたようです。

わたしは、この人にお礼を言って駅で別れた後、  
夕飯の買い物を買わせて、家に帰りました。

本人は、気づいているのかどうか分からないけど、  
どうも、頭の良い人や、勘の鋭い人とかから先に、  
かなちゃんに対して、悪い印象を持っていくという、  
わたしの推測が正しかったのが、証明されてしまった様で、  
とても残念です。

わたしは、ふいに、1つの童話を思い出しました。

それは、『裸の王様』です。

かなちゃんの件は、時間が経てば経つほど、  
どんどん悪化していつてしまう。

早く、何とかしないといけないのは判っているけど、  
かなちゃんと、話をする時間が作れません……



9月17日 球技大会1日目

今日から2日間かけての、球技大会が始まりました。

昨日まではずっと晴れていて、残暑厳しかったけど、今日の天気は曇りで、晴れだったらきつと、熱射病とか大変だと、心配でしたが、だいぶ涼しくて、助かりました。

朝から校庭に整列して、開会式と準備運動の後に、それぞれの種目の試合が、始まりました。

試合は、学年ごとのクラス対抗で、総当たり戦で、勝敗を競います。

男子のサッカーと、女子のソフトボールは、グラウンドの都合で、1試合ずつしか出来なくて、試合時間は25分で、ソフトボールは5回までと短いです。

だから、サッカーは特に、最初から全力で戦ってました。

バスケットボールは、試合場所が二面ずつありますが、やはり時間の都合で、試合時間は短くなっていて、バスケットは、15分 HALF で、ハーフタイムが10分、バレーボールは、15ポイント制で行います。

噂によると、優勝したメンバーは、

体育の成績が上がるといふ噂があり、みんな、かなり真剣です。

前日の体育の授業で、うちのクラスの、ソフトボールのメンバーを見た体育の先生は、「ほかのクラスより、動きが良いな」と、驚いていました。

これは、期待出来るかも知れません。

この日、一番の心配事だった、欠席者や怪我人は出ず、最大の危機は、訪れずに済みました。

試合の実施順は、どのクラスも連続して試合にならない様に、三学年が、常に変更っていく順番になっていて、更に、他の種目の応援も出来るように、種目でも出来るだけ、学年がずれるように、試合順が組まれていました。

なので、自分の試合が無い時は、みんな他の種目の試合へと、応援に行つて、自分の種目の試合になったら、試合場所に集まるのを、繰り返していました。

球技大会の間は、試合の予定が朝から晩まで組まれていて、統一したお昼休みもありません。

売店や食堂は、この期間は1日中やっていて、午後になって、全然勝てないクラスの人たちとかが、心身共に疲れ果てて、テーブルに突っ伏していました。

わたしは、うちのチームが試合の時は、  
もう1人の補欠の人と一緒に、  
チーム席に座って応援してました。

わたし達には、特にやる事も無かったので、  
バットとか、グローブを拭いたり、  
レギュラーの人たちの、飲み物を用意したりしてました。

何だか、マネージャーみたいだねと、  
補欠組同士で話してました。

うちのチームは、二試合が終わって、  
1勝1引き分けで、現在2位です！  
なかなか良い感じですよ！

他の種目の試合は、メンバーと一緒に応援に行きました。

男子のサッカーや、バスケも頑張っていて、  
サッカーは、1勝1引き分けで、2位、  
バスケは、1勝1敗で、2位でした。

女子のバレーは、  
精鋭を揃えた事もあって、  
2勝0敗の現在1位でした！

かなちゃんも、レギュラーメンバーの中では、  
一番背が小さいのに、とても活躍していました。

体育祭でもそうでしたが、  
やっぱりA組が、大体1位になっていました。

明日は、女子の種目の試合では、A組との試合が残っています。  
ぜひ、頑張つて、勝つて欲しいです！

9月18日 球技大会2日目

2日目も、まずは準備体操から始まりました。

天気は、昨日と変わらず曇り空です。

どうやら週末は、雨になるそうで、  
なんとか今日は、雨に降られずに済みました。

2日目になると、昨日と雰囲気が変わってきました。

負け越しが決まった種目のクラスは、  
やる気が、かなりなくなっていて、  
応援に来る人数も、すごく少なかったり、  
試合の開始時間になっているのに、  
なかなか、メンバーが集まらないとか、  
すっかり戦意喪失している感じになっていました。

うちのクラスは、もちろんそんな事は無く、  
応援も、クラス全員集まっていました。

うちのチームは、第3試合は1対0で勝つて、  
残るは午後の、A組との第4試合だけになりました。

お昼になり、昼食を取った後、  
ちよつと教室で、ゆっくりしていたら、  
第4試合の時間になりました。

A組は3戦3勝で、無配のとても強いチームで、  
うちも善戦したけど、力及ばず、  
3対1で負けました。

女子ソフトの成績は、2位となりました。

A組には勝てなかったけど、最初の練習の状況を考えると、  
とても健闘したんじゃないかと、思いました。

まあ、わたしは何もして無いんですけどね。

サッカーやバスケも、2位や3位で、A組より下位でしたが、  
最後の試合になった女子のバレーは、  
A組を追い詰めて、逆転勝利していました！

でも最後に、レシーブを失敗して、  
コートの外に飛び出したボールを、  
かなちゃんがフォローした時に、  
足を挫いてしまったんです。

そこで、かなちゃんを保健室へ連れて行く付き添いに、  
わたしが呼ばれました。

バレーのメンバーは8人で、補欠の人は1人お休みしていて、  
交代メンバーが、かなちゃんの代わりに試合に出ると、

誰もうちのクラスの人はいなくて、応援に来ていた、他の種目のメンバーから誰か、となつて、ソフトのレギュラーは、この後の表彰式に出席するから、補欠のうち、どちらかが付き添うことになり、わたしになつたんです。

かなちゃんは、周りには大丈夫とは言っていました、かなり足が痛むのか、苦しそうにしていました。

わたしは、かなちゃんに肩を貸して、保健室へと、連れて行きました。

保健室へ向かう間、あの件を話すきっかけになるかも、と、一瞬思いましたが、怪我して苦しんでいる人に対して、付け入るような、なんだかずるいやり方に思えて、あの話をするのは、この時は止めておきました。

保健室には、他にも怪我をした人たちが結構いて、順番待ちになつていたので、その事をかなちゃんに伝えて、外の椅子にかなちゃんを座らせて、わたしも座りました。

わたしは、この時にかける言葉が思いつかず、かなちゃんの様子を見ながら、黙って座っていました。

かなちゃんは、足の痛みが気になるのか、自分の足元を見ていたのですが、不意に、うつむいたんです。

この時、試合中はポニーテールにしていたはずの、かなちゃんの髪が、ゴムが外れたらしく、髪で顔が隠れました。

その時、かなちゃんは聞き取れないくらいの小声で、  
ねえ、と、わたしを呼びました。

わたしは、返事を返して、また小声でも聞き取れるように、  
顔をかなちゃんに近づけました。

その時に、かなちゃんはわたしに、何かを言ったんです。

その時のかなちゃんの声は、さっきよりも更に小さくて、  
前半は全く聞き取れなかったけど、最後に、

「……きらい？」

と、言うところだけは、聞こえたんです。

普段の雰囲気とは、だいぶ違っていて、  
聞き返してもいいのか、判断がつかなくて、  
しばらく、どうにも出来ずにいたら、

かなちゃんの、診察の番が回ってきてしまいました。

先生に呼ばれて、顔を上げたかなちゃんは、  
もう、いつも通りのかなちゃんに戻っていて、  
髪を束ね直してから、保健室へと連れて入りました。

保険の先生に診てもらうと、足は軽い捻挫で、  
しばらく冷やした後、

先生に、テーピングと包帯を巻いてもらい、  
痛みが収まるまで休んでから、教室へ戻りました。

かなちゃんは、もう1人で大丈夫だから、

先に戻ってくれていいよと、言ったけど、さっきの言葉も気になって、一緒にいました。

わたしの心配に反して、

かなちゃんは、すっかりいつものペースで、

楽しそうに、バレーボールの試合の話をしていましたが、

わたしはその話の内容を、全く覚えていません。

いつも通りにしているところを、見れば見るほど、

いつも通りだと見せようとするかなちゃんを、見れば見るほど、

余計に、あの言葉が重要だったと思えて、

その様子にばかり、気がいつていたからです。

そういう感情を、わたしも隠せなくて、

かなちゃんは、それを見て余計に、

平静を装おうとしたんじゃないかなあと、

後になって思いました。

結局、あの件を言い出すことも、

そのきっかけもつかめなくて、

あの言葉という、新たな疑問が、

増えただけになってしまった……

教室に入る直前、かなちゃんと別れる時に、

不意に、シルバークの予定を聞かれて、

わたしは反射的に、ほとんど終日バイトだよと、答えると、

かなちゃんは一言、ふうんと、返して、

自分の席へと戻りました。

もう順位発表や、閉会式も終わって、



下校時刻になっていたけど、半分くらいの人は、まだ教室に残っていました。

教室で、うちのクラスの順位が2位だったと、教えてもらったけど、わたしはほとんど上の空でした。

教室に入る時に、

かなちゃんの予定を、聞き返せば良かったのですが、

そう気づいた時にはすでに、かなちゃんは、

教室に残っていた人達に、囲まれてしまい、着替えた後はすぐ、打ち上げのカラオケに行ってしまったて、声をかける時間は、もうありませんでした。

わたしは、この後バイトを入れていたので、その打ち上げには行かずに、帰りました。

バイトが終わって、家に帰った後も、

保健室前での、かなちゃんの言葉が、気になって仕方ありません。

やっぱり、あの時に聞き返しておけば、

せめて、シルバークの予定を聞かれた時に、こっちからも聞き返せば、

話す機会が、作れたかも知れなかったのに、もう、全然ダメダメです……

球技大会の結果は、意外と良かったけど、わたしの心境は、どん底です……

9月20日

今日は、航海堂のバイトもお休みで、

絵の続きを描こうと思いい、朝から御家河の土手に行きました。

天気は、昨日の雨が上がったところだけど、

予報では今日も雨で、今にも雨が降りそうな天気でしたが、  
どうしてもここに来てたくなって、やってきました。

でも描く気分にはなれず、スケッチブックも出さないうで、  
ちよつと離れた場所の、水門の脇にある階段に座って、  
ずっと、河と河川敷を眺めていました。

わたしがここに来てから、

釣りしてるおじさんが、7匹釣り上げていました。

そのうちの1匹は、1メートルくらいあってびっくりしました。

カヌーの人が河を下っていて、ちよつと羨ましかったです。

犬の散歩の人が、3人通り過ぎて行きました。

ジョギングしている人が、5人通りました。

そのうち1人はまるで全力疾走で、とても速かったです。

わたしは、何をしているんでしょうか……

いつの間にか午後になっていたので、

その場所で、お弁当を食べていると、

ヒョウちゃんがそばに来ていました。

でも今日は、ヒョウちゃんを構う余裕がなくて、

人1人分空けて座った、ヒョウちゃんを見た後に、

わたしはまた、ひたすら河を眺めていました。

いくら考えていても、仕方がないのは分かっているけど、  
どうしても頭から離れません……

わたしは、携帯を持つてはいますが、  
メールとかも、あまり好きではなく、  
それほど、使う機会がありません。

理由は、文章で全てを伝える自信がないので、  
わたしが伝えたいことが、伝わらないかも知れないと思うのと、  
返事が返ってこないと、  
相手がメールを見たかどうかすら、分からないからです。

かなちゃんにメールを出すという方法も、  
ずっと考えてはいたけど、  
大事な用件は、  
やっぱり直接目の前で、話さなくちゃいけないと思い、  
ずっと、出さずにいました。

でも、きつと忙しいかなちゃんとは、  
直接会って話すのは無理そうだし、  
これ以上、時間が経つと、  
取り返しがつかなくなる予感がしているんです。

だから、思い切って、メールを書くことにしました。

内容をどうするかを考えるのに、すごく時間がかかってしまい、  
文章を打ち終わる頃には、もう夕方になっていました。

天気は、いつの間にか晴れていて、夕焼けで、きれいな茜色の空になっていました。

メールの内容は、

やっぱり、直接会って話さなくちゃ駄目な気がしたので、話がしたいから連絡が欲しい、とだけ、書きました。

このメールを、かなちゃん宛に送信した時に足元で何かが動いたと思ったら、ヒョウちゃんが、立ち去っていくところでした。

こんなに長い時間、そばにいたのは初めてな気がします。

その時、気づいたのですが、ほとんど、見ていなかったから、判らなかつただけかも知れないけど、今日のヒョウちゃんは、尻尾を振っていなかったような気が……

今日は、大人しく座っていたんでしょうか。

わたしは、聞いてないだろうけど、遠ざかっていくヒョウちゃんに、挨拶してから、家に帰りました。

後は、メールの返信次第です。

明日は父の命日で、母と一緒に父のお墓参りに行きます。

父にも、かなちゃんの事を、相談したいと思います。

2009年 9月 その2(前書き)

変更履歴

2011/01/03	誤植修正	以外	意外
2011/04/19	記述統一	(期間)	一日、二月、三年
1日、2月、3年			
2011/05/03	記述統一	一回、二回、三回	一回、
2回、3回			
2011/05/16	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/06/27	誤植修正	今だ	未だ
2011/07/11	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			
2011/08/09	記述統一	一人ぼっち	独りぼっち
2011/08/29	誤植修正	位	くらい

2009年 9月 その2

9月21日 お墓参り

今日は朝の6時に起きて、朝とお昼のお弁当を私が用意して、母は、24時間営業のレンタカー屋さんから、車を借りてきて、7時には出発しました。

このお墓参りだけは、普段は仕事で忙しくて、あまり家に居ない母も、なんとか時間を作って、毎年行っています。

母と一緒に、こんな旅行とか遠出をするのは、今では、このお墓参りだけです。

借りた車は、小さなワンボックスカーだったんですが、ナビが付いていたけど、母もわたしも使い方が良く分からなくて、結局、使わずに出発しました。

道は毎年行っているから、2人とも覚えているので、ナビは、別に必要にはなりませんでした。

いつも、お墓参りに行く時は早朝から出発しています。

道路が込む前に、向こうに着いてしまいたいのと、お墓参りの後、親戚の家に寄ってから帰るので、1日がかりの、ちよっとした里帰りになるんです。

普段、私は車に乗る機会はあまり無いから、

年に一度のドライブは、とても楽しいです。

いつも、助手席に乗っている時は、

朝ごはんのおにぎりを、車の中で食べながら、

ドアの窓を全開にして、空や遠くの景色を眺めています。

18歳になったら、免許を取って自分で運転して、

遠くへ行ってみたいなあ……

前に住んでいた町には、大体3時間くらいで到着しました。

そこは、最近隣の村と合併して町になっていますが、

私が住んでいた頃は村で、まさに田舎の村そのものな所でした。

町になった今も、雰囲気は前と変わっていません、

のどかで寂れた感じが、わたしは好きです。

町の周りは山に囲まれていて、その山の中を流れているのが、  
わたしが小さい頃によく遊んだ、乍川です。

この町に父の実家があって、そこで父は療養していました。

今はもう、父の両親も亡くなっていて、誰も居なくなり、  
空き家となっています。

その家から、歩いて5分くらいの所に、  
父や、ご先祖様が眠るお墓があります。

裏山の上にあるお墓までの道は、車は入っていけない山道なので、  
実家の場所に車を止めて、必要な道具やお供え物を持って、

緩やかな上り坂の上にある、お墓まで歩いて向かいます。

この辺りには、山以外に何も無く、空気も美味しいです。

この日は天気も良くて、今住んでいるところよりも、こっちは涼しくて、ただ歩いているだけでも、気分が良いです。

年に1回しか来ないお墓は、親戚のおじさん達が、たまには来てくれているんだろうけど、いつも、かなり大変な事になっています。

特に時期が秋のせいか、いつも雑草が大変な事になっていて、わたしは、ひたすら草むしり担当で、母が、お墓の掃除をやっています。

ご先祖様のお墓も合わせて、いくつかあるので、一通りお墓の掃除が終わるのに、いつも1時間くらいかかります。

きれいになったら、全部のお墓にお供え物を供えて、お線香を上げて、手を合わせてお祈りします。

最後の、父のお墓の前では、わたしは、かなちゃんの事について、良い解決方法を授けて下さいと、お願いしました。

お墓参りが終わると、登ってきた山道に戻って、空き家の家まで、戻って来ました。

この後は、昔いつも遊んだ、乍川の河原へと向かいました。



そこで、川を見ながら、持ってきたお昼のお弁当を、母と一緒に食べました。

ここでの母との会話は、いつも決まって、わたしが川に流されていた話です。

わたしが遊んでいた、乍川の川原は、溪流にしては、川の幅が広く浅くなっていて、流れも非常に緩やかで、

三日月のように大きな弧を描いて、川が曲がっていて、その内側が、平らな川原になっています。

水はとてもきれいで、川底まではつきり見える程で、イワナやアユが釣れるので、いつも釣りの人がいる場所でした。

わたしはここにいつも、父と一緒に遊びに来ていたんです。

父は、川の風景を描くのを趣味にっていて、わたしは、父が描く絵が大好きでした。

でも、ここに来た時は、父のそばにはいなくて、いつも川の中でしたけどね。

さすがに、冬は入りませんでしたけど、

春や秋は、足くらいまでの浅瀬に入って遊んで、

夏や暑い日はいつも、川の流れに身を任せて、流されていました。

当時、幼稚園児だったわたしは、

最初は普通に、浅瀬で水遊びをしているのが好きだったんですが、

ある時、水面をずっと見ていたら、自分だけが、前に流されていると錯覚して、どうしてかは、覚えていないのだけど、水の流れの中に入っていったんです。

そうすると、水の流れに乗って、流れと同じ方向に、自分も流されました。

この感覚が、幼いわたしにとっては、とても自然な、あるべき状態だと思っただんです。

これには、理由とか無くて、単純にそう思った、としか言えません。

この時は、流されているわたしに気づいた父に、下流側で拾い上げてもらったんですけど、これ以来、わたしはここに来る度に、この川原の上流か側から流れに乗って、下流へと流される遊びを続けていました。

母にこの事が知られた時は、とても叱られたんだけど、父は、これを何度やっても、一度も叱られた事はありません。

ちなみに、この川でわたしは、一度も溺れた事はないし、溺れると思った事も、この乍川においては、無いんです。

父は、そんなわたしを見て、いつも、わたしのやりたい様にさせてくれました。

多分、父にはわたしの心が通じていたんだと、

今でも思っています。

だから、この川に来ると、  
わたしを理解してくれていた、父を思い出します。

ちなみに、父以外に下流で拾われる事も、  
たまにありました。

それがここで良く釣りをしていた、親戚のおじさんで、  
わたしはいつも、おじさんに魚をすくう網で救われていました。

そのおじさんが、これから向かう、親戚のお家のおじさんで、  
父の弟に当たる人です。

お昼を食べ終わると、ちょうど午後1時くらいになり、  
川原から車のところへ戻って、  
車で5分くらいのところにある、おじさんの家に行くのですが、  
わたしは、もうしばらくここに居るから、と母に伝えて、  
先に行つて貰いました。

どうしても、今日はここで、  
かなちゃんのことを、決断したかつたんです。

わたし以外には誰も居ない、この川原で、  
さすがに泳ぐのは出来ないので、  
せめて足だけでも、と思つて、  
水際に座つて、足だけ水に浸かりながら、  
水面を眺めて、かなちゃんのことを考えていました。

他には、何の音もしない中で、

川のせせらぎだけを聞きながら、  
水面だけを、ずっと見つめていると、  
誰といるよりも、どこにいるよりも、  
心が落ち着いてきて、  
とてもすっきりした気持ちになってきます。

そしたら、悩んでいたかなちゃんの件は、  
もう答えは出ているんだと、気づきました。

未だに、メールの返信も、電話もなく、  
かなちゃんは、あのメールを見ているのかさえ、  
わたしには分かりません。

どう伝えるかについては、  
変に、上手く伝える方法を考えるから、  
言い出せなくなっているのは、間違いないので、  
もう、わたしが思っているままを、  
かなちゃんにぶつけるしか無いのでは、と思っています。

それが、どれほど下手な表現であっても、  
思っている事をすべて話せば、少なくともわたしの伝えたい事を、  
かなちゃんなら、理解してくれると信じて、  
思い切って、話そうと思います。

期限は、わたしの中では、このシルバーウィーク中のうちに、  
何としても話をするつもりです。

連絡が取れないなら、直接かなちゃんの家に行って、  
話をしよう、と、決心しました。

日にちは、明日は1日バイトなので、あさつて、シルバーウィークの最終日の23日は空いてるから、かなちゃんから、明日まで何の反応もなかったら、23日に、かなちゃんの家に行く事にします。

そう決めました。

わたしは、心の整理がついたので、歩いておじさんの家へと向かいました。

気持ちの整理が出来たおかげか、田舎ののどかな風景は、さっきよりも、もっときれいに見えました。

おじさんの家は、川原から歩いて20分くらいのところにあつて、おじさんと、おばさんと、姉妹の巴ちゃんちまへんと、恵ちゃんめぐみの4人家族です。

この姉妹、一卵性の双子で、昔はそっくりだったんです。

2人は今中学一年なんです、巴ちゃんは格闘技に目覚めてしまい、髪もショートにして、柔道部に入つて、まるで男の子みたいな感じで、一方恵ちゃんは、本とか漫画とかが好きな子で、わたし程じゃないけど長い髪の毛、いかにも女の子、という感じになっていて、

顔立ちや背丈は一緒だけど、それ以外は全然似てない2人です。

2人とも、だんだん大きくなっているけど、

やっぱり双子のせいなのか、身長はほとんど同じで、やっぱり顔つきも同じでした。

母がおじさん、おばさんと話をしている間、わたしは、2人の部屋で話をしていました。

2人の趣味がずれ始めた頃から、良くケンカしてたんだけど、今はそれが、もっとひどくなっている様で、

3人で話していても、2人はすぐに口喧嘩になってしまい、わたしがなだめるのを、繰り返してばかりでした。

この2人の口喧嘩は、まるでテニスや卓球のラリーのように、割り込む隙が全く無いんです。

普段の口調とかは、語尾とかにちよつと違いがあるけど、ケンカしている時の2人は、全く同じ口調になって、

2人を目の前で見ていなければ、1人の人が息継ぎもせず、ずっと、朗読しているかのようです。

でも、ケンカするほど仲がいいって言うし、

兄弟ゲンカが出来る相手がいるのは、

一人っ子のわたしとしては、

ちよつと羨ましいなと思つて黙つて見ていたら、

2人のケンカが止んで、不思議そうにわたしを見た後、

「なんで、みなちゃん笑っているの？」

と聞かれました。

わたしは、どうやら自分でも気づかないうちに、

笑っていたようで、2人に、何でもないよ、と伝えて、

ここがチャンスだと思い、話題を変えました。

しばらく3人で話をしていたら、  
夕方になっていて、帰る時間になりました。

おじさん達から、野菜とか、釣った魚などのお土産を買って、  
わたしと母はお礼を伝えて、おじさんの所を後にしました。

車のナビなのですが、巴ちゃんと恵ちゃんが、  
ちょっと触っていたら、なんか設定出来たようで、  
帰りは、ナビに従って帰ってきました。

そしたら、道路が込むので、行きよりも時間がかかるはずが、  
大して変わらない時間で、家に着く事が出来ました。

母とわたしは、ナビはやっぱりすごいねと、  
2人して関心してしまいました。

今日は、色々と忙しかったけど、  
母とも、久しぶりにゆっくり話も出来たし、  
父にも挨拶出来たし、  
おじさん達や巴ちゃん、恵ちゃんとも話せたのもあるけど、  
何よりも、最大の問題だった、かなちゃんの件に、  
決心がつけられたのが、良かったです。

後は、メールの返答が明日来るかどうかで、  
全てが決まります！

わたしはもう、迷いません！

9月22日 かなちゃんの夜襲！

今日は朝から、航海堂でのバイトで、すっかり書店の仕事を覚えたところだったのに、また、画材屋さんの方に戻る事になりました。

帰りに、夕飯の買い物を済ませて、家に着いたのは、もう9時過ぎです。

今日は、夜に雨が降ると天気予報で言っていて、この頃には、かなり強く振っていました。

夕飯を食べて、お風呂に入って出てくると、もう11時でした。

わたし、かなり長風呂なんです。

この日も、かなちゃんからの連絡はなく、いよいよ明日は、乗り込むしかないなど、思いながら、パジャマに着替えて、

居間のちゃぶ台を片付けてから、布団を敷き終えた時、携帯が鳴りました。

最初は、出張中の母かと思いましたが、相手は、かなちゃんでした。

わたしは、一度深呼吸をしてから、電話に出ました。



「あ、みなもちゃん？

夜遅くにごめんね。

あの、実はお願いがあって電話したんだあ」

かなちゃんの声の様子は、なんか妙に明るくて、でもそれは、いつもの明るさとは違うような、でもいまいち、よく分かりません。

わたしが、お願いは何かを尋ねると、

「あのねえ、今、みなもちゃんの家の近く、

だと思っただけど、来てるんだあ。

傘持つてなくて、雨降ってきちゃって、

ちよっと困ってるんだよあ」

と、何だか、るれつが回ってないような口調でした。

外を確認すると、雨は結構な勢いになっていて、

この天気で、外から電話しているのかと、

かなり驚いて、すぐに居場所を確認すると、

家から歩いて5分ほどの場所なので、適当な上着を羽織って、すぐに、かなちゃんを迎えに行きました。

かなちゃんは、わたしの家から駅へむかう道の途中にある、タバコ屋さんの小さな軒の下にいました。

格好は浴衣姿で、髪もまとめていたみただけど、雨で全身濡れてしまっていて、ひどい状態でした。

でもかなちゃんは何故か、とてもニコニコしていて、わたしの姿を見つけると、飛び跳ねて手を振っていました。

とりあえずかなちゃんを、急いで家へと連れて行きました。

その間に、かなちゃんは、今日花火大会があつて、それに行つて来た帰りなんだよ、と説明していました。

でもこの辺で、この時期に花火大会なんてあつたかな、と、疑問を感じましたが、それを聞くのは後回しにして、家に着いたらすぐ、かなちゃんにバスタオルを渡して、お風呂の準備をして、かなちゃんを洗面所に入れた後、着替えとして私の服を用意して、洗面所に行きました。

一応、一言声をかけてから入ると、かなちゃんはお風呂入つていて、

脱いだ浴衣や帯が脱ぎっぱなしで、床に散らばっていました。

かなちゃんは、何かの歌を口ずさみながら、シャワーを浴びているようで、

どう考えても態度がおかしいです。

着替えを置いて、散らかつた浴衣をたたんでおいて、わたしは、かなちゃんがお風呂から出てくるのを、お茶を入れながら、待つていました。

10分くらいしたら、わたしの服に着替えた、すっぴんのかなちゃんが、洗面所から出てきました。

かなちゃんは、わたしに謝っているけど、でも、とても楽しそうに笑っています。

もしかして、と思つて、

わたしはかなちゃんの顔に近づいて、確認しました。

やっぱり、お酒臭いです、かなちゃんは酔っ払っていました。

わたしはコップに水をいれて、かなちゃんに渡して飲ませたけど、そのくらいでは、かなちゃんの様子は変わりません。

お風呂や借りた服のお礼とか、迷惑かけた事を謝ったりしながら、相変わらず、妙に笑顔です。

ここで、やっとわたしの方に、心の余裕が出てきました。

この、普段のかなちゃんからは、考えられない行動は、わたしの家に入れてもらう為に、

あえてやっているように思えて、仕方ありません。

母がかなり酔っ払って帰って来る事は、結構あるので、

かなちゃんの飲んでいる量は、

あんなになる程の、量ではないと思うんです。

これは、かなちゃんがわたしのメールを見た上で、仕掛けてきた行動なんじゃないか、と思いました。

でも、もうわたしは昨日、どうするかを決心はついています。

かなちゃんが、どういう意図でこんな事をしたのかも、全てを明らかに出来れば、一緒に判るはず。

わたしは、へらへらしているかなちゃんの隣へ座って、まず、両肩を掴んで正面を向かせました。

わたしのこの行動は、かなちゃんには予想外だったらしく、一瞬ですけど、素で驚く顔をしたのが分かりました。

わたしは、まず酔っ払っているのは演技で、大して飲んで無いのは判っている、と伝えました。

でも相変わらず、演技を続けるかなちゃんに、今度は、何であんなに付き合う人を増やすのかを、尋ねました。

この質問にも、まともに答えようとはしませんでした。わたしから、視線を外す回数と、時間は増えたと感じて、つづけて、前になかちゃんの家でも聞いた、家政婦の佐藤さんは、かなちゃんにとってどういう人だったのかを、もう一度、ここで聞きました。

すると、かなちゃんは、わたしから完全に視線を合わせないように、俯いてしまい、何も言わなくなりました。

その態度に構わず、更にわたしは、体育祭での保健室での、あの一言、あれは一体、何をわたしに言おうとしたのかを、問いたですと、やはり俯いたままで、質問を無視しているように見えました。

わたしが、更にもう一言言おうとした時、かなちゃんは、わたしが掴んでいた、両肩の手を強引に払いのけて、不意に立ち上がりました。

立ち上がった、かなちゃんの表情は、  
今まで一度も見たことない顔、無表情でした。

かなちゃんは、わたしを無表情で見下ろして、  
無言でしばらく立ってました。

「判らない」

無表情のまま、かなちゃんは一言つぶやいて、  
その後、一気に喋りだしました。

「どうして？」

どうしてみなもちゃんは、

あたしになびかないの？

なんであたしの思ったようにならないの？

もうあたしにはどうしたらいいか判らないよ。

あたしはこんなに努力しているのに。

こんなに色々してあげているのに。

どうしてみなもちゃんはあたしの事を好きにならないの？」

このかなちゃんの言葉は、わたしには意外に感じました。

わたしがかなちゃんの事を好きでないとと思って、  
悩んでいたかのような、その内容に。

でも、わたしの探るような行動が、

かなちゃんとしては、『なびいていない』、

『好きではない』と感じたのでしょうか。

わたしは、もう迷わないと決めていたので、

かなちゃんを見上げて、しっかりと目を見ながら、それは、かなちゃんが本心をわたしに見せてくれないから、と言いました。

本当の気持ちや、感情を見せてくれないければ、わたしは、かなちゃんにはなびかない、と。

かなちゃんはそれを聞くと、ちょっと可笑しそうにして、「何を言っているか判らないよ。」

これがあたしの本心だよ。

たくさんの子と付き合って、人脈を広げて、色んな子から、情報を貰うんだよ。

それは多ければ多いほど、

もっと大勢の子達があたしの情報目当てに、あたしの言う事を聞くようになるんだよ。

これがあたしの本心、目的だよ」「と、自慢げに言いました。

これは嘘だ、これは本心なんかじゃなくて、かなちゃんの本心を隠す、最後の仮面なんだと、わたしの直感が、そう告げています。

これを、剥ぎ取らなくちゃいけない！

かなちゃんは、今口走ったことが、理由だと思わせようとしているけど、

本当は何で、人より上位に居ようとするんだらう？

それは逆に言えば、かなちゃんは、他の人より下に居たくない、というよりも、下位になるのを恐れているのか？

家政婦の、佐藤さんが居た時までは、  
実の親よりも、直接的な愛情をかけてくれた存在で、  
言ってみれば、親代わりをしてくれたのに、  
佐藤さんは居なくなり、  
かなちゃんも、独りぼっちになってしまった。

その心の穴を埋める為に、安心して甘えられる相手を求めて、  
かなちゃんは、友だちを増やして探し始めたけど、  
そうやって増やした友だちは、みんな自分を頼るばかりで、  
逆に、かなちゃんが甘えられる側になってしまった。

そうしているうちに、  
自分が甘えることが出来る、相手を探す為の行動は、  
こうした自分を頼ってくる知り合いを、  
増やす行動でしかなくなってしまい、  
それだと、自分を頼る相手、自分より下位の相手では、  
自分が甘える事は出来なくて、  
更に、別の甘える相手を探し続けた。

それが続くうちに、だんだんと、  
この、多くの人から頼られる事自体が、  
かなちゃんにとっても、心を満たす行為へと変化してしまった。

そして逆に、本来の目的のはずだった、  
自分が甘えられる相手の存在は、  
それが現われてしまうと、この取って代わった、  
間違った充足感を、否定してしまうことになるから、  
本当の本心では、望んでいたはずのそれを、  
逆に、受け入れたくないものへと変わってしまった。

だから、かなちゃんの仮面は、その感情を否定したけど、隠されてしまったかなちゃんの本心は、やはりその存在を求めていて、そのジレンマが、わたしに対するかなちゃんの行動として、現われていたんだ。

つまり、わたしが、

かなちゃんの本心が求めていた存在なんだよ！

だから、かなちゃんは、わたしがかなちゃんを、良く思わないタイプの人間だと、判っていたのに、どうしても気になって、

わたしの気を引こうとして、かまい続けたんでしょ？

でもどうしても、他の人みたいになびかないから、また別の手段で気を引こうとして、ここへ来た、わざわざそんな小細工までして。

本心じゃない性格を否定されるから、今のかなちゃんにとっては、わたしが怖いんでしょ？

でも、本当のかなちゃんは、わたしを呼んでいるんだよ、わたしは、わたしを呼んでいるかなちゃんに会いたいんだよ！

わたしの言ってること、何か間違ってる？

間違っているなら、なんか言ってみなよ！

どうなの、かなちゃん！



わたしはかなちゃんに、思っていた全てを、何もかもぶつけた。

確信がある事も、推測でしかない事も、希望でしか無い事も、みんなひっくりかえして、思っていた事を全部、かなちゃんに、叩きつけました。

まくし立てているうちに、良く判らないけど、涙が出てきて泣いてしまったけど、ずっとかなちゃんの目から、視線は外さないように頑張った、

言い終わった後も、視線をそのまま逸らさずに涙も拭わず、かなちゃんを睨み続けました。

かなちゃんは、わたしがまくしたてている間、ずっと黙って話を聞いていました。

でもその表情は、もう無表情ではなくて、明らかな敵意を感じるほどの、怒りの表情に変わっていました。

たまに見せていたような、冗談で怒って見せていたような顔ではありません。

今のかなちゃんからは、何をされるか判らない怖さを感じましたが、でも、ここまできたら、わたしも引く事は出来ません。

視線を外さず、その威圧するような鋭い眼差しに対抗して、必死に、睨み返していました。

「……そこまで言うのなら、  
それなりの覚悟は出来てるんだよね、  
みなも」

かなちゃんは、押し殺したような声で、  
わたしを呼び捨てで呼んで、言いました。

もう完全に、私を知る普段のかなちゃんとは別人でした。

とても怖くて怖くて、さつきから涙は止まらないし、  
体の震えも止まらないけど、  
わたしだって、決心したんです、決して引きません！

わたしはかなちゃんに、頷き返しました。

「なら、その証拠を見せてもらうよ」

そういうと、かなちゃんは、わたしに掴みかかってきたんです。

その力が外見とは違って力強くて、  
わたしは後ろに敷いてあった布団の上に、押し倒されました。

かなちゃんは、わたしに馬乗りになっていて、  
両手も、かなちゃんに押さえつけられてしまい、  
身動きが出来なくされてしまいました。

かなちゃんは、わたしを押さえたまま、

「みなもの望む、本当のあたしを見せてあげるよ、

その代わり、みなもが持っているもの何もかも全部、

あたしが貰うよ、それでもいいいね？」

と、言いました。

わたしには、全てってという言葉の意味は、文字通りの意味で、心も体も、という事なんだと思って、聞いていました。

こういう展開は、全然想像していなくて、きつと殴られるとか、叩かれるとかだと思っていたから、予想外の出来事で、とても驚いてしまい、この時即答出来ず、口ごもってしまいました。

かなちゃんは、返事しないわたしを見て、

「どうしたの？

出来ないの？

早く答えなよ」

と、押さえる手に力を込めて聞いてきました。

この時には、もう涙は止まっていて、怖さから来ていた震えも収まっていたのに、何故か、腕やお腹には、かすかに震えを感じていました。

それは、かなちゃんの体からでした。

かなちゃんに押さえられている腕と、  
乗られているお腹から、

かなちゃんの震えが、伝わってきていたんです。

この時、わたしは気づきました。

かなちゃんもまた、わたしと同じ様に、

後には引けない、賭けに出たんじゃないかって。

かなちゃんの表情には、良く見れば、不安とや恐れともとれる、こわばった顔で、わたしを睨んでいました。

かなちゃんの覚悟を見たわたしは、もう、最後の迷いを完全に捨てました。

わたしがここで、かなちゃんの言う通りになれば、きつとかなちゃんは、素直になってくれる。

逆にここで裏切れば、もう二度と、誰も信じないかも知れない。

わたしの答え1つで、

かなちゃんの人生が、全く変わってしまうかとも思えば、かなちゃんに何をされても、

それで、かなちゃんが心を開くのであれば、

大した事はないのではないか。

わたしは、逆らう様に力を込めていた両腕から力を抜いて、かなちゃんに、わかった、いいよ、とだけ、伝えました。

かなちゃんの表情は、驚いてたらしく、

一瞬目を見開いた後、すぐに元へと戻り、わたしに対して、

「じゃあ、目を閉じて、何をされてもじっとしていてとだけ、わたしに言いました。

正直言って、こういう時に、どうしたらいいか判らなかつたから、わたしは頷いて、目を閉じて、全身の力を抜いて、

後は、全てをかなちゃんに委ねました。

かなちゃんは、わたしが目を閉じたのを確認してから、押さえていた腕を離して、わたしの体の上に乗ったままで、太ももの上あたりまで下がっていき、

わたしの胸の上に頭を乗せる様に、重なってきました。

わたしは、いよいよ始まるのか、と、

出来るだけ、体に力を入れないようにして、待っていたのですが、かなちゃんは、それっきり動かなくなりました。

時間にして10分くらい、黙って待ってみても、相変わらず、かなちゃんは動く気配がありません。

どういふことかを、かなちゃんに聞こうと思い、かなちゃんを呼ぶと、

「みなも、

鼓動が早いよ。

これじゃ眠れない。

もっと遅くして」

と、だるそうな、かなちゃんの声。

かなちゃんの、この言葉で、先程までの行動は全部、わたしに対する、最後の反撃だった事がここで判りました。

わたしがその事を理解して緊張が緩むと、

わたしの鼓動も落ち着いてきたようので、

「やっと、ゆっくりになってきた。

これでやっと眠れる。

おやすみ、みなも」

とだけ言って、かなちゃんはわたしの上で眠ってしまいました。

わたしは、無防備に眠っている、かなちゃんの顔を見ながら、頭と背中をを撫でている内に、いつの間にか眠っていました。

朝になって目を覚ますと、かなちゃんは居なくなっていて、わたしには、布団が掛けられてました。

携帯が光っていたので、見てみると、かなちゃんからのメールが、一件入っていました。

内容は、

「おはよう、みなも！」

昨日は、色々ほんとにありがとう。

みなものおかげで、ほんとにほしい物が分かったよ。

借りた服を返すから、

26日に、泊まりの仕度して、うちに来てね。

待ってます！」

と、書いてありました。

わたしは、自分のした事が正しかったんだと、

ここで実感する事が出来ました。

そう思ったら、

朝から1人でめっちゃめっちゃ泣いてしまいました。

なんか色々あって、

途中どうなるかと思ったけど、

最後は上手くいったと思います！

本当に本当に良かったです！……！！

2009年 9月 その3 (前書き)

変更履歴

2011/01/03	誤植修正	以外	意外
2011/01/03	誤植修正	生卵イ以外の	生卵以外の
2011/03/29	記述統一	一週間、二日間、三時間	
1週間、2日間、3時間			
2011/04/10	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3	
年 一年生、二年、高校三年			
2011/04/19	記述統一	(期間)一日、二月、三年	
1日、2月、3年			
2011/05/07	記述統一	一階、二階、三階	1階、
2階、3階			
2011/07/12	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			
2011/08/30	誤植修正	位	くらい



2009年 9月 その3

9月26、27日 かなの家に泊まりました

シルバーウィークも終わり、

あの日から、4日が経ちました。

学校が始まると、かなちゃんは今まで通りで、特に変わりはない様に見えました。

わたしから、何かを言い出すのもあれなので、メールにあった通りに、26日を待ってみる事にしました。

そして今日、バイトはちょっと早めに6時で上がって、家に着いたら、着替えと多分貸した服も返してもらえるから、それも入るくらいのバッグを持って、かなちゃんの家に向かいました。

かなちゃんの家には、7時に着きました。

家は、前と変わらず、駐車場には車はなくて、多分、かなちゃんしか居ないんだろうなど、思いつつ、呼び鈴を押しました。

ドアホンから、かなちゃんの声で、

「開いてるから、上がって来て」

との返事があり、わたしは遠慮無く中へ入りました。

かなちゃんは、ちょうど玄関奥の廊下に出てきた所で、

わたしの姿を見て、玄関へと走ってきました。

今日のかなちゃんの格好は、  
上は短い丈のパーカーで、下はショートパンツの、  
もこもこしてて、あったかそうなルームウェアでした。

髪やメイクは、何もしていなくて、  
完全な、すっぴんです。

走って来たかなちゃんは、そのままの勢いで、  
「みなも！」  
と叫んで、わたしに抱きつきました。

わたしはその勢いで、閉めた玄関のドアに、  
頭をぶつけてしまいました、  
そんな事よりも、このかなちゃんのキャラを、  
どう理解すればいいのかを考えるので、  
わたしの頭は、いっぱいいっぱいでした。

かなちゃんは、そんなわたしにはお構いなしで、  
わたしをキッチンへと連れて行き、

「みなも、  
ごはんを作って欲しい！」  
と言い出しました。

わたしは、何も買って来てないから材料がない、と言うと、  
かなちゃんは、うちの4倍以上ある、大きな冷蔵庫を開けて、  
中を見せました。

そこには、どこかの料理番組かと思うような、

色々な食材が入っていました。

「材料なら、用意してあるから大丈夫。  
好きなだけ使っていいから、

晩ごはんを作って欲しいんだよ、

あたしも手伝うから」

と、かなちゃんに、手を合わせてお願いされました。

ここでわたしは、

今日の、ここまでのかなちゃんの態度と、

シルバーウィークの時の、最後のかなちゃんの行動を、  
合わせて考えてみました。

何となく、幼児化しているような、そんな感じですよ。

多分、かなちゃんは、あの日の夜から、

かつて家政婦さんが居た頃の年に戻っていて、

前の時の続きが、この家に入った時から始まったのかな、と。

そして、わたしは家政婦さんの代わりなのでは、  
と理解しました。

あの夜に、かなちゃんに対して約束した、

わたしの言葉に二言はありませんから、

そういうシチュエーションだと、理解したからには、

わたしもそれに応じる事にします。

ここで、わたしは自分も思考を切り替える意味で、

この家でのかなちゃん呼び方を、『かな』に変えました。

かなに、いいよ、じゃあ一緒に作ろう、と言って、  
何が食べたいかを尋ねると、笑顔で、  
「ハンバーグとカレーライスがいいな」  
とのこと。

…… 太りそうだけど、大丈夫だろうか、と、  
気になりましたが、今のかなに、  
それを言っても意味が無いなと思い直して、  
早速、料理に入りました。

料理はわたしの得意、と言うか、普段からしているので、  
問題なく、かなの手伝いも、性格こそ幼児化してますが、  
そういう腕は変わらないよね、と思っていたら、  
どうやら、かなは料理出来ないみたいで、  
わたしから見ると、手伝う様子も小さい子のようで、  
危なっかしくて、目が離せませんでした。

もしかすると、ここも含めてのかなの演技だったのかも。  
とにかく、ちょっと時間はかかったけど、  
注文の品の、ハンバーグとカレーライスが出来ました。

カレーは、もちろん甘口です。  
作った料理を、テーブルへと運び、  
2人で向かい合ってではなく、並んで席に着いて、  
夕飯を食べました。

やはり食材の違いか、いつも家で作って食べるのとは、  
味が違っていて、とても美味しいです。

でもそれだけじゃなくて、美味しそうに食べている、かなの姿を見て、やっぱり、誰かと一緒にご飯を食べるのが、一番の理由だなあと、しみじみ感じました。

かなも、夕飯には満足してくれた様で、残さず食べてくれました。

食器を洗って、後片付けが終わってから、かなが、デザートが食べたいと言うので、冷蔵庫にあった、高そうなフルーツを、適当に片っ端から、皮をむいて一口サイズに切って、大きなお皿に、山盛りにして出しました。

その後、飲み物を持っていくと、居間のソファで横になって、こっちを見ていたかなが、手招きして、こっちへ来いと意思表示していました。

わたしが、寝ているかなを避けて頭の隣に座ると、かなは、わたしの膝の上に頭を乗せてきて、

「リンゴ」

と言っ、口を開けています。

ああ、今度は食べさせて欲しいのかあ、ほんとに甘えん坊だなあ、

とか思いつつ、切った果物の中からリンゴをフォークに刺して、かなに食べさせてあげます。

食べ終わると今度は、

「マンゴー」

と、次を要求してきたので、

それは切ってないよ、と言うと、

「うそ、ちゃんと見てたもん」

と見抜かれました。

どうやら、何を切ったのかを、

しっかりチェックしていた様です。

それとも、わたしが高そうなのは、

出してくると、心を読まれたのかも？

ま、なんにせよ、それもかなの口に放り込みました。

「パイナップル」

「キウイ」

「メロン」

「バナナ」

「なし」

この後も、しばらくかなは果物の名前を次々と言っては、口を開けて、まるでツバメの雛のようでした。

わたしも、適当に果物をつまみながら、ふと時計を見ると、もう10時になっていました。

かなも時計を見ると、起き上がって、

「みなも、お風呂入ろう！」

と、わたしの手を引っ張って、お風呂へ向かいました。

途中で、わたしのバッグを拾い、そのまま洗面所まで連行されたので、言うまでもなく、一緒に入るんだな、と理解しました。

プールとかの着替えで、見られているとはいえ、同じ女同士だけど、2人だけの状態で、裸を見られるのには抵抗があっただんですが、『かな』には、そんなわたしの気持ちは関係なく、さっさと全部脱ぐと、わたしを見て、

「早くしなよ！」

と、ふくれっ面で、せかすだけでした。

ここでかなの裸を、否応なく見ました。やっぱり、予想通りのスタイルで、そんなのを見せつけられたら、余計自分が惨めで、脱げないじゃないか……

と、へこむわたしに、全くかまわず、横でずっと、

「早く！」

を、連呼しつづけています。

もう、いいや！ とわたしも開き直り、隠すべきところは、それとなく隠しつつ、さっさと服を脱いで、かなに引っ張られながら、お風呂へと入りました。

前に来た時は、洗面所もここも見なかったので、その広さに驚きました。

バスタブも大きくて、ジェットバス付きです！

シャワーもなんか変わった形をしていて、好きな高さで、止められるようになっていたり、出てくるお湯の色が、随分白いなあと思って見ていたんです。

それを見ていた、かなに、

「これ、マイクロバブルなんだよ」

と言われましたが、それは一体何でしょう？  
つていう顔していたら、

「ま、普通のお湯と思っていいから」

との事なので、あまり気にしないでおきました。

体と髪を洗った後、

体を流す時に、シャワーを浴びると、

お湯が何だか、柔らかいと言っか、

なんかちよつと、手触りが違うと感じました。

これが、マイクロ何とかの効果かあ、

なんかいいなあ、と思いました。

そして、バスタブに入ると、

早速、かなはスイッチを入れて、

あつという間にお湯は真っ白になって、

あちこちから水流が。

ジェットバスは、とても気持ちが良いです……

わたしが思わずまどろんでいると、

その隙について、かなが横から抱きついて来て、



その勢いでわたしは水没してしまい、溺れるかと思いました。

顔を上げて、かなっ！と言って叱ると、ちよつと、しゅんとなって、

「ごめんなさい」

と素直に謝ったのがちよつと可愛くて、もう許した証に、頭を撫でておきました。

お風呂には言っている間も、かなはずつと、わたしにくつついていました。

お風呂の中では、わたしの意識は半分くらい、どこか遠くへ行ってしまうていて、何度かかなに呼ばれて、現実へと戻されました。

このお風呂は、とっても気持ち良かったです……

わたしは長風呂なので、1時間以上普通に入っただけですが、かながそろそろ出よう、と言つので、ちよつと名残惜しいけど、お風呂を出ました。

お風呂から上がって、

わたしもかなもパジャマを着て、居間に戻ると、11時になっていました。

今度はソファに、2人とも普通に座り、さつき切った、フルーツの残りを食べながら、何となくテレビを眺めつつ、髪を拭いて乾かしてました。

かなが、わたしの髪をバスタオルで拭いていて、  
ときどき果物の名前を言うので、  
わたしが、それをあげてました。

髪も乾いて、そろそろ12時になり、  
わたしは眠くなったので、  
かなに、そろそろ寝よう、と言うと、  
ちよつと、嫌そうにしていました。

そこで、わたしは言い方を変えて、  
ベッドでお話しようよ、と言って、  
かなをなだめて、ベッドへと行きました。

もちろん、寝る場所は、かなの部屋にある、  
あの大きな正方形のベッドです。

これなら、3人くらい眠れそうな広さだと思ったけど、  
予想通り、かなはわたしに抱きついてきて、  
うちの時と同じで、わたしの心臓の音を聞くように、  
くつつかれてしまったので、  
ベッドの大きさはほとんど関係なかったです。

でも、うちのせんべい布団とは大違いで、  
このベッドはふかふかで、素晴らしい寝心地でした。

かなは、ベッドに入ってからずっと、  
わたしを逃がさないかの様に、両腕でわたしにしがみついて、  
離れない様にしていました。

わたしは、かなの頭と背中を撫でてやりながら、

今日この家での出来事を、思い返していました。

きっと、今日わたしが見たかなが、昔家政婦さんがいて、今みたいに装う事なんて、知らなかった頃のかなで、それをわたしに見せてくれたんだらう、と思いました。

その代わりに、わたしに、

その本当のかなを、受け止めて欲しかったのかなあ、と。

家が上がってから、かなの行動を考えた後に、ふと思い出していたのは、亡き父の事です。

父はわたしに、何をしてくれていたっけと、思い返してみると、特に褒められたりした記憶は無く、いつも父は、わたしが抱きついたり、しがみついたりするのを受け止めてくれて、何かにつけて、頭を撫でてくれました。

どんな言葉よりも、受け止めてくれるスキンシップが、わたしには一番嬉しかったんです。

だから、今のかなにも、それをしてあげるのが、良いんじゃないかと思って、やってみたんです。

わたしとしては、精一杯やったつもりだけど、どうだったのかなあ……

幼いかなが、納得するだけの愛情、と言つと、なんか恥ずかしいし、おこがましいけど、かけてあげられたのかなあ、と考えていたら、

いつの間にか、眠ってしまいました。

翌朝、わたしが目を覚ますと、  
かなは、わたしにしがみついているのはいなかったけど、  
布団の中でくっついて、まだ眠っていました。

とても、幸せそうに眠っているの、  
そのまま動かずに、周りを見ると、  
外は良い天気、窓から差しす光で部屋が明るいので、雨戸とか、  
カーテンとか開けたのかなと、疑問に思っていたら、  
かなが目を覚まして、もぞもぞ動きました。

かなに、おはよう、と言うと、

「…おはよう、みなも、…おやすみ」  
と言って、また寝てしまいました。

わたしは目覚めが良くて、一度目が覚めると、  
もう眠れないけど、かなにくっつかれて身動きも出来ず、  
仕方なくそのまま部屋を見回しながら、ぼーっとしていました。

それにしても、この家は大きいです。  
うちとは、比較にならないくらい大きさです。

こんなに広い家に、いつも1人きりでいたら、  
どれだけお金があっても、  
やっぱり、どこか変になってしまいうんじやないだろうか。

その結果が、かなの場合は、  
人集めに繋がったんじゃないかなあ、  
と、今までの経緯を思い起こして、考えていると、

かなは、また目を覚ましました。

「…みなも、おはよう」

今度は、起きる気があるようですが、  
低血圧なのか、朝は弱いようで、  
なかなか布団の中から出てきません。

眠気と戦っていたかなは、  
5分くらいかかって、やっと布団から顔を出して、  
わたしに並んで、枕の上に頭を乗せました。

かなは、独り言の様に、上を見たまま、

「昨日の事は、夢じゃなかったんだ」  
とつぶやきました。

わたしは、かなの頭に手を乗せて、  
何も言わずに撫でてあげました。

しばらくゆっくりしてから、ベッドから出て、  
朝食を食べる事にしました。

キッチンへ行く途中で、窓の事を聞いてみると、  
この家は、雨戸が全自動で開閉するのだそうです。

そんな仕組みがあるのを、  
生まれて初めて、わたしは知りました。

もうここまで来ると、

この家に地下シェルターがあるって言われても、

多分、信じられます。

時計を見ると、時間は9時前で、意外に早いなと思いました。

さて、朝ごはんです。

かなに、オーダーを聞くと、

「和食が食べたいな」

との仰せなので、旅館の朝ごはんのようなの？と聞くと、

「みなもの家の朝ごはんがいい」

と、言われて、わたしは自分の家の朝食を考えました。

なんか貧相だけど、大丈夫かなあ……

まあ、いいや、気に入らなければ何か追加して作ればいいし。

わたしはご飯を炊いて、

お味噌汁と、目玉焼きと、ほうれん草のお浸しを作って、

キッチンから、おかずになりそうなものを探して、

お漬物と、味付け海苔と、生卵と、納豆と、

キムチを用意しました。

これだけ出せば、好き嫌いがあっても、食べられるでしょう。

ちなみに、うちの場合は、

ご飯とお味噌汁と、この中のうちどれか一品だけが、

朝食のメニューです。

かなは、予想外と言わんばかりの顔で、

テーブルを見てから、

「いつもこんなに食べてるの？」

と尋ねてきたので、

おかずになりそうなものを全部出したんだよ、と伝えて、

好きなおかずだけ食べてくれればいいよ、と

答えました。

かなが手をつけないおかずを、わたしが食べれば、

ちょうどいい量のはずです。

かなは、生卵以外のおかずを、ちょうど半分ずつ食べました。

わたしも同じ様に、生卵以外の残りを全部食べて、

卵は冷蔵庫に戻しました。

朝食の後片付けが終わって、

居間でソファーに寝転がっているかなに、今日の予定を尋ねました。

無邪気にニコニコしていたかなは、この質問を聞いて、

ちよつと寂しげな顔になり、

「出来れば、今日の夜までいて欲しい。

家にはちゃんと送るから。

それとも、なんか用事とかあるの？」

と半分懇願する様に、軽く涙目になって答えました。

わたしは、かなの方に、

何か予定があるんじゃないかと思って聞いたのに、

質問の意味を、わたしがいつ帰っていいかを、

確認したいのだと、とられてしまいました。

そんなつもりで聞いたんじゃないんだけど、  
元々、今日の予定も無いので、  
わたしは余計な事は言わずに、  
ただ、分かった、いいよ、とだけ答えて、  
これから何をするのか尋ねて、  
話題を変えました。

かなはそれを聞いて安心したようで、  
元の調子に戻って、

「みなもは何かしたい事ある？」

と聞かれて、わたしはつい、即座に、

「お風呂入らない？」

と、口走ってしまいました。

あのお風呂は、是非とももう一度入ってきたかったです……

「そんなにみなも、あのジャグジーに入ったの？」

かなは、少し意外そうにしていますが、

何か思いついたようで、ニヤニヤしながら、

わたしを連れて、3階へと上がりました。

かなが案内した先は、別のお風呂でした！

この家には、お風呂が各階にあるそうです！

1階のは、ゲスト用の普通のサイズのお風呂で、  
2階が、昨日入った、

ジェットバスのマイクロ何とかのジャグジーで、

3階は、2階のよりは狭いけど、

2人で入ってもちょうど良くらいの大きさで、



こっちもジェットバスで、天井がガラス張りでした！

更に、3階は、家の真ん中が、  
部屋に囲まれた、ウッドデッキになっていて、  
お風呂から、直接そこに出れます！

更に更に、ウッドデッキの真ん中には、  
何と、大きな木が生えてました！

このウッドデッキから、屋上の4階に繋がる階段もあって、  
もう、すごい一言しか、思いつきません。

「今日は天気がいいから、こっちのジャグジーに入って、  
そこでお昼食べようよ」

かなの申し出に、わたしは即座に頷きました。

こっちのジャグジーも、昨日のと同じマイクロ何とかの、  
白いお湯で、とても良い感じですよ。

空を見上げると、青空が見えて、  
とっても快適なお風呂ですよ。

そんな、すっかり呆けているわたしに、  
かなは満足そうな笑顔で、隣でこっちを見ながら、  
「お風呂で誘っていたら、

みなもも、なびかせる事が出来たのになあ」  
と、この時だけは普段のいたずらっぽい目つきで、  
耳元で囁いていました。

わたしは、かなに、そんな事は無いよ、  
と言っておきましたけど、  
内心、確かにこの誘惑があったら、危なかったかも……

ジャグジーから出た後、お昼の準備に入りました。

お昼は、ウッドデッキに設置してある、  
ガス式のバーベキューコンロで、  
バーベキューをやる事にしました。

2階の冷蔵庫から、肉や野菜を適当なサイズに切ってから、  
ウッドデッキへと運んで、  
適当に焼いて、好きなように食べました。

今までバーベキューなんてした事無かったけど、  
やっぱり、家の中で調理するのは違って、  
みんなで外で焼いて食べるのは、楽しいんだなと思いました。

それと、やはり食材がかなり高級なので、  
下手な味付けをしなくても、美味しかったです。

お腹もいっぱいになって、  
使ったバーベキューコンロを見ながら、  
これも洗わないとなあ、  
と考えていると、かなが、  
「みなも、これは洗わなくていいよ。

家事代行の人にやってもらおうから」  
とのことなので、適当に片付けておきました。

その後は、ウッドデッキに置いてある、

デッキチェアに寝そべって、まったりしていました。

今日はきれいな絹雲が点々と漂う晴天で、  
日差しがあつたかくて、風はちよつと涼しくて、  
絶好の昼寝日和です。

四方を壁に塞がれているせいか、  
雲は、かなりの速さで流れていただけ、  
強い風が吹き込むこともなくて、  
ここは快適でした。

かなはここでも離れたくないのか、  
並んでいたデッキチェアを、隣にくつつけて並べて、  
わたしの手に、手を重ねてきたので、  
わたしは、かなの手を握っていてあげました。

ここでは、特に話すでもなく、  
半分うたた寝しながら、過ごしました。

わたしは時々、かなの方を向いて、  
その様子を確認すると、  
わたしの手を両手で握って、  
こちらに体を向けて、すやすや眠っていました。

わたしはこの時に、昨日から一度も、  
かなが何の説明もしないことを、考えていました。

あえて説明しようとしていないのだから、  
わたしからは、かなに尋ねないでおこうと思い、  
その事は、全く話題に出さないようにしていました。

きつと、話さないのにも何かの理由があるんだろうから、  
かなが自分から教えてくれるまで、  
わたしからは聞かずにいよう、と決めました。

やがて陽も傾いて、夕方になりました。

目を覚ましたかなに、そろそろ部屋に戻ろうと伝えて、  
2階の居間へと戻ってきました。

わたしは、約束の時間が近づいていることには触れずに、  
晩ごはんはどうしようか、と尋ねました。

すると、かなは、

「みなもの好きな料理って何？」

と逆に聞かれて、わたしはちょっと考えて、  
料理じゃないけど、お刺身かなあ、と答えました。

わたしは、食べられれば何でも良いたちで、  
普通の食事には、好きも嫌いもあまり無いんです。

かなはそれを聞いて、

「じゃあお刺身にしようよ」

と言って、晩ごはんが決まりました。

冷蔵庫にあった食材から、魚類のパックを開けまくって、  
大きなお皿に、大根のつまを敷いた上に、  
切った切り身を並べていき、居酒屋さんの、  
刺身盛り合わせみたいのに、してみました。

ウニとか、イクラとか、大きなカニとか、大きなエビとか、高そうなのもみんな、構わず載せました。

それと、ごはんを炊いて、

適当に野菜を使って、海草のサラダも作り、アサリの味噌汁も作りました。

また、果物も切ろうとした時に、

「昨日は出さなかったんだけど、実はケーキがあるから、今日はデザートそれ食べようよ」

と言うことなので、デザートは用意せずに、作ったものをテーブルへ並べて、2人で食べました。

カニは食べてる間、殻から身を出すのに夢中になって、やっぱり、2人とも無言になってしまいました。

晩ごはんも食べ終えて、わたし食器を洗おうとすると、

「それはサービスの人に任せればいいから、

それより早く、ケーキ食べよう」

と、わたしを引っ張るので、使った食器は流しに出しておいて、冷蔵庫の奥に入っていた、

1ホールの、随分豪華な箱に入ったケーキを出しました。

かなの話では、そのケーキは以前に学校でわたしにくれた、

一口サイズのお菓子の、元になったケーキだそうで、

外見はバイクドチーズケーキで、切ってみると中身は、レアチーズケーキになっているケーキです。

例の、チーズケーキ同好会から送られてきた物だそうで、まさに、外はサクサク、中はとろけるチーズケーキです。

貰ったお菓子も、結構美味しかったけど、  
こっちは、もっと美味しかったです。

あの豪華な包装紙からして、かなり高そうだなあ、  
と思いました。

ケーキを食べながら、ちらりと時計を見ると、  
ちょうど8時でした。

もうちょっとだけ、様子を見てみるかな、と思っていると、  
かなの方から、

「そろそろ、約束の時間だね。

帰りはタクシーで送るよ。

だから、そんなに急がなくても大丈夫だけど、

もう、帰る？」

と、ちよつと寂しそうな顔で、わたしに告げました。

わたしは、ケーキを最後のひとかけらを食べてから、  
かなの為が半分、残りは自分の欲が半分の気持ちで、  
かなに、お風呂入っていくよ、と伝えました。

わたし達は、お風呂に入り、

またしてもわたしは、

ジェットバスと、マイク口何とかの虜になっていました。

かなは、そんなわたしを、

今までとは、ちよつと違う表情で見っていました。

お風呂を出て、昨日とは違い、

わたしは来た時の服を着て、居間に戻ってくると、9時を回ったところでした。

かなはわたしに、居間で待っててと言うと、別の部屋へと向かい、

わたしは言われた通りに、居間で、バッグを持って待っていました。

しばらくして、かなが居間に戻って来て、まず、貸していた服を返してもらいました。

ただの地味な部屋着なのに、クリーニング屋さんの袋に入っていたのには、ちょっと驚きました。

その次に、かなはわたしをキッチンへと連れられて行くと、そこにはかなが用意したらしい、

大きなクーラーボックスが、テーブルの上に置いてありました。

「借りた服のお礼って訳じゃないけど、

冷蔵庫の中のもの、好きなもの持って行って欲しいんだ。

うちじゃ、誰も料理する人もいなくて、

捨てるだけになっちゃうから」

と、かなは言いました。

わたしは、用意してもらったクーラーボックスに、高くて賞味期限が早そうで、

そのままでは、食べられない食材を中心に、

クーラーボックスに入りきる程度、ありがたく頂きつつ、残っている食べ物も、食べられそうなものは、

出来るだけ食べるんだよと、かなに言つと、  
「うん」  
と、素直に頷きました。

その後に、クーラーボックスを運ぼうとしたら、  
入れ過ぎで、かなりの重さになってしまい、  
持ち上がらず、かなにも手伝ってもらつて、  
2人で持つて、玄関まで運びました。

ちよつと恥ずかしかつたです……

わたしが自分のバッグを玄関へと運んでいる間に、  
かながタクシーを呼んでくれて、  
後は、タクシーの到着待ちになりました。

玄関で、かなはわたしに

「みなも、昨日からずつとあたしに付き合ってくれて、  
ほんとにほんとにありがとうね。

みなもの、あの時の言葉は、

嘘じゃなかつたつて、良く分かつたよ。

また、お願いになつちゃうんだけど、

もうちよつとだけ、付き合ってもらいたいんだ。

もう、ダメ、かな？」

と、とても自信なさげで、寂しそうに尋ねてきました。

この時のかなは、本当に幼い子のように、  
わたしには、小さく見えました。

わたしは、何となくですが、この時のかなは、  
家政婦の佐藤さんが、もう来なくなると知つた時と、



同じ感情だったのでは、と、何となく思いました。

そんなかなを、わたしは、おいで、声をかけて、そばに来たかなを、強く抱きしめてあげて、いいよ、と伝えました。

かなは、一言、

「ありがとう」

とだけ答えて、わたしの力に負けなくらい、強い力で、わたしに抱きついてきました。

これで、幼い頃のかなの悲しい記憶を、塗り替えてあげられたかな、と思い、かなの負った心の傷が癒されることを、わたしは心から願いました。

しばらくしてから、わたし達はお互いの腕を解いて、離れると照れてしまって、どちらからとも無く、2人して笑ってしまいました。

そうしていたら、タクシーが到着して、わたし達は、家の前のタクシーへと向かい、わたしはタクシーに乗り込んで、クーラーボックスは、運転手さんに運んでもらいました。

かなは家の門のところで、わたしを見送ってくれました。

20分くらいで、わたしの家の前に着くと、クーラーボックスを、

また運転手さんに、家まで運んでもらいました。

こうして、長かったような、あっという間だったような、ある意味、夢のような豪華な暮らしだった、かなの家での、1泊2日のイベントは終わりました。

後から思えば、もっと上手くやれたんじゃないかと、思うところもあったけど、

かなの最後の言葉で、かなの期待に応えられたんじゃないかな、と思えて、改めて本当に良かったと思いました。

これから、もうちょっと付き合っただけ、と言った、かなの言葉を考えてみると、

この2日間のかなは、家政婦さんがいなくなった頃のかなに、戻っていたんだと思います。

きっと、かなからすると、

小学校低学年から、高校一年になるまでの7年分、今までもらえなかった、愛情を取り返す為の、

言ってみれば、『リハビリ』の始まりで、

これからそれが、進んでいくのではないかと思います。

後何日必要なのか、分からないし、

どうなっていくか、想像も出来ませんが、

わたしは、かなの考えたそのプランに、

最後まで、かなが納得するところまで、

付き合っただけ、と思います！

9月30日 あれからのかなちゃん

色々な事があつた、週末も終わって、  
普段の学校生活に戻りました。

学校でのかなちゃんは、まだ前と変わらない様子だけど、  
でもきつと、かなちゃんなりの考えがあつて、  
これから、だんだんと変わっていくのだと思います。

貰った食材は、うちの冷蔵庫に入りきれなくて、  
あの日から、とても豪華な夕食になって、  
帰って来ていた母が、何かのお祝いだっけ？と、  
驚いていました。

この中のものなら、ヒョウちゃんも食べるかも、と、  
ふと思いついて、今度試してみようと思っています。

かなちゃんからのメールで、  
次のイベントは、今週末にお願いされました。

来月は、もしかすると週末は、  
全部、かなちゃんの家にお泊りかも知れないな……

それ以外にも、10月中旬には中間試験もあつて、  
なかなか、忙しい月になりそうだけど、  
試験の事もかなの事も、

上手くいくようにがんばっていきたいと思います！

2009年 10月 その1(前書き)

変更履歴

2010/09/29	誤植修正	10月17、18日	くすみま
す	くすみま		
2011/01/03	誤植修正	以外	意外
2011/04/10	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3年	
2011/04/16	記述変更	(クラス)1組、2組、3組	
A組、B組、C組			
2011/04/19	記述統一	(期間)一日、二月、三年	
1日、2月、3年			
2011/04/27	記述統一	一種類、二種類、三種類	
1種類、2種類、3種類			
2011/04/29	記述統一	一時限目、二時限目	1時
限目、2時限目			
2011/05/08	記述統一	一階、二階、三階	1階、
2階、3階			
2011/05/17	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/07/13	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			
2011/08/31	誤植修正	位	くらい

2009年 10月 その1

10月2日 夏期講習の時の人を見ました

学校からの下校途中で、夏期講習で見かけた、女の人によく似た人を、見かけたんです。

今月は、冬服に戻す衣更えの月なんですけど、もう冬服着ている人は、ほとんどいなくて、まだ夏服のままか、セーターやカーディガンを、上に着ている人ばかりです。

わたしもまだ、カーディガンで行っています。

そんな中で、

もう、冬服のブレザーを着ていたその人が目にとまって、あの時の人に似てる事に、気がついたんです。

わたしよりも、結構先を歩いていて、他の人に隠れてはつきりと、あの人だとは判らないので、早足で近づいて、確認してみようとしたんですが、かなり近づいたところで、信号に引っかかってしまい、また離されてしまいました。

でも、そこで後姿はしっかりと確認出来て、やっぱり、あの時の人に間違いないのは判りました。

でも、どうしても名前が出てこなくて、ここは、それとなく顔を確認しなくちゃ、と思って、

追いかけたんだけど、もう、その人は駅の目の前で、改札に入っていていつてしまいました。

わたしは急いで走ったら、

駅の階段で転んでしまい、結局ホームに着いた時、ちょうど電車のドアが閉まる場所でした。

その人は、その電車に乗ってしまったようで、もうホームにはいませんでした。

やっぱり、絶対に知っている人なはずなんだけど、どうしても名前が出てこない……

この日は、バイト中もずっと名前が気になってしまって、ちょっと上の空でした。

あの人、どこで見たんだっけなあ……

10月3、4日 かなの家でお泊り、2回目

かなん家の泊まり会の2回目です。

今回は、前に借りた、大きなクーラーボックスを持って、電車に乗るのが無理そうだったので、行きはタクシーの送迎になりました。

今回のかなは、前よりも成長していたようで、前회가、幼児のような甘えん坊なら、

今回は、ちょっとわがままな駄々っ子と言った感じでした。

前回ほど、ずっとはくつつかれもしなかったけど、ご飯を作ってあげたのと、お風呂やベッドが一緒だったのは、前と変わりませんでした。

夕食はかなのオーダーで、ハヤシライスになりました。

なんでも、家政婦の佐藤さんの得意料理だったそうで、かなの採点は、わたしの方がいまひとつだそうです……

これはちょっと、悔しかったです。

この日は、9時くらいにはベッドに入って、そこでかなは、自分の小さい時の話を、わたしに聞かせてくれました。

そこで初めて、両親は子連れのリ婚同士で、2人の兄は父の連れ子で、姉が母の連れ子と言う事や、2人の兄と姉は、実の親のリ婚相手を良く思っていないで、かな以外の兄弟同士は、互いに他人同然で、全く接点を持たなかった事、

そんなバラバラな兄弟を、繋ぎとめようとしていたのが、普段は全く家にいない両親ではなく、

家政婦の佐藤さんだった事、

かなの兄や姉たちは、たまに家にいる事もあったけど、かなを見る目は、言ってみれば半分は実の妹だが、半分は他人の子供、という目で見られていた事、などなど。

家政婦の佐藤さんが、

かなが小学校二年の終わりに、来なくなっただけからは、兄や姉も、だんだん家にいる時間は減っていき、かなは家にいる時は、誰とも話す相手もなく、独りで過ごしていたそうです。

そこで、その代わりに、学校で友だちや、知り合いを増やし始めたのが、今までのかなの、原型になっていったようです。

話し終わった後のかなは、ちょっと涙目だったけど、表情は暗くはなくて、すっきりしたような顔をしていたから、今まで胸につかえていたものを、吐き出すことが出来たんじゃないかと思いました。

一通り話すと、かなは抱きついて来て、そのまま眠ってしまったので、わたしも眠りました。

日曜はあいにくの雨で、起きた時間ももう昼前で、朝と昼のごはんは、ホットケーキを食べて、すぐに2階のお風呂に入って、お風呂から出たら、いい紅茶があると言う事で、その紅茶と、例の同好会から送られてきた、前のは違う、チーズケーキを食べました。

今回のチーズケーキは、一見、普通のレアチーズケーキなんですけど、切った断面を良く見ると、微妙に、三色のマーブル模様になっていました。



それは、異なる種類のチーズを使って作った3種類の中身を、それが完全に混ざらない程度に、混ぜ合わせたケーキで、そのわずかな色の違うところによって、最初は味が変わり、口の中で次第に、3つの風味が混ざり合うという、何とも凝った作りのチーズケーキでした！

この日は夕方に、早めの夕食にして、色んな具の焼き餃子、水餃子、揚げ餃子をたくさん、かなと一緒に作りました。

闇鍋ならぬ、闇餃子です。

具は全部食べられる物で用意したから、平気でしたが、かなの作っていた餃子の中には、とんでもない具を組み合わせた餃子もあって、それに当たったわたしは、ちょっとした地獄を見ました。

食べ終わった後、

前回と同様に、もたなそうな食材を貰って、返したはずのクーラーボックスを、また持って帰って来ました。

毎週、あんな大量の食材を買い換えていたら、お金がもつたないと思っていたので、残りの食材については、出来るだけ、来週までもつように冷凍したり、簡単に下ごしらえして、かなに、来週は買い足さなくてもいいから、と伝えておきました。

今週末のかなは、幼児から、  
小さな駄々っ子になっていました。

とすれば、来週は更に成長するはずで、そう考えると、  
意外とこのお泊りの回数は、少ないかも知れません。

だんだんと、親離れされちゃうと思うと、  
嬉しいような、ちょっと寂しいような、  
複雑な心境です……

10月5日 なつめちゃんとの再会

3時限目の美術の教室へ移動中に、A組の前を通つたら、  
あの夏期講習の人が、向こうから歩いてきました！

わたしはここで、その人をまじまじと見てしまいました。

リボンの色が、同じ青なので同年代です。

身長は、わたしと同じくらいありそうだけど、  
ブレザーを着ていても、随分華奢に見えます。

その顔は、とても色白で、  
髪型は、ちょっと長めの前髪と、ストレートの長めのボブで、  
髪の色は、黒髪かと思ったら、良く見ると真っ黒ではなくて、  
明るいところで見ると、モーブ系っぽい青紫色してて、  
まるでお人形さんみたいなの、一度見たら忘れない人でした。

でも記憶にはやっぱりないなあ、と思っていたら、  
ずっと見ていたせいか、向こうから声をかけられました。  
かなり小さい声で、  
「もしかして、三崎さん？」  
と。

その小さな声も、特に思い出すものは無かったけど、  
声を掛けられたとたんに、ぱっと思い出しました！

この子は小学校の幼馴染だった、仁科 棗ちゃんです！

印象が子供の頃と変わっていて、全然判らなかつたけど、  
直感で今気づきました、間違いありません。

わたしは思わず大声で、なつめちゃん！

と、呼びそうになりましたが、

向こうの様子が、何となく、

目立ちたくない、と思っっている感じを受けたので、  
ちょっと落ち着いてから、まずは普通に頷いた後、

今度はこっちから、仁科さん？

と聞き返すと、彼女も頷きました。

とりあえず、この休み時間に、

『なつめちゃん』こと、仁科さんと、

昼休みに会う約束をして、この場は別れました。

この子は、小学三年の頃に転校してきた友だちで、  
名前が棗なので、みんな『なつ』とか『なつめちゃん』、  
と、呼んでいたのを思い出したんです。

でも小学三年の終わりに、すぐ転校してしまって、それ以来連絡もとれず、いつの間にか、忘れてしまっていました。

お昼休みになって、待ち合わせ場所の屋上に行くと、なつめちゃんは、まだ来ていなかったのので、お弁当を持って、しばらく待っていたら、5分くらいしてから、やって来ました。

随分急いで来たようで、肩を揺らすくらいの荒い呼吸で、しばらく話も出来ずに、しゃがんで休んでました。

ちよつとしたら落ち着いたので、2人でお昼を、そこで食べました。

凧高は、普段はしまっているんですが、お昼休みの時間だけは、屋上に上げれるんです。

ここでわたしは、なつめちゃんから、二学期から凧高に転校してきた事や、夏期講習も、学力の確認で参加していた事、夏期講習の時、わたしの事に気づいていた事なんかを、教えてくれました。

わたしの事は、髪の毛の長さで気がついたそうです。

どうやら、わたしのイメージ「長い髪、のようで、それは、喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか……」

昼休みが終わりに近づいて、教室へ戻る途中で、自分に対する呼び名について、昔の呼ばれ方は、子供っぽくて恥ずかしいから、苗字で呼んで欲しい、と言われました。

その場は、わかった、と言ったけど、なんで苗字で呼んで欲しいんだろう。

『なつ』とか『なつめちゃん』は、名前の棗から来ているから、そんなに变では無いと思うんだけどなあ。

帰りの電車の方向も同じなので、昼休みに、一緒に帰る約束をして、放課後は待ち合わせして、一緒に帰ってきました。

元々、病弱だったなつめちゃんは、やはり今でも体が弱くて、週に3日通院していて、毎週火曜と木曜と土曜日は、治療に通っているのだそうです。

だから、それ以外の月・水・金の帰りは、両方の都合が悪くなければ、一緒に帰ることになりました。

なつめちゃんの最寄の駅は、うちよりも遠くだそうです、わたしのバイトがなければ、うちの最寄り駅までは一緒に帰り道です。

高校になってから、誰かと一緒に帰るのが、ほとんどなかったから、

幼馴染のなつめちゃんと、一緒に帰れる日が出来たのは、  
ちょっと嬉しいです。

10月10、11日 かなの家でお泊り、3回目

かなん家の泊まり会の3回目です。

今回もやっぱりタクシーの送迎で、お家に向かいました。

何とか、クーラーボックスを、

自分で持っけていこうとしたんだけど、

学校の机と同じくらいの底面積では、

持って歩き回るのは、わたしの力では無理でした。

今回のかなは、

小学生の子供から、ちょっと離れた妹くらいになってました。

ほとんどくっつかなかったし、

抱きついて来る事もなかったです。

でもやっぱり、お風呂とベッドは一緒でした。

ここは変わらないようです。

夕食は、面白いのは無いか、というリクエストだったので、  
ホットプレートがあったから、

お好み焼きともんじゃ焼きを、2人で作って食べました。

お互いに相手の分を作ろうと、かなが言い出して、わたしは何か入れる気ではないかと、ひやひやしましたが、普通に美味しいお好み焼きでした。

今日のデザートは、例の同好会から送られてきた、チーズケーキではなく、かなりビターなチョコレートケーキです。

添えられた生クリームも、とても甘さ控えめで、ケーキのスポンジや、中のガナツシユには、洋酒がかなり入っていて、とても大人なケーキでした。

わたしは食べた後、ちょっとふらふらしてたようで、かながそれを見て、何だか楽しそうにニヤニヤしてました。

3階のお風呂で、月を見ながらお風呂に入りました。

半月で空が明るくて、さすがに星は見えませんでした。

お風呂から出て、居間でくつろいだ後は、まだ10時前でしたが、ベッドへと向かい、ベッドの中で、今日はわたしの事を、色々、かなが質問してきたので、それに答えてあげていました。

わたしは、かなに、

父は幼稚園の頃に、亡くなっていること、父が生きていた頃は、父の実家の田舎に住んでいたこと、小さい頃は、川で流されるのが好きだったこと、父の描く水彩画が、好きだったこと、

父が死んでから、こつちに出てきたこと、父の影響で、絵を描くのが趣味なこと、母はいつも出張で、週の半分しか家に帰って来ないこと、航海堂でバイトしていること、バイト先の忍さんに、お世話になっていること、今でも川が好きで、良く近所の御家河に行くこと、河原に黒猫のヒョウちゃんがいること、なんかを話して聞かせました。

話が終わったら、そのまま眠りました。

日曜は、朝からちゃんとかなが起きたので、朝ごはんをどうしようかと、かなに聞いたら、前に食べなかった、生卵は何だったのと聞かれました。

どうやら、かなは卵かけご飯を食べた事がなくて、あの生卵をどうするのか、良く分からなかったようです。

お金がある人達は、卵かけご飯なんて食べないんだなあ、と、ちょっと悲しくなりましたが、あれは美味しいはずだから、それを知らないのは、逆にかわいそうな事なので、知ってもらう為に、今朝は卵かけご飯にしました。

かなは、ご飯に何かをかき混ぜて食べるのは初めてだよ、と、言いながら、卵をかけてかき混ぜていました。

そつえば、納豆を食べてた時も、

かなは、ご飯と別々に食べていたような。

やっぱり、富裕層の人は生き方が違うのだな、と、



ここで改めて、生活の違いを痛感しました。

お昼までは、まだまだ時間があつたので、手作りのパンを焼いて、お昼ご飯にする事にしました。

これは、わたしも初挑戦です。

生地を作ってパン焼き器で焼いている間は、かなに、お風呂へ行こう、と言つと、

「その前に、あたしからみなもに、

お返ししてあげたいんだ。

ちよつときて」

と言つて、かなの部屋に連れて来られました。

ソファーに座らされて、待っていると、かなが、わたしの前に持ってきたのは、

ノートパソコンで、画面には、

ヘアスタイルのカタログみたいな、

カットモデルの人の画像の一覧が、

表示されていました。

「みなもの髪、プリンになつてるから、

あたしがカラーリングしてあげるよ。

自分の髪は、いつも自分でやつてるから、

慣れてるんで安心してね。

で、どんな風にしたい？」

と言われました。

確かに、髪は夏にプールで脱色してしまつてから、随分経つていて、生え際は黒くて変だけど、

自分で染めた事無いから、失敗したら嫌だし、でも美容院でやってもらったら、高いしで、どうしようかと、思っていたところだったので、ここは、いつもきれいな髪色をしている、かなに願う事にしました。

色は、難しそうだけど、生え際が黒くても変じゃないように、グラデーションにして欲しいと伝えて、髪の色は、ナチュラルブラウンにしました。

その後もかなと、パソコン見ながら、カラーリングの事を話していると、そろそろパンが焼ける時間になったので、キッチンに戻って、お昼にしました。

自分達で焼いた、焼きたてのパンは、パン焼き器が、優秀なのかも知れないけど、パン屋さんのパンみたいで、とても美味しかったです。

後片付けの後、2階のお風呂へ移動して、カラーリングをしてもらいました。

やはりとても長い髪なので、とても時間がかかって、かなの話では、自分の時の3倍はかかったとのこと。

終わった後は、お風呂に入ってゆっくりしました。

お風呂から出て、髪の色を確認すると、きれいで自然なグラデーションになっていて、

髪もつやつやになりました！

ちよつとだけ、ハイライトも入れたと言ってたから、  
どうなっちゃうかと思っただけど、  
ぜんぜん自然な感じになつてて、  
やっぱり、かなに任せて良かったです。

夕食は、先週の残り物を使って、  
適当に肉や魚や野菜を入れて、寄せ鍋にしました。

これはこれで、意外と美味しかったです。

先週よりも、ちよつとは食材が減っていたので、  
かなも少しは自分で食べたらしく、  
ちよつと成長したなあ、嬉しく思いました。

これで、冷蔵庫の中はだいぶすっきりしました。

食事の後、ちよつとゆつくりしてから、  
今回は、電車で帰ってきました。

今週末のかなは、小学生の子供から、  
歳の離れた妹くらいにまで成長しました。

何だか、先が見えてきたような気がします。

この分なら、来週か再来週には、  
リハビリは完了するような気がします。

それが来て欲しくないような気も、ちよつとはするけど、

かなの為にも、やっぱり完了が待ち遠しいです。

10月12日 明日から中間試験

明日から中間試験が始まります。

今月は週末全部、バイトとかなちゃんの家だったので、  
今まで以上に、勉強出来てません。

今回は本当に補習かも知れない。

今日から徹夜で一夜漬けです……

10月14日 なつめちゃんとテスト

今週から一気に冷え込んで、寒くなってきたので、  
今日からわたしも、冬服に衣替えしました。

うちのクラスも、一気に冬服化が進んで、  
夏服の人は、10人いないくらいに減りました。

ブレザーは、久しぶりに着ると、  
腕とかが、動かしづらく感じます。

春に着ていた時は、そんなこと感じなかったんだけど、  
もしかして、太ったのかも!?

思い当たる事は、この秋はたくさんありました……

ただでさえ試験中だと言うのに、  
更にへこむ事が増えてしまいました。

その中間試験の方ですが、2日目が終わりに、  
残すところ、あと1教科だけです。

なつめちゃんとの下校の時に、  
もうじき楽になるね、と言うと、  
うん、そうだね、と明らかにわたしに合わせた、  
相槌が帰ってきました。

なつめちゃんは、夏期講習に出たとはいえ、  
二学期からの授業で、前の学校との進み具合の違いとかは、  
大丈夫だったのが、ちょっと気になって聞いてみると、  
まず夏期講習は、補習と言う意味で受けたのではなく、  
ただ、雰囲気を知りたかったからだそうです。

勉強の方は、家に家庭教師の先生が来ていて、  
今回の中間試験があった全教科は、全て学習済みだったそうで、  
今のところ、判らなかつた問題はないそうです……

人の心配している場合じゃないのに、  
どうやらわたしは、自分よりも頭の良い人の、  
心配をしていました。

この帰り道、わたしはちょっとへこんでしまって、  
無口になってしまったら、

なつめちゃんが、それを気にしてしまい、

「どうしたの？ 私、何か気に障ることした？

ごめんなさい！」

と、心配された上、まるで、自分のせい、

わたしを怒らせてしまったと勘違いされたのか、  
しきりに謝られてしまいました。

わたしの子供っぽい対応で、余計に気を使わせた事で、  
わたしは二重にへこんで、帰ってきました。

なつめちゃんは、わたしと違って繊細な性格で、  
まるでガラス細工の様です。

あんな性格してたら、毎日気疲れしちゃって、  
しょうがないんじゃないのかなあ。

それとも普段は普通で、わたしに対してだけ、  
あんなのかなあ。

クラスが違うので、普段の様子は判らないから、  
なんとも言えないんですけどね。

なつめちゃん、色々と気になりますけど、

今は試験をどうにかしないと、どうにもならないので、  
もうちょっと、様子を見てみます……

10月15日 中間試験終了

やっと試験が終わりました。

結果は、やはり散々でした。

いくつか赤点がありそうな気がします……

夙高は、中間と期末を合わせて赤点だった場合に、試験休みが、補習と追試へと変わります。

テスト結果次第で、天国か地獄が分かれるんです。

一学期はなんとか大丈夫だったけど、

今回は、期末を頑張らないと、

冬のお休みが半分くらい、

なくなっちゃうかも知れません。

学校から帰った後、神社に御参りしてきました。

もう神様の力しか、頼れるものがありません……

10月17、18日 かなの家でお泊り、4回目

かなん家の泊まり会の4回目です。

今回は、クーラーボックスもないので、バイトが終わった後、直行で電車に乗って、かなのお家に向かいました。

今日はもう、食材が無いので、  
かなと駅で待ち合わせして、  
買出ししてから、かなと一緒に家に行きました。

これで、無駄にお金を使わずにすみませう。

家族と一緒に買い物なんて、  
今までしたことないよ、と言って、  
かなはスーパーで、ちよつとだけはしゃいでいたけど、  
先週までのキャラよりも、全然大人しかったです。

それは、家の中ではないからと言う理由ではなくて、  
もう精神年齢が、中学生くらいまで来ていて、  
大きくなっているからのようでした。

夕食のメニューは、ビーフシチューで、  
けっこうかなも、手伝ってくれたので、

最初のカレーの時とは違って、だいぶ手早く出来ました。

冷蔵庫の食材が良く考えてみると、  
先週よりもちよつと減っていたのに、後で気づきました。

多分、かなが料理の練習をしていたからかな、  
とも、この時ちよつと思いました。

ビーフシチューは、圧力鍋で作ったんですけど、  
これ、うちには無くて初めて使いました。

火にかけていると、そのうち爆発するんじゃないかと、  
なんか音がする度に、驚いてしまい、



その度に、かなが横で笑い転げていて、かなり、むっとしました。

夕食の後に、もう定番となった、おなじみの組織からの、お取り寄せデザートを食べました。

今回も、チーズケーキではなくて、ブランデーケーキで、とても豪華な箱を開けただけで、お酒の匂いが部屋に漂うくらい、すぐくブランデーの入ったケーキでした。

で、味はと言うと、とっても苦くって、最初は、生クリームと一緒にじゃないと、ちよつと食べられなかったんですが、だんだん慣れてくると、

この苦いのが、逆に癖になってしまって、気づくと、かなの倍は食べてしまいました。

かなはそんなわたしを見て、  
なんだかニヤニヤしていたような、そんな気がしますが、この辺りから、はつきりと思い出せません。

この後、すぐにお風呂に入ったんですが、わたしは、とても楽しくなって、ずっと、笑っていたような気がします。

なんか、まっすぐ歩けなくて、  
かなに支えられて、歩いていったような気もする。

わたしは、ケーキで酔っ払ってしまったみたいです。

お風呂でも、大きくなってからは、  
出したことが無いような、大声出したり、  
突然歌ったりして、とにかく楽しそうだった、そうです、  
……かなの話では。

お風呂を出る時も、だだこねてなかなか出なくて、  
やっと出たら、今度は洗面所で大の字になって寝てしまい、  
仕方が無いから、体を拭いてパジャマを着させて、  
かなの部屋まで、なんとか支えながら連れてって、  
ベッドに入らせたんだそうです、

……かなの話では。

ベッドに入ってから、抱きついてくるは、  
キスしようとしてくるは、体を触ってくるは、  
突然説教が始まるはで、全然眠れなかったんだそうです、  
……かなの話では。

4時くらいまで、ずっとそんな感じで、  
明け方やっと眠ってくれたから、かなも寝たんだそうです、  
……かなの話では。

そして、わたしは翌日の11時に目が覚めた時、  
もう目を覚まして、わたしの様子を見ていた、  
かなから、これらを聞きました。

わたしはしばらく、恥ずかしくて、  
掛け布団から、顔を出せませんでした。

そんなわたしの頭を、かなは布団の上から、

ずっと撫でていました。

これじゃ、役目が逆です。

この後、かなが、みなもごめんね、と言いなながら、ちよつとした、いたずらのつもりで、あのケーキ出したら、まさかあんなに酔っちゃうとは思わなかったんだよ、という弁解を聞いて、わたしはかなに、覆いかぶさって、反撃に出ました！

かなのほつぺたを両手で引っ張りながら、わたしが怒ると、かなは、いだだだだだ……、と言いつつ、だから謝ってるのにい、と言って、じたばたしてました。

もうそろそろ許してあげようか、と思った時に、かなが一言、

「でも、みなもって、意外とスタイルいいね。

足とかウエストとか、思ってたより細かいし」  
なんて、余計な事を言ったので、  
放そうかと思つた両手を、  
更に倍の力で、引っ張ってからにしました。

このおかげで、この日のかなのほつぺは、  
ずっと赤くなってました。

こんな事やっているうちに、午後になってしまい、  
お昼として、昨日の夕飯だった、  
ビーフシチューの残りを食べました。

かなは、昨日より美味しい気がする、

と言って食べていました。

午後は、ウッドデッキのデッキチェアで、  
かなの話を聞きました。

かなは、先月末からずっと、  
今までの人間関係を、どう清算するべきかを、  
考えていたんだそうです。

で、その方針が決まったので、  
わたしに聞いて欲しいとの事でした。

今までは、手なずけやすい人を周囲に集めて、  
難しい人には、かなからは拒絶していないところを、  
常に見せる様にしていたんだそうです。

でもこれから、今まで広げた交遊の輪は、  
本当に自分が、関わりたいと思う人以外は、  
付き合いを減らして行き、最終的には切ることにして、  
逆に、交遊を深めたい相手には、  
その本心を、相手にぶつけて行って、  
わたしのように、かなの本心を見て、  
付き合ってくれる、そういう友達を増やす予定だと、  
かなは、教えてくれました。

結局その行動は、多くの人との付き合いを、  
かなの方から、断ち切っていくのに違いはなくて、  
かな自身も、それが簡単には出来ないし、  
色々、大変な事も起きるかも知れないと、  
自覚しているけど、そうしなければ、

せつかく教えてもらった、本来の自分が望んだ生き方に、戻る事は出来ないから、と、かなは覚悟を決めて、わたしに話してくれました。

わたしは、そのかなの決意に、大した言葉もかけてあげられなくて、ただ、わたしもそれで正しいと思う、がんばって、とだけ、彼女に返しました。

この日の晩ごはんは、キムチ鍋にしました。

キムチとキムチの素を、あるだけ入れて、激辛のキムチ鍋です。

あまりの辛さに、2人して泣きながら食べました。食べ終わった後は、汗だくになってしまい、すぐにお風呂へ入って、ゆっくりしてから、帰ってきました。

帰り際、かなに、来週は、みなもが前に教えてくれた、普段、みなもが良く行く所へ行かない？と、提案があつたので、  
天気が悪くなければ、出かける約束をして、かなの家を後にしました。

かなは、直接言ってなかったけど、多分、次が最後だと思えます。

わたしは自分の直感を信じています。

いよいよ、卒業、と言っているのか分からないけど、  
かなのりハビリも、完了間近です。

かなも、親離れするんだから、  
わたしも、もう子離れしないといけません。

でもそう思うと、やっぱりとても寂しいです……

2009年 10月 その2(前書き)

変更履歴

2011/03/29	記述統一	一週間、二日間、三時間	
1週間、2日間、3時間			
2011/04/22	記述統一	第一、第二、第三	第一、
第2、第3			
2011/05/18	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
二つ、三つ			
2011/06/11	誤植修正	始め	初め
2011/07/14	記述統一	一人、二人、三人	一人、
二人、三人			
2011/09/01	誤植修正	位	くらい

2009年 10月 その2

10月19日 今のなつめちゃん

この頃はだいぶ、今のなつめちゃんを見慣れてきたので、第一印象以外のところも分かって来ました。

まず、制服は完全に標準で、ワイシャツのボタンも、第1ボタンまでしっかり留めてて、リボンもちゃんと付けてます。

今どき、ここまでキツチリしている人は、ほとんどいません。

たしか、お父さんがお医者さんとかで、すぐ大きい家に、住んでいた記憶があるから、凧高に転入する前は、お嬢様学校とかにいたんじゃないかと、つい、思ってしまう。

それと、香水だと思っただけど、そばにいと、ほんの微かだけど、とっても良い匂いがします。

ラベンダーとか、カモミールとか、そういう感じの、心が落ち着く香りです。

話し方も、声は小さくてゆっくりだけど、丁寧な受け答えをするので、話をしていると、自分が、ちよっと馬鹿っぽく思えてきます。



まあ、それほど賢いとも思っていないけど、庶民では出ないオーラが、なつめちゃんからは、滲み出てるような気がします。

しぐさとかも、ちょっとおっとりしていて、今のなつめちゃんは、箱入り娘なお嬢様、というイメージです。

でも、昔と変わってないところも見つけました。

それは、ちょっと笑った時の、はにかんだ表情と、話を聞く時に、小首を傾げるしぐさと、わたしが何か言うたびに、

ちよっただけ頷いて、相槌をうつところ です。

これを見ると、なつめちゃんは、話を真剣に聞いてくれてるなあ、と思います。

子供の頃と比べると、見違えるほどキャラが変わって、お淑やかなお嬢様になってた、なつめちゃんだけど、わたしは、昔と同じように、普通に友達として、これからも、付き合っていこうと思っています。

10月21日 テスト結果が出ました

中間試験の結果が、発表されました。

お賽銭が足らなかつたのか、

わたしは神様に、見放されてしまいました。

5教科中、2教科が赤点です……

発表の後すぐに、かなちゃんから、

「テスト結果、もしかして、あたしのせい？」  
ってメールが来ました。

そんな事ないよ、と返しておきましたが、  
まあ、原因はともかく、とっても痛いです。

ちなみにかなちゃんは、  
上位50名にも赤点の名簿にも、入っていなかったから、  
大丈夫だったようです。

自分の残念な成績にも驚きましたが、  
なつめちゃんの成績には、違う意味で驚きました。

テスト中のあの発言は、真実だったことが証明されて、  
ベスト10に入る成績でした！

今日の帰りも、テスト結果の話になって、  
なつめちゃんに、

「家庭教師のテスト対策のおかげで、  
たまたま運が良かっただけ。

三崎さんなら、期末でちょっと頑張れば大丈夫」  
なんて言われて、

わたしはなつめちゃんに、慰められてしまいました。

自分の成績のことも、気にはなりますが、

なつめちゃんから、『三崎さん』って呼ばれるのが、とても違和感があった、ぜんぜん落ち着きません。

昔みたいに『みな』って呼んで欲しいけど、なんとなくですが、昔の呼び名では、呼んでくれない気がしています。

自分のことを、昔の呼び方で呼ばれたくないのって、本当に、恥ずかしいから、なんて理由なのかなあ。

聞けそうな雰囲気の人に、聞いてみたいと思いますが、また、それを気にされてしまうような気がしていて、聞ける機会は、なかなか来そうにありません。

10月24、25日 かなの家でお泊り、5回目

かなん家の泊まり会の5回目です。

今日は、バイトが終わってから、買い物もせずに、かなの家に直行します。

事前に、かなから連絡があって、夕飯の仕度は出来てる、との事で、かなの方で何かを用意しているようです。

料理は努力はしているけど、まだ何か作れるとも思えないし、なんか買ってきたのか、貰ったのかしたのかなあ。

かなの家には、8時過ぎに着きました。

出迎えに出てきたかなは、エプロン姿で、すぐにキッチンへと通されました。

そこには、チーズとチョコレートの入った深皿が、ホットプレートの上に、乗せられていて、別のいくつかの大皿には、一口大に切つてある、パンや、野菜や、きのこや、魚介類や、果物が、きれいに並べてありました。

よく見ると、お餅や、ハンペンや、かまぼこや、ハムや、お肉も置いてあつて、

全ての食材は茹でてあつたり、軽く焼いてあつたりして、ちゃんと、下ごしらえも出来てました。

「今日の夕食は、あたしがみなももてなします。チーズフォンデュと、チョコフォンデュです。」

これ、あたし一人で準備したんだよ、驚いたでしょ？」  
と、かなは、かなり自慢げに胸を張つて、わたしに言いました。

冷蔵庫の野菜とかが、ちよつと減つていたりしたのは、この仕込みをする為の、練習だったのか、と、わたしは納得しました。

正直、これにはとってもびっくりしました！

ただどわたしは、かなに、料理で一番大事なのは味だよ、と言って、わざともらったいぶつて、すぐには褒めないで、席につきました。

かなはちよつと不満そうでしたが、じゃあ早く食べてと、早速、夕食になりました。

かなの事なので、味だって悪くは無いだろうな、とは、思っていたけど、チーズフォンデュもチョコフォンデュも、アルコールでなくて、牛乳で作っているところは、前回の、ケーキの一件を考慮してくれたんだと思いました。

わたしは、かなに、

下ごしらえも、ちゃんと出来てるし、

お酒も使ってないし、すごくおいしい、と、褒めてあげました。

かなは、自信満々な雰囲気を出していたけど、どうやら本当は、わたしになんて言われるかが、とても気になっていたらしく、褒めてあげた途端、ちよつと驚きながら、本当に嬉しそうに、

「ほんと!？」

ほんとに!？」

よかつたあ、これ、料理出来る人には、

そんなに難しい料理じゃないんだろうけど、

初めて1人でやったから、自信がなかったんだよ。

特に、具の方の調理が、大丈夫か心配だったんだ。

白ワイン使うところは、牛乳にしときました。

みなもに喜んでもらえて、ほんとに良かった!」

と、言っていました。

チーズは濃厚で、チョコはビターな味で、

具もちゃんと火が通っていたし、とても美味しかったです。

食事が終わると、今度はかなの部屋へと行き、わたしを、クローゼットへと連れて来ました。

そこで、わたしに、

「みなも、いつも私服がパンツばかりで地味だからさあ、

今日は、ちよつと違う感じになってみない？」

といって、かなはわたしのウエストを唐突に計っています。

わたしが、呆気にとられていると、

かなは、自分の服の中から、すばやく20着くらい選び出して、空いていたパイプのハンガーに全部かけて、

「ここに掛けたのは、みなもも着れる服だから、

好きなの着てみなよ。

あたししか見てないんだから、

どうせなら、思い切った感じにしてみない？」

と、まるで服屋の店員さんのようです。

クローゼットに連れてこられた時に、

ちよつと、先週の朝の会話も思い出して、

なんか企んでるなあ、と思っただらこういうことでした。

かなが選んだ服を見てみると、可愛らしいのしかなくて、更にパンツもスカートも、膝上の短い物しかありません。

それをかなに尋ねると、

「うん、長いのは、ドレスとか、

ちゃんとした時に着てく用の標準の制服と、

いや、それだけ、かな。

ほかは全部、ミニとか、ショートパンツだよ」  
だそう。

わたしは、全く逆で、膝下まである、パンツやスカートしか持っていないし、それも、ほとんどパンツですし。

だから、こういう女の子っぽい服は、洋服を買いに行っても、まだ若いはずなのに、どうせ似合わないし、ちよつと無理かなあと、感じつつありました。

でもせつかくだし、かわいいなあ、と思った服を、ちよつと迷ったけど、着てみました。

着てみると、なんか、すごく楽しいです！

同じ服をかなが着たら、もっと可愛いんだろうけど、今のかなの格好は、これも狙いなのか、地味でシンプルな、Ｔシャツとハーフパンツで、比較として目立たないように、気を配った格好だと、その事に、後で気づきました。

わたしは、始める前はあんまり気乗りしなかったけど、気がつけば、一通りの服を着てしまいました。

わたしを見ていた、かなの感想では、

「別におかしくないし、

ぜんぜん似合わないのに、

足とか出してる子とか、いっぱいいるよ。

みなもは、けっこういけると思うんだけどなあ」

なんて、言われたけど、

でもやっぱり、スカートとかワンピースとかもすごく短くて、  
ここには、かなしいから着れるけど、  
お店とか外とかでは、こういうのは恥ずかしくて着れないなあ、  
と、思いました。

気に入ったのあれば貸してあげるよ、と言ってもらったけど、  
こんな格好して着ていくところもないし、  
色々着させてもらえただけで、十分満足したので、  
借りたくなった時にお願いするね、と伝えました。

この後、お風呂に入って、そこで、  
明日の予定を相談したところ、天気も良さそうなので、  
わたしが良く行く場所へ、お弁当作って行く事にしました。

それと、もう一度わたしの家に行きたい、との事なので、  
夜はわたしの家で、夕食を食べる事になりました。

今日は、かなから、好きなだけ入っていていいよ、  
と言われたので、ぬるめのお湯にして、  
ずーっとお風呂に入っていました。

大体2時間くらい入ってから、わたしは満足して出たのですが、  
その頃かなは、まるで煮出した鶏がらのように、  
ぐったりして、へろへろになってしまったのを見て、  
やっぱりわたしはちょっと変なんだな、と自覚しました。

この日はかなも、お風呂で疲れきってしまったからか、  
それとも、もう大きくなったからなのか、  
大人しく、普通に眠っていました。



翌日は、早く起きて、  
昼のお弁当の、おにぎりをかなが、  
サンドイッチを、わたしが作りながら、  
少しずつつまみ食いして、それで朝ごはんを済ませてから、  
御家河へと向かいました。

かなは、小さめのクーラーボックスを用意してきていて、  
中身は、肉や魚なんかの色々な食材と、  
缶詰とか、キャットフードとかが入ってました。

「前に話してくれた、ヒヨウちゃんのえさ。  
これだけあれば、どれか食べるでしょ？  
みんな結構高いから、絶対食べるよ！」  
と、かな。

どうやら、餌付けに自信があるようですが、  
そんなに、うまくいくかなあ、  
それどころか、逆にかなが襲われるんじゃないか、  
とても心配です。

御家河は、10時くらいに着きました。

わたしは、いつも絵を描いている場所へと、  
かなと話しながら、ゆっくり向かいました。

この日は天気も良くて、空は真つ青で、  
大きなひつじ雲が、広がっていました。

いつもの場所に着いたら、  
かなが、これやろうよ、と、

持っていたクーラーボックスの中から、  
フリスビーを取り出しました。

すごく昔に、やったことがあったような気がします。

懐かしいなあ、とか思いつつ、

河川敷の、芝生のところへ降りて、

かなとわたしは離れると、早速始めたのですが……

かなは、最初の数回でコツを掴んだらしく、

ちゃんと、わたしの所に来るんだけど、

わたしが投げると、とんでもない方にしか飛ばなくて、

かなは、フリスビー犬みたいに、

走りっぱなしになってしまいました。

途中で何回か中断して、かなから投げ方を教わって、

走らせてはっかで悪いから、

自分で投げて、自分で拾って練習したりして、

後半は、まあまあ近くまで、投げられるようになりました。

しばらく遊んでいたら、お昼になったので、

作ってきたお弁当を食べました。

走り回って、疲れたせいもあるけど、

外で食べるお弁当は、とても美味しいです。

ただ、かなの作ったおにぎりの具には、

いくつか、爆弾が仕掛けられてて、

激辛だったり、すごく甘い何かが入ってたりして、

ちよっとひどい目に遭いました。

かなは、1つも外れに当たらなかったのを見ると、自分だけ判るようになっておいたらしく、わたしは、すっかりやられてしまいました。

サンドイッチは、当然普通に美味しかったけど、こっちも、なんか仕掛けとけば良かったなど、ちよっと思いました。

その時に、いいタイミングで、ヒヨウちゃんが姿を現しました。

かなも、ヒヨウちゃんに気づきましたが、最初は、はしやぎ気味に、

「あ、あれがヒヨウちゃん？」  
と言っていたけど、近づいてくると、

「……ねえ、みなも、

ヒヨウちゃんって、猫、なんだよね？

なんか、ちよっと大きくない？」

なんて言って、表情がこわばっていました。

ああ、かなもそう言うつて事は、

やっぱりヒヨウちゃんは、大きいんだなあ、

わたしの気のせいじゃなかったんだ。

ヒヨウちゃんは、わたしのそばにいるかなに対して、明らかな、敵意のこもった眼差しで、かなを睨みつつ、ペースは変えずに、こっちに近づいてきます。

かなは、わたしの後ろに回って、  
わたしを盾にして、様子をみていました。

わたしはかなに代わって、持ってきた、  
ヒヨウちゃんのごはんを、準備しました。

かなは、ヒヨウちゃんが近づきながら、  
すごい唸り声を上げたので、

わたしのところから、少しずつ後ろに後ずさり、

およそ、10メートルくらい離れたら、

ヒヨウちゃんは、威嚇を止めたので、

かなは、その距離を保ったまま、

こっちの様子を見ていました。

かなが持ってきた食べ物、昨日の夕飯に食べた、  
下ごしらえした野菜や肉や、缶詰、キャットフード、  
生肉、お刺身なんかもありました。

これと一緒に入っていた、何枚かの紙のお皿に盛り付けて、  
それと入っていた硬水も、別の器に注ぎました。

まだヒヨウちゃんは、かなの方を気にしていたけど、  
唸るのはやめて、ご飯をじろじろと眺めていました。

遠くから、かなが、

「どっ？」

「食べたあ？」

と、こっちに声を掛けると、やっぱりヒヨウちゃんは、  
黙れ、と言わんばかりに、短く唸りました。

ヒョウちゃんは、まず水を飲みながら、しばらく考えていたのですが、まず口にしたのは、生の牛肉でした。

これは、普通に食べてました！

初めてヒョウちゃんが、普通にご飯食べるのを見ました！わたしはちょっと感動してしまい、涙目です。

その次はお刺身で、これも普通に食べてました！

この後は、また水に戻って、値踏みするように、残った食べ物を眺めていましたが、野菜とかは、ちょっとはかじったけど、それで終わって、キャットフードには、見向きもしませんでした。

前のわたしの選択は、ヒョウちゃんにとっては、最悪だったようです……

水と、お肉と、お刺身を食べ尽くしたヒョウちゃんは、来た時と、進行方向を変えずに、かなの方に向かって、歩き始めました。

かなは、急いで土手の上の上って避難して、ヒョウちゃんに道を空けました。

その後、ヒョウちゃんは、土手の上のかなを一瞥して、その対応に満足したのか、それ以上は何もしないで、河原の草むらの中へと、消えていきました。

かなは、それを見届けた後、わたしの所へ戻ってきて、

「すつごく怖いよ、ヒヨウちゃんって。

あれ、普通の猫じゃなくない？

ほんとに襲われるかと思ったよ！

なんで、みなもは大丈夫なの？」

と聞かれたけど、それはわたしが聞きたいくらいだよ、  
としか答えられません。

とりあえず、ヒヨウちゃんに関しては、

かなも襲わなかったし、ご飯もけっこう食べてくれたし、  
ま、終わりよければ、なんたらかんたらです。

この後は、土手の真ん中辺りに寝そべって、  
空のひつじ雲を眺めながら、

同じように、空を見つめながら話している、

かなの話聞いていました。

前に言っていた、人間関係の清算を、

そろそろ、本格的に始めていくことや、

しばらくは、色々忙しくなって、

わたしと一緒に過ごせる時間はなくなる、とか。

かなの悪い噂とか、陰口なんかも、

きつと、色んなところで聞くことになるけど、

わたしには、かなのことは気にしないで、

周りに合わせて適当なこと言っていていいから、とか。

かなの味方になるようなことを、

あえて言わなくていいから、それよりも、

わたし自身が、変に追い詰められないように、

立ち回って欲しい、とか。

メールだけは、必ず見るようにしとくから、  
なんか遭ったら、メールして、とか。

全部終わったら、2人で旅行に行こうよ、とか。

そんなことを言われました。

同じクラスにいるのに、かなは、

なんだか、戦争にでも行ってしまおうような、  
まるでお別れの挨拶みたいに、話していました。

でも、それをする事にさせたのは、わたしだし、  
わたしがそうなるべきだと、言った姿になる為に、  
必要なことだと、かなが決めて実行するのだから、  
それを止めるのは、おかしなことだと思って、  
わたしは一言だけ、分かった、と答えた後、  
旅行、楽しみにしてるから、と、付け加えました。

その後、かなも、わたしの返答に対して、

「ありがとう」

と言ったきり、2人ともしばらく黙ったまま、  
空を見ていました。

陽もだいぶ傾いてきて、ひつじ雲が空いっぱい広がって、  
肌寒くなってきたので、そろそろ、帰る事にしました。

帰りの途中で、晩ごはんの材料を買いに、  
2人で、スーパーに買い物に行きました。

かなが、カードがお財布ケータイが使えるところ、  
と言うので、いつもは絶対に行かない、  
かなり高くて、ちょっと遠いスーパーに行きました。

そこで、夕食の材料を買って帰ってくると、  
まずは、お風呂に入って、その後に夕食の仕度をしました。

今日の夕食は、シーフードカレーです。

なんと、調理はかながメインで、わたしは手伝い役です。

最初にかなの家で、カレーを作った時とは、  
もう別人のように、かなは料理が出来るようになりました。

それを見てたら、なんだか成長した我が子を見るような、  
気持ちになってしまい、思わず泣きそうになったけど、  
なんとか耐えました。

夕飯は、シーフードカレーと、海鮮サラダで、  
デザートに、スーパーで売っていた甘栗を食べました。

カレーは、かなり具沢山になってしまったけど、  
とても美味しく出来てました。

わたしは、かなに、もう一人で料理作れるね、と言うと、  
「そうだね。」

多分、先生が良かったんじゃないかな？

これからは、自炊もしてみるよ」  
なんて、ニヤニヤしながら言っていました。



食事が終わり、後片付けをした後、  
かなが帰る時間となり、  
ついに、このリハビリのお泊り会の、  
終わりの時がやって来ました。

タクシーを呼び終えた後に、玄関でかなは、わたしに、  
「みなも、今までいっぱい付き合ってくれてありがとうね。  
今日であたしは、みなもから卒業するよ。」

これからは、また友だちとして付き合っ  
てね。  
みなもは、今のあたしにとって、一番の親友だから！  
と言って、抱きつかれました。

わたしも、かなをしっかり受け止めて、わたしもだよ、  
と、答えたら、急に感動してしまって、

ぼろぼろ泣いてしまい、それに気づいたかなが、  
「また、泣いてるの？」

ほんとに、みなもはすぐ泣いちゃうなあ。

みなもが泣くと、あたしまでつられちゃうから、  
やめてよね」

と言いながら、かなも、かなり涙目になってました。

2人とも落ち着いた頃に、ちょうどタクシーが着いて、  
わたしは家の前で、かなを見送りました。

こうして、かなのリハビリは、無事に完了しました。

わたしが直接してあげられる事は、今週で終わるけど、  
かなにとっては、色々大変な事に着手していく、  
これからこそが、本当の始まりだと思います。

かなの方から、またお願いがあれば、出来るだけ、手伝ってあげたいとは思いますが、きつと、かなはこれから先は、自分だけの力で、切り開いていくんだろうな、と、何となく思いました。

後は、かなのやろうとしていることが、うまくいくようにと、願うだけです……

10月26日 なつめちゃんを見ていて思う事

なつめちゃんと、一緒に帰るようになって、2週間が経ちました。

この間に、なつめちゃんを見ていて、大したことじゃないんだけど、ちよつと気になったことがあります。

帰りの道中、けっこう髪を気にして触っているのと、腕を組んでいる事が多いです。

これらは、小さい頃のなつめちゃんはしなかつた癖で、大きくなって外見が気になって、つい髪に手がいつていたり、色々、考えるところがあつて、無意識のうちに、腕を組んでいるのかなあ、とは、思つんですが、ちよつと気になります。

それと、今のなつめちゃんは、なんだかいつも、わたしに気を使っているような気がします。

幼馴染なんだから、そんなに気にしないでもいいのになあ、  
と思うんだけど、多分こういう人は、  
気を使わなくてもいいよと言っても、気を使うはずで、  
そう言っても気を使われちゃうなあ、と思って言ってます。

昔みたいに、もっと普通に接して欲しいです。

それと、今のなつめちゃんの性格は、  
今の見た目通りの、大人しい物静かな女の子で、  
けっこう色々話したんだけど、  
ずっと、そのキャラのまんまなんです。

昔は、体は弱くて、  
ひどい時には、入院していた時期もあるけど、  
それでも、他の子と同じくらい元気にはしゃいだりして、  
遊んでいたような、気がするんです。

体の具合とかもあるし、  
大きくなって、子供みたいなところは変わって、  
落ち着いた性格になっただけなのかなあ。

わたしが覚えている、小さい頃のなつめちゃんと、  
今のなつめちゃんとのギャップには、  
まだちょっと戸惑います。

そんな、なつめちゃんと比べると、  
わたしは小さい時から、  
全然成長していないような気がしてきます。

これは単に、

わたしが進歩していないだけなのでしょうか。

それだと、わたしが全く成長してないみたいで、  
何だかちよつと悲しいです……

10月30日 なつめちゃんの体調

なつめちゃんとの帰りの途中、  
電車の中で、なつめちゃんの具合が、  
急に悪くなってしまうんです。

わたしは、大丈夫と言うなつめちゃんを、  
次の駅で下ろして、ベンチに座らせました。

なつめちゃんは、顔色も真っ青で、  
額に冷や汗をかいていて、とても苦しそうでした。

わたしは、駅員さんと呼んだ方が良いかと思って、  
ベンチを離れようとしたら、  
なつめちゃんに、手を掴まれました。

なつめちゃんは、申し訳なさそうに、  
「迷惑かけて、ごめんなさい」  
と言ってばかりいたので、

わたしは、それより体調の事を尋ねると、  
薬があるから大丈夫、と言って、  
バッグから、ポーチを取り出して、

ポーチの口を開けた時に、落としてしまいました。

そのポーチの大きさは、文庫本くらいの大きさで、その中には、いっぱい色んな薬が入っていました。

その中のいくつかの薬が、ポーチから出てしまい、わたしはすぐにそれを拾い集めて、

なつめちゃんに渡してから、飲み物買ってくる伝えて、自販機で水を買って来て、なつめちゃんに渡しました。

なつめちゃんは、お礼を言って、

ポーチから、何種類かの錠剤を取り出しすと、水と一緒に薬を飲んだ後、

しばらく頭をバッグの上に乗せて、うつむいたまま、じっとしていました。

10分くらいしたら、体調が落ち着いてきたのか、なつめちゃんは顔を上げて、

「心配かけて、ごめんなさい。」

もう、だいぶ良くなったから、大丈夫。

お水、ありがとう、

あ、お金を」

と、またお礼を言いながら、

財布を取り出そうとしていたので、

わたしは、そんなのはいいから、

それより、ほんとに大丈夫？、ともう一度聞くと、頷いたけど、ぜんぜん大丈夫には見えません。

まだ顔色も戻って無いし、冷や汗も引いてないし、

どうしようかと、わたしが困っていたら、なつめちゃんは、

「家から迎えに来て貰うから、

心配しないで、本当に大丈夫だから」

と言つと携帯で電話して、今いる駅を、

電話の相手に伝えていました。

わたしは、迎えの人が来るまでは付き合っから、と伝えて、なつめちゃんの隣に座って、その様子を見ていました。

しばらくしたら、わたしたちの所に、

眼鏡をかけた、パンツスーツの、

まるで、社長秘書のような感じの女の人が、近づいてきました。

なつめちゃんのお母さん？

にしては、若すぎるし、

こんな感じではなかったような気がする。

じゃあ、お姉さん？

でも、たしかなつめちゃんは、一人っ子だった気がする。

わたしが悩んでいると、その人は、

なつめちゃんの前に、しゃがみこんで、

なつめちゃんの手をとって、脈を確認したり、顔を見たりしています。

まるで、お医者さんの診察のようです。

一通り確認して、大丈夫だったようで、

立ち上がると、今度はわたしの方を見て、挨拶されました。

「お嬢様のご友人の方ですか？

私は、家政婦の汐月と言います。

お嬢様は、私が自宅へ連れて行きますので、

ご心配なさらず、お帰り下さい。

では急ぎますので、これで」

付き添いの人に支えられて、立ち上がったなつめちゃんは、だいぶ、良くなってきているようだったが、わたしに、最後まで謝っていたので、わたしは、気にしないでいいから、と伝えて別れました。

わたしのいたホームから、

なつめちゃんが、今の家政婦の人の介添えで、

歩いて、駅を出ていくのが見えました。

2人は、駅前のロータリーに止まっていた、きれいな青い車に乗って、自宅へと向かって行きました。

なつめちゃん、昔も体は弱かったけど、

目の前で、動けなくなつたような記憶はなかった。

今の方が、体の具合が良くないのかなあ。

とても気になるけど、こればかりは、

わたしが、どうこう出来るものではないだろうから、よくなる事を、祈るばかりです。

……それにしても、驚きました。

『お嬢様』って呼ばれる人を、生まれて初めて見ました。

これで、改めてなつめちゃんが、

本物のお嬢様だと言ったことが、よく判りました。

今度、なつめちゃんに会った時に、

あの家政婦さんの事とか、聞いてみたいけど、  
聞いても大丈夫かなあ。

でも、やっぱり気になるなあ……



2009年 11月(前書き)

変更履歴

- 2011/03/20 誤植修正 なつめちゃんは、ちょっと嬉しそうにしました。  
なつめちゃんは、ちょっと嬉しそうにしました。
- 2011/03/30 誤植修正 お化け屋敷でそうぞ、お化け屋敷だそうぞ、
- 2011/03/31 記述統一 一週間、二日間、三時間  
1週間、2日間、3時間
- 2011/04/16 記述変更 (クラス) 1組、二組、3組  
A組、B組、C組
- 2011/04/19 記述統一 (期間) 一日、二月、三年  
一日、二月、三年
- 2011/04/26 誤記修正 汐月さんは、このマンションに一人で暮らす事になって、  
汐月さんは、
- 2011/05/04 記述統一 一回、二回、三回 1回、  
2回、3回
- 2011/05/19 記述統一 一つ、二つ、三つ  
2つ、3つ
- 2011/06/12 誤植修正 始め 初め
- 2011/07/15 記述統一 一人、二人、三人 1人、  
2人、3人

2009年 11月

11月2日 お詫び？ 謝礼？

先週に体調が悪くなって、途中の駅で、謎の家政婦さんに連れられて、帰っていった、なつめちゃんですが、もう、すっかり良くなったみたいで、今日はいつも通り、2人で帰ってきました。

「金曜日は迷惑かけて、ごめんなさい」と言いながら、なつめちゃんは、

水の代金で、千円札を出してきたので、わたしは、ちょうど通りかかった所にあった、自販機でジュースを買って、そのおつりを、なつめちゃんに渡しました。

わたしがおつりを返そうとしたことに、びっくりしてたけど、わたしは友達から、150円の水をあげて、千円返してもらうなんて、考えられないので、受け取る素振りが無い、なつめちゃんの手をとって、おつりを掌に握らせて、ちょっと無理やりだけど、渡したんです。

このせいで、ちょっと空気がギクシャクしてしまって、その後は、体調の事とか、今日の出来事とか、なんか、当たり障りのないことを話しているうちに、わたしの降りる駅に着いてしまい、別れました。

なつめちゃんも、空気の違いに気づいたみたいだけど、わたしと別れる直前まで、それには触れてこなくて、最後の別れ際に、何か言いかけてたけど、ドアがすぐ閉まったから、何を言おうとしていたのかは、判りませんでした。

わたしとしては、このなつめちゃんの対応は、幼馴染の友だちとしては、とても寂しい感じがしたんです。

なつめちゃんは、わたしのこと、そういう風には、見てくれてないのかなあ。

なつめちゃんは、悪気があるようには見えないし、やっぱり、お嬢様としての教育とかで、人から何かしてもらったら、そのお礼をするように、教わっているのかなあ。

そういう理由があつたとしても、わたしはなつめちゃんに、友だちとして付き合っただけから、ああいう対応は、絶対して欲しくなかつたんです。

それを判ってくれなかつたから、わたしもつい、子供みたく、すねてしまったけど、そういう所は、わたしよりおとなっぽいなだから、そういうのは、察して欲しいなと思って、ちよつと、意地張ってしまいました。

次に、一緒に帰る時に、わたしから、謝ろうと思います。

11月6日 なつめちゃんはお姉さん？

今日も、なつめちゃんと一緒に下校です。

お金の件は、

あの日の夜に、なつめちゃんからメールが来て、

変なことして、ごめんなさい、と、先に謝られてしまって、

わたしも返信で、わたしこそごめんね、と答えて、

おととい、一緒に帰った時には、

もうお互いに、気にしてませんでした。

なつめちゃんから、今週の文化祭は面白そうだね、と、

何だか、他人事みたいに言っていたので、

なつめちゃんは、何か担当してないの、と聞くと、

A組の出し物は、お化け屋敷だそうで、なつめちゃんの担当は、

小道具作成で、その作業はもう終わってる、とのこと。

わたしの方は、これから作業があるんだ、と答えました。

文化祭も気になるけど、わたしはその後に待っている、

期末試験が気になって、仕方がないよ、

と、なつめちゃんに愚痴ったら、

なつめちゃんは、

「私に何か手伝える事、ある？」

と、本気で心配されてしまいました。

わたしとしては、本気で悩んでいると思われちゃうと、

それもなんだか嫌だな、と思い、

この話題は冗談っぽく、聞き流して欲しかったから、今度、なつめちゃんに、勉強教えてもらおうかなあ、と、半分冗談で言ったら、なつめちゃんは、

「本当？ なら一緒に勉強しない？」

もちろん、三崎さんが良ければ、だけど……」

と、珍しくテンション高めで、食いついてきたので、ちょっとびっくりしました。

なつめちゃんは、自宅が学校から遠いので、

近くのマンションから通っていて、

週末はいつも、両親の住む実家に帰っているので、

土日は無理だけど、平日の通院する日以外なら、

大丈夫とのことです。

これは勉強も教えてもらえるし、なつめちゃんのことを、聞けるチャンスも、増えそうだと思って、

今は、バイトが入ってるから、シフトの調整して、

日取りを決めてから、改めてお願いするよと、

なつめちゃんに伝えました。

なつめちゃんは、ちょっと嬉しそうにしました。

あれは、愛想笑いではないはず。

この後、なつめちゃんと別れて、

1人になった時に、ふと思ったのは、

なつめちゃんは、わたしが子供っぽいから、

年下みたいに、見ているのかも知れない。

だから、水の一件はお駄賃を上げたみたいな感じで、せつかく上げたのに、わたしがむくれたから、理由が判らなかつた、とか。

つまりわたしは、妹キャラにされているということ？

忍さん相手なら、全然気にならないけど、同級生なのに、なんかなあ……

もう少し、自分の態度とか、口調とかを、改めた方が、良いのでしょうか……

11月12日 文化祭の準備

明日に迫った、文化祭の準備で、わたしの担当作業の、食材の買出しを、放課後に行つてきました。

今年の文化祭は、明日とあさつての2日間で、うちのクラスの出し物は、メイド喫茶です。

わたしの担当は、前日の食材の買出しと、1日目の調理係です。

メイドに選ばれた人たちは、ファミレスで、バイトしている人から、接客についての特訓を、毎日のようにしていたり、装飾係の人たちは、教室内の内装作成で、

休日も学校に来て、作業していたりとかで、とても大変そうでした。

わたしの担当は、前日と当日にやる作業しかなくて、今までは、楽に過ごしてました。

今日も、何人かの人と一緒に、近くのスーパーに行つて、メニューとして出すのに必要な、飲み物とか、お菓子とか、冷凍食品を買い込んで、学校へと帰ってきました。

冷凍食品は、田中先生が用意してきた、大きな冷凍庫に入れて、その後、調理係の人たちで最終確認をして、帰ってきました。

わたしが帰る頃には、教室はすっかり、お店風になっていて、準備はかなり整ってました。

後は、うちのクラスの企画が、どれだけ当たるかです！

わたしも裏方として、頑張ります！

## 11月13日 文化祭 1日目

文化祭の開始は、10時からですが、わたしの担当時間は、午前10時から午後1時までなので、

朝から教室の調理ゾーンにこもって、調理係をしてました。

うちのクラスのは、ただのメイド喫茶ではなく、  
ちよっとしたネタがあつて、

男子と女子の格好が、逆なんです。

男子はみんな、メイド服、

それもかなりのミニスカートのを着て、

みんな裏声で接客するんです。

逆に女子は、ウェイターみたいな格好で、髪もアップにしたり、  
固めたりして、まるで宝塚の人のような男装して、  
低い声で接客するんです。

宣伝係の人たちは、屋外、屋内を問わず、男女逆の格好で、  
看板を持って、校内を駆け回ってたおかげか、  
お客さんは、かなり来てくれて、大忙しでした。

席に着く前に、男か女か、どっちのメイドがいいかを、  
選んでもらうのですが、これ、接客係に余裕がある間は、  
ちゃんと選んでもらった性別の人を、出してただけで、  
だんだん、人手不足になってきて、  
受付係が確認したのが男なのに、男装の女子が対応とか、  
女を指名されているのに、女装の男子が対応とかさせて、  
お昼頃には、もうめっちゃめっちゃになっていましたが、  
メイドの人たちが、そこはノリで押し切っていました。

わたしたち裏方も、お昼に近づくと、注文が殺到して、  
かなり大変な事になっていて、  
特に焦ったのは、田中先生が用意してきた、



古い電子レンジが、一度動かなくなってしまったけど、うちのと同じ型のレンジだったから、とりあえず同じ要領で、思いっきり叩いたら、すぐに直ったので、良かったです。

かなりの混乱の中、交代の時間が来たので、午後の人と交代して、その後は、なつめちゃんと合流して、お昼を、屋外の模擬店の食べ物を買って、一緒に食べた後、他のクラスを、色々見て回りました。

うちと同じ、メイド喫茶をやってるクラスもありましたが、うちの企画の方が、勝ってるなあと、思いながら見てきました。

ここまで仕込んでいたクラスは、他には無かったから、なんか賞とか、もらえそうな気がしてきました。

午後3時過ぎたくらいで、なつめちゃんが、ちよつと疲れた様子だったので、休憩所に行つて、しばらく休憩していたら、もう終了時間の4時まで、30分を切っていたので、そのまま、2人で帰ってきました。

色々なお店や展示なんかもあって、楽しかったのですが、基本的にわたしは、人がいっぱいいるところが苦手で、なつめちゃんも、長い時間立ち歩くのが、体力的に無理なので、大人気のクラスとかは行かずに、すぐに入れるところばかり見てました。

それでもやっぱり、かなり疲れました。

明日は、今日よりもっと込みそうなので、いつも通り、バイトへ行く予定です。

来週は、初のなつめちゃんのお家です。

家なら、なつめちゃんに色々聞いても大丈夫かなあ、と、ちよっと期待しています！

11月18日 なつめちゃんのマンションと家政婦の人

学校が終わってから、

なつめちゃんと、待ち合わせ場所で合流してから、

そのまま、なつめちゃんのお家まで、一緒に行きました。

なつめちゃんの住んでるマンションは、駅から近いとは、聞いていたのですが、改札から出て2分の、まさに、駅前でした。

それも、そのマンションは、

賃貸ではなくて、分譲マンションなんです。

それも、部屋は16階建ての、最上階です。

その階には、なつめちゃんの住んでる部屋しかなくて、まるで、ビルの上の一戸建てに住んでるみたいです。

こういうのを、ペントハウスって言うのを、

初めて知りました。

エレベーターホールから降りて、  
なつめちゃんの部屋まで歩いていっても、  
当たり前なんです、他の部屋の扉はもちろんありません。

かなちゃんの家も、すごかったけど、  
なつめちゃんも、すごいところに住んでるなあ、と、  
庶民のわたしは、ただただ驚くばかりです。

なつめちゃんが、ドアを開けて入ると、  
あの時、ホームになつめちゃんを迎えに来た、  
スーツ姿の、家政婦さんに見えない、家政婦さんが、  
玄関でお迎えしました。

どう見ても、わたしには社長秘書っていうイメージしか、  
湧いてきません。

「お帰りなさいませ、お嬢様。

お連れの方も、どうぞお上がり下さい。

お嬢様は、ご自分のお部屋でお待ち下さい、  
すぐに伺いますので。

ご友人の方は、こちらへどうぞ」

たしか、『しおつき』さんって言ってた気がする、  
この人に、あつという間に仕切られて、  
わたしは、リビングへと通されました。

リビングは、かなちゃんの家のと変わらない広さで、  
そこにある、大きなテーブルを囲んでいるソファーに、

座るように言われて、大人しく座って待っていると、しおつきさんが、お茶を持って戻ってきました。

しおつきさんは、わたしの前にお茶を置くと、

正面に座って、名刺を取り出してテーブルに置きました。

「改めてご挨拶を。」

私は棗お嬢様の家政婦をさせて頂いている、

汐月と申します。

先日は色々のご迷惑をお掛けしてしまい、

申し訳ありませんでした」

と、早口ですらすら言われて、頭を下げられました。

わたしも慌てて、自分の名前を伝えて、とんでもないです、と付け加えて、頭を下げました。

汐月さんは、わたしの名前を聞くと、

細い眉を片方だけちよつと上げて、目を細められました。

別に、変なことは言っていないと思うんだけど、この人、どうも苦手なタイプです……

汐月さんは、黒い髪をキツチリまとめ、

細い眉に、切れ長の目に、金縁メガネで、

鼻が高く、唇が薄くて、あごが細くて、

細身で、スレンダーな感じで、

カラーシャツに、黒のパンツスーツ着ていて、

話しても、視線もあまり外さなくて、

とても、隙がない感じ……

「三崎、水面さん、ですか。」

いいお名前ですね。

今後とも棗お嬢様を宜しく願います。

少々ここでお待ち下さい」

と言いつ残して、汐月さんはリビングを出て行きました。

わたしは、ドアが閉まるの確認してから、

深く息を吐いて、深呼吸しました。

あの人と、面と向かって話していると、

なんだか緊張してしまって、息が詰まります。

10分くらい経ったら、なつめちゃんが1人で来ました。

制服から、私服に着替えていて、

その服装は、なつめちゃんのイメージ通りの格好でした。

多分、ブランド物だと思う、淡い色合いの、

シフォンのワンピースに、ストールを羽織っていて、  
まるで、フランス人形みたいです。

「遅くなって、ごめんなさい。

支度が出来たから、行きましょう」

なつめちゃんに案内されて、勉強部屋、

というよりも、書斎に案内されました。

その部屋には、大きな本棚が、壁一面に並んでいて、

4人が座れるテーブルと、

大きめの勉強机がありました。

本棚や机やテーブルも、アンティークみたいな質感で、どれも高級そうです。

わたしは恐る恐る、テーブルの椅子に座ると、なつめちゃんは、わたしの隣に座りました。

今日は、とりあえず、

今後のスケジュールを決めることにしました。

わたしのバイトのシフトも、火曜・木曜と、土曜・日曜に割り当てたので、

月曜・水曜・金曜は、なつめちゃんの都合が悪い日以外を、勉強会として、スケジュールを決めました。

なつめちゃんは、いつもよりも口数も多くて、やっぱり自分の家では、ちょっと元気な感じでした。

これなら、突っ込んだ事を聞けるかも、と思ったけど、もうちょっと、なつめちゃんが、打ち解けてくれてからにしようかと、思い直しました。

予定を決めた後は、こっちは聞いても大丈夫かなと思い、汐月さんのことを、尋ねました。

汐月さんは、

なつめちゃんの体調管理と、家事を担当している、看護師さんで、このマンションに、一緒に住んでいるんだそうです。

もちろん、看護師の資格を持った人で、

他にもいくつも、資格を持っているとのこと、  
なんかすごく、頭のいい人なんだと思って、  
ますます、苦手な人になりました。

なつめちゃんは、特になんとも思っていないみたいけど、  
わたしは、あの人と一緒に住むなんて、  
考えただけで、息が詰まりそうです。

睨まれて片眉を動かされただけで、動揺してしまいます。

こんな話をしていたら、8時を過ぎていたので、  
今日のところは、おいとまする事にしました。

なつめちゃんに、エレベータの前まで見送ってもらって、  
帰ってきました。

今日は、色々と驚く事があったけど、  
なつめちゃんとの距離は、  
ちょっとは縮まったかなあ、と思いました。

でもまだまだ、なつめちゃんには、聞きたい事や、  
知りたい事も残っています。

これから、ゆつくりと、  
昔の距離に近づいていこうと思います。

11月20、21日 なつめちゃんの車と運転手の人

今日も、なつめちゃんの家で勉強会です。

なつめちゃん、勉強の教え方は、  
丁寧で判りやすいです。

本人は、家庭教師の先生の受け売りと言って、  
謙遜してたけど、わたしにはまさに天の助けです！

今日は、ちょっと遅くなってしまっ  
て、気づくと9時を過ぎていました。

急いで帰り支度をしていると、  
ノックの後に、汐月さんが入って来て、

「今電車が人身事故で止まっていて、  
復旧の見込みが立っていないそうです。  
もし三崎さんが都合宜しければ、

今日は時間も遅いですし、  
泊まっていかれたら如何でしょうか」  
と、無表情のまま、思わぬ提案をされました。

これには、わたしよりも、なつめちゃんが驚いていて、  
何かの期待を込めて、  
わたしの顔を見てるように見えました。

一駅とはいえ、電車が止まっていると、  
更に遅くなりそうだし、

今日は母もいない日で、なつめちゃんも、  
それを望んでいる風に見えたので、  
お言葉に甘えて、泊まって行くことにしました。



汐月さんは、わたしが答えるとすぐに、  
夕食の準備をします、と言い残して出て行き、  
わたしとなつめちゃんは、呼ばれるまで勉強してました。

夕食は、ダイニングルームで、  
なつめちゃんと2人で、食べました。

さすがに、あんな格好だけど、家政婦さんだけあって、  
無駄に豪華でもなく、味、彩りだけでなくて、  
食材の栄養価も、計算されたメニューで、  
汐月さんはすごい人なんだなあ、と思いました。

なつめちゃんは、出された料理を、上品ではあったけど、  
淡々と口に運んでいました。

わたしがちょっと感想を言っても、  
軽く微笑むか、一言返すくらいの反応で、  
かなちゃんの時みたいに、楽しくお話しながらの食事、  
という感じではなかったです。

食事中におしゃべりは、行儀が悪いから、  
ダメなんですかねえ……

遅めの食事が終わると、なつめちゃんに、  
ゲストルームへと、案内されました。

その部屋は、普通のベッドと机がある部屋で、  
まるでホテルみたいです。

勉強していた部屋から、荷物を持ってきた後、

なつめちゃんに進められて、先に、お風呂を頂きました。

やっぱり、普通は一緒に入らないよねえ、と、ここで、改めて思いました。

結構広いお風呂だけど、ジャグジーでなくて残念です。

わたしが出た後、なつめちゃんが入れ替わりに入って、わたしは、汐月さんが用意してくれた、ゲスト用のパジャマを着て、リビングで待っていました。

この時に、わたしは、なつめちゃんに、まずは、呼び方を変えるのを、お願いしてみようと思い、しばらくして、お風呂から出てきたなつめちゃんに、呼び方を、この勉強会の時だけでもいいから、昔みたいに、『みな』と『なつめちゃん』で、呼んじゃダメかな、とお願いしました。

なつめちゃんは、ちょっと暗い表情になってしまい、しばらく考えた後に、

「ごめんなさい、

私の方は、今まで通りにして欲しい。

その代わり、『みな』って呼ぶようにするから。

それじゃ、駄目？」

と、わたしの呼ばれ方だけは、元に戻してくれました。

でも、『なつめちゃん』は、やっぱりダメでした。

ここには、汐月さんは置いていて、

2人しかいないのになあ……

でも、『三崎さん』と他人行儀な呼ばれ方だけでも、改善できたから、良かったです。

この後すぐに、汐月さんがリビングにやってきて、そろそろ就寝時間です、と告げました。

まだ、11時くらいだけど、

なつめちゃんは、もう寝る時間らしく、

わたしは、ゲストルームに向かい、

なつめちゃんと汐月さんとは、リビングで別れました。

翌日は、朝7時に習慣で目を覚ますと、

ちょうど、ベッドの頭の上にある電話が鳴って、

汐月さんから、モーニングコールがかかって来ました。

ゲストルームのそばにある、洗面台で顔を洗って、

ダイニングルームへ向かうと、

ちょうど、朝食の準備が出来たところで、

なつめちゃんは、席についていて、

汐月さんが食器を並べているところでした。

2人とも、ちゃんと着替えてました。

わたしは思わず、動揺してしまい、

パシヤマのまま来ちゃって、すいません、

と、謝ってしまいました。

なつめちゃんは、

「気にしないで、そんなこと。」

私は起きたらすぐ着替えるのが癖だから。

それに、みな、の服は、昨日洗濯させてもらったから、今朝着替える服は、手元になかったでしょ？」

と、ちよつと意識して、ぎこちなくではあったけど、わたしのことを、『みな』って呼んでくれました！

言った後のなつめちゃんは、

なんだか、ちよつと照れているように見えました。

これで、少しだけだけど、前進した気がします！

朝食を食べた後、なつめちゃんは車で、

病院へ行くとのこと、

わたしは、一緒に乗せてもらって、家まで送ってもらいました。

ゲストルームに戻ると、洗濯済みの着てきた服一式が、きれいにたたんで、部屋に置いてありました。

わたしは、着替えを済ませてから、

玄関で、なつめちゃんたちと合流して、

エレベータで最上階から、1階のエントランスに行くと、入り口の前に、あのロータリーで見た、

大きな青い車が止まっていて、運転手さんらしい、

大柄の、ダークスーツを着た男の人が、

車の前に立って、待っていました。

運転手さんは、わたしたちが来たのを見ると、

後部座席のドアを空けてくれて、なつめちゃんが乗った後、

続いてわたしも乗りました。

運転手の人は、身長は190cmくらいあって、髪は黒の短髪で、目つきも鋭くて、ものすごく怖そうな人でした。

汐月さんは、助手席に座って、最後に運転手さんが座って、出発しました。

車内はタクシーくらいの広さで、わたしが周りを見ると、なつめちゃんが、

「この車、デザイン優先だから、

大きい割に、中は狭いでしょ？」

と、申し訳なさそうに言っていました。

わたしにはその意味が、いまひとつ判りませんでした。

ぜんぜん狭くないんだけどなあ……

わたしは、シートの頭のところにある、三本槍みたいなマークが、ちよつと気になって、なつめちゃんに、それを聞くと、

「この車のメーカーの、シンボルマークだよ。

海の神の、ポセイドンが持つてる、三叉の矛。

父が、このメーカーの車が好きで、

母も私も、このメーカーの車に乗ってるんだよ」

だそうで、きつと高級な外車なんだろうなあ、

と思いました。

運転手さんは、一言も話さなくて、

汐月さんからは、わたしの家の場所を聞かれて、

それを答えた後は、ずっとなつめちゃんと、話をしていました。

すぐに家のそばに着いて、車が止まると、まず、運転手さんが降りて、わたしの席のドアを、開けてもらいました。

生まれて初めて、車のドアを開けてもらいました！

ちょっと、気分が良かったです。

わたしは逆側に回って、窓を開けたなつめちゃんに挨拶して、汐月さんと運転手さんにも挨拶して、車を見送りました。

今回は、ちょっとただけだけど、進展があつて、良かったです。

この調子で、少しずつでもいいから、なつめちゃんとの距離を、縮めていけたらと思いました。

11月25日 かなちゃんの噂

最近、かなちゃんについて、良くない噂を、聞く機会が増えてきました。

付き合いが悪くなったとか、わがままになったとか、

酷いになると、言う事を聞いてくれなくなったとか……

取り巻きだった人たちも、  
今までの半分くらいに減っていて、  
本格的に、清算を始めたんだと、感じています。

今はまだ、悪いうわさばつかり伝わってくるだけで、  
そういう変りつつある、かなちゃんを、  
良く見ている声は聞きません。

相変わらず、かなちゃんは忙しそうに、  
色んな人と、話をしていきますが、  
前の時とは、かなり雰囲気も変わっていました。

かなちゃん目当てに、周りの人が、  
集まっているのではなくて、  
かなちゃんが、その人たちとの間で、  
口論とまでは、行きませんが、  
あまり良い雰囲気ではない、会話をしているのが、  
目立つようになりました。

でも、わたしもかなちゃんも、  
こうやって、変えていった後には、  
今の方が良いと、思ってくれる人たちが、  
きっと出てくるはずだと、信じています。

今のところ、わたしには何の連絡もして来ないので、  
まだ1人で頑張れるんだ、と信じて、  
本当に、影ながらですけど、  
かなちゃんを見守っています……

11月30日 なつめちゃんの薬

週3回の、なつめちゃんの家での、勉強会のおかげで、苦手な教科の、中間試験までの復習と、期末試験の補習もしっかり出来て、なんだか、普段の授業も、苦行ではなくなってきました。

今日も、勉強していると、不意になつめちゃんが、わたしに、ポーチを見なかったかを、尋ねてきました。

ポーチとは、前に駅で見た薬のポーチのことで、薬を飲む時間なんだけど、見当たらなくて、このことで、わたしも、探すのを手伝いました。

なつめちゃんは、他の部屋を見に行くと言って、部屋を出て行き、わたしは、部屋を一通り見回したけど、落ちてはいませんでした。

ふと、なつめちゃんの学校のバッグが目止まって、この中に実は入ってて、見過ごしたんじゃないかと思い、口が開いていたので、失礼して中をちよっと覗くと、それっぽい柄が、奥の方に見えました。

わたしは、早く渡した方が良くかと思って、あんまり他のものは、見ないようにして、そのポーチを引っ張り出したら、チャックが、バッグの口に引っかかってしまい、



バッグから出すと同時に、ポーチの口が開いて、中の薬が、こぼれてしまいました。

何種類もある、落ちた薬を拾っていると、どこかで見たことある薬だと、思い出した錠剤を見つけたんです。

その錠剤だけは、普段薬なんて飲まないわたしでも、覚えていたものでした。

それは、亡くなった父が、良く飲んでいた薬だったからです。

父と一緒に過ごした時期は、父がホスピスへ入るのを拒否して、自宅で余生を過ごしていた時期に服用していた薬の1つで、その時期の父は、もう治療の為の薬ではなく、痛み止めや、精神安定剤などの、穏やかに生活する為の薬を、飲んでいたはずなんです。

この薬はたしか、あんまりはつきりは覚えていないんですが、痛み止めではなかった、ような気が……

とりあえず、わたしは散らばった薬をポーチに戻して、なつめちゃんに渡しに行こうと、部屋を出たところで、ちょうど戻って来た、なつめちゃんに会い、ポーチが見つかった事を、知らせて、なつめちゃんに渡しました。

なつめちゃんは、部屋に戻りながら、お礼を言いつつ、

いくつかの薬を飲んでいました。

その中に、あの薬も入っていて、わたしは気になってしまつて、思わず、その薬は、いつも飲んでるの？

と聞くと、なつめちゃんは、

「うん、これは毎日きまつた時間に、飲む薬だから、他にも食後のとか、寝る前とか、

色々たくさんあつて、大変なんだ」

と、苦笑しながら言っていました。

その後は、わたしもそれ以上は聞けなくて、普通に勉強して、帰つて来ました。

なつめちゃんの体調が良くないつて言うのは、もしかすると、わたしが思っていた、

小学校の頃の、なつめちゃんの時とは違う、

別の病気なんじゃないだろうか。

運転手さんや看護師さんが、そばに着いているのも、

単にお金持ちだからかと、単純に考えていたけど、

本当の理由は、付き添いが必要なほど、

良くない状態なんじゃないだろうか。

わたしの興味本位で、聞いてはいけないような、なにか、もっと深刻な病気なのかも知れない。

これから先、なつめちゃんと、

どう接していくのが良いのか、

良く判らなくなりました……



2009年 12月 その1 (前書き)

変更履歴

2011/04/16	記述変更	(クラス)	1組、2組、3組
A組、B組、C組			
2011/04/20	記述統一	(期間)	一日、二月、三年
1日、2月、3年			
2011/04/26	記述統一	一步、二歩、三歩	1歩、
2歩、3歩			
2011/04/29	記述統一	一個、二個、三個	1個、
2個、3個			
2011/05/04	記述統一	一回、二回、三回	1回、
2回、3回			
2011/05/20	記述統一	一つ、二つ、三つ	1つ、
2つ、3つ			
2011/07/16	記述統一	一人、二人、三人	1人、
2人、3人			

2009年 12月 その1

12月2日 なつめちゃんの急変、再び

今日もなつめちゃんと、一緒に帰って来ました。

先月までは、かなりあったかくて、ブレザーの下に、カーディガンで頑張っていました。今日から、急に冷え込んできたので、ついに、マフラーの出番です。

色はやつぱり、好きな色の水色で、お気に入りのものの1つです。

他に持つてるのは、ダウンジャケットなんだけど、あんまり色とかデザインが、好きじゃないから、これを着ないと、死んじゃうくらい寒くなるまで、着ないで頑張ります。

ちなみに、なつめちゃんは、学校指定の、紺のハーフコートと、ベージュのマフラーして、ニットの手袋もしていました。

なつめちゃんは、わたしにその格好を見られて、ちよつと照れたように、私寒いの苦手だから、と、言っていました。

この、学校指定のハーフコート、

別に、校則で義務付けられていないので、ほとんど着ている人がいません。

なので、じっくり見たのは初めてです。

着てる人が細身だと、学校指定のコートでも、けっこう、かわいいかも知れない。

この日の帰り、なつめちゃんの様子で、また気になる事がありました。

駅の前に、最近この駅にも増えている、怪しげなスカウトの人に、

なつめちゃんが、声をかけられたんです。

わたしは、そういうスカウトみたいなのは全くありませんが、美容院の人には、この長い髪の色いで、

よく声をかけられていたので、

めんどくさいなあ、と思っではいたけど、

別にシカトして素通りでもいいし、一言断れば済む事なので、これには、それほど気にしていなかったんです。

なつめちゃんに声をかけた、その人は、

わたしたちと、歳も対して変わらなそうな若い男の人で、

見た目は茶髪の日焼けした肌で、服も派手な感じで、

いかにもチャライ人でした。

なつめちゃんは、横に並ばれて声をかけられたら、なぜか、その場に立ち止まったんです。

そのせいでチャライ人に、これはいけると思われたみたいで、モデルの勧誘みたいな事を、言い始めていて、かなり怪しかったです。

でも、その時のなつめちゃんの様子が、普通ではなかったんです。

今まで見た事無いくらい、ものすごく動揺していて、チャライ人の言葉に、受け答えも全く出来なくて、体も見て分かるくらい震えていて、まるで声が出せないみたいに、口をパクパクさせていたんです。

チャライ人は、なつめちゃんの様子がおかしいのを見て、勧誘する時の笑顔から、怪訝そうになつめちゃんを睨み始めて、それを見たなつめちゃんの様子は、更にひどくなっていました。

わたしはとつさに、チャライ人に向かって一言だけ、結構です！

と言って、なつめちゃんの手を引っ張って、急いでその場を離れました。

とりあえず、なつめちゃんを、うちの学校の生徒が、いそもない場所で、落ち着けるところへ連れて行こう、と思って、春に行った、噴水公園に向かいました。

この日は、天気もそんなに良くなくて、公園内は、ほとんど人もいませんでした。

わたしは、あまり見通しの良くない奥のベンチを選んで、

なつめちゃんを座らせました。

なつめちゃんは、ここまで来る間もまだちょっと震えていて、呼吸も荒くて、額には冷や汗をかいていて、その様子は、前の電車の時とよく似ていると感じました。

汐月さんに、連絡した方がいいのかなと思いつながら、なつめちゃんの手をとって、大丈夫？と声をかけると、

ちよつと落ち着いたみたいで、わたしの手を握り返してきて、  
「……ごめん、なさい、もう、大丈夫、だから。」

もうちよつと、休めば、おさまる、から」と、うつむいたまま、わたしを横目で見て、荒い息をつきながら、ちよつと不安そうな表情で、わたしに伝えました。

なつめちゃんを安心させなくちゃ、と思って、わたしは、意味があるか判らなかつたけど、うつむくなつめちゃんに、見上げるように顔を近づけて、握られた手を、わたしも握り返しながら、なつめちゃんが落ち着くまで、背中をさすっていました。

この間にわたしは、また急変したら、汐月さんに連絡しなくちゃ、とか、名刺に番号書いてあったかな、とか、なつめちゃんの携帯を借りれば、とか、持つてる薬のポーチはバッグのどの辺だろ、とか、色々心配になってました。

でも、わたしの心配は不要だったようで、



20分くらいしたら、震えもおさまって、呼吸も普通になりました。

「また、迷惑かけてしまったって、本当にごめんなさい。もう落ち着いたから、本当に大丈夫。

心配させてしまったって、本当にごめんなさい」と、なつめちゃんは、ひたすら謝り続けていました。

おとといに見つけてしまった、薬の件もあって、どうして急に体調が悪くなったのか、なんて聞けなくて、なんて声をかけていいのかが判らなくて、当たり前障りのない、この公園に前に来た時の事を、わたし1人が、一方的に喋っていました。

なつめちゃんは、わたしの話を、いつものように、見せようとしていて、普段通りに、相槌をうちながら、小首をかしげて、聞いていました。

でも、いつも通りのはずはなくて、それは、そう見せようとなつめちゃんが、必死に装っているのが、分かってしまって、わたしも、さっきまでの事はなかったように、関係ない別の話題を、話し続けました。

何も聞かない、わたしのことを、なつめちゃんは、どう思っているのか気になったけど、本人から言い出してくれるまでは、とても聞けない、と思いました。

この後しばらくしたら、  
なつめちゃんは、すっかり良くなったので、  
予定通りに、なつめちゃんのマンションへ、  
勉強しに行って来ました。

勉強中に、一度汐月さんがお茶を持ってきた時に、  
今日の出来事を、汐月さんに伝えるべきなのか、  
と考えていて、わたしは思わず、  
何度か、汐月さんを見つめてしまい、  
そんなわたしのそぶりに、何かあると思われたらしくて、  
逆に、汐月さんに見つめられてしまって、  
わたしの方が、動揺してしまいました。

結局、汐月さんに伝える機会もなくて、  
そのまま帰る時間になってしまい、帰ってきました。  
なんで、なつめちゃんの様子が、急に変わったんだろう。

あの薬が、わたしの思った通りなら、  
電車の時も今回も、何かがなつめちゃんを動揺させて、  
ああなってしまったのだろうけど、  
わたしは、心療内科の先生やカウンセラーではないから、  
よく分かりません……

やっぱり汐月さんに伝えて、そういう時の正しい対処とかを、  
聞いてく方が、良いのでしょうか。

でも、なつめちゃんのことを無視して、  
汐月さんに話すのも、何だか気が引けるし、  
第一、わたしは身内でもない、ただの友だちであって、

病気とかの事を、他人のわたしが口や手を出すなんて、それこそ、向こうからしたら、いい迷惑じゃないだろうか。むしろ、わたしがいない方が下手に手を出されなくて、ありがたいとか、思われてるかも知れない。

わたしは、どうしたらいいんでしょうか……

12月4日 わたしとなつめちゃんとの距離

今日は珍しく寝坊してしまい、お弁当が間に合わなくて、お昼代としては、高くつくけど仕方なく、昼休みにお昼のパンを買いに、購買部の売店へ行きました。

パンの売り場は、ものすごく混んでいて、とても入っていけない雰囲気だけど、水でのぐ訳にもいかないので、頑張って突撃しました。

そこはまるで、満員電車のような状態で、もみくちゃにされてしまいました。なんとか、アンパンとカレーパンは買えました。

両方とも1000円の、一番安いパンです。

自分の教室に戻ろうとした時に、後ろから大きな声が出て、びっくりして、立ち止まって振り返ると、一年A組の男子たちが、騒ぎながら、

ちょうど、わたしを抜いていくところで、その人たちの会話が、聞こえてきました。

「ったく、メシ買うのもだりいな、ああ混んでると」  
「それだったら、あいつにパシらせればいいじゃん」  
「あいつって誰だよ」

「決まってるだろ、あの女以外いねえだろうが」  
「はあ！？ あいつまでも口もきけねえじゃん」  
「それは俺たちに対してだけだろ？」

「そういえば、授業ではまともに喋ってた」  
「だろ？ だから今度パシらせようぜ」

「でもそれって、あいつが買ってこれなかったら昼飯ねえぞ」  
「じゃあ、見張りつけて買えるまで、

売店から出さねえようにするとかどうよ」

「それ、おめえがやれよ」  
「ぎげんな、おめえがやれよ」

「とりあえず、後で怜れいに言ってみようぜ、これ。もつと楽しい遊びになるかも知れねえし」

「怜はあいつが来た時から嫌ってたしなあ、すぐに学校来なくなっちゃいそうじゃね？」

「そしたら、おもちゃがなくなっちゃうじゃんか」

「そんなときは別のやつで遊べばいいだろうが、べつに」  
「まあな」

これ以上は、引き離されてしまつて聞き取れなかったけど、あの人たちの言っていた『あいつ』というのは、なつめちゃんのことなんじゃないか、と思つて、とてもとても、気になりました。

でも、それを確認する為に、A組の様子を見に行くのは、

あえて、しませんでした。

もし『あいつ』と言うのが、なつめちゃんだったとしたら、逆の立場で、わたしがなつめちゃんだったら、わたしに、そんな姿を見られたくないし、知られたくもないと、思うから……

聞いてしまった会話のせいで、買ってきたパンも、あまり食べる気にならなくて、1個、残してしまいました。

放課後いつも通りに、待ち合わせ場所へ現れたなつめちゃんは、やっぱり普段と変わらず、いつも通りで、わたしはあの会話のことが、気になって仕方がないけど、なつめちゃんに、わたしのそういう気持ち悟られないように、出来るだけ、意識しないようにしていました。

この日の勉強会は、試験前の総復習で、試験対策は万全で、問題ないけど、別の問題は、大きく膨らむ一方で、この日も、お茶を出しに来た汐月さんと、また目が合ってしまった。

勉強がちよつと長引いてしまって、時間が遅くなってしまう、なつめちゃんから、夕食を勧められたけど、今日は電車も動いているし、母親も帰ってくるから、と、誘いを断って帰ってきました。

帰り道、わたしはふと思いました。

今日、もし電車がまた止まっっていて、  
母親が、出張で帰って来ない日だったら、  
わたしはどうしたんだろう、と思うと、  
かなり、複雑な心境です。

なつめちゃんに、話を聞くのも出来ないし、  
それを知っていることを、感づかれるのも良くないし、  
何だか、とても気が重いです。

最近、なつめちゃんに、打ち解けてほしいとか、  
思っていた、わたしの方が、  
なつめちゃんから、遠ざかり始めているような、  
そんな気がして、  
このままじゃ、ダメな気がしています……

12月7日 期末試験開始

今回の試験は、全然不安はなく、  
前日の徹夜なんて、もちろんしてません。

むしろ、いつもよりも早く寝たくらいです。

これも全て、なつめちゃんのおかげです！

試験の問題を見ても、今までは、勉強不足のせい、  
見たことない問題ばかりな、そんな気がしてたけど、  
今回は、知ってる問題ばかり出てくるような感じで、

何だかとても簡単でした。

テスト時間も、半分近く余ってしまって、  
答案用紙も3回見直して、見飽きてしまい、  
残り時間は寝てました。

これなら、午後からバイト入れとしても、  
大丈夫だったなあ。

一緒に帰ってきた、なつめちゃんに、  
このことを話すと、とても喜んでくれました。

テスト期間中は、勉強会はお休みで、  
わたしの降りる駅で、なつめちゃんと別れました。

今日のなつめちゃんは、いつもよりもちょっと元気がなくて、  
何かを気にしているような、感じに見えたけど、  
それが何なのかが、わたしには分かりませんでした。

とりあえず今は、試験で結果を出して、  
なつめちゃんに、良い報告が出来るように、  
頑張ろうと思います。

12月11日 期末試験終了

とうとう、最終日のテストも終わりました！

今回は、全ての教科に自信があります！

生まれて初めて、テストが楽しいと思いました！

これも全て、なつめちゃんの指導のおかげです。

なつめちゃんは今日の夜に実家に戻って、終業式まで、こっちは、帰って来ないとのことでした。

わたしは、なつめちゃんにお礼がしたいと思って、

今度時間がある日がいつかを尋ねると、

終業式の日は、1日こっちで次の日に実家に行くから、そこなら大丈夫、と答えました。

わたしは、勉強を覚えてくれたお礼に、

その日に1日なつめちゃんに付き合うよ、と言うと、なつめちゃんは、とても嬉しそうに喜んでくれました。

いつもこういう表情で、

いさせてあげられれば、いいんだけど、

わたしの力では、ほんのちよつとの時間しか、そうしてあげることが出来ません。

学校から駅までの道で、前から気になっていた、

なつめちゃんの様子も、気にかけてながら、駅へと向かいました。

どうも、なつめちゃんが気にしているのは、

周りにいる、生徒のことみたいで、

後ろから来た人たちに、追い抜かれたり、前で話している人とかを、



すごく気にしているのが、分かってきました。

この時に、この前聞いたA組の人たちの話を思い出して、なつめちゃんはクラスで、何かかかっているんじゃないかと、考えてしまい、とても心配で、気になったけど、今のわたしには出来るのは、ちよつと遠回りになるけど、通る生徒が少ない道から、駅に向かうことくらいでした。

周りに生徒が、ほとんどいなくなると、なつめちゃんの様子も、ちよつとは落ち着いたような、感じがしました。

その後も特にアクシデントもなく、駅に着いて、電車も、時間がちよつと遅くなったからか、うちの学校の生徒は、ほとんどいなくて、これなら大丈夫かな、と思つて、席に並んで座つただけで、なつめちゃんは、ちよつと落ち着きがなくなつて、わたしにくつつくように、座りなおしたりしていて、まだ、何かに怯えているみたいでした。

わたしは、周りに見えないように、なつめちゃんの手を握つて、少しでも、気がまぎればと、どうでもいい話をしていました。

わたしの行動に、効果があつたのかは分かりませんが、なつめちゃんは、ちよつとは楽になつているように、わたしには見えませんでした。

しばらくして、わたしの降りる駅について、なつめちゃんに挨拶してから、立ち上がるうとして、なつめちゃんの手を離れた時、ちよつと不安げな表情に戻ったのを見て、わたしは、降りるのを止めて、また席に座りなおして、なつめちゃんの降りる駅の改札まで、一緒について行きました。

なつめちゃんは、改札前の別れ際に小さい声で、「ありがとう、みな」と、わたしに言い残して、帰っていきました。

なつめちゃんのお礼の言葉は、今のわたしには、とても心苦しく感じました。

わたしには、こんなことしか出来なくて、色々、良くしてもらってるのに、全然なつめちゃんに、その恩も返せてないし、それどころか、今のなつめちゃんと、どう付き合えばいいか、分からなくなつて、むしろ、ちよつと距離を置いた方がいいのかとか、考えたりしている。

なつめちゃんは、あんなに何を怖がっているんだろう、なんで、そうなつちやつたんだろう、それは、どうやったら直るんだろう、今その治療をしているんだったら、いつになれば、良くなつていくんだろう。

聞きたいことは、たくさんあるのに、  
どれも、とても大事な事なのに、  
何1つ、わたしは聞くことが出来ません……

12月15、16日 なつめちゃんの真相

試験休みに入ってから、毎日終日バイトを入れて、  
その時間は、なつめちゃんのことを考えないようにして、  
過ごしたけど、ちよっと気を抜くと、  
すぐに気になってしまって、  
バイトにも集中できない日々が続いています。

なつめちゃんのことを、色々考えてみたけど、  
やっぱりわたしには、どうすればいいか分からなくて、  
まず、なつめちゃんの現状が、  
本当はどうかを、確認しようと思いました。

もしかしたら、あれはなつめちゃんのことじゃなくて、  
わたしの勘違いであれば、それで解決するし。

そう、思いたいです。

こんな時に頼れるのは、かなちゃんしかいなくて、  
向こうもまだまだ大変で、悪いかなどは思ったけど、  
かなちゃんなら、他のクラスのことも、  
何か知っていると思って、連絡しました。

電話してみると、かなちゃんはすぐに電話に出ました。

わたしからの電話に、  
かなりびっくりしている口振りのかなちゃんでしたが、  
わたしの幼馴染で、二学期にA組へ転入してきた子のことで、  
何か良くない話とかがあったら、そのまま全部教えてほしい、  
と、お願いしました。

かなちゃんはわたしの口調から、その真意を読み取ってくれて、  
ちよつと黙った後に、

「今はちよつと時間ないから、  
遅くなるかもしれないけど、

今日中にはメールするよ。

確認だけど、

みなもは、本当にそのまま全部、

その子のことを知りたいんだね？」

と、かなちゃんは訊いてきたので、

わたしは、全部そのまま教えて欲しい、ともう一度伝えて、

かなちゃんは、分かった、と一言答えて、

電話は切れました。

この日の夜、12時前くらいに、かなちゃんからのメールが来て、  
それを待っていたわたしは、

予感が外れていますようにとお祈りしてから、

何回か深呼吸した後に、覚悟を決めて、メールを読みました。

そのメールの内容は、わたしがお願いした通りの、  
全くごまかした表現のない、  
ストレートな内容が書いてありました。

「仁科 棗はクラス内に今でも友だちはいない。

その理由は自分からほとんど話そうとしないのと、授業中の先生からの質問には普通に答えるけど、クラスの子から声を掛けても興味がないみたいにすぐ会話をきるから。

ある日、その態度が気に食わなかった子が問い詰めると、すぐく怖がって震えていてもつてばかりいて、まるで発作でも起こしたみたいになつてから、誰もまともに相手しなくなった。

本人も出来るだけ距離を置こうとしているようで、休み時間や昼休みもずっと教室からいなくなっている。教師たちが仁科の肩を持っているという噂もあって、

仁科に表立って手を出して苛めたりする子はいないが、  
門<sup>かどの</sup>塾 怜<sup>れい</sup>だけは、

仁科の事を邪魔だと思つている事を公言していて、この女の取り巻き達は門<sup>かどの</sup>塾への点数稼ぎの為に、教師にはべれないように嫌がらせをしている。

近いうちに門<sup>かどの</sup>塾の指示で何かを仕掛けるといふ噂がある。門<sup>かどの</sup>塾だけには気をつけた方がいい。

あの女に巻き込まれると本当に危ないから。  
またなんか分かつたらメールする」

いつものかなちゃんなら、絶対に送つてこないその文面は、わたしにとって、胸が締め付けられる内容でした。

読んでいる途中で、涙が出てきたけど、がんばつて最後まで読みました。

かなちゃんは、こんなひどい嘘をつくはずないし、知らなければ知らないし、言ってくれるはずだから、わたしからの、頼みの意味を理解してくれたからこそ、

真実だからこそ、こういう内容を送ってきた事が分かって、それが余計に悲しくて、仕方ありません。

この日は、ずっと涙が溢れて止まらなくて、泣いているうちに、いつの間にか眠ってしまい、気付いたら、朝になっていました。

でも、まだ立ち直れなくて、この日のバイトは、忍さんに連絡して、お休みさせてもらいました。

忍さんは、わたしが理由を言う前に、

「そんなの言わなくていいよ、

その声でだいたい分かるから。

こっちは大丈夫だから、今日はゆっくり休みな。ちゃんと仕事出来るようになったら来て。

明日も駄目なら、また私に連絡して」

と、わたしの状況を察してくれて、

わたしは、今度ちゃんと説明します、

と、何とかそれだけは伝えて、電話を切りました。

この日も、1日中、ごはんも食べないで、ずっと泣きっ放しでした。

泣いててもしょうがないし、

何も解決しないのも、頭では分かっているけど、

涙は全然止まらなくて、

ティッシュ箱2つ、使い切ってしまいました。

午後に、また泣いてるうちに眠っていたようで、気がつくのと、夜になってました。

ちゃぶ台にうつぶせになっていて、  
寝てる時も、泣いてたみたいで、  
水浸しになっていました。

ちゃぶ台を、布巾で拭いていたら、  
いっぱい泣いたせいなのか、  
それとも、お腹が減ったせいかも知れないけど、  
何だか、気持ちがすっきりして、  
やっと、前に踏み出せるような気がしてきました。

昨日作る予定だった、夕食のおかずを作りながら、  
まず明日は、バイトへ行つて、  
忍さんにちゃんと報告しよう、と決心しました。

この日は、ご飯をいつもの倍くらい食べて、  
かなちゃんに、メールのお礼を返信して、  
お風呂に入つて、すぐに寝ました。

まずは、手始めにバイトから再スタートします！

12月17日 忍さんへ報告

今日は、朝からバイトへ行ってきました。

最近、忍さんも大学の方が忙しくて、  
週に2日か3日くらいしか、お店に出てないのですが、  
今日は、午後から来ていました。

わたしは、話を聞いて欲しいので、時間をください、  
とお願いして、夕方の休憩時間の30分、  
時間をもらいました。

昨日、心の整理が出来て、決心がついたおかげか、  
今日は集中して、バイトの仕事にも打ち込めました。

やがて、夕方の休憩時間になって、  
わたしは、忍さんのところへ行って、  
幼馴染の友だちのことがショックで、昨日は来れなかったこと、  
でも1日泣いたら、どうしたら良いかは分からないけど、  
何となく、前進出来る気がして、まずはバイトに来たこと、  
なんかを話しました。

忍さんは、黙って私の話を最後まで聞いていて、  
聞き終えた後、わたしに、

「で、みなもちゃんはその子のこと、どうするの？

進展させようと決めて、ここに来たってのは、

昨日、止まつちやったいろんなものを、

1つずつ再開させていこうって、思ったからでしょ。

まずは手始めに、休んでたバイトへ来た、と。

で、次は？

次はその幼馴染の子を、どうするの？」

と、尋ねてきました。

わたしは忍さんに、正直な今の気持ち、  
その子を出ることなら、助けてあげたいと思っている、  
でもその為に、どうしたら良いかはまだ分かっていない、  
などを伝えました。



忍さんは、わたしの顔を見て、私の助言が欲しいの？  
と、尋ねられて、

わたしはただ、忍さん聞いて欲しかっただけで、  
どうしたら良いかまで聞いて、頼るつもりはなかったの  
わたしは、ううん、と首を振りました。

忍さんは、そう、と一言いつてから、

「なら、助言はしない。

私もみなもちゃんが、自分で決めた方向に、  
進んで欲しいし。

みなもちゃんは、自分の行動を、

自分の意思で、決定するタイプだから。

みなもちゃんが、本当に求めたい結果に向かって、  
迷わずに突き進めば良いんじゃない？」

と、言われました。

わたしは、忍さんに、話を聞いてもらったお礼を言って、  
仕事に戻りました。

これで、まずは1歩、前進出来ました。

次に、何をすべきかが、

何となくですが、見えてきた気がします。

2009年 12月 その2(前書き)

変更履歴

2010/10/14	小題の日程追加	12月20日	汐月さん
2010/10/14	小題の日程修正	12月22日	汐月さん
からの資料	12月21日		
2010/10/14	小題の日程修正	12月23日	終業式
12月22日			
2011/03/25	誤記修正 P・S	P・S・	
2011/03/31	記述統一	一週間、二日間、三時間	
1週間、2日間、3時間			
2011/04/06	記述修正	く、て	くって
2011/04/07	記述修正	みなと二人で遊びにこれるなんて、	
2011/04/16	記述変更 (クラス)	1組、2組、3組	
A組、B組、C組			
2011/04/20	記述統一	(期間) 一日、二月、三年	
1日、2月、3年			
2011/04/22	記述統一	第一、第二、第三	第一、
第2、第3			
2011/05/08	記述統一	一階、二階、三階	1階、
2階、3階			
2011/05/15	記述修正	聖アンナ医科大学	聖アン
ナ医科大学神経精神科学			
2011/05/21	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/07/17	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			

2	2
0	0
1	1
1	1
/	/
0	0
9	9
/	/
0	0
3	2
誤植修正位	誤植修正位
く らい	く らい

2009年 12月 その2

12月20日 汐月さんに電話

この前、忍さんに話を聞いてもらって、  
決心が付きました。

なつめちゃんの為に、わたしがしてあげられることを、  
出来るだけやってみようと。

まずは、なつめちゃんの体調の不安を少しでも助けたいから、  
汐月さんに、なつめちゃんのものどもの時の対処を、  
確認しておくことにします。

汐月さんからもらった名刺にある、連絡先に電話しました。  
今日かけたのは、平日はなつめちゃんのお世話だろうから、  
日曜なら、仕事ではないかな、と思って今日にしたけど、  
電話してから、日曜日は仕事用の連絡先の電話は出ないかも、  
と気がついて、失敗したかなと思ったら、電話に出ました。

わたしは、繋がった途端にいきなり緊張してしまい、  
思うように声が出なくて、  
多少声が上がりにながら、名前を伝えたら、  
いつもの早口で、威圧される口調とは違って、  
とても穏やかで聞き取りやすい、ちよっと低めの声で、  
「ああ、三崎さん？」

焦らなくても大丈夫です、判ります。  
栗お嬢様なら、今日は実家に戻られているから、

何かあれば、お嬢様の携帯に連絡されれば、繋がりますが、どうかされましたか？」  
と、なつめちゃんに連絡したいと思われたようです。

わたしはそれを否定して、汐月さんに、話したいことがあって、その時間が欲しいことと、なつめちゃんに何かあった時の、対処を教えて欲しいと、お願いしました。

汐月さんは、今はちょっと手が離せないから、1時間後に、こちらから折り返し連絡することと、自宅の電話番号を伝えて、一旦電話を切りました。

わたしは、この連絡を待っている間に、とりとめもない説明に、なっではいけないので、下校中に二度、様子がおかしくなったことや、学校での、同じクラスの生徒の話や、何かに怯えているような、そぶりや、かなちゃんからの、メールの内容なんかを、要点を書き出して、まとめておきました。

そうしているうちに、汐月さんから電話がかかってきて、わたしは早速、さっきまとめておいた、なつめちゃんのことと、気になった出来事のうち、二度様子が変わったことについて、出来るだけ忠実に、伝えました。

汐月さんは、やはり落ち着いた声で、時々相槌をうちながら、わたしの話を聞いていました。

そして、それらの説明が終わった後に、わたしは、なつめちゃんの病気について、無理を承知で、出来るだけ教えて欲しいと、お願いしてみました。

汐月さんは、しばらく黙っていて、

多分、どう説明して断ろうかを考えているんだと、思いながら待っていると、

汐月さんはわたしに、思わぬ質問をされました。

「私から三崎さんに質問したいのですが、

三崎さんが把握している、棗お嬢様に関するお話は、それで全てでしょうか？」

わたしはその質問に驚いて、あの、と言ったまま、返答を、どうしたものかを考えていました。

怯えていたことや、A組の生徒の話や、かなちゃんの話は、まだ、なつめちゃんを差し置いて話す決心が、ついていなかったんです。

でも、この時の汐月さんの言い方は、まるで、全てを知っている上で、

わたしを試しているような、そんな気がして、わたしは、どう答えたら良いのか、悩みました。

汐月さんは、この間黙ってわたしの返答を待っていました。

そこでわたしは汐月さんに、答える前に1つだけ、質問させて欲しい、とお願いしてから、

あなたはなつめちゃんの、心の病気の主治医ですか？

と、質問しました。

汐月さんはこの質問に、どう答えて良いかを考えていたのか、すぐには、返事を返してくれませんでした。

今度は、わたしが黙って待っていると、

軽く、ため息をつくのが聞こえた後に、

「いきなりそう聞いてくるとは、予想外だったわ、思ったより大胆な行動に出るのね、三崎さんは。

判りました、お答えします。

私は棗お嬢様の家政婦であり、

持病の自宅療養を補佐する看護師でもありますが、

棗さんはクランケの1人です。

本職の私の肩書きは、

聖アンナ医科大学附属病院精神神経科医長、

または、聖アンナ医科大学神経精神科学の客員准教授です。

もし信じられなければ、ネットで検索してもらえば判ります。

そこに載ってる顔写真はちょっと若いけどね。

私の本職は、プシヒョロギー、

英語ではサイコロジスト、つまり心理学者です。

これでいいかしら」

汐月さんは、色んな資格を持つてるって聞いていたから、

カウンセラーの人なんじゃないかと思って、

聞いてみたのですが、

まさか大学の先生で、精神神経科の先生だとは思ってなくて、とてもびっくりしました。

先生だったから、聞きやすい話し方だったんだなあ、と、わたしは納得しました。

この後、汐月さんは改めてわたしに、他に知っていることを教えて欲しい、と言われて、わたしは、なつめちゃんのことので気になっていることを、全て話しました。

私が話し終えると、汐月さんは特に驚くこともなくて、もしかして、全部判っていたんじゃないかと思ってしまいました。

この後、私のお願いした件の話になりました。

「最初に、三崎さんが私に要求していた、棗さんの病状の件ですが、

これは私の口から話す事は出来ません。

理由は、貴方が棗さんの親族や保護者ではないからです。本人からの許可を取り、その証明を私に提示して頂ければ、ご説明する事は可能になります」

と、やっぱり他人のわたしには、教えてもらえませんでした。

かと思つたら、説明は続いて、

「棗さんの具体的な病名や症状については、

お話出来ませんが、一般的な精神疾患の初期症状に対する、応急処置の方法については、教える事は可能です。

これは、精神医学の講義内容の1つですから、是非、勉強して十分に理解して下さい。

資料はご自宅に郵送で宜しいですか？」

と言うことで、資料を郵送してもらえることになりました。

わたしがお礼を伝えた後、

汐月さんは、電話の最後に改まった口調になって、



「三崎さん、今の棗さんにとって、  
貴方の存在は、非常に大きなものになっています。  
貴方は、棗さんのご両親よりも、  
私達医師よりも、重要な存在なのです。  
私達から棗さんの件に関して、貴方に対して、  
何かを強要する権限はないので、  
貴方の好意に頼るしかないのですが、  
棗さんの回復を願うのであれば、  
三崎さんが出来る範囲で構わないので、  
今は彼女の心の拠り所として、  
彼女の力になってあげて下さい。  
これは、主治医としての、私からのお願いです。  
どうか宜しくお願いします」  
と、お願いされました。

わたしはその言葉に、分かりました、頑張ります！  
と答えて、電話を切りました。

思い切って、汐月さんに電話してみても良かったです。

これでひとつ、なつめちゃんに対する不安が、  
解決出来そうです！

12月21日 汐月さんからの資料

汐月さんをお願いしていた、  
なつめちゃんの応急処置の資料が、今日届きました。

それは手紙だと思っていたら、結構重い小包でした。

私のイメージでは、手紙に箇条書きで、こんな時は、こうする、みたいなものだと思っていたから、一体何が入っているんだろう、と思い、さっそく開けてみると、その小包の中身は、精神医学の教科書が3冊と、メモが1枚入ってました。

『やさしい精神医学』

『現代臨床精神医学』

『精神医学辞典 縮刷版』

メモには、

「三崎さんへ

先日、お約束した資料を送ります。

目を通して欲しい箇所を、分かる様にしておいたので、そこだけ、理解してもらえれば良いです。

まずは、『やさしい精神医学』から読んで、

次に、『現代臨床精神医学』を読んで下さい。

『精神医学辞典 縮刷版』は、辞書なので、分からない用語を調べる際に使ってください。

この資料は、差し上げますので、

その代わり、しっかり活用して下さい。

期待しています。

汐月

と、きれいな線の細い字で、書いてありました。

これ、きつとお医者さんになる大学生の人とかが、

勉強する為の本にしか見えません。

結構ページ数もあって、分厚いです。

ここで、汐月さんの、

電話での言葉を思い出しました。

よく勉強して理解して下さい、と。

こんな難しい本を、わたしが理解出来るだけでも、  
思っただけでしょうか……

でも読まないで、なつめちゃんのものもしもの時に困るから、  
気合を入れて、手にとって開くと、  
本の上のところに、ちよつとだけ付箋紙の端が出ていて、  
たくさん付箋紙が貼ってあるのが分かりました。

付箋紙のページを開くと、マーカーが引いてある場所があって、  
読む必要のあるところが、分かるようになっていました。

……と言っても、付箋はたくさん付いていて、  
マーキングされてる所も、意味の分からない言葉が多くて、  
やっぱり、大変そうです。

でも、ここまでしてもらったんだから、  
何とかがんばって理解して、期待に応えないといけません！

今日から、勉強開始します！

12月22日 終業式

今年最後の登校日、終業式です。

でも昨日まで、バイトと例の勉強で、あんまり寝てなくて、フラフラですが、今日は、なつめちゃんへの恩返しだから、気合を入れていきます！

その前に、まずはわたし的には恒例のイベントの、校長先生のタイムトライアルです。

前はマイクの不具合で、惜しくも記録ならずでしたが、今回はどうだろうか、ドキドキしながら待っていました。

なんと今回は、痛恨の表彰式イベントが割り込んで、大幅にタイムロスしてしまい、結果は、6分5秒でした。

校長先生には、来年こそは記録更新を狙って、がんばってもらいたいです。

今回は一学期と違って、通知表も待ち遠しかったです。

結果は、テストの結果のおかげで、ほとんどの教科が上がりました！

こんなに良い成績の通知表は、生まれて初めてもらいました。

すぐには信じられなくて、  
思わず、何回も見返してしまいました。

これも全部、なつめちゃんのおかげです、  
どれだけ感謝しても、足りないくらいです！

終業式の後には、前に約束していた通り、  
なつめちゃんの家には、遊びに行きました。

なつめちゃんへ、成績のことを話すと、  
まるで自分のことのように、嬉しそうにして、  
「それは、みながかんばった結果だよ」  
と、言ってくれました。

この日のなつめちゃんは、いつもより調子が良さそうで、  
帰りの道中でも、それほど周りのことを、  
気にしていない感じでした。

やっぱり、明日から学校がお休みだからかなあ、  
と思うと、ちょっと複雑です。

家に着いた後のなつめちゃんは、  
やっぱり、一番安心出来る場所だろうけど、  
不安げな感じは、完全になくなって、  
2人である時の、比較的元気な、  
なつめちゃんになりました。

玄関で出迎えに出てきた汐月さんと、目が合いましたが、  
電話の時の落ち着いた感じは、またなくなっていて、

すっかり苦手な人に戻ってました。

今日の汐月さん、何かが違うっていたような気がしたけど、何が違うのか良く分からなくて、途中で考えるのがめんどくさくなって、まあいいかと思って、考えるのはやめました。

今日1日は、勉強を教えてもらったお礼として、なつめちゃんの望むように過ごそうと、わたしは決めていました。

時計を見るとまだ11時で、時間はたっぷりとあります。

わたしはなつめちゃんに、何かしたいことはない？と尋ねると、なつめちゃんはしばらく考えてから、「今日は天気もいいし、ドライブに行かない？」

制服だと、汚れたりしたら大変だから、

私の服に着替えていくのはどう？」  
とのことでした。

ドライブに行くのは、全然いいんだけど、明らかに、この制服よりも高そうな、なつめちゃんの持っている服に、着替えるってのが、とっても、引っかけました。

だって、平凡な庶民のわたしが似合う訳がないですから。でも、なつめちゃんはわたしを着替えさせたいらしく、期待のこもった視線を、わたしに向けていました。

きつとわたしは、着せ替え人形とか、  
小さい子に可愛い服着せてみたりする、  
そういう対象にされているんだ、と悟りました。

ここでわたしは、自分の中で決めた宣言を思い出して、  
覚悟を決めて、いいよ、と言いました。

さつそく、なつめちゃんは汐月さんに、  
これから海に行く事を伝えて、準備をお願いした後、  
わたしを、今まで入ったことがない部屋へと、  
案内しました。

その部屋は、ウォークインクローゼットと言うよりも、  
衣裳部屋でした。

十畳以上はある部屋の壁全面に、衣装ダンスが並んでいて、  
部屋の中央には、大きな全身鏡があり、  
その周囲には、パイプハンガーが、  
三重に取り囲むように、置かれていて、  
そのほとんどの、洋服がかけてありました。

見えるのだけでも、何着くらいあるのか、  
さっぱり分かりません。

かなちゃんの時も、おんなじようなことがあったけど、  
まだあつちの方が普通だったかな、と、  
ちよつと懐かしく思いました。

なつめちゃんは、  
いくつかのワンピースとカーディガンを取ってきて、

「この中で気に入ったの、ある？」  
と、尋ねられました。

どれもかわいくて、高そうな服でしたが、  
その中でも、目を引いたのは、  
淡い水色をした、シフォンレースワンピースでした。

デザインは一番地味で、大人しめだったけど、  
その色が気に入って、それを指差しました。

合わせる白のカーディガンは、こっちもシフォンのレースで、  
ちよっと下のワンピースが透けて見える感じで、  
服だけを合わせてみると、とてもかわいいです。

問題は、これをわたしが着ると言うことです。

なつめちゃんは、似合うと思うよ、と言ってくれましたが、  
それはまちががなく、慰めでありお世辞です。

でも仕方ないので、着替えてみました。

やっぱり、めっちゃめっちゃかわいいです、服は。

中身が服に、置いてかれています……

鏡に映った自分を見ると、  
自分でいうのもなんですが、  
なんか、出来損ないの合成写真みたいです。

もう、気にするのはやめる事にします。



今履いている靴は学校指定の、こげ茶のローファーで、この格好には、合わないんじゃないかと思っていたら、なんと、なつめちゃんとわたしは、足のサイズがほとんど一緒に、用意してもらったパンプスを、いくつか履いてると、その中の1つが、サイズがぴったり合って、それは問題なく履けました。

でもこの格好で外は、寒くない？と聞くと、なつめちゃんは、ファー付きのカシミアっぽい、ハーフコートを持ってきました。

コートを羽織った姿を見た時、正直わたしからするとこの格好、どこのパーティーに行くんだろう、と思いました。なつめちゃんの方も、いつも通りのワンピースに、コート姿へと着替えてから、2人で玄関へ向かうと、汐月さんが待っていて、車の準備も出来ました、と告げて、一緒にマンションを出ました。

どうやら、汐月さんも一緒にみたいです。

汐月さん、表情変らないから、わかんないけど、わたしの格好見て、どう思ったのかなあ、冷静な第三者の意見が、すごく聞きたいです。

マンションのエントランスを出ると、前に家にも送ってもらった時と、同じように、怖い運転手さんが、待っていました。

「そういえば、みんなに紹介してなかったね。

こちらは、運転手の榊さかき」

と、なつめちゃんの紹介で、

榊さんは、頭を下げました。

榊さん、やっぱり大きくて怖いです。

なんとなく、ヒョウちゃんが持つオーラと、

榊さんの雰囲気は、似ている気がする。

榊さんも、わたしの格好を見ても、

完全な無表情でした。

ああ、どう見えるのか、気になって仕方がない……

わたしも合わせて、頭を下げて挨拶してから、

車に乗り込んで、出発しました。

車の席も前と同じで、わたしとなつめちゃんが後ろで、

汐月さんが助手席です。

わたしは、なつめちゃんに、

ドライブって何処に行くの？

と、尋ねると

「海を見に、行きたいなって、

思ったんだけど、どう？」

と、ちよつと遠慮がちに、逆に訊かれて、

わたしは、ドライブでいい場所も特に知らないの、

いいよ、と答えて、決まりました。

走っていると、そろそろお昼近くになって、  
昼ごはんはどうするのかなあ、と思い、  
なつめちゃんに聞いたら、

「お昼は、お弁当を届けてもらうの、  
目的地についてから、食べるから」

と、言った後に、付け加えて、

「私、アレルギーで、

普通のお店の食べ物は、食べられなくて、

普段、私が食べる食事は、

食事の宅配サービスで届いたものを、

汐月さんが、用意してくれてるの。

今日のお弁当も、そこに注文してるから、

悪いけど、到着するまで待ってね」

と、説明されました。

あの完璧なご飯は、お店のだったと分かり、

どつりでよく出来ていた訳だあ、と納得しました。

それにしてもその宅配サービス、自宅じゃない海に、

そこに出張して、デリバリーが来る？

と言っことでしょうか。

随分広範囲まで、カバーしているサービスなんだなあ、  
と思いました。

車で1時間ほど走ると、海沿いの道に出ました。

久しぶりに見た海は、とても青くてきれいでした。

冬の空も青く澄んでいて、とても高く見えて、細くて長い真っ白なすじ雲と、飛行機雲が交差して、空に大きなバツを描いていました。

ああ、カメラ持ってくれば良かったなあ……

そんなきれいな空と海を眺めながら、30分くらい走って、目的地へとやってきました。

その周辺は、別荘が立ち並ぶ場所で、その中でもかなり大きい家の脇に、車は止まりました。

家の前は、海岸が広がっていて、すぐ海です。

海へ行くって言うのは、海辺にある別荘に遊びに行く、という意味だったのかと、ここで理解しました。

既にデリバリーらしい車も着いていて、汐月さんは昼食の支度が出来たらお呼びしますと、言い残して、すぐに、デリバリーの人のところへ向かい、私となつめちゃんは、コートを羽織って、海岸へと向かいました。

途中で、ふとなつめちゃんの薬のポーチが心配になって、なつめちゃんに確認すると、

「コートのポケットを探っていたけど、見つからなくて、

「あ、車のバッグの中だ」

と言って、取りに戻っていきました。

なつめちゃん、冷静に見えたけど、

今日は、意外と浮かれているみたいです。

近くに汐月さんがいるから、不安はないけど、なんかあつたら大変ですから、油断しちゃいけません。

今は夏ではないから、周囲を見渡しても、遠くの方に、犬の散歩してる人とかしかいなくて、まるで、プライベートビーチのようでした。

海岸に来たのも、本当に久しぶりで、前にいつ来たのか、気になって思い出そうとしたけど、思い出せませんでした。

これだけ周囲に人がいなければ、なつめちゃんも、大丈夫でしょう。

わたしたちは、2人ですつごく冷たい海で、夏っぽく、はしゃいでいました。

なつめちゃんのそういう姿は、絵になるんですが、わたしは、この近くに自分が映るような、鏡とか窓とかなくて、よかったと思いました。

しばらくすると、榊さんが無言で近づいてきました。

この人が黙々と近づいてくると、ちよつと、狙われているような、命の危険を感じます。

それに気付いたなつめちゃんは、

榊さんに、

「食事の準備が出来たの？」

分かった、すぐ行きます」

と答えて、なつめちゃんはわたしの手を引いて、別荘へと向かって、

その後を榊さんが、無言で付いて来ていました。

なつめちゃん、榊さんに対してだけ、

言葉遣いが、違うような気がするなあ……

別荘のテラスに、備え付けられてるテーブルの上に、さっき届いたお弁当、色んなサンドイッチと、カットされたフルーツが並んでいました。

それは、わたしとなつめちゃんので、

汐月さんと榊さんは、別で昼食をとるんだそうで、

なつめちゃんは、特に気にする様子もなく、

黙々と食べていましたが、わたしは何か、

申し訳ないような気がしました。

食事が終わって、なつめちゃんが昼食後の薬を飲んでから、

もう一度海岸へと向かい、

今度は、海辺を話しながら散歩しました。

かなの時のように、何かして遊ぶという考えは、

体の弱い、なつめちゃんの発想には無いようです。

なつめちゃんは、ちよつと疲れたから座らない？

と言ってきたので、海の方を向いて座ったのですが、

なつめちゃんは、海ではなくてわたしの方を、

ずっと見つめていました。

わたしは、何か顔についているのかと思ひ、なつめちゃんに、それを尋ねたのですが、なつめちゃんからの応えは、

わたしの質問の返事ではありませんでした。

「こうやって、みなと2人で遊びに来れるなんて、まるで、夢みたい。

今こうしているのも、まだ信じられないくらい。

みな、本当に、付き合ってくれてありがとう。

私、今日のことは、一生忘れない。

本当に、嬉しいよ、みな」

なつめちゃんは、目に涙を浮かべながら、そういつて、溢れそうな涙を、指で拭っていました。

わたしは、その言葉の真意が読みきれなくて、どう答えたら良いかと、迷いました。

こういう時は、変にこっちが驚いたり動揺したりせず、相手を安心させる言動をかけてあげる、

と、たしか本に書いてあったので、わたしは、

またいつでも一緒にこれるから、

今日だけなんて、言わないで、

これからも、もっと色んなところに行こう、

と、前向きに受け取れる感じに答えました。

なつめちゃんは、わたしの言葉に、頷いて、

「うん、本当に、ありがとう」

と、言って、私の手を握ったまま、  
俯いて、静かに泣いていました。

わたしは、そんななつめちゃんに寄り添って、  
海を見つめて、考えていました。

なつめちゃんの、別れの言葉みたいなのは、  
何を意味しているんだろう、と。

あんな言葉は、間違ったり、何となく言う内容じゃない、  
なつめちゃんには、何か思いつめてしまう理由が、  
あるんだろうけど、それは持病のことなのか、  
学校でのことなのか、それら以外のことなのか、  
考えてみたけど、やっぱり分かりませんでした。

なつめちゃんの心に引っかかっている、  
そうしたもの全部、打ち明けてもらえないと、  
ここから進展出来ない、そんな気がしました。

不意に右肩に何かかぶり、物思いから現実に戻されたら、  
なつめちゃんが眠ってしまったらしくて、  
わたしの肩に、頭をあずけていました。

わたしはここで、  
今まで知らなかった、なつめちゃん秘密を知りました。

その時、わたしの方に寄りかかっていた体に合わせて、  
膝がこっちに倒れてきていて、  
体育座りで、閉じて座っていた足が開いてきて、  
海からの風で、スカートがめくれかけていたんです。



誰かから見える訳じゃないけど、直そうと思って、スカート裾を掴もうと左手を出した時、強い風が吹いて、スカートは膝の上までめくれて、わたしは、初めてなつめちゃんの、膝から上の足を見ました。

見えたのは、右足の内腿だったのですが、10センチくらいの長さの、足に沿って伸びている、紫色になった大きな手術の傷痕が、内腿の上の方にあっただんです。

その傷痕は、とても痛々しいものでしたが、最近出来たものではなくて、ずっと前の、古い傷のように見えました。とても完治しているようには、見えなくて、こんなにひどいのに、

包帯とかも巻いてないのが、とても考えられません。よく見ると、その大きな傷のほかにも、小さな丸い紫色のあざみみたいな痕も、いくつもありました。

なつめちゃんは、こんな直っていないような、傷のある足で、普通に歩いていたのかと思うと、とても、これ以上は見ていられませんでした。

これを見て、今までのなつめちゃんの格好を思い返すと、冬服の時は、必ずブレザーのボタンも留めてて、

黒のタイツを履いていたし、  
シャツの第1ボタンも留めてました。

夏服でも、シャツとタイツは同じで、  
残暑で暑かった日でも、さらに、  
学校指定のカーディガンや、セーターを羽織っていました。

その格好のことを聞いた時は、  
寒がりだから、と答えていたけど、  
本当の理由は、体の傷を隠すため？  
だったのかも知れない。

だとしたら、もっと他にも……

なつめちゃんは、まだ起きていなかったので、  
起こさないように、慎重にスカートの裾を直して、  
なつめちゃんの手を、膝に置いてから、  
その置いた手を軽くゆすって、起こしました。

そろそろ戻ろう、とわたしは言って、  
なつめちゃんの手をとって、立たせようとしたけど、  
なつめちゃんは首を振って、  
もうちょっとここに居たい、と言いました。

あの傷が見えたことには、気付かれてなさそうなので、  
とりあえずは安心して、なつめちゃんの言うとおりに、  
また砂浜に座りました。

太陽はだんだん傾いていき、  
空は真っ青から、茜色へと変わっていきます。

なつめちゃんは、海に沈む夕日を見てから戻りたい、  
と言ったので、それだと真っ暗な暗な危ないから、  
沈み始めたら、戻って行って、

別荘の前で沈むところまで見ようよ、と言って、  
夕日と共にわたしたちは、別荘のところへと戻ってきました。

なつめちゃんの足の傷の事は、

なつめちゃんが、自分から教えてくれるまでは、  
本人に悟られちゃいけないと、強く思いました。

これがクラスの人から、何かされた痕だったら、  
汐月さんに、伝えておかなくちゃいけないし、  
そうではないとしたら、

この放つとかれている傷は、どういうことなのか、  
汐月さんにこの理由だけは、教えてもらえないかと、  
もう一度頼んでみよう、と決めました。

夕陽を見つめる、なつめちゃんは、  
とても寂しそうで、その表情を見てしまうと、  
最初に言った、あの言葉の真意が、  
すぐく気になって、仕方ありません。

少しでもそんな表情を、晴らせないかと、  
わたしは、なつめちゃんの手をとって、繋ぎました。

なつめちゃんは、それに気付いくと、  
寂しそうな表情は消えて、

わたしの方を見て、笑ってくれたので、  
わたしの気持ちは、ちょっとは伝わったかな、

と思いました。

陽も完全に沈んで、時間も4時半を過ぎたので、そろそろ、マンションに戻る事になりました。

帰り道は、行きのルートと違っていて、夜景がきれいな道を通ってきました。

自然の海や青空も、とてもきれいだったけど、人工的な無数の光の夜景も、

とてもきれいだなあ、と感じました。

なつめちゃんの方へ、わたしが目をむけると、また眠っていて、車がカーブした時に、

わたしの方に倒れてきたけど、起きる気配がなかったので、頭を膝の上に乗せて、コートをかけて寝かせておきました。

その時の、なつめちゃんの様子は、とても幸せそうに見えたから、起こせなかったんです。

その様子を、助手席から汐月さんは見ていたようで、わたしが顔を上げたときに、目が合って、汐月さんは何も言わず、ちよつとだけ、口元が笑っていたような、そんな気がしました。

マンションには7時前に戻ってきました。

1階のエントランス前に乗り付けて、

なつめちゃんをそつと起こすと、  
自分が眠っていたことに、とても驚いていました。

何か、夢を見ていたみたいだけど、  
その内容は、秘密、と言われて、  
教えてくれませんでした、  
とてもいい夢を見たみたいで、  
なつめちゃんは、嬉しそうにしていました。

戻った後は、夕食を準備してもらっている間に、  
海で汚れたでしょうから、と、  
シャワーを浴びて、洋服を着替えることになり、  
わたしは、自分の制服に戻りました。

やっぱり、これが落ち着きます。

まさに、等身大の自分に戻ってこれた気分です。

なつめちゃんが、シャワーを浴びている間に、  
リビングで待つようと、言われていたので、  
待っていました。

この間に、足の傷のことを、汐月さんに聞いてみようと思い、  
わたしは、キッチンにいた汐月さんに声を掛けて、  
まず、本のお礼を手短に伝えてから、  
なつめちゃんの足の傷について、尋ねました。

汐月さんは、配膳の作業の手を止めると、  
無表情のままに、わたしを睨むように見つめながら、  
「今はあまり時間がないので、

手短に説明します。

棗さんの体の傷については、毎日の視診と触診で把握しています。

貴方が見た傷は少なくとも、

他者からの暴力によって出来たものではありませんから、その点については心配は不要です。

あの傷は体質的なもので出来ているので、

これ以上の説明は本人の了承がなければ、説明は出来ません。

これで納得して頂けますか？」

電話の時とは違って、苦手なパターンの口調で、まくし立てるような説明を受けて、ちよつと、頭がくらくらしましたが、なんとか耐えて、お礼を言いました。

わたしはリビングに戻って、

一気に溜まった、緊張の疲れを感じて、ぐったりしていたところに、

なつめちゃんが、別の服に着替えてきました。

なつめちゃんは、ぐたつとしていたわたしを見て、

「みな、そんなにつかれちゃった？」

もしかして、私がつつと、膝の上で眠っていたせい？」

と、動揺させてしまい、そんなことないと、説明するのが、ちよつと大変でした。

この後、夕食の準備が整い、

完璧な構成の夕食を、2人で食べました。

わたしにはとても美味しいのですが、

やっぱりなつめちゃんは、淡々と食べていました。

もしかして、これ、同じメニューに見えるけど、味付けとか、違うんじゃないか思っ

ちよつとだけ、なつめちゃんのを食べさせてもらつと、食感とかは同じなんだけど、

味がかなり薄くて、まるで病院食みたいだと思いました。

昔、父が入院していた頃、

父の食べていたご飯を食べた事があつて、

味がなくてまずいなあ、と思った思い出があるんです。

それを今、思い出しました。

なつめちゃんは、味見したわたしに、

特に感想を聞くこともなくて、

ちよつと微笑んでから、黙々と食べ続けていました。

わたしはなつめちゃんに、「ご飯食べてて楽しくない？

と聞くと、なつめちゃんは、

「今日は、みなが一緒だから、楽しいよ。

いつもより美味しい気もするし」

と、また笑顔で答えるんだけど、

わたしには、何だか違うような気がして、しょうがないです。

もっと、ご飯って、楽しいものだと思うんです。

わたしはそう信じています。

ただの、栄養分を摂取する行為ではないんです。

なつめちゃんにも、かなの時みたいに、ご飯を楽しいと、  
思ってくれるように出来ないかなあ……

新たな課題が増えてしまいました。

次の日のなつめちゃんの予定は、  
朝から実家に帰るとのことだったので、  
食事が終わった後、帰って来ました。

車で送るって言われたけど、  
まだ電車もある時間だからと、断って電車で帰ってきました。

なつめちゃんは別れ際、ちょっと寂しそうにしてましたが、  
すごく楽しかった、と言ってくれて、  
なによりも、また一緒に遊びに行こうね、  
と、言ってくれたのは、あの海岸での言葉を、  
打ち消せたんじゃないかな、と思えて、  
とても嬉しかったです。

それと、もう1つ電車の中で思い出したのが、  
汐月さんを見て思った違和感ですが、  
それは、メガネでした！

前は、金縁のメガネだったけど、  
今日は黒縁の四角い横長のメガネだったんです！

これで、もやもやしてたのが、すっかりしました。

次に、なつめちゃんに会うのは、





姉妹ケンカつぱいかなあつて思つて、  
ちよつと楽しかったです。

バイトが終わつて家に帰ると、  
ちよつと宅急便の人が、うちの前に立っていました。

それはわたし宛の小包で、  
差出人は、かなちゃんでした。

家に入つて、ご飯食べた後、小包を開けてみると、  
中から、それぞれ個別の白い箱に入った、  
折畳み傘と、ライトと、

10センチくらいのぬいぐるみと、  
10センチくらいの小さいスプレーが入っていました。

それと、手紙が一通入っていて、  
その手紙には、

「メリークリスマス、みなも！

きつとバイトに明け暮れている、寂しいみなもへ、  
かなサンタから、あんまり楽しくない、  
プレゼントを送ります！

このプレゼントの出番がないことを、  
かなサンタは心から願っています！  
使い方は、説明書を読んでね。

P・S・ この道具、ちゃんと持つんだよ！

かなサンタより  
「

と、書いてありました。

いまいち、意味が分からない手紙で、

なんなんだろ、と思いつつ、  
わざわざ送ってもらったんだから、  
中の物を一つずつ、確認してみる事にしました。

まずは、折畳み傘です。

色は水色でいいなあ、と思い、持ってみるとなんか重いです。  
変だなと思って、箱の中の説明書を見ると、

『折畳み傘風特殊警棒』

と、書いてありました。

特殊警棒って、何だかよく分からなかったですが、  
使い方を見て、分かりました。

よく銀行とかATMで警備の人が、腰につけてる棒だって。

でもなんで、わたしに？

とりあえず、それは置いといて、残りのものも確認すると、  
ライトは、小型のスタンガンで、  
ぬいぐるみは、防犯ブザーで、  
スプレーは、催涙スプレーでした。

これ、全部、防犯グッズです……

かなサントの手紙には、

これを携帯してって書いてあったから、

わたしは、誰かに襲われる可能性があるって言うこと？

スタンガンとか、特殊警棒は、

そんなに安い物には見えません。

かなの性格だと、わたしを騙そうとしているのなら、手紙の文章は、もっと真面目に書くと思うから、茶化した文章なのは、逆に真面目な気がしていて、冗談で送ってきたわけじゃ、なさそうです。

こんなのが必要になる相手に、わたしは目を付けられるような、覚えはないけど、かなの言葉を信じて、携帯しておくことにしました。

でも、こんなの、ちゃんと使えるかなあ……

12月31日 大晦日

今年もいよいよ最終日、大晦日です。

航海堂も、今日から三が日まで正月休みで、バイトもお休みです。

母の仕事は、今日までなので、お正月の準備は、わたし1人でやってました。

ま、中学時代もそうだったから、特に大変とも、思いませんけどね。

一通りの年越しの支度も終わって、

母の帰りを待つて、  
後は、年越しそばを食べるだけです。

かなちゃんは、冬休みの10日間、  
家族で、海外旅行だそうです。

といつても、家族全員がそろう日はなくて、  
予定が合う日程だけ、それぞれが現地で合流して、  
現地で別れるのだそうで、  
なんかすごい旅行だなあ、と思いました。

なつめちゃんからは、  
冬休みに入ってからすぐ、メールが来ました。

実家では、家族と過ごしているようで、  
元気にしているみたいです。

さらに、そのメールには、  
おせち料理のお歳暮を贈ります、  
つて書いてあつて、  
よく分からないから、電話して聞いてみたら、  
なつめちゃんの家で、いつも注文している、  
お取り寄せの、おせち料理を送ったから、  
是非食べて下さい、と言うことでした。

で、届いたのが、三段重ねの重箱に入った、  
イセエビとかアワビとか入ってる、豪華なおせちで、  
ありがたいんだけど、かなの時の二の舞で、  
お正月、太っちゃんいそいな気がします。

汐月さんからもらった本も、  
がんばって読んでいます。

たまに、どうしても分からないところは、  
忍さんに、時間がある時に教えてもらってます。

こんなに甘えちゃっていいのかなあ、と、  
思っ、忍さんに聞いたたら、  
ほんとにダメなら、ダメって言うから、  
そんな心配すんじゃないって、叱られました。

なので、お言葉に甘えさせてもらっています。

ヒヨウちゃんの様子も、

バイトが休みの日に、河原へ行つた時に見たら、  
いつも通り、悠然と歩いていて、元気みたいです。

いつになったら、触らせてくれるかなあ……

描きかけの水彩画は、

今は完全に止まってしまっています。

なつめちゃんのための、勉強が終わるまでは、  
手が出そうもないので、

これは、来年の目標にしようと思います。

今年も、色々あつたけど、

来年は、もっといいことがいっぱいありますように、  
とくに、なつめちゃんの色々な悩みが、  
早く解消出来ますように、

と、初詣でお願いするつもりです。

それでは、良いお年を！

2010年 1月 その1(前書き)

変更履歴

2011/01/03	誤植修正 以外	意外	
2011/03/28	日付の記述修正	二日までで、	1月
2011/03/28	日付の記述修正	三日からは、	1月
2011/03/31	記述統一	一週間、二日間、三時間	
2011/04/03	記述修正	玄関で、汐月さんが出迎えてく	
2011/04/10	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3	
2011/04/20	記述統一	(期間)一日、二月、三年	
2011/04/30	記述統一	一匹、二匹、三匹	1匹、
2011/05/04	記述統一	一回、二回、三回	1回、
2011/05/05	誤記修正	HRで3回目の席替えで	
2011/05/22	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2011/06/22	誤植修正	初め 始め	
2011/07/18	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2011/08/18	記述統一	一人、二人、三人	一人、



2010年 1月 その1

1月1日 お正月

あけまして、おめでとつございます。

朝は、なつめちゃんから頂いた豪華なおせちと、用意したお雑煮を、母と一緒に食べました。

このおせちには、母も驚いていました。

わたしは母に、おせちを贈ってくれた、なつめちゃんのことを、話しました。

母は、名前を聞いただけで、小学校の時に同級生だったことを、思い出したみたいで、よく覚えてるなあ、とちよつと驚きました。

ポストを見に行くと、年賀状が届いていて、宛先を確認したら、ほとんどが親戚や、母の仕事関係の人からばかりでした。

わたし宛のは、

父の実家のおじさん、おばさんからと、巴ちゃんからと、恵ちゃんからと、

それから、忍さんとなつめちゃんからも来てました。

なつめちゃんの年賀状は、やっぱり、イメージ通りの、

きれいだけど、小さめの線の細い字で、  
新年の挨拶が書いてありました。

忍さんのは、さすが美大生の力を発揮した、  
デザイン重視の年賀状で、  
「寅」と「虎」の文字を崩して、  
2匹のトラが戦ってるような、  
構図の絵が描いてありました。

これは、わたしにはとても描けないセンスを感じました。  
今年は、忍さんに絵を見てもらおうかなあ、  
でも、ちょっと評価が怖いから、もうちょっと考えよう。

わたしは、出してなかった、  
なつめちゃんへの年賀状を書いて、  
ポストに出してきました。

お昼になって、近くのいつも神頼みをしている神社へと、  
初詣に、母と2人で行ってきました。

もう、さすがに寒いので、  
ついに、ダウンジャケット着ていきました。

小さい神社だけど、この三が日だけはとても混んでいます。

わたしは神様に、  
自分の事は、自力で頑張ろうと思いなおしたので、  
なつめちゃんのことだけ、お願いしました。

帰りに、出店の焼きそばとたこ焼きを食べて、帰ってきました。

帰り道で、母との話の内容が、ころころと話題が変わっていき、やがて、父の入院していた時の話になりました。

母は、わたしと一緒にお見舞いに行くと、最初は、父の所にいるんだけど、そのうちに、そこかへ行っちゃって、またしばらくすると、いつの間にか帰って来ていた、と言われて、いつも何処に言っていたの？と、聞かれたんですが、それは、わたしが幼稚園に入る直前くらいの、本当に、小さい時の話で、そんな頃の記憶は、ぜんぜん覚えてないよ、と、母に返しました。

こんなに、ゆつくり母と話をした日は、すごく、久しぶりな気がしました。

夜になって、携帯を見ると、かなちゃんから、メールが来てました。

「はっぴいにゆういやぁ！」  
という題名のメールには、  
ヨーロッパのどこかの街で、  
お祭り騒ぎのところで撮ったらしい、  
夜空には、花火が上がっていて、  
仮装したような人たちにまみれた、かなちゃんが、

大の字になつて、ジャンプしている画像でした。

これ、何処なんだろう、それすら分からないけど、とりあえず、かなが楽しそうで何よりです。

母の休みは、1月2日までで、

1月3日からは、もう仕事が始まる予定なので、明日まで、親子水入らずで過ごそうと思います。

今年も、よろしく願います。

### 1月3日 雨の河原

お正月だと言うのに、この日は雨で、

河原に行ったら、凧揚げとかしてる風景が見れるかなあ、と、楽しみにしてたので、ちょっと残念でしたけど、

雨の中の散歩も、久しぶりなので、それはそれで楽しみです。

結構、肌寒かったので、

雪になるかも、と思っただけど、

ずっと、冷たい雨のままでした。

さすがに、死にそうな寒さなので、

またしても、ダウンジャケットの出番です。

もうこれからは、着ない訳にはいかないようです。

雨なので、絵も描けないから、荷物は、お弁当2人分だけです。

正確には、1人と1匹の分です。

おせちの残り物を詰めた、

なかなか、豪華なお弁当です。

味も、薄味だったので、

これならヒヨウちゃんにあげても、大丈夫だと思って、持って来ました。

内容も、どうせ野菜は食べないだろうから、

魚介類や、生ハムやローストビーフなんかの、肉ばかりを入れときました。

問題はご馳走する相手が、現れるかどうかです。

天気は、パラパラと降る小雨がずっと続いていて、散歩するには、ちょうど良い雨模様です。

いつものスケッチ場所より、ちょっと先にある、

橋の下の、堤防の真ん中のところで、ヒヨウちゃんを待つことにしました。

静かな、ザー、という雨の音と、

たまに通り過ぎる、散歩の人や、自転車の音と、ほんのたまに聞こえる、奥の道路を走る車の音だけが、耳に入ってきます。

わたしはこの時に、昔のなつめちゃんのことを、思い出していました。

何となく、今なら思い出せる気がしていたんです。

なつめちゃんは、小学三年生の時に転校してきて、その時、わたしの席は一番後ろで、隣が空いていたから、隣の席になりました。

その頃のなつめちゃんは、今よりも元気で、いつも、楽しそうにしている印象が強くて、とても明るい子だと、思った記憶があります。

だから、今のなつめちゃんを見て、そのギャップにとっても驚いたんです。

格好は、いつもパンツか、長めのスカートにタイツとかで、よく考えてみると、腕や足の、素肌が見えていた記憶がないです。

プールとかを、一緒に入った記憶も思い出せません。

だんだんと、細かい事も思い出してきました。

なつめちゃんが転校してきた時期は、夏休みが終わった後、二学期からだったから、プールの思い出がないんです。

それと、体育のある日は休みが多くて、

たまに来ていても、いつも見学だったから、着替えている記憶もなく、やっぱり、腕や足を見せていた記憶はないです。

なつめちゃんの、素肌が見えていたのは、顔と、首の上の方と、両手くらいしか、思い出せません。

内腿にあったような傷痕は、もうこの頃から、あつたんだろうか、気になるけど、まだ本人には聞けません。

なつめちゃんは、三学期になると、病気で、お休みすることが増えていつて、2月は半分くらいしか、学校に来なくて、3月は、もうほとんどお休みで、そのまま、転校していつちやつたんです。

この時のなつめちゃんと、今のなつめちゃんが、何となくですが、似ている気がしていて、気になって仕方がないです。

何か良くない事が、起きなければいいんだけど……

そんなことを考えていたら、足元に、待っていた相手がありました。

ずぶぬれのヒョウちゃんです。

ヒョウちゃんは、わざわざわたしに近づいてから、体の水を、振り飛ばしてくれました。

もちろん、全く悪びれずに。

そんな嫌がらせは、気にせずに、わたしは持ってきた、ヒヨウちゃんのお弁当を並べて、いつものまずい硬水も、用意しました。

ヒヨウちゃんは、

前の肉を食べてた時よりも、早く食べ始めたので、やはり高級であることが、大事な点のようです。

それを見てから、わたしもお弁当を食べました。

ヒヨウちゃんと、わたしの間に、

濡れてるヒヨウちゃんを、拭けるかなと思い、持ってきたバスタオルを、置いていたら、

ヒヨウちゃんは、自分でそこに体をこすり付けて、自ら拭いていました。

わたしも手伝おうと、手を伸ばしたら、睨まれて、小さめの声で威嚇されました。

やっぱり、まだ触るまでには、

わたしのレベルが、達していないようで、まだまだ、修行が足りないようです。

ヒヨウちゃんは、お弁当を食べ終わると、バスタオルの上に、寝そべって、ずっと、毛づくろいをしていました。



わたしは、そんな様子を眺めながらも、頭の中では、なつめちゃんのことを、気にかかってしょうがなくて、この日は、ヒヨウちゃんが立ち去るまで、雨の降り続ける河を、ずっと見つめていました。なんとなく感じる、嫌な予感が、当たらなければいいのですが、とても不安です……

1月10日 店長に呼び出されました

今年は、お店の新年始まって初日からの4日から早速、バイト三昧です。

今月は、精神医学の勉強の時間をとりたいから、去年よりは、緩めにシフトを入れました。

で、今日は珍しく店長がお店に来ていました。

忍さんが、お休みの日なので、その代わりかなあ、とか思ったけど、わたしは直接店長に、用事はなかったの、いつも通り、仕事してたんです。

そしたら、社員の人から呼ばれて、店長が呼んでるから、事務室に行って、と告げられて、かなり焦りました。

最近、すごい失敗とかしてないよなあ、とか、  
そんなに怠けたりしてないつもりだけど、とか、  
もう要らないからクビ!?

とか、色々とすごく心配してしまいました。

かなり緊張して、店長のところへ行くと、  
前の席に、座るように促されて、

わたしは、めっちゃめっちゃ緊張して、

右手と右足が、同時に動かして歩いてたのに、  
この時、全く気付きませんでした。

これを、店長に指摘されて、

そんなに緊張しなくてもいい、と告げられて、  
すこしだけ落ち着きました。

店長のお話は、忍さんのことでした。

わたしが忍さんに、ベタベタしてるとか、  
仕事の邪魔になってるとか、

思い当たるような、そんなこともないような、  
そういう話かと思ったら、違いました。

むしろ逆に、店長は、

わたしが、忍さんから構われていることを、  
気にかけていて、度が過ぎるようなら、

店長の方から注意する、という話でした。

わたしは店長に、

わたしはとしては、構ってもらえるのは、

ありがたいですから、ぜんぜん気にしてません、と伝えた後に、ふと、

どうして店長が、そこまで気にするんだらうと、疑問に思っ、店長に理由を聞いてみましたが、ちよつとな、と返されて終わってしまいました。

仕事の邪魔をして悪かった、と言われて、仕事に戻るように促されてしまい、結局、理由は聞けませんでした。

バイトが終わつての帰り道で、店長の質問は何だったんだらう、と、考えていたら、不意に去年の飲み会の時の、忍さんが一瞬見せた表情のことを、思い出しました。

でもこれは、忍さんには、まだ訊けない気がしたので、わたしの直感が、訊いていいと思うまで、口には出さないでおこう、と思います。

1月12日 始業式

結構長かった、冬休みが終わって、三学期が始まりました。

精神医学の勉強は、何とか一通り読むには読みましたが、もうしばらくは、この先も復習しないとダメそうです。

朝、久しぶりに制服に着替えた時、  
スカートがちよつとだけ、  
きつくなってるような、気がしましたが、  
きつと気のせいです。

そんなことよりも、

この日は始業式が最大のイベントです！

去年の雪辱を晴らして、ぜひ新記録を！  
がんばって、校長先生！

と言っくらしいの気持ちで、静かに立ってました。

わたしの期待は、裏切られませんでした！

やりました、校長先生！

新記録の、2分20秒です！

今回は、話を途中で切り上げるといふ荒業で、  
大幅にタイムを削りました。

これには、後ろの先生たちもびっくりしてました。

更なる記録に、期待しています！

クラスでは、インフルエンザにかかった人が結構いて、  
6人くらい、休んでいました。

わたしは、雨に濡れなければ、  
そんなに風邪とかも、引かないから、

傘さえ持っていれば、大丈夫です。

インフルエンザの流行なんて、自分としては、全然平気なんだけど、なつめちゃんは、体が弱そうだから、大丈夫か、とても心配です。

1月13日 なつめちゃんの具合

去年の終業式から、3週間ぶりに、なつめちゃんと一緒に下校です。

昨日の心配が、当たってしまい、なつめちゃんは、インフルエンザとか風邪ではないけど、体調を崩していて、学校には来たけど、午後は保健室で寝ていたそうです。

それなら、早退すれば良かったのに、とわたしが言うと、なつめちゃんは、そうなんだけどね、とちょっとはにかんで言っていました。

なつめちゃんは、時々小さなセキをしていて、ちよつと熱っぽい顔をしていて、たまに、息苦しそうにしていました。

わたしは、その度に、大丈夫？と、声をかけていました。

ずっと、じゃないけど、時々辛そうな顔をしていたから、  
榊さんに、車で迎えにきてもらったら？

と、なつめちゃんに言ってみたんですが、  
大丈夫、の一点張りです、

わたしの言うことを、聞いてはくれませんでした。

わたしは、なつめちゃんの体調が気になるので、

なつめちゃんのマンションの前まで、

一緒についていきました。

悪いからいいよ、と繰り返すなつめちゃんでしたが、  
何かあったら、取り返しがつかないから、

ここは、わたしの意見を押し通しました。

なつめちゃんは、私迷惑かけてるね、ごめんなさい、  
と謝ってはいたけど、どこか嬉しそうな感じに、  
わたしには見えませんでした。

マンション前での、別れ際で、

なつめちゃんは、わたしの手をとって、

新年そうそう、早速心配かけちゃったね、

と、ちよっと茶化して言ってくれたので、

わたしは、そんなのいちいち気にしないの！

と、なつめちゃんのおでこを軽く小突いたら、

ニコツて笑って、うん、って頷きました。

なつめちゃんは、ちよつと元気が出たみたいで、

明るくバイバイと言って、中に入って行きました。

これは、今まで、すごく悪いことしたみたいに、

やたらと謝られるよりも、  
ちよつと心の距離が、近づいているような気がして、  
わたしは結構、嬉しかったです。

なんだか、だんだんなつめちゃんが、  
妹みたいな感じになってきたような、  
そんな気がするの、気のせいかなあ……

1月18日 席替え

今日は、あんまり良くないことが、2つありました。

1つ目は、2回目の席替えで、  
かなちゃんのそばになったら、いいなあ、  
と、思っていました、  
わたしの席は、窓際の後ろ側で、  
一方かなちゃんは、廊下側の真ん中でした。

この席でも、かなちゃんのそばに行く機会は、  
あんまりなさそうです。

それともう1つは、なつめちゃんが今日お休みでした。  
先週から、あまり具合が良くなさそうだったから、  
とても気になっていました。

なつめちゃんから、  
今日メールで休むって、知らせがあったので、

お大事にね、と返信しました。

自分でメールして来たから、  
それほどは、悪くないのかも知れないけど、  
やはり、心配です。

お休みが長引くようなら、汐月さんに確認して、  
許可をもらえたら、お見舞いに行こうかと思えます。

1月20日 なつめちゃんのお見舞い

汐月さんの許可をもらったので、

今日は、なつめちゃんのお見舞いに行ってきました。

なつめちゃんは、今日もお休みで、

汐月さんの話では、昨日も休んだと言っていたから、  
もう3日も休んでいます。

それほどひどい状態では、ないらしいのですが、  
インフルエンザが、流行っているのを考慮して、  
合併症を避ける意味もあって、休ませている、  
と、いうことでした。

学校が終わってから、

なつめちゃんの、マンションに行きました。

考えてみると、1人でここに来るのは初めてです。



エントランスから、なつめちゃんの家と連絡すると、  
汐月さんが出て扉を開けてくれて、中に入りました。

玄関でも、汐月さんが出迎えてくれて、  
なつめちゃんのいる、寝室へと案内されました。

寝室に入ると、なつめちゃんは、  
大きなベッドで、横になっていて、  
そのベッドの脇には、車椅子がたたまれて置いてあり、  
壁側の脇には、点滴が吊ってあって、  
電顕は入ってなかったみたいだけど、  
なんかの医療機器みたいなものも、置いてありました。

この風景を、どこかで見たとような気がしたのですが、  
この時、なつめちゃんが起き上がるうとしていたので、  
わたしは近づいて、それを手伝おうとしました。

「そこまでひどくはないから、大丈夫。  
わざわざ来てくれて、ありがとう、みな」  
と、わたしが手を出すよりも早く、  
なつめちゃんは、上半身を起こしました。

なつめちゃんは、ちょっと気だるそうに見えたけど、  
そんなに辛そうではなかったので、安心しました。

この後、わたしはなつめちゃんと、しばらく話をしました。  
あんまり長い時間起こしているのも悪いと思い、  
30分くらいで、そろそろ帰るね、  
と切り出すと、なつめちゃんは、

私は大丈夫だから、もうちょっとだけいて欲しい、と頼まれてしまい、わたしが困っていると、ちょうど汐月さんが、様子を見に来ました。

汐月さんは、なつめちゃんの様子を見て、

「三崎さんのご予定が許すなら、

お嬢様のわがままに、お付き合い頂けますか？」

と、許可が出たので、もうちょっとだけ、なつめちゃんに、付き添っていました。

なつめちゃんは、わたしの手をとって、横になっていましたが、

いつの間にか、眠ってしまいました。

わたしはそつと、その手を解いて、部屋を後にしました。

廊下に出たところで、

ちょうど別の部屋から出てきた、汐月さんと会ったので、わたしは、玄関に案内されながら、なつめちゃんが眠ったことを、報告しました。

玄関につくと汐月さんは、

いつものとつつきにくい雰囲気から、

電話の時の雰囲気へと、ちょっと変わって、

「お嬢様が人前で眠るのは、三崎さんの前でだけです。貴方への信頼が、かなり高いのは間違いありません。

来週には、また通学出来ると思いますので、

お嬢様の事、これからも宜しく願います」

と、わたしを見つめながら話した後、

深く頭を下げられました。

わたしも、その挨拶にあわせて頭を下げたから、精神医学の勉強も、がんばっていることを伝えて、なつめちゃんの為に、出来るだけがんばります、と伝えて、帰ってきました。

なつめちゃんからの信頼は、  
汐月さんからも、言われるくらいだから、  
間違いないんだと、実感しました。

これなら、色々な疑問を訊ける日は、  
近いような気がします。

なつめちゃんの具合が良くなったら、  
訊けそうなタイミングを、探っていこうと思います。

1月22日 マラソン大会の練習

今日から、体育の授業が、  
2月にある、マラソン大会の練習になつて、  
学校の周りを、同じ距離だけ走りました。

男子は10kmで、女子は7kmを走ります。

今までの人生で、こんなに走った事は無いので、  
自分がどうなるのか、全く想像出来ません。

出来れば雨が降らないかな、と期待していたけど、残念ながら、天気は晴天でした。

陸上部の人や、体育会系の人たちは、

普段から鍛えているから、

スタートから早くて、すぐに離れていきました。

わたしは足も遅くて、短距離のタイムも遅いし、運動神経も鈍くてダメで、

もちろん、持久力にも自信はありません。

かなちゃんは、最初から早いグループに入っていて、離されていくのを、最初の頃に見かけました。

わたしは、一番遅い集団の中では前の方で、わたしより後ろは、適当に走っている人たちと、わたしよりも、運動が苦手な人たちだけです。

最初の2kmまでは、

タイムは遅いけど、意外と楽に来たから、

このままいけるかも、と期待したんですが、だんだんきつくなってきて、

4km超えたら、もう息も上がるし、汗だくだし、もう、めちゃめちゃ辛かったです。

6km超えたくらいで、適当に走っていた人たちが、先生に怒られて、本気出して走り始めてしまい、わたしは抜かれてしまったけど、

もう、そんなことに気がまわる状態ではありません。

もう、ふらふらで、まっすぐ走っているのかさえ、よく判らなくなっていました

最後は、グラウンドへ戻ってきて、一周走ってゴールでしたが、もうこの頃は、半分意識がなかったです。

少しでも、タイムを上げようと思って、必死でラストスパートを、かけましたが、順位は、最下位ではなかったけど、タイムは、あんまり変わりませんでした。

ゴールしたとたんに、頭がクラクラして、すぐに地面に座り込んでしまい、しばらく動けませんでした。

こんなに心臓って、早く動くんだと思うほどの速さで、呼吸も、まるでおぼれた時みたいで、いくら息を吸っても、酸素が足りません。

なんだか周りの音が、小さくなっていくような気がして、意識が遠ざかっていく、と思っていたら、遠くから、かなちゃんの声が聞こえてきて、気がつくのと、かなちゃんがわたしの肩を揺すっていて、周りを先生や、他の人たちが囲っていました。

どうやら、わたしはちょっと気を失っていたようで、それに気づいた、かなちゃんが、駆けつけてくれたのだそうです。

一応、保健室に行つて休んでから、教室に戻りました。

診察結果は、単なる貧血だろう、ということ、あまり無理せずに走りなさい、と注意を受けました。

無理しないで走ると、最下位確實なんですが、最下位には、なりたくないです！

一体どうしたら良いのでしょうか……

1月25日 かなの良くないうわさ

最近、かなちゃんの噂が、尾ひれがついて、広がっているのか、良くない噂ばかりを、耳にするようになりました。

付き合いが悪くなった原因が、男に入れ込んで、貢いでいるからだとか、何人も彼氏がいて、男を使い捨てにしているとか、根も葉もないものばかりです。

そのせいかどうかまでは、判らないけど、かなちゃんの人気は、依然とは比べ物にならないくらい、下がってしまい、その代わりに、何人かの、他のグループの人の名前が、噂話で、よく出てくるようになって来ました。

これはつまり、

今まで、かなちゃんが独占していた、  
人気が落ちたことよって、  
かなちゃんのせいで、少数派だった人たちが、  
だんだんと、有名になってきている、  
と言うこと、みたいです。

かなちゃんに集まる人たちは、減っていて、  
そんな噂が広まっても、  
かなちゃんは、前よりも忙しそうに、  
あちこちに行って、いろんな人たちと話してて、  
やっぱり、まだまだ大変そうです。

前になかなちゃんと、河原で約束した、  
落ち着いたら、2人で旅行の件は、  
まだまだ遠そうな気がします……

2010年 1月 その2(前書き)

変更履歴

- 2011/03/31 記述統一 一週間、二日間、三時間
- 1週間、二日間、三時間
- 2011/04/03 記述修正 わたしは、ずっと親友だよ、て言おうとしたけど、 わたしは、ずっと親友だよって言おうとしたけど、
- 2011/04/06 記述修正 く、てく くってく
- 2011/04/07 記述修正 色んな食べ物、拒絶反応起こしてしまつて、 色んな食べ物で、拒絶反応を起こしてしまつて、
- 2011/04/09 記述統一 1学期、2学期、3学期
- 一学期、二学期、三学期
- 2011/04/16 記述変更 (クラス) 1組、二組、3組
- A組、B組、C組
- 2011/04/17 記述統一 (個数) 一組、二組、三組
- 1組、2組、3組
- 2011/04/20 記述統一 (期間) 一日、二月、三年
- 1日、2月、3年
- 2011/04/27 記述統一 一着、二着、三着 1着、
- 2着、3着
- 2011/05/02 記述統一 一本、二本、三本 1本、
- 2本、3本
- 2011/05/24 記述統一 一つ、二つ、三つ 一つ、
- 2つ、3つ
- 2011/07/19 記述統一 一人、二人、三人 1人、
- 2人、3人
- 2011/09/04 誤植修正 位 くらい



2011/09/18

誤植修正  
話し

話

2010年 1月 その2

1月27、28、29日 事件となつめちゃんの告白

先週に、汐月さんが言っていた通り、なつめちゃんは、今週の月曜から、また学校に、通えるようになりました。

でもまだ病み上がりで、無理は出来ないのです、下校の時も、途中の小さい公園とかで、休憩しながら、帰って来ました。

今日の体育は、またマラソンの練習で、わたしはその時に、ちよつと足を挫いてしまい、病み上がりのなつめちゃんよりも、遅くしか歩けなかったけど、駅までの道は、他の人に会わないようにしたいのもあって、バスとかも使わずに、いつもの1本外した道を通って、帰っていました。

学校と駅の、最短のルートでもなくて、大通りの裏の道なので、全然人もいなくて、車も、あんまり来ないから、なつめちゃんにとっては、都合がいい道だったんですが、今日の帰りは、なつめちゃんが、妙に後ろを気にしているのに、気がつきました。

なんか、ヤンキーっぽい人たちが4人、ちよつと離れた後ろを、同じ方向に歩いてきていました。

その人たちを見た時、最初はたまたまかと思ったのですが、私がそれとなく、後ろを確認する度に、その人たちと、目線が合うので、まるで、後をつけられているみたいだな、と思つて、ちよつと不安になりました。

なつめちゃんの方は、

後ろの人たちのせいだ、すっかり怯えてしまい、せつかく、良くなつていた体調も、また、悪くなつてきているように見えました。

わたしはここで、

かなちゃんからの手紙にあつた、警告を思い出して、どうしようかと迷つたけど、まずは確認してみよう、と思つて、なつめちゃんに小声で、ちよつと急ぐよ、と伝えて、歩く速度を上げてみました。

後ろの人たちは、最初はちよつとは間が開いたけど、すぐに向こうも、速度を合わせてきて、追いついてきたんです。

そして、何かを話しながら、

こちらを見ながら、ニヤニヤと笑っていました。

もう、迷っている場合ではなくて、間違いなく、わたしたちについて来ていると確信して、なつめちゃんに、走って逃げるよ、と伝えて、角を曲がったところで、走り出しました。

その先の道は、民家が並ぶ道で見通しが悪いから、  
ここでごんばって走って、どこかに隠れれば、  
逃げ切れる、と思っただんです。

でもこの道は、わき道がぜんぜん無いところで、  
一生懸命走ったけど、隠れられる場所がなくて、  
そのうちに、なつめちゃんが胸を押さえて、  
苦しそうな息になっていて、  
そのうち、私の足も痛み出して、  
2人とも、走れなくなっていました。

どこか隠れるところはないかと、辺りを見ると、  
細いわき道が、ちょっと先に見えました。

それと同時に、あの人たちの声が近づいてきたので、  
もう倒れそうな、なつめちゃんの手を引っ張りながら、  
そこに入ったんです。

その細い道の先は、工場の裏の空き地で、  
行き止まりになっていました。

わたしがそれに気づいて、戻らなくちゃ、  
と思って、振り向いたら、  
もうすでに、あの人たちが、  
この空き地に、入ってくるどころでした。

1人は、携帯で話をしている、  
他の3人は、わたしたちを囲むように近づいてきました。

わたしは、足が痛いのを我慢して、なつめちゃんを、倒れないように支えながら、ちよつとでも離れようと、空き地の奥に後ずさる途中で、なつめちゃんが、ぐったりとして倒れてしまい、なつめちゃんを抱えたまま、その場に座り込んでしまいました。

ろくに動けもしない、わたしたちを見て、3人は顔を見合わせてから、一斉に笑い出しました。

「もう逃げるのは諦めたのか？」  
「なんだよ、こんなのが相手かよ」  
「お嬢様って聞いてたから期待したのによお」  
「ぜんぜんガキじゃなかよ、萎えるわあ」  
「お前、こういうの趣味だったよなあ？」  
「おい、あんまり強く殴るなよ、死なない程度にな」  
「言われなくても分かってる、じゃあ最初は俺だな」  
「どっちにすんだよ、お前」  
「そりゃ決まってるだろ、お嬢様の方だろ普通」  
「なら俺はそつちの髪長いのでいいや」  
「お前、趣味わりい」  
「意外とこうというのが当たりだったりすんだよ」

後ろの電話していた1人も、3人のところに来ました。

「ケイゴ、後5分くらいで着くつてよ」  
「そうか、じゃあお前に5分だけやらせてやるよ」  
「お前なら早えーから間に合うんじゃないの？」  
「ざけんじゃねえよ、俺はそんなに早くねえよ！」  
「ていうか、もうダウンしてるじゃん、」

もうやっちゃったのかよ」

「そんな早いわけねえだろが！」

「お前、早すぎだろ、いくらなんでも」

「もうちよつとガマン出来ねえの？」

3人が1人をからかって、大笑いしていました。

でも4人とも、わたしたちから目を離しません。

わたしは、ほとんど意識もなくなっしまいました、

ぐったりとしている、なつめちゃんを抱き寄せながら、かなちゃんからもらっていた物を、取り出そうと、バッグに手を入れたとたん、

「おっと、なにしてんのかなあ？」

と、口調はふざけていたけど、

力づくで、持っていたバッグを掴まれてしまい、抵抗したら、腕をとられて身動きが出来なくされました。

その人はわたしの腕を掴んだまま、バッグを別の人に渡して、その人がバッグをひっくり返して、

中身を全部、地面に出されてしまいました。

そこには、教科書なんかと一緒に入った、

あの4つの道具もあったけど、4人は気づかなくて、すぐに興味をなくして、わたしの方を見ました。

「お前、何しようとしてたの？、今」

「正直に言わないと、余計に痛い目に遭うよ？」

「おい、それじゃ正直に言っても、痛い目に遭うような言い方じゃなか」  
「だって、やるんだから、痛い目に遭うじゃん」  
「あ、そういうこと？」  
「お前、相変わらず頭わりいな」  
「うるせえよ！」

ここまで、なんとかがんばって堪えてきたけど、なんとかして、なつめちゃんを守りたかったけど、ここから逃げ出す方法もなくて、片手で掴まれただけで、抵抗出来なくなってる自分では、なつめちゃんを守るどころか、相手の腕1本すら、どうにも出来ないのが悔しくて、これから、何をされるかを思うと、もう怖くて怖くてたまらなくなつて、涙が出てきました。

それを見た4人は、面白そうにわたしの顔を見て、大笑いしていました。

「おいおい、泣くのはまだ早いんだけどなあ」  
「これから違う意味で泣いてもらうからさあ」  
「お前、こういうの趣味だよなあ？」  
「だから何でもかんでも俺の趣味にするなよ！」

捻った足の痛みや、掴まれている腕の痛さもあつたけど、これから何をされるかが、とても怖くて、声も出なくて、体も震えが止まらなくて、ひたすら、涙だけが溢れてくるばかりで、何も考えられなくなっていました。

「すごく、怖くて、怖くて、怖くて、たまらなくて、でも、どうしようもなくて。」

もう、目を開けているのも出来なくて、目をつぶって、ボロボロ泣いていたら、今までとは別の声が、聞こえてきました。

「遅くなりました、準備……」

「おう、遅かったじゃねえか、だからナビ付けろってんだよ」

「とっとと車に乗せちまおう、声も出せねえ今のうちによ」

「じゃ、お前そっち持て、俺らはこいつを運ぶ」

「おい、お前はそっちだつて言ってるだろうが、」

「まったくお前は使えねえや」

この後、わたしの腕をを掴んでいた手が、急に離されると同時に、鈍い音がして、すぐに何かが、近くで倒れる音と振動がしました。

「てめえ！　どういう気だ！」

「ケイゴ！　何の真似だよ！」

「ああ、すみません、俺、抜けさせてもらいます」

「はあ！？」

「何言ってるの、お前！？」

「んでもって、この女はもらっていきます」

「意味分かんねえんだけど」

「ふざけんなよ、てめえ！」

「……………」

「おい、何とか言えよ！」



「まったく、めんどくせえなあ、

二度もおんなじこと言わせんな、バカが、  
だからあ、俺はたった今、チーム抜けてえ、

この女2人をもらっていくつて、言つてんだよお！」

さっきの鈍い音と振動は、誰かが殴られて倒れた音だ。

最後の言葉が終わったところで、

更にもう1回同じような音が聞こえて、それが分かりました。

仲間割れ！？

どういうことが判らないけど、

何か揉め事になっているのは、判りました。

わたしは、相変わらず動かない、

なつめちゃんに、手をかけながら、

目を開けて、前の様子を見ました。

目の前には、あの4人に向かい合って、

こちらに背を向けて、立っている人がいました。

榊さんよりは小さいけど、かなり大柄で、

ダボダボの派手な白いスウェット姿で、

さっきの4人よりも、大きな人でした。

多分、後から来た人だと思う、その人は、

わたしたちを助けてくれようとしている！

わたしは直感で、そう感じました。

4人はみんな、手にナイフを持っていて、  
だんだんとその人は、後ろに追い詰められていました。

その人の足元に、バッグをひっくり返された時に落ちた、  
かなちゃんからもらった道具の、青い傘があるのを見つけて、  
味方の人に向かって、わたしはとっさに、青い傘を振って！  
と、叫びました。

その人は、わたしの言ったとおり、  
青い傘を拾い上げると、それだけで意味が分かったようで、  
説明書にあった通りに、まるで使い慣れているみたいに、  
1回で特殊警棒を伸ばしました。

それをみた4人は、楽勝だと思っただけなら形勢が不利になって、  
逆に、ちよつと後ずさりしました。

でも、わたしはまだ怖くて、  
震えも止まらなくて、  
涙も止まらないけど、  
なつめちゃんを抱き寄せて、  
あの人が負けちゃったら、  
そしたらもうほんとおしまいだと思って、  
あの人が負けませんようにと、  
ひたすら祈っていました。

味方の方は、4人相手にけん制しながら、  
戦っていました。

だけど、やっぱり特殊警棒があっても、  
4対1では叶わなくて、

味方の人は、4人が持っているナイフで、切り付けられるのを、避け切れなくて、あちこち切られて、

どんだん服が、血で染まっっていくのが見えました。

わたしはこの時、ただひたすら、がんばって負けないで！  
と言う思いで、いっぱいでした。

4人は、味方の人がもうちょっとで倒せると確信して、  
一気に近づいてきた時に、

細い路地から、また誰かが来るのが見えました。

それは、見覚えのある人、榊さんでした！

「……おい、ガキ共、そこまでだ」

ここで初めて、榊さんの声を聞きました。

低い、ドスの利いた声で、

4人はその声に驚いて、榊さんの方を見ました。

榊さんが来てくれたのが、分かった途端、

もう大丈夫だ、と思えて、

張り詰めていた緊張が、一気に解けてしまい、

わたしは、気を失ってしまいました。

わたしが目を覚ますと、

見た事のある部屋の、ベッドの中にいました。

そこは、なつめちゃんのマンションのゲストルームでした。

わたしのそばには、汐月さんが椅子に座っていて、  
どうやら、ずっと横にいてくれていたみたいでした。

わたしが目を覚ましたのに気づくと、

「三崎さん大丈夫ですか？

吐き気とかはありますか？

どこか痛むところはありますか？

こちらで分かる範囲で治療しておきました。

他に痛むところや気になるところがあれば、

仰って下さい」

と言われました。

わたしはまだ、ボーっとする頭のまま、

上半身を起こして、あの時に掴まれた腕を見ると、  
しっかりと、包帯が巻かれていました。

マラソンの練習で、挫いた足も、

同じように、包帯が巻かれていました。

治療の時に、着替えてもらったようで、

わたしの格好は、制服ではなく、

ゲスト用の、パジャマ姿になっていました。

わたしはだんだんと、意識がはっきりしてきて、  
なつめちゃんのことを思い出して、

汐月さんに、なつめちゃんのことを聞きました。

「棗お嬢様は、

三崎さんよりも先に気がつかれて、

ただ今専門医による診察中ですので、  
体調面に関しては、

ご心配には及びません。

栞さんの心理状態は、

追われている段階で意識が薄れていた  
ので、襲われていたところの記憶が無い  
ようで、

今はもう落ち着いています」

わたしはそれを聞いてから、

汐月さんに、わたしは大丈夫です、

と伝えた後に、バッグのことを思い出して、  
それを尋ねると、

「荷物の方は全て回収してあります。

汚れた物はクリーニングの後にお返し  
致します。

破損している物や修復出来ない物  
については、同じ物を用意させて  
頂きますので、

手配した物が手元に届くまでの間は、

申し訳ありませんがお待ち願えます  
でしょうか」

わたしが頷くと、汐月さんはここで、

家政婦の顔から、お医者さんの顔に  
変わって、

「三崎さん、

医師として、貴方を診察した結果を、  
お話します。

何があったのかについては、

榊さんの方から、聞いています。

貴方は精神的に、かなりのショックを  
受けたはずで、

今はまだ、あまり感じないかも知れ  
ませんが、

時間が経ってから、症状が出る可  
能性があります。

少なくとも、今日と明日は、

こちらで休まれていく事を、お勧めします。

巻き込んでしまった、お詫びという訳ではありませんが、  
ここにいて頂ければ、私が診れるので、

そうしてもらえると、私としても安心出来ますから  
と、言われて、

たしかにまだ、一人で外を歩くことを想像すると、

あの時のことを思い出してしまい、不安になりました。

汐月さんは、そんなわたしの心の変化を読みとって、

無意識のうちに、強く握り締めていた私の手に、  
手を重ねて、家政婦さんの時には見た事がない、  
安心させる優しい表情で、わたしを見ていました。

わたしは、汐月さんの言うとおりに、  
ここで休んでいく事にしました。

最後にわたしは、なつめちゃんにはいつ話が出るかを、  
尋ねると、話が出るようになったら、  
お知らせします、と約束してくれて、  
汐月さんは、部屋を出て行きました。

時計を見ると、もう6時を過ぎていました。

わたしは、ベッド脇のテーブルに置いてあった、  
わたしの携帯で、忍さんに連絡して、  
今日のバイトを、休むことを伝えて、  
母にも連絡しておきました。

連絡が終わってから、落ち着いてくると、

改めて、さっきの出来事を思い出しました。

わたしとなつめちゃんは、襲われたんだ。

もしも、あの人が助けられなかったら、

もしも、榊さんが来てくれなかったら、

わたしたちは、どうなっていただろう。

それを思い出すと、

あの時の、とても不安だった気持ちが蘇ってきて、

今は安全な場所にいると、分かっているのに、

怖くなってしまって、

涙が出てきて、止まらなくなりました。

ちょうどこの時に、汐月さんが部屋に戻ってきました。

汐月さんは、泣いているわたしを見ると、

すぐにわたしのそばに来て、肩を抱き寄せられて、

がんばったね、もう大丈夫だからね、

と、声をかけてくれました。

わたしはそれを聞いて、

抑えていた気持ちが、ここでこらえきれなくなつて、

汐月さんに、すがりついて、

小さい子みたいに、声を上げて、

思いっきり泣いてしまいました。

汐月さんは、わたしが泣いている間、

ずっと抱きしめていてくれて、

優しい言葉をかけて、慰めてくれました。

しばらく泣いていたら、やっと落ち着いてきて、抱きついていた手を放して、顔を上げると、汐月さんに頭を撫でられて、

「良かった、落ち着いたようね。」

目を覚ました時、まだ気を張っていたから、心配していたんだけど、

これで、だいぶ落ち着いてきたんじゃない？」

と言われて、たしかに泣く前よりも、

なんだか、楽になったような気がしました。

わたしが、頷いて返事すると、

「でも、もうちょっと様子を見たいから、

やっぱり予定通り、明日はここで休んで行きなさい。

学校には、私の方から連絡しておくから、心配しないで。」

それと、夕飯は食べられそう？」

と、尋ねられて、その時初めて、

お腹が減っているのに気づきました。

この後、わたしは用意してもらった夕飯を食べた後、シャワーを浴びてから、余計な事は考えずに、すぐに休みました。

ベッドに入っても、すぐには眠れなくて、

夢に見るかも知れない、と思っ、

まだ、ちよつと不安だったけど、

悪い夢も見ないで、ぐっすり眠れました。

朝、目が覚めたら、もう9時で、



一瞬、遅刻だ！

と、焦ったけど、すぐに、

今日は休むことにしたんだって、と思い出して、  
しばらく、ベッドの中でボーっとしてました。

目が覚めたらコールして、と言われていたので、

ベッドの頭の上にある電話から、

汐月さんに連絡しました。

朝食の準備は、すぐ出来るけど、

ダイニングルームで食べられる？

と聞かれたので、大丈夫です、

と答えて、朝食を食べるに、ダイニングルームに行きました。

そこには、汐月さんが1人分の朝食の支度をしていました。

わたしは挨拶した後、なつめちゃんの具合を尋ねると、

汐月さんは、わたしに席に着くように促して、

自分も席について、食べながらでいいので、聞いて欲しい、  
と言って、話し始めました。

「三崎さん、

まずは、貴女に関する事を、先に確認しておきます。

昨夜は、良く眠れましたか？

何か、夢は見ましたか？

目が覚めてから、気分はどうですか？」

汐月さんの質問に、わたしは、

夢は見なくて、ぐっすり眠れましたし、気分も悪くないです、  
と回答しました。

その答えを聞いて、汐月さんは更に、  
「そう、良かった。」

顔色もいいし、何度か寝室の様子を見に行った時も、  
よく眠っていたようだったから、  
あまり、心配はしていなかったけど。  
もうかなり、落ち着いたと思うから、  
昨日の件について、少しだけ話してもいい？  
と聞かれて、わたしは頷きました。

「では、昨日の一件についてだけど、  
あれは、榊さんから警察に連絡して、  
状況の説明等も、一応済んでいます。」

ただ、警察は事件にならなければ、動かないので、  
恐らく、巡回を増やす程度の措置をするだけでしょう。

三崎さんが望むのであれば、その腕の怪我で傷害罪として、  
通報する事も、出来る様にはしてありますが、  
我々としては、そうしてもあまり意味が無いのと、  
棗さんも、巻き込む事になるので、お勧めはしません。  
棗さんの意思も、事を荒立てたくない、との事です。  
三崎さんは、どうしますか？」

わたしは、なつめちゃんが望まないのなら、  
同じでいいです、と答えました。

「ありがとう、棗さんの為にも、  
是非そうして欲しかったので、助かったわ。  
棗さんからの希望で、貴方にも、

警護をつけて欲しい、とのことだから、これに関しては、後で榊さんから説明があるので、詳しい話は、その時に聞いて下さい。

次に、棗さんのことだけど、

実は、昨日の診察の結果が思わしくなくて、恐らく近日中には、検査入院になりそうだね、現在も、容態が急変する可能性がある状態です。

棗さんは、入院になる前に、直接貴方に、話したいことがあるから、三崎さんが、目を覚ましたら、そのことを伝えて欲しい、と伝言を言付かりました。

私としては、貴方の精神状態を考えると、出来れば、あんな事があった直後、と言うのは、避けたいのだけど、

棗さんは、今回のことで、貴方に対して、罪悪感を感じていて、どうしても今、話をしたいと言って譲らなかった。

そこで、医師として、貴方の回復具合を見てから、問題なければ、貴方にこの事を伝える、と言うことで、棗さんを納得させました。

棗さんの言葉の意味、貴方なら、理解出来るわよね？」

それを聞いたわたしは、

手にしていたトーストを、思わず落としました。

いつか、なつめちゃんから言ってくれないかと思っていた、色々なこと、それらのうち、どこまでかは分からないけど、なつめちゃんは、ついに話してくれる気になったんだ。

それは、とても嬉しいことのはずだけど、  
今でなくちゃ言えないような、

まるで、入院したらもう話せないような言い方は、  
一体、どういうことなんだろう。

そこは良く判らないけど、わたしは、  
なつめちゃんの告白を聞く覚悟を決めて、  
それを、汐月さんに伝えました。

汐月さんは無言で頷いて、わたしが朝食を食べ終えて、  
支度が出来たら、なつめちゃんがいる部屋に、  
案内してもらったことになりました。

朝食を終えて、ゲストルームに戻ってから、  
ベッドに座って、なつめちゃんのことを考えていました。

なつめちゃんは、今回の件のことを、  
自分のせいで起きたんだと、思ってるに違いない。

そこでわたしが、動揺したりすると、  
余計になつめちゃんは、罪の意識を強く持ってしまう。

これだけは、絶対に避けなくちゃいけない。

汐月さんがわたしに、このことを聞かせたのは、  
わたしが、なつめちゃんの話聞いてあげられるだけの、

ゆとりが持てると、判断したからのはず。

先生がそう判断したんだから、今のわたしには出来るはずだ、  
というか、それが出来なくちゃいけないんだ。

わたしはそう、自分に言い聞かせてから、  
汐月さんに連絡して、なつめちゃんのところへと、  
案内してもらいました。

なつめちゃんが、休んでいる部屋は、  
この前、お見舞いに来た部屋と同じでした。

でも、この前とは違って、  
ベッドの脇にあった、器械は動いていて、  
この器械が、よくドラマなんかで見る、  
心拍数が表示される、医療機器だったのが分かりました。

他にも、別の医療機器があって、  
その器械から伸びた、チューブに繋がったマスクが、  
口のところに、当てられていて、  
今は、腕から外されていたけど、  
3つの点滴が、吊るされていました。

なつめちゃんの様子は、大きく荒い呼吸をしていて、  
とても苦しそうに見えました。

前のお見舞いの時にも思ったけど、  
こういつのを、どこかで見たような気がするんだけど、  
どうしても思い出せません。

わたしの姿に気づいた、なつめちゃんは、辛そうに、ゆっくりと体を起こして、口に当てていたマスクを、ゆっくりと自分で外しました。

「汐月さん、ありがとうございます。」

音声は切っておいて、ほしい。

おねがい、します」

なつめちゃんは汐月さんに、

よく判らないことをお願いすると、

汐月さんは頷いてから、何かあったらこれを押して下さい、

と、なつめちゃんの手元に転がっている、

ナーズコールのボタンみたいなのを指差して、

部屋を出て行きました。

「みな、昨日は本当にごめんなさい。

わたしのせいで、ひどい目に遭わせてしまって。

どれだけ謝っても、許されないとは思う、

私の自己満足でしかないかも知れないけど、

でも、謝らせて欲しいの、ごめんなさい」

なつめちゃんは、頭を下げようとしていたので、

わたしは、肩をそつとつかんで止めてから、

それはもういいよ、汐月さんに診てもらったから、

わたしはもう大丈夫だし、

なつめちゃんが、警護の人をわたしにつけてくれるように、

頼んでくれたんでしょ？

それだけしてもらえれば、十分だから、

もう気にしないで、ね？

と、俯くなつめちゃんの顔を覗き込みながら、

一生懸命伝えました。

もう、そんなことを気にしないで欲しい、  
そんなことよりも、

自分の体調を良くすることに、専念して欲しい、  
わたしはそう思いながら、話しました。

なつめちゃんは、一応納得してくれたみたいで、  
うん、と頷いて顔を上げました。

そして、さっきの思いつめた顔とはまた違う、  
もっと、暗い表情に変わって、

なつめちゃんは、話を始めました。

「あのね、みな、

今までみなに、話してなかったことがあって、  
私がちやんと話せるうちに、それを聞いて欲しくって、  
汐月さんに、無理言ってお願ひしたの。

みなのことを考えたら、  
今じゃない方が、いいに決まってるんだけど、  
私にはもう、今しかない、と思うから。

ごめんなさい、でもどうしても聞いて欲しくって、  
だから、あの、私の話、聞いて、くれる？」

わたしは、何も言わずに頷いてから、  
なつめちゃんの脇に、椅子を持ってきて座りました。

なつめちゃんは、ちよつとだけ笑ってくれた後、  
目を閉じて、しばらくしてから、

心を決めたように、目を開くと、  
震える指で、着ていたパジャマのボタンを外して行って、

ボタンを全部外すと、最後まで隠すようにしながら、  
上着を脱ぎました。

なつめちゃんは、パジャマの下はブラだけでした。

脇の器械から伸びる線が、なつめちゃんのお腹や胸に、  
6箇所、つけられていました。

でも、なつめちゃんが見せようとしたのは、  
それではないのは、すぐに分かりました。

初めて見た、なつめちゃんの体には、  
まるで白い画用紙を、絵の具で汚したように、  
白くてきれいな肌のおちこちに、

首にも、胸にも、お腹にも、脇にも、背中にも、  
体中に数え切れないほど、手術の傷痕がありました。

その傷痕は、あざみたいに黒っぽくなっていたり、  
紫色に変色していたり、  
傷口にそって、赤く腫れていたたりして、  
とても、ひどい傷痕になって、痛々しくて、  
とても見ていられないものばかりでした。

でも、なつめちゃんはその身体を、  
わたしに見せようと、決心してくれたのだから、  
目を背けるのは、なつめちゃんに対して失礼だし、  
なつめちゃんの覚悟を、拒絶する事になるのではないか、  
と思って、わたしはなつめちゃんから、  
ずっと目をそらさずにいました。



でも、なんて言っていないのか分からなくて、こんな時に、かけてあげる言葉が、何も浮かばなくて、わたしは何も言えずに、そのまま黙っていると、なつめちゃんは、私の手を掴んできたので、わたしはその手を、両手で包み込むように握りました。

なつめちゃんは、ちょっと微笑んでから、話し始めました。

「……私は小さい頃から、難病を患っていて、ずっと病院で手術と治療を、繰り返していたの。」

私の病気は、体の中の色んなところに転移してしまって、一度発症したら、そこを切除しないと、命が助からない病気だった。だから、転移が見つかるたびに、切除手術を繰り返していたの。

私のお腹の中、もう普通の人の半分くらいしか、内臓とかも残ってないんだ。

もうこれ以上は取れないって、医者には言われてる。

この難病以外にも、生まれつき血が止まらなかつたりとか、一度傷が来ると、それが直らないとか、色んな食べ物で、拒絶反応を起こしてしまって、食べられないとか、本当に色々あったの。

だから、生まれてからずっと入院していて、今まで家で過ごした時間なんて、ほとんどなくて、手術も、数え切れないほどしたの。

小さい頃は、ずっと思ってたんだ。  
私は本当は、生きてないはずの子で、  
たまたま、父が医者だったから、  
まだ生きていられるだけで、  
こんなに苦しい思いをしなくちゃいけないのは、  
もう、死んでなくちゃいけない人間なのに、  
まだ生きているからなんだろうなって。

ずっとそう思ってた生きて、いいえ、  
生かされてきたの、病院や医者達に。  
私を死なせてしまったら、  
父からどんな目に遭うか、分からないから、  
それが恐ろしくて、ただそれだけで、私は生かされてきた。  
わたしが生きていたのか、死にたいのか、  
そんな意思とは関係なく、わたしは治療され続けたの。  
わたしには、死ぬ自由もない生活だった。

でも、そんなになっても、たったひとつだけ、  
私には、死ぬ前にしたいことがあった。  
それはね、みな、みなといっしょに遊びたかった。  
それだけを私は願って、がんばって生きてきたんだよ。  
辛くて苦しい治療にも耐えて、  
4年くらいかかって、やっと普通の子と同じくらいに、  
動けるようになって、みなのところに行ったの。

小学校三年の二学期、  
私が見なのいる学校に、転校して来たのは、  
みなともう一度会って、いっしょに遊びたかったからなの。

あの半年間は、とても楽しかった。

この体のことが知られたら、みなも、他の友だちも、きつと気味悪がつて、相手してもらえないって思ったから、体育も全部休んで、身体は絶対見せないようにしてた。

でも、そのことを誰も気づいたり、聞かれたりもしなかったから、

私は自分が望んでいた夢が叶って、とっても幸せだった。

でも3ヶ月しか、私の体は持たなくて、

冬になったら、具合が悪くなって行って、

みなと会える時間は、どんどん減っていった。

年が明ける頃には、ほとんど学校に行けなくなってた。

春になる頃には、もう入院しなくちゃ、

危険な状態になってしまつて、

私は転校したことにされて、学校を辞めてまた入院したの。

その後、私はもう一度、みんなに会いたいと思った。

今度は遊びたいんじゃないかって、私を知って欲しかった。

みなや、みんなをだましていたような気がして、

それがすごく、悪いことをしたような気がして、

元気が振りしてた私じゃなくて、

本当の私を見て、知って欲しいと思った。

だから、もう一度、私は辛くて苦しい治療に耐えた。

今度は、国内では出来ない治療をする為に、外国に行った。

父と母からも離れて、私は1人で、

言葉も判らない、医者や看護師に囲まれて、

不安と寂しさで、いっぱいだったけど、

がんばって耐えてきた。

この外国での治療生活で、

私は、心にも直らない傷が出来ちゃって、人から名前を呼ばれるのが怖くなったの。

通訳の人はいたけど、医者や看護師たちは、

私に対して、何か言われても、

名前のところしか、分からなくて、

何か、ひどいことを言われてるんじゃないかとか、

馬鹿にされているんじゃないかとか、

そついうのが、気になって仕方がなくって、

通訳の人も、信じられなくなつて、

誰とも話せなくなつた。

人から話しかけられるのが、とにかく怖かった。

話しかけられても、何を言っているのか分からなくなつて、

そのうち、うまく喋れなくなつた。

でも治療のために、毎日誰かと話さなくちゃいけない。

私は必死に、怖いのを我慢して話をした。

そつしている内に、

医者や看護師は、人に見えなくなつてきたの。

医療機器の1つ、私を治療する道具の1つと、

思つようになつた。

今でもこれは、直っていないんだけど、

そつすることで私は、自分の心を守って過ごしてきた。

だから大人には、話すことが出来るんだけど、

もつと若い人たちとは、まともに話せないままだった。

でもそれにも耐えて、ここでの生活を続けたの。

治療をする為に、もう一度学校に行けるようになる為に。

もう一度、みなに会う為に。  
すごく、がんばったんだよ、私。

今度は、前よりも長く掛かって、  
5年もかかっちゃった。

その間に、みなと同じ学校に行けるように、勉強もした。  
それでやっと、みなと同じ高校に転入してきたの。

家も、少しでも一緒にいたいから、  
みなに住んでる場所の、近くにした。  
それが、今年の二学期の初め。

でもその前に、私には高校が、というよりも、  
学校が、どんなところか分からなくて、

夏期講習に参加したんだ。

みなも出席しているのは、調べてあったから。  
みながどのくらい、昔と比べて変っているか、  
見たかったのもあるけど、

みなが気づいてくれるかが、すごく不安だった。

だから、学校に転入する前に、  
少しでも早く気づいてもらいたくて、  
夏期講習に参加したの。

みなは昔と、ぜんぜん変わってなくて、  
ちよっと安心したよ。

みな、私が見てたの1回だけ気づいたよね？  
あの後も、本当は出席したかったけど、  
体調が悪くなって、出られなかった。

あの時は、すごく悔しかったよ。

これでまた、忘れられたらどうしようって、  
すごく怖くなった。

だから、転入する時、  
みなと同じクラスには、わざとしてもらわなかった。  
もし、全然思い出してもらえなかったら、  
今の私にはとても、耐えられないから。  
その場で死んじゃうかもしれないって思ったから。  
だから、A組に転入したの。

転入してからは、車での送迎が条件だったけど、  
それを破って、電車通学したり、下校する時は、  
みなと時間が合うように、調整したりしてた。  
そしたら、みなはわたしのことを、気にしてくれたから、  
忘れられてはいないかも知れないって、思った。  
それで、勇気を出して、みながA組の前を通る時に、  
廊下で待ってたの。

あの時は、名前を呼ばれたらどうしようって不安だった。  
嫌なことを、思い出してしまうと、  
私自身、どうなっちゃうか分からなかったから。  
でもみなは、私に気づいてくれて、  
名前は呼ばずにいてくれた。  
あの時ほど、嬉しかったことはなかったよ。  
本当に、嬉しかった。  
なによりも、覚えていてくれたことが。

そして、5年間ずっと夢見てきた、  
みなとの学校生活が、もう一度出来たんだ。

自分のクラスでは、私のことを気味悪がったり、  
からかわれたりしてた。

それは、薬で少しは抑えていたとはいえ、私には耐え難い苦痛で、とても辛かった。けど、それよりも、みなとの学校生活が出来ること、この嬉しさがあつたから、耐えることが出来たんだ。

みなと一緒に、昼休みを過ごせたこと、

みなと一緒に、下校出来たこと、

みながうちに来てくれて、一緒に勉強出来たこと、

みながうちに泊まってくれて、一緒にご飯食べたこと、

みなと一緒にドライブして、海に行ったこと、

みなが私に、優しくしてくれたこと、

そして、

みなが私の身体を、ちゃんと見てくれたこと、

私が隠してきたことを、全部聞いてくれたこと、

すごく、感謝してる。

本当に、ありがとうね、みな。

私には、みなさえ、いてくれればいい。

もう、他には、何もいらない。

みなさえ、わたしのそばに、いてくれれば、

ずっと、友だちで、いてくれれば、

もう、なんにも、望まない。

だからお願い、みな。

こんな体の、私だけど、

あとどれだけ、生きられるかも、分からないけど、

今までいっぱい、いろんなことを隠してたけど、

出来ることなら、許して欲しい。

そして、お願いだから、親友でいて欲しい、

みな、私のこと、ゆるしてくれる？

みな、わたしの、親友で、いてくれる？」

なつめちゃんは、ずっと涙を流しながら話し続けて、最後の質問の時、わたしの顔を見つめていました。

その時の、なつめちゃんの瞳は、まるで、澄んだ湧き水のように、とても透き通っていて、すぐくきれいで、その表情はまるで、無邪気な小さい子が、何かをお願いしているような、とても純粹で、素直な印象を受けました。

これが本当の、なつめちゃんの心だったんだ、と、わたしは感じました。

わたしもいつの間にか、気づかないうちに泣いていました。

わたしは、ずっと親友だよって言おうとしたけど、上手く声が出なくて、その代わりに、なつめちゃんの、手をギュッと握って、大きく頷きました。

それを見たなつめちゃんは、笑顔になって、「うれしいよ、みな、ありがとう」

と、言い終わったところで、目を閉じると、わたしの方に、倒れました。

心拍数が表示された器械は、乱れた波形を表示しながら、警告音みたいな音を、出し始めました。



わたしは、意識を失って、倒れたなつめちゃんを、抱きとめて、なつめちゃんに、声を掛けながら、すぐに、ナースコールみたいなボタンを押しました。

5秒もしないうちに、知らないお医者さんの先生と、看護師の人が2人と、汐月さんが飛び込んできました。

わたしはすぐに、座っていた所からどいて、邪魔にならないように、部屋の隅に移動して、なつめちゃんの様子を、息をするのも忘れて、ずっと見つめていました。

肩に何かに触れて、そちらを見ると、汐月さんが、わたしの隣に来ていました。

お医者さんと、看護師の人たちは、懸命になつめちゃんの容態を、確認していましたが、途中で何度か、首を振る仕草をしているのを見て、すごく不安になりました。

看護師の1人が、携帯を取り出して、どこかへ電話した後、汐月さんの前に来て、これから搬送準備に入ります、と告げていました。

わたしは、このままなつめちゃんが、死んじゃうかもしれない、と思ったら、全身の力が抜けてしまい、

その場に座り込んでしまいました。

倒れないで済んだのは、

汐月さんが、支えてくれていたからです。

汐月さんは、座り込んだわたしに声をかけてくれて、

やっぱり、泣いてしまったけど、

そのおかげで、すごく動揺したりせずにはいられました。

わたしは、汐月さんの顔を見ながら、

なつめちゃん、大丈夫ですよ？

と尋ねました。

答えは分かりきっていたけど、どうしても大丈夫って、

誰かに、言っただけじゃなかったんです。

汐月さんは、わたしをしつかりと抱き寄せて、

大丈夫だから、心配しないで、

と、言ってくれました。

救命士の人は、まるで待機してたんじゃないか、

と思うくらい、すぐに来て、

なつめちゃんは搬送されていきました。

わたしは、運ばれていくなつめちゃんを、

黙って見守っていました。

お医者さんは最後に、汐月さんに何かを言ってから、

部屋を出て行きました。

なつめちゃんがなくなった部屋で、  
わたしは、汐月さんにしがみついて、  
静かに泣いていました。

だいぶ落ち着いて来たところで、  
この日はずっと、ゲストルームで休んでいました。

その間に、わたしの持ち物や制服がクリーニングされて、  
戻ってきました。

ちよつとでも、傷や汚れが残っているようなものは全て、  
新しい物が、もう1組用意されていて、  
制服も、元のはパツと見きれいだっただけど、  
新品が、もう1着ありました。

これは、その傷や汚れから、あの時のことを、  
思い出さないようにする為だそうです。

それから、わたしの警護の人が、  
榊さんは、なつめちゃんについていたので、  
その代わりに、汐月さんに連れられてきて、  
紹介されました。

その人は榊さんと違って、全然目立たない人で、  
1週間ごとに、別の人と交代して、  
わたしから距離を置いて、警護するんだそうです。

わたしはその人に、よろしくお願いします、  
と、挨拶しました。

夜になって、夕食の時に、  
あの時に、助けてくれた人のことを思い出して、  
汐月さんに尋ねてみました。

汐月さんの話では、

あの人は、榊さんが割り込んで4人を撃退した後、  
一度、このマンションまでは来たんだそうです。

ここで、応急処置を受けて、休んでいくように薦めたけど、  
あの人は断って、自分の車でどこかへ消えたそうです。

名前を聞いても、最後まで答えなかったから、  
誰だか判らないと言うので、わたしは、

あの時の会話を思い出して、あの人の名前は多分、  
『ケイゴ』っていうと思う、  
と伝えておきました。

この日も、ここに泊めてもらって、  
翌日も学校は休んで、午前中に汐月さんの診察を受けて、  
帰っても大丈夫と、診断されたので、  
落ち着いたところで、

午後、家まで汐月さんと警護の人に、  
車で送ってもらって、帰ってきました。

汐月さんからは、自宅の前で、最後に、  
なつめちゃんのごことは、大丈夫だから、  
状況は、こちらから伝えるので、

心配しないで待っていて欲しい、と言うことと、  
少しでも、不安や怖いと感じたら、  
いつでも、私に連絡してくれて構わないから、

と言ってもらって、わたしは、はい、と答えました。

こうしてわたしは、2日ぶりに、自分のアパートに帰ってきました。

バイトにも、まだ行く気にはなれなくて、忍さんに連絡して、休ませてもらって、この日は、まだ夕方だったけど、布団に入って休んでいました。

襲われたこと、

なつめちゃんの告白、

なつめちゃんが倒れたこと、

もう、いろんなことがおきてしまって、とても疲れました。

色々と、考えなきゃいけないことがあるけど、

今はなつめちゃんの様態のことで、頭がいつぱいで、他のことは、考えられません。

でも、わたしがいくら心配しても、

なつめちゃんが、元気になる訳でもないから、

わたしは、なつめちゃんが回復して、

また、会えるようになった時に、

いつでも、すぐに行けるように、

わたしが、元気でいなくちゃいけない、と、思いました。

今は、何も考えないようにして、

ゆっくり、休もうと思います。

2010年 2月 その1(前書き)

変更履歴

2011/03/31	記述統一	一週間、二日間、三時間	
1週間、2日間、3時間			
2011/04/03	誤植修正	この人、合うたびに違うメガネ	
しているような気がします。		この人、会うたびに違うメガネ	
しているような気がしません。			
2011/05/25	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/05/25	記述統一	一つ	ひとつ
2011/07/20	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			

2010年 2月 その1

2月1日 なつめちゃんの容態

お昼休みに、汐月さんから連絡があつて、

なつめちゃんの容態と、今後のことを教えてもらいました。

なつめちゃんは、今までずっと入院生活を送ってきた、

特別病棟にある、なつめちゃん専用の病室に、

搬送されたそうです。

その病院は、汐月さんがいる聖アンナ医科大学附属病院で、

都心にある病院だから、すごく遠いんじゃないかと思つたら、  
へりで搬送したんだそうです。

この大学病院の院長は、なつめちゃんのお父さんで、

なつめちゃんは、院長先生の一人娘だったのも、

この時、初めて知りました。

で、肝心の容態については、

学校生活のストレスと、通院と自宅療養による、

万全とは言えない簡易治療のせいと、

病気は、再発の傾向にあつて、

予断を許さない状況だそうです。

今はICUに入っていて、精密検査中だそうです、

当分は、面会謝絶だと言われました。

なつめちゃんのそばには、いけないけど、



姿を見る事は、出来るそうなので、  
近いうちに、お見舞いへ行くことにしました。

入院している場所について、確認すると、  
警護役の人に、車で送迎してもらって欲しい、  
と言われて、携帯番号を教えられて、  
そこに連絡するように、言われました。

正直、場所を教えてもらっても、  
1人で都心に出て行くのは、すぐに迷子になりそうで、  
かなり不安だったので、安心しました。

あの日、送ってもらってから家に帰ってからも、  
外出する気になれなくて、  
先週の土日は、ずっと家にいました。

土曜日は、バイトの日だったけど、  
今バイトに行っても、何も出来そうもないから、  
そっちの方が、もつと迷惑になると思って、  
しばらくの間、お休みさせてもらうことにしました。

そんなこと言ったら、クビになっちゃうかも知れない、  
という不安もあったけど、それはもう仕方ない、  
と諦めて、忍さんへ連絡しました。

電話に出た、忍さんには、  
怒ってたり、もう来なくていい、  
みたいなことは、全く言われなくて、  
とにかく、すごく心配されてしまい、  
来れるようになったら、また来てくれればいいから、

と、言ってもらえたので、  
なんだか、とても申し訳なく感じて、  
わたしは、ずっと謝ってばかりいました。

今週末は、わたしの気持ちとおんなじような、  
冷たい雨続きで、わたしは何気なく窓の外の、  
雨空の風景を、ぼんやりと眺めながら、  
あの2日間で起こったことを、考えていました。

下校途中で知らない人たちに、襲われそうになったこと。

これが、なつめちゃんの病状を悪化させたのかも、  
って最初は思っただけど、  
汐月さんの話ではそうじゃなかった。

なつめちゃんの、体調悪化の原因は、  
無理して退院して過ごしていた、学校生活だったんだ。

なつめちゃんは普通に生きれないほど、  
体がボロボロなのに、無理してがんばって、  
その生活を送るために、努力してた。

その理由は、わたしだった。

わたしに、本当の自分を知って欲しかったから。

そう思った理由は、前の時に、  
それを言わずに過ごして後悔したから。

前の時は、わたしと遊びたくて、

もう一度会いたくて、転校してきたって言った。

もう一度、会いたい？

わたしは、なつめちゃんとそれより前に会っている？

どれだけ考えてみても、わたしには、

なつめちゃんみたいなの、小さな女の子に、  
出会っていた記憶がない。

もう一つ、なつめちゃんの心の傷のこと。

外国での治療中に負った、心の傷が、

名前を呼ばれることに、結びついてしまっている。

わたしは、昔のように仲良くしたいからこそ、

昔の呼び名で、呼び合いたかったけど、

そうすれば、なつめちゃんは、

前の治療の時の、嫌な記憶を思い出してしまい、  
精神的に、追い込んでしまうことになる。

今のなつめちゃんの、状況を考えると、

これ以上、余計な負荷を与えることは出来ない。

もう、昔のように呼ぶのは無理かも知れない……

そんなことよりも、あの告白の最後の言葉、

あの最後の質問が、なつめちゃんの素直な、

心からの言葉で、

わたしはそれに対して、答えてあげられたことが、

一番重要で、大切なことだったと思う。

わたしは、なつめちゃんと約束したんだ、  
ずっと親友でいると。

これを守るためには、

わたしはなつめちゃんに、何をしてあげればいい？

なつめちゃんは、

わたしに何をしてほしいと望んでいる？

なつめちゃんに、

わたしがしてあげるべきことって何？

わたしはずっと、雨音を聞きながら、  
これを考えて、ぼんやりしてました。

色々考えてみたけど、思いつくものはどれも、  
そんなことではないような気がして、  
どうも、よく分かりませんでした。

だから、とにかく、出来ることを、  
片っ端から、やってみようと思います。

もう、なつめちゃんには、  
迷ってる時間も、ないかも知れないから……

2月2日 マラソン大会

散々練習で走って、嫌な思い出しかなくなった、マラソン大会の当日になりました。

この前、襲われた時に逃げられなかったのは、この練習で足を挫いてたから、とも思えて、今のわたしには、一番嫌いなものになってます。

でも、サボる訳にもいかないので、すごく嫌だけど参加しました。

本番のコースは、これまた因縁を感じる、噴水公園にある、サイクリングコースを走ります。

走る距離は、練習の時と同じで、男子は10km、女子は7kmで、スタートが、男女でずれていて、ゴール地点は、同じところにあります。

一年が一番最初で、8時半に公園に直接集合して、先生からの挨拶と、コースの説明の後、準備運動をして、9時からスタートです。

ちなみに二年は、普通に登校して、2時間目まで授業を受けてから、学校からここに移動します。

三年は、マラソン大会はありません。

周りの人たちも、不満そうにしていたが、

わたしは誰よりも、嫌な顔をしていた自信があります。

わたしは最近起きた、いろんな出来事の苛立ちを、全部マラソンへぶつけて、最初から全力で走りました。

もちろん、そんなこととして体力がもつはずはなくて、

1 kmも持たずに、失速して、

2 km地点で、わたしは倒れてしまい、リタイアになりました。

救護テントの下で、

ぐるぐる回る視界と、吐き気を我慢して寝ていた時、

なつめちゃんが受けてきた、治療の苦しみは、

こんな程度じゃなかったんだろうな、と思いました。

そして、ここで休んでいる間も、

なつめちゃんのことを、ずっと考えていました。

まずやれること、と思っただけど、

その前に、なつめちゃんの様子を見なければ、

何が出来るのかさえ、分からないことに気づきました。

マラソン大会が終わって、学校に戻ってから、

昼休みに、汐月さんに教えてもらった番号へ連絡して、

お見舞いに行きたいことを伝えて、予定を確認してもらい、あさってに行く事になりました。

まずは、なつめちゃんに会いに行ってきます。

色々考えるのは、それからにします。

2月4日 お見舞いと初雪

今日は、おとといから待っていた、なつめちゃんのところにお見舞いに行く日なのに、今年度一番の寒い日で、場所によっては、初雪が見られるかも知れないと、天気予報で言っていました、このあたりは、雨が降っていました。

わたしは、少しでも早く行きたかったので、学校の近くまで、迎えに来てもらいました。

待ち合わせの場所へ行くと、黒塗りの、ハイヤーみたいな車が止まっていて、警護の人が、わたしを見かけて降りてきて、ドアを開けてくれたので、ちょっとびっくりしました。

車は走り出すと、30分くらいで高速に入りました。

回りの風景が、最初は山ばかりだったのが、いつの間にか、ビルばかりになっていました。

1時間くらい走って、高速を降りたら、もうそこは、普通の地元とは大違いの大都会でした。

久しぶりの都会で、あちこち眺めていたら、

大きな河沿いにある、高層ビルに近づいて行きました。

もう少しで、そのビルの下というところで、

赤信号になって止まり、その信号の名前を見ると、

『聖アンナ医科大学正門前』

と書いてあつて、この高層ビルが、

なつめちゃんのいる病院だったんだあ、

と分かつて、びっくりしました。

車は、正面入り口を通り越して、

地下駐車場入り口、と書いてあるところから入りました。

車は、広い地下駐車場の地下4階まで降りて行って、

そこにあつた、専用の駐車スペースに止まりました。

わたしが車を降りると、何度か乗せてもらった、

なつめちゃんの車が、隣に止まっていました。

わたしは、警護の人に案内されて、

なつめちゃんのところへと、向かったんですが、

とても、広くて遠かったんです。

この高層ビルは、クアッドタワービル、と呼ばれていて、

聖アンナ医科大学と、附属病院の全てが入っていて、

地下と地上5階までは1つのビルで、

そこから上は、4つのビルがその上に建っているんです。

聖アンナ病院がある、南側の30階建ての病院棟

医科大学がある、東側の25階建ての大学棟、

研究機関のある、西側の25階建ての研究棟、



あとは、学生や職員の家がある、北側の20階建ての寮棟、この4つのビルが、正方形の四隅に立つ、柱みたいな形をしているのが、聖アンナ医科大学附属病院です。

まず、地下4階からエレベーターで、地上1階まで上がって、それから、1階の総合受付があるロビーを通過して、6階まで上がる、長いエスカレーターに乗って上がって、6階の屋上にある、病院棟のビルの入り口に入って、病院棟受付のある、ロビーを通り過ぎて、専用パスがないと、ボタンが反応しない、なつめちゃんがいる、特別病棟に行く、特別病棟直通エレベーターの、前に来ました。

そこには、榊さんが待っていて、わたしについている、警護の人では、この上には、入れないらしくて、警護の人は、この階で待っていてもらい、わたしは、榊さんと一緒に、直通エレベーターに乗って、一気に30階が上がって、特別病棟受付で、汐月さんが取っておいてくれた、わたしのアポイントの確認と、身体チェックと、持ち物チェックを受けて、ゲートを通してもらって、特別病棟ナースステーションの前に来ました。

このナースステーションでは、アポイント以外に、会いに来た患者の状況で、面会を許可するかを、最終的に判断して決めているようで、榊さんと一緒に、しばらく待っていると、

病室へ入る許可が出て、  
看護師さんに、病室へ案内してもらいました。

病室のドアは、榊さんの専用パスでも開けられず、  
看護師さんの持っている、カードキーがないと、  
開かないようになっていました。

更にそのカードキーは、ナースステーションで、  
このドアを開ける許可を、一時的に与えているそうで、  
すごいセキュリティだなあ、と驚いていると、  
この特別病棟の利用者は、政治家などの、  
要人が利用するところだからそうです。

一般市民の、単なる学生ではないわたしでは、  
本来なら、絶対入れない場所でした。

なつめちゃんの病室は、一番奥の角部屋で、  
ドアのロックを、解除してもらって、  
わたしと榊さんが、中に入りました。

病室の中は、広い部屋に空のベッドが1つと、  
多分、トイレとかお風呂とかがありそうなドアと、  
ガラスで仕切られた、小さい部屋の中に、  
もう1つベッドがあって、  
この中に、なつめちゃんはいました。

その小部屋の中には、  
マンションで見たより、もっとたくさんの器械が、  
ベッドの周りに、置いてあって、  
何本ものチューブや線が、

なつめちゃんと、器械を繋いでいました。

いくつもモニターが付いていて、

何か良く分からない、数字や波形を表示していて、  
その中には前に見た、

心拍数を表示しているのもありました。

なつめちゃんは、眠っているのか、

全く動かなくて、ガラスの向こうで鳴っている、  
器械の音が、かすかに聞こえてくるだけでした。

わたしは榊さんに、なつめちゃんには、

いつ話せるようになるか、を尋ねましたが、

それは、榊さんも知らないとのこと、

病状については、やっぱり汐月さんでないと、  
判らないようです。

その汐月さんなんです、

この病院内では、なつめちゃんの専任ではないから、  
ここには来ないそうで、

今日は直接会って、話を聞けそうにないのが判りました。

わたしはじっと、医療機器に囲まれて、

それ以外は何も無い、殺風景な部屋の中で、  
身動きひとつしない、眠り続けている、

なつめちゃんを、見つめていました。

突然、ドアが開く音が聞こえてきて、

びっくりして、ドアの方を見ると、

看護師さんが、面会時間の終了を告げに来ました。

時計を見ると、いつの間にか1時間経っていて、もう7時を回っていました。

帰る前に、わたしは榊さんに、  
今まで疑問に思っていたこと、

どうして、襲われた時にわたしたちを助けに来れたのか、  
どうして今ここに來ているのかを、尋ねました。

ただの運転手さんなら、

あの日も自分からは、助けには入らないだろうし、  
今のなつめちゃんも、動けないんだから、

この場所には、居る必要はないと思っただからで、  
本当は、運転手じゃないんじゃないですか、  
と、思っていたことを、そのまま訊きました。

榊さんは、

「……話す前に、一服させてくれ」

とわたしに言ってから、談話室に向かって、

わたしに千円を渡して、壁際の自販機を指さして、

「……ちよつと待ってる」

と言いつ残して、喫煙室に入りました。

榊さんが言いたいのは、飲み物をおごるから、

タバコを吸い終わるまで、待っている、

と言う意味かな、と理解して、

自販機でお茶を買って、飲みながら待っていると、

榊さんが、喫煙所から出てきました。

榊さんは、どう答えようか、

ちょっと困っているようでしたが、  
汐月さんからの指示で、

わたしが、なつめちゃんのことを尋ねた時には、  
カウンセリングの一環として、

出来るだけ協力するようにと、告げられていたそうで、  
意外とあっさりと、話してくれました。

榊さんは、やっぱり運転手ではなくて、  
本当は、なつめちゃんの専属の警護の人で、  
基本的に24時間、なつめちゃんを守るのだそうです。

あの日は、別の人間が警護役としてついているはずが、  
手違いで、誰も付いていない時間が出来てしまい、  
そこを、偶然に襲撃されたんだそうです。

こちらのミスで、危険な目に遭わせてしまい、  
申し訳なかった、と頭を下げられたので、  
わたしは、もう気にしてないですから、  
と答えました。

榊さんの口調は、想像していた通りで、  
無口で、無骨で、言葉数が少なく、  
必ず話し初めに、すこし溜めがあつて、  
話すテンポが、掴みづらい話し方をします。

わたしから見ると、必要最低限の言葉を選びながら、  
話をしているみたいです。

多分、大人の人は、  
普通に会話する事が、出来るんだろうけど、

わたしみたいな、子供を相手にして話すのは慣れてなくて、わたしに分かるように、話そうとしているようで、とても話しづらそうでした。

正直、ものすごくおしゃべりな人だったら、逆に、すごくショックを受けていたと思うので、想像通りでよかったです。

それと、榊さんは、常に命令口調で話します。

もし、学校の先生がこうだったら、相当イラつきそうだけど、

榊さんと、ある意味当然、と言うか、丁寧語とかだと、逆に変にしか見えそうもなくて、この命令口調が、一番合っているように思えました。

榊さんは、なつめちゃんが5歳の頃から警護をしていて、海外に治療に行くまでの、5年間と、なつめちゃんが、日本に戻ってからの、あわせて7年近く、警護をしているのだそうです。

前に、海に行った時に感じた、なつめちゃんが、榊さんに対して態度が変わったのは、小さい頃から、知っている人だったからなんだ、と、ここで納得出来ました。

あの襲われた時に、どうして助けに来れたかについては、なかなか、話し始めてくれなかったけど、話を聞くと、その理由が判りました。

なつめちゃんの持つてる携帯の、GPS機能なのかな、と、わたしは思っていたのですが、それだけでは、襲われているのは分からないはずですよ。

何故そこまで分かるのかは、

実は、なつめちゃんには、

退院して、通学を許可する条件として、

いつでも体調の異変を検知して、即対応出来るように、体の中に、脈拍、呼吸、血圧、体温と、

なつめちゃんの声を含む、周囲の音声を、常に送信している小さな機械が、

体の中に、埋め込まれているのだそうです。

そして、なつめちゃんの行動範囲には、

この情報を受信する担当の人が、

その受信装置を積んだ車で、近くに待機していて、24時間、状況をチェックしていたんだそうです。

だから、あの時になつめちゃんが、

ほとんど意識がなくなっていたのも、分かったし、誰かから襲撃されているのも、分かったのだそうです。

なつめちゃんが、告白した時に、

汐月さんをお願いしていた、意味が判らなかつた言葉は、この盗聴している機械を、止めておいて欲しい、

って言う意味だったんだ。

なつめちゃんの同意の上で、行われていたとはいえ、

これじゃ、なつめちゃんには、

プライバシーが無いじゃないですか！

と、思わず榊さんに文句を言ってしまう、  
榊さんは、鬱陶しそうな顔をしていました。

わたしはすぐに、榊さんに、  
筋違いの文句を言ってしまったことを、  
誤りました。

榊さんは、気にするな、と言うように、  
右手を上げて、わたしを制しました。

「……雪が降ってきたな」

榊さんは窓に目をやると、そうつぶやきました。

わたしもその言葉につられて、窓を見ると、  
まだ小さかったけど、粉雪が舞っていました。

わたしは窓際へ行って、窓から外を眺めました。

都心の、きれいな夜景の中に、  
細かい雪の粒が、風に流されながら、  
下へと落ちていくのが、見えました。

この雪が落ちていく景色、どこかで見た気がする。

それは、夜ではなくて、外は明るかった、  
たしか、だれかと一緒に、見たたような、  
青いパジャマを着た、坊主頭の、男の子、  
わたしは、その男の子を、見下ろしてた、  
わたしより、小さい子だった？



ちがう、その男の子は、座ってた、ええと、そうだ、車椅子だ、車椅子に座ってて、足の悪い、歩けない男の子だった。

男の子は、何か言つて、ない、喋ってない、わたしは、その子の声、聞いてない、男の子は、喉に、チューブがついてて、車椅子についてる、器械につながってた、声が出せない男の子だったんだ。

わたしは、その男の子と、何度か会ってた、いつも、わたしが、喋っているだけで、男の子は、いつも、わたしの話を、聞いていた、だけ？

いや、そうじゃない、いつも、何かしていた気がする、なんだろう、ええと、男の子は、何かしてたような、ああ、手だ、自由に動かせたのが、手だけだったから、いつも、手を繋いでたんだ。

わたしは、男の子と手を繋いで、いろんな話を、聞かせてたんだ。

その男の子が、わたしを好きだと、思ってたんだっけ？

それとも、わたしが男の子を、好きだったのかな？

もう、それは忘れちゃってて、思い出せないけど、それが、この病院だった？

分からない、それがどこだったのか、思い出せない。

わたしが小さい頃に、病院に行ったのは、父が入院していた時、幼稚園に入る前の頃だ。

父のお見舞いに、行った時のこと？

父の入院していた病院は、どこだったんだろう。

後で母に確認してみよう、

だけど、そんなことをどうして急に思い出したんだろう。

前に何度か、なつめちゃんの様子を見ていて、頭の隅に引っかけかかっていたのを、思い出して、それが、やっと思い出せて、すっきりしました。

だけど、その男の子以外には、仲良くしていた子は、思い出せなくて、やっぱり、小さい頃のなつめちゃんとは、いつ会っていたのか、思い出せませんでした。

「……………おい、もうそろそろ、

帰った方がいいんじゃないのか」

と、榊さんに、声をかけられて、

わたしは我に返りました。

時間を確認すると、8時になっていました。

わたしは榊さんに、直通エレベーターの下まで、

送ってもらいました。

エレベーターを降りた所には、  
ここまで車で送ってもらった、警備の人が待っていて、  
わたしは榊さんに挨拶してから、行こうとすると、

「……………ちょっと待て、渡すものがあつた」  
と、呼び止められて、小さなメモを渡されました。

そこには、携帯の番号が書いてあつて、  
それは榊さんの、携帯の番号でした。

なつめちゃんに関して、聞きたいことがあれば、  
連絡しても構わない、とのこと、  
榊さんは、言つてなかつたけど、  
これも、汐月さんの指示だろうと、  
わたしは思いました。

わたしはお礼を伝えて、帰つて来ました。

車の中では、都心の夜景を見ていたら、  
いつの間にか、眠つてしまい、  
警備の人に起こされて、目を覚ますと、  
もう、アパートの前でした。

わたしは、警備の人にお礼を言つて、  
家に入りました。

時間を見ると、行きよりも早くて、  
9時半でした。

家に着いたら、すぐに母に連絡して、父の入院していた病院を確認してみたら、やっぱり、聖アンナでした。

わたしは小さい時、

あの病院に通っていたのは間違いありません。

でも、小さい女の子と話した記憶は、やっぱりありません。

なつめちゃんの様子を見れたのは、良かったけど、いつになったら、話が出るんだろう、

どのくらいしたら、あのガラス部屋から出られるんだろう、これは、また汐月さんに確認しなくちゃいけない。

それと、今日は榊さんと話が出来て、色々聞けて、今までの疑問も、いくつか解けて良かったです。

まだ、なつめちゃんにしてあげられることは、いまいち見えてません。

汐月さんに、今後の予定を聞いて、なつめちゃんと、話が出るまでは、何も出来ないかも知れないなあ……

2月7日 汐月さんからのアドバイス

お見舞いの翌日に、汐月さんから連絡があつて、なつめちゃんのことについて、会って話が見たい、と言われました。

そこで、汐月さんの時間が空いている7日の午後、つまり今日、会う事になりました。

お昼ごろアパートの前に、車が止まる音がしたので、外に出て下を見ると、そこには、ベージュのニュービートルが、止まっていました。

車は、全然詳しくなかったけど、この車はテレビで見て、形がかわいいなあ、と思ったから、覚えてました。

なんか、この車は汐月さんのイメージと違うから、別の人が降りてくるんじゃないかと、思ったけど、降りて来たのは、いつも通りの、ダークスーツ姿の汐月さんでした。

ただ1つだけ、メガネがいつもと違って、丸い形のレンズの、薄い色のサングラスをしてました。

この人、会うたびに違うメガネしているような気がします。

汐月さん、絶対メガネにこだわってるなあ……

こっちに気づいた汐月さんに、わたしは頭を下げてから、ドアを閉めて、下に降りました。

汐月さんに、車かわいいですね、と言うと、  
ちよっと笑って、これ、結構気に入ってるの、  
と、まんざらでもない感じの笑顔で、答えてくれました。

「夜までには、戻らないといけないから、

軽くドライブして、食事しながらお話ししましょうか」  
との提案を、汐月さんで、ドライブに出発しました。

助手席に乗ってのドライブは、父の命日以来で、  
本来の目的を忘れて、外の流れる風景を眺めていました。

高速に入ったので、どこまで行くのかを尋ねると、

サービスエリアにある、レストランだそうです、  
限られた時間で、ドライブする時は、

一般道で、渋滞に巻き込まれると困るから、  
いつも高速を走るのだそうです。

戻る時は、どうするのかを聞くと、

道が繋がって回ってくる時間があれば、  
降りずに戻ってくるけど、

大体は時間がないから、ちょうど半分くらいの時間で、  
近くのインターを降りて、逆のインターから入り直して、  
来た道に戻るのだそうです。

だから、近場のサービスエリアとかは、

何があるかは、ほとんど覚えているのだとか。

汐月さん、無駄に頭を使ってる気がします。

汐月さんは、高速に入っただけに、サービスエリアに入りました。

もう着いたのかな、と思っただけ、

「今日は天気もいいから、幌開けるけどいい？」  
と言って、天井を指さしてました。

わたしは、びっくりして、

この車、オープンカーになるんですか！？  
と、思わず聞き返してしまいました。

なんか屋根の色違うなあ、とは、乗る前に思っただけ、  
オープンカーになるとは、思ってませんでした。

わたしは頷いて、答えると、

汐月さんは、屋根のところを操作して、  
自動で、屋根の幌がたたまれていき、

10秒ちよつとくらいで、オープンカーになりました！

わたしはびっくりして、

まじまじと、たたまれた幌を見ていました。

で、改めて目的地に向けて出発しました。

オープンカーになんて、生まれて初めて乗っただけ、  
とっても気持ちよかったです！

空はとても広くて、周りを見渡しても、

ほとんど遮るものもなく、

座っているながら、景色はどんどん流れていきます。

車なんだから、当たり前なんだけど、屋根がないだけの違いで、

こんなに気分が良いなんて、思いませんでした！

自分で車買う時は、絶対こういうのにしよう、って思いました。

わたしが、まるで小さい子供みたいに、あちこち見ながら、はしゃいでいるのを見て、汐月さんは、笑っていました。

1時間くらい走ったところで、目的地の、サービスエリアに到着しました。

そこは、とても広いサービスエリアで、休日だからか、駐車場は結構混んでいましたが、名物が出るらしい、和食のレストランは、このサービスエリアの中で、一番高いお店のせいか、お昼の時間帯を、ちょっと越えていたからか、結構空いていました。

このお店で、遅めのお昼をご馳走になってから、本題の話に入りました。

「まず、棗さんの容態について、説明します。実際に見て、判ったとは思うけど、

ICUに、あのガラス張りの部屋のことね、あの部屋に隔離されている状態です。

詳しくは、説明出来ないけど、



貴方が行った時は、棗さんは緊急入院後に、緊急措置を施した後で、

まだ、全身麻酔で眠っている状態でした。

今頃は、目を覚ましているとは思いますが、

しばらくはあの部屋で、術後の経過観察が続きます。

何事もなければ、あと10日あれば、

あの部屋から出て、面会も許可されます。

それまでは、前回と同じように、

窓越しに、様子を見ることしか出来ません。

許可がおりたら、また貴方に連絡します」

とのことで、なつめちゃんと話をするには、

あと2週間は待たないと、いけないようです。

次はわたしから、ずっと気になっていた、

なつめちゃんの、体の中にある器械について、

汐月さんに聞きました。

汐月さんは、それを提案したのは自分だと言い、

そこまでしなくては、棗さんの安全は保障出来ない、

あれでも足りないくらいだ、とわたしに説明しました。

なつめちゃんのプライバシーは、どうなるんですか、

とちよつと感情的になつて聞くと、

汐月さんは、そんなわたしの態度にも全く動じないで、

彼女は自分のプライバシーよりも、

貴方と再会することを取ったのよ、

と言われて、わたしは何も言えなくなりました。

黙ったわたしを慰めるように、

「そんなに、彼女のことを想っているのなら、

誕生日のプレゼントでも、用意してあげたら、  
とても、喜ぶと思うけど。

ちょうど、今日よ、棗さんの誕生日、知らなかった？」  
と、意外そうに言われました。

今日が、なつめちゃんの誕生日だなんて、  
全然知らなかった。

わたしはなつめちゃんのいる、あの部屋の中には、  
私物は持ち込めないのかを、尋ねると、

「そんなことないけど、  
棗さんは、何もいらないと行っていて、  
何ひとつ、置いていないの。」

もうあの部屋、と言うよりも、  
今回、あの病院に戻った段階で、  
何もかも、終わったというか、

諦めたように、無気力になっていてね、  
私の診療した結果としては、  
体調悪化は、その無気力を改善しないと、  
良くなるはないと見ているわ。

そういう意味で、貴方のプレゼントは、  
改善効果が見込めると思うのよ」

わたしは、前から考えていた、  
なつめちゃんに、してあげたいことの1つだった、  
ご飯を食べる楽しさを、教える方法として、  
わたしの手料理を、なつめちゃんに、  
食べさせることは出来ないかを、訊いてみました。

「彼女の食事は、アレルギーの関係で、

かなり制限されているのは、知っているわよね。だから、専用の宅配サービスに頼んでいるくらい、カロリーとか、使える調味料の量とか、とても細かく、管理されているの。

その条件の上で、プロの料理人に作らせているのが、あの食事だから、現実的にはかなり難しいと思う。仮に出来たとしても、

それは、単に出来の悪い、いつもの食事にしか、ならないような気がするけど。

どうしても、やってみたいのであれば、材料の手配はします。

ただし、手配された材料以外は、絶対に加えないこと、これを理解しておいて。

油一滴、塩ひとつまみも、加えないで。

分かった？」

と、とても念を押されましたが、とりあえず、許可をもらい、

材料は、自宅に送ってもらえることになりました。

わたしがお礼を言うと、汐月さんは真面目な顔になって、予想していなかったことを、告げられました。

「三崎さん、勘違いしないで欲しいのは、

私は、貴方が棗さんの為に色々してあげて、棗さんがそれによって、改善していく、

この状態は、決して良いとは思っていない。

私は貴方を棗さんの治療に、

欠かせない存在だと判断しているし、

それには確信も持っている。

でもそれは、途中までの話。

棗さんの、完全な治療には、逆に貴方の存在が、回復の妨げとなっていていくでしょう。

私が望んでいる、貴方の振る舞いはね、三崎さん、棗さんの、唯一の親友でなくなることを、

棗さんにとつて、特別な人でなくなることを、私は望んでいます」

この汐月さんの、最後の言葉の意味は、わたしには、正直良く判りませんでした。

自惚れているわけではないけど、

今のなつめちゃんには、わたしに親友でいて欲しい、という本心を聞いたし、

わたしも、そうしてあげたい。出来れば、なつめちゃんが望む限り。

でも汐月さんは、それが良くないと言う。

友だちがいない方が良いつて、全然意味が分かりません。

そう思っていたら、

何も言わなくても、顔に出してしまったようで、

「やっぱり、私の言った事には納得していないようね。

今はまだ、それでも構わない。

この言葉の意味を、今すぐ理解してとは言わない。でもあまり、時間は残っていないのも事実なの。

3月中には、理解してもらえれば間に合うから、それまで、貴方の正しいと思うやり方で、

棗さんを支えてあげて」

と、今までと変わらない、落ち着いた表情で言われました。

ここまで、話したところで、戻らなければいけない時刻になってしまい、サービスエリアを出た後、すぐに高速を降りて、入り直して、来た道に戻ってきました。

さっき言われたこともあって、行きとは違い、はしゃぐようなことはしないで、大人しく、じっとしていました。

で、運転している汐月さんを見てた時に、ハンドルの脇に、白い花が差してあるのに気づきました。

わたしがそれを見てみると、汐月さんがそれに気づいて、

「この車には、初めから一輪挿しがついてるの。」

せっかくだから、ガーベラを差してあるのよ。

もしかして、今まで気づかなかった？」

と言われて、こんなに目立つものに気づかないくらい、わたしは、はしゃいでいたと思ったら、ちょっと恥ずかしくなって、笑ってしまいました。

でもこのおかげで、雰囲気緩和、いつも通りのわたしに戻れました。

夕方には、アパートに着いて、送ってもらったお礼を伝えて、汐月さんと別れました。

汐月さんの最後の言葉には、今でも納得出来ないから、今のわたしが、正しいと信じることを、なつめちゃんにしてあげよう、と思いました。

当面の目標は、  
次に、なつめちゃんと話が出来る頃までに、  
なつめちゃんに、食べてもらえる手料理を作ることと、  
なつめちゃんにあげる、誕生日のプレゼントを、  
探そうと思います。

2010年 2月 その2(前書き)

変更履歴

2011/01/03	誤植修正	以外	意外
2011/04/14	記述修正	一回り	ひと回り
2011/04/28	記述統一	一枚、二枚、三枚	1枚、
2枚、3枚			
2011/05/26	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/07/21	記述統一	一人、二人、三人	1人、
2人、3人			
2011/09/19	誤植修正	話し	話

2010年 2月 その2

2月11日 なつめちゃんへの手料理

汐月さんから送られてきた、食材を使って、今日は、なつめちゃんの食事を作ってみました。

この食材で作れる、メニューのレシピ集もあったので、その通りに作るのは、簡単そうなんですけど、それだと、言われていた通り、いつものご飯と、変わらなくなってしまう。

この食材以外に加えることは、ダメだと言われているから、後は、何かを減らしてみるしかないんですけど、プロの料理人が作った料理より、素人のわたしが、ちょっと手を加えたくらいで、美味しくなるはずもなく、どうやっても、薄味の上に、更に、物足りない味になるばかりです。

食材を小分けにして、何度かチャレンジしたけど、結局、美味しく出来たのはありませんでした。

これじゃあ、汐月さんから言われた通りだなあ。

何か、ちがう形でなつめちゃんに食事に、興味を持ってもらえるような、工夫が出来ないかなあ。

もうちょっと、考えてみようと思います。



2月13日 誕生日プレゼント

今日は、なつめちゃんへのプレゼントを探しに、  
出かけてきました。

晴れてはいたけど、風が強くてめっちゃ寒い日で、  
ダウンジャケット着てマフラー巻いて、ニット帽被って、  
靴も暖かいショートブーツ履いて、完全武装です。

定期で行けるところで、一番お店が多くて大きい駅前は、  
やっぱり大学がある、学生街の航海堂がある駅です。

その駅ビルには、バイトが午後からの時とか、  
早く終わった時なんかは、お金もないので、  
よく、ウィンドウショッピングをしました。

その時に、ちょっと変わった品揃えの、  
雑貨屋さんを見つけたんです。

『  
×屋まじほのや』っていう名前のお店で、  
駅ビルの4階の、奥の方にあるんですが、  
このお店、扱ってる物に一貫性がなくて、  
行く度に、今まで扱ってなかった品物を入荷してるんです。

そこなら、何かいい物が見つかるかも、と思って、  
空いてそうなら、開店時間に合わせて行ってみました。

エスカレーターを上って、お店が見えるところまで来ると、すでに、今までに見たことない物が、お店の前の通路に、はみ出して並んでいました。

すごく大きな、ベージュ色の丸い塊が山積みになされていて、何かと思ったら、それは大きなクマのぬいぐるみでした。

一瞬、こんな大きいテイベアがあるんだ！と、思ったら、そっくりなだけでちがいました。

これ、座ってて1mを超える大きさで、山積みから転げ落ちていたのを、ちよっと持ち上げてみると、わたしの目線くらいの背丈で、けっこうずっしり重くて、両手でギュツと抱きしめると、ぬいぐるみには硬めで、力いっぱい抱きしめられて、ちようどいい弾力です。

手触りも毛がふかふかで、縫製も良く出来てるみたいで、手や足も動くようになってるけど、しっかりついてて、引っ張ったくらいでは、取れそうもないです。

わたしは、周りに人がいないのを確認して、しばらくクマに、ハグしてました。

これ、いいなあ、欲しいなあ……

だけど、顔が、ちよっと怖いんです。

目つきが冷めてて、口がへんの字で、まるで、怒ってる、というか、無愛想な感じな顔です。

この顔、誰かに似ているような気がするなあ、  
大きくて、無愛想で、怖い顔してて……

あ、これ、榊さんだ！

このクマ、すごく榊さんっぽいです。

榊さんはこんなにお腹出てないけど、雰囲気はそっくりです。

この時に唐突にピンと来て、プレゼントはこれにしよう！  
と、決めました。

で、値札を見ると、3万円です！

た、高い！

どつりで、良く出来てると思った……

ちょっとこれは、予算オーバーです。

残念だけど、諦めるしかないか、  
と思つて、がっくりしてたら、突然、

「それ、いいでしょ、今回限りの入荷だよ」  
と、店の中から、声をかけられて、  
びっくりして振り返ると、

それは、お店の店長さんでした。

この店長さんは、このぬいぐるみみたいに、  
大きな太ってる人で、ひげが、昔の拳法家みたいに、

細くて長くて、そんなに明るい店内でもないのに、かなり濃い目の、丸いサングラスをかけてます。

パツと見は、かなり怪しげな人です。

もちろん、今まで一度も話したことはなかったです。

店長さんは、わたしが持つていたぬいぐるみを見て、顔をしかめると、

「ああ、またか、それ不良品だわ。

ほんとに品質が悪いんだよねえ、これ。

返品だな、それ」

と言われて、どこがだろうと疑問に思っつて尋ねると、

他の、山積みのぬいぐるみを指さして、

「それ、他のよりひと回り大きいし、

足も長すぎだな。

顔もちゃんと出来てない。

そんなおつかない顔じゃないよ」

と、言われました。

たしかに、抱いてみたら手が回らないくらい大きくて、思ったより大きいな、と思ったら本当に大きくて、

他のクマの顔を見たら、みんな優しい顔でした。

わたしは、断られるのを覚悟で、

返品するなら、これでいいので安くしてもらえませんか、と店長さんに、交渉してみました。

店長さんは、電卓片手に、しばらく考えていたけど、

「今日、最初のお客さんだし、

君、何回かお店に来てくれてるから、  
じゃあ特別に、5千円引きで、どう？」  
と、値引きしてもらえました！

けど、まだ予算はオーバーしていて、  
どうしようと、悩んでいると、

「あんだ、若いのに粘るねえ、  
一体、いくらならいいの？」

と、聞かれて、わたしは正直に2万円です、  
と答えました。

店長さんは、うーん、と、うなづてから、

「と言われても、2万5千円以上は無理だよ、  
無理ならあきらめな。」

それにこれ、大きいから、

持っては帰れないから、送料もかかるよ」

と、言われてしまいました……

わたしは、ここまで負けてもらったのに、  
買えないのが悔しくて、涙目になりながら、  
もし売ってもらえたら、

送料のお金はないので、手で持って帰ります！  
と言ったら、店長さんはちょっと考えた後に、  
じゃあ、宣伝代と言う事で、2万円にしてあげる、  
って言われました！

ただその代わり、クマは裸のまま、  
肩から『x屋』の名前が大きく入った、  
たすきみたいなのをかけられて、

これで家まで持って帰るのが、  
値引きの条件だよ、と言われました。

わたしは、がんばって、クマを抱えて帰りました。

真っ直ぐ歩けないし、

前はクマで見えないし、

すごく、人目を引いたし、

小さい子は、近寄って触ってくるし、

ヤンキーっぽいカッパルからも、声かけられたり、

10回以上、人にぶつかってしまつて、謝ったり、

電車では、お年寄りに席を譲られるので、

とにかく、色々大変でした。

でも、何か質問されるたびに、

これは『x屋』で買ったんです、

つて答えておきました。

家に帰ってから、毛を整えてきれいにし、

別にもらつておいた、プレゼント用の包装紙で包んで、

プレゼントの準備が出来ました。

ちよつとかなりすごく大変だったけど、

何とか予算で買えて、良かったです。

この無愛想な榊さんクマ、わたし的にはいいと思うけど、

なつめちゃんは、これ気に入ってくれるかなあ。

これを見たときの、

なつめちゃんと榊さんの、リアクションが楽しみです。

2月14日 バレンタインデー

今日から、航海堂のバイトを再開しました。

今までのシフトだと、土曜日から始めるのですが、今日は忍さんが店にいと聞いて、今日からにしました。

色々心配させてしまった忍さんに、感謝とお詫びを込めて、チョコレートを渡そうと思ったんです。

それと、なつめちゃんの話聞いてもらって、今度はアドバイスメももらいたい、と思っています。

でもバイトに行く前に、用事があって、午前中は、自宅にいました。

実は昨日、かなちゃんからメールが来て、土曜の午前中は家にいてね、というメールが来ていたんで、バイトに出る時間を、午後からにして、うちで待っていました。

10時くらいに、宅急便の人が小包を持って来ました。

その送り主は、かなちゃん、菓子折りくらいの大きさの、小包だけど、

ちよつと重かつたです。

中身を確認してみると、それは、ゴディバのチョコレートの詰め合わせで、手紙が入っていました。

「愛しいみなもへ

溢れんばかりの愛を込めて、

このチョコレートを送ります。

あなたのことが好きです！ 愛しています！

どうかこのあたしの気持ち、受け止めて！

P.S.

お酒入ってるのもあるから、気をつけて食べてね

「かわいい、かわいい、かなより」

何かと思えば、かなちゃんからの、愛の告白でした。

手紙の内容は、ともかくとして、

チョコの詰め合わせは、すごく大きくて、

豪華な箱は、上下二段になっていました。

上の段には、一口サイズの、

色んな種類の、かわいいチョコが並んでいて、

下の段の、引き出しになっているところには、

一口サイズの、板チョコが入っていました。

きつとこれ、すごく高いんじゃないかと思うんだけど、



かなちゃん、まさか本気で愛の告白じゃないよね？  
とか、すこし本気で心配になってしまいました。

とりあえず、告白についてはスルーしといて、  
お礼のメールに、ホワイトデーにお返しするね、  
と書いて、返信しました。

お酒が入ってるのがあって、書いてあったから、  
バイトに行く前に、板チョコを1つだけ食べてみると、  
なんだか、高級な味がしました。

やっぱり、高いものは美味しいです。

もう2枚ほど食べてから、お店に向かいました。

久しぶりに、お店に行くと思ったら、  
なんだか緊張してしまい、

最初に面接に来た日のことを、思い出しました。

店内に入って、お店に出ている人たちに会った時に、  
わたしは恐縮してしまって、

長い間、休んでしまってますみませんでした、  
と、頭を下げて謝ると、みなさん、

それほど気にしてなかったのか、軽い感じで流されて、  
普通に、挨拶を返されてばかりでした。

わたしは、自分の存在ってその程度だったのかなあ、  
と、ちよつと寂しく思っていると、

忍さんの次に長くいる、社員の人に手招きされて、  
なんだろう、と思いつつその人のそばに行くと、

忍さんの指示で、わたしに対しては、  
変に突っ込まないで、前と同じように接するようについて、  
忍さんから、言われているんだよ、  
と、教えてくれました。

わたしは、社員の人に教えてくれたお礼を言って、  
忍さんがいる事務室の前まで行くと、一度深呼吸してから、  
中に入りました。

わたしから挨拶しないと、と思っていたのに、  
忍さんの顔を見たら、何て言ったらいいか、  
分からなくなってしまうって、  
あの、って言ったきり、  
何も言えなくなっていました。

どうしよう、とわたしが焦っていたら、  
忍さんは、わたしに一言だけ、  
「おはよう、みなもちゃん」  
と、普通に言われました。

忍さんの、その一言を聞いたら、  
なんでか判らないけど、急に涙がこみ上げて来てしまって、  
ドアの前で、泣いてしまいました。

忍さんは、そんなわたしに厳しい表情をして、  
「みなもちゃん、ここにバイトしに来たんじゃ？

泣いてちゃ仕事にならないよ。  
復帰して、職場に出てきたんだったら、  
しっかりしなさい」

と、いきなり叱られてしまいました。

わたしは、すいません、と謝ってから、  
涙をこらえて、挨拶した後に、  
後で話をする時間を下さい、  
とお願いで、忍さんの仕事が終わった後に、  
時間をもらいました。

更衣室に行つて、着替えている時、  
わたしは、忍さんの言葉を改めて考えて、  
ここに来るのに、わたしが仕事しに来るといふ、  
気持ちではないのを、忍さんは気づいて、  
それを指摘されたんだ、と気がづきました。

来ていきなり、忍さんにかっかりされたくないの、  
わたしは、気合を入れ直して、  
余計なことは考えず、一生懸命バイトをがんばりました。

集中していたせいか、  
バイトの時間は、あっという間に終わつて、  
忍さんの仕事が終わるのを、待っている間、  
他の人が帰っていくのを、  
わたしは挨拶して、見送っていました。

忍さんは、この日かなり遅くまでかかっている、  
時間は1時間以上経つて、9時を過ぎると、  
おに残っているのは、わたしと忍さんだけになりました。

9時半くらいに、忍さんの仕事が終わつて、  
更衣室に来ました。

手にお茶を2つ持って、入ってきた忍さんは、  
「遅くなっちゃってごめん、

みなもちゃん、今日のごくろうさま。

最初に厳しい事言っつて、悪かったね。

でも、ちゃんと切り替えて、

仕事出来てたみたいで良かった。

で、話っつていっつのは？」

と言っつて、わたしの前に紙コップを1つ置きました。

わたしは、まずは用意してきたチョコレートを出して、

忍さんに、お世話になっつたお礼と、

心配させてしまっつたお詫びです、と伝えて渡しました。

忍さんは、この展開は予想していなかつたみたいで、

かなり驚いていたけど、喜んでもらえてよかつたです。

そして、この後に本題の、

バイトを休んでいっつる間の出来事と、

なつめちゃんのことを、ざつと説明して、

なつめちゃんにしてあげることや、

汐月さんの言葉の意味について、相談しました。

忍さんは、わたしの話を身動き1つしないで、

わたしから視線も外さずに、じつと聞いていました。

わたしの話が終わっつて、最後に忍さんはどう思っつたかを、

教えて欲しいとお願ひすると、忍さんは、

わたしから視線を外して、しばらく考へてから、

「そつつか、色々大変だつたんだね、

まず、今の話で疑問に思っつた事から。

みなもちゃんの話聞いてて、よく判らなかつたところがあつて、その病院で、会つたつて言う、なつめちゃんつて子じゃない男の子、なんでそれが、友だちの子じゃないと思つたの？」と訊かれて、わたしは改めて、車椅子の男の子のことを、思い出してみました。

坊主頭で、青いパジャマを着てて、声が出せなくて、車椅子に乗つてて、いつもわたしと手を繋いでいた。

だから、男の子だと思つた、とを伝えると、

「それつて、みなもちゃんの主観でしょ？」

頭に怪我とか、治療で髪が抜けるから、

頭を丸めるつてのは、よくあるし、

それに、みなもちゃんだつて、青い服着てるよね？

つまり、女の子だからつて、

青いパジャマを着ないつて事もないと思つけど。

車椅子に乗つてたのも、足が悪いとかじゃ無くつて、口に呼吸器みたいのを、付けてたんだから、それを持ち歩けない、小さい子供だつたから、車椅子に乗つてただけだと思つ。

手を繋いでいたつていうのは、同じ女の子でも、親しい友達には、スキンシップとかで、気軽に触つたりしない？

多分、その子はみなもちゃんに親しみを込めて、手を繋いでいたかつたんだと思えるな。

その子の小さい時の事を知っている人に、  
「どういう格好してたか訊けば、すぐに分かると思うけど」  
と言われて、そう言われてみると、  
たしかにわたしの思い込みで、なつめちゃんじゃないと、  
思っていただけなのが、分かりました。

忍さんは、更に続けて、

「私が、今の話を聞いた限りでは、

みなもちゃんは、目先の事に囚われていて、

先生は、最終的な状態を考えているんだと思う。

きつい言い方するとね、

みなもちゃんがやっているのは、

その子を甘やかしているだけ。

その先生は、その子を立ち直らせたんだよ。

みなもちゃんは、これからずっと、

その友達と、一緒にいるつもり？

その子からすれば、残りの人生を、

自分が心を許せる人と、一緒に過ごしたいと望んでいるのは、

それまでの辛い人生を考えれば、

その気持ちは、判らなくもないけど、

普通に生きてる人だって、辛い事はない訳じゃないよね。

でも、みんな頑張って、自分で克服して生きてる。

生きていくつてのは、嫌な事が起きる度に、

解決して乗り越えていく、その繰り返しだと私は思ってる。

その子は、嫌な事からただ逃げ出そうとしていて、

その逃げ口の1つが、みなもちゃんになっっているんだよ。

あと少ししか、生きれないかも知れないって言うのも、

私や大人から見ると、単なる現実逃避だね。

そんなこと言ったら、誰だって、突然、事故や病気や怪我で、死ぬかも知れない。でもそれを悲観して、仕事や生活を投げ出したりしないし、他人に甘えたりしない。

頑張つて耐えながら生きているのは、誰でも一緒だから。

きっとその子は、病弱だったからなんだろうけど、親も含めて、他人からは直接厳しい事とか、叱られたりとか、されてないんだろっな。

前にみなもちゃんが、勉強していたような、医学の知識は無いけど、体が弱い事と、心が弱い事は、私は別だと思ってる。

体が弱いからと言って、甘やかしてしまえば、体の弱さにつられて、心も弱くなってしまふ。

その子は、そんな状態だと思える。

今のままだと、その子はみなもちゃんに依存してしまつて、みなもちゃんも、依存されているのが、正しい良い事だと、勘違いしてしまう。

そうなつてしまつたら、2人のどちらにとつても、いい事では無いんだよ。

その先生は、そういう事を見越して話している、そんな気がする。

これが、私の率直な感想」

と言い終えると、忍さんは真面目な顔から、笑顔になつて、

「こんなんで、参考になつた？」

多分、今の私の話を聞いても、まだピンと来ないんじゃない？」  
と、質問されて、私は正直に頷いて返事しました。

「そうだよねえ、

みなもちゃん、まだ若いから、その先生も、あえて理屈で説明しないで、みなもちゃん自身で、それに気づくのを、待つことにしてるんだと思う。

若い子に理屈こねても、受け付けなくって、逆に反発しちゃうって判ってるんでしょ、なんせ、カウンセラーの先生だしね。

次に、その友達の子と話が出来る時に、これからの先の事を、ちょっと想像してみな。そうすれば、ちょっとは判るかも」

言い終えると、忍さんは紙コップのお茶を飲み干して、時計を見ました。

わたしもつられて、時計を見ると、もう0時を回ってました。

いつの間にか、帰りの電車がなくなっていました。

「ちょっと、話しすぎちゃったな、

みなもちゃん、今日は家まで送ってくよ」  
と、忍さんは車のキーをわたしに見せながら、言ってくれたので、お言葉に甘えて、家まで送ってもらうことになりました。



お店を閉めて、外に出るとすごく寒くて、  
急いで駐車場へと向かうと、  
そこには、忍さんの雰囲気からすると、  
ちよつと意外な、大きくて角ばってる、  
モスグリーンのワゴンが、止まってました。

わたしが、これ忍さんの車ですか、と聞くと、  
「違うよ、私は車持ってるない。」

これは店長の車、たまに借りるんだ。  
でもこれ、ワゴンだけどFRなんだよ、  
だから、雪道とか大変でさあ、  
って言っても判んないか」  
と言いながら、ドアを開けていました。

車で送ってもらってる間に、  
前から気になっていた、店長の言葉を思い出して、  
今なら訊いてもいいかな、とちよつと思つて、  
わたしは、忍さんに、  
色々と面倒みてもらっていると、思っていることと、  
忍さんがいない時に、店長から言われたことを伝えて、  
どうしてそんなに、わたしに色々してくれるんですか、  
と、思い切つて訊きました。

忍さんは、  
「それは、みなもちゃんが、とっても可愛いからだよ」  
と、茶化してごまかそうとしてたけど、  
わたしは忍さんのことを、憧れているし、尊敬してるし、  
大好きな人だから、本当の事が知りたいんです！  
と、ずつと思つていたことを、真剣に伝えました。

この時の忍さんは、今までに見たことないくらい、困っているように見えました。

忍さんは、一度何かを言いかけたけど、それを思いとどまって、

ちよつと苦笑いな表情をすると、

「いきなりの告白だねえ。」

それは、バレンタインだから？

ええと、今はちよつと答えづらいな。

話が出来る時になったら、ちゃんと話すから、

今日は勘弁してもらえない？

ほら、もう家に着くし」

と頼まれてしまい、わたしは前を見ると、

もう、アパートの前に着いていました。

わたしは、送ってもらったお礼を伝えて、車を降りました。

最後に、忍さんはわたしに、

「私が、みなもちゃんの事を、

大事に思っているのは、認めるよ。

だから、何かあれば、

私で良ければ力になるから。

今は、これ以上は言えない」

と言い残して、帰っていききました。

この言葉は、わたしにとって、

とつても嬉しかったけど、

その理由は、まだ教えてもらえませんでした。

忍さんのことは、忍さんが話してくれるまで、焦らずに、ゆっくり待つ事にします。

今は、忍さんからもらったアドバイスを参考にして、なつめちゃんのことを、もう一度考えてみたいと思います。

2月18日 儂げななつめちゃん

汐月さんから、昨日の夜に、明日から、面会が許可されるって言う連絡があつて、わたしは即答で、明日に行きます、と伝えました。

そして、今日がその当日です。

最初に見に行つてからも、時間があれば、なつめちゃんのところへ、行っていました。

ずっと寝たきりで、動かないなつめちゃんを、榊さんと一緒に見ている、

この時に、忍さんの言葉にあつた、なつめちゃんの、幼い頃の格好について訊いてみたら、榊さんがなつめちゃんと出会った、最初の頃は、頭は坊主で、青い服を着ていたそうです。

これで、わたしが最初に会っていた時の、なつめちゃんについての、謎は解けました。

その事を、なつめちゃんに伝えたくても、それはまだ出来なくて、この日を待っていたんです。

もう、すっかり慣れてしまった、学校のそばから、なつめちゃんの病室への道のりの後、榊さんと一緒に、病室へ入ると、ずっと空だったベッドに、なつめちゃんがいました。

わたしと榊さんが入ってきてても、なつめちゃんは、眠っているのか、こちらに気づく様子はありません。

わたしは、すぐにベッドの脇に近づいて、そっと、なつめちゃんの手を取りました。

それに気づいて、なつめちゃんは目を開いて、わたしの方を見るのですが、まるで、わたしと判らないみたいに、最初は、何の反応も無くて、なつめちゃんの顔を見ている、わたしと視線も合わなくて、何だか、わたしの後ろの遠くを見ているようでした。

この時のなつめちゃんは、そんなことは、ありえないけど、なんだか、このまま消えてしまいそうな感じがして、わたしは、すごく不安になりました。

だけど、ちょっとしたら、わたしのことが判ったみたいで、力なく笑って、わたしの手を握り返してきました。

でも、その力は弱弱しくって、  
それに、何も話してくれません。

わたしはとりあえず、なつめちゃんに、  
最初の出会いのことを伝えました。

これを伝えれば、少しは喜んでくれると思ったんです。

わたしの話を聞いたなつめちゃんは、  
目に涙を浮かべて、喜んでいるようだったけど、  
やっぱり何も言ってはくれませんでした。

わたしは、心配になってなつめちゃんに、  
声、出せないの？

と尋ねると、なつめちゃんは、  
小さく、うん、と頷きました。

実は、ナースステーションで、  
まだあの小部屋から、出たばかりなので、  
意識がはっきりしていなかったり、  
筋力が落ちていて、うまく動けなかったりすると、  
忠告は受けていたんですが、  
まさか、喋れなくなっているとは思わなくて、  
とても驚きました。

わたしはなつめちゃんに、  
誕生日が2月7日だったのを、聞いたことを伝えて、  
退院したら、ちょっと遅いけど、  
わたしが、なつめちゃんの誕生日のお祝いをするから、

早く元気になって退院してね、と伝えました。

なつめちゃんは、それを聞いて、溢れる涙を、拭いもしないで、さつきよりも力強く、頷いてくれました。

わたしは、なつめちゃんの涙を拭いてあげながら、こうやって、わたしがなつめちゃんに色々してあげれば、なつめちゃんは、元気になってくれて、汐月さんや忍さんの言っていたような、悪いことには、ならないんじゃないか、って強く思いました。

これだけ話したところで、もう看護師さんが、面接時間の終わりを知らせに、やって来ました。

事前に、ナースステーションで、面会時間は、患者の体調が思わしくないので、30分です、と告げられていたから、あんまり、ゆっくり出来ないとは思っていたけど、本当にちょっとしか、話が出来ませんでした。

病室を出る時も、わたしが離れるぎりぎりまで、なつめちゃんは、わたしの手を離そうとはしなくて、看護師さんに言われて離すと、なつめちゃんは、とても寂しそうな顔をしていました。

病室から出た後、今までずっと、なつめちゃんのそばで、様子を見てきた榊さんは、今のなつめちゃんを、どう思っているんだろう、と、気になって、榊さんと談話室に行つて聞くと、

今まで見ていた中で、一番気力がなくなっている、と、はつきり言われて、少し複雑な気持ちでした。

帰りの車の中でも、榊さんの言葉は、わたしには、とても重く感じていました。

榊さんの言葉は、なつめちゃんの表面的なことを、言っていたのではないと、判っていたからです。

やっぱり、わたしが色々していても、なつめちゃんは、良くなっていないのかな。

逆に、わたしがいることで、なつめちゃんは、悪くなっているのかな。

でも、退院を目指して、なつめちゃんが、がんばってくれれば、

きっと、良い方向に進んでいくと信じたいです。

今は、そう願うことしか、わたしには出来ないから……

2010年 2月 その3（前書き）

変更履歴

- 2011/01/03 誤植修正 以外 意外
- 2011/04/03 記述修正 その間に、汐月さんが定時検診をするので、 休憩の前に、汐月さんが定時検診をするので、
- 2011/04/03 記述修正 なつめちゃんは、意外なわたしの言葉を聞いて、 なつめちゃんは、意外なわたしの言葉を聞いて、
- 2011/04/03 記述修正 食事制限で2個、汐月さんも1個、 食事制限で1個、汐月さんも1個、
- 2011/04/03 記述修正 なつめちゃんのこと、を考えていました。 なつめちゃんのことを、考えていました。
- 2011/04/27 記述統一 一種類、二種類、三種類
- 2011/05/27 記述統一 一つ、二つ、三つ、
- 2011/07/22 記述統一 一人、二人、三人 一人、
- 2人、3人



2010年 2月 その3

2月21日 お誕生会

なつめちゃんが退院しました！

と言っても、一時退院ですけどね。

19日に、汐月さんから連絡が入って、

明日から2、3日の間だけ、

一時退院することを、教えてもらったんです。

汐月さんの話によると、

わたしが面会した後、なつめちゃんは、

急に元気になったそうで、

まだ普通に動き回るのは無理だけど、

とりあえず一時でも、退院することが出来て、

良かったです。

この時に、わたしは汐月さんに、

なつめちゃんに、してあげようと思っていることを、

説明しました。

ダメって言われるかも、と思っていたら、

汐月さんは、わたしの提案に許可をしてくれて、

必要な物の、手配をしてくれました。

これで、わたしが考えた、

なつめちゃんのお誕生会をすることが出来ます。

なつめちゃんのマンションへは、  
例の荷物が大きかったから、警護の人をお願いして、  
荷物と一緒に、送ってもらいました。

マンションに着いて、荷物を運ぶのも手伝ってもらい、  
わたしは、なつめちゃんの家に上がりました。

汐月さんとの電話での、事前の打ち合わせ通り、  
なつめちゃんには、自分の部屋で待っていてもらい、  
わたしは、支度にかかりました。

まあ、支度、と言っても、  
クリスマスみたいに、部屋を飾り立てたり、  
用意したご馳走を並べたり、  
ではなくて、その手前の作業です。

つまり、ケーキとか料理を、作る準備をしていたんです。  
わたしがなつめちゃんに、あげたいと思ったのは、  
もっと、ご飯を楽しく食べられるようにしてあげたい、  
ということでした。

最初は、わたしが手料理を作っただけならば、  
と、思ったけど、どれだけやっても、  
美味しくは、ならなかったんです。

わたしが作った、って言えば、  
なつめちゃんは美味しいって、口では言うと思うけど、  
それは、本当に料理が美味しいんじゃないかと、

わたしが作ってくれたから、  
っただけにしか、ならないと思っただんです。

それじゃ、意味がないから、もうちょっと考えて、  
だったら、自分で作ったものだったら、  
感想は違ってくるんじゃないかな、  
と、思いついたんです。

汐月さんには、  
基本的なところは、わたしが調理して、  
なつめちゃんには、出来る範囲で、  
危なくないところを、手伝ってもらおう形で、  
料理を作らせたい、とお願いして、  
許可をもらいました。

なつめちゃんのマンションは、とても大きくて、  
ダイニングルームも広いのは、  
前に泊まった時に、見て知っていたから、  
まだ、長時間立っていられない、なつめちゃんでも、  
座って手伝ってもらって、時間をかければ、  
ちゃんと料理は出来るはず。

それに、メニューの方も、  
送られてきた、食材とレシピから、  
なつめちゃんが、食べられないものが少なくって、  
調理しやすいものを、選びました。

意外に、普通のカレーが大丈夫だったので、  
これにしました。

それと比べてケーキの方は、かなり悩みました。

いかにもお誕生日のケーキって感じなのは、なつめちゃんのアレルギーで、卵とか、小麦とかが、ダメなんです。

だから無理かな、と思ったけど、色々調べてみたら、アレルギーの用に、豆乳生クリームや、米粉で作った、スポンジを使ったケーキがあったので、自宅で何回か、挑戦してみたのですが、なかなか、スポンジがうまく出来ませんでした。

結局、汐月さんをお願いして、用意してもらいました。

届いた米粉で作来たスポンジは、見事なスポンジで、普通のケーキのスポンジと比べても、変わらない出来でした。

これが出来ていれば、残りの作業は、ホイップクリームを作って、デコレーションするだけなので、なつめちゃんがメインで、作ってもらうことが出来ます。

例のプレゼントは、最後に出そうと思って、別の部屋に、隠しておいてもらいました。

準備が出来たので、なつめちゃんを呼びに部屋へと行くと、なつめちゃんは、ベッドに座って待っていました。

病院で見た、全然動けなかった時と、  
見違えるほどに、回復しているように見えました。

今日の趣旨は、秘密にしてもらっていたから、  
なつめちゃんは、これから何をするの？  
と言いたげな表情で、わたしを見つめていました。

なんか、前よりもっと、お人形っぽくなってる気がする。

わたしは、なつめちゃんに、後ろ手で隠して持ってきた、  
エプロンを出して、なつめちゃんに着せてあげました。

なつめちゃんは、意図がつかめないみたいで、  
不思議そうに、エプロンを見ていて、  
顔を上げて、またわたしをみると、  
囁き声みたいな、小さい声で、

「みな、わたしは何かするの？」

と、とても小さい子みたいに、聞いてきました。

すごく、かわいいんだけど、

なんでこんなに、幼く見えるんだろう。

わたしは、これからわたしと一緒にご飯作るんだよ、  
と伝えると、なつめちゃんは、不安そうに、  
「え、料理？」

みな、私、一度も料理とかしたこと、ないよ？  
だから、ちゃんと作れない、と思う……」  
と、うつむきながら、小声で言いました。

わたしは、なつめちゃんに、

出来ることだけ、手伝ってくればいいから、  
そんなに心配しないで、と励ましつつ、  
車椅子に座らせて、ダイニングルームへと連れて来ました。

なつめちゃん、随分消極的になっっているような、  
そんな気がするの、気のせいかな。

まだ病み上がりで、何かするのが億劫になっただけ？  
なら、いいんだけど。

ダイニングルームについて、手を洗ったら、  
早速、調理を開始しました。

最初のうちは、汐月さんが脇の方で、  
わたしの手際を、確認していたけど、  
大丈夫と、思ってもらえたようで、  
しばらくしたら、いつの間にか居なくなっていました。

汐月さん、また、今までに、  
見たことないメガネしてたような気がする、  
後で、確認しよう。

まず、カレーからです、  
なつめちゃんには、ピーラーを使って、  
にんじんの皮むきをしてもらって、  
その後、たまねぎの皮も剥いてもらいました。

その間に、わたしは、ジャガイモの皮むきと、  
鍋の準備をして、なつめちゃんが剥いたたまねぎを、  
泣きながら切っていました。

それをみた、なつめちゃんは、ちよっと驚いていて、どうやらたまねぎを切ると、涙が出ることを、知らなかったようなので、あえて隣で切ってあげて、体験させてあげました。

最初は、おそろおそろやっていた、なつめちゃんだったけど、

手は力が入れづらいだけで、指はちゃんと動かせたので、すぐに慣れてきたみたいで、

わたしがやっていた、ジャガイモの皮むきを、いくつか、手伝ってもらいました。

なつめちゃんが、ジャガイモの皮をむいている間、

わたしは鍋で、炒める準備に入りました。

わたしの作るカレーは、いつも家で作ってる、

何のひねりもない、普通のカレーです。

カレーのルーが使えるかが、とても心配だったけど、

何種類か、市販のルーで使ってもいい物を、

汐月さんに、用意してもらっていたから、

いつも通りに、作ることが出来ました。

うちのカレーは、ルーを3種類混ぜて作ります。

色々試したら、その3つを組み合わせたのが、

一番美味しかったです。

ただ、今回はルーの量が、ちよっと少なめで、

カレー、と言うよりもスープカレーっぽいかも。

それと、うちではカレーと言えば、ポークカレーです。

だから、今回もお肉は豚肉です。

わたしが豚肉を炒めている間、

なつめちゃんには、切った野菜を炒めてもらって、

わたしが炒めた肉を入れて、水を加えた後は、

なつめちゃんに、かき混ぜたり、

水を継ぎ足してもらっていました。

なつめちゃんが、調理場でも長時間いられるように、

背もたれ付きの、キッチンスツールも、

しっかり準備してあり、用意は万全です。

この時のなつめちゃんは、

わたしと一緒に、作っていることより、

自分で調理しているのを、楽しんでいるように見えて、

ちょっと嬉しかったです。

なつめちゃんは、鍋をかき混ぜながら、

「ねえ、これ量が多くない？」

と聞かれて、わたしは何も言わず、ニヤニヤしてました。

それを見たなつめちゃんは、とても不思議そうに、

何も答えないわたしを見ていました。

今回、わたしが考えたお誕生会は、

なつめちゃんが、お世話になった人をもてなすんです。



だから、なつめちゃん自身の分と、わたしと、それから、汐月さんと、榊さんの分も作るんです。

もちろん、ケーキも、4人分です。

このことを教えると、

なつめちゃんには、予想外のことだったようで、とても驚いていました。

しばらく煮込む段階に入って、

予定通り、ちょうどお昼になったので、

お昼ごはんにしました。

お昼ごはんは、事前に、

汐月さんに、炊いておいてもらったごはんで、

なつめちゃんに、4人分のおにぎりを作ってもらいます。

おにぎりに入れる具も、なつめちゃんが食べられる食材で、

汐月さんに、用意してもらってあるので、

あとは、ただ、具を入れて握るだけです。

その間に、わたしがお味噌汁を作りました。

なつめちゃんは、カレーを手伝ったことで、

食事を作ることに、興味を持ってきたのか、

かなり、やる気になっていました。

榊さんがいるから、かなり多めにご飯は炊いてあって、

なつめちゃんには、少食でも色んな具を食べられるように、

小さめに作るように、伝えておいたので、かなりの数のおにぎり、というか俵結びが、大きな丸いお皿いっぱいに出来ました。

なつめちゃんの、几帳面な性格が災いして、どれも、全く同じにしか見えなくて、

どれに何の具を入れたのかは、わたしにはもう判りません。

作った本人に聞くと、具の並んでいる順番に作って、

扇状に並べておいた、と言ったのですが、

わたしがテーブルに運ぶ時に、

お皿を回してしまったから、もう分かりません。

なつめちゃんは、最後までおにぎりの出来を気にしていて、

変じゃないか、とか、味は大丈夫かな、とか、

ずっと、わたしに聞いていましたが、

なつめちゃんは、ただ握っただけだから、

それは大丈夫だよ、とわたしは繰り返し答えてました。

支度が出来たところで、

なつめちゃんを、テーブルの席に着かせて、

わたしは、汐月さんと榊さんを、呼びに行きました。

ダイニングルームを出る時に見た、

ちらっとこっちを見た、なつめちゃんは、

ちよっと、緊張しているように見えました。

2人を連れてきて、席に着いてもらい、

4人で一緒に、なつめちゃんの作ったおにぎりと、

わたしの作った、お味噌汁を食べました。

なつめちゃんは、おにぎりを手にとって食べる人の、リアクションが、気になって仕方ないようで、自分が食べる手は、そのたびに止まっていました。

汐月さんは、そんななつめちゃんのことを分かっている、一口食べてすぐに、とても美味しいですよ、と、感想を伝えたのに対して、

榊さんは、黙々と食べ続けていて、何も言おうとしません。

榊さん、空気読んで欲しいなあ……

わたしの作った、お味噌汁も、

汐月さんから、お褒めの言葉を頂いたので、ちょっと嬉しかったです。

今日の汐月さん、銀縁の楕円形のメガネかけてました。

一体、何種類持っているのかなあ。

榊さんの活躍により、

大きなお皿いっぱい、並んでいた俵結びは、きれいになくなりました。

お昼ご飯を食べ終わって、

後片付けを、なつめちゃんと2人でした後に、カレーの調理へと戻って、

なつめちゃんに、3種類のルーを入れてもらって、ルーが溶けるまで、よく混ぜてもらい、

カレーはこれで完成です。

この後に、なつめちゃんに米を研いでもらい、ご飯を炊いてもらいました。

次は、ケーキに取りかかります。

今度はなつめちゃんに、メインで作業してもらって、わたしはほとんど、見てるだけです。

まずは、ホイップクリームを、なつめちゃんに作ってもらい、その後に、入れたいフルーツを切ってもらいます。

生クリームを混ぜるのには、電動の泡立て器を使ったので、それほど疲れさせないで、ちゃんと出来ました。

次は、なつめちゃんのセンスで、スポンジの間に中に入れるフルーツと、上に乗せるフルーツを、選んでもらいました。

なつめちゃんは、果物のアレルギーはないので、色々、用意されていました。

この辺になると、なつめちゃんはかなり夢中になっていて、もう、わたしの方を見ることも無くて、真剣に選んでいました。

で、色々悩んでいた割りには、定番の、苺のショートケーキになりそうです。

最後に、ホイップクリームを塗りながら、フルーツとスポンジを乗せていって、ホイップクリームで、周りをきれいにならして、ケーキの上に、苺をデコレーションして、出来上がりました。

ここでも、なつめちゃんの几帳面さが出て、挟むフルーツの配置を、完全な均等に置いていて、どこを切っても、4等分か8等分すると、全く同じ中身になるように並べてました。

わたしには面倒で、そこまで出来ないです。

スポンジの横や上の面を、クリームで塗るのも、恐ろしく丁寧にやっていて、

出来上がったケーキは、まるで手作り感のない、お店のケーキ並みの綺麗さです。

でも、まだなつめちゃんは出来たとは言わないで、出来たケーキを、念入りに確認しては、ちよこちよここと、手直しを繰り返していました。

わたしが、もういい加減いいんじゃないかな、  
と思っ、声をかけようとしたら、

「みな、出来たよ」

と、なつめちゃんが納得したものに仕上がったようで、  
いつの間にかくっつけていた、

頬についた、クリームにも気づかずに、  
笑顔で、わたしに言いました。

ケーキを冷蔵庫にしまって、時計を見ると、4時半でした。

予定より、30分オーバーでしたが、まあ、汐月さんも了解してくれたから、大丈夫でした。

夕食の開始予定は、6時なので、支度を始める、5時半までの1時間は、なつめちゃんの体調を考えて、部屋のベッドで、休ませることになっていて、車椅子に座った、なつめちゃんを、わたしは、部屋まで連れて行きました。

休憩の前に、汐月さんが定時検診をするので、わたしが、それならと思つて部屋を出ようとするところ、なつめちゃんに呼び止められて、そばにいて欲しい、と頼まれました。

わたしは、汐月さんの様子を見て、無言で頷くのを、確認してから、なつめちゃんのそばに戻りました。

汐月さんは、なつめちゃんの、左腕の袖をまくると、5本血を採ってから、4本の注射を打って、問診の後に、洋服の上を脱いで、視診と、触診をしていました。

前に、一度見ていましたが、  
なつめちゃんの、身体の傷痕は、  
とても、見慣れられるものではなくて、  
見ているだけでも、とても辛かったです。

そこまで終わると服を着てから、最後の点滴を打って、  
これで診療は終わり、汐月さんは部屋を出て行って、  
なつめちゃんは、ベッドに横になりました。

なつめちゃんは、わたしの手を、  
点滴を打っていない、右手で掴んでから、  
わたしが、出会った時の話を病院でしたことを、  
とても嬉しかったよ、

と、その時言えなかつたお礼を、  
改めて、わたしに伝えました。

わたしは、なつめちゃんに頷いて答えてから、  
ちよつと気になった、なんでよくあるような、  
苺のショートケーキにしたのかを、訊いてみました。

なつめちゃんは、

「昔読んだ小説に、主人公の誕生日に、

丸い苺のショートケーキを、

家族みんなで切り分けて、食べるくだりがあった、

それが、とても羨ましかったの。

主人公は、楽しかった過去として、

もう、誰も居なくなってしまった家の中で、

それを、回想するんだけど、

私にはそういう、楽しい過去すらなくって、

それがとても、悲しかった。

だから、苺のショートケーキなの」

と言うと、わたしを見て微笑んでいたけど、わたしはとても、笑い返せなくて、ただ、なつめちゃんの手を、しっかりと、握ってあげることしか出来ませんでした。

わたしが黙っていると、

なつめちゃんは、仰向けに天井を見上げながら、今のところの、今日の感想を話し始めました。

「今までずっと、人から何かをしてもらってばかりで、誰も私に、何かをさせようとはしなかったの。ずっと私も、それが当たり前だと思ってた。

あの2人だって、私から見れば、契約している、警護の人間と、病院から派遣されてる、医者でしかなくて、仕事として、面倒見られるのが当然で、自分から、何かをしてあげるなんて、考えたことなかった」

と、言った後、こちらを向いて、  
「でも、今日みなに言われて、料理をして、さっきのおにぎりは、にぎっただけけど、私で作ったものを、食べてもらうと思ったら、形とか味とか、どう思われるのが、とても気になってしまって、すぐく、落ち着かなかった。

これって、誰でもそう思うものなの？」  
と、尋ねられて、わたしはなんて答えたらいいか、ちょっと迷いました。



多分、それは特定の相手だけじゃないかな、とも思っけど、でも、どうやら当人には自覚がないようなので、ここでは、適当に返事しておきました。

この会話の後は、なつめちゃんは結構疲れていたようで、いつの間にか、微かな寝息を立てて、眠ってしまいました。

わたしは、安らかな顔をして、すやすや眠る、なつめちゃんの顔を、何も考えず眺めていました。

しばらくして、時計を確認すると、準備に入る予定時刻の、5時半になったので、なつめちゃんを起こして、2人で、ダイニングルームへと向かいました。

カレーを温めなおしている間に、炊けたご飯を、お皿によそっておいて、暖め終わったカレーをかけて、テーブルに並べました。

そして、最後に冷やしておいたケーキを出して、ローソクを16本立てました。

なつめちゃんのデコレーションでは、このローソクを立てる場所も、決められていて、完全に均等なケーキです。

ここまでの準備を終えたところで、ちょうど6時となり、

汐月さんと、榊さんが時間通りに、

ダイニングルームに入ってきました。

2人が席に着いたところで、  
なつめちゃんを、お誕生日席に着かせて、  
わたしは、なつめちゃんの右側の席に着きました。

ケーキのローソクに、火を点けて、  
リモコンで、部屋の照明を消すと、  
わたしは、定番の歌を歌う、  
のではなく、なつめちゃんに、  
一言、挨拶をするように言いました。

なつめちゃんは、意外なわたしの言葉を聞いて、  
とても戸惑っていて、何度も助けを求めるように、  
わたしの顔を見ていました。

今回の、わたしのプランは、  
なつめちゃんが、ゲストをもてなすのが目的ですから、  
当然、手助けはしません。

なつめちゃんは、わたしの意図を理解したのか、  
わたしを見るのをやめて、正面を見ると、  
覚悟を決めて、口を開きました。

「あ、あの、ええと、  
今日は、私の為に集まって、頂いて、  
って、別にいつもいるし、  
私の為に、集まったって訳じゃないし、  
これだと、なんか違うわい、みな？」  
と、またわたしを頼って見てくるので、

細かいことは、気にしないで、  
伝えたいことだけ言えばいいから、と言つと、  
なつめちゃんは、一度下を向きました。

そして大きく深呼吸すると、仕切り直して顔を上げて、  
もう一度、話し始めました。

「私は、今日、じゃなくて、

今月で、16歳になりました。

今日、ここにこうしてられるのは、

皆さんのおかげです、とても感謝しています。

これからも、何かと迷惑をかけると思うけど、  
宜しく願います。

汐月さん、榊、

今日は初めて、2人に私から、

みなに、手伝ってもらって、

食事を作りました。

材料を切るところから、作ったものです。

日頃、お世話になっっているお礼、のつもりです。

口に合うか、分からないけど、

食べて下さい」

と言つと、なつめちゃんは深々と、頭を下げました。

わたしと汐月さんの拍手に続いて、榊さんの拍手の後、  
顔を上げたなつめちゃんに、

ローソクを吹き消してもらって、

誕生日会が、始まりました。

なつめちゃんが、ケーキを切り分けて、

切った断面すら、全てが全く同じに見える、

8等分したケーキを並べました。

汐月さんは、カレーやケーキを一口食べた直後は、栄養士の顔になって、分量とか成分を確認するような、味わっているというよりも、チエックしている、鋭い目で食べていました。

わたし的には、それがとても怖かったです。

一体、この人はいくつの顔を持っているんだろう、まるで役割に応じて、お面を変える役者さんみたいです。

でも、確認が終わったら、やさしげな表情になって、なつめちゃんに、美味しいです、うまく出来てますね、と、声をかけていました。

で、またしても榊さんは、仏頂面のまま、いかにも体育会系っぽく、流し込むように、カレーを食べてしまい、5分も経たず、お皿は空になりました。

すると、なつめちゃんは榊さんに手を伸ばして、「まだ、たくさんあるから、もっと、食べれるでしょ?」

と言って、おかわりするように言っていました。

榊さんは、一言だけ、

「……なら、頼む」

と言って、皿をなつめちゃんに渡しました。

なつめちゃん、キャラが違ってきてるような気がします。

ま、それを狙っているんですけどね。

みんなが、食べているのを見ながら、

なつめちゃんも、自分で作ったカレーを食べて、

ちよっとびっくりしたように、カレーを見ていました。

自分で作って、みんなで食べるカレーの味を、

なつめちゃんに、聞いてみると、

「うん、今までで、一番美味しいし、楽しいよ」

と、笑顔で答えてくれました。

結局、なつめちゃんと汐月さんが1杯、

わたしは2杯、榊さんは分からないくらい食べて、

カレーはなくなりました。

ケーキの方も、汐月さんの値踏みのような試食以外は、

わたし的には問題なく、

ケーキの出来も、味も申し分ないものでした。

甘さ控えめあっさり味で、

これはこれで、とても美味しかったです。

なつめちゃんは、もっと食べたがっていたけど、

食事制限で1個、汐月さんも1個、

榊さんと、わたしが3個でした。

榊さんは、甘い物は苦手っぽくて、

一口食べるたびに、ブラックのコーヒーを、まるで流し込むように、飲んでいました。

食事の時間は、わたしと、汐月さんと、なつめちゃんとおしゃべりしながら、たまに、榊さんが聞かれたことに返事を返して、みんなで、楽しく過ごすことが出来ました。

ついに、最後のプレゼント贈呈です。

これはさすがに、なつめちゃんへの無茶振りは無しで、わたしから、例のものを渡します。

別室に隠しておいてもらった、例のあれを、わたしが抱えて持つてくると、

なつめちゃんは、かなり期待した眼差しを向けていました。

今度はわたしの方が、緊張してきました。

みんなリビングに移動して、なつめちゃんを、ソファアに座らせてから、

その隣にあれを置いて、なつめちゃんに渡しました。

汐月さんや、榊さんの見ている中で、今、開けていい？

と、尋ねるなつめちゃんに、頷いて返事を返すと、早速、包装紙を縛っていた、リボンを解いて、風呂敷を開くように、包装紙を開きました。

クマは、なつめちゃんに背を向けていて、

わたしたちの方を、向いていました。

汐月さんは、リアクションが早くて、クマの顔を見た途端に、榊さんをちらりと見ると、口に手を当てて、堪えるように横を向いて、肩を震わせていました。

普段、空気を読まない榊さんも、さすがに、これには気づいたようで、ものすごく怖い顔で、わたしを睨みつけていました。

この時、すごく殺気に近い、怒りの波動を感じて、全身に鳥肌が立ちました。

なつめちゃんは、みんなの反応を気にしながら、クマを、自分の方に向かせました。

なつめちゃんは、しばらくクマを見つめた後、ゆっくりと、榊さんに視線を移して、

「これ、榊？」

と、本物に向かって言いました。

「……なんで、俺に聞くんだ」

と、榊さんは不機嫌そうに文句を言って、やっぱり、わたしを睨んでました。

その後、なつめちゃんは、まじまじとクマを見ては、榊さんと何度も見比べていました。

汐月さんは、ツボに入ってしまったようで、

ずっと、笑いを堪え続けていて、それが榊さんの苛立ちを、さらに煽ってしまい、無言の怒りが、わたしへと向けられて、わたしはずっと、鳥肌立ちっぱなしでした。

その間も、なつめちゃんは、ずっと、クマに抱きつくように掴んだままで、どうやら、気に入ってくれたかな、と、思いました。

「ねえ、みな、

この、さ、クマ、名前は？」

と、視線は本物へと向けつつ、なつめちゃんは、わたしに尋ねて来たので、わたしは、決まつて、ない、よ、だから、なつめちゃんが決めて、と、横から感じる殺気の方を、ちらちらと見ながら、おそろおそろ答えました。

「ふうん、そっか、分かった。

名前かあ、どうしようっかなあ」

と言う、なつめちゃんの視線は、やはり本物に向いていて、ちよっとだけ、なつめちゃんは、にやけているようにも、見えました。

最後は、とうとう堪えきれなくなった、汐月さんの大爆笑という、

予測出来なかった形で、お誕生会は終わりました。

こうして、わたしの企画は、

わたしが榊さんから、すごい顔で睨まれたこと以外、



成功だったと思います。

わたしが、なつめちゃんにあげたかったもの、  
なつめちゃんに、受け取って欲しかったもの、  
なつめちゃんから、受け取りたかったもの、  
これらがちゃんと、やり取り出来たんじゃないかな、  
と、思いました。

別れ際の、なつめちゃんの態度も、  
最近では、とても悲しそうな表情ばかりだったのが、  
今日は、すごく明るくて楽しそうにしていました。

でも、帰りの道中で、忍さんの言葉や、  
汐月さんの言っていた言葉を考えた時、  
何か、引がかかるものを感じたのも、  
否定出来ません。

わたし的には、やれるだけのことをして、  
うまくいったと思うのに、  
なんでこんなに、気にかかるんだろう。

このことは、  
もっとじっくり考えてみたいと思います。

2月22日 また妙な夢を見ました

今朝は目を覚ましたら、もう9時でした。  
これは完全に遅刻です。

こうなると、慌てても仕方ないので、もう諦めて、悠然と朝の支度をしました。

寝坊の原因は、昨日のなつめちゃんの誕生祝いで、色々と気になることや、思い当たることがあつて、なかなか寝付けなくて、明け方くらいに、やっと眠ったら、見事に寝坊です。

わたしは寝坊する時だけ、夢を見るみたいで、前回は、かなのことで悩んでいる頃でした。

今は、なつめちゃんのことを気がかりで、夢を見たんじゃないかと思いません。

その夢は、やっぱり童話みたいで、内容は、こんな感じでした……

あるところに、気まぐれな悪い魔女にさらわれて、雪の国にある、高い氷の塔の最上階に囚われた、とある国の、美しいお姫様がいました。

このお姫様には、塔から少しでも外に出ると、見るもの聞くもの全てが、正しく見えず、正しく聞こえないという、恐ろしい呪いがかけられていました。

ある日、遠征の果てに辿り着いた国の兵士達が、お姫様を助けに来ました。

兵士達は、お姫様に助けに来たことを伝えようと、大声で呼びかけました。

外から聞こえる声に気付いた、お姫様は、それを確認する為に、窓から顔を出して、下を見ました。

しかし、お姫様が目にしたのは、塔の下に群がっている、不気味な怪物の群れが、こちらを見上げていて、怪物共は、そこから飛び降りて、俺達の餌になれと、罵る恐ろしい声が次々に、聞こえてきました。

お姫様は怖くなって、小さな窓を閉めてベッドに隠れて、怖くて震えていました。

この後、窓を閉める音で、兵士達に気づいた魔女は、魔法で兵士達を、追っ払ってしまいました。

またある日、今度は隣の国の王子様が、遠路はるばる単身で、お姫様を助けに来ました。

王子様は、お姫様のいる牢の小窓へ向かって、小石を投げて、救出に来たことを知らせながら、魔女に気付かれないように、静かに氷の塔を、よじ登り始めました。

外から聞こえる物音に、気付いたお姫様は、それを確認する為に窓から顔を出して、下を見ました。

しかし、お姫様が目にしたのは、  
不気味な目玉を手にして、  
今まさにそれを、投げつけようとしている、  
恐ろしい姿の悪魔が、  
気味の悪い顔で、あざ笑っているのが見えました。

お姫様は怖くなって、小さな窓を閉めてベッドに隠れて、  
怖くて震えていました。

この後、窓を閉める音で、王子様に気づいた魔女が、  
魔法で王子様を塔から落としてしまい、  
王子様は、大怪我をしてしまい、逃げ帰りました。

これ以降も幾度となく、救出の手は差し伸べられましたが、  
お姫様にかげられた呪いのせいで、全て失敗に終わり、  
救出へ向かう者たちの数は、日増しに減っていきました。

やがて月日は流れて、お姫様の存在は忘れられていき、  
お姫様も、半ば諦めていました。

ある日、お姫様は窓から、  
空を飛ぶ、大きな鷲の姿を見ました。  
あの大鷲なら、私をここから、  
救い出してくれるかも知れない。  
お姫様はこれを、最後の希望と信じてみる事にしました。

お姫様は、大鷲が助けに来てくれる事を願って、  
毎日祈りました。

お姫様の願いが通じたのか、大鷲は日が経つことに、

こちらへと、近づいてくるようになり、ある日ついに、窓の外の柵に止まりました。

お姫様は喜んで、

魔女のいない隙にと、急いで窓から身を乗り出して、大鷲の足につかまろうとして、その姿を見てしまいました。

その時、お姫様が目にしたのは、大きな鷲ではなく、小さな蝙蝠でした。

その蝙蝠は、お姫様に向かって、もう誰も、お前を助けには来ない、みんな、お前の事など忘れたのだ、と、お姫様を罵りました。

お姫様は、その言葉に、やはりこれも、失望させられるだけだったと、最後の希望を失ってしまい、ここまで繋ぎ止めていた心は、ついにくじけて、窓から身を投げてしまいました。蝙蝠はその鉤爪で、お姫様に掴みかかってきましたが、お姫様はそれを振り払い、あとちよつとの所で届かず、お姫様は地面に落ちて、死んでしまいました。

お姫様が最後に見たのは、紛れもない大きな鷲で、その正体は、大鷲に姿を変えた、魔法使いの弟子だったのに。

魔法使いの弟子は、貴女を助けに来ました、祖国では多くの人々が、貴女の帰りを待っています、

と伝えたのに。

身を投げたお姫様を、必死で救おうと、急降下して、追いかけたのに。

全ての善意は、魔女がかけた呪いのせい、

歪んだ悪意としてしか、お姫様には届く事はなく、

こうして、気まぐれな魔女の悪戯により、

1人の罪もない、お姫様の人生は、

短く、そして不幸に、幕を閉じました。

この夢の中の、お姫様がなつめちゃん、

魔女っていうのは、多分病気のことで、

助けに来た兵隊や王子様は、

病院の先生や、看護師さんたちだと思いました。

そして、魔法使いの弟子っていうのが、

多分、わたしのことで、

夢の中では、救出は失敗してしまいました。

これって、わたしの今のやり方では、

ダメって言う意味なのかなって、

朝食を食べながら、考えていました。

もしかして、なつめちゃんが、

元気になるように、と思っ、

わたしが、何かをすればするほど、

なつめちゃんは、元気になったとしても、

それを、わたしが居るからだと思っ、

もっと強く、わたしが居ないとダメだと、

思い込んでいくの？

そして、わたしがなつめちゃんに、  
何もしてあげられなくなった時、  
なつめちゃんは、今までで、  
一番大きな傷を負ってしまっ？

でも、じゃあどうしたらいいのかについては、  
やっぱり分かりませんでした。

もうすこし、冷静になって、考えてみようと思います。

2月28日

今日の天気は、今年度最後の雪が降るといふ予想で、  
朝から粉雪が降っていました。

三月からは気温も上がって、春になるんだそうで、  
先週に見た夢が気になって、落ち着いて考えたいのもあって、  
お昼ごはんを食べた後に、御家河のいつもの場所へと、  
雪空の散歩に行きました。

空気はとても冷たくて、北風が吹くと、  
粉雪が、顔に当たって痛いです。

あちこちのポケットには、  
ホッカイロを入れてるんだけど、  
顔だけは、それは出来ないから、  
マフラーで、顔が埋まるくらい巻いて、

河原へと向かいました。

河原には、こんな天気だから誰も居なくて、  
たまに、犬の散歩の人とすれ違うくらいです。

天気が悪い時の定番の場所の、  
橋の下に着くと、座るところに敷くクッションを、  
バッグから出して、ホッカイロを乗せて座りました。

これで、防寒対策はバッチリです。

今日は、さすがに寒すぎて、  
ヒヨウちゃんは、現れそうにないと思って、  
あげる物も、持ってきませんでした。

だんだんと大きくなってくる、降り続く雪を見ながら、  
わたしは、忍さんの言葉を思い出して、  
なつめちゃんのことを、考えていました。

なつめちゃんは、お誕生会の翌日に、  
病院へと戻りました。

今は、新しい治療を行っているそうで、  
今はまた、面会謝絶になっていて、  
しばらくそれは続くそうです。

お誕生会の時の、食事やケーキを作っている時の、  
なつめちゃんは、すごく真剣で、  
とても生き生きとしているように見えて、  
いつもの、お人形さんみたいな雰囲気は、



全く感じませんでした。

あの時のなつめちゃんは、  
どこにでもいる、普通の女の子でした。

ずっと、こづいっ感じでもらいたいと、  
わたしは思っています。

でもその為には、今のところ、  
わたしが親友として、そばに居ないといけない。

わたしは、これからもずっと、  
なつめちゃんと、一緒にいる？

多分、それは出来ない。

もしかしたら、  
なつめちゃんのお父さんとかに、お願いすれば、  
わたしをそばに居れるように、してくれるかも知れない。

そうすれば、なつめちゃんは、  
わたしに影響を受けて、変わっていくかも知れない。

でもこれだと、逆に考えれば、  
なつめちゃんより、わたしが先に死んじゃえば、  
その時点で、ダメになると言うことだ。

それに、そういう生き方は、わたしは嫌だ。

わたしは、なつめちゃんの為に、

色々してあげたい、とは思っけど、  
なつめちゃんだけの為に、生きてるんじゃない。

わたしは、わたしの為に生きてるんだから、  
それだけは、絶対に譲れない。

たとえば、なつめちゃんがそのせいで、  
取り返しのつかないことに、なっただとしても。

この考え方が、なつめちゃんに対して、  
ひどいとか、冷たいとか、思われるのなら、  
わたしは、そういう人間なんだと思う。

なつめちゃんは、わたしに頼ってしか生きれないなら、  
わたしは、なつめちゃんを見捨てるしかない。

逆に考えれば、なつめちゃんには、  
わたしが居なくちゃダメなのが、ダメなことだ。

だからって、居なくなればいって訳でもなくって、  
わたしが居なくても、大丈夫なように、  
なつめちゃんの心を、変えないといけない。

汐月さんが言いたいのは、そういうことなんだと、  
忍さんは教えてくれた。

そして、今のままだと、  
わたしが望む未来は見えないのが、良く分かった。

でも、どうやって、それを変えればいい？

どうしたら、なつめちゃんの心を変えられる？

どうすれば、なつめちゃんは、

わたしがそばに居なくても、元気になってくれる？

いくら考えてみても、全然分らない。

小さい頃の、なつめちゃんは、

あんな性格じゃなかったんだけどなあ。

昔、元気な振りをしていた時は、

あんな身体の傷があったなんて、思えないくらい、

元気で、わたしだけじゃなくて、他の子とも遊んでた。

その頃の、なつめちゃんのイメージは、

元気で、ちよっとわがままで、けっこう頑固だった。

だから、よくちよっとしたこと、

口ゲンカとかに、なっていたりして、

なつめちゃんが、手を出してしまって、

相手の子を、泣かせちゃったこともあったくらいなのに、

今じゃあ、ガラス細工のお人形みたいに、

脆くって、繊細で、気弱な女の子になってしまった。

でも、本当のなつめちゃんって、

どっちなんだろう。

もしかしたら、小学校の頃のなつめちゃんも、

今のなつめちゃんも、実は違っていて、

どっちでもないのかも知れない。

どんなに自分を取り巻く環境や、自分の体が変わっても、その人の性格とか癖は、普段は隠してるとしても、変えられるものではないはず。

それが分かれば、何かいい方法が思いつくような気がする。

ここまで、考えたところで、いつの間にか、自分が雪だるまになっているのに気づき、慌てて雪を払って、空を見ると、もう、日が沈み始めていました。

もう少しで、答えが分かりそうだったけど、仕方なく、急いで家に帰りました。

汐月さんは、遅くてもたしか3月中には、とか言っていた気がする。

なんとか、それまでに、なつめちゃんの気持ちを変える方法を、考えたいと思います。

2010年 3月 その1(前書き)

変更履歴

2010/11/07	誤植修正	スイスクロス	クロノスイス
2011/01/03	誤植修正	以外	意外
2011/04/10	記述統一	1年生、	(中学)2年、高校3
年	一年生、二年、	高校三年	
2011/04/20	記述統一	(期間)	一日、二月、三年
1日、2月、3年			
2011/05/28	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/07/23	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			
2011/09/05	誤植修正	位	くらい

2010年 3月 その1

3月2日 榊さんに聞いてみました

なつめちゃんと、話はまだ出来ないけど、あのガラスの小部屋にいる、なつめちゃんを、一応、見る事は出来るようになった、と聞いて、様子を見に、行ってきました。

なつめちゃんの様子も、見たかったけど、榊さんと、話がしたかったのもあります。

学校が終わってから、いつも通り車で送ってもらい、直通エレベーターの前で、榊さんと合流して、病室へと向かいました。

榊さんは、あのお誕生会の時のことを、まだ、根に持っていたりしないかなあ、と、ちよつとだけ心配だったけど、もうすっかり忘れたみたいにな、今まで通りの態度でした。

病室へ入ると、部屋のベッドは空で、ガラス張りの小部屋の中に、前に来た時よりも、もっと大掛かりな器械が入っていました。

なつめちゃんの姿は、ガラス越しには、やっぱり、ほとんど見えなかったけど、なつめちゃんの寝ているベッドの脇には、

わたしのあげたあのクマっぽい塊が、椅子に座っていて、そのクマの手を、なつめちゃんの右手が、掴んでいるのが見えました。

なつめちゃんが、あのクマを、

気に入ってくれてるのが、分かっただけでも、ここまで、様子を見に来た甲斐がありました。

わたしは、面会時間が終わるまで、

なつめちゃんを見ていました。

面会時間が終わって、

榊さんと一緒に、談話室へ行ってから、

わたしは、榊さんに聞きたかったこと、

わたしが知らない、

なつめちゃんの小さい頃のことを、尋ねました。

榊さんに言わせると、小さい頃のなつめちゃんは、

親馬鹿な両親に、甘やかされて育った、

わがママが服を着ているような、生意気なガキだった、のだそうです。

病院内では、父親が院長であることで、

看護師や医者よりも、自分は偉いと勘違いしていて、

とにかく言う事をきかず、嫌な治療とかも駄々をこねたり、暴れたり、逃げ出したりしていたそうで、

担当医や看護婦たちの間では、

仁科のお姫様、と陰口を叩かれていたそうです。

このわがママっぷりが、急にひどくなったのが、

どうも、わたしの父が退院して、  
自宅療養に、切り替えた頃から、みたいで、  
わたしが、遊びに来なくなっただせいで、  
なつめちゃんは寂しくて、その不満を、  
大人に当り散らしていたみたいです。

この頃、なつめちゃんのお父さん宛に、  
脅迫状が送りつけられる事件があつて、  
家族全員に、警護がつけられて、  
この時に、なつめちゃんについたのが、  
榊さんだったそうです。

でも、すっかりひねくれていた、なつめちゃんは、  
警護の人がつくたびに、めちやくちや嫌がつて、  
そのたびに、別の警護の人を用意させて、  
なつめちゃんが気に入る相手を、探させたんだそうです。

でもなつめちゃんは、どんな人が来ても、  
嫌だとして、言う気がなかったようで、  
榊さんのところに話が来た時も、行くだけでも、  
その分の報酬を払う、という好条件だったから、  
嫌々ながら、やってきたのだそうです。

榊さんは、この頃から子供が嫌い、  
と言うか、苦手だったようです。

で、なつめちゃんの前に来ると、なつめちゃんは、  
いつも通り、駄々をこねて、嫌だ嫌だと、  
叫び始めたんだそうです。



周りの看護師や医者達が、なつめちゃんを叱りもせず、ひたすら、ご機嫌を伺うように、あやしてなだめようとしていたのが、気に食わなくて、榊さんは、なつめちゃんに怒鳴って、なんと、ひっぱたいたんだそうです。

そしたらなつめちゃんは、呆然として、すっかり、大人しくなっただそうです。

もちろん、榊さんは減俸か、下手すれば訴えられるか、とも、覚悟していたそうですが、意外にも、連絡が来た内容は、警護役の正式採用でした。

なつめちゃんが、榊さん以外は嫌だ、と、言ったのだそうです。

それからは、榊さんがそばで見ている、大したことないわがままには、何も言わないけど、度を過ぎたわがままや、言う事をきかない時は、さすがにもう手は出さないで、口で注意していたそうです。

榊さんに言われると、なつめちゃんは、不満げであったり、むくれていたけど、大人しくなって、言う事をきいたそうです。

ただ、前に叩かれた仕返しのもりなのか、やたらと榊さんを叩いたり、蹴ったりしていたそうで、鍛えている榊さんからすれば、小さい子供の攻撃なんて、何とも思わないけど、ただその時に思ったのは、見かけによらず、かなりの負けず嫌いだったのかと、

思っただんだそうです。

榊さんは、自分がやったのは、叱られたことのないガキに、やったら駄目なことをすると、怒られるってことを、親の替わりに、教えてやっただけだ、と、そっぽを向きながら、言っていました。

それを聞いたわたしは、榊さんに、なつめちゃんに、なつかれてたんですね、と言うと、「……さあ、どうだかな」

と、相変わらずこちらを見ないで、答えていました。

きつと、照れくさくつて、わたしの方を見れなかったに、違いありません。

次に、なつめちゃんのご両親について尋ねると、父親は院長先生で、母親は評論家をしていて、2人とも、多忙でなつめちゃんには、会いには来ていないのかな、と思ったら、そうではなくて、なつめちゃんから、面会には来て欲しくない、と伝えてあって、親馬鹿な2人とも、その言葉を聞いて、ここに、来れなくなってしまうのだそうです。

榊さんは、なつめちゃんが反抗期なんだろう、と、言っていましたけど、なつめちゃんは、自分が親に生かされていると、思い込んでいたから、それが元で、両親を遠ざけているのかも知れない、と思いました。

最後に、わたしが見ているかぎりですけど、  
榊さんが、なつめちゃんのことを、  
呼んでいるのを、聞いたことがなくて、  
ずっと不自然だなと、思っていたことを尋ねました。

すると、海外に治療に行く前までは、  
本人の希望もあって、棗、と、  
呼び捨てで、呼んでいたそうです。

でも、海外から戻ってきた時に、再会すると、  
名前では呼ぶなど、強く拒絶されたんだそうで、  
この時のなつめちゃんは、今まで見たことないほど、  
強い気迫を感じたのと、もう小さい子供ではなくなった、  
クライアントの希望でもあるから、榊さんも、  
それ以上は、追及しなかったそうです。

それ以降は、別の呼び名でと思ったそうですが、  
お嬢様とか、とても呼ぶ気にならず、  
呼び方がなくなってしまうたんだそうで、  
今でも、なつめちゃんは榊さんが近づくと、  
自分から榊さんに、声をかけるようになったそうです。

この日は、ここまで話を聞くと、  
もう帰る時間となっていて、  
帰ろうとした時に、別れ際にまた、  
榊さんは、わたしを呼び止めて、  
なつめちゃんから、伝言を受けていたのを思い出した、  
と言いました。

その内容は、3月9日に会いたいから、

お見舞いに来て欲しい、とのこと、  
わたしは分かりました、と返事して、  
帰って来ました。

なつめちゃん、来週には、

あの小部屋から、出られるのかなあ。

今日はなつめちゃんの、小さい頃の話聞いて、  
何となく、なつめちゃんの本来の性格が、  
分かった気がしました。

次は、それを元にして、  
なつめちゃんの、心を変えさせる手段を、  
考えたいと思います。

3月7日 汐月さんに相談しました

面会の日から、昨日までずっと、  
暇さえあれば、なつめちゃんのことを考えていました。

そして、どうすれば、  
なつめちゃんの考え方を、変えられるか、  
わたしなりの答えが出ました。

でもそれは、それしかないと思う、わたし自身でも、  
実行するのに、ためらってしまう方法でした。

他の方法がないかと、何度も考えてみたけど、

やっぱり、わたしの考えでは、  
これ以外、思いつきませんでした。

今日は、それを実行する許可をもらう為に、  
午後になってから、汐月さんに連絡をとりました。

汐月さんは、すぐに電話に出て、  
わたしの話を聞いてくれました。

わたしは、今までのなつめちゃんを見て思ったことや、  
汐月さんから言われた、言葉の意味のこと、  
榊さんから聞いた、小さい時のことを説明して、  
わたしなりの推測と、対処方法を説明しました。

汐月さんは、わたしの話を聞いて、  
かなり悩んでいるようで、  
一旦、考えさせて欲しい、と言われて、  
今日の夜には折り返すからと、告げて電話は切れました。

正直言つて、汐月さんが、  
認めるとは思えない方法だったから、  
言った途端に、ダメと言われなかっただけでも、  
すごいと思うくらいです。

この日は、電話の返事が気になってしまって、  
学年末試験の勉強でも、しようかと思っていたのに、  
何もする気になれず、窓から空を眺めているうちに、  
夕方になってしまいました。

夕飯を食べ終えた頃に、

汐月さんから、携帯に連絡が来ました。

わたしが携帯に出ると、

汐月さんは、回答を待たせたことを謝ってから、わたしの提案に対して、返答しました。

その答えは、条件付きながら、

許可をもらうことが出来ました。

ただし、条件があつて、

実行する場所は、なつめちゃんのマンションで、

実行時期は、なつめちゃんを、

一時退院させられた時になるとか、

実行方法も、色々と指定がありました。

さらに、予期せぬ事態に備えての、準備の為の手配が、完了してからの、実行となるので、

いつ実行出来るかは、汐月さんから連絡する、とのことでした。

自分が言い出したことなんだけど、

とても大変なことに、なってしまったような気がして、何だか、怖くなってきました。

だけど、全てはなつめちゃんの為だと、

気合を入れて、汐月さんの話を聞いていました。

最後に、汐月さんは、

わたしが実行した結果で、

なつめちゃんに、もし何かあったとしても、

それは、これを許可して実行させた、  
汐月さんが、全ての責任を取るから、  
その点に関しては、気になくなくてもいい、  
と、告げられた後に、  
それをやるうと考えている、わたしのことも心配だと、  
言われました。

わたしは、汐月さんに、わたしは大丈夫です、  
と伝えてから、許可してもらったお礼を伝えて、  
電話を切りました。

これで、後は汐月さんから、連絡が来た時に、  
実行するだけの、覚悟を決めておくだけになりました。

と言っても、これが一番大変で、  
今からもう、不安だし、怖いし、心配でいっぱいです。

でも、もう他に思いつかないし、  
汐月さんが許可してくれた、と言うことは、  
お医者さんの立場から見ても、  
これが有効だと、判断されたからなんだ。

だから、わたしは決心して、  
実行しようと思います。

3月9日 わたしの誕生日

実は、忘れてたんですが、

今日は、わたしの16歳の誕生日でした。

学校で授業中に、かなちゃんからメールが来て、誕生日プレゼント、贈ったよ、と、書いてあって、それで思い出しました。

かなちゃんの方を見ると、ちょうど、かなちゃんもこっちを見ていて、こっちに手を振っていました。

母も今日は、夕方には帰ってくるので、荷物が来ることを、伝えておきました。

学校が終わった後は、先週の約束通りに、なつめちゃんの面会に行ってきました。

ただ、前日に汐月さんから連絡があって、なつめちゃんは、まだあの小部屋から出れなくて、直接話は出来ないと、聞いたけど、でも、なつめちゃんの希望でもあるので、予定通りに、病院に行くことにしたんです。

病室に入ると、やっぱりなつめちゃんは、また、あの小部屋にいて、前に来た時と変わらず、良く見えない状態で、眠っているように見えました。

わたしが、なつめちゃんの様子を見てみると、榊さんが、外のベッドの脇にある、チェストの引き出しから、何かを出して、



わたしの前に持ってきました。

それは、ベージュに緑のリボンがかかったような、掌くらいの楕円形の箱と、一通の手紙でした。

「……本当は、自分で渡したかったようだが、この通り、治療が終わらなくてな、自分で渡せない場合は、これを代わりに渡すようにと、言われている。受け取れ」

わたしはまず、手紙を受け取って、中身を見ました。

そこには、なつめちゃんの字で、こう書かれていました。

「誕生日おめでとう、みな。

今日は、みな誕生日ですね。

この手紙を読んでいる時は、

私は今、直接会えない状態だと思います。

本当は、直接渡したかったけど、

残念だけど、それは出来ないから、

代わりに、榊をお願いしておきました。

このプレゼントは、私が選びました。

たとえ、私がいなくなっても、

これが、みなと一緒にあって、

時を、刻み続けてくれれば、

私も一緒に、居れるような気がするから。

気に入ってもらえると、嬉しいです。

是非、使って下さいね。

仁科 棗より

手紙を見た後に、プレゼントの箱を開けてみると、箱と同じ色をした、巾着袋が入っていて、その中には、腕時計が入っていました。

腕時計とかは、わたしは全然詳しくなくて、今持っているのも、千円くらいで買った安物です。

それも、携帯を持ってから、しなくなっていて、今はもう、家のどこにあるのかも分かりません。

それと比べると、この腕時計は、文字盤の周りや、文字盤の文字のところに、ダイヤっぽいのがついていて、すごく高級な感じですよ。

それに、シルバーの文字盤には、2つのハートが重なった形をした穴が開いていて、時計の中が見えるようになってたり、12時のところには、ハートの穴の中に、赤い宝石っぽいのがついていて、色も、時計はシルバーで、バンドが白くて、すごく、かわいいですよ！

きっとブランド品なんだろうけど、わたしは知らないメーカーでした。

わたしは、早速もらった腕時計を試してみました。

この腕時計、すごくかわいいんだけど、わたしがしてて、変じゃないかなあ。

時計に比べて、わたしが地味すぎるような、時計に負けているような、そんな気が……

それが気になって、榊さんに、

わたしがこれしてて、なんか変じゃないですか？

と聞いてみたけど、意識し過ぎだ、

と、一言で片付けられてしまいました。

そついうのが、気になる年代なんです！

と、言い返そうと思ったけど、

こういうことを榊さんに聞いた、

わたしの方が間違ってたんだと、諦めました。

わたしは、眠っているなつめちゃんに、

聞こえないとは、分かっていたけど、

プレゼントのお礼を、ガラス越しに伝えました。

その後、わたしもメッセージを返そうと思いついて、

お礼の言葉を、紙に書いて、

これをなつめちゃんに渡して欲しい、と、

榊さんへ伝えて、その手紙を渡しました。

家に帰ると、母がケーキを買って来ていて、

2人でケーキを食べました。

母に、なつめちゃんから、時計をもらったことを伝えて、

もらった腕時計を見せると、  
腕時計を見た母は、かなり驚いて、  
まじまじと、時計を見た後に、  
時計に持ち主が負けてるよ、  
と、一番気にしていたことを言われて、  
かなり、むっとしました。

この後、母から、届いた荷物のことを言われて、  
中身は何だろう、と思いつつ、開けてみました。

かなちゃんから届いていた荷物は、  
お風呂で使う機械と、シャワーのノズルが入っていました。

箱の中には、メッセージカードが入っていて、  
そのメッセージカードには、

「Happy Birthday Minamo!!!」

お風呂大好きな、みなもへ、

快適お風呂セットを送ります。

うちのと同様に、つてまではいかないけど、

これで、マイクロバブル&ジェットバスになるはず!

最近、お疲れっぽいから、

これで、日頃の疲れを癒してね!

かなより  
「

と、書いてありました。

かなちゃんが、送ってきたのは、  
とうやら、家庭用のジェットバスの機械と、  
かなちゃんの家の、お風呂の白く濁る水、  
あれを出すシャワーみたいです。

とりあえず、取り付けないと分からないから、母と一緒に説明書を見ながら、つけてみました。

シャワーの方は、今ついているシャワーが外れなくて、苦労しましたが、緩んでしまえば後は簡単でした。

試しに、洗面器に水を入れてみると、あの時見たのと同じように、白く水が濁ったので、ちよつと感動しました。

たしか、あの装置は何十万もする、みたいなことを、かなちゃんは言っていたから、あれと同じとは、行かなくても、まさか、自分の家で体験出来るとは思っていなかったので、ちよつと感激しました。

次に、ジェットバスの方は、そんなに広くない湯船なので、取り付ける場所に、色々と困りましたが、壁際の角にくつつけました。

後は、コンセントに繋いで、スイッチを入れると、勢い良く水流が出ました！

わたしが、かなり感動していたら、母が箱の中から、もう一つ何かを見つけてきて、それは、ジェットバスにつけるホースに取り付ける、マイクロバブルのパイプでした。

これを、ジョットバスにつけた、

ホースの先を交換して、取り付けると、  
ジェットバスから出てくるのが、  
なんと、マイクロバブルになりました！

この後、お風呂に入ってみると、  
かなちゃんの家のお風呂には、及ばないけど、  
これはこれで、とっても快適です。

かなちゃん、良い物をくれたなあ。

1時間ほど入っていたら、母に早く出なさい、  
と、叱られました。聞こえない振りして、  
もう、しばらく入っていたら、  
母が、早く出なさい！  
と、本気で怒っていたので、慌てて出ました。

これは、またお風呂の時間が長くなりそうです。

今日は、なつめちゃんや、かなちゃんから、  
誕生日のプレゼントをもらえて、  
とても、幸せな1日でした。

今夜は、色々と余計なことは考えずに、  
このまま、幸せな気分で寝ようと思います。

明日からしばらくは、来週から始まる、  
学年末試験の試験勉強に、集中してがんばります！

3月15日 ホワイトデーのお返し

本日、学年末試験の1日目です。

でもテスト自体は、なつめちゃんとの勉強会で、試験勉強の、コツみたいなのが分かったので、今までみたいに、神頼みとかしなくても、それなりの点が、取れそうな気がしています。

それよりも、大事なイベントがありました。

昨日が、ホワイトデーでしたが、チョコをくれた、かなちゃんに、1日遅れで、お返しを渡しました。

かなちゃんにあげたのは、

めっちゃめっちゃ甘い、ホワイトチョコと、

すごく苦いビターチョコを、

一口で食べられる大きさの、小さなキューブの形にして、市松模様に組み合わせた、手作りのチョコレートです。

もちろん、愛の言葉はありません。

普通に、お礼として渡しました。

テストが終わって、午後からは、航海堂に、バイトへ行きました。

航海堂では、忍さんからチョコのお返しで、手作りの、紅茶のクッキーをもらいました。

忍さんが言うには、  
わたしのあげたチョコが、手作りだったから、  
こっちも、手作りのクッキーにしたのだそうです。

わたしのイメージでは、忍さんって、  
あんまり、家庭的な感じがなかったから、  
手作りと聞いて、かなり驚いてしまいました。

わたしの顔を見た、忍さんは、  
陰険そうに、目を細めて、  
どうせ、私が料理とか出来るなんて思わなかった、  
とか、思ったんでしょ！  
と、怒られて、頭を小突かれました。

忍さんがくれた、手作りクッキーは、  
種類の違う、紅茶の葉が入っているもので、  
それぞれの紅茶の香りが、とても良く出ていて、  
とてもあっさりした味で、美味しかったです。

わたしが、1枚食べるたびに驚くから、  
忍さんは、いちいちリアクションしなくていい！  
と、また怒られたけど、  
でもそれは、ちょっと照れているような感じだったから、  
わたしはあえて、驚いてみせて、  
ちょっと、忍さんをからかっていました。

年上の人で、こんなに親しかった人って、  
今までに、いなかったので、  
こっぴどい風に、親しく話をした経験は、



わたしにはありません。

だからなのかも知れないけど、  
とっても楽しかったです。

この後、忍さんが腕時計に気づいて、  
わたしは、なつめちゃんにもらったことを伝えると、  
忍さんはすぐに、誕生日のプレゼント？  
と聞かれて、頷きました。

忍さんも母と同じく、この時計を見て、  
とても驚いていました。

実は忍さん、腕時計が結構好きで、  
集めたりとかもしているのだそうです。

忍さんは、わたしのもらった時計が、  
何ていうのかを知っていて、これは、  
スイスのフレデリック・コンスタントって言うメーカーの、  
レディースダブルハートビートって言う時計だよ、  
と教えてくれました。

サークルの先輩が、色違いの、  
チヨコレート色のをしていたのだそうで、  
いいなと思ったけど、自分のキャラと合わないから、  
手に入れようとは、思わなかったんだそうです。

その時計、30万以上するよって聞いて、  
めっちゃめっちゃびっくりしました！

これ、高そうだとは思ったけど、  
そんなにする物とは……

貧乏性のわたしは、

勿体無くて、気軽につけられないなあ、  
と、一瞬思ったけど、

なつめちゃんのメッセージは、  
わたしが、そう思うと思って、

使って下さいって、書いてあったのかも、  
と気づいて、思い直して、

出来るだけしていこう、と思いました。

それに忍さんから、その時計似合ってるよと、  
って言ってもらえたのが、

嬉しかった、ってのもあります。

わたしは、忍さんのしてる時計のことを聞いてみると、  
今してるのは、ほとんど一目惚れだったんだ、と言って、  
忍さんは、自分の腕時計を外して見せてくれました。

ドイツの、クロノスイスって言うメーカーの、

カイロス・レディと言う時計だそうで、  
凝った加工がしてある、銀色の時計で、

文字盤には、小さめの数字と細い針に、  
6時のところに、日付表示があって、

バンドは黒で、とても落ち着いた感じの時計で、  
忍さんに似合ってるなあ、と思いました。

わたしは、この時計の値段を教えてもらったから、  
ちょっと気になって、忍さんの時計は、

いくらくらいなのかを尋ねると、安いところを探して買ったから、定価は40万近いけど、25万くらいで買った、とのことで、やっぱりすごい高い物なんだなあ、と、驚いてしまいました。

わたしには、自腹ではとても買えないなあ、と、しみじみ思いました。

最後に忍さんは、ちょっと考えてから、

「私も何か、誕生日のプレゼントするよ。

何をあげるか、検討したいからさ、

みなもちゃんの描いた絵を、見せてくれない？

別に、今すぐじゃなくてもいいよ。

みなもちゃんが見せられる、と思った時で

と、忍さんが言ってくれたので、

わたしは、いつになるか分からないけど、

その時は、お願いします、と伝えました。

バイトが終わって家に帰ると、

かなちゃんから、夜に食べた感想がメールで来て、

「白いのすごく甘いよお！

黒いのすごく苦いよお！

すごく両極端だよお！

でも美味しかったよ、

みなも、ありがとね！」

と、それなりに好評のようでした。

今日は、かなちゃんや、忍さんと話す機会が出来て、  
こここのところ、なつめちゃんのことば、

色々、悩んでばかりだったので、  
久しぶりに、リラックス出来た気がしました。

多分、大丈夫だとは思っけど、  
補習にならないように、テストをやっつけて、  
春休みは、なつめちゃんの件に備えて、  
考える時間を作りたい、と思います。

3月19日 学年末試験終了

一年最後のテストが終わりました。

試験の出来は、ちょっと危なかった教科もあったけど、  
まずまず、出来たんじゃないか、と思います。

後は、終業式の際に補習宣告されなければ、OKです。

多分、大丈夫だと思うんだけどなあ。

だんだん、時間が経つにつれて、  
自信がなくなってきました。

やっぱり、神社にお参りしところかなあ。

昨日、汐月さんから連絡があつて、  
もうそろそろ、なつめちゃんが一時退院出来そう、  
とのことで、その時に向けて手配しても良いかを、  
最終確認で、聞かれました。

わたしは、はい、お願いします、と返事して、準備を、お願いしました。

これで、本当に後には引けません。

なつめちゃんに会ってしまつと、決心がゆらぎそうだから、これが終わるまでは、なつめちゃんのところには、行かないと決めました。

なつめちゃんには、とても辛いかも知れない。

でも、わたしとしては、なつめちゃんとは対等の関係で、親友として、付き合つて行きたいし、それが、正しい姿だと思うから、わたしは実行します。

どんなに、なつめちゃんが嫌がったとしても、どんなに、なつめちゃんが傷ついたとしても、どんなに、なつめちゃんが悲しんだとしても、それが、なつめちゃんの為だと思うから。

2010年 3月 その2(前書き)

変更履歴

2011/03/22	記述統一	一所懸命	一生懸命
2011/04/05	誤植修正	伺う	窺う
2011/04/08	記述追加	榊さんは診察の間、	追加
2011/04/08	記述修正	その後、榊さんが、	その
		後、入れ違いに入つて来た榊さんが、	
2011/04/10	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3	
年 1年生、2年、	高校3年		
2011/05/29	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/06/23	誤植修正	初め	始め
2011/07/24	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			

2010年 3月 その2

3月25日 計画実行

おとといに汐月さんから、

なつめちゃんを、一時退院させる日が決まった、と、連絡があつて、

わたしが、なつめちゃんの所に行くのは、

その翌日になるとのことです、それが今日です。

ついに、運命の日がやってきました。

今朝も、汐月さんから連絡があつて、

こちらの準備は、出来ているけど、

わたしの方は、大丈夫かどうかの、最後の確認でした。

わたしは大丈夫です、と答えて、

電話を切りました。

汐月さんから指定のあつた、午後に到着するように、お昼くらいに、家を出ました。

駅からマンションの前に、歩いて近づいていくと、

救急車が、入り口の脇に止まっています。

これも汐月さんの言っていた、準備の1つなのかな、  
と思ひながら、エントランスへ入りました。

なつめちゃんのマンションでは、  
玄関で汐月さんが、出迎えてくれましたが、  
今までみたことがない、険しい表情をしていました。

汐月さんは、なつめちゃんの部屋へと案内しながら、  
なつめちゃんの状況について、教えてくれました。

今のなつめちゃんは、新しい治療の直後というのもあって、  
精神的には、かなり不安定になっているそうで、  
これは、危険な状態になる可能性も高いけど、  
状態の急変するリスクよりも、  
この治療の成果が出る可能性を、優先したそうです。

今日を逃すと、明日には新しい治療計画に入ってしまう、  
そうなると、これまで以上に一時退院どころか、  
面会も難しくなるそうで、何としても今日、  
けりをつけなければならぬと、  
深刻そうに、汐月さんはわたしに告げました。

なつめちゃんの、部屋の前に着くと、  
汐月さんは最後に、問題が発生した時には、  
前に教えた、スイッチを押すようにと告げて、  
別の部屋へと入っていきました。

わたしは、一度深呼吸をしてから、  
覚悟を決めて、部屋に入りました。

ベッドで横になっている、なつめちゃんは、  
今までと同じだけど、これからのことを考えて、  
なつめちゃんの体には、器械や点滴とか、



一切、つながっていない状態になっていました。

ずっと、会えなかったせいなのか、  
すぎるような表情をして、  
こつちを見ている、なつめちゃんは、  
わたしには、今までよりも強く、  
お人形じみて見えました。

やっぱり、会う回数が増えて、  
親しくするたびに、この度合いは上がっているんだ。

今までわたしが、なつめちゃんの為、  
と、思っただけしてきたことも、  
結果的には、なつめちゃんの状態を、  
悪くしていたんだ。

この事実を、今はっきりと目にして、  
わたしの中の、最後の最後まであった、  
迷いは消えました。

今日わたしは、本当の意味で、  
なつめちゃんを助けるんだ！

「みな、久しぶりだね、  
やっと、話が出る。

話したいことが、たくさんあるんだよ。

あのね、みなからもらった、  
クマの名前なんだけど、  
私、考えたんだ。

今回は、一時退院だから、

ここには持つて帰ってきてなくて、  
病室に置いてきたけど、ずっとねえ、  
ねえ？ あの、みな？

どうしたの？

なんか、怖い、顔してる、よ？」

なつめちゃんは、いつも通りに、  
小さな子が、母親に甘えるように、  
わたしへと、話しかけてきたけど、  
わたしは、それに答える気はなくて、  
その気持ちが、表情に出てしまい、  
それを、なつめちゃんは気づいたようです。

笑顔だった、なつめちゃんの表情は、  
たちまち不安げに、曇っていきました。

それを見ているのも、心苦しさを感じたけど、  
これから先は、そんなレベルじゃない。

でも、やらなくちゃいけない。

わたしは、なつめちゃんを呼びました。

なつめちゃん、と。

わたしの言葉を聞いて、  
なつめちゃんは、不安な表情から、  
大きく目を見開いて、驚いた顔になって、  
動揺しているのが分かりました。

「みな、ど、どうしたの？」

その呼び方、前にやめてって、た、頼んだでしょ？  
分かって、く、くれて、いたんじゃないの？

わ、私は、それを聞きたくないって、

私の昔の話だって、き、聞いてくれたじゃない。

なのに、な、何でその

なつめちゃん。

わたしはもう一度、なつめちゃんの話を遮って、  
どうしても、なつめちゃんが許さなかった、  
その呼び方を、繰り返ししました。

だんだんと、青ざめていく顔色を見て、  
この呼ばれ方が、なつめちゃんにとって、  
気分的に、嫌だと思っっていると、  
その程度のことではないのが、  
良く分かりました。

なつめちゃんは、わたしがそれをやめないのを見て、  
自分の味方だと思っっていたものに、  
裏切られた衝撃を受けて、  
すごく動揺して、混乱し始めていました。

両手で、自分を守るかのように、  
両腕を抱きしめた、その体は、  
目で見えて分かるほどに、震えていて、  
私に向けられている、その目も、  
焦点は、定まらなくなっ、  
まるで、助けになるものを探すように、

せわしなく動いていました。

前に、何度か見た、

発作の前兆に似た状態になり始めた、

なつめちゃんに向かつて、わたしはさらに、

なつめちゃん。

と、名前を呼ぶと、

「ねえ、み、みな。」

私、みなを悪くするようなことしたの？

それが、何か分からないけど、

ごめんね、ごめんなさい。

教えてくれれば、私直すから、

絶対に直すから、だから、

許して、許して下さい。

お願い、お願いします。

何でも言うこと聞くから、

だから

と、なつめちゃんは涙ぐみながら、

わたしに懇願していました。

だけど、わたしはそれには答えしないで、もう一度、

なつめちゃん。

と、名前を呼ぶと、

「みなは、私の親友でしょ!？」

どうして、私の嫌がることするの!？

なんで、私を苛めるの!？

お願い！

お願いだから、苛めないで、  
そんな、ひどいことしないで、お願い……」  
と叫んだ後、最後は顔を伏せて、  
啜り泣く声へと変りました。

この時のなつめちゃんは、もう本当に、  
消えてしまいそうなくらい、打ちひしがれていて、  
そうさせているのが自分なのが、現実ではないような、  
これは夢なんじゃないか、とさえ思えてきました。

でも、これは現実でした。

その証拠に、力いっぱい握り締めている手は、  
爪が食い込んで、とても痛いし、  
それ以上に、わたしの心はとても苦しかったから。

……でも、まだ、やめられない。

なつめちゃんは、わたしに対して親友と言った。

でも、なつめちゃんの思う親友は、  
わたしの思っている、親友とは違ってる。

なつめちゃんの求める、親友っていうのは、  
自分を守ってくれる存在で、  
自分に何かを与えてくれる存在で、  
自分の為にいる存在のことだ。

わたしは、そんなの嫌だ。

わたしは、  
なつめちゃんの為に、生きてるんじゃないし、  
なつめちゃんを、生かす為にいるのでもない。

今のなつめちゃんは、  
わたしが親友として望んでいる、  
なつめちゃんじゃない。

さっき、何でも言うこと聞くって言ったよね？

じゃあ、わたしの言うこと聞いてよ、  
なつめちゃん。

わたしにとって、あなたは仁科さん、じゃなくって、  
なつめちゃん、なんだよ。

だから、まず正しい名前と呼ばせてよ。

それも許してくれなくて、何が親友なの？

そんな、自分だけ欲しいものを求めるのは、  
親友なんかじゃないよ。

と、わたしが言うと、なつめちゃんは何も答えず、  
ずっと、すすり泣き続けていました。

……まだだ、まだ。

なつめちゃんは、自分がすごく不幸だって、

思っているよね？

生まれてから、ずっと病気に苦しんできて、もう、死んじやいたって思っても、それも許されなかったって、言ったよね。

でも、それって本当？

人って、本当に死にたくなったら、どんな方法を使っても、死のうとするんだよ？

本当に、追い詰められている人ってのは、死に方も選ばないんだよ。

なつめちゃん、  
ベッドに縛り付けられていたって訳じゃなくって、自由に動けたんだよね？

だから、わたしとも会えたんだし。

なら、いつだって、死ねたんじゃないの？

窓から、飛び降りるとか、  
階段から、落ちるとか、  
いくらでも、思いつくと思うけど、  
どれか、試したの？

たぶん、何もしてないよね？

両親に生かされていた、とか言ったけど、

結局、そういう不幸な人生だったって、  
言いたかっただけでしょ？

なつめちゃん、自分が院長先生の子供だから、  
こんなに生きていられた、って言ってたけど、  
それは、周りの人たちが、  
なつめちゃんを助けようと、  
努力し続けていたからだよね？

それなのに、自分は生きたくもないのに、  
生かされてきただとか、  
医者や看護師は、父親が怖くてやっていただけだとか、  
よく、そんなこと言えるね。

世の中には、必死に努力しても助からない人や、  
経済的な理由とかで、助かるはずの人とかも、  
亡くなっていたりするんだよ。

なつめちゃんの気持ちって、  
そういう人たちに対して、失礼だと思わない？

一生懸命、目をかけてくれているご両親や、  
治療にあたってくれてる、病院の人たちにも、  
どうして、申し訳ないって思わないで、  
そんな、自分勝手なこと言えるのかな？

ねえ、なつめちゃん、答えてよ。

これが、わたしがなつめちゃんに対して、  
怒ってること。



さっき、なつめちゃん、  
気を悪くしたことを、言っつていったよね？

直すからつてつ言っつたよね？

何でもするつて言っつたよね？

はい、だから言っつたよ、

なつめちゃんの態度で、気を悪くしたこと。

さあ、直してよ、なつめちゃん。

ちゃんと教えたんだからさ。

ここまで、わたしが話すと、

なつめちゃんのすすり泣きは、

いつの間にか、やんでいました。

なつめちゃんからは、何も声は聞こえず、

何も答える気配はありません。

……まだ足りないの？

なんで何も答えてくれないのかな、なつめちゃん。

さっきの言葉は嘘だったの？

なつめちゃんは、親友相手にそんな簡単に嘘つくんだ。

そうやって、ずっと黙ってたって、  
だれも助けにこないよ？

わたしがまた慰めてくれるとか、期待してるんだったら、  
それは無駄だからね。

わたしは、親友って呼ぶ相手に、  
嘘つかないし、シカトしたりしないよ？

随分ひどいことするよね、なつめちゃん。

ねえ、聞いているの？

いい加減、なんか言ったらどうなの！

「やめて」

わたしが怒鳴るのと同時に、  
なつめちゃんは、小さくそう言いました。

……やっと来た！

わたしは、なつめちゃんのベッドに乗って、  
両手で顔を覆ったままの、なつめちゃんの顔に、  
自分の顔を近づけました。

声小さくって、聞き取れなかったんだけど、  
もっと、はっきり答えてくれない？

わたしがもう一度聞くと、今度はすぐに、

「やめてよ」

と、明らかにさっきまでとは違う、低いトーンの返事が、返ってきました。

……もう少しだ！

それって、回答になってないよ？

わたしの言ったこと、聞いてなかったの？

わたしは、なつめちゃんに、直して欲しいところを、言ったんだよ。

その返答が、やめてってどついう意味？

全然、答えになってないし、何をえらそうに、言ってるの？

「もうやめて」

なつめちゃんは、

また低いトーンで、わたしに言いました。

明らかに、お願いしている言い方ではなく、命令している口調で。

わたしは、わざとなつめちゃんに分かるように、息がかかるほど近くに、顔を寄せてから、最後の言葉をかけました。

そんなだから、陰で、仁科のお姫様、  
なんて言われちゃうんだよ、  
な・つ・め・ちゃ・ん。

「なにも」

なつめちゃんは、発作とは違う感じで体を震わせて、  
相変わらずのトーンでつぶやきました。

「何も、知らないくせに」

その言葉は、途切れ途切れに、  
何かを堪えるように、少しずつ、発せられました。

「私の、気持ちなんて」

「分かったような」

「振り、してるだけで」

「全然、判ってないくせに」

「偉そうに」

「私に、説教」

「するんじゃないよえよ！」

最後の言葉を言うのと同時に、ベッドに乗って、  
目の前まで体を近づけていた、わたしに対して、

とうとうなつめちゃんが、つかみかかって来ました！

そのタイミングで来るとは思わなかった、わたしは、不意をつかれて、勢い良くベッドの後ろに倒されて、なつめちゃんに、馬乗りにされました。

なつめちゃんは、わたしが掛け布団に挟まれて、手が出ないのをいいことに、

わたしの顔や頭を、めちゃくちやに叩いてきました。

こつちを睨んでいる、なつめちゃんの顔は、今まで見たことないほど、怒っていて、もう逆上してしまって、我を忘れているようです。

わたしは、やっと布団から手を引き出すと、感情に任せて、わたしを叩き続ける、

なつめちゃんの手を押さえて、こちらにも反撃に出ました。

つかんだ腕を引っ張って、こちらに顔を近づけてから、なつめちゃんの頬を、思いっきり引っばたきました。

それでひるんだ、なつめちゃんを突き倒して、馬乗りの状態から逃れると、

今度はこつちから、なつめちゃんを押さえ込みようと、体を近づけたら、なつめちゃんは、

両足で、落ちかけている掛け布団ごと、

わたしを蹴り飛ばしてきて、

わたしはまた、後ろに倒されそうになったけど、

なんとか、暴れるなつめちゃんの両足を、

押さえ込みました。

その間に、上半身を起こしたなつめちゃんは両手を振り回して、手当たり次第に、わたしを叩いてきました。

わたしは、その手を払って抑えながら、なつめちゃんの頬を、何度か引つ叩きました。

しばらく2人して、叩き合っていると、なつめちゃんは、体力がなくなってきた、反撃してくる力も、落ちてきて、やがて、腕も上がらなくなつて、わたしの方に、倒れてきました。

わたしは、それを受け止め損ねて、思いつきり、鼻を頭突きされてしまい、鼻血が出てきたのが分かったけど、それをどうにかする余裕はなくて、鼻血を垂らしながら、なつめちゃんを抱き止めました。

なつめちゃんは、まだ抵抗して、「放せ！」

とか、叫んでいたので、

わたしは、うるさい、黙れ！

と言って、さっきのお返しに、

なつめちゃんの頭に、頭突きしておきました。

「痛い！」

「何すんの！」

「信じられない！」

「私を誰だと思ってるの！」

「唯じゃ済まさないから！」

まだまだ、なつめちゃんは静かにしないので、  
黙れって言ってるでしょ！

と言って、さっきとは別の場所に頭突きしました。

これでやっと、なつめちゃんは大人しくなりました。

「……みな、

もう、わかったから。

もう暴れないから、

手の力を、緩めてよ。

腕が痛いし、息苦しい」

なつめちゃんの、言葉のトーンが、

さっきよりも、落ち着いているのを確認して、

わたしは、手の力を緩めました。

なつめちゃんは、大きな溜息を吐いて、

わたしに、抱き止められたままの姿勢で、

耳元で、つぶやき始めました。

「こんなに怒ったのも、

こんなに暴れたのも、

こんなに誰かを叩いたのも、

こんなに誰かから叩かれたのも、

生まれて、初めてだよ。

あーあ、思いつきり引つ叩かれたから、

きつとこれ、あざになるよ。

私の体質、分かってんでしょ。  
もう、一生直らないかも知れない、  
どうしてくれるの、みな。  
責任取ってもらおうから」

わたしは、そんな負け惜しみを言う、  
なつめちゃんに、反論しました。

だけど、その代わりに、  
本当の親友の付き合い方が判ったでしょ？

親友ってのは、その相手と、  
本音と、本気で、語り合うものなんだよ。

馴れ合うものではなくて、  
ぶつかり合うもの。

これが、わたしの思う親友。

理解出来た？ なつめちゃん。

と伝えると、なつめちゃんは、

「分かったよ、

よく分かったよ。

嫌って言うほど分かったよ！」

と耳元なのに、大声で叫んでから、  
わたしの耳に噛み付きました！

あまりの痛さに、思わず悲鳴を上げて、



それと同時に、手を離したから、なつめちゃんは、ベッドに仰向けに倒れました。

「隙あり！」

やられたまんまじゃ、

嫌だからね。

また偉そうに説教したお返しだよ」

と言って、倒れたなつめちゃんは、わたしの顔を見て、

「みな、鼻血出てるじゃん。」

それ、何とかしてよね、

布団とかも血まみれじゃない。

それにしても、何その間抜けな顔」

と言って、大笑いしていました。

わたしは、

誰がやったと思ってんだよ！

と言って、もう一度、

今度は、なつめちゃんのおでこに、

頭突きしときました。

さっきのわたしの悲鳴が、相当大きかったせいか、

汐月さんが、慌てた様子で部屋に入ってきて、

「大丈夫!？」

と言ったまま、様子を窺って固まっていました。

ベッドに仰向けに寝ていて、

額を押さえて、呻いているなつめちゃんと、

なつめちゃんの、太ももの上に馬乗りになって、

鼻血を流しているわたし。

ケンカになる、とは知らせてあったけど、  
やっぱり、異様な光景に見えたのかなあ……

こうして、わたしの考えた、  
なつめちゃんの心を変える作戦は、  
一応、成功に終わりました。

わたしが、これを相談した時に、  
汐月さんから言われていた、注意事項は、  
なつめちゃんを、言葉で追い詰めるところは、  
特に何もなくて、わたしの思うままに喋りました。

忍さんの意見を、参考にして、  
我ながら、とてもひどいことを言ったなあ、  
と、思ったけど、あれくらい追い詰めないと、  
なつめちゃんは、わたしに対して、  
本気で怒らないかと思って、  
思いつく限りの、ひどい言葉を言いました。

ケンカについては、  
なつめちゃんの、胸とお腹には、  
絶対に叩いたり、圧力を加えないことと、  
床への転倒を避ける為、ベッドから出ないことと、  
立ち上がらせないこと、  
叩く時は、一箇所集中させないこと、  
でした。

頬を引つ叩く時も、出来るだけ左右に分けたり、  
ちよつと位置をずらしたりして、

色々気を使いながら、もみ合ってたんです。

ケンカ慣れしてないのもあって、かなり大変でしたが、かなとの件でちょっとだけ、経験していたから、随分助かりました。

この後、わたしとなつめちゃんは、汐月さんの診察を受けました。

わたしは、もう鼻血は止まりかけていたけど、一応、鼻にガーゼを詰められて、後は、なつめちゃんが叩いたり、引っかいたりした傷と、噛み付かれた耳たぶを、治療してもらいました。

なつめちゃんの方は、体に影響が出ていないかを、慎重に診ていましたが、わたしが頭突きしたところと、叩いた頬を冷やす程度で、それ以外は、問題なしでした。

この後、わたしはなつめちゃんと、初めてお互い、本音で話をしました。

まず、ケンカの前の話は、お互いに、一切忘れることにしました。

そして、ここで決まったこと、それは、なつめちゃんの呼び名を、なつめ、にすることでした。

わたしがケンカに勝ったから、

何でも1つだけ、言うことを聞くと言うので、わたしは、わたしだけじゃなくて、周りからも、なつめ、と呼ばれることを、拒否するのを禁じました。

これは、ケンカに負けた代償だから、守らざるを得ない、その敗北感の屈辱が、なつめの心の中にある、この名で呼ばれることの記憶を、塗り替えていってくれることを、期待してです。

ちなみにこれは、汐月さんからの入れ知恵ですけどね。

それと、なつめは、今日からわたしのことを、ライバルとみなすそうで、いつか必ず、ケンカで負かしてやる、と、宣言していました。

わたしは、なつめのその宣言に、いつでも受けて立つ、と答えておきました。

この時の、なつめは、  
今までのお人形みたいな感じや、  
消えちゃいそうな、弱々しさはなく、  
目にも力があつて、  
むしろ、わたしに負けた悔しさで、  
逆に生き生きとしているように、見えました。

窓の外を見ると、もう夕暮れになっていて、いつの間にか、随分時間が経っていました。

なつめは、明日病院へと戻る、とのことで、  
今日は、色々支度もあるだろうし、  
わたしも明日は、登校日だから、  
これで帰ることにしました。

マンションを出る時に、なつめはエレベータの前まで、  
見送りに出て来て、右手を差し出してくると、  
「みな、最後に握手」  
と言いました。

わたしは頷いて、その手をつかむと、なつめは、  
「本当にありがとう。」

それと、もう負けない」  
と短く言って、つかんだわたしの手を、  
握り締めました。

わたしを真っ直ぐに見つめる、と言うよりも、  
挑むように睨みつける、なつめからは、  
もう、心配だったなつめちゃん、ではなく、  
何かをつかんでくれた、なつめ、  
となっていました。

それを感じたわたしは、なつめに頷き返してから、  
家に帰って来ました。

なつめには、わたしの思いも伝わったはずだし、  
これで、周囲の人への接し方も、  
変わっていきはらずです。

これで、一番の気がかりなことは、  
解決に向かうはずですよ。

後は、なつめが、  
持病に打ち勝ってくれることを、  
祈るだけです。

3月26日 終業式

今日が、高校一年生としての、  
最後の登校日となりました。

補習は無事に、逃れられたので、  
本当に、今日が最後の登校日です。

もう恒例とも言える、校長先生の話です。

なつめにもらった、腕時計を睨みながら、  
話し始めを待ち構えて、話が始まると同時に、  
校長先生を、凝視していました。

がんばって、校長先生！

一年最後に新記録を！

と思って、見ていたら、  
思わぬ話の内容で、さらに新記録達成でした。

校長先生は、今年度いっぱいまでやめて、今日は、その挨拶だったんです。

でもって、時間は、

それこそ、有終の美なのでしよう、

1分ジャスト、でした！

もうわたしからは、何も言うことはありません。

校長先生、最後に素晴らしい記録をありがとう。

言われた話は、何1つ覚えていないけど、

わたしは、一生忘れません、

すっごく話の短い、校長先生のことを。

こうして、終業式は終わり、

後は、通知表を受け取って、

教室の荷物を抱えて、帰って来ました。

成績の方は、予想よりは点が低かったけど、

なつめに教えてもらう前と比べれば、

前上がった成績も、半分くらいは維持出来たから、

わたしとしては、上出来です。

出来れば、なつめと一緒に帰りたかったけど、

こればかりは、どうしようもないから、

諦めて、1人で帰ってきました。

航海堂へは、荷物を抱えたままいくと、

忍さんから、計画性がないね、と、

笑われました。

わたしは、相談に乗ってもらった、なつめの件が解決した、と思うことを、忍さんに、報告しておきました。

家に帰って、荷物を置いて座ると、まだ全てが、解決した訳じゃないけど、なつめのことも、解決の方向に向かって、試験も無事に終わって、学校も、明日から春休みなんだなあ、と思った途端に、今まで張り詰めていたものが、切れたみたいに、急に疲れを感じました。

今日は、何も考えないでぐっすり寝ます。

3月30日 汐月さん

今日は、汐月さんから言われていた、わたしへの診察の日で、場所は、なつめの病室に、来てくれればいいとのこと、いつも通りに、なつめの病室へと向かいました。

榊さんは診察の間、談話室で待っていると言い残して、なつめの病室の前で別れました。

病室には、なつめの姿はなくて、



白衣姿の汐月さんが、待っていました。

わたしの外傷の確認と、  
問診による、心理的な後遺症の確認の後、  
今のなつめのことを、話してくれました。

なつめは、別室で新治療に入っているそうで、  
そこから出るのは、4月の中旬になりそうだと、  
教えてくれました。

さらに、今やっているその新治療と言うのは、  
実は、前準備でしかなくって、  
新しい治療に、耐えられるだけの、  
体を作っているのだそうです。

そして、その後の治療は、  
また、海外で行うのだそうだと、  
遅くても、なつめは、  
4月末には、外国へ渡るのだそうです。

わたしは、それを聞いて、  
汐月さんの言っていた、  
3月中にしないとけない、  
と言う訳だったのかと、理解しました。

なつめの心を、変えてからでなければ、  
この新しい治療は、失敗して、  
前に海外で治療した時と、同じ事になってしまう。

もし今回、そうなってしまったら、

前回とは違い、もうなつめの心を、  
支えるものはなくて、  
本当に、危険な状態になりかねない、  
それを恐れていたんだ。

それがわたしにも判って、  
改めて、汐月さんを見ると、

「色々あったけど、

結果的には、全て上手くいって良かった、

これも、貴方のおかげです、三崎さん。

なかなか貴重な臨床データが取れました。

本当に感謝するわ、ありがとう」

と、微笑みながら、わたしに言って、

右手を差し出されたので、わたしはその手を取って、  
握手に応じました。

もしかして、全部汐月さんの筋書き通りだった？

結局、わたしは先生に、うまく操られていただけ？

すごく、そんな気がしたけど、

まあ、なつめが良くなれば、いいかな。

でもこの人には、聞いておきたいことがあったんだ。

わたしは、汐月さんに、

ひとつだけ、質問したいと言ってから、

メガネ、幾つ持っているんですか？

と、尋ねてみました。

汐月さんは、これも今までに見たことない、レンズの上にフレームのないメガネを、片手で外しながら、

「ごめんなさい、それには答えられないわね、多すぎて、幾つあるのか判らないのよ。」

今度会う時までには、数えとくから。

ちなみに全部、伊達メガネなの。

それと、これを渡しておくわ、

これが私の、本当の名刺。

そうねえ、2年後か6年後にでも、

これが貴方の役に立つことを、願っているわ」と、笑って言うのと、

スーツのポケットから、名刺入れを取り出して、その中から1枚取り出して、わたしにくれました。

そこには、前に教えてもらったけど、もう忘れていた、汐月さんのすごい肩書きが、ずらっと書かれています。

その後、汐月さんは、部屋から出て行くこうとしていたので、わたしは、これでこの人と会うのは、最後になる予感がして、今まで色々、お世話になりました、と、頭を下げた挨拶しました。

汐月さんは、こちらこそ、と返して、軽く、右手を上げてから、部屋を出て行きました。

その後、入れ違いに入って来た榊さんが、舌打ちしながら一言、

「……食えない女だ」

と、つぶやいていたのが聞こえました。

この後談話室で、

榊さんに、飲み物をおごってもらいました。

いつもなら、わたしが話しかけない限り、

何も言わない、榊さんの方から、

「……棗は変わった、

妙に強気で、挑戦的な態度を取るようになったな。

自分が納得しないと、言うことを聞かないし、

自分に非がなければ、絶対に謝らなくなった。

あれだけ気力と根性があれば、大丈夫だろう。

これも、お前のおかげだ」

と、褒められました！

もしかして、汐月さんに続いて、

榊さんとももう会えないのかなと、

心配になって、それを聞くと、

榊さんは、今回なつめと一緒に行くそうなので、

恐らく、棗が出国する時が、最後になるだろう、

と、教えてくれた後に、

それは、俺じゃなくて、棗と会えなくなることを心配しろ、

と、怒られました。

わたしは、筋違いかも知れないけど、

なつめを宜しく願います、

と、お願いすると榊さんは、短く一言だけ、  
「……………ああ、任せろ」  
と、言ってくれました。

その後、わたしは榊さんと別れて、  
家に帰ってきました。

わたしは生まれて初めてもらった、  
2枚の名刺を、机の引き出しにしまいました。

その時に、名刺の肩書きを良く見ると、  
前に聞いていなかったのが、ありました。

国立精神・神経医療研究センター、精神保健研究所、  
未成年精神保健研究部副部長、精神発達研究室長。

な、長い！

やっぱりすごい人だったんだなあ、汐月さん。

病院の先生で、大学の准教授で、研究所の室長。

名刺の、肩書きもだけど、  
立場に対応させて、キャラ変わるところとか、  
びっくりしたなあ。

でも、一番びっくりしたのは、  
あのメガネ、伊達メガネだったとは思わなかった！

これには、ほんとにびっくりしました。

それと、なつめのことも、驚きました。

来月に、なつめは遠くへ行ってしまふ。

それは寂しいけど、元気になる為なんだし、きつと、今のなつめなら、その治療も、気合と根性で、がんばってくるだろうから、最後は、元気に明るく見送ろう。

今のなつめに、馬鹿にされそうだから、絶対に、泣かないようにしよう。

そう、思いました。

3月31日 高校一年を振り返って

実際には、4月5日からですけど、今日で、高校一年が終わって、一応明日から、高校二年生になります。

わたしにとって、この1年は、中学生から、高校生になったという、環境の大きな変化も、ありましたが、中学の時よりも、充実した日々が送れたような、そんな気がします。

新しい友だちも出来たし、

昔の友だちとも、再会しました。

小柄でかわいいくて、行動力はあるけど、  
本当の自分の望みを見失って、  
自分自身も見失っていた、かな。

今は、本当に自分が望むものを手に入れようと、  
逆境に立たされながら、1人でがんばってます。

今でも、かなに対する変な噂とかは、  
なくなっただけで、

前まで、あんなにかなを頼っていた人たちは、  
すっかり、いなくなってますが、

その代わり、前までのかなを敬遠していたような、  
違うタイプの人とかと、よく話しているのを見ます。

かなは、何かをしようとしているみたいです。

でもそのことは、わたしに話そうとはしないから、  
わたしからも、聞かないことにしています。

いつか、かなが話せると思ったときに、  
教えてもらえれば、それでいいから。

お人形みたいで、色々悩みを抱えていて、  
全てを他人のせいにして、

わたしに甘えることしか考えてなかった、なつめ。

今は、本来の負けず嫌いの性格を發揮して、  
目指す目的を見つけて、それに向かって、

強く生きようとしています。

2人とも、色々あったけど、わたしは、2人に会えて、本当に良かったと、思っています。

また、2人にとって、わたしと過ごしたことが、良かったと思ってもらえればいいな、と思います。

それから、忍さん、汐月さん、榊さん。

わたしは、一人っ子だから、お兄さんとか、お姉さんとかいる友だちが、すごく、羨ましかったです。

わたしにとって、忍さんは、とても頼りになる、お姉さんです。

これからも、甘えさせてもらいたいです。

汐月さんは、本当にすごい人で、わたしが、なつめと関わらなかつたら、きっと、会おうことのない人でした。

最後に言っていた、2年後とか、6年後とかって、どういう意味だったんだろうなあ、今度、忍さんに聞いてみよう。

榊さんには、危ないところを、助けてもらいました。



とっつきにくい人だけど、  
とても、頼りがいのある人です。

わたしの直感が正しければ、  
なつめ本人も、分かってないかも知れないけど、  
昔も今も、なつめが慕っているのは、  
榊さんなんじゃないか、って思っています。

来月には、外国に行ってしまうけど、  
榊さんが、そばについていてくれれば、  
なつめは大丈夫じゃないかな、と思います。

来月からは、クラス替えて、  
新しいクラスになります。

かなとは、また同じクラスになれたらいいなあ。

新しいクラスでも、  
良い出会いがありますように……

2010年 4月(前書き)

変更履歴

2011/01/03	誤植修正	以外	意外
2011/04/06	記述修正	〽、て	〽って
2011/04/11	記述統一	1年生、(中学)	2年、高校3
年	一年生、二年、高校三年		
2011/04/17	記述変更	(クラス)	1組、2組、3組
A組、B組、C組			
2011/04/21	記述統一	(期間)	一日、二月、三年
1日、2月、3年			
2011/04/22	記述統一	第一、第二、第三	第一、
第2、第3			
2011/05/08	記述統一	一階、二階、三階	1階、
2階、3階			
2011/05/30	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/09/20	誤植修正	話し	話

2010年 4月

4月5日 始業式とクラス替え

今日から、高校二年の生活が始まりました。

まず、始業式では、

新しい校長先生の、挨拶がありました。

新しい校長には、前の教頭先生がなっていて、話も全然普通に長くて、残念な限りでした。

先月からずっと気になっていた、クラス分けでは、わたしはE組になりました。

教室は、第3校舎の2階で、

窓からは、中庭と隣の第2校舎が見えます。

座席は、教室の真ん中よりちょっと前でした。

かなちゃんはB組で、残念ながら、別のクラスになってしまいました。

これからは、教室で姿を見ることも出来ないから、メールが多くなるかも知れないなあ……

二年の担任の先生は、鈴木先生と言う、まだ2年目の、現国の女の先生です。

歳は26才だそうで、かなちゃんと同じくらい小柄で、とても細くて、病弱そうな先生です。

その見た目どおりで、声も小さくて、なんか、毅然としたものを感じない人です。

気のせいかも知れないけど、何かを、怖がってるみたいなきがします。

教師なんだから、ある程度はどんと構えてもらわないと、こっちの方が、不安になってきます。

出席の確認の時に、元D組の人がどのくらいいるのか、数えてみましたが、他のクラスの人たちよりも少なく、それも、同じクラスになった人たちは、話したことない人ばかりで、今のわたしは、話が出る人がいない状態です。

一年の時は、かなちゃんに救われたのもあったから、そういうのに、あんまり気を使わずに済んだけど、今回は、自分からがんばって話さないと、ダメっばいです。

誰かに、声を掛けておこうかと思って、周りを見ると、左隣の席の人は、誰とも話していなくて、ずっと下を向いていました。

男子だったから、話しかけなかったんだけど、なんか様子が、変だったようにも見えました。

出席確認では、初日から1人が欠席でした。

初日から欠席っていうので、その人、女子だったんですが、ちょっと気になったんだけど、それよりも気になったのは、前にももらった、かなからのメールで、書いてあった名前の人がいたことです。

門埜さん。

その人も、わたしと同じクラスでした。

席は窓側の後ろの方で、わたしの席からは見えないうけど、気になったから、ちょっと振り返って見てみました。

門埜さんは、ロングの黒髪で、白い肌の、きれいな人でした。

だけど、メールの内容のせいも、あるのかも知れないけど、何か、近寄りたいたい雰囲気を感じました。

まあ、席も離れているし、かなの忠告もあったから、積極的に、関わらないようにしておけば、特に接点はないんじゃないかな、と思っています。

新しいクラスでは、まず話ができる相手を、早く作りたいな、と思います。

4月11日 なつめのお見舞い

今日は、榊さんから、

なつめの、面会許可が出たと聞いて、お見舞いへと行ってきました。

あのケンカした日以来、なつめは、

新しい治療に入ったきり、眠ったままなので、

面会謝絶で、会うどころか、

話もメールのやりとりもしてません。

向かう車の中で、前にわたしの診断に行った時の、

榊さんが言っていた言葉を、思い出しました。

多少、変わったくらいでは、

あの榊さんがあんな言い方しないよな、と思えて、

なつめが、どのくらい変わったのが、

ちよっと楽しみ、と言うよりも、怖くなってきました。

直通エレベータの前で待っていた、榊さんは、

心なしか、疲れているように見えました。

わたしは、嫌な予感がしてきました。

榊さんが疲れるって、原因はなつめ以外に有り得ない。

ナースステーションでは、看護師の人たちに、

なぜか、睨まれているような気がして、

ちょっと怖かったです。

カードキーを持った、看護師さんの後について、なつめの病室へと、近づいていくと、病室の中から、何か声が漏れてきました。

このドアは、要人専用のフロアだから、防音も、完璧なはずなのに、なんで音が聞こえるんだろう？

看護師の人は、ドアを空ける前にわたしへ向かって、くれぐれも、患者を騒がせないで下さい、と、忠告を受けました。

あれ、今回は面会時間を聞いてない、と、思っているうちに、看護師さんは、溜息を吐きながら、戻ってしまいました。

まあ、いいか、と思って、わたしは榊さんと一緒に、部屋へと入りました。

ドアが開いた途端に、

「遅い、榊！

もっと早く連れてこれなかったの！？」と、大きな声が響きました。

わたしは、慌てて中に入って、すぐにドアを閉めました。

ベッドには、色んな医療機器に、繋がれているのは、前と変わらないけど、

怒っているなつめが、上半身を起こして、横になっていました。

その脇には、わたしのあげたクマが座っていました。

わたしを見つけたなつめは、

榊さんへの文句は、もう忘れたかのように、とてもテンション高く、話しかけてきました。

「みな、久しぶりだね、元気だった？

私は2週間、眠りっぱなしで、

体が言うこと利かないし、

治療の副作用で体中あちこち痛いし、

だるくって仕方ないよ」

なつめは、口にした状況とは思えないほど、

元気そうに勢い良く、流暢に喋っていました。

「……これはまだ、大人しい方だ」

溜息の後、榊さんはわたしだけに聞こえるように、

静かに呟きました。

これで、大人しい方！？

以前のなつめなら、

全力でも出ていないくらいなの、声の大きさだし、

わたしと会話がしたいって言うより、

わたしの言葉を、聴こうとしていた感じだったけど、

今のなつめには、自分の主張が、



最優先になつてゐるようです。

なつめの話は、まだ続き、

「あ、その時計つけてくれてるね、それは私の身代わりなんだから、いつもしておいてよ。」

使いやすいように、安めのを選んだんだから。

あ、それと、これの名前決めたよ、前に考えてたのとは、変えたんだ。

名前はね、2つあってね」

と、言われた瞬間に、もう判りましたが、口は挟まないでおきました。

「サカキ、と、ミナモつていうの。」

私の人生の中で、唯一私に手をあげた人の名前。私が倒したい相手の名前」

と、なつめは言いながら、

左手で、クマのお腹を殴っていました。

ああ、やっぱりそういうことが、

クマは、わたしと榊さんの身代わりに、サンドバッグにされているようです。

クマ、ごめんね、がんばって耐えてね。

なつめは言いたかったことを、言い終えたようなので、今度はわたしから、なつめが今月には、海外へ行くと聞いたことを、伝えました。

「そのこと、聞いているの？」

ああ、汐月さんか、あの人お喋りだな、  
本当は、来月の予定だったんだけど、  
治療の計画を、早めさせたの。

私はね、早く新治療を受けたい、  
それで1日も早く、もつと使える体になりたい。  
そうしないと」

ここでなつめは、言葉を切って、  
一度、わたしの顔を見つめてから、  
不敵な笑顔になって、

「みなに、勝てないから、  
色んな意味で、ね」  
と、言いました。

前のなつめちゃんには、今にも壊れそうな、  
危うさがあって、甘える子供みたいだったけど、  
今のなつめには、何をし始めるか判らない、  
わがままで、やんちゃな男の子っぽいなあ、  
と、感じました。

「私の治療は、15ヶ月の予定なんだけど、  
もつと早く戻ってくるから。」

目標は1年、1年後に、私は帰ってくるよ。  
もちろん、高校三年生として、  
みなものいるクラスにね。

その時に、やりたいことがあるんだ」

なつめのやりたいことって、ケンカ？  
って聞いたら、なつめは笑った後に、

「違う違う。」

私、みなと一緒に、またドライブに行きたいんだ。

前に行った、海辺の別荘とか、

あの時の思い出とかを、

全部、新しい思い出で、書き換えたい。

あんな弱い私の姿なんて、

私の記憶からも、みなとの記憶からも、

消してしまいたい。

もう弱い私はいないし、要らないから。

みな、どんな車に乗りたい？

みなのお好きなのを、用意するよ」

と、言われました。

そこで、わたしが思い出したのは、

やっぱり、汐月さんに乗せてもらった、

オープンカーでした。

そのことを伝えると、なつめは、

「オープンカーねえ、

父が持つてるセカンドカーが、

たしか、オープンカーだったけど、

オープンカーなら、どんなのもいいの？

メーカーとか、この車種がいいとか、

そういうのはないの？」

と、質問してきました。

わたしは、乗せてもらったの以外、

車種とかは、判らないから、

オープンカーであれば、なんでもいいよ、

と、答えました。

なつめはそれを聞いて、

「じゃ、父の車を借りれば、OKと。」

それとも、何か他に良い車ってある？」

と、今度は榊さんに振りました。

「……そうだな、

院長の車は確か、グランカブリオのはずだ。

あの車なら、4人は乗れるし、

後部座席も、それなりに広い。

特に希望がないなら、それでいいと思うが」

榊さんの言葉を聞いて、そう、

と一言返したなつめは、満足した顔で頷きました。

この後、なつめはわたしの顔をじっと見て、

「みな、今日元気ないけど、どうしたの？」

お見舞いに来た人の方が、心配されてちゃ駄目ですよ。

何かあったの？」

と、見透かされてしまいました。

今のなつめには隠しておけないと、諦めて、

わたしは、今の学校のことを話しました。

なつめはわたしの話を聞くと、たちまち怒り出して、

「みな、私にはあんなに色々と、

文句を言ってたのに、自分がそうなった途端に、

そんな顔してるってのは、私としては許せない。

泣き言なんて、聞きたくない」

と、予想通りのことを言われました。

なつめの言う通りだ、と思って、わたしは、なつめに謝りました。

「でも、今回だけは許してあげる。

次に会う時もそんな顔してたら、許さないからね。門塾にはずっと私も、いじめられていたから、どうという手口でくるかは判る。

いつも直接は手を出さなくて、手下にやらせるの。前に襲われたのも、どうせ門塾の仕業だろうし、もしかすると、その時に私と一緒にいたから、

この先、目をつけられるかも知れない。もし何か遭ったら、私のせいかも」

なつめはそう言うと、しばらく考えてから、

「榊、みなについてる警備だけど、来月以降も、つけておくことは出来る？」

と聞くと、榊さんは、

「……予定では、今月いっぱいまでの契約のはずだ。元々の目的は、棗の治療に関わる人間の警護、という名目だったから、

恐らく、延長という形では難しいだろうな。

お前が両親に、直接頼んでみるしかないだろう」と、顎に手をやりながら言いました。

自分のことは、自分で解決しなくちゃいけない、そう思って、わたしは、

そこままでしてもらわなくてもいいと、なつめに断りました。

なつめは、とても不満そうでした。

わたしは心配してくれたことの、お礼は言ったけど、なつめに守られて、これから生きていくのは嫌だし、わたしはなつめと、対等の関係でいたいから、と伝えて、なつめの申し出は最後まで断りました。

わたしの意志が固いのを、理解してくれたなつめは、そう、ならもう言わない、

と言ってから、話を切り替えて、

次に会えるのは、出発する日になることを、教えてくれて、

見送りには絶対来て欲しい、と言いました。

出発の詳細な日程は、後日榊さんから知らせる、

とのことで、今のところ、29日だそうで、

いよいよ、あと2週間ちょっとで、

なつめとは、お別れになります。

わたしは、絶対に行くよ、と伝えて、

この日の面会は、時間切れになって、帰ってきました。

次に帰ってくるのは、早くても1年後かあ、寂しくなるなあ……

それにしても、なつめ、

見違えるほど、すごく生き生きしていたし、それに、とても前向きになっていました。

逆に、自己主張が強すぎなくらいで、

あれなら、もう何の心配もないです。

榊さんは、かなり大変になりそうだけど、  
きっとあの人なら、大丈夫でしょう。

わたしも、なつめに負けないように、  
がんばらなくちゃ……

4月16日 クラスの雰囲気

高校二年の学校生活が始まってから、  
2週間が経ちました。

一年の時とは違うから、

雰囲気が違うのは、当たり前だけど、

このクラスはとても、雰囲気が良くないです。

まず、まだ2週間しか経ってないのに、

わたしの隣の席の男子が、自主退学しました。

初日に、様子がおかしいな、とは思っていたんだけど、

2日目から、ずっと休んでいて、

今日に先生から、報告がありました。

この男子は、元A組だったらしいのですが、

学校を辞めたことを聞いても、誰も何も言わなくて、

先生が教室を出てから、何人かが笑い声と共に、

この男子のことを、話しているのが、

聞こえてきました。

でも、その内容は、  
やっといなくなったとか、自殺したんじゃないのかとか、  
そんな、ひどい言葉ばかりでした。

どうやら、あの男子はいじめられていた、みたいです。

もう1人、まだ一度も学校にこない女子も、

この辞めた男子と、同じように、

いじめられていたようで、

今は自殺未遂で、入院中とか話しているのを聞きました。

なつめの話を聞いていたから、

A組では、そういうのがあるんだと、

分かってはいたけど、

なつめだけ特別だと思ったら、

そうじゃなかったかんだと、判りました。

周りの元A組の人たちは、一緒になって笑っているか、  
だまっているか、どちらかの態度を取っていました。

どうも、そのいじめていたグループの人たちが、

このクラスには、かなりいて、

いつも門塾さんと一緒にいる、男子たちが、

その人たちっぽいです。

それと、何となくですが、わたしは周りの人たちから、  
避けられているような、気がします。



特に、元A組の人たちに。

理由は判らないけど、何回か話す機会があっても、あまり関わりたくないって感じで、全然会話してもらえないです。

わたし、何もしてないのに、  
なんでわたしと、話してくれないのかな。

これからの学校生活が、すごく不安です……

4月18日 遅めのお花見

今日は、いつもの河原ではなく、

お花見に、桜並木のある別の川へと行ってきました。

御家河に流れ込んでいる、荏田川と言う小さな川があって、その川沿いが、桜並木になっているんです。

ここは、桜が満開になると、大勢の人がお花見に来ます。

わたしは、人混みが苦手なのと、

満開の桜よりも、桜の花吹雪が好きなので、いつも、満開の時期を過ぎて、

散り始めてから、ここに見に行きます。

その頃だと、さすがに誰もいないってことはないけど、お花見しているグループもまばらで、

ゆっくり、歩いていられるんです。

今日は晴れていて暖かくて、ちょっと風がある、絶好の天気でした。

わたしは、桜の花びらが舞い落ちる道を、上ばかり見ながら、歩いていました。

向こう岸の、桜並木を見ると、

桜の花が、風に吹かれて荏田川へと落ちて、水面には、たくさんの花びらが流れていました。

その風景も、すごくきれいです。

上や水面を見ながら、歩いていたら、足に何か当たったので、下を見てみると、なんとヒョウちゃんが、わたしの足にじゃれている！

のかと思って、びっくりして良く見たら、この荏田川にいる、別の黒い猫でした。

けっこう人が多いから、こんなところに、ヒョウちゃんが、出てくるはずないもんなあ……

そういえば、最近あまり河原に来てないから、様子を見てないなあ。

ゴールデンウィークになったら、

また描き途中の、絵の続きをやるうかと思っているので、その時にでも、何か持っていこうかなあ。

そんなことを考えながら、桜を見ていました。

今は、学校があんまり楽しくないから、  
良い気分転換になりました。

来週から、心機一転、  
またかんばつてみよう、と思います。

4月22日 門埜さん

何となく、気にかかっていた、  
門埜さんについて、少し判ってきました。

最初に見たときには、座ってたから、  
背の高さまでは、よく判らなかつたけど、  
かなり、背は高いみたいです。

それと、ブレザー着てても判るくらい、  
スタイルがいいです。

足も細くて長いし、多分、  
かなちゃんよりも、胸も大きそうです。

女優さんみたいなの、ワンレンの黒髪で、  
いつもまとめていないで、下ろしています。

髪もきれいで、肌がとても白くて、

印象は、お姫様が、お嬢様って感じですよ。

一年の時に、同じクラスだった人たちなのか、いつも数人の男子と、一緒にいます。

女子とも、話しているんだけど、

いつも仲良く話しているのは、男子のような気がします。

そついうのを見ると、見た目とかは、全然違うけど、昔のかなを思い出します。

でもかなとは違って、やっぱり最初に感じた、近寄りがたい感じは、今でも変わりません。

それは、かなのメールがあったから、とかじゃなくて、理由は判らないけど、あの人自体から感じるものが、わたしには合わなくて、

どうも、苦手なタイプの感じがします。

まあ、これだけなら、

あんまり近づかないように、すればいいんだけど、どうも、見られているような気がするんです。

目が合ったことはないから、

絶対に門塾さんだとは、言えないけど……

なんか、嫌な感じがして、とても気になります……

4月29日 なつめの見送り

今日は、なつめの見送りに、  
空港まで行ってきました。

なつめは、病室から、午後に空港へと行って、  
16時の便で、ドイツへ向かうのだそうです。

なので、午前中は話が出るから、  
と言うことで、朝から病院へと向かいました。

今日は絶対に、なつめの前では、  
泣かないようにしなくちゃ、と、  
心に誓ってきました。

ただでさえ、学校でのことで悩んでいるのに、  
今日を最後に、なつめと、  
1年以上も会えなくなると思うと、  
そう考えただけで、涙ぐんでできてしまって、  
今にもくじけそうだけど、  
少なくとも、なつめより先に泣いたら、  
負けだと思って、がんばって堪えます。

午前中に病院について、なつめの病室へと入ると、  
パジャマ姿ではないなつめが、ベッドに座っていて、  
クマはもう、荷物として送られているようで、  
もう手荷物とかも、車に積んであるのか、  
病室にバッグとかは、何もありませんでした。

「みな、おはよう、意外と早かったね。  
もしかして、急いできたとか？  
そんなに、私がいなくなるのが寂しいの？」

なつめは、わたしの内心と違って、  
全然平気そうにしている、

わたしをからかって、そんなことを言ってきました。

わたしは、ちょっと道路が空いてただけだよ、  
と、強がって言うておいたけど、

本当は、出来るだけ早く来ようと思って、  
早めに出てきました。

だけど、そんなことは絶対に言えません。

ふうん、と横目で見ながら言った後、なつめは、

「今日はここで、お昼食べてから出発するよ。」

榊、あれ持ってきて」

と、何かを榊さんに頼むと、

榊さんは、この病室の中にある、

ドアの中へと入って行って、

大きな盆を持って、出て来ました。

そのお盆には、大きなお皿が載っていて、

その上には、全面に海苔が巻かれた、

まるで爆弾みたいな、おにぎりが並んでいました。

「これ、私が作ったおにぎりなの。」

具は前回と同じで、用意されたものだけだ。

そこまでは、ここでは出来なかった。

わたしは治療中で、食べられないから、  
みな、榊、残さず食べてってよね」  
と言いながら、なつめはお茶を淹れていました。

なつめ、本当に変わったなあ、  
と、しみじみと思いながら、

わたしはおにぎりを手にとって、一口食べました。

か、辛い、なんだこれ、キムチ!?

「ああ、言うの忘れたけど、

中身は私なりに、色々趣向を凝らしたから、  
存分に味わって食べてね」

そういったなつめは、とても愉快そうに、  
わたしの、驚く顔を見ながら、  
そう言いました。

榊さんは、ほとんどりアクションせずに、  
黙々と食べ続けていました。

わたしが食べた具は、  
めっちゃめっちゃ辛いキムチ、すごくすっぱい梅、  
ウニ、豚の角煮、でした。

まあ、極端な味もありましたが、  
食材は良い物を使っていて、美味しかったです。

昼食が終わると、出発の時間となり、  
地下駐車場で、なつめの青い車に乗って、  
出発しました。

車の中で、なつめは外を見ながら、  
独り言をつぶやくみたいに、話し始めました。

「みなには、まだ話してなかったけど、  
将来の夢を、考えたんだ。

それはね、私自身を一人前の人間に戻すこと。

前にも話したと思うけど、

私の体は、病気で色んな臓器を摘出して、

だから、今回の新治療が成功して、

病気が治る、までは行かなくて、

再発を抑えられたとしても、

人並みに動けないのは、変わらないし、

再発しない保証も無いの。

だから、それを根本的に治したい。

多分、私の体だと、他人からの臓器移植は、

出来ないと思うから、

なくなつた臓器を、出来ることなら、

自分の細胞で、復活させたい。

そうすれば、拒絶反応もなく、

体を元に戻せるから。

その為に、私は医師になるって決めた。

それで自分の細胞から、臓器を再生させる研究をする。

そして、その治療法を確立して、自分を治したい。

これが今の私の、将来の夢だよ。

私の残りの命が、なくなるのが早いか、



治療法が間に合うか、命がけの競争だけどね」

なつめは、相変わらず窓の外を見つめながら、  
そう言うと、こっちを向きました。

この時のなつめは、  
すごく凛々しく見えたんです。

「ねえ、みな。

この話に比べれば、みんなの今抱えてる問題って、  
多分、小さいことだと思っただけど。

きつと、私のやろうとしていることよりも、  
もっと簡単なことでしょ？

だから、しつかりしてよね。

大体、こういう考え方、  
私、みなから教わったんだけどな」

と言って、そんななつめは、  
わたしの頭を撫でました。

どうやら、ガマンしていた気持ちが、  
全部、顔に出してしまったようです。

そんななつめに、頭を撫でられて、  
わたしは色々堪えていたこと、  
学校のこと、お別れのこと、なんか、  
とうとう、耐え切れなくなっていました、  
ポロポロと、泣き出してしまいました。

わたしは、なつめの肩に抱き寄せられて、  
慰められてしまいました。

「これで、日本での最後の勝負は、私の勝ち。私を追い詰めた、あの時のみなは、どこ行っちゃったのかなあ。あの時、泣かされたから、これでおあいこ。やっぱりみなは、すぐ泣いちゃうね、そういうとこ、小学校の頃から変わってない。でも、そんな泣き虫のみなが、私は嫌いじゃない」

なつめは、わたしの頭を撫でながら、わたしに、そう言いました。

なんか、とつても悔しいけど、今は負けでもいいから、こうしていたい、と思っ、何も言わずに静かに泣いてました。

やがて、空港が近づいてくる頃には、わたしの気持ちも、だいぶ落ち着いてきて、かなり、すっきりしていました。

「これで、ちゃんと見送ってもらえそうね。まったく、手間がかかるよ。みなは、私のライバルなんだから、しっかりしてくれないと、困るんだけど」

なつめは、偉そうにそう言って来たけど、その通りなので、わたしは素直に、お手数かけました、と謝っておきました。

高速道路が、渋滞していたせいで、その分わたしは、泣いていられたんですが、空港へは、予定より遅れて到着しました。

後30分ほどで、搭乗時間とのことで、榊さんが荷物を抱えて、搭乗手続きを済ませに向かい、わたしとなつめは、搭乗ゲート近くのロビーで、座って待っていました。

大きな荷物はなくて、手荷物は、身の回りのものだけだそうで、クマとかは、事前に発送済みとのことでした。

いよいよ搭乗準備も終わって、とうとう、出発の時間になりました。

「何かあれば、メールとかしてくれれば、見える時間が、限られちゃうから、すぐに、返事出来ないと思うけど、ちゃんと読んでおくから。そっちも色々あるとは思うけど、しっかりがんばってね、みな」

なつめはそういって、右手を出してきました。

「みなと私は、手を繋ぐところから始まったから、最後は、握手で別れよう」

もうわたしは、車の中でいっぱい泣いたから、涙は、ほとんど出てこなくて、

気持ちも落ち着いていて、笑顔でいられました。

なつめの言葉に、わたしは頷いて、  
その差し出された右手を、しっかりと握りました。

「それじゃ、1年後にね」

なつめは、最後にそう言って、  
搭乗ゲートへと、消えていきました。

なつめと榊さんが、乗った飛行機が、  
離陸して、飛び立って消えて行くのを見送ってから、  
榊さんに、連絡するように言われていた、  
警護の人宛に連絡して、  
迎えに来てもらい、帰って来ました。

こうして、なつめはドイツへと、  
旅立っていきました。

最後は、わたしが慰められたり、励まされたりとかで、  
何だか立場が、逆だったような気がするけど、  
最後はちゃんと、笑顔で送れたので、  
まあ、良しとします。

1年後、なつめが本当に元気になって戻ってきた時、  
今よりもっと、変わってるだろうなあ。

その時、わたしはどうなってるだろう、  
1年後なんて、全然想像出来ない。

なつめは、自分の将来の夢を語っていたのに、  
わたしには、今は将来どころか、  
今の学校生活すら、上手く出来てない。

もう、差がつけられてる気がする……

これからは、

なつめに、心配されないように、  
そして、なつめに負けないように、  
しっかりしなくちゃいけないな……

2010年 5月(前書き)

変更履歴

2011/01/03	誤植修正	以外	意外
2011/04/04	記述統一	一週間、二日間、三時間	
1週間、2日間、3時間			
2011/04/11	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3年	
2011/04/17	記述変更	(クラス)1組、2組、3組	
A組、B組、C組			
2011/04/21	記述統一	(期間)一日、二月、三年	
1日、2月、3年			
2011/06/02	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/07/25	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			

2010年 5月

5月3日 かなの誕生日

先週末に、かなからメールが来て、  
1日空けたから、自分の誕生日と一緒に遊ぼう！  
と言う、お願いメールでした。

クラスも、変わってしまったって、  
最近は、全く姿を見てなかったし、  
久しぶりに、ゆっくり話したいな、  
と思つて、OKの返信をしておきました。

誕生日プレゼント、どうしようかな。

快適お風呂セットを頂いたお返しもあつて、  
何がいいかを聞いて見ると、  
手料理を作つて欲しい、  
とのことだったので、今回は手料理をふるまいに、  
かなの家に、行くことにしました。

かなの家には午後に着いて、  
2人で、晩御飯の食材を買いに、  
スーパーに行つて来ました。

この日の夕食に、わたしは腕によりをかけて、  
いかにも、パーティーのご馳走、  
つていう感じのものを、作りました。

かなは今回、もてなされる方だから、  
わたしが料理しているのを、見ていました。

ケーキは、いつもの同好会から進呈された、  
大きなモンブランのホールケーキです。

よくスーパーとかで売っている、山盛りの形をしたのを、  
そのまま大きくしたような形でした。

わたしは、食事やケーキを前にして、  
ローソクの火を吹き消した後

はしゃいでみせる、かなを見ながら、  
誕生日おめでとう、と言った後に、  
今日はありがとうね、と付け足しました。

かなが自分から、自分の誕生日をして欲しい、  
と言ってきた理由が、わたしを心配してのことだと、  
分かっていたからです。

かなは、そんなわたしの言葉を聞いても、  
態度は変わらずに、まあそういった話は、  
食べた後にしようよ、とニコニコしながら流されました。

食事が済んだところで、  
かなは、まだ半分残っているケーキと飲み物を、  
リビングのテーブルへと運んでから、  
わたしと向かい合うように、ソファに座って、  
話を始めました。

食事の時とはすっかり変わって、



大真面目な顔をした、かなは、  
わたしが門埜さんと、同じクラスになったことを、  
とても気にしていて、  
もし何か仕掛けられたら、自分のせいなんだ、  
と言って、わたしに謝りました。

かなの話によると、  
門埜さんとは、一年の頃から因縁があったそうで、  
わたしと会って、考えを変える前までは、  
かなと門埜さんは、学校内での知名度や、  
勢力の大きさを、争っていたのだそうです。

とはいっても、全盛期のかなの方が人数も、  
影響力も上回っていて、かなから言わせると、  
門埜さんは大したものでもない、  
と思っていたのですが、  
ただ、手駒として集めているのが、  
危ない人種が多くて、それが目障りだったそうです。

かなは、苦笑いしながら、  
いってみれば、あたしは間接的な噂で服従させて、  
門埜は直接的な暴力と恐怖で、人を従わせていたんだよ、  
と、言っていました。

その後、かなが変わってから、  
かなについていた人たちは、かなの影響力と言う、  
大きな後ろ盾を失ってしまって、  
そのせいで、門埜さんに繋がっている人たちから、  
色々な勧誘がされていたそうです。

今は、門埜さんの影響力がかなり大きくなっていて、前のかなの勢力と、変らないほどだとか。

その権力の中枢だったのが、門埜さんがいたクラスで、一年の時はA組で、二年の今はわたしがいるE組、なのだそうです。

元A組の人たちは、門埜さんが敵視していた、かなに繋がっていた人たちに対して、出来るだけ、関わらないようにしているのだそう、それで、かなはわたしのことを、とても心配していたのが、分かりました。

そうか、だからやけに、避けられているような気がしてたんだなあ。

理由は良く分かりました。

けどそれはどうしたら、改善出来るのだろう。

今のかなは、もう前みたいな噂の操作みたいなことは、一切やめてしまっているから、

他の人を簡単に動かすのは出来ないんだ、と言って、今かなが作るうとしているものは、

まだまだ、門埜さんのグループを抑えるだけの力がなくて、まして、門埜さん本人のいるE組には、どうやっても、手が出せないんだ、と言って、力になれないことを、謝られました。

わたしには、かなのやろうとしていることが、

いまいち、良く分からないけど、  
少なくとも、わたしがかなと親しい人間である限り、  
門塾さんたちのグループからは、  
何かされるかも知れない、と言うことだけは、  
はっきりと分かりました。

かなとしては、  
こういうことに、わたしを巻き込みたくなくて、  
この話を私にしたくなくって、  
ずっと黙っていたことに対しても、  
頭を下げて、わたしに謝りました。

わたしは逆に、  
色々教えてもらったことに、お礼を伝えてから、  
わたしはどんな目に遭っても、かなとは親友だし、  
それを誰に対しても、否定したりする気もないよ、  
と、かなに伝えました。

かながどんなに、構わないって言ったって、  
そうしたら、わたし自身が自分を許せないから。

かなはそれを聞くと、わたしの両手を取って、  
もうちょっとだけ、がんばってくれれば、  
きつと、今の状況を変えてみせるから、  
と言った後、初めてかなが目指しているものについて、  
話してくれました。

「あたしが今、しようとしていることは、  
すごく簡単に言うかね、

新しいグループを作りたいんだ。

あたしはこの学校が好きだし、人生で一度しかない、高校生活も楽しく送りたい。だから、その為には邪魔になるものを、なくしていかなくちやいけないんだよ。あたしはそれを最短で実現したい。それが、正当な手段でも、そうじゃなくても。高校生の時間は短いんだから、そのうち誰かが良くしてくれるのを、待っている気もないし、あきらめたくもない。

でもそうしていく為には、1人じゃ何にも出来ない。もっと、このあたしの考えに共感して、動いてくれる子たちが、たくさん必要なんだ。それをあたしは、前みたいに、半分脅迫みたいな方法じゃなくて、この考えを理解して、協力してくれる子たちを、ずっと集めているんだ。

あともう少しのところまでは来てるから、これが動き出せば、みんなが望む、学校生活が、送れるように出来るから、もうちょっとだけがんばって、みなも。

このグループの、最初の目標はね、門塾を排除することだから。あの女だけは、絶対に許さない、あの女は、害悪そのものなんだよ」

わたしはかなに、高校生活って言うのは、

学校での生活だよね、  
生徒会とかから、学校に対して働きかける、  
とかじゃダメなの？  
と聞きました。

「まあ、それが本来の道筋だけど、それは、  
真面目な子とか、頭の良い子の考え方だね。  
それだと、学校にとって不利益になることは、  
どうやっても変えられないんだ。

多分、門禁のこともそう、あたしたちにとっては、  
害悪でしかないあの女の実在は、  
学校側にとって見れば、大事な財源になってる。  
先生たちの下の組織でしかない、生徒会じゃ、  
全然役不足ってこと。

もっと、即効性のある確実な力を集めなくちゃ、  
色んなものは守れない」

かなは、今までにない真剣な表情をしながら、  
そう言っつて、わたしを見ました。

わたしは、かなの考えていることが、  
とても危険なんじゃないかと、不安になってきました。

そんな顔をしていたわたしを見た、かなは、  
「みなもが考えるような、危ないことはしないよ。  
むしろ、そういう危ない子たちから、  
みんなを、守れるようにするのが、  
最終的な目標の1つでもあるしね」

と、笑って言いました。

そして最後に、かなは、

「みなもに、気づかされる前までは、

自分の望むものだけを、手に入れようと、

周りの人を、言ってみれば利用してきたんだ。

結果的にはそれでも、利益があつた人も、

いたかも知れないけど、

でもそれは、勝手にそうなっただけで、

やっぱり、あたしの為でしかなかった。

今はね、みんなが望んだことを実行したいんだよ。

そして出来るだけ、多くの子が、

楽しい高校生活を、送れるようにしたい。

これが、あたしの目標。

みなもが気づかせてくれた、

本当のあたしが、目指そうと思つたもの」

と、わたしに告げてから、微笑みました。

そのかなの笑顔は、何も含みもない、

素直な感情を出している顔だ、

と、わたしは感じました。

この日は、この会話の後、

家へと帰って来ました。

正直言って、わたしには、

かながやるうとしてしていることが、

正しいことなのか、どうか、

良くは分かりませんでした。

でもそれが、多くの人が望むことをする、  
そういうことであれば、それはいいのかな、  
と思いました。

ちょっとひっかかるものも、感じますが、  
それでもわたしは、かなを信じることにします。

でもその前に、かなの計画が叶うまでは、  
わたしはあのクラスで、  
自分の身を守らないといけない。

そのうち、わたしが標的にされたりするのかな……

なつめだって、がんばっていたんだから、  
わたしも、そんなのには負けないように、  
とにかく、がんばるしかない！

5月5日 絵の続き

今日は1日、久しぶりに去年から手付かずになっていた、  
絵の続きを描きに、河原へ行って来ました。

天気も雲ひとつない、暖かな晴天で、  
ヒョウちゃんにも、会えそうな予感がしました。

お昼ご飯を、ちょっと早めに家で食べてから、

正午には、いつもの場所へと着きました。

描きかけの絵は、今の風景と比べても、特に目立った違いはなくて、

わたしは早速、作業に入りました。

出来れば、これを仕上げて、

忍さんに見てもらおうと思ったからです。

忍さんなら、的確な意見とか、

アドバイスとかをくれると思うし、

出来れば、褒めてもらいたいし……

つてのもあるけど、

これは、ちょっと自信がないです。

鉛筆画よりも、こっちの方が、

どうも、思い通りにならなくて、

なかなか進みません。

色の方も、わたしが思っている色が出なくて、

うーん、と唸っていたら、

上流の方の道から、黒い影が近づいてきました。

久しぶりのヒョウちゃんです。

ヒョウちゃんは、特に変わりなく、

威風堂々と、道路の真ん中を歩いて、

わたしのところまで、やってきました。



今日は、いつものまずい水と、

ご馳走ではないけど、鶏のささ身を持ってきました。

もちろん、下手に調理すると、

食べてくれそうもないから、生です。

ヒヨウちゃんは、やっぱりまず水を飲んだ後、

かなり吟味してから、ささ身に口をつけていました。

でも食べ始めたら、かなりがつついていたから、

お腹が減っていたに、違いありません。

わたしは筆をおいて、そんなヒヨウちゃんを、  
隣で眺めていました。

ヒヨウちゃんは、この河原に住んでいて、

多分、ヒヨウちゃんにかなう敵なんていなくて、

自由気ままに、生きているんだろうなあ。

いつもご飯とかは、大変そうだけど、

ちよっと、その自由さが羨ましいな、

とか思いました。

ヒヨウちゃんはささ身も水も、きれいに全部食べてから、

珍しく、しばらくそこに寝そべっていました。

わたしも、思うように進まない絵を切り上げて、

シートを引いてから、河原に横になると、

青いだけの空を、何も考えずに見つめていました。

空が青から茜色へと、変わっていくのを見ていたら、いつの間にか、ヒヨウちゃんはいなくなっていました。

その後わたしは、絵の道具を片付けて、スーパーに寄ってから、家に帰りました。

明日から、少し憂鬱な学校生活が、また戻ってきます。

明日学校へ行ったら、嫌な問題が解決してるとか、そついう何か、予期せぬ良いこととか、起きないかなあ……

5月6日 転校生が来ました

こんな中途半端な時期に、うちのクラスに、転入生がやってきました。

小柄な鈴木先生とは対照的に、とても背の高い、その人は、教室へ入って来た時も、

先生が黒板に名前を書いて、紹介した時も、先生から一言挨拶するようにと、小声で言われた時も、怒ってるみたいにかわい顔で、ずっとこつちを、睨んでいるみたいです。

自己紹介も、言われたから仕方なく、言ってる、と言う雰囲気、

その人は、一言だけ自分の名前だけを言いました。

間宮 命だ、と。

黒髪のショートカットで、  
足とかいかにも鍛えてる感じで、  
いかにも運動とか得意そうな雰囲気です。

それから、制服で目を引いたのは、  
女子ではほとんどいない、ネクタイをしていたことと、  
制服の着方が適当で、ボタンもけっこう留めてなくて、  
ワイシャツとかも、ヨレヨレなところでした。

でも、それよりも、その鋭い目つきが、  
何よりも大きな特徴です。

自己紹介が2秒で終わった後、  
後ろの方の席から、ブーイングが上がったけど、  
間宮さんはそつちを睨んで、黙らせてしまいました。

なんか、すごそうな人だなあ、とか、  
この人のそばの席になったら、何かと大変そうだなあ、  
なんて、他人事のように思っていたら、  
まさかの、わたしの隣になってしまいました！

私の隣は元男子だったから、女子が入りはしないよね、  
と思っていたので、これには驚きました……

先生は間宮さんに、わたしの隣へと座るように言っと、  
まだ教科書とかが、準備出来ていないから、  
午前中の間だけは、隣の人は見せてあげて下さい、

と言いました。

間宮さんが、近づいてきただけで、わたしは何だか、緊張してきました。

この感覚、ヒヨウちゃんとか、  
榊さんのと、おんなじ感じです。

何かされる、はずはないんだけど、  
身の危険を感じる、殺気のような、  
そういうのを感じるんです。

そして、乱暴に椅子を引いて座った間宮さんは、  
気にくわなそうな表情で、周りを見渡した後、  
誰もが、目を合わせようとしないのを見て、  
すぐに腕を枕にして、机に伏せてしまいました。

わたしは、この予期せぬ現実に動揺しているうちに、  
最初の挨拶をするタイミングを、  
外してしまいました……

もうこの日は、授業中の記憶はほとんどなくて、  
ずっと、緊張しっぱなしになってました。

授業が始まるたびに、  
教科書を、間宮さんの机の方に置くのですが、  
声をかけづらくて、何も言えず、  
間宮さんの方は、教科書を見る気もほとんどないようで、  
こっちを向くこともないまま、  
午前中は終わりました。

昼休みになったら、すぐに教室を出て行ったから、ここでやっと、落ち着くことが出来ました。

門塾さんのグループの男子たちは、多分、本人がいなくなったからだと思うけど、大声で、うざいとか、むかつくとか、言っていました。

昼休みが終わって、チャイムがなった後、間宮さんが教科書一式を持って、帰って来ました。

午後の授業からは、もう教科書を見せなくて良かったから、多少は気が楽でしたが、でも何とも言えない緊張感は、ちっとも治まらなくて、やっぱり授業の内容は、まるで頭に入りません。

授業が終わって放課後になると、間宮さんは、あっという間に教室を出て行きました。

これでやっと、わたしの緊張も解けました。

これが、これから毎日続くのかあ。

もう1日だけで、いっぱいいっぱいなのに、わたしは一体、どうしたらいいのでしょうか……

5月10日 バイト一周年！

久しぶりに、嬉しいことがありました！

学校が終わって、航海堂へとバイトに行くと、忍さんから、バイト終わってから時間ある？と聞かれて、大丈夫です、と答えたら、そう、じゃあ後でね、とだけ返されました。

何の用だろう、と思いながら、仕事していました。

そのうちに、閉店時間になって、バイトの時間が終わったので、わたしは忍さんを、更衣室で待っていました。

すぐに忍さんはやってきて、  
晩ご飯食べに行くよ、と言われて、  
一緒について行くと、航海堂の近くにある、  
ちよつと高そうな、イタリア料理のお店に入りました。

わたしは外食なんて、まずしないし、  
行ったとしても、全国チェーンの安いファミレスなので、  
こつという高そうなお店は、なんか緊張します。

忍さんが予約してあったみたいで、  
すぐに、奥の方の席に通されました。

「みなもちゃんの、バイト一周年記念ってことで、  
私からのプレゼント。」

ま、普通の食事だけだね、

最後にケーキも出るから、期待してて」と、忍さんは言いながら、食前酒を飲んでいました。

今日は、バイトの一周年記念!?

すっかり忘れていました。

わたしはそういう、記念日とか、無頓着なので、良く忘れます。

忍さん、覚えていてくれたんだ。

せっかく忍さんが誘ってくれたんだから、今日は楽しく過ごそう、そう決めました。

わたしの前にも、

忍さんが飲んだのと同じグラスがあつて、これ、お酒ですよね？

と尋ねると、

「そつちのはノンアルコールワインだから、大丈夫」

とのことで、かなの家での、忘れられない、チョコレートケーキの記憶が蘇りましたが、ちよつとだけ飲んでみたら、お酒っぽいけど、あれよりも全然薄いから、大丈夫でした。

料理はコース料理で、ピザがなかったのが意外でしたが、どの料理も、とても美味しかったです。

食べる時のマナーとかは、新しい料理が出るたびに、

忍さんが教えてくれたので、変なことしないで済みました。

デザートが出てくる番になって、出てきたのは、大きなティラミスでした。

忍さんは、4等分に切り分けられていたのを、そのうち2つを小皿に乗せて、1つをわたしの前に置いてから、口元は笑っているけど、真剣な目をしながら、話し始めました。

「最近のみなもちゃん、随分元気だから、なんかあったかなって、思っ

みなもちゃんって、落ち込む事があると、変に空気になるから、判りやすくても、私に話そうとしてないから、まだその時じゃないって、思ってるんだけど、それでいい？」

わたしはここで、どうしようかと迷いました。

忍さんに、心配されていたんだから、話してしまおうか、とも思ったけど、いくら、頼ってもいいって言われてるからって、本当に何でも話していたら、前のなつめと、何にも変わらなくなってしまう。

それに今の状況は、相談のしようがない。

きつと、言われた忍さんを、



困らせてしまっただけだ、

まだ、自分の力だけで、がんばる。

そう決めて、わたしは、頷きました。

「わかった。

じゃ、この話はおしまい。

このこのティラミス、けっこう評判いいから、  
食べてみてよ」

わたしの返答を聞いて、

忍さんはあるという間に、態度を切り替えて、  
もうすっかり笑顔に変わって、  
美味しそうに、ティラミスを食べてました。

このティラミスは、とても美味しくて、  
結局、わたしが3個食べてしまいました。

それを、食後酒を片手に忍さんは、  
楽しそうに見ていました。

でも、わたしが食べ終わった後に、

「あ、みなもちゃん、言い忘れたけど、  
このティラミスねえ、カロリー高いよお」  
って言うのは、ひどいと思いました！

でも、ご馳走してもらったし、

なにより、忍さんとゆっくり話が出来たから、  
すごく楽しかったです。

おかげで、気分転換できました。

ありがとう、忍さん！

5月14日 ケンカ？

間宮さんが来てから、1週間が経ちました。

この人、あんまり学校とか来ないんじゃないかな、とか、ちよつと期待していたんですけど、意外と真面目で、ちゃんと毎日来ています。

どうやら、周りで話している噂を聞くと、陸上部に入部していて、朝練とかもしているようです。

でも、いまだにクラスの人とは、誰とも、会話しているのを見ていません。

話をしないといけなくなった人たちが、何回か声をかけてきたのを、見ていたけど、間宮さんは、その相手を無言で睨んで、その用事を済ませて、会話にならずに終わりました。

そういう間宮さんの態度が、門塾さんの目についた、のかは分かりませんが、お昼休みに、教室へ戻ってくると、いつも門塾さんと一緒にいる男子たちが、

間宮さんの席の周りに、集まっていました。

わたしは、自分の席に近づけなくて、仕方なく、後ろのロッカーのところ、様子を見ていました。

どうやら、男子たちは、

間宮さんを勧誘しているようで、

間違いなく、門塾さんの指示だな、

と思いつながら、見ていました。

でも間宮さんって、雰囲気から言っても、

明らかに、一匹狼って感じなので、

誰かをつるんだりとか、まして誰かの下につく、

とか、想像しづらいよなあ、と考えていたら、

いつも通り、ずっと黙っていた間宮さんは、

唐突に席を立ちあがって、

声をかけていた男子の方へ、近づきました。

そして、すれ違った途端、

その男子は、なぜか床へと倒れていました。

間宮さんは、そのままバッグを持って出て行ってしまい、

この日はもう、教室に帰って来ませんでした。

残された男子たちは、倒れた人のことをからかっていて、

一方その人は、ちよっとこけたただけだ、

とか言って、反論していました。

でも、特に歩いてもいなかったのに、

転ぶのつて、不自然だよなあ。

でも、倒れたのは事実だったし、  
どうも良く分かりません。

一体、あれは何だったんだろう……

5月21日　その後の間宮さん

先週の出来事があってから、勧誘は諦めたのか、  
あの男子たちは、間宮さんに近づかなくなりました。

でもその代わり、多分ですが、  
間宮さんもわたしと同じ、門塾さんから、  
標的にされる側になったのかも知れないけど、  
見ている限りは、特に何もされていないようです。

わたしの方も、今のところ、  
直接誰かが、嫌がらせしてくるのではないけど、  
やっぱり誰からも、話しかけてはもらえませんが。

がんばって、こっちから声をかけても、  
露骨に嫌がられているのが、判ってしまい、  
それ以上は、話しかけられません。

直接、嫌がらせとか、  
いじめられるのも辛いけど、  
こういうのも、地味にきついなあ、

と、感じます。

一方、となりの間宮さんは、わたしとは正反対で、誰も声をかけてこない方が、好都合なようで、休み時間はずっと寝てるし、

お昼休みは、時間いっぱい帰ってこないし、放課後は部活なのか、すぐに教室を出ていきます。

間宮さんの、刺すような眼差しは、今でも変わっていないくて、

たまに、すれ違う時とかは、かなり怖いです。

何度かわたしとも、目が合ったことがあるけど、何もしてないのに、殺気みたいな気迫を込めて、射抜くような目で、睨まれました。

わたしは、目が合ったと思ったら、

すぐに俯いてしまうので、どうか判らないけど、間宮さんは、自分からは視線を外さないみたいで、大体、間宮さんとすれ違う人の方が、見る方向を変えているのが、判りました。

どうしていつも、この人は、

こんなに周りを威嚇しているのかなあ。

多分、疲れるんじゃないかな、と、思うんだけど、

そんなこと、とても本人には聞けません。

聞けないんだけど、ちょっと気になります……

5月25日 中間試験、始まりました

二年生になつて、初のテスト、  
中間試験が始まりました。

残念だけど、少なくとも一学期の成績は、  
もう諦めています。

あまりにも環境が悪すぎます。

周りの人たちからは、相手にしてもらえず、  
となりの人が怖くて、緊張してしまつて、  
全然授業の内容なんて、頭に入りません。

なつめから教わつた、テスト対策の勉強方法で、  
なんとか、赤点だけは凌がなくては。

と、思っていたんですけど、  
初日にして、もうダメっぽいです……

5月27日 中間試験、終わりました

中間試験、終わりました。

とりあえず、テスト結果のことは忘れて、

明日からの、試験休みと土日で、  
絵の方を、忍さんに見せられるところまで、  
仕上げちゃおうと、思っています。

今年の夏休みは、早くも補習の夏の予感です。

あーあ、どうしよう……

2010年 6月 その1(前書き)

変更履歴

2011/04/04	記述統一	一週間、二日間、三時間	
1週間、2日間、3時間			
2011/04/11	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3年	
2011/04/17	記述変更	(クラス)1組、2組、3組	
A組、B組、C組			
2011/04/22	記述統一	第一、第二、第三	第1、
第2、第3			
2011/06/03	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/06/03	記述統一	一つ	ひとつ
2011/06/13	誤植修正	始め	初め
2011/07/26	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			
2011/09/06	誤植修正	位	くらい



2010年 6月 その1

6月1日 衣更え

今週に入ってから、早くも梅雨に入りました。

去年と違って、今年は梅雨入りが早く、昨日からずっと雨です。

まあ、雨も嫌いではないから、良いんだけどね。

予報によると、長雨は今週だけなそうです。

来週からは暖かくなって、

あまり、梅雨らしくない天気になるとのことで、早く暖かくなって、プールにならないかなあ、と期待しています。

というわけで、まだ今日は肌寒いくらいなのですが、衣更えの移行期間に入りました。

うちのクラスで、初日から夏服の格好で登校してきたのは、門塾さんと、間宮さんの2人でした。

門塾さんは、ブレザーの代わりに、真っ白いロングカーディガンを着ていました。

イメージは、お姫様なのでしょうか。

取り巻きの人たちとか、  
門塾さんに、気に入られようとしている人たちが、  
その格好を見て、早速ご機嫌伺いをしていたのには、  
なんだか呆れました。

群がっている人たちも、なんだかなあって感じだけど、  
お世辞に決まっているのに、  
まんざらでもない顔してる、門塾さんもどうかと思います。

あの人、かなり目立ちたがり屋っぽいから、  
常に周りから、ちやほやされていたんだろうなあ。

この辺は、昔のかなも同じだったかな？

それとは対照的に、間宮さんは、  
真っ黒のVネックセーターに、タイなしです。

ただでさえ、威圧感があったのに、  
黒い服を着ていると、さらに近寄りがたいです。

前に読んだ雑誌に、黒い色を好む人って言うのは、  
他人を遠ざけたいと思っていたり、  
人と距離を取りたい願望の表れだって、  
書いてあったような気がします。

まさに、今の間宮さんそのものです。

わたしは少なくとも、この肌寒い長雨が終わるまでは、  
冬服のままにいる予定です。

それから、もう一つ、  
とても残念な出来事がありました。

それは、中間試験の結果で、  
試験教科の半分が、補習のリストに名前が入っていました。

まさかここまで悪いとは思わなかった。

ひどい、ひどすぎます……

6月7日 体育祭の出場競技

今週末が体育祭の当日、というぎりぎりまで、  
やっと出場競技が決まりました。

先週のHRでも、出場競技を決めようとしたんだけど、  
今のクラスは、一年の時のクラスとは大違いで、  
誰も協力しようとしていなくて、  
結局、何も決まらずに終わってしまい、  
今日に持ち越されたんです。

鈴木先生も、いつになく大きな声で怒っているような  
ヒステリーみたくにも見える感じで、  
かなり必死なのは判りました。

司会をしていたクラス委員長、  
この人も、門塾さんのグループに入っているんですけど、  
このままだと決まらないので、

推薦と多数決で決める、と言い出すと、それを待っていたかのように、

元A組の人たちから手が上がって、

どんどん競技の参加者に、名前が書かれていきます。

でも推薦されている人は、

みんな、門塾さんのグループじゃない人ばかりで、

どうも事前に、委員長と示し合わせていたみたいです。

これは、いじめとはちがうのかも知れないけど、

何となく門塾さんの手口が判ってきました。

こうして、半ば強制で決められた競技に、

わたしはなんと、400mリレーと、

水泳の200m自由形リレーを、

やることになってしまいました。

泳ぐ方はまだ自由形だから、潜水で泳げば大丈夫かな、

と思ったけど、400mリレー!?

多分このクラス内でも、ビリを争うくらいの遅さなのに、

これは有り得ないです……

もっと他の種目にも、名前を書かれたんだけど、

それらは、同時に参加できない種目だったので、

危うく、逃れることができました。

間宮さんも、やっぱり目をつけられていたようで、

わたしよりも、もっと多くの競技に推薦されていました。

わたしが横目で、ちらつと様子を見てみると、  
間宮さんは、机に伏せてはいたけど寝てはいなくて、  
ずっと黒板に鋭い視線を送っていました。

その姿は、まるで獲物を狙う獣のようです。

結局、十種類以上の競技の中から、  
同時に参加できないものが削られて、  
400mリレーと、200m走と、400m走と、  
水泳の50mクロールと、200m自由形リレー、  
これだけ残りました。

2つのリレーは、クラスで1チームだから、  
わたしと間宮さんは、同じチームです。

間宮さん、陸上部に入ったくらいだから、  
足は速いんだろうけど、泳ぎはどうなのかな。

潜水だけは、誰にも負けない自信があるので、  
ちよつと、競争してみたいような気がします。

でも、もしわたしが勝っちゃったら、  
すごく恨まれたりとか、報復とかされないかなあ、  
それは怖いなあ……

競技が決まるのを、黙って見ていた間宮さんは、  
1回だけ、左後ろの門塾さんの方に、  
顔を向けましたが、その後は顔を伏せて、  
寝てしまいました。

腕を枕にして、机に寝る直前、横の席のわたししか、判らなかつたと思うんですが、口元しか、見えなかつたけど、なんだか間宮さん、笑っていたような……

そんな風に見えたのは、わたしの気のせいかな。

結局、体育祭の競技に参加している実際の人数は、クラスの半分くらいしかない状態でした。

もちろん門塾さんを含めた、その取り巻きの人たちや、門塾さんに近い人たちから優先して、外されているのが、判りました。

それを見ていたら、ふと日本史で習った、徳川幕府の、親藩・譜代・外様大名を思い出しました。

きっと、わたしや間宮さんは、門塾幕府では外様大名なんだなあ、なんて。

この状況を見て、先生は何とも思わないのかな、と思つて、鈴木先生を見てみると、やっと問題が1つ片付いた、みたいな表情で、黒板なんて見ていなくて、何かを必死に書いていました。

先生も色々、大変だとは思つけど、教師の本分は、生徒を教育すること、なのではないのでしょうか。

この先生を見ていると、それが一番大事なようには、

とても思えません。

やっぱり、かなの言っていた通りで、自分が望むものは、自分の力で何とかしないと、ダメなのかも知れないな、と感じました。

でも、門塾さんたちにそういう扱いを、されたくないからって、

頭を下げて、ひたすら言うことを聞いたり、お世辞とか言ったりするのは、

いくらひどい目に遭わされなくて済むとしても、わたしには、出来そうもありません。

かなも、なつめも、戦ってきた相手だから、

わたしだけ、負ける訳にはいかない、そう思います。

とりあえず、400mリレーはごめんなさいだけど、200m自由形は、潜水50m目指してみようと思います。

わたしだって、門塾さんたちには負けませんから！

6月9日 早くもプールです！

天気予報の通り、長雨は1週間で途切れて、まだまだ夏は先のはずなのに、今週はかなり暖かくて、本日、早速体育がプールになりました！

今年は、体育祭で自由形の選手にもされているから、ここは何としても、50m泳ぎきって、目に者見せてやりたいです。

だから、授業でも50mを潜水で泳ぐ練習をする為に、本当はクロールの授業なんだけど、それはシカトして、飛び込んでずっと潜水で泳ぎました。

そしたら、真ん中辺で前の人が遅くて追いついてしまい、仕方なくゆっくり泳いでいたら、さすがに息苦しくなって、途中で息継ぎしてしまいました。

一度、頭を水面に出してしまうと、もう全然遅いのは、今でも変わってないので、今度は逆に、前の人に離されてしまいました。

二年の体育の先生は、一年の時と同じなので、わたしが向こう側まで泳ぎきって、スタート地点のところへ、歩いて戻る途中で、先生に声をかけられました。

てつきり、叱られるのかと思ったら、「おお、お前、今年は初めっから本気出してるな」とか言われて、ちょっとイラッとなりましたが、この後先生は、泳ぐ速さでコースを分けてくれたから、少しはこの先生のことを見直しました。

門塾さんの声が聞こえたので、そっちを見ると、どうやら、泳ぐのは苦手のようで、遅い方の列に並んでいました。



この人、髪が痛むとか、  
ずっと文句ばかり言っていました。

なら休めばいいのに。

わたしはもちろん、一番右側の、  
最速の2列のレーンのうちの、左側に並びました。

その隣のレーンには、間宮さんが並んでいました。

もしかしたら、いきなり対決のチャンスかも、  
と思つて、ドキドキしながら、

前に並んでいる人の数を数えると、  
1人だけわたしの列が多くて、ちよつとがっかりです。

でも、間宮さんの泳ぐところが見れば、  
それだけでもいいかな、と思つていたら、  
間宮さんたちが、泳ぐ番になった時に、  
わたしの前の人が、唐突に気分が悪いと言つて、  
プールのへりから下りてしまい、  
わたしは、間宮さんと同じ列になりました。

間宮さんは、わたしの方をちらつと横目で見た後、  
ゴーグルをつけて、飛び込む体勢に入りました。

わたしもすぐに準備して、先生の笛の合図を待ちました。

この列への、スタートの合図の笛は、  
今までのテンポよりも、時間が遅くて、

けっこう飛び込む姿勢のまま、待たされた気がしました。

そして、やっと笛の音が聞こえてきて、  
2人同時に飛び込みました。

飛び込んだ直後は、身長と足の筋力の違いなのか、  
間宮さんが、体半分くらいリードしていて、  
潜水中の速度は、わたしよりもちょっと速いです。

そしてだんだんと、その差は開いていって、  
10m地点では、体1つ分の差になっていました。

それにしても間宮さん、泳ぎ方がきれいだなあ。

身長もあって、手足も長いから、  
豪快な感じだけど、無駄がない泳ぎ方をしている、  
水泳、そんなに詳しくないから良く判らないけど、  
そんな気がしました。

20m地点を越えたところで、  
間宮さんは水面に出て、クロールに切り替えました。

さすがに、息継ぎしながらだと、  
速度は遅くなって、わたしはその差を縮めていきました。

クロールの泳ぎもすごく上手くて、  
わたしにはとても出来ない、流れるようなフォームで、  
すいすいと泳いでいます。

けど、わたしの潜水の方が速くて、

35m地点で、ついに追いついた！  
と思つたら、息、息が、苦しくて、死んじゃう……

結局、40mを超えたところで、  
わたしは頭を上げてしまい、  
その後は一気に引き離されて、終わりました。

向こう側に泳ぎ着いて、プールから上がる時に、  
スタート地点の人たちが、こつちを見ながら、  
色々話しているのが聞こえてきたけど、  
それよりもびつくりしたのが、  
プールサイドに、間宮さんが待っていたことです。

そして間宮さんは一言、  
「お前、けつこう速いな。」

体育祭の時は、死んでも頭を上げるなよ」  
と言い捨てて、さつさと戻っていきました。

し、死んでもつて、本当に死んじゃうんですけど、  
でも頭を上げて、殺されそうな感じだし、  
下手に本気で泳いだのは、自爆だったかも！？

まさか、冗談だよねえ？

やっぱり、間宮さんに挑んだりしなければ良かった、  
のかなあ……

でも、後10mがんばれば、泳ぎ切れるんだから、  
もう少しだけガマンできれば、  
と考えながら、先生の前を通り過ぎた時に、

「おい、お前。」

潜水が速いからって、無理はすんなよ。

じゃないと、死ぬぞ」

と、ありがたい忠告を頂きました。

わたしは心の中で、でもやれなくても死ぬんです！  
と反論しつつ、もう5回ほど練習で泳ぎました。

もう間宮さんとは、同じ列に当たらなくて、  
競争にはなりませんでしたが、  
わたしの潜水は、どんなにがんばっても、  
40mまでしか、もたないことが判りました。

これだと、死刑決定です。

なんとか、もう10m分の酸素が欲しいです……

6月12日 体育祭

ついにこの日が来ました、体育祭です。

去年は楽しい思い出だったけど、  
今年は、命がけの戦いになりそうです。

あのプールの授業の後、家でも色々特訓しました。

深呼吸して、もっといっぱい空気を吸い込む練習とか、  
息を止めたままで、運動してみたりとか。

まあ、あんまり効果があったとも思えなくて、  
だいたい、眩暈がしてきたり、  
周りが暗く見えてきたりして、  
本当に命がけでやったけど、  
全然、時間は延びませんでした。

……後は、もう気合しかない。

今日は去年とは大違いで、  
自分が出ないといけない競技以外、眼中に無いです。

ですけど、間宮さんの出る競技はちょっと気になって、  
200m走と400m走は、見ていました。

間宮さん、両方とも余裕の1位でした。

走ってる姿も、かっこいいです。

ああいう風に走れたら、走るのとか楽しいのかも……

でも今のわたしには、とても無理です。

そうこうしている内に、わたしの最初の出番が、  
ついに来てしまいました。

まずは午前中の、400mリレーです。

これは、一緒に走る人たち、間宮さんも入っていますけど、  
には、申し訳ないけど、ダメダメなので、

選手の入場前に、事前にメンバーへ謝っておきました。

そしたら、他の間宮さんを除く2人は、  
周囲を気にしつつも、自分たちも同じようなものだから、  
と、答えてもらえました。

でも間宮さんだけは、そんな会話は完全無視です。

入場時間となって、それぞれのスタート位置へと分かれて、  
トラックのうちのクラスのレーンで、  
配置に着いたところで、レースがスタートしました。

わたしは第3走者で、

わたしのところに、バトンが来るまでは、  
なんとか、集団の後を追いかけている感じでしたが、  
それをわたしは、一気に台無しにしまいました。

精一杯走ったんですけど、やっぱりダメでした……

ダントツの最下位で、次の間宮さんへとバトンを渡すと、  
間宮さんは、すごい速さで走り出しました。

この前に、2つの競技で走っているとは思えない速さで、  
一気に差を縮めていったんですが、  
あまりにも開きすぎた差は、巻き返せなくて、  
結果は、2位とは僅かな差で惜しくも3位でした。

間宮さんは、走り終えても息ひとつ乱さずに、  
かなり怖い顔してました。

そして競技が終わって、席へと戻っていく途中、わたしの肩に、ずしりと重く何かか押し掛かって来て、何かと思って振り向くと、それは間宮さんの手でした。

間宮さんはわたしの背後に来て、追い抜きながら、

「この挽回は、水泳で見せるよ」と、低い声で脅されました。

ああ、やっぱり怒ってるんだ、

最初にダメですって、謝つといたのに……

もう、こうなったら本当に、

死ぬ気で泳ぐしかありません。

午前中の競技は終わって、お昼休みの時間になると、わたしは1人で屋上に行つて、食べてました。

ここに来ると、まだ、なつめちゃんだった、なつめと、一緒に食べた頃を思い出します。

そして、自分で自分自身を変えた、

なつめのことを思い出して、わたしもがんばろうって、いつもここで、気合を入れ直しているんです。

今日のところは、とにかく午後の自由形リレーだ。

何としても、50m泳ぎ切るぞ！

わたしは、気合を入れ直してから、教室へと戻ってから、水着を持って、

プールへと向かいました。

午後になって、自由形リレーの開始時刻が近づいたので、更衣室で着替えて、屋外の50mプールの、プールサイドへと行くと、既に間宮さんは来ていました。

ここでも泳ぐ順序は400mリレーと同じで、わたしが3人目で、間宮さんがアンカーです。

他の2人は、まだ来ていなくて、うちのクラスは、わたしと間宮さんだけです。

間宮さんは、

「判ってるな」

と言いたげな顔で、わたしを睨んでいて、ここで初めてわたしは、その間宮さんの視線を、そらさずに、受け止めました。

そして、はつきり分かるように、しっかり頷きました。

もう怖がってる場合じゃないし、泳ぎだったら、互角の強さだし！

と、心の中で必死に唱えながらですけど。

ついでに、ちょっと体は震えてしまいました。

これでもう、後はありません、

どっかで聞いた、背水の陣、というやつです！



そんなわたしを見て、間宮さんは薄笑いをしていて、ああ、きつとバカにされてるんだ、泳いだ結果で、見返してみせる、と、わたしは心に誓いました。

この後、残りの2人の人たちも来て、リレーは始まりました。

この後から来た2人は、泳ぎは普通だったので、うちのクラスは、4位でわたしの番になりました。

3位のクラスは、大した相手でもなくて、20mくらいで抜きました。

ただ、2位のクラスの人は、どうやら水泳やってた人っぽくて、けっこう速かったけど、間宮さんほどではなくて、35m超えた時に、追い抜きました。

もうこの時、1位のクラスは、アンカーが飛び込んでるのが見えて、そろそろ、息がもたなくなる頃だけど、ここで上がったら、2位のクラスには確実に抜かれる！と思って、必死でそのまま潜水し続けました。

45mまで来ると、だんだん音が遠のいてきて、不思議と、苦しさが弱まってきました。

最後は、目の前の風景が、どんどん暗くなりながら、浮き上がって行って、ゴールの壁にタッチしました。

それと同時に水の振動を感じて、アンカーの間宮さんが、飛び込んだのを確認したところで、何も見えなくなつて、何も聞こえなくなつて、意識がなくなりました。

わたしが目を覚ますと、そこは保健室のベッドでした。

どうやら酸欠で気を失つて、ここに運び込まれたみたいで、ベッドの脇には、なぜか、かなちゃんがいました。

かなちゃんは、気がついたわたしを見て、すぐに、保険の先生を呼びに行き、その後わたしは、先生から問診、と言うよりも、色んな質問をされました。

その結果、どうやら大丈夫と判断された途端、今度はこっぴどく叱られました。

10分くらい怒られてから、しばらく休んで行きなさい、と言い残して、先生と入れ替わりに、かなちゃんが帰ってきました。

かなちゃんは、わたしの着替えとか、荷物を持って来てくれました。

わたしはかなちゃんに、お礼を伝えた後、リレーの結果が、どうなったのかを聞いてみました。

かなちゃんによると、

わたしが意識を失ったのを、最初に見つけた人が、すぐに飛び込んで、救助されたんだそうです。

でもその人が、アンカーだったから、それで、うちのクラスは棄権になったって、言っていました。

わたしを助けたから、棄権になるってことは、もしかしてわたしを救助した人って、間宮さん!?

どうやらわたしは、殺されると思っていた人に、命を救われてしまったようです。

これは、とても感謝すべきなんでしょうけど、今ひとつ、その原因を作った人でもあるので、どうも複雑な心境です。

かなちゃんは、変な顔をしているわたしを、不思議そうな表情で、見つめていました。

この日は、久しぶりに、かなちゃんと一緒に帰りました。

やっぱり、親しい人と一緒に帰るのは、とても楽しいです。

かなちゃん、早く時間に、ゆとりが出来てくれないかなあ、そうしたら、一緒に帰れるのに。

帰りの道中で、かなちゃんが、  
ちよつと気になることを言っていました。

「みなも、しばらくは人気者になれるよ  
って。」

どういう意味だろう、まあ、いつか。

とにかく、もう今日は疲れたし、  
保険の先生からも、今日は安静にしていなさい、  
と、言われていたのもあって、  
バイトは、事情を説明してお休みして、  
まっすぐ家に帰りました。

あれがプールでなくて、河だったら、  
多分大丈夫だったような、気がするんだけどなあ、  
それは、気のせいかな……

2010年 6月 その2(前書き)

変更履歴

2010/11/27	誤植修正	県予選大会	地区予選大会
2011/04/11	記述統一	1年生、(中学)	2年、高校3年
2011/04/14	記述修正	一回り	ひと回り
2011/04/15	記述統一	(回数)	1度、2度、3度
		一度、二度、三度	
2011/04/21	記述統一	(期間)	一日、二月、三年
		一日、2月、3年	
2011/06/04	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
		二つ、三つ	
2011/06/28	誤植修正	今だ	未だ
2011/07/27	記述統一	一人、二人、三人	一人、
		二人、三人	

2010年 6月 その2

6月16日 忍さんに絵を見てもらいました

本日は創立記念日で、学校はお休みなので、  
体育祭の日に休んだから、その分も取り返す為、  
終日、航海堂でバイトです。

今日は、忍さんにわたしの絵を、  
見てもらおうと思って、  
前に、時間がある日を聞いてみたんです。

そしたら、平日の昼間なら、  
そんなに忙しくもないから、大丈夫、  
との事だったので、今日バイトがてら、  
絵を見てもらう事にしました。

忍さんは、午後に時間を作ってくれて、  
わたしもその時間に合わせて、バイトを外れて、  
今まで書いた、スケッチブックやクロッキーの中から、  
ちよつとは、自信があるのを持ってきて、  
忍さんに、見てもらいました。

忍さんは、まずクロッキー帳を手にとって、  
1ページずつ、無言で眺めて、と言うより、  
チェックしてるかのような、厳しい雰囲気、  
とても気軽に声を掛けられません。

わたしはだんだん緊張してきて、

思わず、面接試験を受けているような気持ちで、背筋を正して、忍さんの返答を待ちました。

クロッキー帳を一通り見終わると、

今度は、水彩のスケッチブックを手にとり、

これも真剣な眼差しで、全ページを確認していました。

スケッチブックを、テーブルに置いた忍さんは、ふうつと、息を吐いてから水を一口飲むと、

「みなもちゃん、率直に言うけど、いい？」

と、いきなり厳しい事を言う宣言をされました。

わたしは、この時点で

全然ダメ、見たいな事言われたらどうしよう、

と思つて、既にちよつと涙目でしたが、

でも、忍さんに、どうぞお願いします、と返しました。

「では遠慮なく。

まず水彩の方だけど、道具のせいもあるとは思つけど、

あんまり、面白くない。

て、言うか、興味を引かない作風だね。

みなもちゃん、道具にお金かけてないでしょ？

使つてる筆の数が判るもん、この絵じゃ。

それだと、良くない絵は余計に悪くなる。

これ以上は、この道具じゃ描き表せないって、

自分で限界作つて、甘えちゃうから。

もし、ちゃんとした絵にしたいなら、

描きたいものを、的確に表現しきれる道具を揃えて、

甘える余地を無くさない駄目」

……もうこれだけで、  
わたしは限界を超えてしまいました。

涙が、鼻水が、止まりません。

悲しいのではなく、悔しかったんです。

自分でも何となく、思っていた事を、  
あっさりと、言い当てられてしまったから。

そんなわたしを見ても、忍さんは、普通に冷静な声で、  
「まだ続きあるけど、ちゃんと聞ける？」

なんなら、落ち着いてからにしようか？」

と言われたけど、忍さんはそんなに暇じゃないし、  
わたしも最後まで聞きたかったので、  
鼻を嚙りながら、覚悟を決めて、  
続けて下さい、と言いました。

忍さんはその間に、更衣室のドアの所まで歩いて行って、  
ドアを開けて外側にあるプレートを、  
『使用中』へと代えてから戻って来て、再開しました。

「鉛筆画のことで、ちょっと聞きたいんだけど、

この画風、どっかで見た事があるような気がしてて、  
それが何だったか、思い出せないんだよね。

これは、参考になっている画家とかいる？」

忍さんに、評価ではなくて、質問されたので、  
わたしは、ちゃんと喋れそうもなかったから、  
ううん、と首を振って答えました。



「そう、じゃあ、私の気のせいか、この鉛筆画だけど、うん、いいと思う。私は好きだな。」

描きたい対象を、どう見せたいかも伝わってくるし、それだけのスキルもあるのが分かる。

こっちは、限界を決めてないで描けてる。

後は、テクニクを覚えれば、

更に理想に近づくとと思う。

もっとどっという風に表したいってのを、

教えてくれれば、そしたら、

時間が出来た時にでも教えるよ」

と言って、わたしにティッシュとハンカチを渡して、落ち着くまでゆっくりしてていいよ、と言い残して、更衣室を出て行きました。

わたしは、泣きながら頭を下げ、しばらく泣いていました。

今度は、嬉しくて。

忍さんに、好きな絵、と言ってもらえたのは、とても嬉しかったです。

30分くらいして、やっと落ち着いたので、トイレに行って、自分の顔を確認してから、お店に戻りました。

後で他のバイトの人に聞くと、

忍さんは、学生だけど作品の評価になると、めっちゃめっちゃ厳しくて、

ほとんどの作品は、ダメ出しされるんだそうです。

時には、目の前にいる先輩や准教授の作品でも。

でも、その批評が的を得ていて、

その評価に反論出来る人は、少ないとかで、

ダメ出しされなかった絵もあつたことを伝えると、みんな、とても驚いていました。

この日忍さんは用事で、店には戻って来なかったのので、

直接お礼は言えなかったから、メールでお礼を伝えました。

でも作風が似てるっていうのは、

ちょっと気になりました。

一体、誰にだつたんだろう……

6月22日 水泳部の勧誘

あの体育祭の日以降、かなちゃんの予告どおり、ずっとある人たちに、付きまとわれていきます。

それは、水泳部の人たちです。

去年はクラス内で、ちょっと騒がれたくらいで、それで終わっていたんだけど、

今回は、体育祭でギャラリイもいるところで、泳いだもんだから、相当有名になってしまったようです。

異常な速さで、50mを潜水で泳ぎきって、そのまま失神した女子、  
と言う、なんだか残念な名前で。

もう先週の頭から、休み時間とか、お昼休みとか、放課後とか、この人たちは授業どうしてんだろ、って思うくらい、マークされてて、トイレに行っても、多分一年の女子の部員とか、外でマークしているほです。

それで、近づいてきたと思えば、

「ぜひ、水泳部に入部して下さい！」  
とか、

「君ならインターハイ出場も夢じゃないから！」  
とか、

「大会でいいタイムを出せば、

受験もスポーツ推薦取れるぞ！」

なんてことを、部員の生徒だけじゃなくて、顧問の先生までやってきて、

言ってくるんです、毎日のように。

最初は、色んな人に相手にされてるのが、ちよつとは嬉しかったけど、

さすがに3日も続けると、嫌気がさして来ました。

今までの誰とも話せなかった、静かな日々が懐かしいです。

まあ、この学校は水泳には力を入れているところだし、かなり目立ってしまったのは、事実だから、しょうがないので、わたしの本当の実力を見てもらって、諦めてもらうことにしたんです。

放課後、わたしは水泳部の待っている、室内温水プールへと行きました。

最初は、全員で大歓迎みたいな雰囲気でしたが、わたしが、潜水以外で泳ぎ始めると、全員、啞然としていました、そのあまりの遅さに。

中には、ふざけてんのか！

とか怒り出した、三年の人とかもいたけど、わたしは最後まで泳いだ後に、わたしが速いのは、潜水だけなので、もし、潜水で25m泳げばいい競技があるのなら、それなら参加します、と告げて帰って来ました。

ああ、めっちゃめっちゃ緊張したし、それと、ものすごく恥ずかしかった……

なんで、こんな目に遭わないといけないんだろう、だけでもうこれで、水泳部の人たちは来ないはずですよ。

でも今日は、温水プールで泳げたのだけは、すごく良かったです。

もうちょっと上手いことやれば、温水プールで、泳げるように出来たかなあ、

まあ、いいや。

プールから教室へと戻る途中、校庭の脇を通ると、陸上部が練習をしていました。

その中には、間宮さんも混じっていて、ちょうどこれから、短距離を走るところでした。

体育祭では、かなり速かったけど、陸上部の中では、どうなんだろう。

わたしはちょっと、それが気になって、ベンチに座って、その様子を見ていくことにしました。

陸上部の中でも、間宮さんはやっぱり大きい方で、けっこう目立ってました。

間宮さんとは、体育祭の後、一度も話をしていません。

お礼を言うべきかな、とも思ったけど、原因を作った張本人なんだから、っていう気持ちもあつたし、やっぱりクラスでは、声をかけるなオーラが、かなり強くって、何も言えず……

だから、わたしの中に、ここでなら何か言えるかも、って言う思いも、あつたのかも知れません。

スタートの笛がなって、並んでいた6人の人たちが、

一斉に走り出しました。

さすがに、体育祭の時のように、ゴボウ抜き、とは行きませんが、間宮さんはここでも、他の人たちよりも速かったです。

スタート直後から、ずっと先頭で走って、後ろの人を、だんだん引き離して行って、最後は2位の人から、1mくらい離してゴールしました。

やっぱり、走るフォームがきれいだなあ、なんか野生の動物、チーターとか、ヒョウとか、そういう感じで、かっこいいです。

間宮さんの走る姿は、自分でも理由が判りませんが、何度見ても、なぜか飽きなくて、わたしは、髪が乾ききっていないのも忘れて、ずっと練習を見ていました。

日が暮れてきたので、練習が終わり、二年や三年の人は、部室へと戻って行って、一年生が、道具の片付けを始めると、一緒に手伝っていた間宮さんが、わたしに気づいて、こっちに近づいてきました。

そして、わたしの目の前に来て、「さつきから何してんだ？」

私になんか、用でもあるのか？  
と、きつい口調で言われました。

まさか、走る姿に見蕩れてました、  
なんてこと、言えるはずもなく、  
わたしは体育祭のプールでのお礼を言おうとして、  
立ち上がった途端、なんだか顔が熱くなって、  
頭がクラクラしてきました。

わたしって、自分でも気づかなかったけど、  
間宮さんのことを!?

なんて、自分で驚いていたら、  
怪訝な表情で、じっと顔を近づけて見つめられた後、  
「お前顔赤いぞ、風邪引いてんじゃないのか？  
こんなところにずっといるからだろ、早く帰れ」  
と、言い捨てられて、片付けへと、  
戻っていつてしまいました。

え、風邪？

そういえば、なんか寒気がするような……

急いで家に帰って熱測ってみたら、微熱でした。

やっぱりわたし、風邪引いたようです。

もし、熱がなかったら、  
本当にどうしようかと思いました。

ああよかった、熱があつて。

結局、間宮さんには何も言えなかったけど、

教室にいる時よりも、部活の時のほうが、普通に話せそうな感じなのが、判りました。

口はきついけど、けっこう真面目で、いい人なんじゃないかな、  
って思うのは、勘違いかなあ……

6月25日 陸上部での間宮さん

最近、下校している時に、  
誰かがわたしを見ているような気がします。

水泳部の人たち、のほほもないし、  
やっぱり、前に襲われたときと同じ、  
門塾さんに、関わっている人とかが、  
今度はわたしを、狙っているのかも……

でも、教室の中では相変わらずで、  
取り巻きの人からも、  
手を出されたりとかは、まだ無いです。

でも、体育祭の後から、標的にされていた男子が、  
今週からずっと、休んでいます。

あの人たちが、どういうやり方で、  
対象にする人を、決めているのが、  
わたしには、どうも良く判りません。



間宮さんの方も、相変わらずです。

クラスの人とは、まともに話をしないけど、たまに、部活の人が教室の外に来ると、廊下に出て行って、話をしてるみたいです。

何となく、一年生が良く来てる気がします。

今日も昼休みに、間宮さんがどこかへ行っていた時、前にも間宮さんに話に来ていた、かなり小柄で、かわいらしい一年の女子が、教室の中を、覗いているのに気づきました。

わたしはこの子のところへ行って、間宮さんは、いつもお昼休みはここにはいないから、別の時間に出直した方がいいよ、と教えてあげると、とてもはきはきと、

「教えていただいて、ありがとうございます、三崎先輩！」と、しっかり頭を下げて、お礼を言われてしまい、周囲の視線を集めてしまいました。

やっぱり、ちっちゃくてかわいらしくても、やっぱり体育会系だから、元気だなあ、あれ？  
今わたし、苗字を呼ばれたような気が……

なんでこの子が知ってんだろう？

お昼休みは、まだ時間が残っていたので、売店へ行く方向と、この子の教室は同じだったからわたしは飲み物を買いに行くついでに、

この子と途中まで一緒に向かいました。

歩き始めてすぐに、彼女は自己紹介しました。

大威<sup>おおい</sup> 葵<sup>あおい</sup>さん。

わたしは無意識に、全部ア行だ、  
と言っ<sup>つ</sup>てしまい、  
もしかして気にしてるかも、と思って、  
すぐに謝りました。

でも大威さんは笑顔で、

「大丈夫です、気にしてませんから、

それ、自己紹介すると、絶対言われるんです  
と、明るく答えました。

メイクしてる感じじゃないのに、目が大きくて、  
並ぶと頭がわたしの首くらいだから、

身長が150cmもなく、雰囲気は子犬っぽい感じで、  
こっちを見上げて、話すところとかを見ると、  
ちょっとだけ、かなちゃんに似てるかも？

肩くらいまでの黒髪を、後ろで束ねてて、  
短い尻尾みたいで、頭の形が丸いから、  
よく似合っていました。

わたしは歩きながら、大威さんに、  
どうして、わたしの名前を知っていたのかを、  
尋ねました。

その子の話では、水泳部の友だちがいて、  
前の体育祭の話とか、その後の水泳部での話とかを、  
その友だちから聞いたんだそうで、  
どうやら、その水泳部の友だちの子が、  
わたしに付きまといっていた人たちの中の1人、  
だったみたいです。

探す時の特徴が、やたらと髪の高い二年の女子、  
と説明を受けたと、その友だちが言っていて、  
それが三崎先輩だって聞いていたから、判ったんです！  
と、彼女は元気良く答えてくれました。

もう1つ、わたしはこの子に、  
陸上部での、間宮さんのことを尋ねました。

そしたら、大威さんは目をきらきらさせて、  
「みこと先輩は本当にすごいんですよ！  
タイムは、短距離も長距離も速いし、  
アドバイスとかも的確ですし。」

他の先輩たちは、インターハイの地区予選大会の、  
トレーニングを優先していて、  
私たち一年を、相手してくれないんですけど、  
みこと先輩だけは、自分もメンバーだけど、  
ちゃんと指導してくれるんです。

わたし、みこと先輩のことを尊敬してます！  
と、すごい勢いで教えてくれました。

わたしは、大威さんの勢いにびっくりしたけど、

それよりも、間宮さんが後輩の面倒見が良い、  
ってことを聞いて、もつと驚きました。

部活では、教室とは態度が違ってる、  
とは思っていたけど、この子の話とか、  
これだけ慕ってる後輩がいるんだから、  
すごく良い先輩ってことだよなあ。

大威さんは、さっきのテンションから、  
ガラッと変わって、今度はとても悔しそうに、  
「でも、そのせいで、みこと先輩、

他の先輩たちからは、あまり良く思われてないんです。  
練習も、他の予選出場メンバーなら、

優先されるのに、わたしたち一年と同じ練習で、  
雑用とかも、やらされてるけど、  
文句も言わずに、従ってるんです。

練習のタイムだけで見たら、誰よりも速いの、  
みんな判っているのに」「  
と、呟きました。

この子、すごく素直で正直なんだなあ、  
顔に感情が、めっちゃめっちゃ出ていて、  
次に、どういうことを言おうとしているか、  
ほとんど判るなあ。

ああ、それはわたしも一緒かも。

ここまで話をしていたら、売店について、  
わたしは大威さんに、色々教えてもらったお礼に、  
飲み物をおごってあげました。

大威さんは、はきはきと、  
「ありがとうございます！」

それでは、失礼します！」  
と、挨拶してから、走っていきました。

間宮さん、てつきり自分の速さを誇示してて、  
自分より遅い人間なら、先輩だろうが何だろうが、  
相手にしてないんだらう、なんて思っていたから、  
かなり意外でした。

同じ陸上部の人とは、ちゃんと話すのに、  
どうして、クラスの人たちとは、  
話をしようとしなのかなあ。

それにしても、あの子、大威さん、  
かわいかったなあ。

何よりも、三崎先輩！

って言われて、すごく新鮮で嬉しかったです、  
今まで先輩とか、言われたことなかったんで。

後輩かあ、やっぱり水泳部、  
もうちょっと、考えれば良かったかなあ……

でも、バイトとか忙しいから、  
やってる時間がないもんなあ……

あんなかわいい後輩がいると思つと、  
間宮さんが羨ましいです。

また、部活の様子を見に行ってみようかな……

6月30日 なつめからのエアメール

バイトが終わって、家に帰ると、  
久しぶりに家に帰っていた母から、手紙を渡されました。

それは、テレビとかではどっかで、  
見たことあるかも知れないけど、  
今まで一度も、もらったことがない、  
赤と青のストライプで縁取られた、  
海外からのエアメールでした。

昔ならまだ分かるけど、今じゃ海外でも携帯使えるから、  
わざわざ手紙を出す人なんて、  
あんまりいないんじゃないかな、  
と、思っていたけど、まさか自分宛に届くとは。

それに今までのわたしなら、海外からわたし宛に、  
手紙を出すような知り合いも、いなかったし。

だから、最初は何かと思ったけど、  
エアメールの右下に、うちの住所とわたしの名前が、  
4段に分けて、ローマ字で書いてあって、  
左上のところには、1行目に

「Natsume Nishina」

とローマ字で書かれていて、

2行目と3行目は良く判らなかつたけど、4行目は、  
「Germany」  
と書いてあったから、これはドイツに行った、  
なつめからの手紙だと分かりました。

差出人の住所は、どうも入院している病院らしくて、  
よく分からない長い名前でした。

もしわたしも、エアメールで返事を出すなら、  
この宛先で良いのかなあ、  
とか思いながら、早速開けてみました。

封筒の中には、手紙の他に、  
ひと回り小さな、宛名とかが記入済みの封筒と、  
インスタントカメラで撮ったつぱい、  
1枚の写真が入っていて、  
手紙の文面は、もちろん日本語で書かれていました。

きれいだけど、線が細くて小さめの文字、  
間違いなく、懐かしいなつめの直筆です。

「親愛なるライバルのみなもへ

4月の末以来、2ヶ月ぶりですね、  
そちらは如何お過ごしでしょうか。  
今の私からすると、ある事情により、  
まだ5日目ですけどね。

まず最初に、どうしてわざわざ、  
エアメールなのかと言うと、

私のいる特別治療室内に、  
携帯の持ち込みが出来なくて、  
これでしか、連絡する手段が無いからです。

榊に頼んで代弁してもらおうとか、  
代わりにメール打ってもらえば、出来なくもないけど、  
直接私の言葉をみなもへと伝えたいから、  
手紙にしました。

まさか、毎日泣いて過ごしているとか、  
苛められて、学校休んでるとか、  
そんなじゃないでしょうね？  
そんなの、許しませんから。

私の方は、こちらについて早々に、  
次の日から新治療へと入りました。  
この新しい治療は、苦痛とかは無いのですが、  
1回始まると、大体2週間は眠りっぱなしです。  
だから私は今、1ヶ月に2日間しか起きていないので、  
月日が経つのが、とても早いです、  
何しろ、普通の人の14倍で進むので。

でも、この眠っている時間が長い方が、  
治療の効果も大きいし、成功率も上がると聞いて、  
私は最長の期間で、治療を依頼しました。

このサイクルで、半年間は続けて様子を見る予定で、  
少なくとも後4ヶ月は、こんな生活が続きます。

2週間も寝たきりだと、筋肉がこわばってしまって、



運動しないといけないので、

みなもからもらった、うちのミノモ、  
とても重宝しています。

あれは丁度良い、スパarringsの相手です。

心配しなくても、ちゃんと榊から、

トレーニングのレクチャーは受けているので、  
安心して下さい。

あんまり夢中になって、叩いていたら、

私が錯乱していると、思われてしまった事があって、  
リハビリ担当の医師に、羽交い絞めにされました。

次の勝負では、体力のハンディをこれでカバーするから、  
前みたいには行かないと、覚悟しておいて下さい。

それと、食事をたまにしか食べられないからなのか、

それともスパarringsのおかげなのか、

2週間ぶりに摂る食事は、味はともかく、

いつも、量が足りない気がするようになりました。

そこで、おかわりを要求するけど、

認めてもらえなくて、いつもひもじい思いをしています。

病院食を進んで食べたいなんて、思う日が来るとは、

これには、自分でもびっくりしています。

実はエメールを出すのは、これが2通目です。

先月に、父と母へ宛てた手紙を、書いて出しました。

内容は、今まで面倒見てもらった事への、

感謝の気持ちとお礼を、改めて書きました。

今までのお礼とか、これからも迷惑をかけるけど、宜しく願いますとか、

その程度の内容しかないのに、  
便箋1枚書くだけで、半日掛かってしまいました。

これは、私が子供だからなのかも知れないけど、自分の親に、改まって気持ちを告げるのは、かなり、恥ずかしいし、照れるものですね。

話は変わって、私の周りですが、  
こっちに来てから、榊は暇そうです。

私の警護役と言っても、無菌室の奥にある、  
特別治療室の中に、監禁されているから、  
守るも何も無いはずなのに、

どうして榊も同行するように、指示したのか、  
父の考えは、未だに良く判りません。

まあ、私としては、2週間に一度だけど、  
体の鍛え方のレクチャーを受けられるから、  
良いのですけど。

そんな暇してる榊が、今一番心配しているのは、  
クマのミナモの事みたいで、

面会の度に、病室に来てからまず最初にするのは、  
私の心配ではなく、ミナモの状態の確認です。

あまりに熱心に見ているから、  
榊にその事を聞くと、私が殴っているから、

どうやって補強するかを検討しているんだ、  
とか言ってます。

そんなの私の立場からすれば、  
貴方は、ぬいぐるみの警護役じゃないんだから、  
優先順位が違うんじゃないの？

とか思うんだけど、これを言うと榊に呆られます。  
私の考え方って、どこか変でしょうか？

まあ、こんな感じで、  
それなりに、順調にやっていますから、  
私の事は、今のところ、  
そんなに心配しなくても大丈夫です。

そっちの近況も知りたいから、  
みなもからも、お返事下さいね。

封筒の中に、返信用の封筒も入れておきますので、  
それを使って下さい。

お便り楽しみに待ってます。

かしこ

2010年6月26日

仁科 棗

「

同封されていた写真には、  
まるで、SF映画の宇宙船の中みたいな、  
大きなカプセルのような機械の前で、  
気のせいかなやつれて見える、クマのミノモの首を、

右腕で絞めていて、  
相変わらずのスーツ姿で、そっぽを向いている、  
榊さんの首を左腕で絞めながら、中心で笑っている、  
患者衣姿の、なつめが写っていました。

なつめ、ちよつと痩せたような気がするの、  
両隣に大きいものが、並んでいるせいかなあ。

あ、髪けつこう長くなってる、伸ばしてるのかな。

何はともあれ、元気そう良かった。

それにしてもなつめ、早く自覚して欲しいなあ、  
縫いぐるみに、嫉妬してるんだってことに。

もしかして、自分で本当に判ってないのかなあ。

ま、それは置いて、治療とは言え、  
2週間に1日しか意識がないなんて、  
そんな生活わたしには、とても考えられません。

まるで、童話の眠り姫とかみたいだなあ……

この文面には、書いてはいないけど、  
新しい治療ってのは、大変じゃないはずがなくて、  
そこはわざと書いてないんだ、と思いました。

わたしもこの日に、手紙の返事を書きました。

なつめには、わたしのことを気にせずに、

治療へ専念してもらいたいと思って、  
あんまり門塾さんのことは書かないで、  
そこらへんはがんばってます、とだけ書いて、  
ごまかしておきました。

なつめも泣き言を書いて来ないんだから、  
わたしも書く訳にはいきません。

その代わりに、バイト先でのことや、間宮さんのことや、  
大威さんのことなんかを書きました。

向こうでなつめも、がんばってるんだから、  
わたしだって、なつめに馬鹿にされないように、  
がんばります！

2010年 7月 その1 (前書き)

変更履歴

2011/01/03	誤植修正	以外	意外
2011/04/12	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3年	
2011/04/17	記述変更	(クラス)1組、2組、3組	
2011/04/26	記述統一	一步、二歩、三歩	1歩、
2011/06/05	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2011/07/28	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2011/08/10	記述統一	お二人	おふたり
2011/09/21	誤植修正	話し	話

2010年 7月 その1

7月1日 間宮さんの脅迫

今日は朝から、とてもひどい目に遭いました。

朝いつも通りに登校すると、学校に入る前の道で、突然、間宮さんが現れたと思ったら、

「お前、ちよつと来い」

と、腕をつかまれて、そのまま正門から離れて、あまり生徒も通らない、

裏門の方へと、連れていかれました。

どこへ行くかと、思っていたら、

体育館とかプールの、裏側にあたる場所で、

普段は、ほとんど人が来ない所でした。

え、これってもしかして、

わたし、これから何かされるんじゃないの!?

と、ここに来て今の危険な状況を、理解しました。

連れてきた間宮さんは、わたしを怖い顔で睨んでいて、

とてもじゃないけど、これから、

友好的な話が始まるとは思えません。

わたしは、いつもよりも倍は怖い間宮さんに、

わたしに何の用なのかを、恐る恐る尋ねました。

間宮さんは、このわたしの言葉にも、

苛立っているみたいで、  
わたしが言い終わるよりも早く、  
「お前、葵に何を言った」  
と、大声で遮られました。

もうこれだけで、その殺気だった眼と相成って、  
わたしはもう、涙ぐんできてしまいました。

え、葵？

誰だっけ、と言う表情をわたしはしてしまっただらしく、  
それを見た間宮さんは、さらに語気を荒げて、

「一年の大威 葵だ、

教室に来たんだろっが！

お前、あいつに余計な事聞いただろ、

どういうつもりだ！」

と、怒鳴られました。

その声にびっくりして、思わず1歩下がったら、  
背中が、もう体育館の壁でした。

わたしはここで、逃げ場が無いことに今気づいて、  
それに気づいた途端に、以前襲われた時のことが、  
蘇ってきてしまって、怖くなって、  
体が震えてくるのが分かりました。

でも、そういう態度は、

余計に間宮さんを、苛立たせるだけだと気づいて、  
少しでも気丈に見せようと、

間宮さんの視線を受け止めながら、



間宮さんが言っていたことを考えました。

間宮さんが怒っているのは、  
大威さんのことみたいだけど、  
だけど、余計なことって何だろう？

もしかして、間宮さんのことを聞いたことかな、  
大威さん、それを、本人に話したんだ、  
それで、間宮さんが怒っている？

それとも聞かれたことを、ではなくて、  
大威さんに尋ねたことを？

わたしが、そこまで考えていたら、  
不意に胸倉をつかまれた、と思つた途端に、  
鼻が当たりそうなくらい、間近に体を引き寄せられて、  
間宮さんの顔が、目の前に来ていました。

わたしは一瞬、何が何だか判らなくなつたけど、  
ここでまた、弱気な態度をしちゃダメだ、  
とそれだけを考えて、目を背けずに、  
間宮さんへ、何か言い返そうとしました。

だけど、やっぱりあの時の感情も重なって、  
体の震えは治まらないし、声も出なくて、  
ひたすら出てくるのは、涙だけでした。

しばらく、間宮さんは黙って、  
わたしからの、反論を待っていたけど、  
ずっと何も言えないでいたら、

「お前は他の奴らよりは、少しはマシかと思っただが、大して変わらなかつたみたいだな」  
と、呆れたように言っただ後、

「人の事を、嗅ぎまわるような真似はやめろ、次は容赦しねえから、覚えておけ！」

と、低い声でそう言ってから、  
間宮さんは、わたしを突き飛ばしてから、  
踵を返して遠ざかって行きました。

わたしは必死で、何かを言い返そうとしたけど、  
やっぱり声は出せなくて、  
結局間宮さんには、何も言えませんでした。

わたしは、力が抜けてしまって、  
そこじゃがみこんでしまい、  
そのまま、動けなくなってしまいました。

なかなか涙も震えも、治まらなくて、  
そのうちに8時半になって、  
チャイムが鳴っているのが聞こえました。

ああ、今日は遅刻だ……

そんなことを思いながら、地面に座り込んで、  
涙を拭って、鼻をすすりながら、  
自分の何がいけなかつたんだろう、  
と考えていました。

大威さんに、間宮さんのことを聞いたのが、  
そんなに、しちやいけないことだったの？

全然、判らない……

その時、携帯が鳴ったので見てみると、それは、かなからでした。

わたしが電話に出るとすぐに、

「みなも、大丈夫！

今どこにいるの！」

と、まるで、状況を知っているかのような、焦っているかなの大声が、聞こえてきました。

わたしは、なんとか今いる場所だけは告げると、すぐに行く、と言って電話は切れました。

その電話を切ってから、10分くらいしたら、誰かが走って近づいてくる音が、聞こえてきて、そつちを見ると、それはかなでした。

「みなも、大丈夫！？

誰にやられたの！？

どこか痛い所とかある！？」

わたしの両肩を抱えて、

早口で尋ねてくるかなに、わたしは首を振って、怪我とかは大丈夫なことを、伝えました。

そこではばらく、かなはわたしが落ち着くまで、隣で介抱してくれました。

2時間目の途中には、立ち直ることが出来て、わたしは、かなにお礼を伝えました。

何でもかなは、日直の当番で早くから来ていた、元D組の同じクラスの人から、わたしが間宮さんに、引っ張られていくのを、見たと知らされて、わたしに連絡した後すぐに、教室を飛び出してきたんだそうです。

かなはこれが、門埜さんの仕業じゃないの、と心配していたけど、それとは違うから、心配しなくても大丈夫と、説明しておきました。

でも、間宮さんの名前を出すと、かなは、何だか妙な表情をしていました。

わたしは2時間目の終わりに、教室に行きました。

この時間の授業は体育で、教室には、まだ誰も戻って来ていませんでした。

今日が、一学期の最後の水泳で、タイム測定だったんですけど、欠席しちゃったから、水泳の補習に出て、再テストになります。

これでまた、プールで泳ぐことが出来るから、まあ、それは良いんですけどね。

5分くらいして、授業時間が終わって、

着替え終わった人たちが、帰って来ました。

間宮さんは、教室にいたわたしを、ちらっと見た後は、もうこの日は全く、こちらを見ることは、ありませんでした。

わたしも、さっきの怖かった記憶のせいで、間宮さんの方は、今日はまだ見れません。

水泳の一件で、全く話さない他のクラスの人たちよりは、距離が縮まったかも、とか思っていたんですが、これでわたし、間宮さんにすごく嫌われたみたいです。

またしばらくは、間宮さんには、近づかない方がいいのかなあ、それとも、勇気を出して、正直に思っていることを、話した方が良いのかなあ。

どっちがいいのが、良く判りません……

7月2日 大威さんの告白

今日も、昨日から変わりなく、間宮さんは、わたしを避けるように、こっちを向くことは、ほとんど無いままで。

前までは、まだ普通に見られていたんだけど、今は、ちょっとこっちの方を見たとしても、

軽蔑したような目で、わたしを睨むだけです。

なんだか、息の詰まる感じが、より強くなってしまいました。

とても長く感じた、午前中の授業が終わって、間宮さんがいなくなる、昼休みになって、わたしがやっと、落ち着けるようになった時、教室の入り口に、大威さんがいるのを見かけました。

この前、昼休みは間宮さんはいないって、伝えたつもりなんだけど、どうしたんだろう。

大威さんは、わたしの方を見て、頭を下げていたから、わたしに用があるのかな、と思って、廊下に出ました。

大威さんは、とても申し訳なさそうな顔をしていて、明らかに、わたしに何かを謝りに来たのが、すぐに判りました。

だけど、なかなか切り出せないでいるのを見て、わたしは、お昼はもう食べたのかを尋ねると、まだ食べていないと言う、大威さんに、だったら一緒に食べないと、誘いました。

大威さんは、

「はい！」

と、返事をしたので、今日は風も強くなくて、この時期にしては涼しかったから、校庭の脇のベンチで食べようか、と伝えて、わたしは先に行って、待つことにしました。

いつも陸上部が、放課後に練習している、校庭を眺めながら、大威さんを待っていると、予想よりも、かなり早くやって来ました。

大威さんのお弁当は、女の子としては大きめで、何が入っているのかと思ったら、海苔で覆われた、真っ黒な丸い大きなおにぎりが、3つ入っていました。

いっぱい食べるんだね、とわたしが言うと、ニコツと笑って、育ち盛りなので、と、おにぎりを食べながら言いました。

随分美味しそうに、ご飯食べてるなあ、まるで、木の実をほおぼるリスみたいです。

こういう子には、つつい何か、食べ物あげたくありません。

わたしのお弁当を見ていた大威さんに、食べたいのがあったら、食べていいよ、と言うと、大威さんは、

「ありがとうございます！」

では遠慮なく、いただきます！

でも、もらうだけじゃ、申し訳ないから、

じゃあ、これと交換しましょう」「  
と言って、おにぎりを1つ渡されました。

わたしだと、それ1つ食べたからお腹いっぱいだなあ、  
とか思ったけど、せっかくだからもらいました。

こういうお話、どっかで聞いたような……

あ、思い出した、

童話の、さるかに合戦みたいだ。

ええとたしか、おにぎりをもらうのはサルで、  
柿の種をもらったのが、カニだったから、

この場合は、わたしがサルで、大威さんがカニ？  
そんなの、どうでもいいか。

大威さんは、わたしのお弁当のおかずを、

一口食べることに、

「これもすごく美味しいです！」  
と、絶賛していました。

料理には、そこそこ自信があるけど、  
そこまでストレートに言われ続けると、  
かなり照れます。

大威さんのおにぎりの具は、梅干でした。

この梅干、かなりすっぱくて、

なつめが病室で作ったのを、ふと思い出しました。



大威さんは、もしかして梅干ダメでしたか？  
と心配していたので、平気だけどすっぱいね、  
と答えました。

何でもこの梅干は、おばあちゃんのお手製だそうです、  
スーパーで売っているのよりも、  
かなりすっぱいですが、美味しいです。

このおにぎりは、大威さんが自分で用意しているそうです、  
料理が出来れば、わたしのお弁当みたいに、  
ちゃんとしたのを、作れるんだけど、  
料理は出来ないから、いつもこれなんだそうです。

だから、わたしのお弁当を見て、大威さんは、  
「こんなすごいお弁当を、毎日作っている、  
先輩のことを、尊敬します！」  
と、見つめられて言われました。

そんな、大したことじゃないと思うけどなあ、  
ほとんどおかずは、昨夜の残り物だし。

本当にこの子は、素直で真っ直ぐです。

だけど、今はそんなことを、  
悠長に考えている場合ではなくて、  
大威さんが、わざわざわたしのところまで来て、  
伝えに来た内容を、聞き出してあげないと、  
いけないんだった。

わたしは、食べ終わったお弁当のフタを閉めて、

もう先に食べ終わっていた大威さんに、  
わたしへの用のことを、尋ねました。

大威さんは、ちよつとだけ迷っていました、  
覚悟を決めたようで、

立ち上がって、わたしの目の前に立つと、

「三崎先輩、すいませんでした！」

みこと先輩が怒つたの、わたしのせいなんです  
と言って、深々と頭を下げました。

わたしは、大威さんに、

それはいいから、まず隣に座るように言うてから、  
その訳を尋ねました。

すっかり、しよげた顔になってしまった、

大威さんの話によると、

間宮さん、インターハイの地区予選の日に、

体調不良で欠席して、

棄権になってしまったんだそうです。

それで大威さんは、表には見せないけど、

本当は、シヨックだったんじゃないかと思って、

間宮さんの気を紛らわせようと、おとといの練習の後、

わたしに間宮さんのことを尋ねられたのを、話題にしたら、

何で大威さんから、聞き出すようなマネしてるんだ、

と、すごく不機嫌になったんだそうです。

大威さんは、わたしと間宮さんが友だちだと思っていて、  
報告のつもりで伝えたら、こんなことになってしまって、  
本当にごめんなさい、と謝っていました。

でも何で、わたしと間宮さんが友だちだって、  
思ったのかを尋ねたら、とても意外なことを聞きました。

間宮さんは彼女に、

わたしの話をしていたことがあつたらしく、

教室では、席も隣同士だったし、

間宮さんから、クラスの人の話なんて、

聞いたことなかったから、てっきり仲が良い人だと、

大威さんは、思い込んでしまったのだそりで。

これにはビックリです。

何回か、話したことがあるけど、

苗字を呼ばれたことすら無いから、

絶対名前覚えられてないって、思っていました。

でも今は、まったく逆の意味で、

名前、覚えていそうだなあ、

気に食わない奴の、1人として……

「みこと先輩って、人に頼ったり、甘えたりしてるのが、  
すごく嫌いなんです。

みこと先輩が認めるのは、他人に頼らない人とか、

自分の力で努力している人とか、

自分だけで、やるべきことをやっている人なんです。

多分、三崎先輩がわたしからみこと先輩のことを、

聞き出そうとしたことが、

気に食わなかったんだと思います。

ただそれだけで、おふたりの仲を壊して欲しくないって、

そう思つて、みこと先輩に話したんですけど、  
聞いてもらえなくて……

それで、三崎先輩の方から、話してみてもらえれば、  
つて思つて、今日は言いに来たんです」

大威さんは、そう説明しました。

わたしは大威さんに、昨日の朝の出来事を話しました。

年下の子に、自分が泣かされた話なんてするのは、  
ちよつと恥ずかしかったけど、

この子には、聞かせておいた方が良いと思つて、  
話しました。

大威さんは、わたしの話を聞くと、  
かつきよりも、もっと申し訳なさそうな顔になって、  
今にも泣き出しそうになっていました。

そして、

「全部、わたしのせいです、

本当に、すみませんでした」

と、謝り続ける大威さんの声には、  
啜り泣く音も混じっていました。

わたしは、ハンカチを渡して、

もうそのことは、気にしてないからいいんだけど、  
そんな訳だから、わたしから間宮さんには、

何を言つても、聞いてもらえそうにないことを、  
伝えました。

大威さんは、それを聞くと、ぱつと顔を上げて、  
「それは違うと思います」  
と、泣きながらも、はっきり否定してきました。

「みこと先輩は、わたしたちにとって、  
きつく当たってくる時もあります。  
わたしだって、指導を受けていて、  
泣かされたことは、何度もあるんです。  
でもそれは、乗り越えて来ようとする気持ちを、  
試しているんです。」

みこと先輩は、興味のない人には、  
初めから、関わろうとはしませんし、  
ちよっかい出されても、相手にしません。  
だから、三崎先輩のこと、  
別に嫌ってはいないと思います。  
ただみこと先輩は、意地っ張りだから、  
自分から言い出したこととか、始めたことは、  
止められないんです。

三崎先輩、どうかみこと先輩に、  
その機会を与えてあげてください。  
そうすれば、きつとみこと先輩のこと、  
もつと良く分かってもらえるはずです！」

大威さんは、こう力説して、  
息をするのを忘れていたらしくて、  
言い終えた途端に、まるで走り込んだ後みたい、  
大きく深呼吸していました。

この子は本当に、間宮さんのことが好きなんだなあ。

わたしにとつての、かなとおんなじかなあ……

わたしも、もうちょっと、  
がんばってみよう。

大威さんに、わたしから話をしてみると約束してから、  
わたしたちは、それぞれのクラスに戻りました。

何気なく、校舎の屋上に目をやった時、  
そこに間宮さんらしい人影が、  
見えたような気がしました。

気のせいだった、かな……

7月5日 期末試験前日

ついに、始まってしまいます、  
明日から期末テストです。

学校では、集中して勉強できない日々が続いていて、  
仕方ないから、バイトがお休みの日とか、  
日曜日とかは、家よりはましかと思って、  
図書館に通って勉強しました。

でも、やっぱりなつめと勉強していた時みたいに、  
分らない所を、教えてくれる人もいないから、  
全然思うようには、はかどりませんでした。

家庭教師がついていたとは言え、普通の人よりも、時間は限られていたはずなのに、なつめは、学年で上位だったんだから、もうすごいとしか、言いようが無いです。

これだけは、どんなにがんばっても、なつめには勝てないような気がします。

こんなことを言ったら、なつめは怒り出しそうですけど、きつと、頭の出来が違うんじゃないかと思えます。

なので、始まる前から補習の二文字が頭から離れません。

もう仕方がないから、

テストの前日に、山を掛けて丸暗記です。

あとは、山を掛けたところが、出題されてくれるのを願って、これからテスト期間中は、毎日、神社にお願いに通います。

もう残る手段は、神頼みだけです……

7月9日 試験終了と忍さんからのプレゼント

……終わりました、何もかも。

山は全く当たらなくて、全然出来ませんでした。

もう、補習は決定的です。

今月の休みは、明日からの試験休みだけになりそうです。

テスト期間中の座席は、  
出席番号順に並び直されて、転入生の間宮さんは、  
女子の一番最後になったから、座席が離れたので、  
落ち着いてテストには臨めました。

でも、根本的に試験勉強が出来ていないので、  
環境が良くなったから、と言っても、  
テストの出来は、それはもうさっぱりでした。

大威さんとの約束のこともあったけど、  
テスト中は、部活もみんなお休みらしくて、  
間宮さんには、話せそうなタイミングはなかったです。

まあ、それどころではない、  
と言うのが、実際のところですけど。

皮肉なことだけど、補習になれば、  
夏休み中に、学校へ来ないといけなくなるから、  
その時にでも、時間を見つけて、  
話が出来ればいいかなあ、とか思いました。

はあ……

この日はこの後、午後からバイトへ行きました。



バイトの方は、黙々とやることを片付けて、無心でやっていたら、すぐに弊社時間になりました。

バイトが終わって、帰る支度をしていた時に、今日はお店に出ていなかった、忍さんが、

走ってきたのか、息を切らせて更衣室へとやって来て、

「ああ、みなもちゃんいたいた。

良かった間に合って。

やっぱりギリギリだったなあ、

久しぶりに全力疾走したよ、ああ疲れた」

と言って、部屋の真ん中にあるテーブルの周りにある、パイプ椅子に座りました。

わたしは、どうしたんですか、と答えながら、

忍さんの手に持っている、大きな紙袋が気になって、それを見つめていました。

忍さんは、わたしが見つめていた紙袋から、

大きなスケッチブックらしいものを、取り出しました。

もうバイトでどういう品物があるかも、

かなり、覚えていたので、それがうちで扱っている、

メジャーなものではないのが、すぐに判りました。

見慣れないデザインの表紙だなあ。

興味深げに見ている、わたしに満足したのか、

忍さんは、ニヤニヤしながら、手にしていた、

F8サイズのクロッキー帳でした、

それをテーブルに置くと、

「みなもちゃん、遅くなつたけど、これ、誕生日プレゼント。

みなもちゃんの為に、手に入れたんだ、と言いたいところだけど、私が前に入手して、使わずにあつた在庫。

これは、私よりみなもちゃんが持っていた方が、活用してくれそうだから、あげる事にしたんだ」  
とのこと。

そのクロッキー帳は、表紙は青を中心としたデザインで、なかなか、いい感じですけど、まさか、それだけが理由じゃないよね、とか思いつつ、表紙を開くと、

このクロッキー帳、紙の色が白だけじゃなくて、最初は白い紙でしたが、次第に水色になって、青になって、紺になって、黒になりました。

これは、紙の色が青系でグラデーションのように、1枚ずつ変わっていくクロッキー帳でした！

「それはね、空とか、海とかを描く専用の、クロッキーなんだよ。

サイズも大きめだけど、前に、私に見せてくれたスケッチも、これと同じサイズだから、あのトートに入るでしょ？でもこれだけだと、あれなんで、

こつちも合わせて、プレゼントするね」  
と言いながら、忍さんが紙袋から、もう1つ、取り出したのは、

色鉛筆のセットと、クレパスのセットが2つと、

大きめのレザールのペンケースでした。

「色鉛筆の方は、24色のセットで、クレパスは、ハードもソフトも、どっちも、色鉛筆と同じ、24色のセットにしといた。

一応、これは私が使って、使いやすかったのを、選んどいた。

それと、こっちは単品で良さげなものと、うちに余ってるのを、適当に詰めてきたから、練習にでも使って」

と言って、ペンケースを渡されて、早速、ジッパーを開けてみると、中には、色鉛筆とかクレパスとかが、ぎっしりと、詰め込まれていました。

色鉛筆もクレパスのセットも、けっこう良い物なのは、すぐに判りました。

それに、このペンケースの中も、かなりたくさん入っていました。

わたしは、忍さんにお礼を伝えて、今度、これを使って絵を描いてきますから、是非また見て下さい、と伝えました。

「分かった、楽しみにしてるよ」  
と忍さんは言って、事務室に入って行きました。

7月に入ってから、ろくなことがなくって、

テストも散々で、補習はほぼ定だし  
間宮さんの件で、かなりへこんでいたところで、  
大威さんには、ああ言ったものの、  
どうしようかと、悩んでいたりで、  
最近はずっと沈みっぱなしでした。

だから、このプレゼントは、  
久しぶりの、嬉しい出来事になりました！

このプレゼントのお返しに、  
多分、7月中は難しそうだけど、  
8月中には、もらった画材を使って、  
忍さんに見せられるようなものを、  
がんばって描きたいと思います。

2010年 7月 その2(前書き)

変更履歴

2011/04/04	記述統一	一週間、二日間、三時間	
1週間、2日間、3時間			
2011/04/12	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3年	
2011/04/21	記述統一	(期間)一日、二月、三年	
1日、2月、3年			
2011/06/06	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/07/29	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			
2011/09/07	誤植修正	位	くらい

2010年 7月 その2

7月15日 航海堂での出来事

ここ最近、航海堂の前とか、  
近くのコンビニとか、小さい公園で、  
5人くらいで、たむろっている人たちを、  
見かけるようになりました。

その人たちは、何をするでもなく、  
ずっとそこにいて、何か話をしているんですけど、  
わたしが通り過ぎる時、見られている気がします。

もしかして、わたしを見張っているのかも知れない。

そう思うと、目をつけられているような気がして、  
なんだかとても怖いです。

どうも、ああいう人たちを見ると、  
すぐにあの時のことを、思い出してしまって、  
怖いし、嫌な気持ちになります。

他のバイトの人たちの間でも、  
話題になっているみたいで、

今度注意して、別のところに行かないようなら、  
警察に通報した方がいいのでは、

と言う人もいて、自分がここにいるせいで、  
迷惑をかけているんじゃないかと、  
考え始めると、気が滅入ります。

そういうのを、ずっと黙っているのも、  
お店の人たちにも悪いから、  
わたしは、忍さんが来た日に、  
相談しようと思いましたが。

それが、今日です。

忍さんも、ガラの悪い人を最近良く見るのは、  
気づいていたそうで、わたしの話を聞いて、  
前に襲われた時にいた奴を、見たのかと聞かれました。

あの時にいた人と、同じ人はいないと思う、

と、わたしは答えると、忍さんは、

「じゃあ、なんで、

自分のせいじゃないかって、思うの？

なんか気になってることが、ありそうだけど。

それを教えてくれないかな」

と、尋ねられて、わたしは、

門塾さんのグループのことを話して、

わたしが標的にされているから、かも知れない、  
と、伝えました。

忍さんは、わたしが、門塾さん、と言った時、

「門塾？」

と反復して、目を細めて無表情になりました。

わたしの話を聞き終えた、忍さんは、

「ふうん、話は大体分かった。

みなもちゃん、門塾の妹に目をつけられている、

かも知れなくて、あいつらはその手先かも、  
ってことね」

と言ってわたしは、はい、と答えた後に、  
何か違和感を感じて、よく考えてみました。

門塾の妹って、どういうこと？

わたしの顔を見て、忍さんは察してくれて、

「多分、あの苗字は滅多にいないから、

間違いないと思うけど、

私はね、みなもちゃんと同級生の子の兄貴と、  
ちよつとばかり、知り合いなんだよ。

その兄貴って言うのは、私の1つ下だけどね。

そのやり口とか考えると、多分間違いなさそう。

兄貴の方も、しょうもない奴だったけど、

妹も、兄貴と同じみたいだな」

と、吐き捨てるように、言いました。

そして、ちよつと考えた後に、忍さんは、

「話は判った。

わたしの方で確認してくるよ、

営業妨害されちゃあ、売り上げに関わるし、

面倒にならないうちに、さっさと片付けようか」

と言うと、お店に出ていた社員の人や、

バイトの人に聞きまくって、

一番新しい目撃情報を、聞き出していました。

社員の人が、一緒に行きましょうか、

と言うのを断って、みんなは仕事してて、

とだけ言い残すと、忍さんは、



その場所の公園へと、1人で行ってしまいました。

相手は、何人かいたと思うけど、大丈夫かなあ、忍さん。

でもどうして、学年もちがう、1つ下の、門埜さんのお兄さんのことを、忍さん、知っているんだろう。

それはちよつと、気になるけど、それよりも、何かされないかの方が心配で、気になってしまい、仕方ありませんでした。

30分くらいしたら、忍さんは、何事もなく、無事に帰って来ました。

で、忍さんは一言、

「話をつけてきたから、明日からはもう来ない。これで問題は解決。」

はい、みんな仕事に戻って「と、あっさりと流してしまい、集まっていた人たちを、解散させた後、わたしだけ、事務室に呼ばれました。」

「みなもちゃんの言う通り、

あいつらは、門埜の妹を知ってたよ。

向こうの奴らに、どんくさいのがいて、

名前出したら、動揺したからすぐに判った。

二度とここに来るなって、言っといいたから、

多分、大丈夫だと思うよ。」

と、忍さんは苦笑いしながら、言いました。

でも、そう話す忍さんの目は、  
ちよつと、いつもとちがう感じで、

少しだけだけど、榊さんと同じものを感じました。

二度と来るなつて言っただけ？

たったそれだけで、あの人たちが引き下がったの？

これは、聞いてもいいことなのかが、  
よく判らなくて、この場では、

それ以上追求せずに、お礼だけ伝えました。

そういえば、忍さんの若い頃の話って、  
聞いたことがなかった。

それって、前に車で送ってもらった時に、  
今は話せない、つて言っていたことと、  
かぶるのかも知れない。

少なくとも今は、それを聞けそうにはないから、  
またそういう時がきたら、聞いてみよう、  
そう、思いました。

もしかして、忍さんって……

7月20日 終業式

あの日以降、バイト先には、  
忍さんが話をしてから、あの人たちは、  
航海堂には、全く寄りつかなくなりました。

やっぱり、忍さんって……

忍さんのおかげで、昨日までは、  
心置きなく、仕事に励んでいました。

ですが、それも今日までです。

明日から夏休み、ではなく、再試の補習です。

補習の日程は、日曜日を除く、

21日から、30日まであって、

去年に参加した、夏期講習と同じ形式で、

大体日にちで、教科が割り当てられています。

1日に2教科ずつです。

数学とか英語とかの、主要な教科だと丸1日で、  
その他の教科では、大体半日です。

この補習、夏期講習の方とは長さが違っていて、  
朝の9時から、夕方の5時半まであって、  
とにかく長いんです。

これじゃあ、バイトも行けません。

そして、最終日の31日にある再試で、合格点を取れないと、8月の後半に再補習です。

運動部とかの優秀な選手で、大会とかがある場合だと、特例で、そっちの練習優先で、免除される場合もあるそうぞ、わたしも、クロールとか平泳ぎとかが速ければ、逃れられたかも知れません。

今さら、そんなことを言っているけど、始まりませんけどね……

唯一の救いは、プレッシャーの元である、間宮さんはいないので、門塾さんもないことでしょうか。

ただし、取り巻きの人に繋がっていきそうな人は、何人かいるみたいなので、それがちよつと心配です。

通知表の方は、去年の大健闘が全てダメになっていて、それはもう、ひどいことになっていました。

バイトから帰ると、こんな時に限って、久しぶりに帰って来ていた母は、この成績を見た途端、早速、お説教になってしまいました。

バイトばかりやっているから、こんなことになってるんじゃないの、とか、二年になって、勉強も難しくなるんだから、

一年とおんなじ気分でやってちゃ、  
ダメなんじゃないの、とか、  
あんまり言い返せないこともあったけど、  
それは違うんじゃないの、  
って反論したくなることも、  
たくさん、言われてしまいました。

でも、バイトを許可してもらった条件に、  
成績は下げない、と言うのがあったから、  
とりあえず、バイトを始めた当初と比べれば、  
下がってないもん！  
と、言い訳をして、危機を逃れました。

でも、もうこれで、これ以上悪くなるのは、  
許されなくなりました。

こうなったら、何としてもこの夏休みの間に、  
間宮さんがそばにいても、勉強に集中できるように、  
絶対に和解して、環境を改善します。

そうしないと、バイトを止めなくちゃ、  
いけなくなってしまうから……

7月21日 補習初日

去年は、自主参加の夏期講習には出ていたので、  
時間がちょっと長いだけで、そんなに変わらないかなあ、  
なんて思っていたら、全然違いました。

夏期講習では、いつものクラスと、同じ人数で、割り当てられていたのに、この補習では50人近くいても、1クラスしかなくて、なんか、詰め込まれている感じです。

座席も決まっていなくて、自由だったので、わたしは何となく、窓側の一番前の席に、座っていたんですけど、これは、運が良かったです。

後から教室に入って来た、いかにも、ヤンキーって感じの人たちが、元から座っていた人たちに、前に行けと命令して、後ろの席を占拠していました。

その中には、門塾さんの取り巻きの人も、何人が入っていました。その他には、わたしが知っている人は、見当たりませんでした。

そして、補習は始まったのですが、授業中の雰囲気も、夏期講習とは、全然違っていました。

夏期講習は、勉強したい人が集まっていたから、普通のクラスでの授業と、変わらなかったんだけど、こっちは成績が悪くて、仕方なく、参加させられている人ばかりでした。

だから真面目に、授業を受けようって、  
言う感じではない人が多くて、  
始まる前から寝ていたり、

初日から、来ていない人がいたりで、  
先生も、始まって5分も経たないうちに、  
静かにしろ！

と大声を上げていて、とても落ち着かないです。

授業内容も、先生は勉強させたいと言うよりも、  
再試での合格者の人数に、ノルマでもあるかのように、  
とにかく言ったことを覚えておけ、と言って、  
問題と、その答えを説明しているか、  
怒鳴っているかの、どちらかでした。

どうやら、先生が覚えておけと言った問題は、  
再試で、そのまま出るみたいで、  
後は、補習にさえ出席していれば、  
何とかなるらしいんです。

それを、事前に知っていた人たちは、  
適当に、補習時間が終わるのを、  
待っているようでした。

だからなのか、後ろで騒いでる、  
ヤンキーの人たちは、  
教室全体に聞こえるほどの声で、  
ずっと話していました。

先生は最初の1時間目までは、

注意とかをしていたけど、  
2時間目に入ったら、  
もう、相手にしなくなりました。

これが、今月いっぱい続くのかと思うと、  
気が滅入ってきます。

午前中だけでも、  
かなり、ぐったりしてしまいましたが、  
午後は5時半まであって、もっと長いので、  
さらに大変でした。

でも後ろの人たちは、もうここに座っているのすら、  
飽きてしまったようで、出席確認したら、  
授業の途中で、トイレとか言って、  
出て行ってしまったりしていて、  
あんまりクラスにはいなかったから、  
少しはマシでした。

でも、騒いでる集団が減っていても、  
やる気のない人が、大半の教室は、  
誰かが話をしていたり、携帯の音が聞こえたりしていて、  
やはり、真面目に聞こうとしている人は、  
ほとんどいない感じでした。

午後は、授業時間の間の休み時間も、  
何も考える気がなくて、トイレとか行かない限り、  
机で寝てました。

噂だと、補習の時間は、



5時半までって言われているけど、  
実際はもっと短いらしい、っていう話も聞いていたから、  
かなり、期待していたんだけど、  
この日は時間まで、きっちりやりました。

帰る時に、一応校庭の方を回ってみました、  
陸上部の練習は終わっていて、  
もう、誰もいませんでした。

これだと、時間が合わなくて、  
間宮さんとは、話出来ないかも知れないなあ、  
大威さんとの約束、どうしよう……

7月25日 束の間のお休み

まるで社会人みたいな、  
朝から夕方までの、辛い補習の日々が、  
やっと半分終わりました。

今日は久々、ではないけど、  
そう思ってしまうくらい、  
待ち焦がれていた、お休みです。

今日は天気も良かったけど、かなり暑くて、  
補習の授業での、疲れが出たのが、  
どうも体がだるくて、家でごろごろしてました。

家の中も、かなり暑いですけど、

うちのエアコンが、かなり古くて、すぐくうるさいし、電気代も馬鹿にならないから、基本は、扇風機で耐えています。

扇風機も、10年くらい前の年代物ですが、こっちはなんの問題もなく、普通に動いています。

この扇風機は、わたしのお気に入りです。

何故かと言うと、昔の物だからなのかも知れませんが、騒音よりも、風量重視になっていて、この長い髪でも、最強にして目の前に座れば、完全に髪を浮かせるほどの、風量があるんです。

お風呂上がりなんかは、とても重宝しています。

たまに、家電屋さんとか、ホームセンターとかに行った時、扇風機が置いてあると、いつも最強にして、うちのと、風力比べをしています。うちのよりも、強いなと思ったのは、業務用の、工場扇だけです。

本当にこの時期だけは、この長い髪、邪魔だし、うっとうしくて、仕方がないです。

普段は、ガマンしていますが、頭を引っ張られる感覚が嫌だから、家では出来るだけ、まとめたりもしないで、下ろしているんです。

でも、普段してるみたいに髪を上げていないと、うちみたいに、床に座る生活していると、動かたびに自分の髪を、床に引きずってしまつて、髪の方の方が、モツプみたいに、ごみだらけになつちやいます。

夜寝ている時も、

なんか暑いし、息苦しい、とか思つて、目を覚ましたら、自分の髪が、首に巻きついていたり……

やっぱり、普通に生活するんだつたら、腰くらいまでが無難だなあ、と、つくづく思います。

でもこれは、わたしの数少ない特徴でもあるから、切りはしませんけどね。

でも、やっぱり暑いです……

7月26日 衝撃の事実、色々

わたしの後ろに座っていた男子たちが、話をしていたんですが、なんと昨日、学校に泥棒が入つたんだそうです！

それはどうやら、金銭目的の窃盗らしくって、

職員室が荒らされていたんだそうです。

夜間に起きた事件だから、  
近所でも、目撃者とかがいなくって、  
まだ犯人も、判っていないんだそうです。

それにしても、学校って、  
そんなに価値のある物、あるのかなあ。

お店じゃないから、現金とかもなさそうだし、  
高い物とかも、そんなに無いように思えるんだけど、  
本当に、金銭目的なのかなあ……

それともう一つ、ずっと謎だった、  
クラスでイジメの標的を、  
どうやって決めているのかが、  
判ったんです。

それは、今日の補習の昼休みに、  
お弁当を食べ終わったら、疲れてしまって、  
いつも通り、寝ていました。

そしたら、後ろに陣取ってる、  
ヤンキーの人たちが、大声で話していたのが、  
聞こえてきたんです。

門塾さんの取り巻きの人が、  
他のクラスの人に、今一番面白いのは、  
学校でやってる、ゲームだって言って、  
今月はオタ狩りだったって、言うのを、

はつきりと聞きました。

オタク狩りって、多分、オタクっぽい人を選んで、苛める対象にしていたみたいです。

話を良く聞いてみると、

具体的な名前を上げるのは、避けてましたけど、まあ間違いなく、門塾さんでしょうけど、ターゲットを選ぶ、お題みたいなのを、言うみたいです。

それが先月は、オタクだったらしくて、そのお題に沿った人を、クラスの中の、門塾さんに親しい人以外から、ピックアップして、対象とする人たちを、何人が決めてから、その人たちが、学校を辞めるか、1週間以上、来なくなるまで、それを実行する人、プレイヤーって言ってました、を数人決めて、その早さを争うんだそうです。

で、プレイヤーの誰かが目標をクリアしたら、次のお題が、出されるみたいなんだけど、今回のお題は、気に入ったらしくて、1人潰しても、先月から継続してた、らしいです。

ちなみに、4月と5月のお題は、『デブ』だったらしくて、そういえば、体育祭の後に来なくなった男子は、太ってました。

あの人たちは、自分たちの遊びで、

他のクラスメイトを、退学にまで追い込んでいるんだ。

これだけでも、かなりひどい話なんですけど、話には、まだ続きがあつて、

また新しいゲームが、二学期から始まるらしいんです。

今度は、『格ゲー』だと、その取り巻きの人は、楽しそうに話していました。

これって多分、格闘ゲームの略だと思っただけど、何をするつもりなのか、予想も出来ないので、二学期が、とても不安です。

あの人たちは、別に何も考えていなくて、きつと、門塾さんがこういうのを、周りの人たちに、やらせていて、それに周りの人が従っているんだと、思っただけど、どうして、門塾さんの言うことを、みんな、実行しているんだろう。

そういうのが、面白いから？

それだけ？

それと、門塾さんは、

どうして、こんなことをさせているんだろう。

自分が、いらなと思ったら、

それが人間であつても、目の前から排除しないと、気が済まないのか、もっと単純に暇つぶしで、

面白いから、やっているだけなんだろうか。

やっぱり、門塾さんたちの考えていることは、全然、理解出来ません。

補習の後半に入ると、大体の教科の授業が、午後の途中から、それまでに勉強した問題が配布されて、それが出来たら提出して、全問合っていれば、その日の補習は終了で、そのまま帰っていっていう、授業ばかりになりました。

この問題は、説明した内容がそのまま出てくるから、ノートさえ取っていれば、ほとんど写すだけでいいので、今週は、3時から遅くても4時くらいには、補習から解放されるようになりました。

なので、どう対応するかを決めていなかったけど、とりあえず、校庭へと向かいました。

校庭では、陸上部の練習をやっていて、大威さんや、間宮さんも参加していました。

大威さんはすぐに私に気づいて、こっちに向かって、会釈してくれたので、わたしはそれに答えて、軽く手を振りました。

前にお弁当を食べたベンチに近づくと、その近くで、練習風景を見ている人たちが、立っていました。

でも、その人たちは、

陸上部と、繋がりがあるような感じではない、  
ガラの悪そうな感じの人たちで、  
私服だから、うちの学校の生徒かどうかも判りません。

その人たちは、練習中の人たちを見ながら、  
何かを話していましたが、  
そのうちに、それを見ていたわたしに気づいて、  
すごく睨まれてしまったので、  
この日はそのまますぐに、下校しました。

ちょっとあの人たち、全然別の人だけど、  
なつめと襲われた時の人たちの雰囲気と、  
似ていたような気がします。

まだあの時のショックが抜けていなくて、  
怖そうな人は、みんなそう見えちゃうだけかなあ……

とりあえず今週中は、早く終わる日もありそうなので、  
間宮さんへ、どう接するかについて、  
考えておこうと思います。

7月28日 間宮さんとの話

今日は、やっと間宮さんと、  
話すことが出来て、誤解は解けたと思うけど、  
新たな誤解を、もたれてしまいました。

実は昨日も、陸上部の練習を見に来ていて、



わたしは、声を掛けようとしたんだけど、  
間宮さんには、完全に無視されてました。

その様子を見つめていた、大威さんは、  
わたしと間宮さんを、交互に見つめていたのが、  
見ていて判りました。

今日もわたしが見に来ているのを、間宮さんは見つけて、  
5時半になって、練習が終わってから、  
一年と一緒に片づけをしていた、間宮さんは、  
わたしに先に気づいた大威さんに、  
何かを言われているのが見えました。

その後間宮さんは、片付けようとしていた道具を、  
大威さんに渡してから、こっちへとやって来ました。

その顔は、前みたいに起こっている感じではないけど、  
ちょっと呆れているように見えました。

「お前、私に言いたい事があるのか、  
だったら、早く済ませてくれ。」

お前に毎日、そこにいられると、  
葵が、練習に集中出来ない。  
で、何なんだ？」

間宮さんは、溜息をつきながら、  
わたしにそう言いました。

前と違って、間宮さんからは、  
わたしを脅してきた時みたいなの、威圧感もなくて、

教室では見たことない、普通の態度で接してきましたが、逆に、間宮さんの方が、どこか身構えている、そんな印象を受けました。

これなら、わたしも緊張したりしないで、ちゃんと主張出来ると思って、

わたしは、大威さんに間宮さんのことを聞いた理由とか、練習を見ていた理由も、正直に言いました。

多分、下手な嘘をついても見破られそうだったし、間宮さんはそういうのを、一番嫌っているんだろうから、どう思われるのが、心配なところもありましたが、もう、なるようになれ！

と開き直って、素直に話しました。

それは、聞きようによっては、告白にも取れる感じになってしまい、それを黙って聞いていた、間宮さんは、わたしが話しているうちに、身構えている感じは、なくなっていくたんですが、その代わり、表情はどんどん曇っていくのが、見ていて判りました。

わたしは、絶対勘違いされてる！  
とあって、必死にそういう意味じゃないことを、説明したんだけど、すればするほど、余計に、そう思われていくようで、  
どんどん深みにはまってしまいました。

最後には、どう言ったらいいか判らなくなっ

言葉を探して考えていると、  
もう判った、と言うような手振りで、  
「つまり、お前は走っている私に惹かれて、  
私の事を知ろうとしたが、  
直接は聞けないから、葵に話を聞いた。  
それから、私の姿を見たくて、  
練習を見ていた、そう言うことだな。  
つまりお前は、レズなのか？  
悪いが、女と付き合う趣味はないし、  
女の体にも興味はない。  
だから諦める」  
と、いきなりフラれました。

ああ、それを全力で否定していたのに、何となく、  
こうなるんじゃないか、とは思っていたけど、  
やっぱり、全然理解してもらえてない……

そう言うんじゃないかと、  
わたしはただ純粹に、かつこいいなあって、  
思っただけなのに……

わたしが、まだ何かを言っているのを見て、  
間宮さんは、とても面倒そうに、

「判った判った、これ以上お前を邪険に扱っていると、  
葵がそれを気にして、練習の邪魔になる。

葵は今大事な時なんだ、練習に集中させたいから、  
一応、お前とは友だちって事で、葵には伝えておく。  
お前と付き合う気はないが、話には応じてやる。  
だから、それでお前も手を打ってくれ」

と、お願いされました。

間宮さんから、お願いされるなんて、予想していなかったから、とても驚きました。

そこまでするんなら、もう1つ、今まで、ずっと気になっていた、わたしの呼び方、お前って言うのを、やめて欲しい、と言ってみました。

間宮さんは、渋々ではありましたが、でも意外とあっさりと、受け入れました。

「ええと、三崎、だったな。」

今度からは、ちゃんと苗字で呼ぶ。

「これでもういいだろ」

そうやって間宮さんは、片づけへと戻っていきました。

戻って行った間宮さんと、話している大威さんは、とても嬉しそうにしている、部室へと戻る時に、わたしの方にも、会釈をしていました。

いろいろと、誤解が生じてしまったような、そんな気もするけど、

間宮さんとは、友だちになりました！

とりあえずはこれで、二学期からは、怯えることなく、授業に集中できるはず。

でも、間宮さんの態度、

わたしが、間宮さんに気があって、色々と聞いていたと、勘違いし始めてから、態度が変わっていった気がします。

それって、逆に考えたら、

そういう恋愛がらみではない理由で、

近づいていたと、思ったから、

あんなに怒っていた、とも思えてきて、

間宮さんには、何か人に知られたくない秘密とか、あつたりするのもかも、とか思いました。

それはそれで、気になるけど、

多分、それを探ろうとすると、

本当に、ひどい目に遭うような気がします。

でも今は、それよりも、

まず、誤解を解かないとなあ……

7月31日 補習終了！

今日は1日、再試だけの日でした。

朝から、ずっとテストでしたけど、

全ての問題は、授業でやった問題がそのまま出てるから、それほど難しくはありませんでした。

問題を解き終わったら、先生に提出して、その時間は、教室を出ても良かったから、

4時間目のテストは、早く終わらせて、荷物を持って、教室の外へ出ました。

食堂はやっていないけど、解放されていたので、そこで、お弁当を食べることにしました。

すると、午前中の練習を終えた、部活の人たちらしいグループが、お弁当やコンビニの袋を、手に持って入ってきました。

そのいくつかのグループの中の1人が、わたしに近づいて来ました。

それは、大きなお弁当箱を持った大威さんでした。

大威さんは、まずわたしに、  
間宮さんと話をしに来たこと、お礼を言うてから、前に貸した、ハンカチを返してくれました。

その後、ちょっとだけ話をして、  
大威さんは、間宮さんのことを話してくれました。

間宮さんは、わたしと話をした後、  
しばらくは変な顔をして、  
はじめてレスを見た、と言っていたようで、  
わたしのことを、気味悪がっていたそうです。

大威さんは、それはちがうと思うと、  
間宮さんに伝えただけ、今のところ、  
その認識は変わっていないそうです。

やっぱり、誤解されたまんまなんだ……

それから、最近繁華街で、

高校生同士の傷害事件が、多いらしくて、

顧問の先生から、巻き込まれないように、

気をつけると、言われていて、

噂だと、どうも風高の生徒が狙い撃ちにされている、  
ってという話もあるのを聞きました。

それと、陸上部は来月は強化合宿だそうです、

8月2日から10日間と、

16日から10日間の2回の合宿で、

8月は、学校での練習は、ないんだそうです。

来月はプールの補習があるから、

間宮さんと、ちゃんと話をして、

変な誤解を解くチャンスはあるな、

と思っていたのに、合宿でいないんじゃない、

このまま、二学期になっちゃうってことです。

それは、すごく嫌だなあ。

間宮さんだって、告白を断った相手が、

ずっと、自分の隣にいるってのも、嫌だろうし。

だから、何とか夏休み中に、

誤解を解きたかったんですけど、

だけど、家も連絡先も知らないから、

どうしようもありません。

だったら、今日のうちに話すしかないかと思って、  
間宮さんとは尋ねると、今日は用事があるとかで、  
午前中で、帰ってしまったんだそうです……

これで、完全に弁解のチャンスはなくなりました。

仕方がないから、二学期が始まったら、  
なるべく早くに、話をするしかないようです。

大威さんにも、それは誤解だって言うのを、  
かなり力説して、しっかり把握させておいて、  
大威さんから機会があれば、  
話しておいて欲しい、と伝えておきました。

大威さんは、

「分かりました！」

と、大きく返事をして、部活の仲間のところへ、  
戻っていきました。

相変わらず、大威さんは元気でかわいいです。

この後わたしは、お弁当を食べ終わると、  
教室に戻ってから、

午後の授業が始まるまで、寝ていました。

午後も、テストは大半が時間内で終わったけど、  
残り時間はずっと、机で寝ていました。

そして、最後の教科のテストも終わって、



そのまま、まっすぐにうちへと帰りました。

これでとりあえず、補習は無事に終了です。

来月からは、プールの補習とバイト、  
それと、絵を描こうと思っています。

なんだか色々、

怖い話とか、嫌な話も聞いたけど、  
それはそれとして、

これで、やっとわたしにとっての、  
本当の夏休みがやってきます！

2010年 8月 その1(前書き)

変更履歴

2011/04/14	記述修正	一回り	ひと回り
2011/04/24	記述統一	1ヶ所、2ヶ月、2ヶ月	
1ヶ所、2ヶ月、3ヶ月			
2011/04/27	記述統一	一種類、二種類、三種類	
1種類、2種類、3種類			
2011/04/28	記述統一	一枚、二枚、三枚	1枚、
2枚、3枚			
2011/04/30	記述統一	一匹、二匹、三匹	1匹、
2匹、3匹			
2011/06/07	記述統一	一つ、二つ、三つ	一つ、
2つ、3つ			
2011/06/14	誤植修正	始め	初め
2011/07/30	記述統一	一人、二人、三人	1人、
2人、3人			

2010年 8月 その1

8月3日 間宮さんとの遭遇

やっと、嫌で嫌で仕方がなかった補習も終わって、わたしの夏休みがやって来ました。

まずは、大雑把なスケジュールを立てました。

前半は、プール補習がメインだけど、今年は一月中泳ぐ、とかはしないで、午後からにして、空けた午前中の時間で、良い天気の際は、描きたい空を撮りに、御家河へと行きます。

で、バイトは夕方から入れるようにして、去年みたいに、へろへろにならないように、気をつけて予定を組みました。

8月の後半になったら、プール補習は終わるから、今度はバイトをメインで、バイトに行かない日に、絵を描くようにする、ざっとこんな予定です。

忍さんからもらった、青いクロツキー帳で、今月中に1枚は、きれいな雲の空の絵を描くのが、この夏休みの、わたしの目標です！

その為には、まず描きたい空に出会わないと、

話が進みません。

で、青空の見える日は全部、午前中に、御家河へと行くようにしていたら、予想しない人を見かけました。

それは、なんと間宮さんです！

たしか、陸上部は今週から10日間、合宿に行くって、大威さん言っていたけど、間宮さんは、参加していなかったのかな？

大威さん、そんな風には言っていなかったけど……

でも目の前で、河川敷のグラウンドを走りこんでいる、あのきれいなフォームで走る姿は、間違いなく、間宮さんだしなあ。

わたしはしばらく、間宮さんと思える人が、走っている姿を眺めていました。

そしたらその人、こっちに気がついて、走って近づいてきました。

それはやっぱり、間宮さんでした。

わたしが、なんでここにいるの？と聞く前に、ちよつと怖い顔で、

「三崎、何でお前、ここにいるんだ？」と、逆にわたしが言おうとしたことを、

先に言われてしまいました。

わたしは、散歩している途中だと伝えたと、  
間宮さんは、疑いの目でわたしを見ながら、  
「それ、本当か？」

実はストーカー、とかじゃないのか？

デジカメまで持つてるしな。

今、正直に言えば、今回は見逃してやる。  
だから白状しろ」

と、右手を握り締めながら、言われました。

告白疑惑の次は、ストーカー疑惑！？

間宮さんの中での、わたしのイメージは、  
どんどん落ちていくばかりのようです。

わたしは、デジカメに撮ってあった画像を見せながら、  
絵を描く為の、空の写真を撮っていたんだと、  
必死になって弁解したら、

それはひとまず、信じてくれたようで、

間宮さんは、溜息をついてから、

「それならそう先に言え。」

「つたく、紛らわしい奴だ。」

「いいか、1つだけ言っておく。」

私をここで見た事を、絶対に葵には伝えるなよ。

もし言ったら、殺す」

と言い捨てて、

わたしの告白の誤解を解く暇を与えずに、  
走って行ってしまいました。

間宮さん、なんでここにいたんだろう、  
もしかして、家つてこの近くのなかもなあ、  
でも誤解を解く前に、後つけたりしたら、  
それこそ、ストーリーに認定されて、  
その場で半殺しにされそうだなあ。

まあ、合宿に行っていない理由はともかく、  
告白の弁解するチャンスが、  
今月中にも、まだあるかも知れないのは、  
わたしにとっては、ラッキーだったかも。

間宮さんへの誤解を解くのも、  
今月の目標に追加です！

8月6日 水泳補習での噂話

今年の水泳補習の目標は、  
潜水50m、と言いたいところですが、  
それよりもクロールとか平泳ぎを、  
もうちょつと、早くなりたいと思って、  
がんばって泳いでいます。

だけど、どれだけ必死で泳いでも、  
ちつともスピードは上がらなくて、  
力むと、その分沈んでしまい、  
かえって遅くなっているような気がします。

水泳の追試は、潜水でごまかす予定だから、

テストという意味では、大丈夫なんだけど、この遅さは、どうしたら直せるのか、判らなくなってきました。

プールサイドで休憩していた時に、そばにいた人たちが、話していたんですが、先月から発生している、高校生の暴行事件で、最近、今までにない集団がいるらしいです。

何でも、その集団の人たちは、みんな黒ずくめの格好をしていて、その中に1人、真夏の8月だというのに、罽褌のニットマスクを被った人が、いるんだそうです。

で、その人は、とんでもなく強いつて言う噂だそうで、この集団が、ターゲットにするのは、体育会系の相手とか、ケンカが強いとか、そういう相手を専門に襲っている、らしいです。

その話をしていた人の、友だちの友だちが、見たとかで、話を聞いていた人は、それどこの世紀末だよ、とか言つて、相手にしていませんでした。

でも、マスクの話はともかく、傷害事件の件数は、先月より増えているみたいで、このプールの補習でも、先生たちは、用もないのに繁華街へは行かないように、とか、

巻き込まれないように気をつけると、  
注意しています。

根も葉もない噂って言うのは、流れないと思うから、  
その、髑髏のマスクの人がいる集団の話も、  
もしかしたら、本当かも知れません。

でもわたしは、ケンカは強くないから、  
その人たちに襲われることは、なさそうです。

だけど、最近は物騒な話ばかり、  
聞くような気がします。

去年までは、こんなに荒れてなかったような、  
気がするんだけど、それは単に、  
わたしが世間に、疎かったからでしょうか……

8月9日 間宮さんVSヒョウちゃん

今日も天気は快晴で、  
ちよつと少ないけど、雲も出ていたので、  
少しでも、素材は多い方がいいかと思い、  
御家河へとやって来ました。

ここのところ、連日ここへ来て、  
いい雲の写真を撮りつつ、  
間宮さんを、待ち受けているんですが、  
いつも、走って逃げられています。



一応わたしも、走って追いかけてみるんですが、やっぱり全然追いつきません。

今度は、自転車で来ようと思います。

それと、今週の月曜日あたりから、見かけるようになった、

『野良犬に注意!』の看板が、気になっています。

先週くらいから、この河川敷に出没している、逃げ出したか、捨てられたかした犬らしいのですが、その犬、ドーベルマンで、何人か目撃者がいたり、襲われそうになった人が、出ているんだそうです。

わたしが心配しているのは、ヒョウちゃんです。

ヒョウちゃんはこの河川敷で、最強だと思っていたけど、いくらなんでも、大型犬相手じゃあ、勝てないんじゃないかな、と思うんです。

ヒョウちゃんは、ちょっと大きいけど、基本的には、猫ですし。

だから、犬が捕まるまでだけでも、出来れば、ヒョウちゃんを保護したいけど、触れもしない、ヒョウちゃんを保護なんて、それは、絶対に無理そうだし、困っています。

そんなことを考えながら、土手に座って、

空を眺めていたら、土手の下から突風が吹いてきて、右に顔を向けて風を避けると、上流の方の遠くから、間宮さんが、こっちに走ってくるのが見えました。

わたしは、今日こそ話を聞いてもらおうと、立ち上がった時、今度は後ろから、聞きなれている唸り声が、聞こえてきました。

振り向いて見ると、下流の方から、今ちようど、心配していたところだった、ヒヨウちゃんが、道の真ん中を進みながら、こっちに向かって、歩いてきていました。

この時わたしは、この2人、じゃなくて、1人と1匹は、出会っちゃいけない相手同士だったんじゃないだろうか、とても、心配になってきました。

わたしの、嫌な予感が当たってしまい、間宮さんも、ヒヨウちゃんも、相手の姿を確認すると、10mくらい間を開けて、わたしをはさんで、立ち止まりました。

え、なにこれ、まさか決闘とかじゃないよね!?

ここでわたしは、変な空気になる前に、どっちかを止めようとして、間宮さんの方を見たら、もうすでに、すごい殺気を込めた目で、わたしの奥にいる、ヒヨウちゃんを睨んでいて、ひしひしと、伝わってくるその殺気は、いつもの教室や、体育館裏で感じたものとは、

桁違いの強さです。

体勢も、格闘技の構えみたいに、身構えているのが、判りました。

一方、ヒョウちゃんの方も、その殺気に反応して、今までに聞いた威嚇とは、比較にならないくらい、すごく大きな唸り声で、ずっと威嚇しています。

わたしは、だんだん近づいていく2人に対して、どうしていいか判らなくて、

真ん中に立つたまま、交互に2人を見ながら、ただひたすら、おろおろしているばかりでした。

2人の距離は、どんどん縮まっていって、あと5mまで近づいた時、間宮さんはわたしに、

「三崎、邪魔だ、どけ！」

と、怒鳴られて、わたしは慌てて、土手の斜面に避けたら、こけました。

間宮さんも、ヒョウちゃんも、どちらも視線は外さないまま、近づいていきます。

ヒョウちゃんは、ずっと唸りっぱなしで、

背中や尻尾の毛も、逆立っているし、

その長い尻尾も、高々と上げて、

もう全力で、戦闘態勢にしか見えなくて、

ここまで本気のヒョウちゃんは、

今までに、見たことはありません。

だけど、それを上回る間宮さんの殺気を感じて、わたしはヒヨウちゃんの方が、  
身が危ないと感じました。

わたしは間宮さんに、

どうか、命だけは助けてあげて！

と、お願いしつつ、ヒヨウちゃんには、

この人は危ないから逃げて、ヒヨウちゃん！  
と、叫びましたが、

2人とも、聞いているようには見えません。

そして、あと2mのところまで近づいて、

お互いに、手が届く距離になってしまい、

もうダメだ！

と思った、わたしは、

こうなったら、自分が盾になるしかない！

と、決死の覚悟を決めて、立ち上がった時、

ヒヨウちゃんの声が止んだのに、気づきました。

顔を上げて、土手の上を見てみると、

ヒヨウちゃんの戦闘態勢は、治まっていて、

わたしがいる逆の方の、道の端に寄って、

道を譲っているのが見えました。

その目は、じっと間宮さんを睨んでいましたが、

尻尾も丸めて、道路に伏せていました。

ヒヨウちゃん、ヒヨウちゃんが、負けた……

そんなヒヨウちゃんの姿を見下ろして、

間宮さんは、勝者の威厳を漂わせながら、悠然と通り過ぎていき、わたしはそれを、啞然としながら、見ていました。

……初めてです、

ヒヨウちゃんが、道を譲るのを見るの。

ヒヨウちゃんは、負けたことが、

よっぽど悔しかったのか、間宮さんが遠ざかった後、フギヤー！

と、甲高い声で叫んだと思ったら、

全力疾走で、土手を駆け下りて、

河川敷の藪の中へと、消えていきました。

はあ、どっちも怪我がなくて良かったけど、

よく考えてみたら、どちらに対しての用事も、

叶えられなかったことに、後で気づきました。

間宮さんには、また話出来なかったし、

ヒヨウちゃんは、保護出来なかった……

まあ、今日は一大事だったんだから、

仕方なかったかなあ……

それにしても、間宮さん、

あの本気のヒヨウちゃんを、屈服させるとは、

やっぱり只者ではなかった。

あの強さは、もしかして榊さんにも匹敵するかも？

さすがにプロのボディガードの人には、  
勝てないかなあ。

まあ、榊さんほどでないにしても、  
普通の足が早い人、ではないのは、  
間違いないです。

間宮さんのこと、気になります……

8月12日 雲の写真

今日までかなり、晴れていた日が多かったので、  
ほぼ毎日のように、御家河へと通いました。

そのおかげで、描きたい空の写真は、  
何枚か撮れました。

すごく大きくて、雄大な入道雲や、  
細長くまっすぐ真横に伸びた、レンズ雲の群れ、  
あんまりうまく撮れなかったけど、彩雲とか、  
放射状に伸びる、天使のはしごの空とか、  
けっこう、たくさん撮ったんです。

だけど、今回はもらった青いクロッキーに描くから、  
青空に浮かんだ、白い雲の写真の中から、  
一番気に入ったのにしました。

それは、青い空にたくさん浮かんだ、

色々な大きさの、真っ白なもつれ雲が、  
まるで、大きさだけ違うスタンプで押したみたいに、  
みんな同じ模様になっている、空の写真です。

大きな入道雲のもいいかな、と思ったけど、  
雲の立体感を描くのは、まだ自信がなく、  
こっちのもつれ雲の方なら、  
鉛筆でも描きやすそうだし、  
それに、早く出来そうだからってのもあります。

描く写真は決めたから、  
これからは、これを描くだけです。

がんばって、今月中には仕上げて見せます！

8月14日 葵ちゃんに会いました

今日は、水泳の補習の最終日で、  
テストを受けてきました。

あれからずっと、クロールや平泳ぎも練習したけど、  
やっぱり全然上達しなくて、  
練習用のコースも、一番遅い列に並んで泳いでも、  
たまに、後ろから追いつかれてしまいました。

で、結局これだと、試験が通りそうもないから、  
テストは予定通りに、潜水で泳いでしまいました。

まあまあ、本気で泳いだから、  
けっこう良いタイムだったんだけど、  
計測していた、いつもの体育の先生からは、  
次は潜水禁止にするからな、  
と、釘を刺されました。

そしたら、わたしは絶対受かりません。

この先生は、それを分かっているのに、  
あえて、言っている気がして、  
ちよつとイラツとしました。

次回は、いかにごまかして泳ぐかを、  
よく考える必要があります。

この日も、終わる時間ぎりぎりまで、  
泳いでいたから、帰る頃にはもう、  
夕方になっていました。

その帰り道、駅前を通ると、  
今夜は、花火大会があるせいか、  
たくさん、浴衣姿の人を見かけます。

その大半は、カップルですけどね。

その中で、女の子だけのグループがいたから、  
そっちを見ていたら、その中の1人の女の子が、  
こっちへと駆け寄ってきました。

最初は、気づかなかっただけど、



よく見ると、それは大威さんでした。

「三崎先輩、こんにちわ！」

あ、もうこんばんわ、かな？」

と大きな声で言って、頭をしっかり下げて、挨拶をしてきた大威さんは、

これから地元の友だちと、花火大会に行くところで、涼しげな浴衣姿でした。

紺地に白と淡いピンクの花の模様の浴衣に、薄い紫色の造り帯で、よく似合っていて、とてもかわいいです。

わたしが、その浴衣を褒めると、

大威さんは、嬉しそうに笑って、

「ありがとうございます！」

これ、とっても気に入っているから、すっごく嬉しいです。

この花、わたしの名前と同じ、葵の花なんですよ、

たしかタチアオイ、だったかな」

と言って、くるっと回って見せました。

へえ、名前と同じ花なんだあ、

そういう風に、わたしも合わせると、

水面とか、流水の柄とかなんだけど、

そんなのあるのかなあ。

葵って名前も、かわいいね、とわたしが言ったら、

「あ、そうだ、三崎先輩、

わたしのこと、葵でいいですよ。

そっちの方が、呼ばれなれてますから。  
クラスでも、陸上部でも、

おんなじ読み方の『大井』って人がいて、  
わたしの名前の方だと、あまりかぶらないから、  
葵って呼ばれてるんで」

と言われて、そういえば間宮さんも、  
大威さんのことを、名前で呼んでいたのを、  
思い出しました。

そう言うことなら、とわたしは答えて、  
じゃあ、葵ちゃんって呼ぶよ、と伝えました。

それを聞いていて、ふと気になったのが、  
葵ちゃんも、間宮さんのことを、

『間宮先輩』ではなくて、  
名前の方の『みこと先輩』って呼んでいることです。

これを、葵ちゃんに尋ねると、

「あ、それはみこと先輩に、お願いされたんですよ。  
わたしがいつつも間宮先輩、間宮先輩って、  
声をかけていたら、

苗字で呼ばれるのは、好きじゃないから、  
名前で呼んでくれって、言われました。

だから、その時から、  
みこと先輩って、呼ぶようにしています。  
たしか、みこと先輩が入部して、

1ヶ月くらいしてからだったから、  
6月に入ってからですね」  
と、答えてくれました。

この後、合宿の話聞いたんだけど、葵ちゃんは、間宮さんが急に、田舎の実家へ帰らなくちゃいけなくなってしまうって、合宿に参加出来なかったことを、とても、残念がっていました。

9月にある、新人戦の地区予選大会も近いから、せめて、前半か後半の、どっちかだけでも、一緒に練習したかったのに、と。

あれ、やっぱり、葵ちゃんは間宮さんが、こっちにいることは、知らないんだ。

だから間宮さん、わたしに口止めしてたのか。

わたしは、自分の命が惜しいので、葵ちゃんには、間宮さんを見かけたことは、知らせないでおきました。

ごめんね、葵ちゃん。

そして、葵ちゃんは一礼してから、友だちのところへと、走って戻っていきました。

何で間宮さんは、あんなにかわいがってる、葵ちゃんにまで、そんな嘘までついて、こっちに残っているんだろっ……

それと、苗字で呼ばれたくないってのも、

どういうことかなあ。

ふと思い出したのは、なつめのことでした。

間宮さんにも、この苗字に関係する、  
嫌な過去とかが、あるのかも。

間宮さんのこと、  
謎がどんどん、増えていくばかりです……

8月16日 ヒヨウちゃんが襲われてました！

今日は、天気もまあまあ良いので、  
絵を描きに、いつもの場所に行ってきました。

空と、雲と、太陽の位置が違うので、  
ほとんど、写真を見ながら描くんだけど、  
下の方にちよつとだけ描く、山とかは変わらないので、  
実際の風景と、デジカメの画像を見比べながら、  
続きを描いていたら、とても気になるものを、  
目撃しました。

それは最初、河川敷の下流側にある茂みから聞こえた、  
2種類の動物のすごい鳴き声で、  
1つは犬の声で、もう1つはヒヨウちゃんでした。

その声の方向を見ると、茂みの中で、  
2匹でケンカしてるようで、

鳴き声と一緒に、草が揺れたり、倒れたりしていたんです。

そのうち、茂みを飛び出して一気に走り出してきて、わたしのいる土手の下を、上流に向かって、すごい勢いで、2匹が走り去って行ったんですが、ヒヨウちゃんの相手は、

あの看板のドーベルマンでした！

看板にあった写真では、

もっと小さくて、大人しそうだったけど、写真は、同じ犬種の写真だったみたいで、本物は写真よりも、もっと凶暴な感じで、ひと回りは大きくって、ヒヨウちゃんと比べると、2倍くらい大きいし、かなり強そうな犬でした。

明らかにその犬は、ヒヨウちゃんを標的にして、追いかけていました。

わたしは思わず立ち上がったけど、2匹はすぐに、上流の大きな茂みに、突っ込んで行ったから、その後どうなったのかも、分かりません。

わたしが心配していたことが、本当に、起こってしまったみたいです。

あんな大きな犬相手だと、いくらヒヨウちゃんでも、もしかすると、と考えてしまって、その後は、絵も手につかなくなってしまう、すぐに走り去った方へ行って、

河原の茂みを探してみたけど、見つかりません。

日が暮れるまで、自転車であちこち見て回ったんだけど、この日は結局、あれ以降ヒョウちゃんは、見つけることは出来ませんでした。

ただ大きいだけの犬なら、散歩している大型犬とかを、威嚇して退かしていたのを、何度か見たことあるから、大丈夫かなって思っていたけど、

あの、ドーベルマンって、たしか警察犬とか、軍用犬とかになる犬だし、さっき見たあの犬は、ちゃんと、しつけされていない感じがしていて、それが、とても気がかりなんです。

ヒョウちゃん、無事だといんだけど、とても強そうな犬だったので、すごく心配です……

2010年 8月 その2(前書き)

変更履歴

2011/03/22	記述統一	一所懸命	一生懸命
2011/04/15	記述統一	(温度)	1度、2度、3度
1、2、3			
2011/04/24	記述統一	1ヶ所、	二ヶ月、二ヶ月
1ヶ所、2ヶ月、3ヶ月			
2011/06/16	誤植修正	始め	初め
2011/08/02	記述統一	一人、二人、三人	一人、
2人、3人			

2010年 8月 その2

8月20日 ヒヨウちゃんの捜索

16日に、ヒヨウちゃんが、  
追いかけていたのを、見てから、  
バイトは全部夕方からに変えてもらって、  
昼間はずっと、御家河へと来ています。

ヒヨウちゃんのことを、気になってしまって、  
河原をずっと探していました。

あの看板のドールベルマンは、まだ捕まっていなくて、  
看板も、前よりも増えているから、  
自分も襲われるかもしれない、と思うと、  
怖いけど、どうしても、

ヒヨウちゃんのことを気になります。

とても嫌な予感がしていて、  
ヒヨウちゃんを、早く見つけないといけないって、  
強く感じるんです。

でも今日で4日経ったけど、まだヒヨウちゃんの姿は、  
見かけていません。

この間にも、間宮さんと何度か会ったけど、  
今は、それどころではなくて、  
わたしからは声もかけずにいて、間宮さんの方は、  
わたしが何をしているのかが、気になったようで、



こつちを見ていました。

毎日、最後にヒョウちゃんを見た場所を中心に、河原にある、草むらとか、藪の中とかを、あちこち歩き回って、探しているけど、見つかるのは、黒っぽいゴミばかりです。

真夏の炎天下の下で、30 を超える猛暑の中、1日中、草むらを歩き回っているのは、とても大変です。

茂みに何がいるか、分からないから、木の枝とか草から、体を守るために、完全武装しています。

厚手の長袖のシャツとパンツに、靴下と、スニーカー履いて、

更に、帽子と軍手まで、してるんです。

この服装が、とても暑苦しくって、何度もクラクラして、倒れそうになってしまい、その度に、休憩しないといけないから、なかなか思うようには進みません。

でも、これだけの格好をしていても、家に帰って着替えると、顔や体のあちこちに、擦り傷や、切り傷が来ています。

忍さんには、顎の下の傷に気づかれた時に、バイトの時間を、変更したこともあって、

また心配されてしまい、わたしは忍さんに、バイトのシフトを、直前で変更してしまったことを、ここで改めて、謝りました。

ヒヨウちゃんは、うちの飼い猫じゃないし、これは、わたしが気になっただけで言う、直感だけで、やっていることだから、誰にも頼ることは、出来ないし、手伝ってもらえるものではない、と思っています。

だから本当は、バイト先に迷惑をかける訳にも、行かないんだけど、もうすでに、迷惑をかけてしまっていて、とても、申し訳ないです……

でも、あくまで直感なんだけど、今ヒヨウちゃんを探さなきゃいけないって、そんな気が、すぐくするんです……

8月23日 ヒヨウちゃんが……

ヒヨウちゃんを探し始めてから、7日目です。

最近、毎日の疲れもたまっているんだけど、ヒヨウちゃんのことを、気になってしまって、夜もあんまり、眠れません。

おとといと昨日は、大雨が降って、

地面が、とてもぬかるんでいたりして、歩くのも大変なくらいでした。

そのせいか今日は、足が筋肉痛になっていて、歩くのも、ちよつと辛かったけど、ガマンして、御家河に向かいました。

この日も一生懸命探したけど、結局見つからなくて、もう4時になってしまい、そろそろ、戻らないといけない時間になりました。

引き上げようとした時に、河の浅瀬の方に、目を向けてみたら、何かが石に引っかかって、何か大きなものが、浮いているのが見えました。

ヒョウちゃんにしては、大きすぎるとは思ったけど、気になったので、近づいてみると、それは、あのドーベルマンでした。

ドーベルマンは、体中引っかき傷だらけで、お腹が裂けたりは、してないけど、首が直角に折れ曲がっていて、肋骨があるはずの胸も、えぐれてるみたいに、へこんでいて、明らかに、死んでいるのが分かりました。

そばの大きな岩には、大量の血が付いていて、上を見上げてみると、ちょうど橋の下でした。

多分、この犬は橋から落ちて、この岩に、叩きつけられたみたいです。

せめて、引き上げてあげようと思い、近づいていく途中で、犬の死体は、引っかかっていた石から、外れてしまい、川下へと、流されていってしまいました。

わたしはそれを、何も出来ずに眺めていました。

ヒョウちゃんは、戦いに勝ったのかも知れない。

なら、無事でいる可能性は上がったんじゃないか、そう思えて、あの犬には悪いけど、ちよっとだけ、嬉しくなりました。

でも逆に考えてみたら、ドーベルマンが、あれだけ、傷だらけだったんだから、ヒョウちゃんだって、同じくらい、やられているんじゃないか、そう思ったら、逆に不安が増してきました。

あのドーベルマンが、ここに落ちたのが、戦っている最中だったとしたら、

ヒョウちゃんも、この辺にいるかも知れない。

わたしは、この辺りの茂みを中心に、見て回っていたら、泥まみれの黒い塊が、水溜りに、半分沈んでいるのが見えました。

またゴミかなあ、と思ったけど、

大きさが、ヒョウちゃんに近くて気になって、

近づいてよく見てみたら、  
その塊には、長い尻尾が生えているのが見えて、  
もしかして、と思つてそれを触つてみると、  
それは、ボロ切れみたいになった、  
ヒヨウちゃんでした。

悪い予感、ちょっとした想像していたけど、  
それが目の前で、実際に起きてしまうのは、  
比較にならないほどの衝撃で、

わたしはしばらく、変わり果てたその姿を目の前にして、  
涙ぐんだまま、動けなくなっていました。

あまりのショックで、気が遠くなるのを感じたけど、  
がんばつてそれに近づいて、よく見てみると、  
ヒヨウちゃんの体は、泥と血にまみれていて、  
今まで見てきた、元気だった姿からは、  
想像出来ないくらい、ひどい状態でした。

足も力なく、投げ出されていて、  
目も半開きのままで、瞬きもしていなくて、  
口も半開きのまま、全く動いていません。

おそろおそろ、ヒヨウちゃんに触つてみても、  
その体は、とてもひんやりしていて、  
元気な時には、絶対に許さなかったのに、  
今は、わたしに触られても、何の反応もありません。

やっぱりヒヨウちゃんも、あの犬にやられたんだ。

悲しい現実を突きつけられて、涙が溢れてきました。

こんなことになる前に、前に見かけた時、  
どんな目にあっても、捕まえておけばよかった。

なんである時、わたしはそうしなかったんだろう。

今さら、そんなことを思っても、

もう手遅れだと、自分でも判っているけど、  
どうしても、悔やんでしまい、

そう考えてしまうと、余計に辛くなりました。

わたしはヒヨウちゃんの体を、そこから引き揚げて、  
平らな乾いたところまで、運んでから、

軍手を外して、顔の回りや体の汚れを取ってあげました。

ごめんね、ヒヨウちゃん、

助けてあげられなくて。

わたしは、ヒヨウちゃんの体を抱き上げて、  
両腕で抱きしめました。

こんな姿になる前に、

こうして、抱いてあげたかったな……

ヒヨウちゃんの、濡れた冷たい顔が、

わたしの頬に、当たるのを感じて、  
もし、なついていたら、

わたしのこと、舐めてくれたりしたのかな、  
とか思ったら、余計に悲しくなってしまう、  
ポロポロ泣いてしまい、涙が止まりません。

わたしが、落ち込んでる時とか、悩んでいる時とか、ヒョウちゃんには、いっぱいお世話になったのに、わたしは大したこと、してあげられなかった。

こんなことになるんだったら、もっと、会いに来ればよかった……

この時、かすかに風の吹く音が、短く聞こえました。

だけど、周りの草は揺れていなくて、風は吹いていません。

わたしはすこし冷静になって、ヒョウちゃんの顔に、耳がつくくらいに近づけて、耳を澄ましてみると、かすかに息をしている音が、聞こえました。

ヒョウちゃんまだ生きてる！

でも、虫の息つばいのは、間違いなくって、すぐに病院へ連れて行かないと！  
と思ったけど、この近くの病院なんて判りません。

でも急がないと、ヒョウちゃんが死んじゃう……

わたしは、どうしたらいいか分からなくなってしまい、もう泣いてる場合じゃないのは、分かっているのに、涙は止まらないし、頭は真っ白になってしまいました。

そんな時に頭に浮かんだのは、忍さんでした。

もう、細かいことを考える余裕もなく、  
とにかく助けてほしくて、忍さんに連絡しました。

わたしは、忍さんが出た途端に、  
ヒョウちゃんが死にそうなんです！  
とだけ、泣きながら声に出しました。

多分、忍さんは最初、  
何のことだか、分からなかったんだと思うけど、  
わたしの普通じゃない状態を、察してくれて、  
まず、落ち着くように言った後に、  
ヒョウちゃんが、何なのかを尋ねられました。

わたしは、猫です、と短く答えると、  
忍さんはそれだけで、状況を理解してくれたようで、  
わたしを落ち着かせるための、  
ゆっくりとした、口調に変わりました。

「みなもちゃん、まずは落ち着いて、  
深呼吸しながらでいいから、私の話を聞いて。  
その辺りって、動物病院とかありそうな場所？  
街中じゃないのなら、まず、  
病院のありそうな方向に、移動して。  
それから、今どこにいるかを教えて」

忍さんの声を聞いたら、すこし落ち着いてきて、  
とにかく言われたことをやるう、と思つて、  
わたしは、ヒョウちゃんを抱えて、  
河原の土手の下まで戻ってから、



橋の名前を確認して、もう一度忍さんに連絡しました。

「居場所は分かったけど、今私も手が離せなくて、すぐには調べられないんだ、ごめん。」

誰かそういうの、詳しくそうな知り合いとかいない？

あ、前に話してくれた友だちとかは？」

と、忍さんに言われて、その友だちって、なつめのことだと、思いました。

けど、なつめは今海外だから、無理だと思った時、かなならどうだろう、と思っ、連絡してみました。

かなはすぐに電話に出てくれて、事情を説明して、ヒヨウちゃんを、今すぐ連れていける動物病院を、見つけてほしいと、頼みました。

かなは、誰かと話をしている最中みたいで、それを中断する声が、小さく聞こえた後に、5分待つて、と言っ、一旦電話を切りました。

わたしは土手の下で、着ていた長袖のシャツを脱いで、ヒヨウちゃんの体を包んだ後、抱いて暖めながら、連絡を待つていました。

この間もヒヨウちゃんは、全然動かなくて、弱々しくて苦しそうな、息をしているだけでした。

わたしはヒヨウちゃんの体に、力が掛からないように、気をつけながら、出来るだけ、自分にくっつけて、

体温が伝わるようにしながら、  
ヒヨウちゃんを見つめていました。

この時、自転車の止まる音が聞こえて、  
見上げてみると、そこには自主連帰りの、  
間宮さんがいました。

間宮さんは、わたしの状態を見て、  
ただならない状況を、理解したようで、  
いつもみたいな、態度はとらずに、  
何も言わずに近づいてくると、  
わたしの抱いている、ヒヨウちゃんの様子を、  
冷静な表情を変えないで、見ていました。

その時、かなからの折り返しの連絡が来て、  
「みなも、動物病院だけど見つかったから、  
その場所のメールを送つといたよ。

その先生には、  
これからそっちに向かうって、伝えといた。  
みなもの名前でも、あたしの名前でも、  
どっちでも通じるからね。

ヒヨウちゃんのためにがんばって、みなも！」  
と、病院の手配をしてくれました。

わたしは、かなにお礼を言ってから、  
届いていたメールを見て、  
その動物病院の場所を、確認しました。

ここからけっこう遠くて、歩いていったら、  
かなり時間がかかりそうでした。

そこでわたしは、間宮さんに、何でも言うこと聞くから、自転車を貸して下さい！と、必死にお願いしました。

メールの地図を、一緒に覗き込んでいた間宮さんは、ヒョウちゃんとわたしの様子を、一瞥した後、

「駄目だな」

と、一言だけ答えました。

この時わたしは、完全に頭に血が上ってしまい、相手が間宮さんだろうと、構うことなく、自分でも、何を言っているのか分からないくらい、思い切り反論して、文句をぶつけました。

多分、ヒョウちゃんを抱いていなければ、殴りかかっていたとろでした。

間宮さんは、そんな逆上しているわたしを見ても、全く態度を変えずに、冷やかに見つめながら、抱いていたヒョウちゃんを、わたしからあっさりと、奪い取って、自転車のかごに入れました。

ちよっと、何するの！

と、叫んで立ち上がった、わたしから、今度は、携帯を奪い取って、画面を確認したら、わたしに投げ返して、自転車に乗ると、

「三崎、お前じゃ遅すぎて、多分手遅れになる。

私が運んでおくから、お前は後から来い、

それと、お前も無理するな、ひどい顔してるぞ。  
いいな」

と、言い残して、すごい速さで行ってしまいました。

わたしは、怒りのぶつける先を失って、

急に、力が抜けてしまい、

その場に座り込んでしまいました。

今までの疲れと緊張が、急に解けたせいか、

座りこんだ途端に、頭がすごくクラクラしてきて、

1秒でも早く、病院へ向かいたかったけど、

立てなくなってしまうました。

その間に忍さんへ、病院が見つかったことと、

今日はお休みさせてほしい、と伝えました。

しばらく休んで、ちょっと落ち着いて来たところで、

めまいも、だいぶ治まってきたから、

地図を見ながら、かなの教えてくれた、

動物病院へと向かいました。

歩いて行ったら、30分くらいかかって、

やっと到着しました。

ドアの脇にある、診療時間をみたら、

とっくに終わっている時間でしたが、

ドアの横に、間宮さんが乗っていた自転車が、

倒れていたの、それを直してから、

中へと入りました。

待合室では、間宮さんが長椅子に座っていて、その目の前の診察室だけに、明かりがついていて、そこでヒョウちゃんの、治療がされているみたいです。

入ってきたわたしに気づいた、間宮さんは、何故か急に立ち上がって、わたしのところに駆け寄ると、何がどうしたのか、よく分からなかったけど、わたしを抱きしめました。

次に目を覚ました時は、わたしの顔を見下ろす、3人の人が見えて、わたしの体には、間宮さんが着ていた、ジャージの上着が、かけられていました。

白衣を着た先生と、ナース服っぽい看護師さんと、それから、呆れ顔の間宮さんでした。

意識を取り戻したのを見た、先生と看護師さんは、ほっとした表情になっていました。

どうやらわたしは、ここに入ったところで、そのまま、倒れてしまって、しばらく、気を失っていたようです。

わたしは、その前の状況を思い出した途端、勢い良く飛び起きて、先生につかみかかって、ヒョウちゃんはどうなったのかを、ものすごく必死に、尋ねました。

先生は、とても驚いていて、

すぐに間宮さんが、わたしを先生から引き離して、寝ていた長椅子に倒されました。

先生は、乱れた白衣を直しながら、ヒョウちゃんの状況を、教えてくれました。

内臓や骨には、異常はなかったけど、引っかけ傷と咬み傷が、ほぼ全身にあって、更に全身打撲の状態で、衰弱もひどくて、かなり危ない状態だったそうです。

今は応急処置が終わって、今は眠らせてあって、全治1ヶ月だと、教えてもらいました。

先生は最後に、

「高坂さんに、宜しくお伝え下さい」と、わたしに伝えた後、

落ち着いてから、猫の様子を見ていく様に伝えて、看護師さんと一緒に、診察室へと戻っていきました。

わたしはここで、冷静になってきて、今、お金を持っていないのに気づいて、

先生を呼び止めて、治療代のことを尋ねたら、

「それは高坂さんの方から、

自分に請求してほしいと、連絡があったので、

気にしなくても、大丈夫ですよ」

と、言われました。

結構、治療代って高いんじゃないのかなあ、後でかなに確認しよう。

ヒヨウちゃんの具合が見たくて、  
長椅子から起き上がると、

まだ目眩がしてきて、フラフラしてしまい、  
そんなわたしを、間宮さんは支えながら、

「どうしてお前は、

私とサシで話す時は、熱があるんだ？

もしかして、自分に熱がある事、

気づいてないのか？」

と言われて、ここで初めて、

わたしは熱があることを、自覚しました。

間宮さんに肩を借りて、診察室に入ると、

そこには、ちよつと大き目のケージに入っている、

体や足に包帯を巻かれて、

真っ黒から、真っ白に変わっていた、

ヒヨウちゃんが、丸まって眠っていました。

その寝息は、それほど苦しそうでもなくなっていて、

その姿を見てから、間宮さんに送られて、

帰って来ました。

間宮さんはわたしに、

自転車の荷台に、座るように言ってきて、

わたしが荷台に座ると、今度は、

「しっかりつかまってる」

と、言ってきて、自分のお腹の前で、

わたしの手を組むように、言いました。

その後、着ていたジャージの上着で、

わたしと自分の胴体を縛ってから、  
わたしの家に向かって、出発しました。

間宮さんは、わたしが寝ないように、  
道をずっと聞きながら、自転車をこいでいました。

わたしは熱のせいで、意識が朦朧としてくる中、  
間宮さんの背中が、とても暖かいのと、  
右を向いて耳をつけていて、そこから聞こえてくる、  
間宮さんの声と、心臓の音が、  
とても心地よくて、かなり寝そうでした。

これって、かながわたしに襲いかかって来た時とか、  
抱きついて寝ちゃった時と、同じかも、  
と、遠のいていく意識の中で、思いました。

間宮さんは、

「三崎、寝るな！」

と怒っているけど、それはもう無理でした。

わたしは、うとうとしながら、  
間宮さんに呼びかけられては、目を覚まして、  
道を指示しては、またうとうとする、  
ひたすらこれの、繰り返しです。

この時、もしジャージで縛られてなかったら、  
確実に、自転車から落ちていたと思います。

それでもかなり、落ちかかっていたのを、  
なんとか落ちずに、無事にうちまで辿り着けたのは、



間宮さんが、後ろに手を回して、わたしを支えてくれた、おかげみたいです。

間宮さんに肩を借りて、階段を上って、玄関まで、連れてきてもらったところで、

「ここまでくれば、大丈夫だよな、

私はこれで帰るからな。

三崎、ちゃんと休め、じゃあな」

と言って、わたしがお礼を言おうとする前に、間宮さんは、帰ってしまいました。

この後わたしは、すぐにお風呂に入って、食欲もなかったから、すぐに寝ました。

治療代のごとは、気になるけど、それは、わたしが元気になったら、かなに確認してみよう。

それから、間宮さんにも、すぐくお世話になったから、ちゃんとお礼を、言わないとなあ。

頭はクラクラしてるけど、

何よりも、ヒョウちゃんが助かって良かったです。

これでやっと、ぐっすり眠れます……

8月25日 ヒョウちゃんのお見舞い

わたしの夏風邪も、昨日1日寝ていたら、すっかり良くなったので、ヒヨウちゃんの様子を見に、根岸動物病院まで、行って来ました。

今回は、診療時間内に行ったので、わたし以外にも、ペットを連れてきている人がいました。

ヒヨウちゃんも、うちで飼ってあげられれば、あんなことには、ならなかつたんだろうけど、それは、ヒヨウちゃんの生き方ではないような気がする。

だから、どんなにわたしがそうしたくても、多分、無理だったんじゃないかと、昨日寝ている時に、思いました。

それと、治療費についても、昨日、かなにメールしたんだけど、かなからの返信は、一言だけ、  
「priceless!」  
って書いてありました。

これ、たしかお金では買えないほど価値がある、って意味だったと思うんだけど、いまいち、真意が読めませんでした。

多分、あえて金額を伝えてこないのは、自分が払うからいい、って意味っばいけど、それは、なんだか申し訳ないなあ……

でも、あんまり何度も聞くのも、それはそれで、失礼な気がしてくるし、ヒヨウちゃんが、元気になって退院してから、改めて確認しよう、と決めました。

4つある診療室の一番右にある、第4診療室から、前に見た看護師さんに呼ばれて、わたしは、中へと入りました。

診療室の中では、院長の根岸先生が、想像していない姿で、わたしの前に現れました。

先生は、両手と頭に包帯を巻いていて、両頬にも、ガーゼが張ってあって、この前に見た、ヒヨウちゃん並みの状態だったんです。

わたしがその姿にびっくりして、何も言えずにいると、根岸先生は、聞き取りづらい声で、「ねえ、びっくりしたでしょう、

これ、あなたの猫にやられたんですよ！

高坂さんからのご紹介の方じゃなかったら、とつくに返しているところですよ本当に。

こんなに凶暴な猫は初めてです、一体あなたはどどういう躰してたんですか！」と、怒られました。

やられたのは、先生だけじゃなくて、後2人の看護師さんまで、

その2人は、現在自宅療養中なんだそうです。

「あなた、飼い主なら躰けるのは義務ですよ、それに予防接種も何にもやってないんですよ、高坂さんに聞いたら一通り処置して欲しい、とのご依頼だったからやっておきましたけど、そう言うのは飼い主のあなたがしっかりとですね、管理しなくちゃ駄目なんですよ、ぼーっとしてないでちゃんと聞いてますか、本当にもう」

と、根岸先生は、飼い主の心得を、わたしに対して、お説教して下さいましたが、残念ながら、わたしは飼い主ではないです、なんて、口が裂けても、言えない雰囲気だったので、ひたすら頭を下げて、すいません、と、これから気をつけます、を繰り返して言っていました。

この後、先生から驚くことを言われたんです。

「避妊手術をするかはあなたに聞いて欲しいと、言われているんですけどどうしますか？」

え、去勢じゃなくて、避妊手術！？

この時、初めてわたしは、ヒョウちゃんが、メスだったのを知りました。

あんなに強いから、てつきり雄猫だとばかり、思い込んでいたんです。

わたしは、ヒョウちゃんの飼い主ではないので、

そんなことを、決める権利はないから、根岸先生には、しないで下さい、と伝えました。

この後もちくちくと、先生のお説教は続きましたが、10分くらいしたら、先生の気も済んだようで、やっと、ヒヨウちゃんの現状について、話を聞かせてくれました。

先生の話によると、ヒヨウちゃんは、凄まじい回復を見せているらしくて、この分だと、かなり予定は早まって、あと1週間もあれば、退院出来るそうです。

でもその代わり、元気になってきた途端に、とてつもなく凶暴になって、治療のたびに、それに立ち会った人間が、病院送りになっている、とも、言われました。

やっぱり、そうなっちゃうよねえ、と、それは内心予想はしていたので、わたしは、ここでもまた、すみません、の、一点張りでした。

わたしはここで、ヒヨウちゃんを見てみると、前のケージとは違って、体の大きさと比べると、全然大きい、檻みたいないなケージの中に入っていました。

「普通の猫ならあれで十分なんだけど、この猫の場合普通のケージは壊して逃げ出すんで、大型犬用の檻に入れているんですよ、

金属製の檻じゃないとまた逃げ出しそうなんでね」と、先生は嫌味っぽく、説明してくれました。

わたしはここでも、謝っておきました。

わたしを見つめる、ヒョウちゃんの顔は、あの日以前の、元気な時とは、ちよつとだけ違っていているように、感じました。

試しに、ちよつと手を出してみたけど、檻の奥にいたから、前に威嚇された距離まで、近づけられなかったです。

これでもわたしは、命の恩人なんだから、少しはわたしのこと、認めてくれればいいけど、ヒョウちゃんが、わたしのことを、どう思っつて、見ているのかは、やっぱり判りませんでした。

わたしは先生に、とても大変でしょうけど、どうか宜しく願います、と、頭を深々と下げて、帰って来ました。

今度お見舞いに来る時は、菓子折りとか持って来ないと、ダメだなあ、と心底思いました。

それとも、紹介してくれた、かなと、一緒に来た方がいいのかなあ。

次の問題は、どうやって御家河まで、ヒヨウちゃんを運ぶかだなあ。

あんな大きな金属の檻なんて、とても運べないし、小さいケージだと、壊して逃げるだろうし、麻酔でも打ってもらって、眠っているうちに、運ぶとかしか、出来なさそうだなあ。

これじゃあまるで、クマみたいだ、まあ、あんまり変わらないかも。

ヒヨウちゃん色々と、しでかしちゃってるけど、元気になってきているから、わたし的には、良かったです。

後は、あんまり病院の人に、迷惑かけなければ、もっと、いいんだけど……

8月28日 絵が完成しました！

ここのところずっと、ヒヨウちゃんの件で色々あって、予定よりも、枚数は描けなかったけど、とりあえず、手がけていた1枚は、満足がいくところまで、仕上げる事が出来ました！

これなら自信を持って、忍さんに見せられます。

それだけに、ダメだしされた時の、  
ダメージも大きいですけど、  
それを怖がってちゃ、話にならないので、  
ここは、忍さんとの真剣勝負です！

絵が仕上がった時に、たまたま通りかかった、  
ランニング中の、間宮さんに会いました。

間宮さんは、わたしのそばで立ち止まってから、  
わたしの描いていた絵を、眺めた後に、

「ああ、本当に絵描いてたんだな、  
これでやっと、お前の言ってた事を信じられる。  
本当に、ストーカーではなかったのか」  
と、呆れる発言をしました。

この人今まで、ずっと疑ってたんだ、  
それって、ひどいような気がするなあ。

でも、間宮さんにはヒョウちゃんの件で、  
わたしもすごくお世話になったし、  
文句を言える立場じゃありません。

わたしはここで、改めて間宮さんに、  
あの時の、お礼を伝えました。

すると間宮さんは、ちよつと変な顔しながら、  
「偶然、通りかかっただけだし、  
たまたま気が向いて、手助けしただけだ。

と言うよりも、だいたいだなあ、  
あんな状態で、地面に座ってる人間を見つけて、



それが知ってる奴だったら、  
声かけるだろうが、普通。

それにしても、本当にお前は手のかかる奴だな、  
これで何回目だ、ったく。

少しは自分の体調とかを認識しろ」

と、いつもとは違うトーンで、怒られてしまい、  
わたしは、ごめんなさい、以後気をつけます、  
と答えました。

でも、間宮さんにとって、わたしはいつの間にか、  
知ってる奴、に昇格しているのは、  
間違いなさそうです。

「用はそれだけなら、私はもう行くぞ」

と言って走り去ろうとした、間宮さんを、  
わたしは、呼び止めました。

今の間宮さんなら、話を聞いてくれそうだし、  
いい機会だと思って、  
今までずっと、聞きたかったことを、  
ここで尋ねてみたんです。

まず、わたしは間宮さんに対して、  
恋愛感情は、ないんです、  
と言うのを、改めて説明しました。

これに対して、間宮さんはすぐさま、  
「そうは思えないな、

だってお前、この前体調が悪そうだから、

自転車で、家まで送ってやった時、私の背中に、嬉しそうにしながら、抱きついていただろうが。

あの時、つかまってるとは言ったが、胸までつかんでいいと、誰が言った？

私の体をまさぐって、喜んでたくせに、そんなことないとは、言わせねえぞ」と、とんでもない反論を返されました。

ああ、それはたしかに、間宮さんの背中は、すごく心地よかったのは、認めるけど、え、胸をつかんだ！？  
なにそれ、記憶にないんだけど？

もしかして、起こされるたびに、離れそうだった手を、必死でしがみついていたのが、間宮さんの胸だった、ってこと？

ええと、それとこれとは、違うんです。

決して、やましい気持ちじゃなくって、触りたくって、つかんだんじゃないし、それに間宮さんのは、かなとかとは違って、そんなに大きくないから、ちよっと、判りづらかったのかも、って、これ言ったら殺される、ダメだ、うまく説明出来ない……

わたしは一応、間宮さんに、それは落ちないように、寝そづになりながら、

必死につかんだのが、胸だったのかも、  
知れないけど、それは意識してなかったし、  
第一わたしは覚えてない、と、  
言葉を選んで伝えました。

けど、間宮さんの目はまるで、

痴漢を見下すような、冷やかな眼差しで、

「そういう、下心だけは、

あんな状況でも、あるってことだな。

あれがお前の、恋愛表現か、

全く、大したものだな」

と、わたしの弁明は、全く聞き入れられず、  
ひどいまとめ方を、されてしまいました。

この件は、これ以上弁解しても、

無駄っぱいから、次の話題へと変えようとしたら、

間宮さんは今にも、立ち去ろうとしていたので、

どうして、合宿に行かなかったの、それと何で、

葵ちゃんには、名前で呼ぶようにさせてるの、

と、わたしは早口に尋ねました。

すると、間宮さんの動きが止まって、

ゆっくりと、こつちを向きました。

でもその表情は、さっきまでの、

わたしの痴漢疑惑のことを、話していた時とは違って、  
前にも見た、怖い顔になっていました。

「三崎、それがお前に何か関係あるのか、  
別に関係ないだろう。」

余計な詮索はするなと、前にも言ったよなあ？  
まあいい、答えてやる。

私は、自分の名前が気に入っているから、  
葵とは親しくなったんで、名前で呼ばせただけだ。  
合宿に行かなかった理由は、

メンバーの中に、気に食わない先輩がいるからだ。  
聞きたいのは、それだけか、

もう私は練習に戻るぞ、じゃあな」  
と、早口に答えて、

さっさと走って、行ってしまいました。

最後の質問の時の、間宮さんの態度、  
いつもの間宮さんらしくなかった気がする。

力では絶対に、負けるはずがないのに、  
妙に、緊張していたって言うか、  
なんかわたしのことを、怖がっていたみたいな、  
そんな気がしたのは、気のせいかな……

8月30日 ヒョウちゃんの自主退院

今日は、いつものスーパーで買ってきた、  
安物の菓子折りを持って、根岸動物病院へと、  
ヒョウちゃんの面会に行って来ました。

家を出た後に、携帯を忘れてきたのに気づいたけど、  
まあいいか、と思ってそのまま病院へ向かいました。

その途中の道で、ヒヨウちゃんに良く似た猫が、  
塀の上を疾走しているのを、目撃しました。

もうヒヨウちゃんも、あのくらい元気になったかなあ、  
とか思いながら、病院へと向かいました。

病院に着くと、なぜか先生が、  
病院の入り口から、出てきたところでした。

根岸先生は、かなり慌てていて、  
わたしの姿を見たら、  
もっと動揺したのが判りました。

「ああ、君か、今預かっている猫が大暴れして、  
看護師2人を倒して逃亡してしまったんだ、  
申し訳ない！」

と言つて、根岸先生は、頭を下げました。

わたしはそれを聞いても、特に驚きませんでした。

多分、近いうちに、こうなるような、  
気がしていましたから。

わたしは先生に、  
ヒヨウちゃんの具合のことを、尋ねました。

「ええと、もう怪我の方は、  
かなり治つてしていた、普通の猫なら、  
まだ安静にさせておくべきだとは思つが、  
あの猫なら、もう大丈夫かも知れない」

との、先生のお墨付きをもらったので、  
わたしは先生に、今まで面倒を診てもらったお礼と、  
お土産の菓子折りを渡して、帰って来ました。

あの時、走っていたのがヒヨウちゃんなら、  
もう、心配いらなそうだと思ったからです。

御家河にも、自力で戻れそうだから、  
手間も省けました。

根岸先生は最後に、一体ヒヨウちゃんは、  
何と言う種類なのかと、聞かれたんですけど、  
そんなの判らないから、雑種です、  
と、答えておきました。

わたしは帰り道で、スーパーによって、  
ヒヨウちゃんの好きそうで、消化も良さげな、  
牛挽肉と、まずい硬水を買って帰りました。

明日にでも、御家河に行つて、ヒヨウちゃんに、  
退院祝いをあげようと思います。

8月31日 ヒヨウちゃんの凱旋

今日は1日、ヒヨウちゃんに会うため、  
御家河の土手を、散歩していました。

1日あれば、絶対ここに戻っていると思うから、

今日は絶対に、今まで離れていた、自分の縄張りの確認に、歩き回っているはず。

だから、わたしは今まで一番、ヒヨウちゃんと、遭遇した回数が多い、橋の脇の土手で、待っていました。

午前中からここへ来て、お昼になったから、持ってきたお弁当を食べながら、河と空を眺めつつ、ゆっくりしながら、現れるのを待っていました。

わたしの予想通り、ヒヨウちゃんは上流の方から、こちらへとやって来ました。

わたしは、牛挽肉のパックのビニールを破って、硬水をお皿に注いで、私の左側の地面に置きました。

ヒヨウちゃんは前と変わらず、堂々と、道の真ん中を通って、私のところまで来ると、わたしのすぐ後ろを通り過ぎて、硬水のお皿へと近づいて、すぐに水を飲んでから、肉も食べ始めました。

いつもは、私とある程度の距離をとって、ヒヨウちゃんは座るから、その分開けて、お皿とパックを置いたんだけど、今日のヒヨウちゃんは、いつもより近くの、わたしとご飯の間に、わたしに背中を向けて、座っています。

まだちょっと、毛並みはボサボサだけど、ヒヨウちゃんは元気そうです。

牛挽肉は、かなりの勢いで食べてしまい、水も、どんどん飲んでしまい、ペットボトルには、半分くらいしか、残ってません。

ご飯を食べ終えたヒヨウちゃんは、わたしに、お尻と尻尾を向けたままで、珍しく満足げに、尻尾の先を、ゆっくり振っていました。

やっぱり、お腹が減っていたのかなあ、病院のご飯はまずかったんだね、ヒヨウちゃん。

わたしは無意識に、すぐそばにいる、ヒヨウちゃんの背中へと、手を伸ばして、そっと撫でました。

撫でてから、しまった！

と思ったんだけど、ヒヨウちゃんは、不満そうな低い声で、一度鳴いただけで、ちよっと耳を、こっちに向けたけど、逃げ出すことも、威嚇もされません。

尻尾はさっきよりも、イライラしているみたいで、振るスピードが上がったけど、ちよっとしたら、元の速さに戻りました。



ヒョウちゃん、ついにわたしのこと、  
認めてくれました！

でもやっぱり、触られなれないせいか、  
背中を撫でるたびに、ヒョウちゃんは、  
イライラするみたいで、

不満げな低い声で、鳴っていたし、  
尻尾の振る早さも、その都度早くなってます。

でも、わたしはとても嬉しくて、  
何度も、何度も、触ってしまいました。

きつと、あの時わたしが助けたことを、  
覚えていてくれていて、  
認めてくれたんだと、思いました。

後は首輪をしてくれたら、いいんだけど、  
これはさすがに、当分先になりそうです。

今日は、わたしとヒョウちゃんにとって、  
大きく前進した、嬉しい記念日です！

2010年 9月 その1(前書き)

変更履歴

2011/03/21 記述統一 葵の一人称 あたし わたし  
2011/03/24 誤記修正 父の描いていた、油絵くらいで  
す。 父の描いていた、水彩画くらいです。  
2011/04/04 記述統一 一週間、二日間、三時間  
1週間、2日間、3時間  
2011/04/09 記述統一 1学期、2学期、3学期  
一学期、二学期、三学期  
2011/04/12 記述統一 1年生、(中学)2年、高校3  
年 1年生、2年、高校三年  
2011/05/08 記述統一 一階、二階、三階 1階、  
2階、3階  
2011/06/08 記述統一 一つ、二つ、三つ 一つ、  
二つ、三つ  
2011/08/03 記述統一 一人、二人、三人 一人、  
二人、三人

2010年 9月 その1

9月1日 次はメガネ

二学期が始まって、最初の登校日です。

夏休みの間に、色々と不安な話を聞いたのを、登校中に思い出したけど、

初日からいきなりは、ないんじゃないかって、少し、期待していましたが、それは甘かったみたいです。

学校について、教室へと入った時に、わたしはそれに、気づきました。

黒板にいったばいの大きな字で、

『次はメガネ』って書いてあったんです。

クラスの人たちも、みんな、これが何なのか、判らなくて、あちこちで話をしていました。

わたしは、これを見てすぐに、後ろの席に集まっている、門塾さんのグループを見ました。

取り巻きの人たちは、みんな、ニヤニヤしながら、クラスの人たちを眺めていました。

間違いなく、これを書いたのはあの中の誰かで、

これが話していた、新しいゲームなのかも知れない。

間宮さんとは言うのと、二学期になっても、教室ではやっぱり、非常に近寄りづらい態度で、この時も、クラスの雰囲気に対して、苛立っているのが、隣りに座っているだけでも、分かりました。

この黒板の文字は、8時半のチャイムが鳴って、後ろの人から、黒板を消せ！

と命令されて、最前列に座っている人が、先生が来る前に、消していました。

これで誰が書いたのかが、ほぼ分かったことで、教室の空気は、二学期が始まって早々に、重苦しい感じになっていて、特に、メガネをかけている人たちは、あわてて外したりしているのが、見えました。

この日は、まだ予告だけだったらしくって、特に誰も何もされないで、下校時間になりました。

メガネの人たちの中には、午前中で早退したり、下校時間になった途端に、すごく急いで帰っていて、逆に、メガネをかけてない人たちは、ちょっと安心しているような、雰囲気も感じました。

黒板に書かれた、落書き1つで、クラスの人たちを、支配しているんだ、わたしには、そう見えませんでした。

前にはかなは、門塾さんのことを、直接的な暴力と恐怖で、人を従わせていたって、言っていたけど、これが、門塾さんの求めるものなのかな……

どうして、何かをされた訳でもない人に対して、ひどいことをするのか、わたしには、門塾さんの考えというか、望んでいることが、さっぱり理解出来ません。

9月4日 忍さんに絵を渡しました

この日は、航海堂に忍さんも来る日だったから、夏休みに完成した絵を、少しでも早く見て欲しくて、とりあえず、渡すだけ渡そうと思って、持って行きました。

わたしは忍さんに、もらったクロッキー帳で、風景画を1枚仕上げたから、見て欲しいと、お願いしました。

忍さんは、ちょっと困り顔で、

「あ、描けたんだ、そっか。

ごめん、みなもちゃん、今はちょっと色々あって、すぐに見てあげられないんだ。

これ、預かってもいいんなら、

時間作って見ておくけど、それでいい？」

と、わたしに言いました。

わたしは、それで構いません、と答えて、クロッキー帳を差し出しました。

忍さんは、受け取ってすぐに、クロッキー帳を開いて、

わたしの絵を、ちょっとだけ眺めてから、眉をしかめて、怪訝な顔をしていました。

え、ちらっと見ただけで、もうダメ出し？  
それは、ちょっと、心の準備が出来てない……

「この画風、やっぱりどっかで……」

と呟いてから、額に手を当てて唸りながら、1分くらい悩んでいたけど、最後に、

「駄目だ、思い出せん！」

と言って、クロッキー帳を閉じて、仕事へと戻りました。

とりあえず、ダメ出しされなかったのは、良かったけど、やっぱりわたしの絵は、

忍さんが見たことある、誰かの絵に似ているようです。

でもわたしは、誰から絵は習って描いてないから、後は、見たことある絵って言ったなら、父の描いていた、水彩画くらいです。

でもそれとは、わたしのは鉛筆画だから、根本的に、全然違うと思うし、

わたしも父の絵を見たのは、幼い頃だから、  
どういふ画風だったかも、覚えていません。

わたしに似てる画風の人、ちょっと気になります。

9月6日 席替え

今日は、二学期に入って最初のHRで、

鈴木先生は、席替えをすと言いました。

一年の時にも、毎学期ごとに、

席替えしていたから、

当然あるんだなあ、と思つて聞いていたんですが、  
ここで予期していないことが、起こったんです。

クラスの委員長が、手を上げて、

それは待つて欲しいと、先生に意見したんです。

鈴木先生は、予想していなかった展開に、

呆気にとられているのが、見ていて判りました。

委員長は、席替えについて、

現在の席のまま、良いと思う生徒も多いので、  
多数決で、するかしないかを決定したい、

と、先生に提案していました。

先生が戸惑っている間に、委員長は早速多数決を始めて、  
まず席替えを望む人に、挙手をするように言いました。

誰も手を上げる人はいないまま、委員長は次に、席替えはしないのを望む人は、挙手するように言うと、門塾さんの親しい人たちが、次々と手を上げて、それにつられるように、他の人たちも手を上げていって、クラスの過半数が、手を上げていました。

委員長は先生に、多数決により、席替えは、望まない方が過半数なので、このままの席でお願いします、と頭を下げていました。

鈴木先生は、すぐに反論しようとしたけど、後ろの席から拍手とか、口笛とかが聞こえてきて、次第に、クラス全体に広がっていきました。

この時の先生の視線は、何かを確認するみたいに、教室の奥を、見つめていたように思います。

この時に、となりから小さい音だけど、舌打ちするのが聞こえて、間宮さんを見ると、こっちに背を向けて、後ろの席を見ていました。

この賛成の拍手は、先生が席替えをしない、と言うまで続いて、結局席替えはせずに、HRが終わってしまいました。

多分、鈴木先生は、担任でありながら、受け持っているクラスの生徒を、制御出来ないことが、他の先生たちに、知られるくらいなら、カリキュラムに反しても、生徒の意志を尊重した、



と言えば穩便に済む方を選んだ、そんな風に感じました。

それとも、もしかすると、

それだけじゃないのかも知れないけど、

わたしには、よく判りません。

でもこれで、ひとつはつきりしたのは、

このクラスで、何かが起きていて、

担任の先生に、助けを求めたところで、

何の解決にもならないだろうってことです。

やっぱり、自分の身は自分で守らなくちゃいけない、

そういうことなんでしょうか……

9月12日 葵ちゃんの素顔

今日は午前中から、駅前に買い物へと行って来ました。

本当は、せつかくの休日なんだから、

朝はゆっくりして、午後に出てきたかったけど、

夏休みから続いている、暴行事件のことがあって、

出来るだけ早い時間の方が、そういうのにも、

巻き込まれなさそうだから、午前中に来ました。

いまいち趣味じゃない、ダウンジャケットの、

代わりの上着を見に来ただけど、

安くて良いのが見つからず、お昼になってしまい、

諦めて、もう帰ろうとしていた時、

こっちに向かって走ってくる、小さな人影が。

この登場パターンは、あの子しかいません。

「三崎先輩、こんにちは！」

「お買い物ですか？」

やっぱり葵ちゃんでした。

パーカーに、ショートパンツ姿の葵ちゃんは、相変わらず元気で、かわいいです。

葵ちゃんは、午後から友だちと遊ぶ約束をしていて、せっかくだから、早めに出て来て、お店とかを、ブラブラしていたんだそう。これから、待ち合わせの場所へと、向かうところだったようです。

わたしは、それじゃ、と挨拶しようとしたら、葵ちゃんの携帯が鳴って、携帯を、確認していた葵ちゃんは、誰が見ても判るくらい、がっかりした顔になって、「友だちに今、ドタキャンされました」と、低いトーンで言いました。

その、友だちと会ったの、そんなに、楽しみにしてたのかあ。

へこんでる葵ちゃんが、ちよっと、かわいそうに見えたので、

わたしは葵ちゃんに、わたしで良ければ、付き合おうか、と言ってみたら、

「本当ですか！

ありがとうございます！」

と言うと、ぱっと明るい顔になりました。

「じゃあまずは、お昼食べましょう！」

と言って、連れて来られたのは、ファーストフードのお店でした。

「わたしに、付き合ってもらうから、

お昼は、おごります！」

どれでもいいですから、

どうぞ、好きなものを選んで下さい」

と葵ちゃんに、言われたけど、後輩の子に、おごってもらうのはなあ、

と思って、自分で払うよって言うて見たんだけど、

「いえいえ、おごりますから」

の、一点張りで、葵ちゃんは譲らず、

仕方なくわたしは、普通のセットを選ぶと、

「それだけで大丈夫ですか？」

と、心配されてしまいました。

普通のセットだから、

これでも、普通の1人前なんだけどな……

注文の品を受け取って、葵ちゃんを待っている間、

葵ちゃんの、お弁当の量を見ると、

多分わたしの倍は、食べているっばいから、

とか計算していたら、わたしの倍以上の量が乗っている、

山盛りのトレーを持った、葵ちゃんがやって来ました。

傍目に見たら、みんなの分を、  
まとめて、買ってきているようにしか見えません。

2人で、2階のテーブル席について、  
葵ちゃんは、最近の部活の話とか、  
友だちから聞いた噂なんかを、話しながら、  
すごい勢いで食べてました。

その噂って言うのは、先々月くらいから、  
有名になり始めた、連続暴行事件についてで、  
凧高の生徒ばかりが、狙われているってのは、  
聞きましたけど、

今度のはどうやら、反撃に出ている人がいるらしくて、  
襲撃していた、暴走族とか不良のグループの情報を、  
警察に密告しているグループが、  
いるらしいって話でした。

その情報は、警察が動くレベルのもので、  
今では、凧高の生徒を襲っていたグループは、  
タレこんでいるグループを、見つけ出すのに、  
必死になっているらしいです。

それを葵ちゃんは、ポテトを口いっぱい、  
頬張りながら、教えてくれました。

へえ、やり返している人たちもいるんだ、  
でも危なそうだなあ、それって。

何でもいいけど葵ちゃん、行儀が悪いから、食べるか話すか、どっちかにしようね。

でもリスみたいで、かわいいから、いいか。

それと、今月の18日と19日は、

陸上部の、新人戦の県内地区予選があるって聞きました。

どこでやるのかを尋ねると、

けっこう近い場所にある、競技場でした。

今までそういう大会とか、一度も見たことないから、

どんな感じが判らないけど、

ちよつと、見に行ってみようかなあ……

ご飯も食べ終わって、いよいよ葵ちゃんが、  
行きたかった場所へと、向かいました。

それは、駅前からちよつと離れたところにある、  
小さいデパートの中の、ゲームコーナーでした。

そこは、フロア全部がプリクラと、  
UFOキャッチャーしかないところで、  
全部で、20台くらいはありました。

片面の壁は、窓になっていて

ゲームセンターとかって、わたしの中には、  
薄暗いってイメージがあっただけど、

ここは、かなり明るくて、

ちよつと違いました。

そこにいたのは、女の子ばかりで、プリクラには、結構いたけど、UFOキャッチャーには、ほとんどいません。

葵ちゃんは、プリクラには目もくれず、一直線に、UFOキャッチャーへと向かい、フロアの奥の方にあつた台へと、張り付いていました。

「良かった、まだあつたあ！」  
と、すごく喜んでいる葵ちゃんは、その筐体の中の景品で、体が半分埋まっている、へんなぬいぐるみを、見つめていました。

何だろう、このぬいぐるみ。

なんかのキャラなのかなあ、でも、見たことないなあ。

着物姿で、片手に刀を持っているから、多分、犬の侍なんだと思うんだけど。

顔がとにかくブサイクなのが、特徴でしょうか。

うん、とにかく、ブサイクです。

「これ、『ぶさ系もん』って言うんです。

今わたしの中では、一番のお気に入りなんです！

あの顔とか、かわいくないですか？

この人形、ここにしか置いてなくって、  
ずっと通って、がんばって集めてたんですけど、  
あれが取れば、コンプリートなんです！  
でも、もう1個しか残っていません、  
だから今日はどうしても、あれを取るために、  
手伝ってくれるって言った友だちと、  
約束してたんですけどね。  
でも、三崎先輩が付き合ってくれたから、  
本当に助かりました！  
がんばって、取りましようね！」

え、わたしも何かするの！？  
これって、2人でやるゲームだっけ？

こういうゲームって、一度もやったことないから、  
全く自信がないんだけど……

わたしは葵ちゃんに、それを話すと、  
「三崎先輩は、ボタンを押してくればいいですから、  
大丈夫ですよ」

と言って、ニコニコしながら、  
肩から提げていた、バッグの中へと手を入れて、  
赤いがま口の、小銭入れを取り出すと、  
コインを投入口に、どんどん入れていきます。

ああ、これは本気でやる人だ。

「三崎先輩、ボタンをお願いします。  
最初にこのボタンを押して  
わたしが合図したら、離して下さい。」

次は、こっちのボタンを押して、  
また合図しますから、離して下さい。  
タイミングは、合わせて下さいね。  
ちよつとでもずれたら、ダメですからね。  
いいですね、先輩」

わたしにレクチャーする葵ちゃんは、  
めっちゃめっちゃ真剣で、わたしは思わず、  
はい、と、敬語になってしまいました。

そんなに言われると、すごく緊張してきてしまって、  
失敗したらどうしようとか、不安になってきます。

葵ちゃんは、UFOキャッチャーのガラスに張り付いて、

「先輩、始めて下さい!」

と威勢よく言ってきて、いよいよ始まりました。

後はひたすら、前とか横とかに動き回りながら、  
UFOキャッチャーの、アームと人形を凝視して、  
ガラスに張り付いて、

「今です!」

「そこです!」

「あああ!!!」

「次がんばりましょう!」

といった、葵ちゃんからの、

言葉の合図に反応して、

ひたすらボタンを押していました。

いっぱい入っていたように見えた、小銭入れは、  
どんどん減っていくけど、



葵ちゃんは、全然気にしないで、  
投入口へと入れていきます。

本当に、取れるまでやる気だ、  
これは早く取らないと、大変なことになりそうだなあ。

でもわたしには、タイミングとか良く判らないから、  
指示通りに、ボタンを押すしかないしなあ……

そして、しばらく時間は進んで、  
もう20回以上、チャレンジして、  
上に乗っていた、ぬいぐるみをどかしたり、  
周りのどうでもいい、ぬいぐるみを落としたり、  
何度か『ぶさゑもん』に、

アームが、引っかかりかかったりして、  
取りやすそうな位置に、転がってきたのを見て、  
これで取れそうだ！

と、思つて葵ちゃんを見たら、  
小銭入れを握り締めて、がっくりと肩を落としていました。

わたしが、どうしたの？

って声をかけたら、一言、

「お金、使い切っちゃいました。

もうちよつとだったのに……」

と言つて、人形を悲しそうに見つめていました。

そつだ、ここでさっきの借りを返しとこう！

わたしは、自分の財布から千円を出して、  
両替機で、お金を崩して来てから、

お昼のお返しするよ、と葵ちゃんに言って、  
投入口に入れました。

そして、とうとう『ぶさ彘もん』をGET出来ました！

葵ちゃんは、とっても喜んでいましたが、  
見せてもらった、『ぶさ彘もん』は、  
近くで見たら、もっとブサイクでした。

これ、かわいい、い？

うううん、判らないな、その感性。

そしてこれを取る間に、取ってしまった6つの人形は、

「これは、先輩に差し上げます！

うちにも、同じものがたくさんあるから  
と言うことで、わたしがもらいました。」

どれもこれも、どっかで見たとあるような、  
キャラなんだけど、ひとつも思い出せません。

葵ちゃんの話では、ゲームセンターとかでも、  
いつもやるのは、UFOキャッチャーだけで、  
やるときは、いつもこんな感じで、

狙ったものを取るまでは、何回でも通って、  
そのシリーズを全部取るまでは、諦めないのだそう。

でも、取りたいものを確認しながら、  
ボタンを押すのが、小柄な葵ちゃんでは、  
1人では、どうしても出来ないから、  
いつも友だちに、頼んでいるんだけど、

それに付き合ってくれる、友だちが、  
なかなかないんだそうです。

たしかに、これを毎回付き合ってたら、  
ちよつと大変かも知れない。

葵ちゃんって、夢中になると、  
周りが見えなくなるタイプみたいだしな……

ある意味、すごい集中力かも。

気づくともう、3時を過ぎていて、  
いつの間にか、ずいぶん時間が経っていました。

あんまり遅くなると、最近は何事だから、  
そろそろ、帰った方がいいんじゃないか、  
と言う話をして、帰ることにしました。

ゲームコーナーの階から、階段で下へ降りた時に、  
視線を感じて、後ろを振り返って見てみたら、  
何人かの男の人のグループも、  
ちよつと後から、出てくるのが見えました。

わたしは何となく、嫌な予感がして、  
嬉しさいっぱい葵ちゃんに、  
後ろの人たちから、死角になった間に、  
状況を説明して、次の死角に入ったら、  
わたしに構わずに走って、と伝えました。

多分、もし狙われているとしたら、わたしだし、

葵ちゃんだけなら、陸上部だから、逃げ切れると思って、そう話したんです。

葵ちゃんはそれを聞くと、首を振った後、

「わたしに考えがあります。」

1階に下りたら、大通りに向かって走ります。

わたしも、引っ張って走りますから、

先輩は、ちょっとだけがんばって下さい。

その後は、わたしに任せて下さい」

と、さつきとは別人のように、しっかりとして、とても、頼りがいがあるように見えました。

この時わたしは、葵ちゃんが、

なんだか間宮さんに似ているな、と感じました。

階段を降りきって、1階に着いたらすぐに、

わたしと葵ちゃんは、走り出しました。

やっぱり、後ろのグループは、

わたしたちを狙っていたらしく、

走って逃げ出したのが、判った途端に、

向こうは、色々怒鳴りながら、追いかけてきました。

あの人たちは、制服姿じゃないわたしたちを、

狙っているから、単純に尻高の生徒を、

襲っているのとは違うはず。

だとすると、やっぱり門塾さんに、

繋がっている人たちだろうか。

そんなことを考えながら、全力疾走していました。

葵ちゃんが言っていた、大通りまでは、それほどの距離ではないから、何とか走れそうだけど、そこに出ても、駅前から離れているから、人通りも少なくて、多少揉め事になっていったって、助けてもらえるかどうかは、怪しいです。

葵ちゃん、どうする気だろう。

大通りまで向かう、短い直線の道を、葵ちゃんに、手を引かれながら、全力で走ったけど、後ろの人たちは、どンドン、近づいてきていました。

そして、後ろの人たちとの距離が、あと5メートルくらいところで、大通りに出ると、葵ちゃんはわたしから手を離して、なんと、ガードレールを飛び越えて、車道へと飛び出しました！

そこは信号も無い場所で、ちょうどその時、トラックがこちらへ向かって、走ってきていました。

トラックは葵ちゃんを見て、クラクションを、思いつきり鳴らしながら、急ブレーキで止まるうとして、対向車線にはみだして、すごいタイヤの音を響かせながら、車道を塞ぐようにして、止まりました。

この音を聞いて、周囲のビルから人が出てきたり、窓から人が、こちらの様子を見ていました。

トラックの運転手の人が、すごい勢いで降りてきて、その場に座り込んでいた、葵ちゃんの様子を見て、ぶつかっていないのを確認した後、ものすごい勢いで、葵ちゃんに怒鳴り始めました。

葵ちゃんは、

「飛び出して、ごめんなさい！」

と、ずっと謝っていて、わたしはその様子を、ガードレールの脇に立って、

何にも考えられず、ただ呆然と見ていました。

トラックの運転手の人は、

しばらくしたら、気が済んだようで、

トラックへと戻って行き、走って行ってしまいました。

この騒ぎで、道路はすっかり渋滞してしまい、ノロノロ運転になっていて、

ゆっくりと通り過ぎる、車のドライバーは、

みんな、この事故騒ぎの当事者の、

葵ちゃんへと目を向けていました。

まだ大勢の人が、見ているうちに、

葵ちゃんは立ち上がると、わたしの手を取って、駅へ向かって、早足に歩き出しました。

「先輩、驚かしちゃいました？」

でもこれで、追いかけてきた奴らは、

手が出せなくなっただけですよ」  
と、葵ちゃんは笑顔で言いました。

わたしは、そんな葵ちゃんに、  
あんな危ないことして、もし何か遭ったら、  
どうするつもりだったの！  
って怒りました。

だけど葵ちゃんはそれを聞いたら、立ち止まって、  
まっすぐに、わたしの視線を受け止めて、

「それは、わたしの台詞です、三崎先輩。

わたしに、付き合ってもらったせいで、

先輩に何か遭ったりしたら、

それこそ申し訳なくて、耐えられないし、

第一そんなの、わたしが自分を許せません。

だから、どんなことがあっても、

先輩だけは、無事に帰ってもらわないと、

って、思っただけです。

心配させたことは謝ります、ごめんなさい。

でも、2人とも無事だったんだから、

良かったじゃないですか」

と言って、微笑んでいました。

たしかに、葵ちゃんの言う通り、

あの人たちはこの騒ぎで、姿を消していました。

「騒ぎを起こさそうとは、思っていましたけど、

轢かれるつもりは、全くありませんでしたよ。

もしあのトラックが、避けなかったら、

わたしが、車を避けようと思っていました。

あの道は、制限速度が40kmだから、  
すごいスピード出してる車じゃなければ、  
何とかなるって、思っていました」

葵ちゃんは、とても心の強くてしつかりした、  
責任感も強い子なのが、良く判りました。

間宮さんも、認めている子だもんなあ、  
当然と言えば、当然かもなあ……

だけどやっぱり、それは自殺行為だから、  
身を呈して守るのは、もうちょっと考えて欲しいです。

でも助けられたのは、事実なので、  
わたしは、こういうのは出来るだけしないでね、  
と言った後に、お礼を言いました。

このあとは、何事もなく無事に駅まで着いて、  
わたしは葵ちゃんと別れて、帰って来ました。

今日は葵ちゃんの、色んな面を見た気がする。

それにしても、葵ちゃんって、  
見た目の、小さくてかわいいイメージとは違って、  
けっこう気も強いし、気前もいいし、  
わたしを守ろうとしているところとか、  
なんだか、親分っぽいキャラで、  
年下相手に言うのは、ちょっと変な気がするけど、  
便りになる子なんだなって、思いました。



あの子なら、間宮さんも認めそうだし、  
間宮さんの下でも、やっていけそうな気がする。

あの2人なら、相性も良さそうで、  
そういう後輩がいる、間宮さんが、  
前にも増して、羨ましいなと思いました。

でもこのことを、間宮さんが聞いたら、  
どうなるんだろう。

これが、門塾さんの仕業である証拠はないけど、  
葵ちゃんが巻き込まれたのを知ったら、  
ただじゃ、済まないんじゃないかなあ。

それがちょっと気がかりです……

9月14日 最近のクラス

二学期の最初の日にあった、『次はメガネ』の文字で、  
今ではうちのクラス、みんなコンタクトになっています。

あれを見てから、メガネのままの人は、  
誰もいなくなりました。

そして標的に選ばれたのは、  
一番最後まで、メガネをしていた女子で、  
その人は、最近休むようになってしまっています。

門塾さんたちから、いじめられる対象にされている人が、狙われるのを、避けようとしていたのは、まあ、判るんですけど、

ある程度、門塾さんに近い人たちでも、メガネを止めているのって、どうしてなのか、理由がいまいち、判りません。

これって、前になが説明してくれた、恐怖と暴力で、従わせているって言う、門塾さんの、人間関係を表しているのかな、とか思いました。

ある意味、門塾さんは、いつも一緒にいる、取り巻きの人たちが、あれだけでも、本当の意味では、誰もいないのかも知れない。

門塾さんと同じ道を辿っていた、かなは、こうなる道から逃れて、今では、新たな信念を、理解する人たちと一緒にいる。

そう考えると、表面的な利害や、保身の目的であるのが、みえみえな、取り巻きの人たちに、ちやほやされて、周囲の人たちから、話しかけられている、門塾さんの姿は、とても哀れに見えました。

やっぱり、以前のかなと同じで、本人は、それを判っていて、こんなことを、続けているんだろうか……

他人を貶めたりしないと、

この人は、自分を守れないのだろうか……

門塾さんのやり方には、

全く共感出来ないし、わたしの直感ですが、

この人は、本当にかわいそうだけど、

もう、変わらないような気がします。

いつか、自分のしてきたことの反動が、

はね返ってくることに、なるんじゃないかと、

思えてなりません。

そういえば、間宮さんですけど、

わたしと葵ちゃんが、狙われたことを、

葵ちゃんから、聞いていないのか、

特に態度には、変化はありません。

話を聞いていたら、間宮さんのことだから、

絶対にただじゃ済まさないと、思っていたので、

これは、かなり意外でした。

それとも、門塾さんが関係しているかどうか、

はっきりしていないから、黙っているのかな。

ここ最近の間宮さんは、

一学期の時は、毎日練習に出ていたのに、

部活に出ないで、すぐに帰る日があるみたいで、

掃除とかで、ちょっと遅くなってるから、

帰りに、校庭の方を回って見たら、

グラウンドに、間宮さんの姿がない日がありました。

夏休みも、合宿に参加せずに、  
1人で練習していたのと、同じ理由で、  
放課後の練習にも、参加してないのかも知れない。

葵ちゃん、そのことをまた、  
気にしていなければ、いいんだけど……

9月16日 悪夢の球技大会

昨日と今日は、球技大会でしたが、  
体育祭の時以上に、厳しいものになりました。

どの種目を担当するかが決まったのが、  
今週の月曜のHRで、それも体育祭の時と同じでした。

出場メンバーは、男子のバスケットだけは、  
門塾さんの取り巻きの人たちがやりたがって、  
すぐに決まったけど、その他の競技は全部、  
門塾さんのグループの人たちからの推薦で、  
押し付けられてしまいました。

もちろん、だいたい全員が何かを参加するように、  
人数が決まっているから、クラスの半分が出ないとなると、  
残りの人たちは、競技を掛け持ちで出るようになります。

わたしは、ソフトボールとバレーボールの、

両方とも、参加させられました。

ちなみに、間宮さんも同じです。

自分のクラスの、応援が出来るようにと、スケジュールが組まれているから、一応、両方参加は出来るんだけど、出場メンバーは、いつも試合場所へと、走り回ることになります。

トーナメント線だったら、最初に負ければ終わるけど、総当たり戦だから、どれだけ負けても、試合はやらないといけません。

ただ、ソフトもバレーも、一定以上の点差が開くと、コールドになるので、体育の時間に一度ずつやった、練習試合しかしてないうちのクラスは、何回まで、コールド負けにならないで、試合が続くのか、それが問題です。

バレーボールはともかく、ソフトボールは、ピッチャーだけは、ちゃんと出来ないといけないとして、成り立たないんじゃないかと、とても心配でした。

ピッチャーにさせられた人は、練習試合では、全然まともに投げられなくて、一度も、ストライクが入らなかったんです。

これは下手すると、1回表でコールド負けとかに、

なりかねないなあと、心配していたら、その人は、当日お休みしてしまい、その人の代わりに、間宮さんが、ピッチャーをやることになりました。

そしてとうとう、球技大会は始まってしまったけど、ちよつと意外なところが起こりました。

それは、間宮さんの活躍です。

間宮さんの投げる球は、あんまり打たれることがなくて、けっこう、三振を取っていったことと、バッティングでも、他の人はダメダメでしたが、間宮さん1人が打って、その後の人たちが、送りバントして、点を取ったりして、意外とみんな、必死にがんばりました。

けど、やっぱり1人だけが活躍しても、勝てなくて、ソフトもバレーも、全戦負けてしまいました。

男子の方は、バスケットはラフプレーで反則になり、それにキレてしまった人が、相手の選手に蹴りを入れて、試合中止の、反則負けで終わり、それ以降の試合は、試合放棄で不戦敗でした。

男子のサッカーは、いいように点を取られまくって、すごい点差で大敗でした。

この2日間は、掛け持ちにさせられた時から、

嫌な予感がしていたので、  
明日もバイトは、お休みにしておいたんですが、  
それで正解でした。

どっちの競技でも、走りまくって、  
試合場所への移動でも、走らされて、  
閉会式が終わって、下校する頃には、  
もう、ボロボロでした。

今日はとにかく疲れしました。

家に帰って、ゆっくり休みます。

2010年 9月 その2(前書き)

変更履歴

2010/12/19 記述修正 白のシャツに、黒いベストとネ  
クタイしてて、 白のシャツに、黒いベストを着ていて、  
2011/04/04 記述統一 一週間、二日間、三時間  
1週間、二日間、3時間  
2011/04/12 記述統一 1年生、(中学)2年、高校3  
年 1年生、二年、高校三年  
2011/06/24 記述統一 一つ、二つ、三つ 一つ、  
二つ、三つ  
2011/08/04 記述統一 一人、二人、三人 一人、  
二人、三人  
2011/09/08 誤植修正 位 くらい



2010年 9月 その2

9月18日 新人戦の県内地区予選

昨日の球技大会のせいになった、筋肉痛がひどくて、歩くのも大変だったけど、やっぱり気になっていたので、葵ちゃんに教えてもらった、競技場へと、新人戦を見に行ってきました。

今日と明日のは、県内の地区予選らしくって、どんな感じなのか、全く知らずに行ったから、最初に観客席を見た時は、ガラガラで、見る人がほとんどいないのを見て、場所を間違えたかと、思いました。

葵ちゃんの話によると、午後くらいから、間宮さんの出る短距離が始まって、その後に、葵ちゃんの出る、長距離の予定だと聞いていたので、競技場には、お昼過ぎに着くように来ました。

観客席の下の方は、競技の出場待ちの人たちとか、多分、選手の知り合いっぽい集団とかがいたので、わたしは、上の方の隅っこに座って、家から持ってきた、お茶を飲みながら、眺めていました。

まずは間宮さんの出ている、短距離からです。

間宮さんは、100mと200mと400mに出て、  
予選は、けっこう接戦だったけど、  
全て1位でした！

さすがに一緒に走ってる人たちも、  
相当速いし、きれいなフォームでしたが、  
やっぱりわたしには、間宮さんの走る姿が、  
一番きれいに見えました。

準決勝でも間宮さんは1位で、これなら決勝だって、  
いけるんじゃないの、と思っていたら、  
決勝では、3つの競技とも、  
僅差で、7位に終わってしまい、  
上位6位までが、県大会出場なので、  
これで間宮さんは、残念ながら、  
県大会出場ならず、でした。

決勝での、間宮さんのスピードは、  
気のせいかな、準決勝までよりも、  
遅かったような気がしました。

たしかに、決勝のタイムは、  
準決勝までよりも、速かったけど、  
それまでの、間宮さんのタイムだったら、  
上位に入れると思ったので、とても残念です。

ここからだ、と、遠くてよく判らなかつたけど、  
間宮さんは、決勝を走り終わった後は、  
誰とも話をしないで、トラックを離れて、

競技場の中に、入っていつてしまいました。

間宮さんのことが気になったけど、どこに行ったかも、判らないから、それを考えるのはやめて、次の葵ちゃんの出る、5000mの、長距離を見ていました。

葵ちゃんは、序盤は最下位だったけど、1人ずつ抜いていつて、終盤には、1位でゴールしていました。

予選も準決勝も決勝も、葵ちゃんは同じパターンで、最後には1位になって、県大会進出決定です！

葵ちゃんは、ゴールしてすぐに、他の部員たちに、囲まれていました。

おめでとう、葵ちゃん！

今日は、2人とは話は出来ないだろうから、葵ちゃんの走るのを、見終わったところで、帰ってきました。

葵ちゃんの、後半の追い抜いていくところは、やっぱり間宮さんが、目をかけていただけあって、すごかったです。

でも、それよりも気にかかったのは、間宮さんの、決勝での走り方です。

昨日までの、球技大会の疲れのせいとかかも、  
なんて考えてみたけど、  
それだったら、予選から遅いだろうし、  
あくまで、わたしの直感ですけど、  
なんか、わざと負けたような気がするんです。  
でもそれは、どうしてそんなことしたのかが、  
さっぱり判りません。

もしかしたら、夏休みに言っていた、  
合宿に参加してなかった理由と、  
同じなのかも知れない。

公式の場で、本来の実力を出さなかったら、  
意味がない気がするけど、  
間宮さん、どう思ってるんだろう、  
かなり、気になります……

9月20日 父のお墓参り

明日は、父の命日です。

この時期はいつも母と、父のお墓参りに行っていて、  
今年も何とか、母の休みが取れたから、  
無事に2人で行くことができました。

昔の方が母が忙しくて、  
休みの都合がつかなくて、行けなかったり、

1ヶ月以上、命日からずれたりしてましたが、最近、割と時間も取れるようになって、命日に近い日に、行っています。

お墓参りでやることは、去年と同じで、お墓の掃除をして、お参りしてきました。

父には、自分の近況と忍さんに言われた、絵のことを報告しました。

この後、いつも通りに叔父さんの家に寄ったんだけど、ここで驚くことがありました。

双子の姉妹の、巴ちゃんと恵ちゃん、2人の見た目が、ガラッと変わってたんです。

叔父さんと、おばさんからは、2人とも、反抗期になっちゃって、苦労してるって聞いていたんで、わたしに対しても、生意気になってるのかなあ、とか思っていたら、わたしの想像以上の、変わりようでした。

まず最初に、わたしのところに来たのは、しかめっ面した、巴ちゃんでした。

その格好は、ヤンキーのつもりなのか、特攻服っぽい感じな、つなぎを着て、髪は金髪で、眉も弄ってて、メイクもしてました！

で、わたしを見つけた途端、  
「聞きたいことがあんだよ、ちょっと顔かして！」  
と、連れ去られて、巴ちゃんの部屋に、  
引っ張られていきました。

部屋の中も、すっかりそれっぽくなつてて、  
かなり派手派手に、変わっていて、  
とてもびっくりしました。

で、巴ちゃんが聞きたかったのは、  
わたしの住んでいる方にいる、暴走族とか、  
レディースとかのことで、  
巴ちゃんは、古いその系の雑誌を開いて、  
このチームとか知らない？  
とか、熱心に聞いてきたんです。

それは、くれない紅つて言うチームで、  
どうやら巴ちゃんは、そのチームみたいのに、  
すごく、懂れているのが判りましたが、  
わたしには、全然判らないから、  
そう言うのは、よく判らない、ごめんね、  
と答えました。

そしたらしばらく、  
そのチームが、どれだけかっこいいのかの、  
巴ちゃんの、解説が続きました。

そのチームの戦いとかもあつたけど、  
多かったのは、前身の伝説のチームの話で、  
10倍以上いる、暴走族との大乱闘事件や、

最強幹部の、四天王の武勇伝とか、  
その中でも最悪最凶の鬼神、  
と云われる、大幹部の凶行とかを、  
興奮気味に語っていました。

まあ、簡単に言うと、  
すごいケンカして強かった人たち、  
と言うこと、みたいです。

巴ちゃんは、こういう話を、  
聞いてほしかったみたいで、  
話を聞いてあげると、すっかり素の顔になって、  
ニコニコしていました。

巴ちゃんは、一通り話した後時計を見て、  
これから集会なんだ、と言い残して、  
なんか、微妙に弄ってあるっぽい、  
自転車に乗って、出かけていきました。

集会って、友だちと会って遊ぶことかなあ、  
ちょっとだけ、気になりました。

玄関で、巴ちゃんを見送って、  
おじさんたちのいる居間へと戻ると、  
巴ちゃんと入れ違いに、  
今度は、恵ちゃんが帰ってきました。

恵ちゃんと言うと、  
こっちは、巴ちゃんとは真逆で、  
ゴスロリっぽい、黒いドレスみたいな、

スカートの裾の長い、フリルのワンピースです。

その格好のことを尋ねると、  
なんとかかって言う、アニメのキャラの格好だと、  
ちょっと勿体ぶった、ツンツンした感じの口調で、  
教えてくれました。

どうも、口調もそれに似せてるっぽくて、  
その雰囲気は、普通の人たちよりも偉いつて言う、  
そう言う設定っぽかったんで、  
あえてそれには突っ込まず、気にしないで話しました。

恵ちゃんも、ちょっと来てって言って、  
わたしを自分の部屋へと、連れて行きました。

恵ちゃんの部屋は、そう言う系の、  
アニメのポスターとか、漫画とかでいっぱい、  
さらにノートパソコンも持ってました。

恵ちゃんからは、東京でやってるコミケとかに、  
どうやったら、参加できるの？

とか、ああいうのって、私でも行ける？  
とか、質問されました。

さっきの、ツンツンしたキャラは、  
親の前だからみたいで、部屋の中での恵ちゃんは、  
前から知ってる、大人しい恵ちゃんのままでした。

わたしは恵ちゃんに、漫画とか描いてるの？  
と尋ねると、小説とかも描いてるんだ、



と言った後、内容のことを親には言わないで、と頼まれて、絶対言わないって約束してから、わたしに見せてくれました。

その漫画や小説は、恵ちゃんが好きなアニメの、二次作品っぽくて、元のアニメが判らないから、わたしには、何とも言えなかったんだけど、BLとかじゃないんだけど、かなり、キャラの裸のシーンも多くて、中二っぽい感じの内容でした。

かなり、絵が上手かったので、それにはちょっと、びっくりしました。

わたしは、素直な感想の、内容は判ないけど、構図とかもおかしくないし、絵はきれいで、上手いと思うよ、と伝えると、他人に評価してもらえたのが、嬉しかったみたいで、とても喜んでいました。

この後はずっと、そのアニメの話と、自作小説と、自作漫画の解説を話していて、この時の恵ちゃんは、とても楽しそうに、生き生きしているなって、わたしは感じました。

恵ちゃんの話聞いていたら、いつの間か夕方になって、帰る時間になり、ちょうどこの時に戻って来た、巴ちゃんと、恵ちゃんと、おじさんたちに見送られて、

わたしと母は、うちへと帰ってきました。

それにしても、2人ともずいぶん変わってて、びっくりしました。

あの2人は、今やっていることが、楽しくて、仕方がないみたいです。

だから、おじさんとおばさんは、

大変かも知れないけど、

無理やりに、止めさせたりしないで、

見守ってあげてほしいなあ、  
て、思います。

9月25、26日 忍さんの過去

今日は、忍さんに誘われて、

都内でやっている、絵画展へと行って来ました。

その絵画展は、『空』をテーマにしたもので、

絵画展と言っても、油絵や水彩画だけではなくて、

鉛筆画や、水墨画も展示されている、

『空』が題材となっていれば、

どんな手法の絵も展示されている、絵画展でした。

このお誘いはすごく急で、昨日のバイトの時に、  
忍さんから声をかけられて、

「明日、暇？」

と尋ねられて、誘われたんです。

今日は、たまたま暇だったから良かったけど、できれば、こんな滅多にないお誘いは、事前に言っておいて欲しいです。

もし、もっと大した用事でもない予定で、こんな滅多にない機会を、断らなくちゃいけないようになってたら、かなり、へこみますから。

その絵画展へは、車で行くことになっていて、前に家に送ってもらった時にも、乗せてもらった、店長の車に乗って、行ってきました。

午前中に、うちのアパートまで、迎えに来てもらって、到着するのは、午後になるって話だったから、わたしはお弁当を作って、持って行きました。

まあ、お弁当と言っても、おにぎりだけなんですけどね。

わたしが、お弁当を作ってきたことを伝えたら、忍さんは一言、

「なんだかそういうのって、デートみたいだ、よく考えたら、私は一度も作った事ないなあ」と言っていました。

なんか、忍さんのイメージだと、作ってもらっていいそうですからね、

それも、同姓の後輩とかに。

この日の忍さんの服装は、  
まあ、いつもとそれ程変わらないけど、  
白のシャツに、黒いベストを着ていて、  
細身のパンツに、パンプスでした。

こう言うと、一見就職活動の人か、  
OL風ですけど、実際は全然違います。

シャツのボタンは、真ん中辺の3つくらいしか、  
留めてなくって、裾も出してるし、  
中に着てる？ネックのインナーと、  
細いシルバーかプラチナのネックレスが、  
胸元から見えていて、  
インナーの裾も出していました。

ベストのボタンも全開で、ジャケットにいたっては、  
肩に、羽織っているだけでしたから、  
ちゃんとしたOLには、全く見えなくて、  
長い濃いめの、茶色いストレートの髪も、  
前髪も長めだけど、まとめたりしてません。

忍さんはどちらかと言うと、スレンダーなので、  
これらを総合して、見てみると、  
バンドで、ベースでも弾いていそうな、  
男の人に見えるんです。

今はもう見慣れましたけど、バイトを始めた当時から、  
忍さんの格好は、いつもこんな感じで、

一度だけ、格好について聞いた時には、  
「だって、前が開かない服って、  
着たり脱いだりする時に、  
髪が引つかかるから、好きじゃないし、  
前を閉めて着るのって、  
なんか、息苦しいって感じがして、  
あんまり、好きじゃないんだよね」  
と、完全否定でした。

だから、寒くない時期の忍さんの格好は、  
公式のイベントとかに、参加した後とか、  
偉い人と会う用があった日くらいしか、  
ちゃんと、服のボタンを閉めてるのを、  
見た事ありません。

そんな格好した忍さんは、羽織っていたジャケットを、  
後部座席に放り投げて、車に乗り込むと、  
早速出発しました。

運転している忍さんと、他愛もない話をしてっていると、  
車は一般道から、高速へと入っていました。

この日は、見事な秋晴れの空で、  
助手席の窓だけでなくて、  
サンルーフも開けてもらおうと、  
汐月さんの、オープンカーには叶いませんが、  
これでもけっこう、気分がいいです。

この店長のワゴンは、古い車らしいんですが、  
ナビが付いているので、道はひたすら、

ナビの言う通りに、走っていました。

この時に、忍さんから教えてもらったんですが、店長は無類のスイス好きで、使うものとかも、拘っていて、そういう理由でこの車も、スイスの自動車メーカーの車なんだそうです。

若い頃は、ヨーロッパを絵を売りながら放浪していて、その時に知り合った人脈で、画廊と航海堂を、経営しているのだそうで、結構アウトローだったとか。

わたしの知る店長は、物静かな老人だから、そんなの、とても想像出来ません。

そんな話を聞いていたら、12時近くになって、今のうちに、近くの空いてるサービスエリアで、お昼を食べました。

わたしのおにぎりは、忍さんには好評で、やっぱり褒めてもらえると、作ってきた甲斐があったなあ、と、嬉しく思います。

食べ終わったら、すぐに出発して、都心へと近づくにつれて、道は、だんだんと混み始めていって、都心へ入ると、すぐに渋滞に巻き込まれましたが、その分の時間も計算して、早めに出てきていたので、予定通りの時間で、会場に到着しました。

その絵画展は、わたしの予想よりも大きなもので、200点以上の絵が、展示されていました。

色々な絵を見た感想は、

言葉では、うまく言い表せないんですが、

どの絵からも、その手法は違うけど、

その絵に描かれた範囲よりも、もっと大きな風景が、

目の前に、広がっているように感じられて、

まるで、当時の作者の見ていた空が、

実際に見えたような、そんな気がしました。

ひと通り見て回るのに、4時間以上かかったけど、

この自覚は全くなくなって、全部回り終わってから、

そのことに気づきました。

この原因は、わたしが展示されている絵を、

順番に、1つずつ見ていったから、

他の人が目の前で見ていたら、

その人が見終わるのを、わざわざ待っていたせいです。

でもこのことを、忍さんに言われるまでは、

ぜんぜん、気づいていませんでした。

忍さんには、

「何回か回ってる途中で、声かけたけど、

耳に入ってなくて、シカトされたよ。

ひどいなあ、みなもちゃん。

それとさあ、絵を見てる時だけど、

どうして、口開けてんの？」

と、言われて、わたしはかなり夢中になって、絵を見ていたのが判って、なんだか、小さい子供みたいだと自分で思い、すごく恥ずかしくなって、顔が熱くなつて、赤面しているのが判りました。

それを見た忍さんは、げらげら笑っていて、あまりにも、可笑しそうに笑ってるから、そんなに笑わなくても、いいじゃないですか！と、わたしは忍さんに怒って、しばらく、むくれています。

そしたら、忍さんが謝ってきたので、3回目の謝罪で、許してあげました。

こういうのは、傍から見たらきつと、鬱陶しく見えるんだろうなあ、と、自分でも判っていたけど、

こんなに長い時間を、忍さんと過ごせる機会って、今までも無かったし、これからも、そんなにあるとは思えないから、今日くらいは、思いっきり甘えてしまっても、いいかなと思つて、いつもよりも、遠慮しないで、素でいることにしたんです。

絵画展を見終わった後は、もう、夕方になっていて、忍さんは、前から行ってみたかったと言う、イタリア料理のお店に、予約してあるとのこと、そこへ向かいました。



前に航海堂の近くで、おごってもらった時も、イタリア料理のお店だったなあ、と思いだして、聞いてみたら、忍さんは大のイタリアン好きで、この店のピザとドリアが、美味しいらしくって、それは絶対に食べるよと、意気込んでいました。

なので、今回はコースではなく、単品で食べたいものを、どんどん頼んでいきました。

ピザは忍さんがこれしかない、と言って、マルゲリータになり、パスタは、ミートソースのボロネーゼと、イカ墨のネーロを頼んで、それと、シーフードドリアも頼んでました。

その他には、フォカッチャとか、スープはミネストローネとか、サラダはカプレーゼとか、チーズの盛り合わせとか、生ハムメロンとか、ジェラートも頼んでました。

かなりの量を、頼んでいたように思えて、実際に料理が来てみたら、予想通りのすごい量で、全部食べきれるのが、不安になってきました。

でも、忍さんは、

「ゆっくり食べてればいいし、

今日は私が、アルコールなしだから、

このくらいなら、余裕余裕。  
実は私って、結構大食いだから」  
と言って笑ってました。

モッツアレラチーズは、美味しかったけど、  
ゴルゴンゾーラチーズは、匂いがすごくて、  
わたしには無理でしたけど、  
忍さんは、美味しい美味しいって、言って、  
どんどん食べてました。

生ハムメロンなんかは、  
ほとんど、興味本位で食べてみると、  
日本のメロンや生ハムとは、両方とも味が違って、  
このメロンと、生ハムの組み合わせだと、  
美味しかったです。

さすが、忍さんが来たがっていたお店だけあって、  
とても美味しい料理ばかりでした。

これらを食べながら、忍さんはわたしに、  
聞きたいことがあると言って、話し始めました。

「みなもちちゃんの画風が、  
絶対どこかで見たことあるって、  
ずっと、気になっていたんだけど、  
それがやっと判ったんだ。  
で、ひとつ聞きたいんだけど、  
みなもちちゃんのお父さんって、  
三崎 了って名前じゃない？」

まさか、忍さんから父の名前が出てくるとは、予想していなかったので、とてもびっくりして、食べようとして持っていた、フオカツチャを、思わず落としました。

わたしは、フオカツチャを拾いながら、  
そうです、と答えると忍さんは、  
やっぱりそうだったんだ、と言う表情をしていました。

「やっぱ、そうか。」

実はね、私が今の道に進んだのは、

中学の頃に三崎 了の絵を見て、決めたんだ」

忍さんの話によると、忍さんが中学一年の時、  
課外授業で、小さい美術館へ行ったださうで、  
その時までには、絵になんて、  
全く興味がなかったんだけど、  
わたしの父の描いた、空のデッサンが展示されていて、  
それを見て忍さんは、とても驚いたのださうです。

父の絵は、鉛筆で描かれたモノクロの絵だったのに、  
その描かれていた空は、はっきりと青空に見えたから。

その絵の作者が、三崎 了、わたしの父でした。

それ以降忍さんは、他の授業は、  
そんなに真面目には受けてなかったけど、  
美術の授業だけは、欠かさずに出席したんださうです。

絵を見た後も忍さんは、父の他の作品を探したけど、

その名前は、ぜんぜん見つからなかったそうです。

わたしはこの話を聞いた後に、わたしの知っている父の話を、忍さんに話しました。

それを聞くと忍さんは、

手にしていた、水の入ったグラスを置いて、ため息をついた後に、

「そうか、お父さんは病気で、

だから世に出ている絵が、

ちっとも、見つからなかったのか、

その病気がなければ、

著名な画家になっていたかも、知れなかったのに。

ごめんね、みなもちゃん、

昔の事を思い出させてしまった」

と、謝られたけれど、

わたしは気にしていなかったので、

すぐに、大丈夫だから、気にしないで下さい、

と返しました。

それにしても、忍さんが父の絵を見ていて、

この道へと進んだのにも、驚いたけど、

そのおかげで、わたしは忍さんと出会えたのだから、

これは父が与えてくれた、縁だったんだ。

ここまで話を聞いていて、忍さんの説明には、

いくつか、気になったところがあって、

これは、いい機会だと思い、わたしは忍さんに、

忍さんの、昔の頃の話を知りたい、

と、頼んでみました。

忍さんは、最初、

「うーん……」

って言う顔をして、かなり渋っていました。

「前に、みなもちゃんからの質問も、

保留のままだったし、

そっちの事だけ聞いというて、

自分の事は話さないのも、不公平だね、

今日は、とことん話そうか。

多分、結構長くなるよ、

下手すると、朝帰りとかだけど。

みなもちゃんは、時間は大丈夫なの？」

と、質問されました。

わたしの方は、母は出張で帰って来るのは来週だし、  
予定も特にないから、忍さんさえ良ければ、  
ぜんぜん大丈夫です！  
と、力いっぱい答えました。

「そう」

と、忍さんは一言返してから、  
昔の話をしてくれました。

「じゃあ、さつき中学一年で、  
みなもちゃんのお父さんの絵を見たって、  
説明したから、そこから話そうか。

小学校の時からだけど、  
私はそんなに真面目な方じゃなくて、  
どっちかって言うと、

いつも騒動を起こしてるタイプの子だった。

親には、大人しくて真面目な妹の、

司つかさと比較されて、

しょっちゅう怒られてた。

司は私とは違って、大人しくて物静かで、

趣味も読書とかで、絵には興味はなかったから、

趣味は全く合わなかった、

いっつも私には、憎まれ口ばかりだったけど。

普通に、仲は良かったよ。

私は、合気道をずっと習っていて、

ケンカでも負けたことなく、

どっちかって言うと、いじめっ子だったかも。

この合気道の教室で、

私より強い同級生の子が、3人いたんだ。

明日香あすかと梨枝りえと愛理えり。

この子達は今でも親友で、最近はあるまり会えないけど、  
ちよくちよく時間作って、一緒に飲んだりしてる。

中学時代に、その子達と同じ学校になって、

よくつるんで、遊ぶようになったんだ。

みんな合気道は強くて、負け知らずだったから、

たまに、因縁つけられることはあったけど、

大体10分後には、相手は謝ってた。

私以外は、合気道以外にも色々やったりして、

特に一番強い明日香は、有り得ないくらい強かった。

だから、退屈していたのかも、知れないんだけど、

その明日香が、中学二年の時に突然、

4人でチーム作ろうって言い出したんだ。  
そのチームってのは、俗に言うレディース。

この4人の中で、一番先生に目を付けられていたのは、私だったんだけど、まさか学年でも上位に入る子が、そんなことを言い出すとは、思ってなかったから、かなり驚いた。

でも明日香は本気で、梨枝も愛理も何でか判らないけど、乗る気になって、私1人が反対したけど、多数決で押し切られて、結成する事になったんだ。

色々話し合って、チーム名も決めて、特攻服を作ろうとか、3人は言ってたんだ。さすがにそれは、止めとこうって説得して、だったら、制服だと足がつくから、制服っぽい服を、特攻服の代わりに着よう、って話になったんだよ。

今にして思うと、これじゃまるで、コスプレしてるみたいだね。

ちなみにチーム名は、狼を斬る凜とした桜って書いて、『狼斬凜桜』（ロザリオ）。

今にして思うと、かなり恥ずかしいけど、でも当時はこういうのが、かっこいいって、思っていたんだよね。

で、私達4人は、学校が終わると、帰りに、デパートとかのトイレで、その制服に着替えて、繁華街で遊んでいたんだ。オリジナルの制服だから、学校が判らないのと、私も含めて、みんな背が高かったんで、

高校生だと思われてたから、  
けっこうちゃんちゃして、有名だったけど、  
学校には、ばれなかったよ。

まあ、親にはばれてたから、  
いっつも止めなさいって、怒られてたよ。  
でも親には、手を上げたことはないよ。  
いっつも、はいはいって返事して、  
聞き流しはしてたけどね。  
司にも、なに馬鹿なことしてんの、  
とか言われてたなあ。  
それにはいっつも、仲間との付き合いだよ！  
って、返してたよ。

そんな不良なんだけど、みんな頭が良くて、  
私以外は、学年の順位でも1桁台の成績で、  
私はテスト前とかは、集会に付き合う代わりに、  
勉強教えてくれて、泣きついてたんだ。  
3人とも、結構きつくって、  
どうしてこんな簡単な問題が、判らねえんだよ、  
って、教師以上に追い込んでくるから、  
結構辛かった。

まあ、おかげで私も成績が上がったけどね。

何でそこまでして、私が勉強してたかって言うと、  
みんなで同じ高校へ行こうって、話になって、  
その高校が、公立で偏差値70近い高校なんだよ。  
最初に、それを聞いた時には、  
絶対無理だから、脱退させてくれって頼んだら、  
抜けるんなら、リンチだよって言われてさ。



更に入試に落ちても、リンチだつてんだもん。  
この3人に袋にされたら、殺されるって、  
本気でビビって、死ぬ思いで勉強したんだ。

おかげさまで、無事に合格して、  
その地域では、一番頭の良い高校に入ったんだ。  
この時ばかりは、司もびっくりしてて、  
皮肉も言わずに、姉貴すごいねって、  
素で言ってたなあ。

高校時代は、私は美術部に入って、  
絵を本格的に始めた。

他の3人も、それぞれやりたい部活に入って、  
つるむ時間は減ったけど、夜とか休みとかは、  
結構会ってたよ。

みんな、私が美術部ってのは、  
相当意外だったらしくて、驚いてた。

この辺りになると、舎弟って言って判るかな、  
まあ、妹分って言うか、チームに入れて欲しい、  
って言う子が、来るようになってて、

最初は、断ってたんだけど、  
それももう、面倒になつて、  
メンバーを増やし始めたんだ。

高校二年になる頃には、20人くらいになつてて、  
この頃まではまだ、入れる子は頭が良くて、  
強くなきゃ駄目って、ルールだったから、  
なかなか、入れる子は少なくて、  
それなりに、まだ秩序はあつたんだ。  
この頃かなあ、狼斬凜桜の四天王とか言う、

私たち4人の通り名が広まったのは。

この年に、私と同じ高校に入った妹の司から、相談したい事があるって、珍しく言ってきた、それを聞いてみたら、他の進学校の男子が、付き合ってくれって言って、しつこく付きまとわれて、脅迫じみた事も言われて、すごく困ってるって話だった。

その相手が、門埜 翔。

みなもちゃんの知ってる、門埜 怜の兄貴だよ。それを聞いて、私は一人で門埜に会って、付きまとうのをやめてくれって、頼んだんだ。

そしたらあいつは、こともあるうちに、私にまで脅迫してきて、自分は金持ちだし、危ない奴らとも、知り合いが多いから、大人しく言うことを聞いて、俺の女になればいいんだ、なんて抜かしたんで、頭にきて、その場で軽く殴り飛ばしたら、覚えてるとか言って、逃げてった。

この後数日して、珍しく、私の携帯に司から連絡があって、出たみたら、男の声で私を呼び出す電話だった。どうやら、門埜が力づくで司を拉致して、私への報復を、しようとしているのが判った。完全にぶちきれた私は、狼斬凜桜のメンバーを集めて、指定された場所に向かったんだ。

そこには、前々からしょっちゅう小競り合いをしていた、

暴走族の皇の奴らが揃って、  
門塾は、こいつらの裏の頭だったのが判った。  
司は、手足を縛られて、顔に殴られた跡があって、  
服も破られて、下着姿にされていて、  
その顔は、とても怯えているのが判った。

そんな司の姿を見た後、私は自分では記憶がないんだけど、  
この後、こっちの倍くらいいた皇の奴らを、  
片っ端から、鉄パイプで殴りまくってたらしい。

その後は、私が囲まれて袋にされそうになったのを、  
仲間も加勢して、大乱闘になった。

私が狼斬凜桜の幹部だったのを、知らなかった門塾は、  
妹を使って、私を脅そうとしてた目論見が崩れて、

それどころか、実は狼斬凜桜の幹部で、  
それを逆上させたのに、すっかりビビッたみたいで、  
皇の奴らを置いて、自分だけ裏口から、  
逃げ出そうとしてたのが見えた。

それを見た私は、3人に司を任せて、  
門塾を追いかけたんだ。

あいつは、裏に止めてあった自分の車で、  
こっちに向かって、突っ込んできたから、

私は持ってた鉄パイプを、運転席に向かって投げつけた。  
フロントガラスは砕け散って、

車は私の左腕を掠めて、壁に突っ込んだ。  
止まった車から、手にナイフを持った門塾が、

降りてきたけど、そんなのは蹴り一発で弾き飛ばして、  
この後は、血反吐吐いて息も出来なくなるくらい、  
タコ殴りにしてやった。

この時の私は、門塾を殺すつもりだったんだけど、

その前に、梨枝と愛理が止めに入つて、取り押さえられた。

まだそれでも、殴ろうとして暴れてたけど、司の声を聞いて、我に返つたんだ。

大乱闘は、門埜が逃げ出した辺りから、皇の奴らは、士気が下がって逃げ出したから、結果は、うちのチームが勝つたよ。

司も殴られたり、服を破られたりはしてたけど、それ以上は、何もされてなかったのと、もうこれ以上はいいから、やめてつて司に頼まれて、私の怒りも、とりあえず治まつたんで、門埜も解放してやつたんだ。

これだけの大事件だったけど、事件にもなつてなくて、誰もお咎めなしだった。多分、門埜が親に言つて、もみ消したみたい。この一件の後で聞いた噂話では、あいつは、薬の横流しもやっていて、それが警察にばれるのを恐れて、事件を、表沙汰にしなくなつたんだと思う。この乱闘事件で、今まででかい顔をしていた、皇を潰したせいで、一気に有名になつちやつて、入りたいつて言う子達も、一気に増えたんだ。

この大乱闘の話も、尾ひれがついた噂になつてて、本当は40人くらいだったのに、100人以上の皇のメンバーを、全員半殺しにしたとか、私は1人で20人を再起不能にした、とか言われてて、いつの間にか、狼斬凜桜の鬼神つて、呼ばれてたよ。

この頃になると、四天王なんて呼ばれてた私達は、自分達がつるんで、楽しく遊んでたものとは、かなり、違つて来ているなつて感じてて、高校三年の時に、結成メンバーの4人は引退した。私達が、ルールみたいなものだったから、抜ける時もリンチとかはなくて、次のリーダーとか、幹部とかを引継ぎしたんだけど、ただ引き継ぐ際に、条件として、チーム名は『狼斬凜桜』から改名してくれつて、それだけ二代目のリーダーに約束させた。それで、やんちゃしてた時代は、終わった。

それから半年もしないうちに、チーム名は変わつて、紅、とか言う名前になつたのかな？  
今でもまだ、そのチームは残つてるらしいけど、もう、普通の不良の集団になつてるみたい。

そして、高校三年になつてすぐに、  
司が、私が頼んだ買い物に行く途中で、  
交通事故に遭つて、死んだ。

これは門塾がらみではなくて、普通の事故だった。  
相手のドライバーも亡くなつたけど、  
その原因は、事故の怪我とかじゃなくて、  
長時間労働での過労で、運転中に、  
急性心不全を起こしていて、  
司を轢いた時には、既に死んでいたのだと聞いた。  
相手の親族は、土下座して私達に謝つてたけど、  
両親は、そんな相手の親族に普通に接していた。

何処にこの憤りをぶつければいいのか、私には、正直判らなかつた。轢き殺したドライバーなのか、その親族なのか、ドライバーの会社なのか。それとも私なのか。

何で司が、死ななきゃいけなかつたのか、全く判らなくて、しばらく引きこもつてた。

私は、私が司を殺したんだと、判断したから。

この時、あの3人が来てくれなかつたら、

私はここに、いなかつたかも知れないって思う。

3人はね、私をリンチしたんだよ、手加減なしで。

この時、このまま殺されるんじゃないかって、

本気で思つた時に、明日香が、

そんな腑抜けた姿を、司ちゃんに見せられんのかよ、

つて怒鳴つて、思いっきり殴られたんだよ。

それで私も気合入れて、3人相手に反撃した。

でもやつぱり負けたけど、それでちよつとだけ、

気が晴れたんだ。

この後、全治2週間の入院の後は、

もう普通に、受験生として勉強して、

私は今の美大に合格して、他のみんなも、

それぞれの道を目指して、違う大学に入ったんだ。

大学に入つたらもう、

やんちゃしてた頃のキャラは、完全に封印して、

大人しく、真面目に通つたよ。

ただ、この性格だけは変えられないから、

自論を絶対に曲げないとか、  
納得いかないと、徹底的に相手を問い詰めるとか、  
思った事を誰であろうと、  
ストリートに言っちゃうのとかは、  
全然、治ってないけどね。  
それと、司の事を考えてしまうのも、  
完全には治らなかった。  
もう自分の責任だとか、思い詰めたりはしないけど、  
でも、思い出す度に、ずっと後悔し続けてるんだ。  
あの時に、買い物頼まなければ、とか、  
私が自分で行っていれば、とか。  
もちろん、表には出さないようにしてたけどね。

だから、高校生の女の子で、髪が長かったりすると、  
無意識に目で追いかけたりするのも、  
いつの間にか、癖になってた。  
もうこれは一生治らないのかも、とか思っていた時に、  
1人の女の子が航海堂に来て、買い物して行った。  
何でか判らないけど、すごく気になった。  
多分だけど、顔とかは全然似てないんだけど、  
その雰囲気、司に似てたんだと思う。  
そして、しばらくしたら今度はその子が、  
バイトの面接を受けたって、行ってきた。  
私は店長に頼んで、前例がないけど、  
高校生を雇ってくれるように、頼んだんだ。  
店長は、もちろん司の件を知っていたから、  
最初は絶対に駄目だって、言っていたけど、  
何とか説得して、許可してもらった。

その女の子と、話すようになったら、

私の癖も消えて、その子しか見なくなっただし、

司の事は忘れなかったけど、思い悩む事はなくなった。これが本当に良い事なのかどうかは、

正直、私自身も良く判らない。

ある意味、その子を司の代わりに行っている気もする。

店長は、そうなるのを良い傾向とは思っていないから、ずっと高校生の女の子を、

募集しなかったのもあったんだ、

でも今では、この状況を認めてくれている。

それは、私にもその子にも、マイナスではない、と、判断してくれたからだと思うし、

私も今では、これで良かったって、確信してる。

そして今、私はその子と食事をしているんだよ、  
みなもちゃん」

こう言っただけ忍さんは、少し涙ぐんだ瞳で、それ以上は、もう何も言おうとはせずに、まっすぐに、わたしを見つめていました。

この時の忍さんは、今までのどの時よりも、か弱くも見えて、とても怯えているのが、見ていて判りました。

いつも、強い面ばかり見てきたからか、

この時ほど、忍さんが、

普通の女の子っぽく見えたことは、なかったです。

この話で、忍さんの過去も、今まで謎だったことも、全てが、はつきりと判りました。



前に、わたしが忍さんを問い詰めた時、このことを、話してくれなかったのは、忍さん自身が、過去の司さんを引きずって、わたしを、その身代わりに行っているのに、わたしに対して、なつめに依存しているのを、諭したつて、説得力がなくなると、判断したからだっただ。

そして、忍さんは、わたしがそれを聞いた時、わたしにどう思われるのか、それをずっと、気にしていたのだと悟りました。

わたしが、死んだ司さんの、身代わりであることを、知ってしまったら、決して、良くは思わないだろうと。

その結果、わたしが忍さんから離れるかも知れない、それを忍さんは、ずっと恐れていたのが、今はつきりと判りました。

忍さんは、わたしが黙っているのも、かなり、不安に感じているようで、この時の忍さんは、いつもの余裕も貫禄もなくて、とても動揺していたけど、わたしからの答えを、受け入れようと、必死に身構えているのが、感じられました。

わたしはこの話を聞いて、一応ちょっとだけ、自分の意思を、改めて確認する為に

目を閉じて、考えてみました。

今のわたしがあるのは、亡くなった父と司さん、  
2人のおかげだと、判りました。

忍さんが、司さんの面影を、  
わたしに見ているのと、同じで、  
わたしも多分、忍さんに、  
性別とかは違うけど、  
父の面影を、重ねているんだと、  
言うことにも気づきました。

でもそれは、わたしは忍さんに対して、  
身代わりになっているとかなんて、思いません。

好きだった父と、重なるところを持っている、  
忍さんが好きだから、そう見ているんです。

それと一緒に、忍さんがわたしに、  
司さんの面影を重ねて見ている、  
それは別に、嫌ではありません。

逆に、好きだった司さんと同じくらい、  
わたしのことを、気に入ってくれていて、  
わたしの存在が、忍さんの心の傷を、  
癒す役に立っているなら、なおさら嬉しいです。

だから今までどおり、わたしにとって忍さんは、  
尊敬できる先輩であり、好きな人だし、  
それは、これからもずっと変わりません。

いえ、これからは、本心を打ち明けてくれたから、もっと親しい人になって、これまで以上に、大好きになりました。

やっぱり、わたしの気持ちには、迷いはないと確信して、答えを待っている忍さんへ、このことを伝えました。

それを聞いた忍さんは、  
「そう言ってもらえて、安心したよ、正直言つと、みなもちゃんに嫌われるのが、すごく怖くて、不安だった。

こんなに追い詰められたのは、あの3人に、袋にされた時以来かも。ありがとうね、みなもちゃん。それと、これからも、よろしくね」と言つて、泣きながら微笑んでいました。

その時の忍さんは、今まで見た中で一番嬉しそうで、とても穏やかな、優しい表情をしているように、わたしには見えませんでした。

忍さんが始めて見せた、泣き顔を見て、わたしも思わず、もらい泣きしてしまって、お互いに、そんな様子を見て、笑ってしまいました。

忍さんから、今度時間が取れたら、

司の墓参りに、付き合っしてほしい、  
とお願いされて、わたしは頷いた後、  
その代わり、忍さんもわたしの父のお墓参りに、  
一緒に来て下さいって、お願いしました。

今はちょっと、時間が取れないけど、  
両方とも必ず行こう、と2人で約束しました。

こうして、話が終わる頃には、  
お店の営業時間も終わりで、  
時計を見ると、もう12時でした。

この後は、結構空いていた高速を飛ばして、  
1時間半くらいで、地元へと戻って、  
アパートまで送ってもらいました。

車の中では、いつの間にか眠っていたみたいで、  
家の前で、わたしは忍さんに起こされて、  
それに気づきました。

忍さんの車を見送った後、  
アパートの自分の部屋に入って、  
この日はすぐ眠くて、ガマン出来ず、  
そのまま布団に入って、寝ちゃいました。

そして、翌日のお昼近くになってから、  
目を覚まして、朝風呂に入りながら、  
昨日のことを、思い出していました。

忍さんが、元レディーだって言うのは、

びつくりはしたけど、前々から、  
そうでもおかしくないかも、と思っていたので、  
そんなには、驚きませんでした。

それよりも、とても驚いたのは、  
父の絵を見て、忍さんは絵の道に進んで、  
その結果、わたしと出会っていたり、  
忍さんの、過去の出来事が、  
巴ちゃんの憧れている、チームのことだったり、  
忍さんが司さんの事で、因縁のある相手が、  
あの門塾さんの、お兄さんだったりしたことです。

意外と、世間は狭いんだなあ、  
と、しみじみ思いました。

これで、忍さんとの間には、  
秘密にしているような、隠し事は、  
もう、なくなっただと思うし、  
忍さんの本心も、よく判ったから、  
これからは、完全に遠慮なく、  
付き合っっていける気がします。

もちろん、TPOを踏まえてですけどね。

今までも、とてもお世話になってきたけど、  
忍さんは、司さんのお姉さんで、  
それはつまり、司さんの代わりである、  
わたしにとっても、お姉さんだって言うことだから、  
これからは、司さんの分も合わせて、  
忍さんに、甘えさせてもらいます！！！



2010年 10月 その1 (前書き)

変更履歴

2011/04/12	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3
年 一年生、二年、	高校三年	
2011/06/17	誤植修正	始め 初め
2011/06/25	記述統一	一つ、二つ、三つ
2つ、3つ		一つ、
2011/08/05	記述統一	一人、二人、三人
2人、3人		一人、
2011/09/22	誤植修正	話し 話

2010年 10月 その1

10月2日 絵の評価

バイトが終わって、更衣室へ入ろうとしたところで、忍さんに呼び止められて、何だろうと思ったら、前に渡していた、クロツキー帳を、返してもらいました。

忍さん曰く、

「実はさ、この前絵画展に言った時に、渡そうと思って車に置いといたのを、

すっかり忘れちゃって、

今週必死で探してたんだ、ごめんごめんと、頭をかきながら謝られました。

わたしはそれを聞いて、ちよつと忍さんを、からかってやろうと思って、わたしの大事な絵なのに、そんな、ひどいです！と言いながら、両手で顔を覆って、うつむいて、泣きまねしてみました。

そしたら、真に受けてうるたえてる忍さんの、必死に謝る声が聞こえたから、そろそろ許してあげよう、と思い、泣きまねをやめて、以後気をつけてくださいねと、忍さんに笑顔で注意しました。

それを見た忍さんは、





あの日の告白以降、2人しかいない時は、わたしは、忍さんに遠慮しなくなっただけ、それ以上に、忍さんの遠慮もない気がします。

だから、色々仕返ししたりしてみるけど、いっつも、やり返されて終わってます。

やっぱりこの人は、本性はいじめっ子なんだ、と、痛感させられました。

でも、そういうのが楽しくもあるから、まあいいんですけどね。

この後に、今度はわたしがむくれていたら、忍さんはもう、気持ちを切り替えていて、

「あ、絵の評価って言うか、指摘については、はさんである別の紙に、書いといたからさ、まあ、それを見てよ。」

それで判らない事があったら、と告げて、事務室へと戻っていきました。

わたしは、一応お礼を言って、家に帰ってきました。

家に帰ってから、クロツキー帳を見ると、10枚くらいの紙が入っていて、1枚目は、わたしの絵のカラーコピーで、そのコピーされた絵には、

赤ペンで色々書き込まれていて、指摘箇所には全部、番号が振られていて、その番号は、30までありました。

他の紙には、その番号に対応した指摘内容や、描き方の例とかが、ぎっしり描いてあって、この対応箇所の確認を、一通りするだけで、10分以上かかりました。

忍さん、たしかまだ大学の方が忙しいはずなのに、こんなに細かく見てくれたんだ。

それを思うと、嬉しくて、思わず、涙ぐんできてしまいました。

この涙は、この絵のことだけじゃないんです。

多分忍さんには、わたしが口で伝えてなくても、わたしの今の気持ち、判っているんだと思っています。

これがもし去年だったら、こんなには、甘えなかったんじゃないかって、思います。

やっぱり、二年になってから、学校で嫌なことが多かったり、クラスで居場所がなかったりして、その分、忍さんに甘えちゃってるって、自分でも判っているんです。

こういう意味で、忍さんに甘えるってのは、わたしのしたかった、甘えるのとは違って、ただ忍さんに、逃げてるだけだから、本当はしたくないんですけど、でも、それでもしないと、心が折れちゃいそうだから、つい、すがってしまいます。

でもそれを、忍さんは察してくれて、それをいちいち説明しなくても、わたしの状況を判ってくれて、付き合ってくれたりとか、かまってくれているんだって、思います。

そう思ったら、忍さんの心遣いと、司さんに対して、申し訳ない気持ちで、少しだけ泣いてしまいました。

でもこれは、泣いてる場合じゃなくって、わたしの為に、忙しい時間を割いてしてくれた、この指摘を吸収して、次に見せる絵で、忍さんを、驚かせないといけない、そう思つて、鼻をすすりながら、1つずつ、指摘箇所を見直していました。

わたしが成長したっていう、証拠になる絵を描いて、せめてものお礼として、忍さんを驚かせたい、と改めて思つて、今年中にもう1枚描くのを、年末までの、目標にしようって決めました！

そして忍さんを、あつと言わせて見せます！

10月4日 格ゲーの正体

今日はクラスで、色々と驚くことができました。

どれも良いことではなくて、良くないことばかりです。

まず、学校に行って教室に入ると、

クラスの人たちが、

黒板を見てざわめいているのが判って、

すぐに、始業式の日のことを思い出しました。

とても嫌な予感がして、わたしも前の黒板を見てみると、

黒板には2人の男子の名前が、大きく書いてあって、

その2人の名前の間には、『VS』と書かれていて、

その下に試合時間っぽく、

お昼休みの時間が、書いてありました。

2人とも、前はメガネをしているから、

メガネ狩りの標的なんだろうけど、

その2人のうちの1人は、

門塾さんに従っていたかと思っていた、

クラス委員長の男子です。

クラス中の人たちも、動揺している感じでしたが、

名指しされた2人は、かわいそうなくらい怯えていて、

顔が青ざめていて、震えているように見えました。

朝のHRでは、委員長が司会進行だったけど、  
まともに話も出来なくなっていて、  
鈴木先生から、どうしたの、と尋ねられても、  
委員長はちよつと体調が良くないと、  
言い訳をしていました。

やっぱり、本当のことは誰も言えません。

この時、席の後ろの方から、普段からよく大声で、  
文句言ったりしている人の声、ではなく、  
あまり聞かれない声で、先生を呼ぶ声が上がりました。

それは、門塾さんでした。

この声を聞いて、標的にされる側の人たちも、  
門塾さんのグループ側の人たちも、  
みんな、この声に反応していて、  
何を言うのかと、緊張しているのが判りました。

先生は、ちよつとだけ間を空けてから、  
門塾さんを指して、おずおずと尋ねました。

指された門塾さんは、立ち上がると、  
クラス委員長が、体調が悪いのに、  
無理をしないとイケないのは、女子のクラス委員長が、  
欠員になっているからでは、と言って、  
今日、このHRでそれを決めるべきだと、  
先生に向かって伝えました。

鈴木先生は、この門塾さんの言葉に従って、女子のクラス委員の選挙を、行うことになりました。

そしてここで、とても驚くことが起こったんです。

クラス委員に、立候補する人を確認した時、なんと、間宮さんが手を上げたのです！

となりで見ていたわたしは、

それを見て思わず、え！？

と、声に出してしまいました。

でもこのリアクションは、

わたし以外の、クラスの人も同じで、

これで一気に、クラス中が騒がしくなりました。

結局、間宮さん以外に立候補者も出なくて、

女子のクラス委員である、副委員長は、

間宮さんに決定してしまいました。

この間、わたしは間宮さんから目を放せなくて、

思わずずっと、見つめてしまっていたけど、

間宮さんは、そんなわたしを威嚇することもなく、

感情のない顔で、まっすぐに前を見ていて、

その真意は、読み取れません。

今回の一連の出来事は、

全て門塾さんの仕業だと、わたしは思います。

間宮さんが立候補したのも、何か理由があって、

強要されているんだと思うけど、  
そういうのに、絶対に屈する人じゃない、  
と思っていたから、

これには、とてもびっくりしました。

間宮さん、何があっただらう……

これでHRは終わり、

午前中の授業も、何事もなく終わって、

そしていよいよ、あの黒板に書かれた時間になりました。

間宮さんは、お昼休みが始まった途端に、

門塾さんの取り巻きの人の1人に呼ばれて、

後ろの席の、門塾さんたちの所へと向かいました。

わたしは気になって、後ろを振り返ってみると、

間宮さんはその手に、ロープみたいな太い紐を持って、

黒板に名前を書かれた、あの2人の名前を呼んで、

こっちへ来い、と呼んでいました。

2人は、朝以上に青ざめた顔で、

まるで、死刑宣告されたみたいになっていて、

他のクラスの人たちは、この状況を、

興味深げに見守っていました。

間宮さんは更に、廊下側の人たちに向かって、

ドアと窓を閉めるように命令して、

教室のドアは、机で開かないようにロックさせて、

教室に誰も入ってこれないようにさせた後に、

窓側の人にカーテンを閉めると、指示していました。



間宮さんは呼んだ2人に、左足を出すように言って、その2人の足首を、手にしていた紐で繋ぎました。

クラス中の人が見守る中、間宮さんは2人に対して、ルールの説明を始めていました。

顔への攻撃は反則で、制限時間は昼休み時間、

これで負けた方が、次のターゲットになり、

勝負がつかなければ、2人ともがターゲットだと、2人に伝えていました。

そして、勝負開始を宣言しました。

最初は、2人もクラスの人も、動きがなかったけど、当事者の2人は、意を決したみたいで、はじめは間合いを取って、蹴り合いになっていました。

次第に、体格的に押され気味だった、委員長が、叫びながら、一気に相手へとつかみかかって、その勢いで押し倒して、もみ合いながらの、殴り合いになりました。

それを間近で見ている、門塾さんの取り巻きの人たちは、楽しそうに、野次を飛ばしていて、次第にそれに便乗して、クラスの人たちも、盛り上がっていました。

その中でも、間宮さんは無表情で、

取っ組み合っている2人を、  
つまらなそうに、見つめていました。

間宮さんは、どうやらレフリー役みたいで、  
反則にしている行動に対して、  
それを、手でつかんだり、足で蹴ったりして、  
力づくで止めていました。

これが、『格ゲー』の正体でした。

本当に、あの人たちにとっては、  
クラスメイトなんて、ゲームの駒なんだ。

どこまでこういうひどいことをさせれば、  
気が済むのか、その限度が見えなくて、  
とても心配です。

もし、自分の名前が書かれたら、  
どうしよう……

この2人の勝負は、体格差もあって、  
クラス委員長が、ギブアップして、  
結果は委員長の負けで、終わりました。

その後、間宮さんは、2人の足の紐を解いて、  
試合終了を宣言してから、  
負けた委員長へ、お前が次のターゲットだ、  
と宣言しました。

これで、今日のゲームは終わったみたいで、

教室のドアも、カーテンも開けられて、  
クラスはいつも通りに戻って、  
午後の授業では、もうみんな普段通りでした、  
委員長以外は。

どうしちゃったんだろう、間宮さん。

どうして、あんな人たちと一緒にになって、  
協力しているのかが、全く判りません。

こんなことを、葵ちゃんが知ったら、  
どう思うかなんて、判らない訳ないのに……

10月6日 1日早い、忍さんの誕生日

明日は、忍さんの誕生日です。

ですが、バイトで会うのが、今日が明後日の、  
どっちかになってしまい、

明後日だと、忍さんが航海堂に来るかが判らないから、  
だったら、確実に直接渡せる日にしようと思って、  
今日、忍さんへ誕生日のプレゼントを、  
渡すことにしました。

何を忍さんへあげようかと、  
今日まで、色々悩みました。

なつめからみたいに、高価なものは、

わたしの財力では、到底無理だから、前に集めてるって聞いていた、腕時計は、難しそうです。

絵の関係する物だって、きつと忍さんの方が、色々入手ルートを、持っていそうだし、下手に安物を渡すのも、失礼かな、って思えてしまい、これも止めときました。

服とかは、趣味が合わないのをもらっても、扱いに困るだろうと思うと、あげない方が無難だよなあ、と一言でこれも没。

で、思いついたのは、忍さんって、いつも長い髪を、まとめないでいるから、シユシユとか、バレッタとか、出来るだけ、簡単に髪がまとめられるものなら、使ってもらえるかもって、思ったんです。

でも、いつも、まとめていないのは、単に髪をまとめるのが、嫌いだからかも、と考えちゃうと、これもダメかも、とか思えてきてしまい、全然決まりません。

と、色々考えながら、昨日学校の帰りに、前に、葵ちゃんと一緒に行った、UFOキャッチャーのあった、小さいデパートを見て回った時に、どっかで聞いたことあるような、ないような、名前のお店がありました。

そのお店は、アクセサリーとか、バッグとか、  
置物とかのお店だったんですけど、

『凸凹屋くぼぼや』っていう名前のお店でした。

このお店、なんか品物がちよつと怪しげで、  
やたらと高い物が多いんです。

何万とかのバッグとか、アクセサリーとか、  
何十万とかする宝石とか、指輪とか、  
何百万する石像とか、剥製とか……

これは、わたしが求めるものはなさそうだなあ、  
と判断して、さらつと店内を一週して、  
何気なく、速やかに立ち去ろうとしたら、  
そこのお店に並んでいた、ネックレスの中に、  
わたしの直感が、これだ！  
つて、思ったのがあつたんです。

それは、クリスタルで出来た、  
クロスネックレスで、  
単にバツの形を、立体にしたみたいなの、  
単純な形ではなくて、  
ダイヤモンドの、カットみたいになっていて、  
すごくキラキラしてました。

見た目もかわいいし、忍さんから聞いた、  
この前の話にあった、チームの名前と、  
クロスとロザリオで、ひっかけてあって、  
すごくいいんじゃないかって、思いました。

でも、ちょっとデザイン的に、  
忍さんが、気に入るかが気になって、  
どうしようか迷っているよ、

「お、彼氏にプレゼント？

水晶はねえ、何にでも効くんだよ、

恋愛・開運・健康・厄除、

どれでも大丈夫だから。

あ、ちなみにもうこれ入荷しないんで、  
今残ってるので、最後ね。

残りは、ええと、あと2つだよ、

どうする？」

と、お店の店長、だと思っんですが、  
わたしの知っている、

似たような名前のお店にいた店長と、  
雰囲気がよく似ている、

ちょっと怪しげな人に、言われました。

値段は、1万円です。

買えないことはないけど、

わたしがもらったら、喜んでつけるんだけど、  
忍さんはこれ、キャラ的にどうだろうなあ……

と、商品の目の前でわたしが迷っていると、  
さらに店長は、

「水晶ってね、安いものだと、

インクルージョンとかクラックとかが、

要するに、キズみたいなのとか、曇りの事ね、  
それが入っちゃってるのよ。

この商品も、そう言うのが多かったんだけど、この残りののは、完全に透明のだから、けっこう当たりなんだよ、

手に取って見てみる？」

と言われて、その残り2つのペンダントを、目の前に出されました。

大きさは、縦横ともに2cmくらいで、クロスの先端は尖っていて、そこもきれいに、カットがされています。

店長さんが言うとおり、

そのクリスタルは、2つとも完全に透明で、実際に目の前で見ると、ますますいい感じです。

1万円かあ、自分だったら、すごく嬉しいんだけどなあ。

わたしとおそろいにしたら、忍さん、つけてくれるかなあ。

でもそうすると、2つ買うから、値段は2万円になっちゃう。

ううう、高い、だけど、おそろいって、ちよっと、かなり、惹かれます……

かなり悩みましたが、

一目惚れした、わたしの直感を信じて、思い切って、2つ買うことにしました！

そしたら店長さんは、ちょっとサービスしてくれて、1万8千円にしてくれました。

それとこれ、買ってから教えてもらったんですが、水晶のお守りとして、使えるように、チエーンが2種類入っていて、1つは、普通のペンダントと同じ、胸元くらいに合う長さなんですけど、もう1本は、心臓の上に来るように、長いチエーンもつけてました。

これなら、デザイン的に服と合わなくても、長いチエーンで、首にかければ、Vネックとかで、胸元が開いてても、服の下に隠れるから、いつもつけてもらえそうです。

せっかくだから、いつもつけてもらいたかったので、これは、ラッキーでした。

と言う訳で、プレゼントは用意したんだけど、それだけだと、ちょっと味気ないかなと思って、手作りのクッキーも作ることにしました。

忍さんから前に、ホワイトデーでもらったのは、色んな紅茶のクッキーだったから、こっちは、それに対抗して、色んな緑茶とかのクッキーです。

クッキーの生地は、おからにして、



カロリーも控えめにしました。

お茶の方は、抹茶、ほうじ茶、烏龍茶、麦茶です。

抹茶は粉を、ほうじ茶は茶葉を軽く挽いて、

烏龍茶と麦茶は、スーパーではそれしかなかったので、  
パックの中身を使って、クッキーの生地に入れました。

紅茶ほどではないかも知れないけど、

それぞれの違いが、判るくらいには作ったつもりです。

このクッキーと、クリスタルのクロスのパンドントを、  
事務室にいた忍さんへと、渡しました。

忍さんは最初に、クッキーの袋を見てから、

「これは明日、ゆっくり味見させてもらうね」

と言って、今度はパンドントの方を開けて、  
パンドントを取り出して、見ていました。

わたしは忍さんに、

それが、水晶で出来たパンドントだと説明して、  
わたしとおそろいなんです、と伝えて、

つけてきていたパンドントを、

引っ張り出して、忍さんに見せました。

わたしは普段は、パンドントとかはしないから、

お守りとして、長いチェーンでつけていて、

それを説明したら、忍さんは、

「へえ、これってクリスタルなんだ。」

パワーストーンって、持ってないんだよね。

ふうん、お守りかあ、  
せつかくだから、今つけようかな」  
と言って、さつそく取り出して、  
つけてくれました。

首にチェーンをかけながら、忍さんから、  
「ちなみに、みなもちゃんは、  
これつけて、良いことあった？」  
と質問されてわたしはすぐに、  
はい、ありましたよ、と答えました。

それは、忍さんとおそろいの物を、  
身につけられるようになりましたから、  
って、忍さんに伝えたいです。

それを聞いた忍さんは、  
「なるほどね。」

これ、大事にするよ。  
ありがとうね、みなもちゃん」  
と言って、笑っていました。

プレゼント、忍さんに喜んでもらえて、  
良かったです。

これで、わたしも忍さんも、2人そろって、  
いいことがあるといいなあ……

10月9日 ケンカを目撃しました

今日はバイトの帰りに、安売りしていた、ちよつと遠くのスーパーへと、買出しに行つて来ました。

そのスーパーは駅の向こう側で、自転車で行つても、30分はかかる場所にあつて、

お店に到着したのは、閉店時間間際だったから、さらに割引の品物が増えてて、お得でした。

でも、帰る時間がかなり遅くなつてしまい、

来る時は、迷うかも知れないから、

大きな通りに沿つて、大周りで来たのを、

帰りは裏道っぽいところを、通つて来たんです。

その途中の繁華街の裏で、ちよつと大きな音がして、何かと思つて、そちらの方を見ると、

何人かの人たちが、細い路地の奥にいるのが見えました。

その場所は、大きなデパートの裏側で、

自転車置き場になつてるところで、

そこには街灯もあつたから、

ここからでも、その場所の様子は良く見えたんです。

どうも、5人くらいの人たち同士が、

向かい合つて、もめているように見えました。

こちらから見て、背を向けている人たちには、

ひと目で判る特徴があつて、みんな上から下まで、

おそろいの、真っ黒な服装していて、

あの時の噂どおり、黒い人たちはみんな、

ニットマスクをしていたんです。

あれって、前にプールの補習で聞いた、噂の集団？

見つかったらどうしようって、怖さもあつたけど、噂の真偽が、ちょっと気になつて、

見つからないように、静かに自転車を降りてから、電柱の影に隠れるようにして、様子を見ていました。

黒い格好の人たちに、向かい合っている、こっちを向いている人たちは、みんなけっこう体格も良くて、なんか格闘技とか、スポーツをやっているような感じでした。

黒い格好の人たちの中で1人だけは、他の4人からは、ちよつと離れた場所で、仲間の4人の方を、見てもいない感じです。

何かの交渉をしていたらしく、黒い格好の人の1人が、普通の人たちと、話をしていましたが、普通の人の中のグループの、真ん中にいた人が、話していた黒い格好の人に、つかみかかつて、とうとう、ケンカになりました。

でも黒い格好の人たちは、その端にいた人以外は、すぐに、後ろへ下がってしまい、その代わりに、端にいた人が前に出て、ごつい人たちと、向かい合っていました。

ごつい人たちは、1人相手だからか、  
ちよつと笑いながら、

余裕な感じで、そのマスクの人を囲んで、  
挑発しているみたいに見えました。

でも全くマスクの人が、動じないのにイラついて、  
5人で一斉に、襲いかかっていました。

この後、何が起こったのかは、  
正直ずつと瞬きもしないで見てたのに、  
わたしには、全然判りませんでした。

ただ、あつという間にその5人は倒されて、  
マスクの人だけが、体の角度を変えて立っていた、  
そういう風に見えたんです。

まるで、襲いかかった5人は、  
自分から勝手に、倒れたみたいでした。

倒れた5人に対して、倒した人は興味がないみたいに、  
すぐに壁際へと移動して行き、  
他の4人の黒い格好の人たちが、倒された人たちへと、  
蹴ったり、馬乗りになって殴ったりしていました。

壁を背にしてそれを眺めた時、マスクの人の正面が、  
初めて見えました。

それは、髑髏の柄でした。

やっぱりこれが、あの噂で言ってた集団だったんだ。

その1人で全員倒していた、髑髏のニットマスクの人が、こっちの方を向きそうだったから、わたしは、物音を立てないようにしながら、そこから離れて、自転車に乗って急いで帰ってきました。

すごく強い、髑髏のニットマスクの人がいる、黒い格好の集団の噂は、全部本当だったんだ。

多分、見られてはいないと思うけど、本当に大丈夫だったか、とても不安です。

もし、見つかってて標的にされたらどうしよう、ちょっと心配です……

10月10日 スカルヘッド

今日は、来週の12日から始まる、中間試験の対策で、今日から14日までは、バイトもお休みにして、試験勉強に没頭しています。

と、言いたいところですけど、昨日目撃したケンカが、事件として、ローカルのニュースだったけど、テレビのお昼のニュースで、やっているのを見て、とても、びっくりしていました。

被害者は、うちの凧高のアメフト部の三年で、どうりで体格がいいはずです。

でもそんな人たちが、あんなに簡単に倒されるなんて、ありえないような気がするけど、実際にそうなったんだから、間違いありません。

ニユースでは、この手の暴行障害事件が、今年の夏から連続して発生していて、その犯人を被害者の証言から、スカルヘッドと名乗る、カラーギャングのような集団だと言っていました。

最近の傷害事件急増が、この集団の仕業ではないかと思えて、現在調査中なんだそうです。

ああ、髑髏のニットマスクしてるから、スカルヘッドなんだ……

それを見てから、あの夜に姿を見られたんじゃないかと、考えてしまって、勉強どころじゃありません。

あの時は、バイト帰りに寄ったから、ベージュ系の制服って、この辺だと風高しかないから、見られたとしたら、風高の女子だって、すぐにばれちゃいます。

あの、わたしがいたところって、電柱の下だったから、きつと街灯もあったんだろうなあ、そしたら、わたしの姿って、ほとんど丸見えだったかも知れない。

でも、こっちを明らかに向いてはいなかったから、

やっぱり、見られてないかも知れない。

けど、横向いてい人が、横目でわたしのこと、見てたかも知れない。

でも、もし見つかったら、目撃者なんだから、すぐに、こっちへ来たんじゃないかな、それが、最後まで来なかったってことは、やっぱり大丈夫だったのかも。

もしかして、逆にわたしだって特定できたから、あえてすぐに、追いかける必要がなかったのかも。

こっちからだって、髑髏のニットマスク被ってるって、見えるくらいの距離だから、見られていれば、わたしの顔だって、判っちゃうんじゃない……

と、ずっとこんな感じで、すぐそっちのことで、頭がいっぱいになっちゃうし、外の廊下を歩いて近づいて来る足音とか、外の通りの人の声とか、車とかバイクの通る音も、もしかして、襲撃に来たんじゃないかって、考えてしまって、物音がするたびに、怖くて怖くて、しょうがないです。

ああ、やっぱり興味本位で見なければ良かった。

今になって、とても後悔です……





2010年 10月 その2(前書き)

変更履歴

2011/04/12	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3
年 1年生、二年、	高校三年	
2011/06/18	誤植修正	始め 初め
2011/06/29	記述統一	一つ、二つ、三つ 一つ、
2つ、3つ		
2011/09/23	誤植修正	話し 話

2010年 10月 その2

10月14日 リベンジの中間試験

今日は、今週の火曜日から始まった、  
中間試験の最終日です。

今回は、一学期とは違って、  
間宮さんからの、無言のプレッシャーは、  
ほとんどなくなって、  
だいぶ、授業に集中できました。

格ゲーの件とか、スカルヘッドの件はあったけど、  
そういうのは出来るだけ、頭の隅に追いやって、  
試験に集中しました。

その甲斐あって、テストの出来は上々で、  
どの教科も赤点はない、はずです。

今日は、バイトもない日なので、  
すぐに家に帰って、お昼を食べてから、  
御家河の、土手へと向かいました。

この場所へ、ヒョウちゃんが帰ってきてからは、  
あの時に感じた後悔を、もうしたくないから、  
特に予定がなければ、毎週日曜日は、  
御家河に来るようにしています。

わたしが待つ場所は、ヒョウちゃんの、

巡回コースになっているから、今ではほぼ必ず、ヒヨウちゃんと会えるようになりました。

ヒヨウちゃんはいつも、自分の体1つ分あけて、わたしの隣へと座ると、ご飯を食べて、食べ終わっても、わたしが帰るか、夕方になるまで、一緒にいます。

これって、わたしのことを主だって、認めてくれてるんじゃないのかなあ、って思うんだけど、抱くのはやっぱり、まだ無理そうなので、もっと、ヒヨウちゃんに認められるように、努力しないと、ダメみたいです。

と言っても、具体的には、何をしたらいいのか、判りませんけどね……

この河原の土手へと来るのは、ヒヨウちゃんのお世話以外に、他にも理由があります。

1つは、いい感じの空の写真を撮りたい、つので、もう1つは、間宮さんに会う為です。

夏休みに入ってから、打ち解けてきてるって、わたしは思っていたのに、二学期になったら、間宮さんとの距離は、また、広がってしまっている、そう感じています。

間宮さんの身に、何かが重大なことがあって、  
そしてそれが原因で、その元凶は、  
門塾さん絡みであるのは、  
間違いないと、思います。

それが何なのかを、わたしは知りたいんです。

だから、こうしてここに来ていれば、  
自主連で走っている間宮さんと、  
また、出会えるんじゃないかと思って、  
待っているんだけど、走るコースを変えちゃったのか、  
ここのところ、全く会えてません。

放課後の、陸上部の練習を見ても、  
あまり姿を見かけなくなってるし、  
練習中の葵ちゃんも、いまいち、  
元気がないように見えます。

きっと、葵ちゃんも心配しているんだろうな。

わたしじゃ大して、  
役には立たないかも、知れないけど、  
それでも、お世話になった間宮さんの為に、  
何かをしてあげられればって、思います……

10月18日 衣更え

まだそんなに、寒くないから、

もうしばらくは、夏服の、  
ワイシャツとカーディガンでいようと、  
思っていたんですが、

学校からバイトへ向かう間に、  
カーディガンを、どっかに引っ掛けてしまって、  
右肩のところ、ほつれてしまいました。

それがけっこう、大きな穴になってしまい、  
泣く泣く、冬服のブレザーとスカートを、  
昨日、ハンガーラックの奥からひっぱり出しました。

わたしは、裁縫は出来なくて、  
何かそういう用があれば、

いつも、母に頼んでいたんですけど、  
今週は、ずっと出張なので、  
直してもらえるのは、早くても来週です。

今のクラスでの、夏服と冬服の割合は、  
ちょうど半分ずつくらいです。

といっても、夏服の人たちはみんな、  
ベストとかセーターとか、カーディガンを着ていて、  
さすがにワイシャツだけの人は、  
門塾さんの、取り巻きの中にいる、  
いつも、ワイシャツのボタンを、  
3つ外している人くらいです。

自分の胸の筋肉を、自慢しているのか、  
それとも金のネックレスを、自慢したいのか、  
その理由はよく判りませんが、

とにかく、その人はいつも、  
はだけたワイシャツだけです。

あれで、寒くないのかなあ。

門塾さんは、夏服のロングカーディガンで、  
ちょっと寒い日には、薄いマフラーを巻いています。

マフラーの色は、もちろん白で、  
カーディガンの方は、何種類か見たことあるけど、  
やっぱり全部、色は白でした。

とにかくあの人は、白が好きみたいです。

一方、それとは真逆の格好なのが、  
こっちもまだ、夏服のままの間宮さんで、  
ずっと変わらず、黒のVネックセーターで、  
靴下も、常に黒です。

前の衣更えの時には、  
まさか間宮さんが、門塾さんに従うだなんて、  
想像すら出来なかったのに。

いまだに間宮さんとは、話も出来てないし、  
クラス以外で見かける機会は、減る一方です。

それに対して、間宮さんは、  
門塾さんたちに呼ばれて、ですけど、  
話をしている時が、

日が経つごとに、増えているように思います。

なんだか、時間が経てば経つほど、  
せつかく近づいていた、間宮さんとの距離が、  
開いてしまっているような気がします……

10月22日 葵ちゃんの涙

今日の間宮さんは、門埜さんたちと一緒に、  
昼休みになったらすぐ、  
どこかへと、出て行ってしまいました。

今日は、何のイベントも仕掛けてこないのが判って、  
これでこの教室は、束の間の平和が訪れました。

周りの人たちも、誰もはっきりとは言いませんが、  
そんな空気が漂っています。

そんな時、教室の入り口に見慣れた姿が見えました。

それは、お弁当を手にした葵ちゃんです。

二学期になってからというものの、  
ここへは、来ていなかったからか、  
ずいぶん久しぶりに、制服姿を見る気がします。

葵ちゃんは、いつものように、  
わたしを見て、お辞儀していましたが、  
その顔は、今までにないほどしょんぼり顔でした。



わたしが廊下へと出ると、

「三崎先輩、聞きたいことがあるんです。

ご飯食べながらで、いいので、

ちよつと来てもらっても、いいですか？」

と、いつもの元気な挨拶ありません。

わたしは頷いてから、お弁当を持って、

葵ちゃんの後についていきました。

葵ちゃんが向かったのは、屋上で、

これは多分、偶然だと思うけど、

わたしとなつめが、一緒に来た場所と、

同じところへ座りました。

そして葵ちゃんは、いつもの大きなお弁当を広げるけど、心ここに在らずで、その動作はとてもゆっくりしていて、全然お弁当の方に、気がついていないのが判りました。

「先輩、みこと先輩の、こと、なんですけど、

あのう、何か、聞いてたりしませんか。

二学期になつてから、なんか、変なんです。

みこと先輩、全然練習にも来なくて、

たまに来てても、前みたいに、話をしてくれないし。

こつちから、強引に話しかけてみたりもしたけど、

そしたら、自分にかまうなつて、言われたんです。

わたし何か、みこと先輩にしたんでしょうか。

嫌われた原因も判らなくつて、

もう、どうしたらいいのか、判らないんです……」

と、消えそつな、小さな声で言いながら、

葵ちゃんはうつむいて、お弁当箱を脇に置くと、  
体育座りになって、膝の上で両手を組んで、  
顔を伏せてしまいました。

ここまでへこんだ葵ちゃんは、  
今までに、見たことがなくて、  
わたしは何と言っていいのか、  
その対応に、困ってしまいました。

わたしだって、間宮さんのことが判らなくって、  
今はこっちの方が、聞きたいくらいなんですから。

でも、食事もしようとしない葵ちゃんは、  
見ていてとても痛々しくて、せめて、  
ご飯だけはちゃんと、食べてもらおうと思って、  
まずはそれを説得しようと、  
5分くらい、ずっと慰めていました。

そしたらやつと葵ちゃんは、顔を上げてくれたけど、  
その顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃの、  
ひどい顔になってました。

だけど、そんな葵ちゃんが、  
とてもいじらしくて、かわいって、  
この時、わたしは感じたんです。

多分、ひどい顔して泣いている、わたしを見てきた、  
かなや、なつめも、今のわたしを同じように、  
感じていたんじゃないか、と不意に思いました。

わたしは、すぐにハンカチと、  
ポケットティッシュを取り出して、  
葵ちゃんに渡しました。

使っていないかった、ポケットティッシュを、  
ちよつど使い切ったところで、  
葵ちゃんは、ちよつとだけ元氣を出してくれて、  
とりあえず2人でお弁当を食べました。

葵ちゃんの食べるペースは、いつもの半分くらいで、  
わたしの方が、先に食べ終わったから、  
わたしは葵ちゃんに、わたしが知っていることを、  
教えてあげました。

この中には、間宮さんから口止めされていた、  
御家河で会ったことも、入っています。

だけど、クラス委員になったことまでは教えましたが、  
門塾さんの、手下みたいになっていることや、  
イジメに加担していることなんかは、伝えていません。

わたしの方も、直接聞いてはいないけど、  
多分、部活に出てないのは、  
委員会とかの、活動が忙しくって、  
部活にも、あんまり参加できないから、  
ちゃんと、葵ちゃんのことを、  
見てあげられなくなってるのを、  
あの人なりの、ぶつきらばうな言い方で、  
伝えたんじゃないかって、  
葵ちゃんには、言っておきました。

何か、それっぽく聞こえる理由で、  
どうにかして、葵ちゃんを慰めてあげたいと思って、  
わたしはそう伝えたいです。

葵ちゃんは、わたしのこの言葉で、  
ある程度は納得してくれたみたいで、  
涙で潤んだ目を、指で拭いながらだけど、  
ちよつとだけ笑顔を見せて、

「そう、ですね。」

クラス委員は、何かと放課後に用があるから、  
仕方ない、ですよ。

でも、せめて新人戦の県大会で、

わたしが走るところを、

みこと先輩に、見てほしかったんです」  
と、寂しそうに呟いていました。

新人戦の県大会？

わたしはちよつと気になって、

その大会が、いつだったのかを尋ねると、

葵ちゃんは、

「今月の8日から、10日にあつて、

わたしは走つたのは 予選ですぐに負けちゃったから、

9日だけでした」

と、教えてくれました。

葵ちゃんの話によると、本来だったら、

陸上部なら、出場メンバーじゃなくても全員出席で、

競技に出ない人たちは、応援していたんだそうですが、

間宮さんは、9日は欠席だったそうです。

この後、葵ちゃんも食べ終わって、お昼休みも終わりになったから、それぞれ、自分の教室へと戻りました。

帰る時の葵ちゃんは、

いつもの半分くらいの、元気さまで回復していて、

「先輩に話を聞いてもらえて、よかったです。

ありがとうございます！」

と、最後だけがんばって、声を出してました。

葵ちゃん、とつても健気です。

わたしはこの後、教室に戻ってから、

間宮さんが、欠席したって言う日のことを、思い出していました。

その日は、駅の向こうのスーパーへ買い物に言って、スカルヘッドの、ケンカを目撃した日だ。

なんですか、理由は判らないけど、

葵ちゃんの話を知ったら、何の根拠もないけど、

あのスカルヘッドの人たちが、

顔を隠している理由が、気になりました。

それって、その正体が、普段はそういうことを、しているんじゃないからなんじゃないかって、ふと、思っただんです。

もしかして、あれって、間宮さん、だった、とか……

この想像は、もちろん葵ちゃんには、話していませんし、

わたしがケンカを見たことも、伝えてはいません。

たまたま、日にちが一致している、

今は、それだけでしかないけど、

少しだけ、嫌な予感がしているんです。

今回ばかりは、自分の直感が外れてほしいと、強く、願うばかりです……

10月26日 最近のかな

今日は久しぶりに、学校でかなの姿を見かけました。

と言っても、昼休みに行った売店のところで、遠くにいたのを、見ただけですけどね。

かなは、10人くらいの人たちと一緒に、売店の隣りにある食堂で、ご飯を食べていました。

でも、そこにいた人たちって言うのは、同じクラスの人ではなくて、さらに学年も違う、三年の先輩や、一年生も、混じっていました。

見た目にも、その集団はバラバラで、  
体育会系っぽい人もいれば、文系っぽい人もいたり、  
ヤンキーっぽい人や、地味な人もいて、  
どういう集まりなのか、よく判りません。

ただどみんな、かなの話を真剣に聞いているのは、  
見ていると良く判って、きつとあれが、  
かなのやろつとしてしていることに、  
賛同しているメンバーなんだろうなって、  
思いました。

そこでの、かなの表情は、  
わたしと一緒にいる時には、あまり見せない、  
真面目で、きつくて冷たい感じすら受ける、  
厳しい顔をしていました。

わたしは、変にかなの視界に入って、  
邪魔しちゃうと悪な、と思っ、  
用事を済ませて、すぐに売店から帰って来ました。

そういえば、前にヒョウちゃんの治療代について、  
確認しなきゃと思っ、  
すっかり忘れていたことに、気づきました。

あのメール以降、何の連絡もないところを見ると、  
もう、かなとしては、  
すっかり終わった事になっているみたいです。

今さら、蒸し返すのも、  
かえって、面倒がられるだけかもなあ、

どうしよう。

何か今度、かなと話す機会があった時にでも、それとなく、聞いてみよう、そう決めました。

最近では、かなの変な噂も下火になって、うちのクラス以外では、かなのクラス以外でも、かなのグループの人も、増えているみたいです。

どうやら、また一年の時みたいなのかな、対、門塾さん、の形へと、戻り始めているみたいです。

でも、今度のかなのグループは、前とは中身が違うから、きつといい方向の、何かをしようとしているんだ、そう、信じています。

少し不安なのは、そのいいことって言うのが、門塾さんのグループとの、ケンカとか、抗争とか、そう言うんじゃないと、いいんだけど……

10月31日 間宮さんからの警告

今日も先週と同じく、御家河へとやって来て、ヒョウちゃんや、空を見ながら、間宮さんに会えないかと、待っていました。



でもやっぱり、全然姿を見せないの、  
もしかして、わたしと会わないように、  
走る場所を変えたんじゃないか、と思って、  
もうちょっと上流の方へと、行ってみたんです。

そしたら、その予感は的中しました。

いつもの場所から、自転車で15分くらい行くと、  
そこは野球とかサッカーの、グラウンドがあって、  
整備された、河川敷になっています。

そのグラウンドの、フェンスの外側を走っている、  
間宮さんを発見しました！

さらに幸運なことに、

間宮さんは、まだわたしに気づいていません。

わたしは土手の階段を下りて、間宮さんが回ってくる、  
グラウンドの、フェンス脇へと回り込みました。

そして間宮さんが、グラウンドの隅まで走ってきて、  
土手の方向へと、曲がったところで、  
わたしと向かい合っただんです。

間宮さんは最初、とてもびっくりした顔をしていたけど、  
すぐに最近の顔つきの、無表情な顔に戻って、  
わたしを避けて進もうとしたから、  
両手を広げて、道を塞ぎました。

通す気がないのが判った、間宮さんは、  
わたしを突き飛ばして、行こうとしているのが判って、  
その前に、聞いたかったことを、  
間宮さんへ向かって、次々と早口に言いました。

どうして、新人戦の決勝で負けたの？

どうして、門塾さんたちの言うこと聞いているの？

どうして、県大会の2日目を休んだの？

どうして、葵ちゃんに冷たくなったの？

言い始めたところから、間宮さんは、

もう、平静を装えないくらいに、

驚いて、逆上していくのが判りましたが、  
わたしは、止めませんでした。

それは、葵ちゃんの為もあるけど、

今ここで間宮さんへ、ぶつけなければ、

もう二度とチャンスはない、

そんな気がしたんです。

だから、この時わたしは、殺される覚悟で、  
何もかも、気になっていたことを、  
間宮さんへと投げつけたんです。

部活に出ない、本当の理由はなに？

決勝の時、わざと負けたのはなんで？

門塾さんたちとの関係は何なの？

9日の夜、どこにいたの？

ここで、初めてわたしは、

間宮さんの顔色が変わるほど、激怒するのを見ました。

それは、前に脅された時のことが、

かわいいもんだつたと、

思えるほどの恐怖でした。

絶対、殺される。

とても怖くて、逃げ出したいけど、

体中震えてしまって、言うことを聞かないし、

暑くもないのに、漫画みたいに、

冷や汗が顔をしたたって、

ポタポタ地面に垂れるのを、初めて見ました。

逆上した間宮さんを、見てしまった後は、

もう、何も出来ず、ただ両手を広げたままで、

固まっていたら、不意に、

間宮さんが、わたしの視界から消えました。

その次の瞬間、わたしは後ろへと吹っ飛ばされて、

2メートルくらい後ろへ飛ばされたんです。

この直後から、息が吸えなくなつて、

喉に手をやるうとしたら、

今度は、お腹のところがすごく熱くなって、それと同時に、吐き気がこみ上げてきて、さらにお腹の熱さは、すごい痛みに変っていきました。

息も出来なくて、お腹はめっちゃくちゃ痛くて、気持ち悪くって吐きそうで、

起きることも出来ず、あまりの苦しさに、ボロボロ泣きながら、

わたしは体をくの字に曲げて、

地面に転がって、泥まみれになって、もだえていました。

そんなわたしに、間宮さんは非情にも、

「これ以上詮索するな。」

いいか、これは警告だ。

これ以上、何か言い出すのなら、

次は、こんなもんじゃないからな」

そう、言い捨てて、

痛くて苦しくて、地面でもがいている、

わたしを跨いでから、一度立ち止まると、

「あざが出来たところを冷やせ。」

静かにしてれば、3日もすれば痛みは治まる」

とだけ言つと、遠ざかっていきました。

初めて、人から、本気で、殴られた……

すごく、痛いし、苦しいし、息も出来ない。

本当に、死んじゃう。

しんじやうよ。

くる、しい。

くるしいよ。

きもちわるいよ。

たすけて。

だれか、たすけて。

この後、吐き気に耐え切れなくなつて、戻してしまいました。

でも、そうしたら、息もだんだん出来るようになって、必死の思いで体を起こして、フェンスに寄りかかって、やっと、座ることが出来ました。

呼吸はだいぶましになって、吐き気の方も、一度吐いたら、かなり落ち着いてきました。

でも熱くなつたお腹の痛みは、どんだんひどくなつていつて、

あまりの痛さに、涙が止まりません。

間宮さんは、あんなこと言つてたけど、

こんなに痛いのに、そんな軽傷のはずないです。

もしかして、内臓とか破裂してるかも知れない。

もしかして、わたしこのまま死んじゃうの？

そう思えてきて、さらに涙が溢れてきます。

ちょうどその場所は、周りから死角なので、

誰にも、気づかれることもなくって、

わたしは1人で、こんなところで、

泥と、自分が戻したもので、うす汚れた状態で、

死んでいるところを、想像しました。

いやだ、いやだよ、そんなの……

1人で動けなくて、絶望していたら、

聞き覚えのある、低い泣き声が聞こえました。

それは、ヒョウちゃんでした。

さっき別れた、ヒョウちゃんが、

わたしのところへと、来てくれたんです。

ヒョウちゃんは、ひどいありさまになってる、

わたしのそばまで、来てくれて、

いつも通りに、すぐ横に座りました。

でも、いつもとは違って、

ヒョウちゃんは、じっとわたしを見つめていました。

これは、きつと、恩返しなんだ。

自分を助けてくれたから、  
そのお返しに、わたしを助けに来てくれたんだ、  
わたしには、そう思えました。

なぜか、ヒヨウちゃんが来てくれたら、  
お腹の痛みも、ちょっとずつ引き始めたように感じて、  
さっきまでの、絶望していた気持ちはなくなって、  
生きる希望が、見えてきた気がしました。

その状態から、なんとか歩けるくらいに、  
痛みが引くまでに、30分くらいかかりました。

時間を確認しようと、右腕を見たら、  
時計をし忘れていたことに、その時気づいて、  
すり傷だらけになっている、自分の腕を見て、  
忘れてきて良かったと、心の底から思いました。

グラウンドにある、大きな時計が見えたから、  
それで確認すると、もう4時でした。

この場所から、土手の上の自転車のところまで、  
ヒヨウちゃんは、わたしに付き合ってくれて、  
自転車のところまで、辿り着くと、  
ヒヨウちゃんは、去っていきました。

ヒヨウちゃん、本当にありがとね、  
今度来る時、美味しいご飯を持ってくるから。

こうして、なんとかわたしは、  
アパートまで、自力で帰ってきました。

すぐにお風呂に入ろうと、汚れた服を脱いで、  
恐る恐る、まだ痛むお腹を見てみると、  
お腹の真ん中に掌くらいの、大きなあざが出来ていて、  
すこし腫れていました。

それから、服を脱いでみて、  
他にもあちこち怪我してるのが、判りました。

それは、すり傷とか、小さいあざなんだけど、  
ぶっ飛ばされて、背中から落ちたから、  
怪我している場所が、背中やお尻や肘に、  
出来ていたようです。

頭からシャワーを浴びると、  
流したお湯が、茶色い泥水になっているのを見て、  
改めて、ひどい目にあった、と感じました。

わたしは、お風呂に入っている時に、  
ちょっと気になって、  
お腹に出来たあざと、自分の拳を比べてみました。

やっぱりだ、あざの方がもっと大きいし、  
それに、あざの形が合わない。

次に、掌と比べてみると、  
ちょうど同じくらいの大きさで、  
大体おんなじような、形になりました。

あの時、間宮さんは、



わたしに殴りかかったんじゃないやなくて、  
掌で、お腹を叩いていたんだ。

格闘技なんて、詳しくないから、  
それが、どういう意味なのかは、  
よくは判りません。

お風呂から上がった後は、他にやりようもないから、  
間宮さんに言われた通り、  
お腹に湿布を貼って冷やしつつ、  
出来るだけ、腹筋とか使わないように、  
安静にしていました。

夕飯も、ちょっとは食べられそうだったけど、  
そんなに食べたくないし、  
また戻しちゃうんじゃないかって、思って、  
食べずに水だけ飲んでました。

とりあえず、今日はゆっくり休みます。

おなか、すごく、いたい……

2010年 11月 その1(前書き)

変更履歴

2011/01/15	記述修正	P・S・	追伸
2011/01/15	記述修正	追伸の記載位置を修正	
2011/04/15	記述統一	(温度)	1度、2度、3度
1、2、3			
2011/04/22	記述統一	第一、第二、第三	第一、
第2、第3			

2010年 11月 その1

11月1日 最悪の1日

今日は朝から晩まで、1日中ひどいことばかりでした。

朝起きてても、お腹の痛みはまだ引いていなくて、昨日よりも、もっと腫れているような気もするし、背中やお尻も、痛くなってきました。

間宮さんのことも、まだ怖いし、学校、休んじやおうかなあ、

とか思いましたが、なんか嫌な予感がしていたから、体育もないことだし、今日はがんばって、行くことにしました。

登校すると、さっそく予感は当たってしまいました。

黒板に、新たなターゲットのお題が、書かれていたんです。

それは、『次はブサイク』でした。

月ごとに、切り替えるようにしているのかは、判らないけど、これで元メガネの人たちは、かなり、安心していただけみたいです。

でも『ブサイク』って、どう決めるんだろう。

自分では、地味ではあるけど、  
そこまでは、ない、つまり、なんです  
が、今回は、わたしになるかも知れ  
ません。

クラスでは、この人は危ないかも  
って思うのに、自信满满で、安心  
しきっている人もいれば、この人  
は大丈夫じゃないかな、と思う人  
が、とても、怖がっていたりして、  
やっぱり、前の時とは違って、  
人それぞれの、反応をしていまし  
た。

さらに今日は朝から、今までに  
ないことも、起こったんです。

先月に格ゲーで敗北して、ずっと  
苛められていた、クラス委員長  
が、学校を休みました。

委員長は、成績も良くて、欠席も  
遅刻も早退もない、絵に描いたよ  
うな優等生でしたが、標的にされ  
てから先月までは、耐えてきたけ  
ど、それもついに、力尽きたよう  
です。

なので、今日のHRの司会進行は、  
副委員長の、間宮さんがやって  
いました。

今週の議題は、再来週の文化祭  
で行う、クラスの出し物を決めると  
いうことで、ここでも門塾さん  
たちは、嫌がらせを仕組んできた  
んです。

こういう時に、いつも一番騒ぎ立てる人が大声で、  
「演芸がいい！」

みんなで一発芸とかやろうや！」  
と、さも自分がやるみたいに、言い出しました。

間宮さんは、それを聞いて、

第1候補として、黒板に書きました。

もちろんこの後、誰も手を上げる訳もなく、  
うちのクラスの出し物は、

あっさりと、演芸に決まりました。

次に、この演芸での作業の役割分担に入って、

これは、また立候補がいなくて、

推薦になった途端に、いつものパターンで、  
いつも標的にされている、

クラスの半分ほどの人の名前が、

上げられていました。

この中には、わたしの名前もありましたが、  
今回は、間宮さんはありませんでした。

もうすっかり、門塾さんの傘下にいるみたいです。

このHRの時間では、時間切れとなってしまう、  
そこまでしか、決められなくて、

後は、クラス委員の指揮でまとめて、  
決まったら、報告に来るようにと、

鈴木先生は言って、HRは終わりました。

実際に話し合っつて、どうするかを決めるのは、門塾さんたちで、名前を上げられたわたしたちは、黙っつて、その結果を見てみるしかありません。

もう、何をやらされるのか、想像も出来ません。

この日は午前中の授業の間、後ろの席から、色々と話しているのが、聞こえてきていて、やらされた人たちは、気が気でなくて、ギャラリーの人たちは、面白そうに、話し声に、聞き耳を立てていました。

午前中の授業が終わっつて、お昼休みの時間になると、取り巻きの人の1人が、間宮さんへと紙を渡して、それを発表しると、命令されていました。

すごく嫌な予感しかなくて、知りたくもないけど、何を書かれるのか、見ておかないと、後で、取り返しがつかないことになっつたら、それこそ大変なので、わたしは間宮さんが、何を言い出すのかを、じっつと構えて待っつていました。

間宮さんは、相変わらずの無表情で、まずクラス全員に対して、前に出ると、教卓を思い切り叩いて、クラスを沈黙させてから、こっちを見ると、命令しました。

そして、黒板にさっきの演芸に選ばれている、メンバーの名前を、横一列に2人ずつ、

まるで対戦表のように、書き始めました。

その2つの名前の列は、  
最初は、2人の名前があっただけど、  
下の方は、左側だけに、  
名前が書いてあるだけになっていて、  
どういうことかが、よく判りません。

参加者の全員の名前を書き出した、  
間宮さんは、良く通る声で、

「これが、一発芸での、  
参加メンバーのコンビだ。

それと、対になっていない奴は、  
ピンでやれ。

以上」

とつまらなそうに言って、教室を出て行くことしたら、  
取り巻きの1人から、

「ちよつと待てよ、間宮！

もう1つ、忘れてんだろつが！」

と、怒鳴られて、一瞬鋭い視線をその声の方に向けた後、  
ドアの前から、また黒板へと戻って来ると、  
名前の右側の、空いているところへ、

『一番つまんねえやつと逃げたやつは追加ターゲット』  
と、書き足してから、

「おい、これでいいな」

と、さっき呼び止めた相手に、言い捨てて、  
クラスを出て行きました。

これで、クラスの空気は一気に変わりました。

半分は凍り付いて、半分はとても盛り上がっています。

わたしの名前は、まだピンの方に書かれていたから、すこしはマシだけど、それも気休め程度です。

一発芸なんて、わたし持ってないです、どうしよう……

このクラスの、ひどい状態を見届けると、もう、この余興にも飽きたかのように、門塾さんたちのグループは、みんな、どこかへ行ってしまうました。

ギャラリーの人たちは、楽しそうに話して、一部では、賭けとかしてました。

参加メンバーの人たちには、コンビにされた相手と話をしたり、コンビの相手と、ケンカになりそうになっている、人たちもいました。

午後の授業中も、クラスはずっと変な空気のまま、苦しめられている、出場させられる当事者たちと、それを眺めて楽しんでいる、ギャラリーの人たち、まさに、天国と地獄です。

そんな雰囲気のまま、授業も終わり、わたしはとても暗い気分、航海堂へと向かいました。

お腹もまだ、かなり痛いのがマンして、



学校に来たら、とんでもないことになったし、  
本当に最悪です。

でもまだ救いなのは、今日は忍さんが出てる日なので、  
一発芸のことはともかく、  
このお腹のことを、聞けます。

昔はやんちゃしていた、忍さんなら、  
このあざとか、見てもらえば、  
本当に大丈夫かどうか、判ると思っただんです。

やっぱり、殴った本人が、いくら大丈夫って、  
言っただって、ちよっと信じきれないし、  
やっぱり、すごいあざになって、  
昨日よりも、腫れがひどくなってたから、  
かなり不安で、怖かったです。

でも病院に行くのは、お金もかかるし、  
それが母に知れたら、心配かけちゃうから、  
出来るだけ、行きたくないんです。

閉店後に、みんな帰ってから、  
忍さんに時間をもらって、昨日の一件のことを、  
友だちとケンカして、殴られたと説明してから、  
体のキズのことを、相談しました。

忍さんは医者じゃないから、治療は出来ないけど、  
ケガの程度なら見て判る、とのこと、  
病院に行かなくちゃダメかどうかを、  
見てもらいました。

もう2人しかいないけど、念の為、更衣室の、ドアのカギを閉めてから、わたしは服をまくって、お腹と背中を、忍さんに見せました。

その後忍さんから、あぎの周りとかを触られて、まるで、お医者さんの触診みたいにしていて、わたしは触られたり、押されたりするたびに、痛いかどうかを聞かれて、その都度答えていました。

わたしが気になっていたところを、ひと通り見てから、その後は、問診みたいな質問をされました。

そして忍さんは、結果として、

「うん、骨とかも折れたりしてないみたいだし、食事も出来てるから、内臓も大丈夫でしょう。

殴られた場所が、みぞおちだったから、息が出来なくなっただけで、肺も大丈夫だし。

で、お腹のあぎも、単なる大きな打撲で、

内出血がひどいだけだから、相手の子が言った通り、熱を持っている時に冷やして、

安静にしてれば、2、3日で引いてくるよ。

やられた場所って、地面は土だよね、

なら、頭も打ったかも知れないけど、

土なら柔らかいから、多分それも大丈夫。

今まで、こんなケガした事ないから、

びっくりしたでしょ。

でも、ケンカしてれば、そのくらいは軽傷だし、目につくのは、腕とかにある小さいすり傷だけど、

それは完治すれば、体に痕も残らないから、心配しないでいいよ」  
と言って、笑ってました。

わたしとしては、ちょっと気が抜けたけど、自分で思っていたより、大したことなく良かったです。

「それにしても、その子なんか習ってたのかねえ、

そのお腹の痕、指まで痕になってるから

掌底じゃなくって、張り手つぽいんだよなあ、

それとも中国拳法の、何かかもなあ。

でも、加減の出来る相手みたいで良かったよ。

馬鹿な奴が相手だと、

取り返しのつかない、大怪我になることを、

平気でしてくるから、危なくてね。

みなもちゃんは、女の子だし、

第一、そういうキャラじゃないんだから、

気をつけないと」

と言いながら、何かを言いたげな顔で、

忍さんは、わたしを見ていたから、

これは別に、苛められてできたとかじゃないと、

はつきり伝えておきました。

忍さんは、それで一応納得してくれたみたいだけど、

それでもまだ、心配そうな目で、わたしを見ていました。

ああ、また忍さんに心配かけてしまった、

ごめんなさい、忍さん。

この後、忍さんにお礼を言って、

家へと帰ってきました。

間宮さんは、あれでかなり手加減して、わたしを殴っていたんだと、判りました。

わたしにとっては、死ぬほど痛くて苦しかったけど、格闘技やっている人とか、ケンカ慣れしている人からすれば、大したことないキズでした。

間宮さんは、これでわたしを、追っ払ったつもりなんだろうけど、逆に、そんな脅迫で口封じをして、結局、何にも答えなかったことと、こんな、力の加減が出来るのを考えると、ますます、疑いは強まったと思えます。

でもこれで、次に下手なことをすると、これ以上の、ひどい目に遭わされるのは、間違いないです。

間宮さんから、うまく真相を聞き出す方法を、何か、考えないといけない。

だけど、それよりもまずは、わたしがまた、間宮さん恐怖症になってるのを、克服しないと、ダメそうです。

まだ、間宮さんとは、向かい合って、話す勇気がありません……

11月3日 ヒヨウちゃんへのお礼

今日は午後から、いつもの河原へと、  
ヒヨウちゃんへの、おとといのお礼として、  
黒毛和牛の挽き肉と、  
いつもよりも、もっと高くて硬い硬水を、  
持って行きました。

ヒヨウちゃんは、いつも通りの時間で現れて、  
さっそく持ってきた、いつもより高いご飯をあげたら、  
いつもよりもがつついて、ご飯を食べていました。

やっぱり、高いのが好きなんだね……

そんなヒヨウちゃんを眺めながら、  
今抱えている問題について、考えていました。

まず1つは、文化祭の一発芸です。

わたしは、自分で言うのもなんですけど、  
不器用で、無芸な人間だから、  
本当に、なんにも出来ないんです。

でも、出なければターゲット決定だし、  
でも出ても、つまらなければダメだし、  
どうしたらいいのか、判りません。

何か、面白いことをしないといけない、  
と言っても、何も思い浮かびません。

一発芸って言ったなら、笑いをとるか、驚かせるか、  
どっちかだと思っただけど、  
とてもじゃないけど、笑いは取れそうもないから、  
やっぱり、驚くようなことをしないと、  
ダメっばいです。

まさか文化祭で、  
潜水する訳にも行かないしなあ……

1時間は考えたけど、何にも出てこないから、  
一発芸のことを考えるのは、もうやめて、  
次に、間宮さんのことを考えました。

お腹のあざは、もうだいぶ良くなっていて、  
腫れも引いてきたし、あざの大きさも、  
小さくなってきています。

でもまだ、間宮さん自身に対する心の傷は、  
あんまり治ってはいなくて、間宮さんの方を見たり、  
近くにいられると、ちよつと怖いです。

こういう時の対処方法を、汐月さんからもらった本に  
載ってなかったかと思って、ちよつと見てみたけど、  
その対処は、患者の心理状態に対してのもので、  
自分自身への対処は、ありませんでした。

まあ、お医者さんの本なんだから、

当たり前なんですけどね……

これは、自分で克服するしかないかなあ、  
と思っています。

でも、葵ちゃんのこともあるし、  
あんまり、ゆつくりしてもいられない、  
早く克服して、真相を聞きだす手を打たないと、  
状況は、悪くなるばかりだし……

また1時間くらい、色々考えてみたけど、  
これもやっぱり、何も名案は浮かばず、  
ただ時間だけが、流れただけでした。

腕時計を見ると、もう4時を過ぎていたから、  
横で寝ていた、ヒョウちゃんに挨拶して、  
家に帰ってきました。

今日はなんだか、何にも思いつかなくて、  
ヒョウちゃんにお返ししただけで、  
なんとなく、1日が終わってしまいました。

ゆつくりできたのは、良かったけど、  
せっかくの祝日だったのになあ、  
はあ……

11月5日 なつめからのエメール

今日も憂鬱な学校が終わった後、  
すぐに航海堂へと向かって、  
バイト終えて帰って来て、  
ポストを見てみると、けっこう前にも見た、  
赤と青の封筒が入っていました。

それは、なつめからのエアメールです。

家の中へと入って、すぐに封を開けて見たら、  
前と同じ構図の、写真が入っていたんですが、  
それを見て、びっくりしました。

なつめ、めっちゃめっちゃ髪が伸びてるんです！

わたしよりも長くなってる！

2 m以上あるんじゃないの！

まるで、どっかの童話のお姫様とか、  
女王様みたいです。

それと、榊さん、なんかかっこよくなってるような、  
もしかして、痩せた？

あと、クマのぬいぐるみの、腕とかお腹とか、  
包帯で、ぐるぐる巻きにされてました。

なんか、向こうも色々起きているみたいだ、  
と思いつつ、手紙を読みました。



「親愛なる音信不通のみなもへ

前の手紙から、約4ヶ月ぶりですね。

以前と変わらず、元気にされておりますでしょうか。

そちらだとまだ、暖かい日があったり、

秋晴れだったりするのでしょうけど、

こちらドイツでは、最高気温も10 ほどで、

冷たい雨ばかりが続いています。

さて、ありきたりな前置きはこの辺にして、

私は今、すごく怒っています。

みなも、どうしてそっちから、

手紙を出してくれないのですか。

まさか、私の事を忘れてたとかじゃ、

ないでしょうね。

みなもにとって私は、目の前からいなくなって、

遠くへ離れて行ってしまったら、

あっさり、忘れてしまうような、

その程度の存在なんですか。

手紙が出せずにいた、まともな理由がなかったら、

ただじゃ済まさないから、そのつもりでいて下さい。

日本に帰ったら、どこへ逃げようとも、

必ず探し出しますからね、本当に。

半分本気の冗談は、これぐらいにして、

こちらの近況を書こうと思います。

私の方は、2週間に1日しか目覚めない、

眠り姫みたいな治療生活が、10月末に一旦完了して、

今は、新治療の経過を確認中で、毎日、様々な検査の連続です。新治療の間、ずっと寝ているだけだから、とても楽だったけど、久しぶりに人並みに、毎日、起きていられるようになった途端、今度は、分単位の検査スケジュールが、朝から晩までぎっしりで、なかなかハードです。これが1週間続き、この精密検査の結果を見て、次の治療方針を決定するから、少なくとも、それまでの2週間くらいは、普通の人と、同じサイクルの生活が送れます。

同封していた写真、見てもらえましたか？今の私は、みなもより髪が長いです。これ、この新治療の半年間、ずっと切らなかつたら、こんなに伸びました。どう、すごいでしょ。

でもこれは別に、私が要望したのではなく、新治療の人体への影響観察の1つで、一度も切らなかつたのも、あるのだけど、ここまで異常に、毛髪が伸びるのは、どうも、副作用の1つらしいです。抗がん剤みたいに、抜けるんじゃないかと、幸いでしたけどね。それ以外の、目立った副作用は出ておらず、予想以上に治療は順調です。

次に、クマのミナモですけど、私がトレーニングに使っていたら、遂に、お腹に穴が開いてしまいました。

そこで裨が直したんだけど、  
あれは、裁縫なんて出来ないし、  
ここから持ち出して、直させるのも、  
ここへ業者を入れるのも大変だから、  
手っ取り早くて、裨が自分で出来る処置をしました。  
それが、これです。  
ミナモに巻きつけられているのは、  
包帯っぽく見えると、思うけど、  
これは、もつと丈夫な布です。  
包帯だと、すぐに破れてしまつて、  
補強にならないから、裨が取り寄せたみたいで  
あと半年したら、ミナモは白熊になつているか、  
もう、原型を留めていないかも知れません。

最後に裨ですが、一番変化が少ないから、  
気づかないかも知れないけれど、  
前に送った写真と、比較してもらえば判ります。  
裨は今、ダイエットと言うか、減量中です。  
私が寝ている間、少しずつ減量していたんです。  
それを指摘したら、良く判つたな、なんて、  
偉そうに抜かして、誰に対して話してのか、  
判つてないんじゃないのかと、  
かなり頭にきました。  
そんなの、顔見ればすぐに判るに決まっているのに、  
何をとぼけた事を言っているのか、  
私には、良く判りません。  
でも、今までは太つてるって程ではなかったけど、  
もうちよつと、絞つた方が、  
警護役として、機敏な行動も取れるし、  
いいんじゃないかと、思っています。

最後に、今度こそは、お返事以外にも、  
そちらのお便り下さいね。

ここまで、強がって書いてきたけど、  
本当は、もう忘れられているんじゃないかって、  
とても不安になったりするんです。  
榊にそれを尋ねると、そんな事はないって言うけど、  
やっぱり、不安です。

私には、みなもしいないんです。  
もし、忘れられたりしていたら、  
そんなの、嫌だよ、  
シヨックで耐えられないよ……

だから、お願いだから、お便り下さいね。  
楽しみに待っているんですから。

かしこ

2010年10月31日

仁科 棗

追伸

って、弱気な感じで書けば、出してくれる？  
手紙、宜しくね！

なつめ、ツンデレキャラかと思いましたが、  
もっとしたたかなキャラになってるみたいです。

それにしても、榊さんが減量してたのなんて、

2週間に1回しか見なくても、  
よっぽど気にして見てないと、  
普通は、判らないと思うんだけど。

榊さんに対する最後の文章は、ある意味なつめが、  
のろけていただけにも、思えました。

いい加減、自分の気持ちに気づいたのかなあ。

わたしの予想は、間違っただけで、  
この手紙を読んでも、そう思えるんだけどな。

それは別にして、こっちからの手紙については、  
何も言い返せません。

ごめんね、なつめ、

別に、忘れてた訳じゃないけど、

わたしも色々あって、大変だったんだよ……

まあ、今でも大変なのは変わらないか。

今回は、明らかかな手紙の催促でしょう、  
宛名記入済みの封筒が、3通分も同封されていました。

これって、絶対に出せてことだなあ。

でも、近況なんて書いて出したら、  
またなんて言われるか、判らないし……

前の時は、弱気なところは見せられない、

そう思って、あえて書かないようにしたけど、その結果、本当の日常が伝えられなくて、手紙も出せなくなってしまうんじゃないか、この時、不意にそう気づいたんです。

なつめは、親友なんだから、

そう言うのを、知らせないでいる方が、

そっちの方が、なつめは嫌うんじゃないか。

それに、なつめはわたしが、

そんなに強くないのを、判っている。

だから、また何かに悩んでいてもおかしくない。

そういうのを、わたしが全然書いてこないから、何か隠してるって、見抜かれてて、

それを書くように、と言う意味も込めて、

なつめは手紙を書けて、書いてきているんだ。

そう思い直して、わたしは最近の自分のことを、返事に書きました。

きつとこれを見たら、すごく怒ってきそうだけど、

なつめは、わたしのことをダメ出しして、

怒りたいんだなって、気づいたから、

だから、ありのままを書きました。

門塾さんたちのことも、クラスのイジメのことも、最近の間宮さんや、葵ちゃんのことも。

こういう手紙を、なつめはわたしに、  
書いて欲しかったんだ、  
そう思ったら、前とは違って、  
書きたい内容は、次々と浮かんできて、  
気がつけば、便箋10枚を超えていました。

ほとんど愚痴ばかりになっちゃいましたが、  
これなら、なつめも満足してくれるはず！

でも、これを読んだ途端に、  
だらしなやか、不甲斐なやか、  
情けないとか、しょうもないとか、  
ものすごく、怒ったり呆れたりしている姿が、  
今から目に浮かびます……

#### 11月9日 格ゲーのルール変更

今週に入ったら、やっと精神的にも落ち着いてきて、  
間宮さんが近くにいても、前と同じくらいに、  
普通でいられるように、なって来ました。

先週の土日も、一発芸のことを考えていたんですが、  
ないものはないので、どうしようもありません。

本屋へ行って、簡単に出来る一発芸の本とかないかと、  
探してみたりもしたんだけど、  
そんなの、見つけれませんでした。

文化祭まで、あと10日しかなくて、今週からは、舞台の製作準備も始まって、バイトのない日は、放課後に残って、小道具とかも作っています。

この作業をしていたら、キリストが、自分が磔にされる十字架を背負って、処刑の場所まで行く話を、思い出してしまい、今はまるで、自分が入る棺を作ってるみたい、嫌な気分になってきます。

そんな状態だから、毎朝学校へ来るだけでも、憂鬱になってきます。

でも学校では、さらに憂鬱になることが起きてました。

今日は、2回目の格ゲーの対戦相手が、発表されたんです。

それは、2人の女子で、時間は前回と同じ、お昼休みです。

選ばれた2人は、クラスの中でも、どっちかって言うと、おしゃれしてるって、感じでもない2人だけど、ブサイクかどうかは、わたしには判りません。

でも、今回の人選がひどいのは、この2人は、友だち同士なんです。



それを、わざとケンカさせるように仕向けている、  
門塾さんたちの悪意は、本当にひどいと思いました。

だけど、わたしはそれを表立って抗議する、  
勇気も、気合も、根性もありません。

そう言う意味では、  
わたしも、ひどい人なんだと思います。

でも、そんなことしたら、確実に次は自分です。

だから、何も言えません。

この2人は、前の男子たちとは違って、  
1人が3時限目の後、逃げるように、  
早退してしまっただんです。

それに気づいた、門塾さんたちのグループは、  
ものすごく荒れていて、  
机や椅子を、蹴り倒したりして、  
暴れている人もいました。

その前の休み時間に、2人で話していたから、  
やっぱりお互いに、ケンカ出来ないし、  
思ったのかも知れない。

でもこれで、逃げた女子は不戦敗になって、  
今日のところは、これで終わりかと思ったら、  
門塾さんたちは、一旦静かになった後に、  
ひそひそ話していました。

ああいう周りに聞こえないように、話をしている時は、  
ほぼ間違いない、門塾さんが取り巻きの人たちに、  
指示をしている時です。

また何か仕掛けてくるのかな……

そして、4時限目が終わって、  
お昼休みになりました。

間宮さんは、また伝令役をやらされて、  
門塾さんたちに呼ばれてから、  
その後に、残っていた女子のところへ行くと、  
「ルールの変更を伝える。」

以前までは、試合放棄は不戦敗だったが、  
今回から、対戦者が逃げた場合、  
試合は翌日に延期する。

一度目は警告だ、お前が逃げた奴へ、  
明日に、再戦だと伝えて来い。  
二度目も逃げたら、その時に不戦敗が確定だ。  
逃げた奴はターゲットになる。  
更に、対戦相手を二度逃がしたお前も、  
その次のターゲットになる。

以上だ」

と言って、教室を出て行きました。

もう1人の女子のおかげで、  
ターゲットから逃れられたと思っていた女子は、  
相当ショックだったらしくて、  
真っ青な顔をして、そのまま教室を出て行きました。

あの人、大丈夫かな、  
思いつめて、変なことしなければいいけど……

門塾さんたちは、あくまで戦わせる気なんだ。

そこまで追い込む理由が、自分たちが楽しむ為なのは、  
間違いありません。

どれだけ、相手を苦しめても、  
何とも思っていないどころか、  
それをあの人たちは、楽しんでいるんだ。

本当に、ひどいです……

ターゲットから、逃れられなかった女子は、  
午後の授業になっても、帰って来なくて、  
結局、荷物を置いたままで、  
最後まで戻って来ませんでした。

でも教室の雰囲気は、いつもと変わりません。

ターゲットに選ばれても、おかしくない人たちは、  
下手に目立ったりしたら、明日は我が身と思って、  
静かにしていて、そうじゃない人たちは、  
早くも、この余興に飽きてしまったみたいで、  
次の展開を、期待しているようです。

さらに、ひどいことに、

クラスの中では、今回のターゲットの女子たちが、

失踪するんじゃないか、とか、  
どっかで死んでんじゃないの、とか、  
面白そうに、話をしている声も聞こえました。

そんな中でも、間宮さんは、  
相変わらず、感情を出さないで、  
淡々と過ごしていました。

本当はこんな人じゃないって、信じているけど、  
今はそんな態度がとれることが、信じられないです。  
でも何よりも、今はあの2人がどうなっちゃうのか、  
それがすごく心配です……

2010年 11月 その2(前書き)

変更履歴

2011/06/19	誤植修正	始め	初め	
2011/08/06	記述統一	一人、二人、三人		一人、
2人、3人				

2010年 11月 その2

11月13日 ケイゴさんとの再会

バイトからの帰りに、地元の駅に着いて、  
うちへと向かおうとしていたら、  
夜なのに、サングラスをかけている、  
知らない若い男の人から、声をかけられました。

ピラ配りの人かと思ったら、

その人は、白い杖を持っていた目の悪い人で、  
駅前から、ちよつと離れている、

郵便局の隣りのビルに行きたいので、  
道を教えてほしい、と言われました。

郵便局は、歩いて10分くらいの場所だけど、  
口で教えても、目が見えない人だと、  
心配なので、一緒に行くことにしました。

その人の手をとって、ゆっくりなペースで、  
郵便局まで、送って行って到着すると、  
その人は、わたしへ頭を下げて、  
右隣の、雑居ビルへと入って行きました。

腕時計を見ると、15分くらい経っていて、  
歩くのが遅かったから、いつもより時間がかかって、  
バイトでも、いつもよりも出てくるのが遅かったから、  
時間はもう9時を回っていました。

すっかり、遅くなってしまったから、  
急いで帰ろうと、思っていた時、  
駅へと向かう方にある、雑居ビルの脇から、  
何人かの人影が出てくるのが、見えません。

そこは、街灯もある通りだし、  
そんなにわたしから、離れてもいないから、  
人が影でしか見えないのはおかしい、  
そう思った後、すぐに気がつきました。

その人たちは、真っ黒な格好をしているから、  
影にしか見えなかったんだって。

それは前にも見た、スカルヘッドの集団でした。

わたしは、その人たちの脇を通り過ぎる勇気がなくて、  
すぐに逆を向いて、駅から遠ざかるように、  
歩き始めました。

たしか、スカルヘッドって、  
強い人たちを、狙っているんだから、  
まさか、わたしが対象じゃないよね……

たまたま、集まっていたところに、  
出くわしちゃった、ただだよね……

そう自分に言い聞かせて、狙われているのではと、  
思わないようにしていました。

狙われているって、思ってしまったら、

怖くて、歩けなくなりそうだったんです。

だから早足で、集団を迂回しようと思いました。

心臓の鼓動が、すごく早くなっていて、  
手とか震えてきたけど、

ここで、しっかりしなくちゃダメだ！

と自分に言い聞かせて、がんばって歩きました。

道を曲がる時に、後ろをちよつとだけ見たら、  
追ってきていないで、ビルの前にまだいたから、  
やっぱり、たまたま遭遇しただけだったんだ、  
と、ちよつとだけ安心したけど、

歩くペースは落とさないで、  
1本隣の裏道へと、進みました。

そしたら、そこに、スカルヘッドの人が3人、  
道を塞ぐように、立っていました。

わたしは急いで元の道へ戻ろうと、後ろを向いたら、  
もう、別の3人のスカルヘッドの人たちに、  
ふさがれていました。

やっぱり、わたしを狙ってたんだ……

その裏道は、通りに面した雑居ビルの裏側で、  
街灯もろくにない、薄暗い場所だったけど、  
それでも、前に立っているスカルヘッドの人の中で、  
真ん中にいるのが、髑髏のニットマスクなのが、  
判りました。



本当に、わたしが狙われてたんだ、  
どうしよう、逃げられない……

もう、この時のわたしは、  
怖さでパニックになっていて、  
頭は真っ白になってしまい、  
大声で叫ぶとか、携帯で連絡するとか、  
そんなことも、思いつきません。

以前の忘れていた、襲われた時のことも、  
また思い出してしまい、  
ただとにかく、怖くて怖くて、仕方がなくて、  
少しでも離れようと、ビルの壁際まで下がりました。

この後は、次に何をしてくるかも判らず、  
とにかく恐ろしくて、左右のスカルヘッドの人たちを、  
何度も何度も、必死に見ているだけでした。

この人たちは、前の時の人たちとは違い、  
全然会話をしなくて、無言で合図を送りあって、  
行動していたのが、わたしには余計に不気味で、  
不安と恐怖は、さらに強まりました。

スカルヘッドの人たちは、  
わたしの周りを、囲むように合流して、  
もう完全に、逃げ場がなくなりました。

それを見てわたしは、足の力も抜けてしまい、  
その場に、座り込んでしまいました。

もうこれで、走って逃げられる可能性も、なくなってしまうた。

この時、わたしはすぐく震えていて、助けてって言おうとしても、声になってない、うわ言みたいにしか、聞こえない音しか出てきません。

こんな時にまともに出てくるのは、涙だけでした。

わたしは泣きながら、かすれた声にならない声で、何度も、何度も、お願いします、助けて下さい、と言っ言葉、繰り返しました。

もう、それが精一杯の行動で、そんなことしか出来なかつたんです……

でも内心、こんなことしても、無駄なんじゃないかと、判っていて、それが悲しくて、さらに涙が溢れてきます。

何をされるかも、判らなくて、逃げられなくて、怖くて仕方がない、そんな状態が、しばらく続いたら、体の力も、どんどん抜けていってしまい、もう顔も上げられなくて、

相手に聞こえるはずもないくらい、ささやき声しか、出せなくなっ、こんなに泣って、出るものなのかって思うくらい、

自分の服と地面を濡らしているのが、見えました。

でも、なぜかスカルヘッドの人たちは、  
困んだままで、足は動いていません。

ここで初めて、はつきりではないけど、  
この人たちの声が聞こえて、  
周りの人が髑髏の人を急かしている、  
そんな風に聞こえました。

それでも、わたしの真正面にいる、  
真ん中にいた、髑髏のニットマスクの人は、  
わたしへと、近寄ってこようとはしていなくて、  
その足は、立ち止まったままでした。

その髑髏の人の、足を見ていたら、  
他の人よりも、靴が小さいのに気づきました。

そういえば、最初に街灯に照らされて見た時、  
他の2人よりも背は低かった。

これって、男じゃなくて女だとすると、  
正体はやっぱり、間宮さん!?

わたしは、どうせやられるんなら、  
その正体を確かめてやる、と覚悟を決めて、  
震えながら必死に深呼吸をして、  
少しでも、自分を落ち着かせてから、  
相手が動く前に、と思って、  
深く息を吸った後、顔を上げて叫びました。

間宮さんなの!?

でもわたしの声は、別の音にかき消されたんです。

それは、わたしが入ってきた通りから、

こちらへと突っ込んできた、

原付のバイクのエンジン音でした。

その音に気づいたスカルヘッドの人たちが、

みんな、そっちを振り返る中、

髑髏の人だけは、他の人よりちょっと遅れて、

そちらを見て、即座にその場から飛びのきました。

そのすぐ後に、原付のバイクが宙を飛んできて、

髑髏以外のスカルヘッドの人のうち、

通り側にいた2人は、地面へと伏せて、

ぎりぎり避けていたけど、

奥にいた2人が、避けられずに直撃して、

バイクごと、吹っ飛ばされました。

バイクの音が止んだら、

「ったく、めんどくせえなあ、

まだ、こんなに残ってんのかよ」

と言う男の人の声と、何かを引きずっている音が、聞こえて来ました。

その後は、何かか空気を切って唸る音がして、

わたしの視界に、バットみたいな棒を、

お腹に直撃して倒れる、1人の黒い人が見えました。

スカルヘッドの集団は、この突然の乱入者に、どう対処すればいいのか、判らないみたいで、逃げるでもなく、反撃するでもなく、ただ、身構えているだけになっていました。

間髪あけずに、今度は、

「うおおおおおりゃああああ！」  
という雄たけびと共に、

ブンブン空気を切る音が、近づいてきて、スカルヘッドの人たちが、視界から、右の裏道の奥へと下がって行き、代わりに左から視界に入ってきたのは、上下白いスウェット姿の、金髪でロン毛の大きな人でした。

その人は、鉄パイプを振り回しながら、わたしのところへとやって来ると、わたしへ左手を伸ばして、  
「早く立て！」  
と短く叫びました。

わたしは何も考えずに、その人の手をつかんで、その人に引つ張られながら、立ち上がると、その人は、持っていた鉄パイプを相手に投げつけてから、わたしを引つ張って、元の通りへと走り出しました。

その人は、大きな体に似合わず、すごい瞬発力で、髑髏の人以外が、追いかけてきてたけど、鉄パイプを避けて、出だしが遅れたせいかな、

かなり間が開きました。

この後は、このスウェットの人に、引っ張られながら、必死に走って、通りのちよつと離れた影に、止めてあった、白い大きなミニバンの、右側のドアをあけると、わたしを放り込むように乗せてから、その人は、逆側から乗り込んで、すごいタイヤの音を鳴らしながら、すぐにその場から、走り去りました。

音楽じゃなくて、色んな音がするこの車は、加速したら、すごい爆音が後ろから聞こえて、止まる時には、キーキーと音がしていて、曲がるたびに、左右に揺れたり、道の段差とかで、突き上げるような、すごい衝撃を受けると、まるで悲鳴のような、軋む音を立てていました。

それとシートが、普通の車のシートとは違って、運転席までくつついている、平らなシートなので、カーブするたびに、体が左右に倒れそうになって、窓に頭をぶついたり、スウェットの人の方に、倒れてしまって、ぶつかったりして、だんだん、気持ち悪くなってきました。

しばらく走ってから、御家河に平行に走っている、ちよつと河から離れた、国道沿いにあるコンビニで、車は止まりました。

スウェットの人は、わたしに、  
「なあ、腹、減ってるか」

と、車を降りた後に聞かれて、  
まだこの状況に、対応しきれていなかったわたしは、  
何も考えずに、頷いていました。

スウェットの人は、それを見て、  
何も返事せずに、コンビニに入っていきました。

1人になって、車酔いも落ち着いてきたら、  
足とかお腹が、ひんやりするのに気づいて、  
触ってみたら、絞れるんじゃないかってくらい、  
涙で、びしょびしょになっていて、  
しっかりと、つかんでいたはずのバッグは、  
いつの間にか、足のところに転がっているのに、  
気がつきませんでした。

この車からは、走っている時の、  
悲鳴みたいな音は止んだけど、  
停車していても、後ろの方からの爆音は、  
止んではいないし、  
それに、なんか微妙に車全体が、  
小さく揺れているのが、判りました。

なんか視界に違和感があるなあ、  
と思って、よく考えてみると、  
わたしが座っているのが、運転席側の席で、  
この車が左ハンドルなのに、気がつきました。

こんな車に、今まで乗ったことないから、

珍しくつて、あちこち車内を見回すと、後ろは2列あって、2列目のシートは、まるで、ここに寝泊りしてるみたいに、食べ物とか物が、散らかってました。

それにしても、車内が広いなあ。

見回しているうちに、車内に漂っている、かなり強い匂いが、気になりました。

助手席の前のところには、芳香剤みたいなボトルが、3つ並べてあって、それかなと思ったけど、どうも、それだけじゃないような気がする。

あ、分かった、これタバコの臭いだ。

車の灰皿のところか、いっぱいになっていたから、間違いなさそうです。

外がやけに暗いなあとあって、窓を開けてみると、窓自体がスモークになってて、暗く見えていただけなのが、判りました。

こここの場所は、いつもうちから御家河へと行く時に、通るところだから、そんなに遠くないなあ、家の近くで運が良かった、とか思っていたら、スウェットの人が帰ってきました。

スウェットの人は、かなりいっぱい買い込んできていて、「食いたいもんあったら、勝手に取ってくれ」



と言ってから、シートの真ん中に、  
コンビニ袋の中身を、無造作に広げていました。

そこには、色んな食べ物や、飲み物がありました。

お弁当、サンドイッチ、アンパン、メロンパン、カレーパン、  
スパゲティ、おにぎり、いなり寿司、から揚げ、バナナ、  
ケーキ、プリン、チョコレート、ポテチ、アイス？  
せんべい、ゼリー、ビスケット、いもけんぴ、カキ氷？

ミネラルウォーター、烏龍茶、緑茶、コーラ、  
オレンジジュース、スポーツドリンク、缶ビール？

今は夜だとけっこう寒いのに、  
アイスとか、カキ氷食べるの？

そもそも、この時期によく置いてあったなあ、カキ氷。

それに、お酒があるけど、  
もしかして、これもわたしに勧めてるの？

なんか少し、変なもの入ってますが、  
とにかく、いっぱいありました。

たくさんのお食べ物を見たら、急にお腹が減ってきて、  
わたしは、おにぎりとお茶を取りました。

ここでわたしは、さっきまですごく大変な状況で、  
今だって、見知らぬ男の人の車に、  
2人きりで乗っているのに、妙に落ち着いていて、

この人の選んできた物が変だつて、  
冷静に思っていることに、今気づきました。

さらには、普通に食べ物ももらつて、  
食べようとしていたのに、自分でびっくりしました。

わたしつて、こんなに切り替え早かつたっけ？

もう2回目だから、慣れてきたの、か、な？

ああ、今はそれを考えてる場合じゃない。

わたしは急いで、出来るだけ正面を向くように、

左側に体を向けてから、お弁当を持って食べていた、  
スウェットの人に向かって、

助けてもらったお礼を言つて、頭を下げました。

スウェットの方は、わたしの言葉を聞いて、

何かを答えていたけど、口いっぱいにほおばつていて、  
何を言っているのか、判りません。

わたしはこの時、初めてまじまじとこの人を見ました。

ダボダボの白い上下スウェットで、金髪のロン毛で、  
けっこう大柄で、ちょっと太ってる。

あご髭も生やしてて、鼻と右耳にはピアスしてて、  
金のブレスレットと、ネックレスと、  
なんかごつい指輪をしている。

この人、どっかで見たことが……

わたしが、思わずじっと見ていたら、その人は、急に焦り出して、

「もしかして、俺が臭うのか？」

風呂はちゃんと、3日前には入ったぞ！」

と、見当違いのことを答えられて、

呆気にとられた時、名前を思い出したんです！

前になつめと一緒にの時に、助けてもらった、

『ケイゴ』って言う人だって！

わたしはそれを尋ねてみると、なぜか嫌そうに、渋々な感じで、

「……………ああ」

とだけ、答えてくれた後、

「んなこたあ、どうでもいいから、

早くメシを食えよ」

と、手に持っていた箸で、

わたしのおにぎりを指しながら、言われました。

わたしは、ケイゴさんに言われた通り、

おにぎりを食べて、お茶を飲みました。

ここで良く考えてみたら、わたしは、

まだ、自分の名前すら伝えてないことに気づいて、

自分の名前を伝えてから、自己紹介をしようとしたら、

「ああ、そういうのは、いい」

と、止められてしまいました。

それにしても、なんでわたしは、  
いつも人見知りだつて激しいのに、  
今はこんなに、落ち着いているんだろう。

前にも助けられたから？

それでも会つたのは、今日を合わせて2回だけで、  
ろくに話もしてないから、  
ちよつとそれだけじゃ、ないような気がする。

それに、ケイゴさんは助けしてくれた恩人なのに、  
なんかちよつとだけ、怖い。

見た目が、ヤンキーだからなのかな、  
これもなんか、違う気がするな。

なんか、あんまり目を合わせてくれないけど、  
見られていると、なんとなく、怖いつて感じる。

どうしてだろう、なんでこんなに、  
矛盾した気持ちになるんだろう。

とにかく、助けてもらつた人なんだし、  
怖がることはない、はず、だよね……

わたしは今の自分の気持ちが、よく判らなかつたけど、  
いくら考えても分からないから、考えるのをやめました。

我に戻つてみたら、車のエアコンの風が当たつて、  
涙で濡れたところが、冷えてしまっているのに気づいて、  
ハンカチで、濡れてるところを拭いていたら、

「ちょっと、さみいかな」

そう言うと、ケイゴさんは、車のエアコンを、暖房にしていました。

かなりの高温に設定したのか、すごい勢いで温風が出てきて、暖かい、というより暑いくらいです。

カキ氷とか、アイス買って来てたけど、溶けるんじゃないかと思って、それを伝えると、ケイゴさんは、その2つを持って外に出て、急いで食べてました。

ケイゴさん、見た目と違って、すごく面白くて、いい人みたいです。

わたしはこの間に、窓側の吹き出し口から出る温風で、濡れてるところを当てて、乾かしていました。

ケイゴさんは2つ食べるのに、手間取っているみたいで、なかなか戻ってこなくて、その間に服の方は、かなり乾かすことができました。

カキ氷とアイスを食べ終えて、その後ゴミを捨ててきた、ケイゴさんは、車内に戻ってくるとすぐに、

「うわ、ちょっとあちいな、これは」と言っつて、またエアコンの調整をして、元に戻したのか、温風は普通になりました。

これ、わたしの為にしてくれたんだと、気づいて、お礼を言おうとしたら、それを遮るように、

「なあ、家は、ここから近いのか？」

とケイゴさんから聞かれたので、

はい、ここから歩いて5分くらいです、と答えると、

「そうか」

と一言だけ返されました。

あれ、それだけ？

それしか、わたしに聞かないの？

見ず知らずの相手なんだから、

もっと色々、聞かれるかと思ったのに。

さっきも、自分のことを話そうとしたら、

止められたし、わたしに興味がないのかなあ。

それでもわたしは、

二度も助けてもらった、お礼がしたいから、

名前と連絡先を、教えてほしいと言ったんですが、

「ぜってえダメだ」

と言われて、どっちも教えてもらえませんでした。

だったら、わたしの携帯の番号を教えるから、

お返しとして、何かをわたしがするんで、

連絡して下さい、と言っても、

「ダメだ、足がつく」

と言って、これもダメでした。

どうしてもケイゴさんは、わたしとの接点を、

持ちたくないようです……

でもせめて、何かお礼がしたいと、  
わたしが食い下がったら、

「だったら、ここにある食いもん、

ちゃんと食ってから帰れ。

特に甘いもんな、俺甘いもん苦手なんだよ」

とのことで、わたしは晩ご飯の代わりに、  
買って来てもらった食べ物、  
がんばって食べてました。

わたしが食べている間に、

ケイゴさんは、とても気になる話をしてくれました。

それは、スカルヘッドに関する噂で、  
スカルヘッドは、暴力団の白永組に繋がっていると、  
スカルヘッドの頭は、ヤクザの子供で、  
サシで勝てる奴がないほどの、強さだとか、  
タイムン勝負した奴らは、半殺しにされて、  
腕か足の、1本は必ずもってかれてるとかでした。

その噂話を聞いていたら、

ちよつと前に、巴ちゃんから聞いた、  
忍さんの話を思い出しました。

ケイゴさんは、噂の数々を話した後、

「ここまででは、全部噂だから、

正直、うさんくせえデマだと思う。

俺がさつき、見たところでは、

あいつらはガタイはいいが、  
ケンカ慣れしてねえし、

命令されて、やらされてるだけだ。

あの中身は、普通の奴らなんだから、たぶん。

だから、俺が乱入したつて反撃してこねえ。

つてえか、反撃出来ねえんだ、

俺を、やってもいいのかが、

てめえらで、判んねえから。

多分あいつらは、『傭兵』だ。

仕切つてんのがどいつなのかは知らねえけど、

あいつらは、そう呼ばれてる。

ま、借り物の兵隊つて意味なんだろうな。

もつとつええのかと思つてたけど、

噂より、大したことねえな。

だけど、あの髑髏だけは別だ。

あれは、噂もまんざらじゃねえ。

原チャリ飛ばしても、ビビんねえで、

紙一重でかわす奴なんて、見たことねえ……」

と、話して、最後の方は独り言みたいに、  
呟いていました。

この後わたしは、もう一度会えたら聞きたかったこと、  
どうしてあの時、仲間を裏切つてまで、  
わたしたちを助けてくれたのかを、  
ケイゴさんに尋ねました。



「そりゃあ、たまたまだ。  
あいつらのところにいても、面白くねえから、  
ずっと、抜けようと思ってたんだ。  
ただ抜けるんじゃない、気に入くわねえから、  
反抗してやるうと思った、それだけだ」

ケイゴさんは、こっちを見てもくれないで、  
そっけなくそう答えてから、  
もうこれ以上は、何も答える気がない意思表示なのか、  
から揚げを、口いっぱいにはおぼってました。

わたしは、最後にもう一つだけ、  
確認しておきたかったこと、  
もし、またわたしが誰かに襲われたら、  
助けてくれますかって、尋ねました。

ケイゴさんは、口をもごもごさせながら、  
口では、答えてくれなかったけど、  
頷いてくれました。

それを見たら、なんだかとても心強く感じて、  
嬉しかったです。

そしたら、無意識に笑っていたみたいで、  
「……さっきまで、ヤラれそうだったのに、  
よく、笑えるよなあ」

と、ケイゴさんに突っ込まれて、自覚しました。  
わたしは話をしながら、がんばって食べたけど、  
やっぱり、全部は食べきれず、

結局かなり、残ってしまいました。

するとケイゴさんは、残ったお菓子とかを、コンビニの袋へと放り込んで、

「もうそろそろ、家に帰っても大丈夫だろう、

ここにあつても食わねえから、これ持ってけ」と言つて、わたしへと投げ渡しました。

わたしは、最後にもう一度、

助けてもらったお礼を伝えてから、

車を降りました。

わたしが車を見送ろうとして、ちょっと待っていたら、

ケイゴさんから手で、行けて合図をされたから、

もう一度頭を下げてから、家に向かいました。

今日は、大変な目にあつたけど、

その代わりに、命の恩人にまた会えて、

少なくとも、お礼の言葉は伝えられました。

それと、名前だけだけど、ちゃんと本人に、名前の確認も出来ました。

苗字すら、教えてくれないんだから、

そんなの、聞くだけ無駄だなんて思つて、

あえて聞かなかつただけど、

あの人、一体何者なんだろう。

出来れば、ちゃんとお礼がしたいけど、

連絡先すら、教えてもらえなかつたから、

どうしようもありません。

スカルヘッドのことについては、  
噂も教えてもらったし、実際に目の前で見て、  
証拠になるかも知れない情報も、  
知ることが出来ました。

もう少し情報を集めて、スカルヘッドの正体について、  
確認しておきたい。

その為には、かなに頼るしかないかなあ、  
忙しそうだから申し訳ないけど、一度聞いてみよう。

今回は運良く、ケイゴさんに助けてもらえたけど、  
また、襲われるかも知れない。

でも、スカルヘッドの人たちなら、  
強いかも知れないけど、ケンカ慣れしてないなら、  
防犯グッズで、対応出来るかも知れない。

前になかからもらった防犯グッズ、  
また、携帯するようにしよう。

今回の襲撃で、今までの色んな出来事と、  
それらに対する想像が、繋がるような気がして、  
整理してみました。

髑髏の人は、きっとターゲットがわたしだって、  
知らされないで、あの場所に来ていて、  
それがわたしだと判って、戸惑っていたんじゃないか。

だからいつもなら、困った後に髑髏の人が、  
攻撃に入るはずだったのに、  
そうしなかったから、あの人たちの足並みが崩れた。

その時に、ケイゴさんが助けに来たんだ。

だから、あの髑髏の人は、わたしを知っている人で、  
あの靴のサイズからして、女の人で、  
さらに、飛んでくるバイクを、  
あっさりとかわせるだけの、強い人。

そんなの、間宮さんしか、思いつかない。

やっぱり間宮さんは、無理やり門塾さんたちに、  
スカルヘッドとして、行動するように命令されていて、  
それで、部活も出られなくなってしまった。

もしかすると、前にわたしと葵ちゃんが襲われたのは、  
間接的に間宮さんを、脅迫する為だったのかも。

どんなに間宮さんが強くても、葵ちゃんとか、  
身近な周りの親しい人を、人質にされてしまったら、  
言うことを聞くしかないから。

それで、出来るだけ自分に関わらせないように、  
わざと突き放すようなことを、  
葵ちゃんに言ったのかも知れない。

こう考えると、全部が繋がる気がします。

でも、もしこう間宮さんが考えて、  
自分が言いなりになれば、収められると思ったのなら、  
それは、全然間違っていると思います。

こんなんじゃない、みんな不幸になってしまっただけです。

わたしは、決めました。

どういう方法でかは、これから考えるけど、  
どうにかして、間宮さんを、  
今の状況から救い出します！

でもその為には、何でもいいから間宮さんが、  
わたしの言うことを、聞く状況を作らないと、  
話になりません。

まずは、そこから考えないとダメっぽくて、  
それはすごく、前途多難な気もしますが、  
でも、絶対に諦めません！

2010年 11月 その3(前書き)

変更履歴

- 2011/03/22 記述統一 一所懸命 一生懸命
- 2011/03/23 誤記修正 ここで、門塾さんたを見ると、  
ここで、門塾さんたを見ると、
- 2011/06/30 記述統一 一つ、二つ、三つ 一つ、  
二つ、三つ

2010年 11月 その3

11月17日 文化祭準備

今週の頭に、門塾さんたちからまたしても、わたしたち出場メンバーを、追い詰める指示が出たんです。

それは、いつものように間宮さん経由で、

「舞台もちゃんと作れ」

って言う指示で、この一言でわたしの今週の予定は、全部変ってしまいました。

今週から文化祭の前日まで、舞台の準備とか、教室の飾りつけとかで、休み時間や放課後は、全部作業になってしまったんです。

だから、バイトもお休みです。

みんな、自分が何を舞台でやれば助かるかを、考えるのに必死で、舞台なんて考えもしていなくて、メンバーは昼休みに集まって、とにかく、それっぽく見えるようにする方法を、話し合いました。

その結果、教室の前半分のうち、手前を舞台にして、暗幕で仕切った奥を、控えの部屋にすることに決まり、舞台からの登場と退場は、窓際の脇から出入りして、入れ替わることで、決定しました。

後は、教室内の飾りつけと、必要な道具とか備品を借りたり、作ったりする作業です。

大きな道具とかは、男子が担当して、女子は、備品を借りてくるのとか、飾りつけとかをやるように、分担して、とにかく、教室がそれっぽく見えるように、準備に入りました。

月曜日から、毎日先生に帰れって言われるまで、ぎりぎりまで残って、必死で準備作業をして、それが今日で3日目です。

もう、色々辛いけど、一緒に作業しているのは、みんな同じ境遇なので、誰も文句も言わずに、ひたすら準備作業を終わらせようと、必死です

このごろは、前にターゲットにされていた、女子は2人とも、不登校になっているし、委員長も、何かされるとすぐに早退とかしてしまって、逃げるようになってきているから、門塾さんたちは、今標的にする相手が、わたしたちしかいなくて、余計に色々言っつきそうで、怖いです。

だから、自分たちの出し物も準備しないといけないけど、舞台も文句が出ないように、作らなくちゃいけない。

みんな、そういう風に追い込まれていました。



わたしは不意に、1年前の文化祭の時間を思い出していました。

あの時は、すごく楽しかったのになあ。

今年のみんなでやっている作業は、去年と同じように、協力してやっているけど、その目的とか、意味が全然違う……

みんな、こんなの嫌で嫌で仕方がないけど、ターゲットにされたくないから、やらない訳にもいかない。

ただ、それだけ。

1秒でも早く、こんな文化祭は、終わってほしい……

11月19日 命懸けの文化祭 1日目

とうとう、この日が来てしまいました。

わたしのこの先の、学校生活を決定する文化祭です。

昨日の夜まで、ずっと何をすれば良いのかを、連日学校に遅くまで残って、準備して帰ってきた後、遅くまで悩んでいて、夜はほとんど眠れませんでした。

だけど、何かをしなくちゃいけないから、  
当日の朝に覚悟を決めて、学校へと向かいました。

教室へと行く前に、出し物の道具を借りに、  
保健室へと寄って来ました。

必要な道具を保健室の先生に頼んで、貸してもらって、  
教室へと向かうと、わたし以外の出場する人たちは、  
もうみんな、クラスに来ていました。

そこにはなぜか、間宮さんの姿もあり、  
そのせいもあって、みんな緊張しているのが判りました。

どうやら間宮さんは、この出場者たちが、  
ちゃんとやっているかを見張る為に、  
派遣されているらしく、

間宮さんは、わたしたちの準備しているのを、  
黙って見つめていました。

出演者の出る順番については、前に間宮さんが、  
黒板に書いた順番に決まっていたので、  
わたしの出るのは、一番最後になっていました。

こうして遂に文化祭と言う、わたしにとって、  
地獄の2日間が始まりました。

コンビもピンの人も各4組の、合計8組で、  
ひと組の持ち時間は15分だから、  
2時間で、全部の組まで回ります。

これを、文化祭の開催時間の、朝の10時から、夕方の4時まで、合計3回やることになりました。

門塾さんたちは、いつ見に来るのが判らないから、みんな必死で、漫才みたいなのとか、体を張った芸みたいなのとか、色んな出し物をやっていました。

そのあまりに必死な感じが、受けているのもあったり、逆に引かれていたりして、なかなか難しいのが、見ていて判りました。

自分以外が舞台に出ている時でも、みんな他の人が、どのくらい受けているかが気になって、舞台の裏に、控えていながらも、ずっと聞き耳を立てている感じで、出番じゃなくても、心が休まる時はありません。

そして、1回目のわたしの出番がやって来ました。

わたしは、舞台の上に2つの机と椅子を運んで、机の上に保健室から借りてきた、洗面器を置くと、家から持ってきた、ペットボトルの空き容器に、出番を待っている間に入れておいた水を、洗面器の中へと注ぎました。

そして、即席で作った紙のプレートを出してから、『わたしより長く息を止めていられたら、

『屋台の食べ物1日食べ放題券、差し上げます！』  
って、大きな声で読み上げました。

わたしの特技って言ったなら、潜水くらいしかないから、これを生かして、何かするしかないって思って、考えて見た結果、これしか思いつきませんでした。

景品にしている、こんなタダ券はないので、わたしが負けた時は、勝った人の代金を、全部肩代わりするしかありません。

もちろん、そんなお金に余裕もないから、なんとしても、わたしは勝たないといけない。

これを聞いて、観客の男子生徒たちが何人が、挑戦してきました。

この時にわたしは、判定をしてくれる人のことを、考えていなかったのに気づいて、さらに細かい手順とかも、全然考えてなくて、どうしようかと思った時、客席の隅から、予期せぬ声が聞こえてきました。

「私からルールの詳細について説明する。

挑戦者は、1ステージにつき3人までだ。

それ以上の挑戦者がいる場合、

ジャンケンで先に勝った3人とする。

私が開始の合図と判定を行う。

私が合図したら、同時に両者は水面に顔をつける。

先に水面から顔を上げたら、そちらの負けだ。

ではまず、挑戦権をかけて、  
勝ち抜きのジャンケンだ」

と、間宮さんが舞台上上がりながら、  
よく通る声で言いました。

助け舟を出してくれたのかな、

あ、ありがとう、間宮さん。

舞台上だったから、声に出しては言えなかったけど、

その気持ちを込めて、わたしは間宮さんを見ると、

間宮さんは、わたしと一瞬目を合わせた後は、

すぐに視線を外して、観客側を向いて、

挑戦者を決めるジャンケンをしていました。

そして、挑戦者の3人が決まって、

その人たちは順番に、わたしと息止め対決をしました。

判定の為なのか、間宮さんは対決が始まったらすぐに、

わたしのうなじに手を置いていて、

相手が負けると、すぐに合図してくれているのが、

判りました。

この最初のステージでの結果は、

わたし的には、余裕勝ちでしたが、

間宮さんが、相手が顔を上げるたびに、

その直後に知らせてくれていたので、

僅差のような演出が来て、

けっこう盛り上がっていました。

この後の、2回目と3回目の時にも、

間宮さんは司会と審判をしてくれて、  
回数を重ねるごとに、景品目当ての人たちが増えて来て、  
3回目になると、20人近く挑戦者として、  
手が上がっていました。

その結果、それなりに盛り上がりつつ、  
でもわたしは負けずに、1日目は無事に終わりました。

この日は結局、門塾さんたちは現れなくて、  
出場していた人たちの中には、  
もうすでに飽きていて、来ないんじゃないか、  
なんて言っている人もいたけど、わたしの予想では、  
こっちの緊張を、ぎりぎりまで引っ張る為に。

明日の最終の時に、来るんじゃないかと思っています。

それも気になるけど、もっと問題なのが、  
わたしがずっと、勝ち続けているのも、  
どうなんだろう、って気もしています。

明日も、今日とおんなじ感じで、  
最後まで、わたしが勝っちゃったら、  
それはそれで、しらけるんじゃないかな、と。

でも、負けたら勝った人へ、  
好きなだけ、おごらなきゃいけないし、  
そんな余裕はないし……

どうしたらいいんだろう……

11月20日 命懸けの文化祭 2日目

昨日と同じようにやって来た、間宮さんから、今日は昨日と出場順を、逆にすると知らされて、わたしは最初になりました。

多分、わたしの景品のことを聞いて、3回目の時に、終わり間際で勝っても使えないから、出場の順番を、入れ替えさせてきたんじゃないかと、思いました。

今日は昨日とは違って、凧高の生徒だけじゃなくて、一般のお客さんも入っていて、景品の話が広まっているのか、わたしの出番の時は、昨日よりも大勢集まっていました。

中には、昨日のリベンジなのか、昨日ジャンケンで負けた人や、わたしとの勝負で負けた人の姿もありました。

でもとりあえず、今日の1回目はわたしが全部勝って、無事に終わりました。

正直、今のところ負ける気はしないんですが、このまま進んで大丈夫かなあ、と、不安になりながら、舞台裏の控え室で待っていたら、いつの間にか12時になって、2回目の出番になりました。

2回目は、ちょうどお昼時と言うのもあって、

1回目よりも、お客さんも増えていました。

ここでもまだ、門塾さんたちは来ていません。

今までにはいなかった、体の大きな男の人が、  
増えているように見えて、

これは、そろそろ危なくなってきたかも、  
とか思いつつ、ジャンケンの勝ち抜きの人に、  
そう言う人が、残りませんようにと、  
必死に祈っていました。

このジャンケンで、大きい人たちはみんな負けたから、  
無事に勝てましたが、この次はどうなるか、  
ちよつと怪しくなってきました。

門塾さんたちも来るだろうし、

もしかして、さっきの大きい人たちは、

門塾さんが差し向けてきた、言わば刺客で、

わたしに勝って、その景品で、

全部の屋台ごと買い占めるとか、する気なのかも……

もしそんなことされたら、わたしはもうお終いです。

わたしは、お昼も食べる気がしなくなって、

出番が来るまで、屋上に行って、

1人で空を見ていました。

この日は澄んだ青空で、地面近くの水色から、  
空へと上がるにつれて、青い色が深まっていくような、  
綺麗なグラデーションだったけど、そんな空を見ていても、



わたしの気持ちは、暗く沈んでいくばかりです。

負けた時のことを考えると、すぐにでも逃げ出したい。

でも、逃げ出してしまったら、

あの人たちがその後、どれだけひどいことをしてくるのか、それはもう、何人も実際に見てきたから、

来週から、学校に来る勇気なんてありません。

この時にちょっとだけ、別にそんなに無理してまで、

学校へ来なくなつて、いいんじゃないのかな、  
事情を話せば、お母さんだって、

判ってくれるんじゃないか、とか、

一瞬考えてしまいました。そんな風に逃げたことなんて、  
逆境に立ち向かっている、かなやなつめには、

恥ずかしくて言えないし、

忍さんにも、合わせる顔がありません。

わたしは弱気な考えを捨てて、

誰が相手でも、死ぬ気でがんばって、

自分で自分を守らなくちゃ、と思い直して、  
教室へと戻りました。

教室へと戻ると、ちょうどわたしの、

ひとつ前の順番の人たちが始まるところで、  
その人たちが舞台に出ている間に、

最後の舞台の準備をしていました。

そして、わたしの最後の出番になった時、

あの人たちは現れました。

門塾さんたちは、クラスにいるいつもの人たち以外に、別のクラスの、門塾さんのグループの人たちも、一緒になって来ていました。

さらに、2回目にジャンケンで負けていた、大きな男の人たちも、前より増えているような気がして、門塾さんたちのグループと合わせたら、40人近い観客の、半分くらいいました。

こんなにいたら、避けられなさそうだ……

参加者として手を上げたのは、その門塾さんのグループは、門塾さん以外ほぼ全員で、体の大きい人たちは全員でした。

わたしは、勝ち抜きジャンケンの結果を見守りました。

何回かの、間宮さんとのジャンケンで勝ち抜いたのは、門塾さんの取り巻きの人が2人と、大きい人が1人でした。

状況はかなり悪かったけど、大きい人は、1人しかいなかったから、まだマシだったかも知れない。

でも取り巻きの人は、何をしてくるか判らないから、それはとても不安でしたが、すぐに最初に勝ち抜いた、1人目の取り巻きの人との、勝負が始まりました。

1人目の人は、別のクラスの人で、ある程度、わたしに勝てる自信があったのか、

特に、何も仕掛けてくることもなく、普通に勝負をしてきて、わたしに負けていました。

2人目の人は、同じクラスの取り巻きの人で、何かを企んでいるのが、みえみえな態度でした。

その人は、どうやらスタートの時に、水面にあんまり顔をつけないようにして、ズルをしようとしていたみたいだったけど、間宮さんが、力づくでその人の頭を沈めて、結局失敗してしまい、前の人の半分くらいの時間で、頭を上げてしまいました。

その直後、この人は間宮さんの方を睨んでいましたが、間宮さんは平然と睨み返していて、間宮さんの威圧に負けて、その人は戻っていきました。

ここで、門塾さんたちを見ると、かなり不満げな表情をしているのが見えました。

やっぱり、このままじゃまずいかも、でも……

迷っているうちに、最後の勝負の3人目、一番の強敵っばい、大きな人の番が来ました。

舞台にあがってきたその人は、背は2m近くありそうで、わたしとは頭1つ違います。

それと、体つきがすごい逆三角形をしていて、

これは水泳やっている人なんじゃないかって、心配は増してきました。

門塾さんたちは、自分たちが負けたけど、この勝負で、わたしが負けるのを期待しているように、挑戦者の応援をしていました。

大きな男の人は、余裕そうに仲間の人へと、ガッツポーズとかしてました。

勝っちゃっても大丈夫かな、それとも、負けた方がいいのかな、でも、どうしよう…

わたしが、悩んでいる途中で、最終戦は始まってしまいました。

最初に顔を水につけてすぐに、間宮さんがいつも通り、うなじの所へ手を置いたのですが、今回は、その手の先が首の横にずれているのが、ちよっと気になったけど、確認しようがないので、そのまま息を止めていました。

今までなら、もうそろそろ間宮さんからの、合図が来るところでは、合図はまだきません。

やっぱり、ただの大きな人じゃなかったんだと、思いながらも、でも死んでも負けられない！と、気合を入れて息を止めていました。

顔を水につけているだけから、  
周りの声は、わたしにも聞こえていて、  
とても盛り上がっているのが、聞こえていました。

やがて、前に潜水で潜っていられる、  
限界の時間が近づいてきて、  
耳から聞こえる歓声も、遠のき始めていました。

その時、間宮さんからの合図が来て、  
もう苦しかったのもあって、何も考えないで、  
勢いよく頭を上げたら、わたしは負けていたんです。

え、どうして？

間宮さんからの合図、あつたのに……

間宮さんの顔を見ても、間宮さんはいつもの無表情で、  
わたしの顔を見ていたけど、  
視線は微妙にずれていました。

その後わたしは、最後に出た勝者への歓声と共に、  
余裕で顔を上げる、大きな対戦者の人を見ながら、  
呆然としていました。

負けちゃった、これでもう、終わりだ……

この後は、間宮さんが勝者の宣言をしてから、  
景品の授与として、わたしが持ってきていた、  
紙のプレートを渡して、大きな人たちの集団は、  
勢いよく教室を出て行きました。

門塾さんたちは、あのタダ券が、

わたしが勝手に作ったものだって、判っていて、わたしがすぐに、後を追いかけてようとしたら、

取り巻きの人たちに邪魔されてしまい、わざとらしく、

「三崎、お前のは面白かったぞ」

「お前は合格だ、よかったなあ？」

とか言つて、労う振りして肩を叩かれたりして、後を追わせないように、阻止していました。

どうしよう、すぐに追いかけて行って、

なんとかしないと、大変なことになっちゃう。

どうしよう、どうしよう……

ここでも、この後に起こることが怖くて、

泣きそうになってしまい、トイレに行きたいと言って、何とかトイレまでは、行くことができました。

でも、出入り口を見張られて、

わたしが、勝った人たちのところへと行って、

取り繕うことが出来ないように、されていました。

どうしよう、どうしたらいいの……

トイレの個室に入ったら、もう怖くなってしまい、

涙も堪えきれなくなって、泣いてしまいました。

でも、外で見張っている人には、

絶対泣き声とかを聞かれたくなくって、

一生懸命、声を出さないようにして、

泣いていました。

そんな時、携帯にメールが来て、  
見てみると、それはかなからでした。

件名がないそのメールを見てみると、

「知らせるのが遅れてゴメン。」

さつき勝ったのはうちの人間だから、  
心配しないで大丈夫だよ。

後はこっちで処理しとくから、

何もしなくて平気だから安心して。

また後で連絡するね」

さつき勝ったのは、うちの人間？

この意味は、よく判らないけど、

かなのグループの人って言う意味、かな。

かなが、何か手を回して、

あの人たちを送り込んでいたの？

昨日はあの人たちは、いなかったから、

昨日のうちに、わたしがこれをやっているのを知って、  
手を打ってくれていたのかなあ。

詳しいことは分からないけど、

とにかく、かなが何とかしてくれたんだ！

わたしはやっと、救われたのが実感として感じられてきて、  
かなへとお礼のメールを返す時には、

今度は、嬉しくて涙が止まりませんでした。

かな、ほんとに、ほんとに、ありがとう、  
いつも、助けてもらってばかりな気がする……

わたしは、全然お返し出来なくって、ごめんなさい。

いつか必ず、きっと返すからね……

わたしは気持ちが悪く落ち着くまで、  
トイレで休んでから、外へと出ました。

そしたら、出入り口で見張っていたはずの人は、  
いなくなっていたので、教室へ戻るのも嫌だったから、  
また屋上へと行って、時間を潰していました。

屋上から、屋外の出店の方を見ると、  
さっきのわたしに勝った、大きな人たちの集団が、  
次々と、出店に入って行って、  
食べ物を買いきまっているのが見えました。

かなのメールでは、大丈夫って書いてあったけど、  
ちょっと不安になりましたが、  
かなの言葉に嘘はないはずだと、思い直して、  
地面に座って、終わりの時間が来るまで、  
また、空を眺めていました。

4時になって、文化祭の終了時間になったので、  
教室へと戻ると門塾さんたちや、  
間宮さんも、もういなくなっていて、



残っていたのは、出場した人たちだけでした。

帰ってきたわたしに、出場していた人の1人が、片づけを手伝うようにと、言ってきたので、わたしも、後片づけに加わりました。

門塾さんたちが、一番つまらないと言ったのは、漫才をやった、男子2人のコンビだったみたいで、その2人の名前が、黒板に大きく書かれていました。

その当人たちは、後片づけに残ってはいなくて、選ばれなかった人たちだけで、片づけしていました。

自分たちが選ばれずに澄んだことで、緊張の糸が切れたらしくて、誰も口にはしていなかったけど、さっきまでとは違って、みんな、気が緩んでいるように見えました。

明日からの3連休には、誰も出てくる気はなかったから、けっこう時間が遅くなってしまったけど、何とか片づけを終えて、解散しました。

みんな、ほとんど話さなかったのは、自分がターゲットにならずに済んで、助かったって言う気持ちと、自分以外の人がターゲットになったのを、目の前で見ているながら、見て見ぬ振りしていた、罪悪感からなんだろうなって、思いました。

だから、ターゲットにされた2人が、

後片づけにいなかったのに、  
誰も何も言わなかったんだと、思います。

でもそれは、わたしも同じだから、  
他の人たちのことを、攻めたりなんて出来ません。

あの2人には悪いけど、これでやっと、  
久しぶりに悩まずに休めます。

それにしても、間宮さんは、  
どうしてわたしが負けるタイミングで、  
合図してきたんだろう。

手伝ってくれたりしたのに、なんで……

もしかして、わたしが負けるように、  
だます為の、仕込みだったんじゃないかも、  
ちょっと疑ったけど、いくら門塾さんたちに、  
従っているとはいえ、間宮さんはそんなことしない、  
と思いたいです。

でも、そうじゃないとすると、  
何でだろう、判らない……

間宮さんのことは、色々考えないといけないけど、  
文化祭が何とか無事に終わって、今日までの疲れが、  
一気に出てきてしまったようで、  
家についたら夕食も食べずに、お風呂だけ入って、  
すぐに眠ってしまいました。

今日は、かなからの連絡はなかったから、  
この連休中に、かなに連絡しようと思います。

それと、間宮さんのことも考えます……

2010年 11月 その4 (前書き)

変更履歴

2011/01/12	11月23日の小題変更	
2011/03/26	記述修正	ダーククイーン
イーン		
2011/04/26	記述統一	一歩、二歩、三歩
2歩、3歩		1歩、
2011/09/12	誤植修正	確立
		確率

2010年 11月 その4

11月21日 かなからの情報

今日は朝起きたつもりが、もう昼になっていました。

まずはご飯を食べてから、携帯をチェックしてみたら、深夜に、かなからのメールが来ていたので、内容を見てみると、そのメールには、前の質問の回答も入っている、とても長いものでした。

「みなも、まず最初に文化祭の方の説明するね。

みなもに勝った人は、うちで用意したサクラで、19日に、みなもが景品出して、勝負してるって言う情報が入ったから、どう言うことかと思って、調べたんだ。そしたら、門塾がらみだって判ったから、手を打ったんだ。

あの人たちは、大学生で水泳部の人たちだから、みなもが負けても、当然の相手だったんだよ。

で、あの人たちには、派手にタダ券を使ってもらった。でも使うお店には、事前にうちのメンバーから、話を通してあったから、あの女たちからは、普通にタダ券使ってたようにしか、見えないはず。お金の方は、うちの方で払っておいたから、気にしないでいいよ。

だから、みなもは門塾たちに何か聞かれても、

当たり前前の顔して、タダ券の仕込みもしてあったって、  
言えばいいからね。

あたしが作った、新しい組織の『ギルド』は、  
こういう事態に対応する為の組織なんだ。

このギルドに関しては、また別の時に説明するよ。

本当は、昨日のうちに知らせておこうかとも、  
思ったんだけど、みなもってウソつくの下手じゃん？  
だから、もし事前に知っていたら、  
門塾たちに、見破られちゃうかもって思って、  
わざと言わなかったんだ、ゴメンね。

この作戦で、ひとつ心配だったのは、  
みなもがサクラの人に勝とうとして、  
すごく無理しなかった、ことだったんだけど、  
それは、大丈夫だったみたいでよかったよ。

ここまでが、昨日の件。

次に、前に問い合わせのあった、  
スカルヘッドの件だけど、

出来ればみなもには、関わってほしくない。  
でも、こんなのをあたしに聞いてくるってことは、  
もうすでに、何か関わっているんだらうから、  
うちで把握している情報を伝えるよ。

あのグループは、今年の夏ごろから現れ出した集団で、  
メンバーの人数は、大体20人くらい。  
カラーギャングみたいに、メンバーは全員、

統一された全身黒い服装をしていて、夏でも、黒いニットマスクで顔を隠しているのが、最大の特徴だね。

それと、ほとんど話をしないで行動しているってのもある。顔を隠していることからすると、正体を隠す為に、声も出来るだけ、出さないようにしているってのが、一番信憑性が高いね。

スカルヘッドは、いつもターゲットを決めてあって、その相手以外には、ほとんど手を出さない。メンバーの大半は、ケンカは強いらしいけど、あまり相手を、いたぶるようなことはしないで、目的の相手を倒すのを、最優先にして、それ以外のことは、したがないみたい。

でもケンカの仕方が、あまりにも格闘技っぽいから、ただの強い不良とかじゃなくて、格闘技をやっている、普通の人間が脅迫されて、仕方なくやらされているのが、実際のところだと思う。一度でも、あれに参加させられると、

その証拠映像を撮られて、それをネタにして、口封じをしてくるらしくって、なかなか、被害者が告白してくれないんだよね。

このスカルヘッドの、バックにいるのは、暴力団だとか言われているけど、

うちの調べたところでは、実際は、『ダークライン暗黒女王』って言う、

グループの傘下において、それは暴力団と同じ、階層化した組織になっているみたい。

暗黒女王のメンバーは、別のグループのリーダーで、色んなグループの、リーダーが集まっているのか、

暗黒女王なんだ。

この暗黒女王の裏にいるのが、門塾なの。あの女は、暗黒女王のスポンサーの1人だから、大抵の子は門塾に逆らえない。門塾はその権力を使って、色んなことを仕掛けているんだけど、でも、なかなか尻尾を出さなくて、まだ、証拠を押さえられずにいるんだ。

暗黒女王傘下のグループは、誰でもかまわず襲うし、ドラッグもやるし、報酬を払えば、犯罪の依頼も請け負うって言う、何でもありの集団で、スカルヘッドとは、性格は全然違うんだ。

暗黒女王に所属する、1グループとして、スカルヘッドがあるんだけど、他のグループと繋がりが違っているのが、暗黒女王に所属しているのは、リーダーじゃなくって、『マネージャー』って呼ばれる人間なんだ。この、マネージャーが、スカルヘッドの管理をしていて、メンバーを徴集して、その日の指令を与えて、行動させているらしい。メンバーをいつも徴集してくるから、スカルヘッドのメンバーは、周りからは、傭兵って呼ばれているらしいよ。

他に判っているのは、スカルヘッドのメンバーって、足がつかないように、毎回別の人間に、



入れ替わっているんだけど、  
グループの名前にもなっている、  
1人だけ髑髏の柄のニットマスクした、  
リーダーだけは、最初から変わっていないくて、  
どうもこのリーダーは、桁外れに強いらしい。  
リーダーについては、噂しかないんだけど、  
暴力団の、白永組と関係する人間らしい、  
と言うのは、かなり広まっている話。

それ以外で、うちの組織の独自の情報だと、  
リーダーは、女じゃないかって言う情報がある。  
それと、もう一つとおきの情報は、

このリーダーの使う、格闘のスタイルが、

『がりようかい臥龍会』って言う、

暴力団の組員が使う、護身術に似てるって言う話ある。  
この情報、なんでヤクザが格闘技なのかってのが、  
まだいまいち判ってない、未確認情報なんだけどね。

出来ればみなもには、こういうのには、  
関わらないでいてほしかったんだけどな。  
あたしとしては、ちょっと残念だよ。

みなも、お願いだから、危ないことはしないでね。  
何か、そういうのがあるんだったら、  
あたしに相談してくれれば、  
何とかできるかも知れないから、  
絶対に、ひとりで無茶しちゃダメだよ？

もうちょっと待っててもらえれば、  
あたしの作った、ギルドが使えるようになるから、

何かするのは、出来ることならその時まで、  
お願いだから待っていてほしい。

また何か判つたらメールするよ。  
それじゃね！」

わたしはひとまず、メールのお礼の返信を、  
かなへと返してから、教えてもらった内容について、  
考えていました。

かな、忙しいところ、色々教えてくれてありがとね。

それから、お世話になるだけじゃなくて、  
すごく心配もかけちゃって、ごめん。

門塾さんが、不良をまとめているグループの、  
ボスみたいな人だったのは、ちょっとびっくりしたけど、  
それは、そんなに悪い人だったのかって言う驚きではなくて、  
そこまで落ちている人なんだ、って言う、  
呆れ果てたって言う感じです。

そうか、だからかなは、あんなに嫌っていたんだ。

それから、ギルドって言う、  
かなの作っている、新しいグループって、  
なんだか秘密組織みたいだなあ。

まあ、その詳細はその時が来たら、  
教えてもらえるんだろうけど、  
間宮さんのことは、それを待ってはられない、

そう言う予感がするんです、単なる感ですけど。

前に聞いたケイゴさんの話と、かなのメールの話で、共通しているところは、多分事実だと思ってもいいはず。

それから、わたしが直接見て感じたことも、合わせてみると、スカルヘッドのリーダーは、かなり強くて、女で、不良ではなく、何か格闘技をやっている、暴力団に関係していて、夏ごろから活動し始めた。

これを、間宮さんに照らし合わせてみると、まず、とても強いってのは、身をもって判ったし、格闘技をやっていたのも、間違いないと思う。

それから、夏休みの合宿辺りから、それまでは、ずっと毎日行っていた陸上部から、離れ始めていた時とも合ってる。

暴力団って言うのは、2人の情報でもあったけど、これはよく判らない。

白永組と、臥龍会。

まさか、間宮さん自身が組員ってことはない、と思うんだけどなあ……

でもこれだけ判れば、十分だ。

スカルヘッドのリーダーの、

髑髏の人は、間宮さんに間違いないと思う。

でもこれを全部、間宮さんへ言ったところで、もう次は、手加減してくれないだろうから、前よりもひどく、やられるだけだと思う。

でも、わたしの聞きたいことを確認して、さらにわたしの言うことも、聞いてもらわないことには、解決は出来ない気がする。

一体どうしたらいいのか、それを実現する手段が、ちっとも浮かびません……

11月23日 宣戦布告！

今日、わたしは間宮さんを待ち構えていました。

その場所は、いつもの御家河の土手ではなく、間宮さんの住むアパートの前です。

昨日学校へ行って、陸上部の練習に出ていた、葵ちゃんから、間宮さんの住所を聞き出したんです。

葵ちゃんは最初、とても渋っていたけど、間宮さんの為だからと言って、頼み込んで、やっと、教えてもらいました。

そして今日は、教えてもらった家の場所に、

朝から向かったんです。

その場所は、河原や前にヒヨウちゃんが入院していた、動物病院からも、とても近いところにありました。

だか間宮さん、場所を知ってたのかな。

間宮さんの住む家は、うちよりも古くて小さいアパートで、どうやら間宮さんは、このアパートの1階の部屋で、1人暮らしをしているようでしたが、家には誰もいませんでした。

こんな朝から、門埜さんたちが、何かさせているとは思えなかったから、どこかへ出かけているみたいです。

わたしは、間宮さんが帰ってくるまで、アパートの前で、ずっと待っていました。

今日は北風の強い、とても寒い日で、空もどんよりした灰色です。

外で待っているのは、ちょっときついけど、でも、間宮さんの家で待ち構えた方が、効果的だと思って、ひたすらここで待っていました。

お昼過ぎくらいになった時、

どうやら買い物に行っていたらしい、

ビニール袋を前カゴに入れた、

ムートンのこげ茶のレザージャケットに、

細いジーンズとスニーカー姿の間宮さんが、  
自転車に乗って、帰ってきました。

間宮さんって、普段着はああいう感じなんだ、  
ちよっと大人っぽく見えるなあ。

あんなジャケット、わたしには似合わないだろうな。

間宮さんは、

自分の部屋の前に立っていたわたしを見つけると、  
すぐに、険しい顔になるのが判りました。

さあ、これからが最初の難関です。

おとといの夜から、ずっとどうすればいいかを考えて、  
気がついたら、外が明るくなってきた頃、  
もうこれしかないって、決心しました。

見た目には、抑えてはいるけど、  
内心、驚いているはずの間宮さんへと、  
わたしは精一杯がんばって、いつもとは違って、  
余裕がある素振りを装って、声をかけました。

「何で、お前、ここにいるんだ」

間宮さんは、やっぱり動揺しているっぽくて、  
いつもだったら、もう一言くらい、  
文句を言いそうなところを、

一言で言葉は切れて、こっちを睨んできました。

間宮さん、最初の頃はもつと純粹に怖いって言う、  
感覚しかなかったけど、今はむしろ間宮さんの方が、  
おびえてるって言うか、何かを恐れている感じがする。

だからなのか、前のグラウンドの時よりも、  
今の間宮さんなら、あの時に比べれば、  
まだ耐えられる気がします。

わたしは間宮さんに1歩近づいて、目の前に立ってから、  
なんでここが判ったか判るかを、  
余裕のあるところを見せようと、  
出来るだけ笑顔で尋ねました。

そしたら、間宮さんは黙ったままで、  
なんと答えていいかを、迷っているみたいでした。

多分、葵ちゃんから聞きだしているとは、  
思っていないんだろうな。

普通に考えれば、それしかないはずなのに、  
間宮さんがそう考えないのは、  
他にもつと気になる真相がある証拠だ。

ごめん、かな、勝手に使わせてもらっね。

わたしは間宮さんへと、  
ヒントをあげると言ってから、一言だけ、  
ギルド、と言いました。

途端に間宮さんは、思わず何かを言いかけるように、

口を開きかけたんです。

だから、今のリアクションを見て、わたしは確信が持てました。

間宮さんは、自分で思っているよりも、本人は、絶対に認めないだろうけど、けっこう感情を表に出しているって思う。

多分、間宮さんの本当の性格は、考えよりも、気持ちで行動するタイプだと思います。

なのに、普段は感情を殺して、無関心で、無表情を装っているから、こういう風に、とっさの時には、ボロが出ちゃうんだ。

でも、そんな性格だったからこそ、葵ちゃんも慕っているんだし、わたしだって、こんなことまでして、何とかしようって、思ったんだって思います。

だから今は、この間宮さんの窮地を、わたしが何とかしないと、いけないんです！

この後わたしは、自分は実はギルドのメンバーで、ずっと間宮さんのことを調べていたんだと、話しました。

わたしが話し終わっても、黙ったままでいる、間宮さんの様子を、しばらく見ていたら、



こちらの出方を、うかがい始めたのが判りました。

やっぱり、スカルヘッドでも、ギルドの名前は出ているんだ。

そして、間宮さんの情報を調べていたのも、ある程度は、判っていたのかも知れない。

一か八かの賭けには、勝ったみたいだ。

そこで、わたしはさらに、間宮さんの正体についても、こっちは把握しているし、過去についても調べてみると、伝えました。

この言葉を、裏付けさせるための一言、これをどっちにするかで、かなり悩みました。

確率の高い方が、それとも未確認情報が……

この選択で、間宮さんを騙しきれるかが決まってしまう。

わたしは、心を決めて、間宮さんへと話しました。

実は間宮さんは、臥龍会の

「もういいー！」

わたしが言いかけたところで、

間宮さんは、自転車が倒れるのも気に留めずに、わたしの肩に、つかみかかって来ました。

でもそれは、いつもの凄みもなく、  
全然余裕もなく、見たことがなくらい、  
動揺しているように、わたしには感じられました。

この理由は全く判らないけど、  
間宮さんは、臥龍会と関連していることを、  
誰にも知られたくないんだ。

でもまだ、わたしはそれを聞くわけには行かない。

わたしは、肩をつかんでいる、  
間宮さんの手を外してから、

そこで、間宮さんに話があるって、伝えたら、

「恐喝か、そういうことをする奴とは思っていなかった。  
人を見る目には、けっこう自信があったんだがな、

ある意味、見事に騙されたよ、お前には。

金が目当てなのか、それとも薬か？」

と、自嘲気味にわたしへと、詰め寄りながら、  
言ってきました。

今の間宮さんは、強がってはいるけど、  
その目の奥は、なんだかとても怯えている、  
そう感じます。

でもまだだ、このまま脅したって、こっちにボロが出るか、  
間宮さんを本当に追い詰めてしまって、  
逆ギレしてくるかも知れない。

もし間宮さんがキレてしまったら、

わたしなんて、瞬殺されてしまう。

それくらい、今わたしは間宮さんを追い込んでいる、そんな気がする。

わたしは、そんな危険な状態の間宮さんへと、  
1つの提案をしました。

それは、間宮さんに、  
決闘を申し込むことでした。

条件は、間宮さんが勝てば、  
わたしたちギルドが持っている情報は口外しない、  
わたしが勝てば、間宮さんはこちら側のスパイとして、  
言うことを聞いてもらう。

勝負の方法とか条件は、こちらから提示して、  
そのやり方についての、反論や条件変更は、  
その条件を提示した時点のみ、聞くことにする。

ただのケンカになったら、勝ち目はないから、  
勝負の条件をつけられる決闘にすれば、  
わたしに有利な勝負も出来るから、  
勝算もあるんじゃないかって、思ったんです。

これを言い出す前、かなやケイゴさんの話だけで、  
間宮さんが、言うことを聞いてくれれば、  
こうしなくても、いいかも知れないって、  
ちょっとは思っていたんだけど、  
今の間宮さんの感情を考えると、

それは、お互いに危険な気がして、  
やっぱり予定通り、決闘を持ちかけました。

後は、この条件を間宮さんが飲むかどうかです。

正直、自分でも逆の立場だったら、  
どうしてそうなるんだ？

って思っちゃいますが、でもこれしか、  
わたしが望むように、間宮さんを動かす方法が、  
思いつかなかったんです。

だから、こっちにもそれなりの、  
情報を持っているように見せかけて、  
とにかく、この提案に食いついてさえくれれば、  
後は何とか出来るはずだと思って、  
これに賭けたんです。

てつきり脅迫してくるんだろうと、  
居直りかけていた、間宮さんは、  
こちらの予想外の条件に、ちよつと驚いて、  
拍子抜けしているのが判りました。

「お前が、私と、決闘？」

それ、本気で言っているのか？」

と、尋ねてくる間宮さんへ、わたしは頷くと、

「それが、お前らギルドのやり方なのか？」

その約束を、お前らが守る保障は、

どこにあるんだ？」

と、疑いの目を向けられました。

もうここは、何の材料もわたしにはありません、だから、気合と根性で押し切るしかないです！

わたしは、間宮さんを正面から、目を見据えて、そんなものはないけど、わたしたちはギルドだから、ウソはつかないんだって、伝えました。

かなが作った組織なら、ひどいこととかはしていない、そう信じて、そういうギルドの行動が、

間宮さんにも情報として伝わっていることを祈って、それだけに賭けて、そう言いました。

間宮さんは、わたしの目を見つめたまま、しばらく黙って考えていて、

ここは、とにかく信じてもらうしかないから、わたしは間宮さんの判断を、見つめ返しながら、黙って待っていました。

そして、5分くらいしてから、

「その言葉には、嘘はないみたいだな、

判った、お前の言葉を信じよう」

と言って、間宮さんは承諾してくれました！

「ところで、決闘の詳細はいつ判るんだ？」

と、間宮さんから尋ねられたから、

それは後日連絡する、と伝えて、

携帯の番号と、メアドを聞き出しました。

これで、いつでも間宮さんへと話が出てきます！

今日のところは、ここまで話をして、  
間宮さんと別れて帰ってきました。

これでもずは、第一の関門を突破しました。

わたしの言うことを、本当に信じてくれたのが、  
ちょっと気にはなるけど、それは、  
間宮さんが信用してくれたって思った、  
自分の直感を、信じることにします。

次は、どうやって間宮さんに勝つ勝負をするか、  
これを考えないといけないけれど、  
それは後で考えるところとして、今日のところは大満足です。

家に帰った後、かなへのメールに、  
勝手にギルドのことを喋ったことと、  
スカルヘッドのリーダーについて、  
わたしが知っていることを書いてから、  
間宮さんのことを、秘密にしておいてほしいのと、  
わたしがしようとしていることと、  
話を合わせておいてほしいって、  
お願いする内容を、書いておきました。

自分で言うのもなんだけど、とても身勝手な頼みで、  
きつと、かなも呆れているだろうし、  
そんなわたしのわがままは、  
聞いてもらえないかも知れない。

だけど、もうわたしには、かなへ頼み込むしか、  
他に方法がなかったから、メールも書いて、

留守電にも入れておきました。

どうかお願い、かな。今回は、今回だけは、わたしの勝手な行動を、許して下さい……

次の問題は、どうやって間宮さんと対決するかです。

これは、これ以上心配かけたくないから、忍さんに、正直に相談してみよう。

11月26日 忍さんの助言

今日は航海堂に忍さんが来る日なので、間宮さんとの決闘について、時間を作ってもらって、相談しました。

かなの方は、前に送ったメールの返事が、昨日の夜に来ていて、わたしのお願いを聞いてくれて、うまくやっておくって、書いてありました。

かなには、どれだけ感謝しても足りません。

この先、かなからの頼みは、絶対、断れそうもありません。

忍さんは、わたしから話したいことがあるって、伝えた途端に、やっぱり、みたいな顔をしていたから、

前の相談の時から、こうなるんじゃないかと、見抜かれていたようです。

わたしは、バイトの時間が終わった後に、2人しかいなくなつた、航海堂の更衣室で、話を始めました。

前に、お腹のあざで相談した時に、伝えていた内容を、少し訂正してから、現状を伝えて、わたしとしてはなんとしても、間宮さんに勝ちたいってことを、忍さんに力説しました。

そして話の最後に、でもその方法が判らなくて、困っていると伝えてから、アドバイスを下さいって、お願いしたんです。

忍さんは、最初は真面目に聞いていたけど、決闘のところになつたら、

「はあ!？」

って顔してて、その後は、ちよつと驚いてるって言うか、呆れられている?みたいな感じでした……

話を聞き終わった忍さんは最初、

「間宮、その子の苗字って、間宮なんだ。

それなら、ヤクザに絡んでるって言う話、ホントっばいね。

確か、白永組も、臥龍会も、

私が知ってる頃から、変わってなければ、



どっちも組長って、間宮だったよ、  
もちろん、直接話した訳じゃないけど」

と、なんでそんなこと知ってるんだろ、  
って思うことを、教えてくれた後に、

「それにしても、決闘とはね……」

みなもちゃん、いつの時代の人？

それ、時代劇か西部劇からヒントを得たとか？

って、つい思っちゃうんだけど、

よくそんな提案を飲んでくれたねえ、その相手の子も。

要は、タイムマンで勝負って事だよな。

まあ、それで勝負がケンカでなくても、

いいって言うんなら、少しは勝機もあるってか。

ふうん、なるほどねえ……

でもなあ、どうだろなあ」

と、やっぱり呆れつつ、理解してくれたみたいだけど、  
どうも、いまいっぱい、みたいな感じです。

わたしがそのことを尋ねると、

「みなもちゃん、その相手の子よりも、

これなら負けない！

って言う何か特技とか、あるの？」

と、尋ねられて、それは今はないって答えたら、

「ええと、多分なんだけど、

その子、結構何でも出来るかも知れない、

って思ってたね。

昔つるんでた明日香が、そうだったんだけど、

武道とかが、人より飛び抜けてる人って、

それ以外の事をやっても、

普通の人より上手かったり、すぐに上達するんだよ。

何故かって言うと、集中力が半端じゃないから。

だから、その子も噂通りの子だとしたら、  
ケンカじゃなくても、結構手強いんじゃないかな」  
なんて、不吉な事を言われました。

たしかに言われてみると、間宮さん、  
けっこう運動とか勉強とか、そう言うのじゃなくても、  
門塾さんたちにやらされてだけど、  
何気にこなしている気がする。

でもそれってつまり、勝負を持ちかけた段階で、  
もう、失敗だったって言うこと？

そんなあ……

期待していた忍さんの言葉が、逆に死刑宣告に聞こえて、  
わたしは大袈裟なくらい、がっくりと肩を落としました。

わたしの落胆振りが、相当ひどかったみたいで、  
忍さんは、わたしを慰めようと、  
「あ、ごめんね、みなもちゃん。

でもさ、下手な期待を持たせたり、  
嘘つくのとかも嫌だから、

私の正直な感想を伝えただ。

えええと、そうだな、流石にその子も、  
全然やった事がない内容で、勝負すれば、  
少なくとも、コツを掴むまでは、

有利に進められるから、

みなもちゃんが、結構慣れていて、  
その子がやってなさそうな事で、  
勝負をすれば良いかもよ？」

とか、フォローしてくれました。

わたしが自信があるって言ったら、  
絵と、潜水くらいです。

でもそれだと、絵で勝負なんてしようがないし、  
潜水では、間宮さんの方が速かったし……

フォローしても相変わらず、

沈んだままのわたしに、忍さんは、

「だったら、勉強とかはどう？

その子って、成績はいいの？

12月ってことは、そろそろ期末試験とかあるでしょ、

テストの点数なら、試験勉強をがんばれば、

結構簡単に上げられるよね。

相手は、夜な夜な借り出されているんだとしたら、

勉強する時間は、少ないだろうから、

有利とも言えるけど、どうかな？」

と、言われました。

勉強かぁ……

それは、全然考えてなかった。

間宮さんはたしか、

補習のリストに名前が出てたことないから、

赤点とかはないけど、成績上位のリストにもないから、

多分、普通、かな。

でも、授業中はかなり寝てるよなぁ、

だとしたら、そんなには高くないような……

それよりも問題は、自分の成績の方かも。

忍さんなら、そうなのかも知れないけど、点数は簡単には、上がらないような気がする。

でも、これならケガの心配もないし、体力使ってやる勝負よりは、よっぽど勝率は高そうだ。

それに、前になつめから教えてもらった、試験対策の勉強法で、必死にがんばれば、成績だつて上がるかも知れない……

よし、これで行こう！

わたしは早速、間宮さんへと、

勝負の方法についてのメールを出しました。

で、メールを出した後に忍さんが、

「私だったら、もうちょっと日にちが経ってから、

メール出そうかって、考えるけど、

みなもちゃんは、正直者なんだねえ」

と、言われて、一瞬、あ、そうか！

なんて思いましたが、勝負は公平にしないと、

わたしとしては、嫌だなって思ったから、

これでいいです。

その後、わたしは忍さんにお礼を伝えて、家へと帰ってきました。

家に帰ってから携帯を見てみると、  
間宮さんから、返信が来ていました。

早速開いてみたら、

「分かった」

と、一言だけ書いてありました。

間宮さんらしいって言えば、

間宮さんらしい、か。

どう考えても、長文のメールを打つとは、  
思えないもんなあ……

さあ、これで勝負は始まりました。

後は、10日後から始まる、

期末試験へ向けて、勉強あるのみです！

2010年 12月 その1(前書き)

変更履歴

2011/01/27 誤記修正 電車を風高の最寄り駅の6つ先

でした。 風高の最寄り駅から6つ先の駅でした。

2011/03/27 記述修正 クマのみなも クマのミナモ

2011/04/13 記述統一 1年生、(中学)2年、高校3

年 1年生、2年、高校3年

2011/07/02 記述統一 一つ、二つ、三つ 一つ、

二つ、三つ

2011/08/18 誤植修正 例え たとえ

2010年 12月 その1

12月3日 格ゲー再び

先月からずっと、試験勉強をがんばっています。

休み時間もお昼休みも、用がなければ勉強しています。

こんなに勉強しているのは、高校受験以来です。

間宮さんは、やっぱり教室では相変わらずで、

門塾さんたちに、呼ばれない限りは、

誰とも話そうとはしません。

それでも今は、委員長がほとんど来なくなっているから、

クラス委員に用がある時は、間宮さんへと言うしかなくて、

みんな、かなり遠慮がちに話しています。

でも間宮さんは、前とは違ってきていて、

そういう時は睨んだり、シカトしたりせずに、

淡々と対応していました。

わたしとの勝負に向けて、勉強しているような感じはなくて、

相変わらず授業中も、半分は寝ています。

多分間宮さんは、一学期のわたしの成績を覚えていて、

あれなら余裕だって、思っているんだ……

あの時はかなりひどかったから、これなら意外と、

間宮さんに、あっさり勝てそうな気がしてきました。

学校では出来るだけ、自分の世界に入って、勉強に集中したいけど、今朝は事件が起こっていました。

それは、格ゲーの新しい試合予告です。

前回のターゲットにされていた、2人の女子は、

1人は、先月いっぱい体調不良を理由に休学して、もう1人は、ずっと欠席が続いていて、

今は、文化祭の時に選ばれた2人の男子が、ターゲットにされていたんです。

だから、新たなターゲットが選ばれるとは、

みんな予想していなくて、朝から騒然としていました。

それも今回選ばれたのは、

『ブサイク』という条件とは、合わないような、けっこう制服もいじってるし、メイクもしてて、

スタイルも良い、2人の女子が選ばれて、

試合の日は今日の昼休みで、前と同じでした。

この2人は違うグループで、以前から仲が良くないから、

前回みたいに、試合放棄されないように、

対戦相手を、選んでいるっばいです。

お昼休みになった途端、間宮さんはすぐに前回と同じ要領で、

窓や扉を閉めさせてから、教壇に上がると、

2人の名前を呼んで、立ち上がらせた後、

今回の特別ルールを発表し始めました。



間宮さんは、よく通る声で、

「今回の試合には、追加ルールがある。

今までの勝利条件は、相手のギブアップか、試合続行不能での、判定負けだけだったが、

更に追加して、相手の下着を剥ぎ取っても勝利とする。

下着は、ブラでもパンツでも構わない」

と、とんでもないことを言っただけです。

これには、今までの対戦者とはちがって、かなり勝負をやる気になっていた2人も、クラス全体も、動揺していました。

本当に、そんなことをさせる気なの！？

これじゃあ、まるで……

クラス中のざわめきを制してから、更に間宮さんは続けて、

「それともう1つ、敗者へのペナルティーとして、

その場でメイクを落としてもらう。

さらに、本日から教室内でのメイクを禁止する。

つまり、負けた方は、今後すっぴんで、

学校へ来ることになる」

ああ、そういうことか、『ブサイク』って言うのは、素顔も含めてっていう意味だったのか。

この2人は、前にも男子たちの間で、

どっちの方が、胸が大きいかと、

話をしているのを、聞いたことがあったり、

それと、けっこうメイクも濃くて、

素顔はやばいとかの、噂もちょっとあったから、それを暴こうっていう、魂胆みたいです。

本当に、あの人たちはこれを1つのショーとして、娯楽の一環として、実行させているんだ。

どこまでエスカレートするのか、それが分からないのが、とても怖いです。

今回の特別ルールを考えたのは、いかにも、取り巻きの男子たちっぽく見えるけど、多分わたしの予想では、男子たちではなくて、全部、門塾さんなんだと思います。

取り巻きの男子が、言い出しそうなことにして、これが密告された時でも、自分に害が及ばないようにしているように思えるんです。

間宮さんの、この宣言を聞いて、2人は、逃げ出すんじゃないかと思ったけど、この追加ルールを聞いても、やる気みたいで、試合場所となっている、教室の後ろへと向かいました。

間宮さんもその後を追って、後ろへと向かい、2人の右足首に、太い紐を結びました。

この2人の格好は、ジャケットと、カーデイガンと、リボンは、脱がされていて、上はワイシャツだけになっていました。

だけどブラは引っ張っても、取れないだろうから、  
かなほどではないけど、スカートも短いので、  
多分、お互いに下を脱がそうとするんじゃないかと思えて、  
本当にそんなことが、これから始まってしまふのかと、  
自分がやらされる訳じゃないのに、  
なんだか、緊張してきました。

でももしかすると、次はわたしかも知れない、  
そしたらきつと逃げ出している、と思う。

だって、相手のを脱がすなんて出来ないし、  
自分が脱がされるのも、嫌だから。

でも、この2人は、その顔つきからして、  
お互い、相手を倒す気で見ええました。

闘う2人が向かい合って、睨み合っている様は、  
最初の男子たちとは、比較にならないほど、  
緊迫していて、とても鬼気迫るものを感じて、  
2人は本気でやり合うつもりなのが、  
この段階で、判りました。

そんな雰囲気を見て、ギャラリーは盛り上がっていて、  
この光景は、昔何かの古い映画で見た、  
闘技場の風景そのものと、思いました。

周囲が盛り上がる中、間宮さんは、  
2人のスカートのポケットをチェックして、  
入っている物を、全部出していました。

何か凶器になる物を、隠していないかの確認っばいけど、これは、前の時はしていなかったはず。

それだけ、この対戦が修羅場になるって、  
間宮さん、判断したのかな……

こうして、ひと通りのボディチェックが終わって、  
間宮さんは2人から離れると、  
試合の開始を宣言しました！

2人は予想通り、相手を殴ったり蹴ったりで、  
攻撃して倒すより、脱がす方を選んだようで、  
お互いに相手のスカートめがけて、手を出して、  
その手を押さえようと、お互いに、  
つかみ合いになっていました。

その気迫は、前に見た男子の試合よりもずっとすごくて、  
最初はお互いに、黙ったままでもみ合っていたのが、  
夢中になってきたのか、罵声や叫び声も上がって、  
本当に、修羅場になりつつありました。

次第に思い通りにならないのをイラついて、  
スカートやパンツをつかんでいた手を離して、  
殴ったり叩いたり、蹴ったりし始めて、  
それを阻止しようと、叩かれた女子が体当たりして、  
相手の女子は押し倒されて、今度は床に転がって、  
取っ組み合いになりました。

この、なりふり構わない戦いに、  
それを見ている人たちも、すごく盛り上がっていて、

なんか、見てはいけない、人間の醜さみたいなものを、見てしまった気がします。

いつもなら、明日は我が身と思って、怖がっている人たちも、男子だけじゃなく女子も、この勝負には夢中になって、歓声を上げていました。

そんな中でも、間宮さんは冷静に冷やかな目つきで、審判役として目の前の2人を、無言で見下ろしていました。

あともう1人、これを冷静に見ている人が。

こちらは冷やかだけど、どちらかと言えば、冷笑している感じの、門埜さん……

このギャラリーの輪の中でも、一番後ろに設置してある、1 mくらいの高さの、ロッカーの上に座って、2人の取り巻きの人たちと、一緒に見ていました。

それはまるで、闘技と湧き上がる観衆を見つめる、王様、いえ女王でした。

わたしが見ているのを気づかれて、思わず、門埜さんと視線が合ってしまった。

門埜さんは、冷たい眼差しをしたままで、わたしへと冷やかに、笑みを浮かべていました。

それは、絵のようにきれいだったけど、血の通った人のする表情ではなくて、

わたしには、気分が悪くなるほど、  
不気味に見えました。

2人の女子は、倒れてしまったので、  
ギョラリーの輪の後ろ側にいたわたしには、  
2人の様子は、全然見えなくなってしまうけど、  
見えている人たちからの声は、  
大声で言っているものや、小声で話しているのとか、  
色々と聞こえてきました。

「もうパンツ丸出しじゃん」

「派手な下着してんだなあ」

「紫は無いだろ」

「こっちは黒か、けっこう毛深いんじゃない？」

「なあ、あれって透けてねえ？」

「惜しい！ もうちょっとで見えそう」

「あの子、ホントはこういう性格だったんだ」

「すげえでけえな、やっぱ」

「あんなところにホクロある！」

「D？ いやEはあるか」

「写メ撮ったこと」

「これが女の本性か、こええ」

「実際、勝つてもさあ、ある意味負けじゃない？」

「なんか変な形のヘソしてんなあ」

「もし生理中だったら、エログロだったな」

「実際どっちも素颜って、厳しそうだよな？」

「うわあ、今の顔ぶつ細工だわあ」

「どっちの素颜でも、怖いもの見たさって言う気が」

「それにしても、良く出来るよな、こんなの」

「ある意味、おかしくなってるんじゃない？」

「こんなの見たら、ドン引きだよ」

「正直、萎えるな、こういうの」

喧騒にまみれて、みんな言いたい放題言っています。

もうすでに、かなり大変なんだけど、

このままだと、もっと大変なことになりそうで、

どうなっちゃうんだろうと、思った時、

教室の後ろの扉を叩く音がして、

「何を騒いでいるんだ、ここ開ける！」

と言う、体育の先生の声が聞こえました。

でも誰も、その声に気づいていないかと思ったら、

「静かにしろ！」

教師が来た！」

と言って、間宮さんが全員を制して、

もみ合っていた2人を、あっという間に腕を取って、

引き離してしまいました。

続けざまに、間宮さんは、

「試合はここで中断する。」

お前らは、衣服を出来るだけ正しておけ。

いいか もし教師が入ってきて聞かれたら、

恋愛がらみで口論になって、ケンカしていたと言え。

それから、周りのお前達は2人を後ろから抑えておけ、

ケンカを止めているように見せかけろ。

細かいいきさつは、私から教師に説明しておくから、

話を合わせろ、いいな」

と指示を言いながら、2人の足首の紐を解いてから、

2人に脱がしていた服を投げ渡していました。

その後、体育の先生の来ている、後ろの扉へ向かって、扉のつかえにしていた机を動かして、扉を開けると、外へと出て行きました。

間宮さんは外で10分くらい、先生と話していて、その間に、みんなは言われた通りにしていました。

そして話が終わったのか、間宮さんだけが、教室へと戻ってきました。

そしてもうだいたいぶ落ち着いて来た、2人に向かって、

「お前達は、放課後私と共に職員室へ来い。

話す内容は後で渡す、放課後までにちゃんと覚えておけ。

この試合は引き分けとする、それでいいな」

と、最後は門塾さんのグループへ向かって、問いかけていました。

それを尋ねられた、取り巻きの人から、

「仕方ねえか」

「まあいいだろ」

と言った声が、聞こえたのを確認して、

間宮さんは最後に、

「ああ、最後にもう1つ。

この試合の内容が流出した場合、

その犯人は、次のターゲットになるから、

せいぜい気をつけろ、以上だ」

と言って、ギャラリィの人たちに釘を刺した後、

終了を宣言して、今日の試合は終わりました。



何人かの人、それを聞いてから、  
携帯をいじっていたから、きつと撮ってたデータを、  
消していたんだと思います。

こうして、門塾さんたちのやりたかった格ゲーは、  
期待したように盛り上がったものの、  
体育の先生のおかげで、中断して、  
最後のところまでは、行き着かずに終わりました。

とは言っても、十分すぎるくらい、  
とんでもないことになっていた、と思います。

さすがにこの日の午後は、勉強が手につきませんでした。

来週にはもう、試験が始まるから、  
こんなのも、今年は最後だと思うけど、  
来年もこんなこと、それどころか、もっとひどいことを、  
やらされるのかも知れない。

そう思うと、とても怖いです。

それと気になったのが、試合中の門塾さんの表情。

あれは、この試合を楽しんでいるんじゃないかと、  
試合を見て、夢中になっている、  
クラスの人を眺めて楽しんでいる、そう感じました。

そういう考えや、感性をしているのが、  
わたしは、何よりも怖いって思います。

だってそれって、人の心を操って、  
弄んでいることだと、思うから……

12月5日 なつめからの小包

今日は1日、家で試験勉強の最後の追い込みだあ！  
と、意気込んで朝から試験の勉強をしていると、  
お昼前に、見慣れない宅配の人が来ました。

黄色と赤の、派手な感じの宅配の人は、  
おんなじカラーリングをした、

派手な黄色いダンボール箱を持ってきていて、  
その箱には赤い字で、DHLって書いてありました。

DHL？

差出人の宛名を見ると、ローマ字で、  
「Natsume Nishina」と、  
書かれていたから、なつめからだと判りました。

今回は手紙じゃなくて、小包？

けっこう重いけど、何を送ってきたんだろう。

わたしはお昼を食べてから、勉強を再開する前に、  
この箱を、開けてみることにしました。

箱の中には、緩衝材に包まれた何かの上に、

封筒が置いてあったので、  
まずは、荷物を見てみることにしました。

ビニールの緩衝材を開くと、その中には、  
小さめのライトが1つと、  
水色のパーカーが2着と、  
白い長袖のシャツが5枚と、  
背の低いスプレー缶みたいなのが10個と、  
ピストルみたいなのが5個と、  
黒いペンみたいな棒が5本と、  
細長い形のケースに入ってる何かが3本、  
が入っていました。

こういうの、前にも見たような気がするけど、  
前の、かなから送られてきた物より、  
本格的な気がします。

これらについても、手紙の中に、  
説明があるんだろうと思って、  
次に、封筒を開いてみました。

封筒の中には、数枚の便箋と、  
1枚の写真が入っていて、  
その写真は、前と同じ場所で、  
かなたちが並んで映っていました。

まず、最初に目に入ったのは、  
なつめ、髪が、おかつぱみみたいなボブになってました！

前髪もぱつつんで、髪型が昔みたいに、

お人形みたいで、こうして見ると、  
昔の儂げだった、なつめちゃんっぽいです。

あのお姫様みたいな、めっちゃめっちゃ長い髪は、  
切っちゃったんだ、もったいないなあ……

でも、昔のなつめちゃんなら、長い方が合ってたけど、  
こっちの髪の方が、今のなつめは似合うかも。

次に、なんだか前よりも白さが増している、  
クマのぬいぐるみのミナモは、  
首や足にも、白い布が巻かれていて、  
右目には、黒い眼帯をつけていました。

明らかに、前よりも傷だらけになってる……

そのうち全身、白い布に巻かれているんじゃないだろうか。

最後に、榊さんですが、髭伸ばしてる？  
みたいで、あごと口の周りに髭が生えてました。

前までの、殺し屋っぽい感じから、  
マフィアっぽい雰囲気へと、  
変わってきているようです。

うーん、どっちにしても、堅気の人には見えません。

わたしは次に、封筒から取り出した便箋を開いて、  
読むことにしました。

「親愛なるいじめられっ子のみなもへ

今回は、前置きは無しです。

前の返事、読ませてもらいました。

門塾達に、イジメられているみたいですけど、彼女達はそう言う人種ですし、

何かを言っても、通じる相手でもないから、

私の時みたいに、救ってあげようとか、

変なこと考えてなくて、良かったです。

私も一年の時は、ずっと目をつけられていたから、

今のみなものの気持ちは、判るつもりです。

私の時よりも、内容は酷くなっているって感じますが、

だけど、言いなりになっていていいとは思いません。

たとえ、ターゲットにされたとしても、

そこは相手に屈せずに、頑張って闘うなり、

耐えるなりして欲しいと思います。

私の見ていた限りですけど、

門塾は普段でも、自分の望むものだけを集めて、

そうじゃないものは、遠ざけていました。

更に、自分よりも優位なものに対しては、

外見からは、そうは見えないように装っているけど、

過剰に反応して、何としても排除しようとする性格で、

私が叩かれた理由は、多分親の地位で負けたからです。

彼女の親は、製薬会社の会長で、

うちの病院の、取引相手の1つでしかなくて、

門塾製薬は、取引の半分以上が聖マリアンナの関連企業で、

うちの、子会社みたいな立場だったから、

それが気に食わなくて、私を潰したかった、ただそれだけだったんです。

その事に、私は当時から気づいていました。そしてそれは、あの時の私ではどうにもならない事で、ひたすら耐えるしか、出来なかつたんです。今の私なら、使える権力を全部使つてでも、彼女に対抗しますけどね。

それより、私が気になっているのは、間宮つて言う、転校してきた女子の事です。随分、みなもは肩入れしているようですね。話を聞く限り、門塾の言いなりになるような、タイプではないだろうけど、逆に言うと、門塾が目障りだと感じるタイプだと思います。彼女が、気に入らないと考えるのは、自分の意志に反する者や、意思に逆らう者です。要するに、自分の支配の及ばないものを、とても嫌うんです。

間宮という女子は、最初そうだったから、門塾は色々と手を出して、従わざるを得ないようにしているんだろうとは思いますが。

でも、どうしてみなもは、その女子に、そこまで肩入れしようと思ったのか、それが良く判らないです。殴られてまで、関わりたいと思っているのは、一体何故なんですか？

この答えは、返事ですっきり答えてもらうとして、今度は、こちらの近況を書きます。

今は検査結果から判断された、次の治療計画へと入っていて、3週間が経ちました。今度の治療は、前みたいに眠っているうちに、全て終わっているものではなくて、意識や感覚の確認を行いながらの、ちよつときつい治療が、多くなっています。でも、これが上手くいけば、私の傷だらけの体も、自己治癒の機能が向上して、綺麗になると言われているので、がんばっています。流石に、手術痕は整形外科でないと、消せはしないのですが、この治療が成功すれば、整形外科の手術を、受ける事が出来るようになるので、それにも期待しています。

これが上手くいけば、海でビキニも着れるようになるから、みなもに泳ぎを教えてもらって、水泳でも、勝負がしてみたいです。

同封した写真は、もう見ましたか？髪は治療の臨床データとして、採取すると言われて、それが、かなりの量を切るとの話だったから、それならと思つて、バツサリ切つてしまいました。頭の重さが、半分になった感じですね。あの長さでの生活は、かなり大変で、下ろしていたのは、あの写真を撮った時くらいです。それ以降は切られるまで、ずっとまとめていました。みなもは、もう少しは短いと思うけど、それでも、よくその長さで生活していられますね、私にはもう耐えられません。そこだけは、負けを認めます。

それから、クマのミナモですけど、次の治療待ちの間に、関節技の練習していたら、腕とか、足とか、首が、もげてしまい、榊が夜なべして、直していました。

右目は、頭部への攻撃の練習の最中に、グローブが引っかけた、取ってしまったので、榊がプラスチックの部品を付けるより、こっちの方が安全だ、と言って、海賊みたいな眼帯になりました。

そのうちに左目も、こうなってしまいかも知れません。

最後に榊ですけど、

最近はおしゃれな感じにさせたくって、色々挑戦させている最中です。

榊の話では、業務上ダークスーツは変えられない、と言い張るので、じゃあ顔でイメチェンしてみました。とりあえず、髭を伸ばさせているんですが、

これには榊自身は、まんざらでもないみたいです。でも私には、おしゃれどころか、

むしろ犯罪者っぽくなってしまったような気がします。どうも、こういうのは難しいです。

みなも、何か名案があれば、アドバイスを下さい。

私からの手紙は、ここまでです。

これから後は、榊に揃ってもらった、ちょっと早いけど、みなもへの、クリスマスプレゼントの説明です。色々、物騒な事になっているようだったから、護身用の道具を、用意させました。

これらは、榊の所属する警備会社で使われている、



プロ用の道具なので、通販で安く売っている様な、玩具みたいなのは違って、効果の方も、期待出来ると思います。後は、ちゃんと使えるように、使い方をマスターして、普段から携帯する様にして下さい。

こんな物使わないで済めば、それに越した事はないけれど、襲われた時、備えもなくてただやられるよりも、自分で抵抗する力を持つべきだと、今の私は思うから、これを贈ります。

私が帰国するまで、ちゃんと無事でいてもらわないと、こっちだって困るんだから、心身共に自衛して下さい。それじゃ、返事待っています。

かしこ

2010年11月29日

仁科 棗

追伸

今後は毎月、手紙を出しますから、ちゃんと、状況報告をするように！

思ったほど、なつめ、怒ってなかったなあ、もっと、すごいダメ出しされるって、覚悟していたから、ちょっと、拍子抜けしました。

でも、前回の手紙にも、今回の手紙にも、なつめは日本に帰ってきてから、

やりたいことを書いてあつて、  
前向きに、治療に取り組んでいるんだなあ、  
って感じました。

それにしても、なつめから門塾さんに関しての、  
情報がもらえるとは思っていなかったから、  
これには驚きました。

もし、なつめの言う通りだとすると、  
門塾さんは、自分より優位の人と、  
言うことを聞かない人を、  
嫌って標的にする、かあ……

そうじゃない人たちは、単に気に食わないから、  
遠ざけようとしているってことなのか。

あの格ゲーは、多分に食わない人たちが、  
適当にいじめて、楽しむのが目的じゃなくて、  
追い詰めて、学校を辞めさせて、  
自分から遠ざけるのが目的だったんだ。

門塾さんは独裁者として、自分の気に入る人間しかいない、  
自分の理想のクラスにしようとしている。

そんなの、身勝手すぎる……

わたしは改めて、門塾さんへの怒りを感じました。

気を取り直して、次の便箋へと目を移すと、  
それは、箇条書きのリストになっていて、

榊さんが選んだって言う、道具の説明が書かれていました。

「 梱包物について

・レーザーフラッシュライト

小型ながら、最大450ルーメンの光を照射可能。  
スイッチを切り替えると、レーザー光も照射可能。  
フラッシュとレーザー光の同時照射も可能。

使用方法1：

フラッシュの光で敵の顔を照らして視界を奪う。  
光を直視した場合、最低1分は失明する。  
皮膚の場合は、約5秒照射で浅達性2度の熱傷、  
約10秒照射で、3度の熱傷を相手に与える。

使用方法2：

レーザー光を相手の目や皮膚に向けて照射する。  
直視した場合、約3秒で視力を0.1以下に低下させ、  
約5秒の連続照射で失明させる事が可能。

注意事項：

失明するので、絶対にレーザー光を直視しない事。  
引火するので、可燃物に対してレーザー照射しない事。  
ストラップは略奪防止ピンになっているので、  
使用時はストラップをつかんでおく事。  
そうすれば、もし奪われた場合でも、  
使用不能になり、敵に利用されるのを防止出来る。

・防弾防刃シャツ

着用する事により、銃弾及び刃物での致命傷を防ぐ。

42口径までの通常弾まで、食い止める事が可能。

使用方法：

通常の衣服と同様に着用する。

注意事項：

これは致命傷を軽減する効果しかないので、着用していても、無傷になるものではないので注意。

・防弾防刃パーカー

防弾防刃シャツと同様。

47口径までの通常弾まで、食い止める事が可能。  
こちらはフードによって頭部や首も守る事も可能。

・スタングレネード

閃光手榴弾。

閃光と爆音によって敵の視覚と聴覚及び、  
平衡感覚を失わせて、戦闘能力を奪う。

使用方法：

安全ピンを外して敵前方へと向かって投げつける。  
地面へ落下と同時に、閃光と爆音が発生する。

注意事項：

投げた後、必ず目を閉じるか後方を向いて、  
両耳を手で塞ぐ事。

・催涙スプレー（銃型）

拳銃型の催涙スプレー。

銃口部分から前方へ向かって、霧状と催涙ガスと、

液状の同成分の液体を発射する。

ガスは最大射程 2 m、液体は最大射程 5 m。

目に入ると、苦痛と涙により視界を奪う。

吸い込んだ場合、咳、くしゃみ、鼻水、

嘔吐を引き起こして、行動不能にする。

使用方法：

敵の顔へと銃口を向けてトリガーを引く。

注意事項：

密室内での使用時や、風下から発射する場合は、

自滅防止の為、発射後に必ず自分の目を閉じて、

鼻と口を手で押さえる事。

・クボタン

携帯する護身具。

カーボン製で、軽量かつ頑丈。

ねじ込み式のケースになっていて中央部で2つに分離し、

内部には筋弛緩剤の注射器が仕込まれている。

使用方法 1：

利き手で握り、先端部で相手突きたり殴打する。

使用方法 2：

分離させて、針で相手の体を刺す。

針に圧力がかかると、内蔵されている薬が注入されて、

30秒で体の筋肉が弛緩し、1分以内に意識を失う。

注意事項：

刺す場所によっては、相手がショック状態や、

心臓麻痺により死亡する可能性があるので、  
殺意がないのなら、胴体や頭部等は避けた方が良い。

・特殊警棒型スタンガン

三段に置かれた特殊警棒の三段目が、  
スタンガンを内蔵している。

強度もカーボン製で軽量でかつ高く、

特殊警棒としても使用可能。

スタンガンの出力は、最大300万ボルト。

グリップを握って勢い良く振ると、

二段目と三段目が振り出されてロックされる。

この状態でスタンガン部に通電されて、

手元のスイッチで通電の切り替えが可能になる。

使用方法1：

敵の頭部や心臓の近くで着衣の薄い部分へ向けて、  
先端の電極を押し付けるようにして突く。

使用方法2：

頭部や首等を狙って、三段目の電極部で、  
押し付けるように殴打する。

注意事項：

心臓付近に接触させた場合、

ショック死させる可能性があるので、

殺意がないなら、手足を狙う事。

ストラップは略奪防止ピンになっているので、

使用時はストラップをつかんでおく事。

そうすれば、もし奪われた場合でも、

使用不能になり、敵に利用されるのを防止出来る。

これらの道具以外にもう一つ、  
最低限の護身術は、身に着けておくべきなので、  
俺の知り合いの道場の情報も、入れて置いた。  
お前の家からでも、それほど遠くない場所だ。  
そこで、最低限の護身術を習って来い。  
そうすれば、負わされる怪我也軽くなる筈だ。

健闘を祈る。

以上

……この説明、全部本当なんだろうなあ、  
榊さんがこんな冗談、言えるとは思えないし、  
なつめが仕掛けたとしたら、ここまではしないと。  
この道具、って言うか武器、  
下手に使うと相手の人、  
殺しかねないのが、入ってる……

こういうの、ケイゴさんに渡したら、  
本当に、テロとか起こせそうだ。

体格の差とか、人数とかを考えると、  
わたしが非力すぎるから、これくらいの武器で挑まないと、  
簡単に捕まってしまうのは、もう判りきってはいます。

これくらいのものでないと、あんな人たちとは、  
張り合えないのは事実だけど、だけどなあ……

この道具は、慎重に使えるような物を選ぶとして、この護身術の道場って言うのは、そう言うのを、全然やったことがないから、いいかも知れない。

最後の便箋は、その道場の場所の地図が載っていて、その場所は、凧高の最寄り駅から6つ先の駅でした。

家からだど、1時間ちよつとかかりそうで、ちよつと遠いけど、学校帰りだったら、30分くらいかな。

榊さんの知り合いって言うのも、ちよつと興味あるし、ここに行ってみよう。

わたしはこの後、なつめと榊さん宛てに、すぐに、返事を書こうかと思ったけど、それは、試験が終わってからにしようと思って、今日はやめておきました。

なつめ、榊さん、ごめんなさい、返事はもうちよつと、待ってて下さい。

今は、2人に良い報告の返事を書けるように、まず試験に向けて、勉強をがんばります！



2010年 12月 その2(前書き)

変更履歴

2011/01/27 誤記修正 1つ先の駅にあった、なつめの  
マンションまで、 小学校の遠足の時くらいで、  
2011/01/27 誤記修正 なつめのマンションがあった駅  
までが、 皿高がある駅までが、  
2011/04/23 記述統一 第一、第二、第三 第1、  
第2、第3  
2011/06/20 誤植修正 始め 初め  
2011/09/09 誤植修正 位 くらい

2010年 12月 その2

12月6日 運命の期末試験開始

今日から、期末試験が始まりました。

初日のテストの出来は上々で、  
素晴らしいスタートです。

テストの出来とは違って、良くないのはクラスの雰囲気で、  
あの試合以降、あの2人の女子には、  
元々同じグループだった人たち以外は、  
関わらないようになっていて、  
更に、2人の女子のいるグループ同士でも、  
すっかり険悪な感じで、門塾さんたちが何もなくても、  
ここはずっと、いがみ合っているようになっていきます。

元から仲が良かった訳でもないけど、  
今では何かあるたびに、お互いのグループの誰かが、  
相手のグループの人と口論している、そんな感じですよ。

その前の2人の男子は、まだちゃんと登校しているけど、  
かなり鬱っばくなっていて、1人は、誰とも一言も話さず、  
ずっと虚ろな目をしていて、窓の外を見ているし、  
もう1人は、授業中以外は1秒たりとも、  
教室にいたくないみたいで、  
休み時間になる度に、カバンを持って、  
逃げる様に、教室を出て行きます。

あの男子たちはきつと、もうすぐ期末試験で、それが終われば、もう休みだから、何とかそれまで、耐えようとしているんだと思います。

直接関わったのは、文化祭の時だけだけど、門塾さんたちに負けないで、がんばってほしいです……

わたしは先月から昨日まで、なつめへの返事も後回しにして、かなり必死に、試験勉強をしていました。

そのおかげでひとつ判ったのが、今までは、そんなに本気になれてなかったから、家だと気が散ったり、1人だどつい、手が止まったりしていたんだって、判りました。

今までだと、なんか聞きながらしようとか、何か用を思い出したりすると、そっちが気になってしまったんです。

だけど今回は、周りの物音なんて耳に入らなかったし、勉強中はそれ以外のことなんて、何も考えなかったから、逆に勉強が終わった後に、やらないといけなかった、ご飯の支度や買い物とかを、すっかり忘れていたくらいです。

だから、間宮さんには、勝てそうな気がしています。

いえ、絶対に勝ちます！

勝って、間宮さんに、真相を全部話してもらって、

本当の間宮さんを、見せてもらいます！

12月10日 期末試験完了！

本日、期末試験の最終日で、  
全教科のテストが終わりました。

テスト中は、門塾さんたちも何も仕掛けてはこなくて、  
あの2人の女子の対決は、決着を見ないまま、  
放置されています。

それはさておき、テストの感触ですが、  
前に、なつめと一緒に勉強した時以上に、  
良く出来たと思います！

これは、もしかすると、補習者のリストじゃなくて、  
成績優秀者の方のリストに、入っちゃうんじゃないかな、  
なんて思っちゃうくらい出来ました！

最後の教科のテストが終わって、  
答案を、一番後ろの席の人が集めている時、  
出席番号順に並んでいて、端の列の一番最後にいる間宮さんが、  
集めた答案を先生に渡した後、  
間宮さんの方を見ていた、わたしと目が合いました。

間宮さんの表情は、いつも通りの無表情だったけど、  
こっちを見たと言うことは、わたしとの勝負のことを、  
意識していて、こっちを見たに違いないです。

間宮さん、顔には出さないようにしていたけど、きつとわたしの余裕っぷりを見て、ちよつと焦っているはず！

この日はとても気分良く下校して、この後、午後から入っていたバイトへと向かいました。

航海堂では、夜になったら忍さんがやってきたので、今日は忙しそうだったから、試験の結果報告だけ、伝えておきました。

忍さんからは、

「そつか、上手く行くといいね」

と、言ってもらえたし、今日はとても良い日でした。

家に帰ってから、なつめへの手紙の返事を書きました。

内容は、まずクリスマスプレゼントのお礼を、なつめと榊さんに対して書いてから、次に、こっちの近況報告として、

11月に起きた出来事、格ゲーのことや、文化祭で大変だったけど、かなに救われたことや、スカルヘッドに襲われたことや、ケイゴさんに、また助けられたことや、間宮さんへの決闘の申し込みなんかを、書きました。

それと、なつめの手紙の回答として、なつめの新しい髪型が似合ってる、とか、榊さんの髭はどうかと思う、とか、

水泳では絶対にわたしには勝てないよ、とか書いた後に、間宮さんのことを書きました。

どうしてかは判らないけど、どうしても気になるから、たとえ、ひどい目に遭わされても、

それが間宮さんの本心じゃないって、判るから、なつめの時と同じように、何とかしたいと思っっているって、正直な気持ちを、答えとして書きました。

やっぱり、本心を素直に書けるのは、とても気分が良いです。

でもきつと、報告した内容について、色々と言句が返って来そうですけどね。

明日からの休みは、バイトに精を出すのと、それから、やっと、落ち着いて取り組めそうな感じになってきたから、絵の方を、がんばりたいって思っています。

それと、紹介された道場の方も行ってみる予定です。

久しぶりに、充実したお休みが送れそうです！

12月12日 変な間宮さん

今日は1日、御家河に行つて来ました。

わたしとヒョウウちゃんの分の、お弁当を用意して、

午前中のうちに、いつもの橋のところから、  
良い風景になる場所を探して、上流の方に移動すると、  
前に間宮さんに、やられたところまで来ていました。

今日は時間もあるから、もうちょっと先まで行ってみよう、  
と思つて、そこから10分くらいさらに上流側に、  
良い風景の場所があつたので、  
そこからの風景を、描くことにしました。

と言つても、今日のところは、良い形の雲が出そうだから、  
それが入った写真を、デジカメで撮るのと、  
描く範囲を決めて、簡単にスケッチしとく、  
そのくらいの予定で、後はゆっくりしているつもりです。

多分、そんなことしているうちに、  
わたしのランチの相手も、来てくれると思つので。

とか思つていたら、いつもとは場所も時間も違つたけど、  
ヒヨウちゃんは、お昼くらいにわたしの所へとやって来て、  
用意しておいた硬水を飲みつつ、生肉を食べていました。

わたしもその隣で、お弁当を食べていた時、  
突然ヒヨウちゃんが、土手の下流の方を向いて、  
警戒するような姿勢をしながら、  
小さく唸り始めたのを見て、何が来たのかと思つて、  
そっちを見ると、そこにはジャージ姿の間宮さんが、  
こちらへと、近づいてきているのが見えました。

ヒヨウちゃんは、間宮さんが近づいてくるにつれて、  
唸る声は小さくなっていつて、

それと同時に威嚇の体勢も、尻尾を丸めて、完全に伏せてしまい、小さくなっていました。

間宮さんは、そんなヒョウちゃんの目の前まで、自転車でもやってくると、土手のところに自転車を止めて、ヒョウちゃんを、まるで空き缶でも捨つかのよう、あっさりと首のところをつまんで、持ち上げました。

ヒョウちゃん、まるで子猫のように大人しい……

自分より強いものには、絶対服従と言うこと？

多分、わたしがあれをやったら、持とうとした腕は、きつと血まみれにされていると思います。

そう思うと、なんだか敗北感を感じて、切ないです。

「こいつ、もうすっかり、良くなったんだな」

間宮さんは、ヒョウちゃんを持ち上げて、全身を見回しながら、そう言いました。

今さらそれを見に来たとは、ちょっと思えないんだけど、いまいち間宮さんの真意が読み取れません。

決闘のことについて、何か言いに来たのかな。

もしかすると、分が悪くなったから、

ここへ来て条件の変更とか？



それだったら、絶対に認めません！

最初にちゃんと、試合方法を告げた時に、条件が気に食わなければ、その時に言うこと、つて、伝えてあるんですから。

それとも、門塾さんから何か指示を受けていて、また力づくで、何か脅迫とか!?

まだ、護身術の道場には行ってないから、今やられると、また前みたいに、ひどい目に遭っちゃっ……

でも、そんな殺気だった雰囲気は、全然感じないから、そうじゃなさそうだ。

だったら、なんなんだろう？

良く判らないなあ……

なのでわたしは、うん、とだけ答えて、

間宮さんの、次の言葉を待ってみたんですが、無造作に、ヒョウちゃんを地面に置くと、

今度は、わたしのクロッキー帳へと目を向けて、「そういえばお前、絵を描くんだったっけか。

それ、見せてもらってもいいか？」

と尋ねられたので、わたしは頷いて、青い紙のクロッキー帳を渡しました。

間宮さんは、ページを開いてわたしの絵を眺めています。

それが目的ではないのが、みえみえで、  
こんなにはつきり主張して来ない間宮さんは、  
見たことありません。

わたしの絵を、何となく眺めていた間宮さんは、  
すぐにクロツキー帳を閉じて、わたしへと返してくると、  
少しだけ間があって、その後に、

「邪魔したな」

と言い残して、自転車に乗ると走り去ってしまいました。

ヒヨウちゃんは、下ろされてからも、  
硬直したように、その場で小さくなっていたみたいで、  
間宮さんが遠ざかるのを、しっかり確認してから、  
やっと体を伸ばして、食事の続きを始めました。

それにしても、間宮さん、

何かを言いに、来たんだと思うんだけど、

一体、何を言いに来たんだろう……

12月14日 至心館

今日は、榊さんから紹介のあった、  
護身術の道場へと、行ってみました。

用意するものとか、全然判らなかったので、  
まあ、今日は見学のもりで、午後から向かいました。

電車で学校よりも向こう側へ行ったのは、

小学校の遠足の時くらいで、  
どんだん郊外へと向かう、こっちは、  
あまり来たことはありません。

風高がある駅までが、開けている地域で、  
ここまでは市街地なんだけど、  
次の駅との間にある、河を超えちゃうと、  
そしたらもう、一面畑とか田園風景が広がってます。

最近、冬晴れが続いていて、  
座っている座席は、日の当たる側なので、  
とても暖かくて、思わずうとうとしていました。

目を開けるたびに、電車のドアが開いているから、  
変だなと思っていると、アナウンスの駅名が、  
毎回変っていて、5回目に目を開けた時に、  
もう降りる駅だと気づいて、慌ててドアへと走りました。

危うく、寝過ぎしそうになってしまったけど、  
何とか間に合って、無事に降りられました。

改札を出る前に、地図を見て道場の場所を確認すると、  
南口の駅前のロータリーから、  
そんなに離れていない場所にあるみたいです。

こんな駅前に、道場があるんだ……

そこは、今まで一度も降りたことのない駅で、  
駅前の雰囲気知らなくて、  
てっきり、榊さんの手紙には道場って書いてあるから、

いかにもな感じの、日本家屋を想像していて、そんな大きな広い建物が、こんな駅の近くにあるのか、って、思っていたんですが、改札を出てみたら、そんな予想とは、全然違っていました。

そこは普通のロータリーと、高くてもせいぜい、5階くらいしかない、雑居ビルが並んでいる場所で、大きな平屋のお屋敷みたいなのは、見当たりません。

最初、出る改札を間違えたのかと思って、逆側の改札の出口に回ってみたら、そこはロータリーすらなくて、単なる駅に面した、細い交差点になっていました。

やっぱり、出口は向こうで正しいのが判って、とりあえず、地図に記してある道場の場所へと、行ってみることにしました。

その場所には、周りのビルと変わらない雑居ビルがあって、地図上では、そこが道場の場所になっていました。

榊さんの手紙には、『道場』としか書いてないし、地図には、黒丸が付けられているだけだから、道場の名前とかも判りません。

紹介してもらってる立場だから、あんまり偉そうなことは、言えないけど、もうちょっと、細かく書いておいて欲しいなあ……

言葉足らずなのは、榊さんらしいですけどね。

仕方がないので、この雑居ビルに入っているお店を確認すると、飲み屋さんとか、学習塾とか、明らかに違うものの中に、4階に、『至心館』と言う、よく判らないお店の名前があって、どうもこれ以外に、それっぽいがありません。

至心館って、どっかで聞いたことがあるような名前だけど、思い出せませんでした。

ちよつと、宗教っぽい名前にも聞こえて、怪しい新興宗教とかじゃないことを、祈りつつ、4階へ行ってみました。

そこには、ガラス張りの扉があつて、しっかりと、『至心館』と書いてあり、その下に、張り紙が貼つてあつて、

『ただ今女性向けの護身術教室開催中!』と、書いてありました。

どうやら、ここであつてるみたいですが、こういう場所が、道場って言うのは、どうも、わたしの感覚からすると、違うんだけどなあ……

これ、道場って言うより、カルチャー教室だよ。

ま、無事に着いたから、いいか。

わたしはバッグの中に入れておいた、紹介状を取り出してから、ドアを開けて中に入りました。

ガラス越しに、人が見えなかったから、黙って入っていったら、入った途端に、「こんにちはー、本日の教室に参加の方ですかー」と、外からは死角になっていた、小さな受付にいた、上下ジャージ姿の、そんなに背の高くない、笑顔の茶髪の若い男の人に、声をかけられて、めっちゃめっちゃ驚きました。

こ、この人、け、気配を感じなかった！

それよりも挨拶を返さなければと、あせってしまい、すいませんとこんにちわが混ざって、自分でも、何を言っているのか判らない返事をしてしまい、男の人は、かなり困惑していました。

わたしは恥ずかしくて、顔が赤らむのが判ったけど、隠しようもないので、その人に紹介状を出して、ここを紹介されて来たことを、伝えました。

「紹介状？ ちょっと拝見しまーす。

あー、少々お待ち下さーい。

神谷先生、ちょっといいですかー」

と言いながら、若い人は奥に行ってしまい、わたしは受付の前で、大人しく待っていました。

それにしても、あの若い人、語尾延ばして話すの、癖なのかなあ。

ちよっと、面白いです。

でも目上の人にもああだと、怒られそうだけど。

5分くらい待っている間、

2人の女の人が、わたしの後から入って来て、

奥へと消えて行きました。

さっき言ってた、今日やるらしい、

護身術教室を受ける人たちかな。

着替えが入ってるっぽい、大きなバッグを持ってたし、  
多分、そうだろうな。

とか考えていたら、さっきの若い人が帰ってきて、

「あ、どうもお待たせしましたー、

こちらへどうぞー」

と言って、奥へと案内されました。

通されたのは、6畳くらいの事務室で、

そこに入ったらすぐに、若い人は、

「神谷先生、お連れしましたー」

と言うと、背の高い長髪の男の人が振り向きました。

その人は、若い人とは違って、

合気道の稽古着みたいなの、袴を履いていて、

髪型もオールバックで、いかにも師範っぽい人です。

榊さんの紹介だから、どんだけすごい人が出てくるかと、  
ちょっと不安だったんですが、

その人は、想像とは真逆で、第一印象としては、

穏やかで優しそうな感じでした。

そして、その表情を崩すことなく、

「能都君、ありがとう、

後はいいから、次の回の準備を頼むよ。

三崎さんは、どうぞこちらに」

と、事務機の椅子に座るように言われました。

わたしが頭を下げってから、そこに座ると、

師範っぽい人は、話し始めました。

「初めまして、私は神谷と言います。

ここで格闘技や護身術を教えている者です。

紹介状、拝見させて頂きました。

あの榊から、紹介者が来るなんて、

今までなかったので、正直驚きました。

それもこんな若い女の子とは。

貴方の様な人とは、一番縁がなさそうな男なのにね」  
と言ってから、神谷さんは軽く笑いました。

榊さんの知り合いとは思えないくらい、

ちゃんとした社交性のある人だったので、

これは、とても予想外でした。

「で、三崎さん、ここまでいらしたと言う事は、

護身術教室に参加で宜しいですか？

丁度これから、初回の講習が始まるどころですし、

折角、ここまで来られたのですから、

まずは体験だけでも、受けられていく事をお勧めしますよ」

と、神谷さんに薦められて、



そうですね、と言ったところで、  
でも、着替えを持って着ていないのを伝えると、  
神谷さんの話では、ジャージならレンタルがあるし、  
初回は柔軟運動と、受身のやり方を練習するだけで、  
激しい運動はしないとの事だったから、  
ジャージを借りて、参加してみることにしました。

神谷さんに、ビニール袋に入ったジャージを受け取って、  
女性用の更衣室まで、案内してもらってから、  
中でジャージに着替えて、講習場所だと教えられた、  
すぐ隣の第1実技室へと入りました。

部屋の中にはもう、5人の女の人たちと、  
さつき、神谷さんに、能都君って呼ばれていた、  
語尾を伸ばす人がいました。

どうやら、あの人がインストラクターみたいです。

この人も、かなり笑顔が絶えない人で、  
その喋り方もあって、とても格闘技とか、  
しそつもない感じですよ。

「皆さん、こんにちわー、」

えー、本日護身術教室の、実技を担当させていただく、  
能都と言いまーす。

どうぞ、宜しく願いまーす  
と挨拶して、頭を下げました。

この後、能都さんは今日の実技メニューを説明して、  
柔軟体操をした後に、受身の練習になりました。

柔道や合気道では、必ずやるそうですが、わたしは初めてで、とにかく言われた通りに、前にでんぐり返ししたり、横や後ろに倒れるたびに、畳を手で叩いていました。

でもこれが、ちゃんと出来れば、相手に倒されただけで、もう怪我してしまっただけ、動けなくなるのを防げるのかも、と思って、がんばってやっていたら、手が真っ赤になってしまい、「三崎さん、もうちょっと、力抜いてやっていいですよー」と、能都さんに軽く注意されてしまいました。

1時間ほどの練習の後、時間となって実技は終わって、能都さんは参加者を集めると、

「えー、皆さんお疲れ様でしたー」。

次は座学になりますので、4時半までに、

着替えを終えて、第2座学室へと入って下さーい。

宜しく願いまーす」

と言って、実技が終わりました。

他の人たちの後について、更衣室へと向かおうとしたら、

「あ、三崎さん、ちょっといいですかー」

と、わたしだけ呼び止められました。

なんだろうと思って、わたしが振り向くと、

「あー、三崎さんは別のメニューで、

座学ではないので、着替えしないで、

4時半まで休憩して、待っていて下さーい」

と告げてから、能都さんは頭を下げて、

この部屋を出て行きました。

わたしはこの休憩時間の間に、トイレに行つて、顔を洗つてから、袋の中にジャージと一緒に入っていた、タオルを濡らしてから実技室に戻つて、真つ赤になつてしまつた掌や腕を、タオルで冷やしながらか、体育座りして、待つていました。

そうしていると、やがて時間が来て、能都さんの言つていた時間になつたら、今度は神谷さんが、部屋に入つてきました。

そして、わたしに立ち上がるように促してから、

「他の受講者の人は、通常の座学を受けています。

暴漢に教われないようにする為の方法や、

普段から心がける事や、

護身具の選び方や、使い方等を教えています。

でも三崎さんは、もっと差し迫つた問題があたりだとか。

そこで、榊からの言伝通り、

三崎さんには、特別メニューを行います。

まずは、体験されるのが手っ取り早いので、

どんな方法でも良いので、

私に全力で攻撃をして下さい」

と、笑顔で言いました。

榊さんは、何を神谷さんへ伝えているのかが判らないけど、とりあえず、言われた通りにしよう、そう思つて、わたしは神谷さんに向かって、足を蹴ろうとしてみました。

その時、神谷さんはわたしの軸足側の脇に、近づいてきて、すつと通り抜けた、と思っただら、何故か私は天井を見ていて、両手でさつき習ったばかりの、後ろ受身をしていました。

あれ？

いつの間に倒されたんだろう？

「おお、早速受身が出来ていますね、なかなか、飲み込みが早い」

そんなことを言いながら、わたしの頭の方から、神谷さんの声が聞こえていて、

「もう、終わりですか？

もっと本気で来ていいですよ」  
なんて言われました。

今の、気のせいかな、あの時と似てる気がする。

わたしは、神谷さんに一言、  
じゃあ、本気でやります、と告げてから、  
持っていたタオルを振り回しながら、  
神谷さんへと突撃しました。

でもやっぱり、さつきと同じで、  
神谷さんがこっちに向かってきた、  
と思っただ後は、もうひっくり返っているんです。

さつきとは違う角度で、天井を見上げていたら、  
「いい気迫です、今のは結構本気でしたね。」

素人さんだと、初対面の人に向かって、本気で襲えと言っても、どうしても尻込みしてしまうのに、良い切り替えの早さをしていますね、三崎さんは。それとも、何か思い当たるところでもあるのかな？」と神谷さんは、引つかかることを言っていました。

この後も、何度か挑戦したけど、すれ違いざまに、一瞬で倒されるのは、何をしても防げなくて、

10回くらい天井を見たところで、わたしは確信しました。

これは間宮さんが、前に教室でやっていた技と同じだって。

あの時も何が起きたのか、誰も判らなかった。

神谷さんが、今わたしにかけているのと、

あの時ののは同じ技、つまり神谷さんは、

間宮さんと、同じ格闘技の使い手なんだ。

わたしの態度が変わったのを見て、神谷さんは床に正座したので、わたしも起き上がってから、正面に正座しようとする時、

「足を崩して、楽にしていいていいですよ」

と言った後に、真剣な表情になって、話し始めました。

「今、三崎さんにかけてきた技に、心当たりがある様なので、お話ししましょう。」

これは、とある流派の基本中の基本となる技で、すれ違い様に、向かって来る敵を転倒させる、  
と言うものです。

他にも、飛び込みつつ敵に打撃を加えたり、攻撃すると同時に、横や後方へ移動する、等の、常に動きながら相手を倒していく、これがその体術の特徴になっています。

この体術の名は、間宮流体術と言いまして、柔道や合気道の様に、一般には広まっている体術ではありません。ご存知かは判りませんが、臥龍会と言う指定暴力団の、選ばれた組員だけに、伝わっているものです。

この体術の目的は、襲撃に対して要人の身を守る事、これに特化しています。

決して、自分の身を守る為の体術ではありません。それ故、飛び道具による襲撃の対応等は、自分の身を呈して、要人を守る、この様に教えられて、体に叩き込まれるのです。

判りやすく言えば、究極のSP、と言ったところですね。考えて守らせるのではなく、自然に捨て身となって守る、無意識に、人間の盾となる様に教え込まれる、これは、そんな体術なのです」

臥龍会つて言う、暴力団が絡んでるって、かなのメールにはあつたけど、その組員が使う体術が、間宮流体術つてことは、忍さんが言っていたことと、合わせて考えると、間宮さんはやっぱり……

わたしは神谷さんに、

どうしてそんなことを知っているかを、聞いてみると、神谷さんはわたしに、左右の掌を見せました。

あれ、小指が、左右で、違ってる……

「もう、10年以上も前の話ですが、私は元臥龍会の人間で、その後に事情があつて白永組へ行つた後、組から足抜けしたんです。

右手の小指は、その時にケジメで詰めてなくしました。しかし堅気として生きるには、小指が必要ですから、足の指を移植しています」

神谷さんは、相変わらず表情を変えずにそう言いました。

この人、本物のヤクザだった人なんだ、それも、間宮さんに関連している組の……

神谷さんが、昔の臥龍会と白永組を知っているのなら、だったら、わたしが聞きたいことは1つです。

わたしは神谷さんに、どちらかの組に、間宮の家に、今わたしと同年代になるような、女の子がいたかを尋ねました。

神谷さんは、わたしの顔を見て、ちよつとだけ考えてから、

「白永組の組長には、娘はいません。

臥龍会の組長には、養っていた養女はいました。

組長は奥様とは昔に死別されていて、

2人の間には、子供はおりませんでした。

私達の様な若い者には、その養女が誰の子供かは判りません。しかし、組長はとてもその娘を可愛がっていました。組長も勿論、この体術の師範でもありましたから、可愛い娘にも、きつと教えていたと、思いますよ」

神谷さんは、ここで一旦話を切ると、

わたしから視線を外してから、一度遠くを見て、

「三崎さん、私は元々臥龍会の人間で、

どうして極道になったのかと言うと、

組長の器に惚れたからなんです。

私はあの人の為に命を張りたいと思いました。

それは組を抜けて、足を洗った今でも、

変ってはいません。

任侠とか、そんなかつこいいいものではなく、

今でも純粹に、組長の生き様に惚れているからなんです。

今どきの若い女の子の貴方には、

そんな考えは、意味が判らないかも知れないですね。

私の考えを、別に理解する必要はありません、

ただ、自分が惚れた組長と同じくらい、

組長の可愛がっていたお嬢さんにも、

幸せでいてもらいたい、

そう、私は思っているだけなんですよ」

と、少し沈んだ表情をしながら、言いました。

神谷さんの言いたいことは、

わたしなりに理解出来た、と思いました。

これで、間宮さんの過去は、

半分くらいは判った、のだと思う。



わたしは、神谷さんの話を聞いて、  
そう思いました。

間宮さんには、単に暴力団の組長の娘、  
と言っただけじゃない秘密が、まだあるんだ。

榊さんは、前のわたしの手紙で、  
間宮さんのことに感じて、  
神谷さんを、紹介してくれたのかな……

それにしても神谷さん、よくこんなすごい話、  
初対面のわたしに、してくれたなあ。

わたしはそれを、神谷さんへ尋ねると、

神谷さんはまた少し微笑んだ、柔らかな表情で、

「私は榊に、大きな借りがありましたね、

あまり彼には、頭が上がらないんですよ。

今回珍しく、彼からの依頼だったので、

それに応じているんです。

それと今回は、貴方に力添えする事が、

組長の望みにも繋がる事でもあるので、

かなり突っ込んだ話を、させてもらいました。

念の為に言っておきますが、今の話、

他所で話してはいけませんよ、いいですね？」

と、説明してもらいました。

神谷さん、顔は穏やかだけど、最後の言葉には、  
色んな意味があるに違いないと感じて、  
わたしは、絶対言いません！

とすぐに答えた後、榊さんにもですか、と聞くと、

「榊には別に、話してもいいですよ」と、言ってもらえました。

「おや、そろそろ座学の講義が終わる時間だ、さて、三崎さん、どうでしたか？」

この私の講義は特別として、

護身術は覚えておいて、損はしないと思います。

実技の方も回が進めば、

身近な道具を使った、実践的な撃退方法や、

護身具を使った模擬演習なども行いますから、

学んでおかれる事を、お勧めします。

ゆっくり考えてもらって」

神谷さんが、そう言いかけた時には、

もっと実践的な練習って、してもらえますか！

と、わたしは叫んでいました。

門塾さんたちに、対抗出来るだけの心と、

スカルヘッドに襲われても、すぐにはやられない技と、

間宮さんにも、簡単に倒されない体が欲しい。

それがここなら、全部手に入りそうな気がする。

そう思っで、神谷さんをお願いしました。

いきなり叫んでしまったから、

わたしは失礼だったかと思っで、すぐに謝ると、

神谷さんは、笑いながら、

「成程ね、榊が買っでいる訳が判る気がします。

三崎さん、今みたいに榊に食いついた事、

何度かあるでしょう」

と言われて、思い出してみると、思い当たることが、  
何度かあったような気がして、  
多分、あります、と答えました。

「榊からの紹介状の中に、三崎さんは、  
見た目と違って、突然噛み付いてくるから、  
気をつけると、書いてあったんですよ。  
何の事を言っているのかと、ずっと考えていたんですが、  
早速、その意味が判りましたね」  
と言ってから、笑われてしまいました。

榊さん、わたしをしつげのなっていない犬みたいに、  
言わないでほしいなあ、もう……

わたしは恥ずかしくなって、俯いていると、  
「判りました、三崎さんには、

通常の、護身術教室のカリキュラムと平行して、  
私と能都君で、模擬訓練中心の、  
自衛術を実践する、特別講習をしましょうか。  
後で護身術教室の、スケジュール表を渡しますから、  
都合の良い日に来て下さい。

特別講習は、通常の講義が終わった後になるので、  
夜になってしまいますが、それでも良いですか？」  
と、思わぬ特別待遇で、わたしのわがままが通りました！

ここでわたしは、料金のことを、  
全然考えていなかったのに、気づいて、  
そんな、特別の対応をしてもらったら、  
料金って、一体いくらになるんだろう、  
と不安になって、そのことを尋ねると、

神谷さんは笑いながら、

「ええ、費用に関しては、全て榊の方で持つとあるので、うちとしては、貴方をお客様として、

カリキュラムを組んで、それに見合う講習代を、

榊に請求します。

ですので、貴方は気にしなくても大丈夫ですよ」と言われました。

榊さんに、請求が行くってことは、

なつめが負担するって言う意味だろうな、きつと。

かなもそうだけど、なつめにも、

色々してもらってばかりだ……

なんだか申し訳ないなあ、と思います。

榊さんの携帯って、まだ繋がるかな、

お礼も伝えたいから、ちょっと連絡してみよう。

今日の講習は、これで終わって、

時計を見ると、もう6時になっていました。

わたしは、神谷さんへお辞儀ををして、

挨拶した後、更衣室で着替えて、

出口へ向かいました。

入り口の受付には、能都さんがいて、

会員証と、案内のパンフレットとか、

色々解説が載っている小冊子を、

何冊かわたしに、渡しながら、

「あー、どうもお疲れ様でしたー。  
今回は、スケジュール表を確認して、  
受けたい講習の日に、いらして下さーい、  
何かご不明な箇所があれば、  
ここのフリーダイヤルで、お問い合わせ下さーい。  
またのお越しを、お待ちしておりますー」  
と言って、頭を下げました。

やっぱり、語尾伸ばすし、笑顔だ。

それに、気配が薄いような気がするけど、  
気のせいかな……

わたしは、能都さんに会釈して、  
至心館を後にしました。

帰りの電車の中で、今日神谷さんから聞いた話を、  
思い返していました。

間宮さんは、臥龍会の組長の養女だった。

そして今は、理由は判らないけど、  
家を出て一人で離れて暮らしている。

ヤクザの家を嫌って、家を出た？

でも神谷さんの話だと、組長でもある義理のお父さんは、  
幼い間宮さんを、可愛がっていたって言ってた。

でもそれは、10年以上前のことだから、

今も仲が良いかなんて判らない。

間宮さんが、隠していたいののは、  
臥龍会の組長と、血が繋がっていないこと？

でもそれは、神谷さんも知っていたんだから、  
別に秘密って訳でも、なかった感じだし、  
離れたがっていたのであれば、  
逆に、都合が良いんじゃないかな。

それに、もう家を出ているんだから、  
苗字は偶然同じだって言えば、ごまかせるような気もする。

あんな反応しなければ、わたしだって、  
そこに何かがあるなんて、思わないのに、  
どうして、あんなに取り乱したんだろう。

神谷さんは、多分これ以上のことは、  
知らなそうだから、もうこれ以上のことは、  
聞けそうもない。

もしかしたら、かなから情報が入るかも知れないけど、  
あんまり、それを期待しない方が良さそうだ。

少なくとも、今の間宮さんは、  
本当は、わたしが判っていないことを、  
知られていると、勘違いしているはずだから、  
それだけは、隠し通さないといけない。

このことを、間宮さんに正直に告白出来るのは、

わたしが決闘に勝ってからだ。

今はとにかく、試験の結果発表を待つしかないけど、この前の、間宮さんの変な態度も気になる。

まさか、間宮さん、わたしに追い詰められたと思って、妙な考えとか、起こしたりしないよなあ。

滅多に、そういう心境になりそうもない人だから、それがちよつと、不安です……

2010年 12月 その3(前書き)

変更履歴

2011/03/21

記述修正 携帯

ケータイ



2010年 12月 その3

12月15日 榊さんへの電話

今日は午前中から丸1日、航海堂でバイトでした。

榊さんへの連絡を、早くしようと思って、お昼休みに連絡すると、呼び出し音はなっていたけど、近くにいないのか、出てもらえませんでした。

仕方ないから、8時までのバイトが終わって、家に帰ってから、もう一度かけ直してみよう、と思っていたら、バイトの帰りの電車を降りたところで、榊さんから、かかってきました。

早速電話に出ると、榊さんは記憶しているよりも、低くて、不機嫌そうな声をしていました。

「……なあ、お前、時差って学校で習ってないのか。日本とドイツでは、8時間の時差がある。朝の4時に掛けて来るな」

ああ、それで不機嫌なのか、時差なんて、完全に忘れてた……

わたしは榊さんに、謝りました。

「……… 今後は気をつける、それで、俺に何の様だ」

相変わらず、面倒くさそうでそっけない口調だなあ、  
榊さん、ちっとも変ってないです。

わたしはまず、なつめからの小包の品物について、  
お礼を伝えました。

すると、榊さんは、

「……………そうか」

の一言だけでした。

やっぱり、あっさりだなあ……………

かと思つたら、

「……………そうだ、手紙に書き忘れていたが、

もしあの道具、特にスタングレネードを使用した場合、

恐らく、周囲の人間や近隣住民から、

通報される可能性が高い。

その対策を講じるので、使用後には出来るだけ早く、

今から伝える番号に連絡しろ」

とのことで、緊急連絡先みたいな番号を、

教えてもらったけど、これ一体何処に繋がるんだろう。

多分、詳細は教えてもらえないようなところっぽいので、  
あえて聞きませんでした。

だったらこっちの話なら、

多少は興味があるんじゃないかと思って、

わたしは次に、神谷さんのところへ行つたことを話すと、  
それに対する、榊さんの返事は、

「……まだあいつは、無事にやっているみたいだな、それだけ判れば、十分だ」

と、こつちもあまり興味を引かなかったみたいで、一言二言で、会話は終わってしまいました。

わたしは気になっていた、神谷さんとの関係を探ねると、  
榊さんは、鬱陶しそうな声で、

「……神谷とは、今の会社の同僚だ。

これ以上は、神谷に聞け」

と、詳しいことは教えてもらえませんでした。

でも、聞いてもいいつて言う許可はもらえたから、  
わたしは榊さんにお礼を言うつと、

「……そんな事をどうして知りたがるんだ？

相変わらず、お前は変っているな」

と、言われた後に、

「その代わりと言っては何だが、お前に頼みがある。

棗の事だが、お前の方から、

俺に何かをするのを止める様に、

上手い事伝えてくれないか。

あれの玩具にされるのは、かなり面倒だ」

この時の榊さんの声は、この電話のやりとりの中で、  
本音が出ていたんじゃないかな、と思いました。

それに対してわたしは、わたしなりに、  
努力してみます、と伝えて電話を切りました。

榊さん、電話では言わなかったけど、

その面倒くさいのは、多分、

なつめからの、愛情表現なんだと思うから、  
そう簡単には止めさせられないと、思う。

だから、早く榊さんが慣れた方がいいです、きっと。

どっちにしたって、ずっとそんなのが続くと思うので。

わたしはそう思います。

12月20日 至心館での講習

至心館へと通い始めてから、1週間が経ちました。

早く講習を受け終えたくて、

こっちのスケジュールに合わせて、

航海堂のバイトの日程を、ずらしたりして、

今は講習最優先で、過ごしています。

護身術の教室の座学は、特に問題なくこなしているのですが、

護身術の実技の方は、受身までは良かったんだけど、

講師の人を相手にしての、反撃の練習では、

全然、思ったようには行きません。

どうも、わたしに運動神経がないのが、

その原因みたいです。

護身術の教室では、ストレッチとか準備運動はするけど、  
格闘技の技を教えるのではないから、

筋トレみたいなものは、全くないのですが、  
わたしが不器用で、無駄に力が入っていて、  
要領が悪いのか、すごく疲れる割には、  
教えられたことが、上手く出来ません。

わたしよりも後から入った人でも、  
わたしより、もっと上手くやっています。

なんだかなあ……

特別講習の方は、榊さんと能都さんが、  
選任の講師になって、普通の講習の後に、  
わたしだけが受けているんですけど、  
この時の、主に相手役をやる能都さんは、  
本当に怖いんです。

前から、この人はどうも気配がしないって、  
不思議に思っていたら、この模擬演習をする時に、  
その謎が解けました。

能都さんは、元々は暴走族で、  
神谷さんが現役の時、舎弟だったそうです。

で、神谷さんが抜ける時に、一緒についてきたんだそうで、  
当時の能都さんは、いつも殺気でキラキラしているような、  
とても堅気じゃ、やっていけない雰囲気だったので、  
神谷さんに言われて、殺気を消すようにしていたら、  
普通の気配も薄れてしまった、とのことだそうです。

わたしなんかは逆に、普段から存在感なかったりしますけど、

そうじゃない人がそんなに簡単に、気配は消せるものなのか、疑問に思いつつ、いざ模擬訓練になったら、能都さんは豹変してしまい、まるで別人のようです。

その気迫は、ヒョウちゃんや間宮さんが本気の時と、同じくらい、恐ろしくて、怖いんです。

わたしは、その殺気に向けられただけで、昔の怖かったこととか、思い出してしまって、体がすくんで動けなくなるし、泣きそうになるんです、って言うか、最後はいつも泣いています。

だから、全然進まないんだけど、慣れるのには、いい特訓になっているって、思います。

もうこればかりは、わたし自身が、恐怖を克服するしかないと思うし、この、怖くて動けなくなってしまうのを克服しないと、対抗なんて、話にならないと思うから……

神谷さんには、榊さんとのことを尋ねてみたけど、神谷さんの話では、この仕事を始めるまで、榊さんと、同じ警備会社にいたんだそうで、そこまでは教えてもらえましたが、それ以上は、はぐらかされてしまい、これ以上詮索するのも、失礼かと思って、聞いていません。

ちょっと気になるけど、そのうち、

聞ける時が来れば、聞いてみようと思います。

それよりも、今はとにかく、せつかく通わせてもらっているんだから、なんとかがんばって、習ったことを、ちゃんと出来るようになりたいです……

12月22日 最近のニュース

昨日、テレビを見てみると、

もうすっかり、いつものことになってしまった、高校生や未成年の、障害事件や暴力事件の、番組特集を、久しぶりにやっていました。

秋ごろは、テレビのローカルニュースや、この地域の新聞でも、記事になっていたりして、そんな事件は、今でもずっと続いていたけど、特集なんかは、いつの間にか全然なくなっていました。

多分、もうネタとして新鮮味がなくなったから、相変わらず、事件は続いていたけど、話題性が弱いから、使われなくなっただんだと思います。

それが、またなんでテレビでやってんだろう、と、疑問に思っただけで見て見ると、

新しい動きがあったとかで、特集されていました。

それは、今までは、暴走族とかの大勢のグループが、

一部の高校の生徒を、ターゲットにしていたのが、今は、グループ体グループの抗争になっている、らしいです。

コメンテーターの、良く判らない専門家らしい人は、内部分裂による抗争ではないか、と言っていました。

暗黒女王のグループ内で、内部抗争？

少なくとも、門塾さんを見ている限り、そんな、揉め事が起きているようには見えないけど、仮に、あの内部抗争の話が事実だったとしても、門塾さんには、影響していない、そういうことかなあ……

何でも、争っているのは、カラーギャングで、白をチームカラーにしたグループだと、ニュースでは言っていました。

白といえば、門塾さんのイメージカラーだけど、多分、関係ないよなあ……

12月24日 成績対決！

ついにやって来ました、クリスマススイヴ、だけどそっちはどうでも良くて、終業式です。

今日は、期末試験の答案が返されて、



決闘の結果が判ります！

今朝は結果が楽しみで、いつもよりも早く目が覚めて、目覚ましが鳴る前に止めました。

せっかくなので、いつもよりも早めに登校して、すぐに、掲示板のところへと向かいました。

掲示板には、もう2つのリストは貼り出されていて、最初に見たのはもちろん、上位50位までの一覧です。

その一覧には、名前が載っていました。

……間宮さんの名前が。

見間違いかと期待して、何度も見直しましたが、何回見ても、リストの一番下、50位のところに、

『間宮 命』の文字が、書いてありました。

そして、わたしの名前は、ありません。

今日は、早く来て良かった。

掲示板の前で、ショックで力が抜けてしまい、床に座り込んでしまったのを、誰にも見られずに済んだので……

わたしは誰かに見られる前に、立ち上がって、急いでトイレに入りました。

決闘のルールは、全教科の総合得点だから、もうこの時点で、わたしの負けが決定です。

まさか、こんなに早く、わたしの負けが決まるなんて、考えてなかった……

間宮さんに、何て言おう。

ここで、待ったなんて言えないし、でも負けを認めたら、これで勝負は終わっちゃおう。

何とかしないと……

わたしは予鈴が鳴るまで、ずっとトイレの中で、作戦を考えてから、とりあえず、結果を確認する場所を、御家河の土手の、グラウンド前に3時だと、間宮さんへとメールで伝えてから、教室へと戻りました。

教室では、もう終業式へとみんな向かい始めていて、間宮さんとは、一度だけ目が合いました。

だけど、その顔はいつも通りで、勝利を誇示するでもなく、無表情のままでした。

終業式の間、わたしはこの後の展開をどう持っていこうかと、考えるのに必死で、先生たちの話は、全く頭に入りませんでした。

教室に帰って来て、出席番号の順番に、  
通知表と一緒に、全部の教科の答案も返されました。

点数は、どの教科もとても良くて、  
今までのベストを更新していましたが、  
今はそんなことは、ちっとも嬉しくなくて、  
この後の展開のことだけが、気になって仕方ありません。

間宮さんは、自分の通知表と答案を受け取っても、  
もう掲示板を見て、勝ちが判っているせいなのか、  
全然確認しようもしないで、席に戻って、  
無造作にバッグにしまっていました。

この時に携帯を見た、間宮さんは、  
わたしからのメールを確認したみたいで、  
ちらっと、わたしの方を見ました。

内心、こっちが時間稼ぎをしているのは、  
もうばれているとは思っけど、  
決闘のルールでは、こっちが決めることになっているから、  
あえて反論してこないのかなあ。

間宮さんは、その場で返信をしたらしく、  
すぐに、わたしの携帯が震えているのが判って、  
見てみたら、やっぱりそれは間宮さんからの返事で、  
内容は一言、  
「判った」  
だけでした。

今日は門塾さんたちも、何もせずに、  
このまま、他には何事もなくHRも終わって、  
下校となりました。

今日はちょっと寒かったからなのか、  
門塾さんは、コートを着てきたみたいで、  
真っ白のファー付のロングコートを羽織ながら、  
取り巻きの人をつれて、帰っていました。

別に、今までと変わらない感じですよ。

白いロングコートに、白いロングマフラー。

その姿を見ると、前に見たニユースを思い出しました。

門塾さんが、自分のグループを作ったって言う、  
可能性は、あるのかな……

色としては合っけど、どうなんだろう、  
考えすぎかな。

今はそれよりも、間宮さんだ。

わたしは帰りの道中も、  
家に帰って、お昼ご飯を食べている時も、  
約束の場所へと、向かっている最中も、  
ずっと、どう切り抜けるかを考えていました。

そして、約束した場所についても、  
まだ迷っていました。

でも、もう時計を見ると3時で、  
下流の方から、自転車に乗った間宮さんが、  
やって来るのが見えていました。

そして、わたしのところまで来ると、  
間宮さんは自転車を降りて、  
わたしの真横へとやって来ました。

「三崎、決着をつけよう」

と言って、間宮さんは、  
わたしに全部の答案を差し出しました。

わたしも覚悟を決めると、  
バッグから、自分の答案を取り出して、  
1枚ずつ、点数を比べていきました。

あれ？

意外と接戦だなあ。

点数は、教科によって勝ったり負けたりだったけど、  
合計点は、そんなに差がありません。

最後の教科を残した合計点は、  
わたしの方が1点だけど、リードしていて、  
これはもしかして、もしかすると、  
あのリストが間違っていたんじゃないかと、  
少しだけ期待しながら、最後の答案を比べました。

結果は、1点差で、わたしの負けでした……

つまり、わたしは51位だったのかな、  
たった1点だけど、致命的な1点だ……

わたしが、淡い期待を打ち砕かれて、  
打ちひしがれていると、間宮さんが勝利を確信して、  
話し始めました。

「私の勝ちだな、これで」

わたしは間宮さんの言葉を遮って、  
まだだよ！

と、叫びました。

「どう言う意味だ、それは」

と、怪訝な顔をしながら言う間宮さんに、  
わたしは、誰が1回勝負って言ったの？  
と、切り替えしました。

もう、こんなのほか、浮かばなかったんです。

わたしは、さも当然のような顔で、

1勝しただけで、勝った気にならないですよ、  
と、余裕ぶって言ったつもりでしたが、  
途中で、声が裏返ってしまいました。

間宮さんからは、白い目で睨まれていて、  
明らかに不服そうでしたが、  
でも、何も反論はなくて、何かを見透かすように、  
ただじっと、わたしの顔を見ていました。

あれ、怒ってるのかと思つたら、  
そうじゃないみたい……

なんだか、なんて言うか、間宮さんの顔、  
そういう意味で、不満なんじゃなくて、  
もっと違う、何だろ、この表情……

わたしが見つめ返す、その視線に、  
間宮さんは、我に返つたみたいに、  
不意に視線を外したので、  
そのタイミングで、わたしも我に返ってから、  
第2戦の詳細は、メールで後日知らせる、  
と、間宮さんへ伝えました。

間宮さんの様子は、もういつも通りでしたが、  
わたしへの返事は意外にも、

「そうか、判つた」  
と言つて、なんとあっさりと了承しました！

そして、この後間宮さんは一言だけ、  
「じゃあな」

と言ひ残して、わたしが驚いているうちに、  
去っていきました。

どうして、そんなに簡単に認めたの!?

こつちから、言い出しておきながら、  
それが、まったく理解出来ません……

これって、ある意味、間宮さんからの、

クリスマスプレゼント？

でも、とりあえず、次の勝負に応じたから、  
当面の危機は去りました。

問題は、次の勝負を何にするかです。

今日は、バイトもないので、  
家に帰ってから、色々と考えてみましたが、  
運動でも、勉強でも負けてしまったら、  
忍さんの言っていた通りで、  
まだ負けたばかりのせいもあって、  
何を持ち出しても、勝てないような気がしてしまいます。

何にするにしても、この冬休みの間、  
選んだ競技を、出来るだけ練習したいから、  
少しでも早く決めないと、いけないんですが、  
何にも良いのが浮かびません。

それと、間宮さんの何ともいえない、あの表情、  
とても気になります……

12月25日 かなからの予期せぬプレゼント

今日は、クリスマスですけども、  
わたしにはあんまり関係がなくて、  
朝から丸1日、航海堂でバイトでした。



たしか、去年もこんなだったような気がする、  
それで忍さんに、からかわれていた気がする。

でもそういう意味だと、まだ去年の方が、  
少しは、良かったかも知れません。

今年は、何にも予定がないことに加えて、  
間宮さんとの勝負に負けて、  
落ち込んでいるのも、ありますから。

夕方に顔を出した忍さんは、忙しそうだったから、  
勝負の結果だけ、伝えておきました。

バイトも終わって、スーパーに寄って、  
買い物をした時、クリスマスなんだから、  
せめてケーキくらいは食べたいな、  
と思って、ショートケーキも買いました。

家に帰ると、ポストの中に、  
かなからの封筒が入っていました。

去年は小包が来たけど、今年はなんだろう？

わたしは家に入って、夕食とケーキを一人で食べた後に、  
かなからの封筒を、開けてみました。

中には手紙と、見慣れないクレジットカードみたいな、  
わたしの顔写真とか、名前が入ってるカードが1枚と、  
プチプチに包まれた携帯と充電器でした。

「メリークリスマス、みなも

今年のプレゼントは、あたしが1年以上かけて、作り上げたギルドの、メンバー証と、緊急連絡用のケータイを送るね。

今月からギルドでも、かなり出遅れちゃったけど、暗黒女王に繋がるグループの、風高狩りに対抗して、こっちも女王狩りをするグループが、活動を始めたんだ。

もうどっかで、聞いてるかも知れないけど、うちのチームは、『白刃』<sup>はくじん</sup>って言って、表向きは、カラーギャングみたいに、白をチームカラーにしてるんだ。これは、誰かさんに対する皮肉なんだよ。

同封したケータイは、街に出ている白刃のメンバーに、場所を知らせることが出来るから、いつも、持っているようにしてね。で、襲われた時には、ボタン1つで、登録されているメアドに、メールが送信されて、各メンバーに居場所が伝わるようになってる。

同封しているメンバー証は、仮のものだけど、それを見せれば、白刃のメンバーなら、あんまりおかしなのじゃない限り、指示に従ってくれるようになってる。みなもが、何かをしようとする時、どうしても助けが欲しければ、これを使って。

でも、注意して欲しいのは、白刃のメンバーは、そんなに数が多くないから、必ず、すぐに助けが来る保証もないし、来るのが間に合っても、相手に勝てる保証もない。そこだけは、忘れないで。

それから、間宮って子の件だけど、みなもの言う通りに、引き続き、こつちからは、手を出さないようにしてる。スカルヘッドとして、足がつかない限り、この子のことは、あたし預かりにしているから、後はみなものに任せるよ。

みなも、何をするにしても、色々と気をつけてね。

かなサンタより」

かなはギルドを使って、暗黒女王と、戦うつもりみたいです。

テレビのニュースで言っていたのは、多分、白刃のことだ。

テレビって、意外と適当なことを言っているんだなあ。

それとも、かなたちギルドがうまいこと、暗黒女王を混乱させるような、噂とかを、仕込んでいるのかな。

わたしはかなへ、お礼のメール返してから、手紙の内容を、改めて考えていました。

かなのおかげで、間宮さんへの追求は止められるけど、風高狩りをしている、スカルヘッドとしては、ターゲットとして狙われる、と言うこと、か。

今でもリーダーとして、常に呼び出されているなら、白刃とスカルヘッドがぶつかるのも、十分ありうると思える……

その時、スカルヘッドの目的が、白刃を倒せと、命令されていれば、きっと間宮さんは、攻撃するだろうな、きっと。

門塾さんたちからの脅迫は、時間が経てば、なくなるようなものではないだろうから、間宮さんの状況が、変らない限りは、命令には逆らわない、と思う。

後はもう、かなたちには悪いけど、間宮さんが捕まらないことを、祈るだけです。

でも出来れば、白刃とスカルヘッドがぶつかる前に、わたしが、間宮さんとの勝負に勝って、間宮さんの秘密を全て知った上で、それを解決させたい、と思います。

まだ、どうしたらそんなことが出来るのか、全然判らないけれど……

12月29日 目標達成しました！

バイトと護身術の特訓の合間に、  
コツコツと描いていた、2枚目の絵が、  
やっと昨日完成しました！

前に忍さんから、指摘されたところを反映しつつ、  
わたしの考えとは、合わないところはそのまま、  
我ながら、思った通りの雰囲気が出せたと思います。

忍さんは、夕方までお店にいたので、  
お昼休みに、前に行ったイタリアンのレストランで、  
一緒にお昼を食べながら、見てもらいました。

間宮さんのことも、相談したかったけど、  
今日はあんまり、時間もなかったから、  
絵を見せるだけにしました。

忍さんは、大盛りのパスタを注文した後、  
熱心にわたしの絵を見ていて、  
料理が来ても、気がつかない様子で、  
わたしの絵をずっと見ていました。

何回呼んでも、反応しないので、  
手を伸ばして、目の前に出したら、  
やっと我に返ってくれました。

「あ、あれっ、もう料理来てたんだ。  
いつの間にな？」

なんて、寝惚けたことを言っていたから、  
10分前くらいです、と答えると、

「本当に!？」

気がつかなかったよ、ははははは  
って、笑っていました。

忍さんは、絵のことになったら、

こんなに周りが見えなくなっちゃうのか。

すごい集中力だ……

「かなり、指示したところを吸収してくれたみたいだね、  
ゆっくり見たいからさ、これ、また預かっていい？」

と、忍さんから言われて、わたしは、どうぞと答えると、  
「じゃあ、預かるね。」

多分、来年の下旬には返せると思う」

と忍さんは言いながら、クロッキー帳を脇に置いて、  
時計を見た途端に、驚いた顔をして、  
ちよっと冷めかけてるパスタを、  
すごい勢いで食べていました。

こうして今日は、忍さんに、

新しい絵を、見せることが出来ました。

この絵を、目標通りに忍さんへと見せられて、  
とても良かったです。

それに、また添削してもらえるなんて、

これ以上に、嬉しいことはありません。

戻ってくる時が楽しみです！

12月31日 大晦日

今年も早いもので、もう年の瀬で、  
明日は2011年です。

今年は母の仕事は昨日までで、今日から家にいて、  
おせちは、なつめからお歳暮で贈られてきたから、  
後は母が準備をして、わたしは特に何もせずにいきました。

わたしは何回か、母に手伝うと言ったけど、  
去年は全部やってもらったから、  
今年は、ゆっくりしていいと言われて、  
お言葉に甘えて、御家河へと散歩に行きました。

土手の道を、特に目的もなく、  
河を眺めながら歩いていると、  
いつの間にか、ヒヨウちゃんが、  
土手の阪のところを、わたしについて来ていました。

あ、ごはん、持ってくれば良かったな……

忘れたものは仕方ないので、

一応、ヒヨウちゃんには、通じるとは思えないけど、  
ゴメン、と謝っておきました。

いかにも雲って感じの形をした、雲が漂う空を見ながら、わたしは、色々と最近の出来事を、思い返していました。

なんか、色々やり残している気がする。

護身術の方は、座学は完了したけど、実技の方が、運動神経がなくて大変で、同じ回の講習を、何回も受けていて、なかなか終わりません。

特別講習は、能都さんは相変わらず怖いです。

だけど、前は足に力も入らず、立っていらなくなってしまったけど、今では、立ってはいられるようになってきたから、ちよつとずつは、慣れてきている気がします。

かなや、なつめには、ずっとお世話になりっぱなしで、結局、お返しする方法も浮かばないまま、どンドン、借りが増えてる気がするなあ。

これは、何か来年返さなくちゃいけないな。

そういえば、かなは今年、家族旅行とかは、してないみたいです。

ギルドの関係で、忙しいのかも知れない。

やっぱり一番の問題は、間宮さんとの対決です。



ああ、間宮さんとの決闘の次の種目、どうしよう。

これは遅くても、冬休み中には決めないと……

早くしないといけないって、気がするんだけど、未だに、勝てるものが浮かびません。

成績の勝負の時に見た、間宮さんの表情、あれは、今まで見たことない顔だった。

多分あれが、間宮さんの本当の顔なんじゃないか、そう、思っています。

あの時、間宮さんがどう思っていたのか、それは、はっきりとは判らないけど、少なくとも、あの時の表情は、クラスにいる時のような、作った顔じゃなくて、素顔が出ていたんだって、思います。

やっぱり、どんなに強くなったって、人は1人だと心細かったり、弱気になったり、寂しかったりすると思うんです。

間宮さんはそれを、ずっと我慢して生きてきた。

周りには、誰も頼れる人もいなかったから。

わたしの直感ですけど、間宮さんは、自分が認められる相手に、負けたいんだと、

思っています。

そして、出来ることなら、その相手を頼りたい、そう考えているんじゃないかって思います。

でもそれは、間宮さんが全力で挑んで、それでも負けて、なおかつその負けた相手は、間宮さんに、信頼されてないといけません。

だからこの役は、門塾さんみたいに弱みを握って、脅してくるような相手じゃ、信頼出来ないし、慕っている立場の、葵ちゃんでは出来ないし、陸上部には、間宮さんを超える人は、いなかったんじゃないかと思う。

わたしは、間宮さんに信頼されているのか、という点では、絶対の自信はないけど、今、一番条件の近い相手になっている、はず。

今のわたしに、決定的に足りないのは、間宮さんを負かす力、だと思う。

だから、どうにかして、勝てる勝負をしないとイケないんです。

明日、神社にお参りに行ったら、名案が浮かぶように、お願いすることにします。

まだまだ色々ありそうだけど、来年には、みんな解決させたい、です……

それでは、良いお年を！

2011年 1月 その1(前書き)

変更履歴

2011/03/24	誤記修正	右の子宮	右の卵巣
2011/04/25	記述統一	1ヶ所、二ヶ月、二ヶ月	
1ヶ所、2ヶ月、3ヶ月			
2011/06/21	誤植修正	始め	初め
2011/08/19	誤植修正	例え	たとえ
2011/08/22	誤植修正	間に合わってなくて	間に
合ってなくて			
2011/09/13	誤植修正	確立	確率

2011年 1月 その1

1月1日 初詣

新年あけまして、おめでとございます。

今年も去年と同じで、なつめから送られてきた、豪華なおせちと、母が作った普通のお雑煮を食べながら、お正月にやっているテレビとしては定番の、お笑い番組を見ていました。

普段はあんまり、テレビを見ていないから、出ている芸人の人たちが、良く判りません。

午前中に年賀状が届いたので、確認すると、わたし宛に、おじさん夫婦と、巴ちゃんと恵ちゃんと、忍さんから来ていました。

忍さん、去年は凝ったアートっぽいのだっただけ、今年はがらっと変って鉛筆の写実画で、空の絵でした。

さすが、忍さん、上手いなあ……

と思って見ていたら、母が忍さんの年賀状を見て、とても驚いていました。

どうしたの、と尋ねてみると、この忍さんが描いた絵は、昔父が若い時にコンクールに出して、特別賞になった絵なんだと、教えてもらいました。

忍さんは、どこかで父の絵を見つけて、それを模写したみたいです。

今度、航海堂で会った時に、色々聞いてみよう。

かなからは、夜寝ている間にメールが来ていました。

メールには、

「今年の抱負は、悲願の2人で旅行だよ！

行きたいところ、考えといてね！」

と、書いてありました。

かな、ギルドの方はもうすぐ落ち着くのかなあ、

その頃までには、わたしも色々と、

終わらせとかないと、いけないな……

なつめからは、メールも年賀状も来ていなかったけど、多分、近いうちにエアメールが届くんだろうな。

お昼に、おせちと焼いたお餅を食べた後

いつもテストがピンチの時だけ通っていた、

近所の小さな神社へと、母と一緒に初詣に行きました。

そこでわたしは、神様に、

どうか間宮さんの勝負の、名案を授けて下さい、

と、お願いした後に、その勝負に勝てますように、

と、お願いしておきました。

帰りに、神社の前の大通りへと言ってみると、

色々な屋台が出ていました。

わたしは小さい頃、金魚すくいが得意で、お祭りに行くたびに、金魚を取ってきたんだけど、いつもすぐに死んでしまつて、

そのうち、それがかわいそうに思えて、いつの頃からか、やらなくなつてしまいました。

それを、金魚すくいの屋台を見て、ふと思ひ出して、立ち止まつて見ていました。

脇の方をみると、そこは射的の屋台でした。

景品は男の子向けのゲームとか、何かのカードとかで、最近はこのというのが景品なんだなあ、

と、自分もけっこう若いはずなんだけど、

なぜかジエネレーションギャップを感じていたら、

その中に場違いっぽく、ボードゲームが置いてありました。

それはオセロ盤で、今どきこれやる人いるのかなあ、と、思いつつ見ていると、母がそれに気づいて、

昔はお父さんとよくやっていたね、と言われて、

そんな記憶は全然なかったので、かなり驚きました。

それを覚えてないと母に伝えると、母は、

父の容態が良くない時は、いつも横になっている父と、オセロしていたじゃない、と言われましたが、

そうだったっけかなあ、と言う感じで、

ちっとも思ひ出せません。

母の話では、幼稚園のわたしは、  
父よりも強かったと言っているのですが、  
それはどう考えても、  
父が、手加減してくれたんだらうなって、  
思いました。

そうして、母とまた昔の話をしながら、  
神社から帰ってきました。

家に帰ってから、間宮さんの勝負のことを考えていて、  
さっきのオセロのことを、思い出したんです。

試しにやってみようと思って、

普段は、全くと言って良いほど使わない、  
携帯のゲームサイトから、リバーシを見つけて来ました。

さっそくやってみると、意外とコンピュータが弱くて、  
かなりの圧勝でした。

もっとコンピュータが強いのを探して、  
最強のリバーシって、書いてあるのが見つかったから、  
それも何回かやってみたら、やっぱりそんなに強くなって、  
全戦圧勝で、中にはコンピュータのコマを全部取るのも、  
出来ました！

もしかして、わたしってオセロ強いのかも……

これはきつと、神様からのお告げに違いない！

よし、次の対戦は、オセロで行こう！



勝負の日は、バイトもない月末の日曜を選んで、30日にしました。

わたしは早速、間宮さんへと次の勝負はオセロだと、メールで伝えようとして、送信する直前に、メール本分の最初に、あけましておめでとう、を追加してから、送信しました。

さすがに、今年も宜しく、とは書けません。

夕食の、おせちとお雑煮を食べてから、携帯を見てみると、間宮さんからの返事が来ていて、やっぱり一行で、

「判った」  
だけでした。

間宮さんのメールって、榊さんの話し方と、似てるよなあ、すごく短いつてところが。

なんて、思っていたら、間宮さんからまた返信が来て、何か条件でも追加してきたのか、と思って開いて見たら、  
「>判った

あけましておめでとう」  
と言う文面でした。

間宮さん、新年の挨拶をつけ忘れて、それを追加してきたのか……

やっぱり、間宮さんは、本当は良い人に違いない。

わたしは、そう思いました。

きつと次こそは、間宮さんを倒して、  
今年の抱負を叶えます！

1月4日 航海堂へ初出勤

今日は、新年初の航海堂への出勤です。

バイトの方は、新年になったからと言っても、  
わたしのやる仕事は変わらないので、  
去年と同じように、がんばるだけです！

忍さんは、午前中はお店にいたので、  
わたしはお昼休みに、事務室で、  
おにぎりをくわえていた忍さんに、  
年賀状の絵のことを、聞きました。

そしたら忍さんは、脇に置いてあったカバンから、  
古い雑誌を取り出して、わたしに渡しながら、  
「むんんんむんんんんんんん」  
と、うなっていました。

これは多分、

「付箋のあるページを見てごらん」  
と、言ったと判断して、

渡された雑誌を、見てみました。

この雑誌は、美術雑誌の月刊誌で、  
絵画コンクールが特集されていて、  
付箋のページを開いて、見て見ると、  
受賞作品の記事が載っていました。

その受賞作の中の、審査員特別賞に、

『東京芸術大学一年 絵画科 三崎 了』  
と書かれていて、その受賞作品の、  
『穹<sup>そら</sup>』の絵が載っていました。

その絵は鉛筆で、描かれたモノクロの空が、  
額縁に広々と描かれていて、

下の方には、少しだけ山も描かれていたけど、  
それは絵の上下を、判るようにする程度のもので、  
この絵の主演は空と雲でした。

その写真は、そんなに大きくもないから、  
詳細までは見えないけど、何となく……

「……似てるよね、それ。」

みなもちゃんの絵と。

っていうか、そっくりだよ」

やっと、おにぎりを飲み込んだ忍さんが、  
わたしへと、そう言いました。

この後、忍さんは、

自分が中学時代に見た絵を、ずっと探していたけど、  
何の情報もないから、諦めていたところ、

わたしの絵を見て、昔見た絵は父の絵だったのでは、  
と考えて、父の絵の情報を探して、  
やっと、掲載していた記事を見つけたと、  
教えてくれました。

忍さんは、わたしに、

「今はまだ、この記事と写真だけだけど、  
必ず、本物の絵を手に入れてみせるから、  
楽しみに待っていてね。」

多分、春くらいには、何とかなるかもよ？  
と言ってくれました。

わたしは、その忍さんの言葉が嬉しくて、  
思わず、新年早々、大泣きしてしまいました。

忍さんはそんなわたしを見て、苦笑しなから、  
わたしの頭をなでていました。

でも、本当に嬉しかったんだから、仕方ないんです。

家には、父の描いた絵は残っていないから、  
父の絵をわたしは、知りません。

見たくても、もう見れないんだって、  
ずっと諦めていたものだったから、  
だから、すごく、嬉しくて……

わたしは、しばらくして落ち着いてから、  
忍さんは、ちょっと真面目な顔になって、  
「今、私が預かっている絵なんだけど、

どうしようか。

前の時は、私の感覚で添削したけど、  
今回は、それがあるから、

その画風に近づくように、

指摘も出来なくもないけど、どうする？」  
と聞かれました。

わたしは鼻をすすりながら、ちょっと考えて、  
忍さんへ、今まで通りの忍さんの添削でと、  
お願いしました。

わたしにとって、父は大好きな人で、  
絵にしても、尊敬出来るのは判ったけど、  
それを模写する気は、わたしにはありません。

父の描いた絵が、小さい頃の忍さんの心をつかんだのは、  
自分の描きたいものを、そのまま描いたからだと思います。

だったら、わたしも良い所は吸収すべきだけど、  
模写するのでは、わたしの描きたいものではなくってしまつ、  
そう思うんです。

だから今は、忍さんに技術的なことを教えてもらいながら、  
自分の描き表したいように、絵を描いていたいんです。

この答えは、忍さんには意外だったようで、  
ちょっと戸惑っていたけど、

「みなもちゃんが、そう言うなら」

とこのことで、添削の方はもうちょっと待って欲しい、  
と告げられました。

この後に、間宮さんとの勝負を、オセロに決めたことを伝えると、

「へえ、オセロ、そろまた随分と懐かしいものにしたねえ」と言っつて、何かを考えている様子でした。

こうしてお昼休みは終わって、この日の午後は、忍さんからの、思わぬプレゼントもあって、いつもの倍、がんばって仕事しました。

他のスタッフの人たちは、新年早々、飛ばしているわたしを見て、驚いていました。

わたしにとって、この日の出来事は、そのくらいしても、まだ全然足りなくくらい、嬉しい出来事でした。

忍さんにも、色々してもらっていて、もう、お礼しきれないくらいな気がします。

とても嬉しいけれど、お礼をどうすればいいのか、それが、嬉しい悩みになりそうです……

1月7日 なつめの手紙と容態

今日も1日、航海堂でバイトでした。

今週は、忍さんもけっこう出ていたので、  
来ている時は、お昼は一緒に食べていました。

場所は更衣室で、お弁当を、連日です。

なぜ、イタリアン好きな忍さんが、  
お気に入りのレストランに行かずに、  
コンビニのお弁当が毎日なのか、と言うと、  
わたしが次の勝負を、オセロにしたと伝えた次の日、  
忍さんは、オセロ盤をここに持ってきたんです。

んでもって、休み時間に時間があれば、  
わたしと、オセロやってるからなんです。

勝敗は、携帯のゲームのようにはいかず、  
今のところ、五分五分といったところですね。

多分ですけど、忍さんは感性与行動力はすごいけど、  
こういう、論理的な思考と言うのは、  
そんなに、得意じゃないみたいです。

時々、から揚げをつかんだ箸が宙で止まって、  
固まったかと思うと、コマを置こうと思ったマスに、  
から揚げを置こうとしたり、手にしていたオセロのコマを、  
間違っって食べようとしたりして、  
意外と不器用っぽくて、ちょっとかわいいです。

忍さん曰く、

「みなもちゃん、意外と強いよ。」

私だって、最初は正直なめてたんだけど、

今は、本気でやっってるもん」

とのこと、どうやらわたしは、自信を持って、いいみたいです。

バイトが終わって、家に帰ると、

なつめからのエメールが届いていました。

わたしは早速、手紙を開けてみると、

もうお馴染みの、3人並んでいる写真と、

数枚の便箋が入っていました。

写真を見ると、今回なつめは前回と変わらずなんですが、

柗さんは、一瞬誰か判らないくらい、

変わり果てた姿になっていました。

一言で言うと、南国の密売人です。

焼けた肌に茶髪で、胡散臭い感じのサングラス姿です。

なつめ、これは、ひどいよ……

ぬいぐるみのミナモは、ある意味、

前よりは、良くなったのかも知れない。

ミナモは、柔道の胴着みたいなのを着ていて、

体の包帯は、それに隠れてあんまり見えません。

さらに頭には、白いニット帽を被っていて、

これはもしかして、頭を割られたとか、

耳が取れたとか、そう言うのを隠す為？



服を着たから、一見よくなったように見えたけど、直せない致命的な傷を、隠しているような気もする。

ミナモ、無事に帰国出来るかなあ……

その後わたしは、便箋を読みました。

「親愛なる危機一髪のみなもへ

新年、明けまして、おめでとーございます。

去年は色々とお世話になりました。

本年もみなもにとつて、良い年になるように、心より願っております。

でもよく考えてみると、どちらかと言うと私の方が、たくさん、たくさん、お世話したような気がします。

だから、今年は帰国したら、その貸しをしっかりと、返して頂きますから、覚悟しておいて下さい。

多分、私が日本に戻るまで、貸しは増やし続けますから、多重債務者としての自覚と覚悟を持って、私を迎えて下さいね。

さて、冗談はこの辺にして、もらった返事の内容だと、なかなか大変な事になっているみたいで、

柵に用意させたプレゼントが、

すぐにでも役立ちそうなのが、良く判りました。

今頃は、状況が好転していれば良いのですが、

それは門塾がいなくならない限り、改善されないでしょうから、修羅場の中を、頑張っているのでしょうね。今の門塾は、傍から見ているので、度を越えていると思います。門塾の件は、私でも出来る事があれば、それなりに動いてみようと思っています。

それにしても、みなも、また随分と、物騒な相手に入れ込んでますね。その、厄介そうな相手を構いたがる性格は、みなものの中では、長所なのかも知れませんが、ほどほどにして下さい。

相手の事を考える前に、まずは、自分の身の安全を、優先すべきです。と言っても、頑固な貴方は聞かないんでしょうけど。その間宮って子の事、みなもとは違う意味で、すごく気になります。

私は当時意識がなかったから、記憶には無いのだけど、ケイゴって人に、また助けられたのは本当なんですか？それが偶然だとすると、奇跡的な確率だと思います。だからそれは、2人の運命ですね！なんて、全く思いませんからね、私は。なんかそれ、とても引っかけります。逆に、門塾の罠とかの可能性はないのですか？みなも、何か思い当たる節はないのですか？

そういえば、先月に榊に連絡したんですね、今、榊はイメージチェンジの最中で、

とても不機嫌ですから、また連絡するならば、  
気をつけた方がいいです。

もう、何が良いのか判らなくて、  
とりあえず、今の状態から変えているんだけれど、  
どれも、いまいちですね。

これなら、まだ髭の方が良かったような気がしています。  
このままだと、神の不満が爆発しそうなので、  
みなも、とにかく意見を出して下さい。

今私は、投げ技のトレーニング中で、  
ミナモの腕や耳が、引きちぎれるのを防ぐ為、  
神がミナモに胴着を着せました。

で、投げていると今度は、頭から色んな所にぶつかって、  
変形してしまい、帽子を被っています。

この治療が終わって退院したら、  
ミナモは修理に出す予定です。

神からの伝言で、前に送った道具について、  
使い方に不明な点があれば、  
神谷に聞いてくれ、だそうです。  
これで意味は判りますか？

最後に、わたしの治療の状況について、  
簡単に書いておきます。  
体の手術痕は、前と変わらないけれど、  
痣は、少しだけ薄らいで来ています。

それと、少し良くない話としては、  
新治療の効果の、発症の抑止が、  
体の全ての部位には、間に合ってなくて、

1ヶ所初期症状が出ているところがあり、  
今、再発しているかの精密検査中です。  
最悪の場合、妊娠は諦めるようにと言われているから、  
再発の可能性があるのは、残っていた右の卵巣みたいです。  
出来れば、女として生まれたのだから、  
将来、自分の子供を生んでみたかったけど、  
今の自分の命には、変えられません。  
その時は、みなもに代理母にでもなってもらおうかな。  
私は実のお母さん以上に、立派に育てて見せます。  
みなもが生んでくれた子だったら、  
私は自分の子として、愛せると思うから。

……なんてね、半分冗談です。

現段階は、まだ再発の可能性は、  
半々だと言われているから、  
そんなに、深刻な状況でもないので、  
あんまり過剰に、心配しないで下さい。  
それに、もし私に何かあれば、  
榊からみなもへ、連絡を入れるようにと、  
伝えてあるから、それが無ければ、私はまだ無事です。

ただ、再発でないとしても、  
新治療の効果が間に合わないとなると、一時的にでも、  
前の投薬治療に、戻す事になるかも知れません。  
そうになると、あれは精神的にかなりきついで、  
出来ればそれは、避けたいのですけどね。

私だって、ずっと強がるだけじゃなくて、  
本当に泣きたい時には、ちゃんと弱音を吐きますから。

だからみなもは、まずは自分の事を頑張ってください。  
私が頼りたい時に、みなもに余裕がないと、  
本当に困るんですよ。  
来月は、みなも私も、良い結果になったと、  
書ける事を祈ります。

それでは、お返事待ってます。

かしこ

2011年1月1日

仁科 棗

追伸

この手紙を読んで、また泣いてんじゃないの？  
その涙は、再会の時に取っておいてよね！

なつめに言われた通り、わたしは手紙を読んだ後、  
涙と鼻水で、大変なことになっていました。

だって、あんなことが書いてあれば、  
心配になるに、決まってるじゃないか！

なつめ……

本当に、大丈夫、なのかな……

なつめの携帯に、連絡、してみようかな。

榊さんなら、繋がる、かな。

でも、そういうことをするなっていう意味で、心配するなって、書いてあるんだろっし、榊さんからも、連絡はないから、多分、大丈夫なんだと思うけど……

でも、心配だし、不安、です……

今年は新年始まって早々、泣いてばかりです。

最後の内容のせいで、すっかり頭から飛んでしまったので、わたしは、気持ちを落ち着かせてから、もう一度、病状の手前までを手紙を読み直しました。

なつめ、門埜さんに対して、何をする気なんだろう、それと、間宮さんやケイゴさんのこと、かなり怪しいって、思っているみたいだなあ。

なつめはちょっと、人間不信だと思う、わたしの人を見る目を、信じてないもん。

ミナモは、無事に入院出来るまで、耐えられるか、怪しいかも知れない。

あの榊さんが、わたしに頼んできたのは、今にして思えば、大変なことだったんだって、やっと理解出来ました。

あのままじゃ、きっと榊さんが、精神的にもたない、と思う。

だからもう、はっきりと言おう、  
榊さんには、何もしないのが一番だって。

わたしは、手紙の返事に、

間宮さんとの試験対決で、1点差で負けたことや

神谷さんの、護身術教室のことや、

かなの作った、ギルドのことや、

忍さんに見てもらった絵や、父の絵のことや、

お歳暮の、おせちのお礼の他に、

この手紙の感想も、書き足しておきました。

手紙の返事を書いているうちに、

久しぶりに、なつめの声が聞きたい、

そう思いました。

まさか治療のせいで、声が出なくなってるとか、

手紙には書いてないから、大丈夫だと思っただけど、

どうなんだろう。

わたしは返事の最後に、追伸で、

出来れば、声が聞きたいから、

わたしの携帯に連絡下さい、

って書いておきました。

心配するなって言うなら、

元気な声くらい、聞かせてよ、なつめ……

1月9日 修行完了！

今日でやっと、護身術教室の実技が、  
全て終了しました。

本当は座学も実技もそれぞれ、全8回の講習なんだけど、  
わたしは実技の講習を、  
倍くらい受けているような気がします。

でも時間の取れる、冬休みの間に終了出来て、  
ひと安心です。

模擬演習も、今年になってからは、  
色んなパターンでの、トレーニングと言う名の、  
わたしが泣くまで続く、罰ゲームみたいでした。

能都さんは、素性が知れば納得の名演技で、  
どう考えても、DSに違いないって思いました。

この人、攻撃している最中は、  
演習の1つとして、わたしに対して、  
脅すような大声で、ずっと怒鳴っていて、  
過去の本当に絡まれた、どの時よりも、  
能都さんが、一番怖いんです。

そんなひどい目に遭っているそばで、  
神谷さんと言うと、  
にこやかに微笑んで見守っていて、  
わたしの限界を判断して、  
能都さんの趣味が暴走しないように、



たしなめていました。

わたしとしては、神谷さんに助けを求めるように、演習の途中で、何度も目で訴えるのですが、

神谷さんは、とても穏やかな表情のまま、

「三崎さん、もうちょっと頑張ってみて」とか、

「大丈夫、大丈夫、そんなに怖くないから」とか言って、ちっとも助けてくれなくて、本当に、辛い修行でした。

でも、神谷さんが終了の合図をすると、能都さんは一瞬で、最初に見たキャラに戻って、

「はい、三崎さん、お疲れ様でしたー、

大丈夫ですかー？」

と、間の抜けた口調に戻るんです。

でもこの時はいつも、わたしは必ず泣いていて、そんな裏表のある能都さんの、

表の顔を見ると、終わったと思って、

気が緩んでまい、また泣いてしまっていました。

だからわたしは、模擬演習中は、

なんだかんだで、泣きっぱなしでした。

それを見かねてなのか、いつも講習が終わると、神谷さんから、スポーツドリンクを手渡されて、

「これを飲み終わったら、講習は終了ですから、

ちゃんと飲んでいって下さいね」

と言われていました。

もしかして、脱水症状防止？

でも、この修行おかげで、わたしは、怖気づいてしまつて、パニックになつてしまふのや、声も出なくて、動けなくなる癖は、だいぶ克服出来ました。

この演習では、ヘッドギアとプロテクターを着て、もちろん手加減はしてくれてるんだろうけど、本当に、能都さんに殴られたり、蹴られたり、投げ飛ばされたりしていました。

それも、叩かれるのは、上半身、主に顔面をです。

最初は見てもいられなくて、目をつぶつて、立ち尽くしていることしか出来なかつたけど、何度かやっているうちに、目を開けて、見ていられるようになって、そのうちに、少しは避けるように動くのも、ちよつとただけだけど、出来るようになりました。

とは言つても、ど真ん中に拳が当たるのを、ずらす程度で、やっぱり殴られてるんだけど、それでも、神谷さんには、

「敵の思つた場所に、当てさせないだけでも、致命的な一撃を回避するのに、つながりますから、立派な進歩ですよ」

と、言つてもらえたので、良かったです。

それから、榊さんからもらった道具についても、模擬演習の時に至心館へ、持って行って、神谷さんたちに、使い方を教えてもらいました。

神谷さんは、わたしがあんな物騒なものを見せても、全く驚く様子もなくて、いつも通りでしたが、能都さんは、どうもああいうのが好きみたいで、目をキラキラさせて、とても楽しそうな様子で、道具を見ていました。

道具の練習でも、いくつかは実際に試してみました。

スタンガンの警棒は、見た目も派手で、金属の棒だから、なかなか強力で、後ろさえ取られなければ、人数が多くても、これなら対抗出来そうです。

問題は、いかに素早く取り出して伸ばすか、これがちよつと難しいです。

ちなみに、スタンガンの電撃の威力ですけど、あの、おっかない能都さんが、悲鳴を上げて逃げ出すくらいだから、十分、強力みたいです。

防弾防刀シャツとかパーカーは、実際に着て、動いたり、手加減してもらって、攻撃されてみたところ、多少は、打撃も防いでくれるみたいだから、とりあえず、着ておこうかな、と思っています。

レーザーフラッシュライトは、  
これ本当にレーザーの光を当てた物が、  
5秒もしないうちに煙が上がって、燃え出しました！

これも、能都さんが体を張って試してみると、  
距離は5mくらいから届いて、  
素肌を当てている状態では、  
2mまで近づくのも、無理なのが判りました。

能都さんは、腕に出来たやけどの痕を見て、  
痛いはずなのに、妙に懐かしそうにしていました。

根性焼きの思い出でも、あるのかなあ……

これは、目じゃなくて、肌の見えているところなら、  
すぐく効果的な道具だけど、  
今は冬なので、普通は厚着しているから、  
服で阻まれてしまって、効果は思ったほど、  
期待できないかも知れない。

クボタンは、その威力の確認に、  
またしても、能都さんがやられ役になってくれて、  
けっこう非力なわたしの攻撃でも、  
これを握って突きを入れたり、握って突き立てるようにして、  
手を振り下ろすと、かなりの威力にはなりました。

でも、その一撃を耐えられてしまえば、  
逆に間合いの短い武器なので、  
取り押さえられてしまう危険が高くて、

あまり、安全に闘えるものでもないって言うのが、わたしの感想です。

催涙スプレーと、スタングレネードは、さすがに室内では危ないだろう、と言うことで、実際には、使わなかったけど、使い方と、使う時の練習だけはしておきました。

こうして、至心館でのわたしの修行は、なんとか無事に、終わりました。

わたしは頭を下げ、神谷さんと能都さんに、お礼を言うと、神谷さんからは、

「また何かあれば、いつでも連絡して下さいね」と言ってもらい、能都さんからは、

「いえいえー、とんでもないです。

こちらこそ、昔を思い出して、

とつても楽しかったですからー」

と言って、笑顔になっていました。

最後に神谷さんから、一言注意があつて、

「これらの道具は、どれも進んで相手を倒すのには、向いている武器ではありません。

敵が、これらを所持しているのを知らないからこそ、有効なものが多いです。

なので、能都君のダメージの受け具合を見ても、決して過信せずに、

率先して自分から挑むようなことは、謹んで下さい。

たとえその時は、相手を倒せたとしても、

それで、完全な勝利になるはずはなく、

必ず報復されると、覚悟して下さい。

そして、その時にはもう、相手は用心していて、同じ手は通用しませんから、結果的により不利な襲撃を、自ら招く事にもつながりますので」

と、釘を刺されて、更に能都さんから、

「そうですねー、もう僕なら、

三崎さんの、手の内はわかっているから、

絶対に、倒せる自信がありまーす」

と言って、ニコニコしていました。

ちょっとだけ、これを使えばもう勝てるかもって、思っていたのもあって、わたしは2人のその言葉をきいて、自分の考えが、早速間違っていたのに気づかされました。

「あくまでこれらは、いざという時に、

初めて使う事に、その効果が発揮されます。

三崎さんは、これらを所有している事によって、緊急事態でも、精神的なゆとりを生み出すのに、有効なものとなるのが、一番の効果なんです。それを、しっかりと理解して置いて下さいね」

使った時の、威力ではなくて、

使えると思うことで、心の余裕を持つ、かあ……

神谷さんの言葉に、わたしはとても納得して、判りました、と返事をした後、

もう一度、お礼を伝えてから挨拶して、至心館を後にしました。

もう今度は、襲われても、今までみたいに、

何も出来ずにやられたりしない。

それに、学校でも門塾さんたちを、怖がったりしない！

いざとなったら、戦えばいいんだから！

っていう気持ちでいれば、あの人たちにも、

脅されたり、苛められたり、言いなりになったりしないで、  
対抗出来るだろうか……

スカルヘッドや、別の暗黒女王のグループに襲われても、  
腰砕けにならずにがんばって、抵抗出来るだろうか……

これはもう、実際になってみないと判らないけど、  
でも前と同じようには、ならないはずです！

あとは、気合です！

2011年 1月 その2(前書き)

変更履歴

2011/03/21	記述統一	葵の一人称	あたし	わたし
2011/03/21	記述修正	携帯	ケータイ	
2011/04/09	記述統一	1学期、2学期、3学期		
一学期、二学期、三学期				
2011/04/13	記述統一	1年生、(中学)2年、高校3		
年 1年生、二年、高校三年				
2011/04/25	記述統一	1ヶ所、二ヶ月、二ヶ月		
1ヶ所、2ヶ月、3ヶ月				



2011年 1月 その2

1月11日 始業式

今日は、三学期の初日で始業式でした。

冬休みの間にも、色々イベントはあったけど、学校でも、悪い意味で色々ありそうです。

もう恒例となつてしまった、月の初めのターゲット発表、それが、今日もあつたんです。

黒板に書かれていたのは、

『次はジミな奴』  
でした……

クラスの人たちは、このイベントを楽しそうに話している、観客気分の人たちと、ターゲットにされる人たちとで、やっぱり雰囲気は、二分していました。

これは、とうとう、来た、かも……

でも、去年までのわたしとは違いますから、もし、ターゲットにされたとしても、黙ってやられはしません！

……の、つもりです。

修行は、無駄じゃなかったはずだから、

何も出来なくなることは、ないと思う。

だけど、演習は相手が能都さんって、決まっていたから、わたしが何をしても、この人なら大丈夫って言う、状況があつたから、全力で反撃できた気がする。

そう言う意味だと、外で襲われた時なら、必死になって、抵抗出来るかも知れないけど、たとえ、ひどい人たちだと分かっても、同じクラスの人には、やっぱり手は出しづらい……

神谷さんも、ああ言っていたしなあ。

とにかく、ターゲットにされた時、どう抵抗するかは考えよう。

今は、そう思いました。

この日は朝のHRで、なんだか去年よりやつれたような、鈴木先生が、さらにイベントを追加したんです。

先生は、暗い顔をしながら、クラス委員長の男子が、今学期から、体調不良で休学したと、話しました。

そこで、二学期も実質的には1人でやっていた、間宮さんを委員長として、来週のLHRで、男子の副委員長の選挙をすると、言いました。

ああ、委員長もとうとう……

これで、門塾さんに縛られている間宮さんが、  
クラス委員長になって、

まあ、前までもほとんど言いなりだったけど、  
あれでも委員長は、取り巻きではなかったから、  
ついに名実共に、このクラスは、

門塾さんの支配が、強固になった気がします。

多分門塾さんは、男子の副委員長に、

自分の取り巻きの人を、立候補させて、  
完全に、門塾さんの思うままにするんだろうな。

それでいて、自分は表には出てこないで、  
常に裏から操り続けて、問題が起きれば、  
表に立てた人を入れ替える。

まるで、どっかの政治家みたいなことをしている。

やっぱり、悪い人の行き着くところは、  
黒幕ってことなのかも知れない……

出来ることなら、副委員長は取り巻きじゃない人に、  
するべきだと思うけど、その為の方法が浮かばない。

わたしには、このクラスで味方になってくれる人は、  
誰もいません。

みんな、門塾さんに従っているか、

中立だけど、逆らわないようにしているか、

標的にされるのを恐れているだけの、どれかです。

間宮さんくらいしか、対抗出来る人はいなかったのに、  
今ではその間宮さんが、クラスの委員長になって、  
さらに、門塾さんの手先になってしまっている。

これで、わたしがターゲットに選ばれれば、  
わたしにとって、もうこれ以上ないくらいの、  
最悪の状況です。

これを正すには、やっぱり門塾さんたちの支配を、  
何とかするしかなくて、  
それには、心身共に強い人が立ち上がるしかない、  
って思います。

その役は間宮さんしかいないって、思うんです。

だから、やっぱりわたしには、  
何とかして、間宮さんを動かさなくちゃいけない。

どうしても……

1月17日 LHR

今日のLHRでは、先週に予告されていた、  
男子の副委員長の選挙と、  
席替えの実施、の予定でした。

でも、二学期の時と同じで、

鈴木先生が説明した直後、  
席から立ち上がった間宮さんは、鈴木先生に、  
席替えは、クラスの総意として、  
実施を拒否します、と宣言していました。

またも、門塾さんの差し金だと思います。

もう提案でも意見でもなくって、  
ただの拒否です。

鈴木先生は、去年よりも暗い顔を、  
さらに青ざめさせていました。

先生は、この間宮さんの宣言に、  
何も反論出来ず、席替えはなくなりました。

わたしが思うに、鈴木先生は、  
あまり人と、コミュニケーションを取るのが、  
得意ではないと思います。

だからと言って、高校の教師で担任では、  
生徒と会話しなくちゃいけない。

でも苦手だから、出来るだけ関わらないように、  
接点を減らそうとして、あまり話もしないし、  
こっちからの話も聞かない。

何かを言った時に、

何も生徒が言わなければ、そのまま了承で、  
何か反論があれば、すぐに要求を撤回する。

それじゃ、議論にならない。

そうやって、問題に対して向き合わずにいた結果が、多くの生徒の、登校拒否として現れている。

先生も、これだけ自分のクラスの生徒が、登校拒否になっていたら、きつと、問題になっているはず。

こういうのは全部、担任の先生の責任になるんだろうな。

門塾さんみたいな人を、止めるのは、担任の先生の役目だと、思っていたけど、学校もあてには出来ないって言う、かなの話からすると、もしかすると門塾さんは、学校側にも何か、影響力を持っているのかも知れないな。

だから鈴木先生には、どうにも出来ないのも、あるのかも知れない。

そんなことを考えていたら、間宮さんは、壇上へと上がって、副委員長長の選挙の話を、始めていました。

まずは、立候補を募ると、やっぱり、取り巻きの中でも、普段目立たない人が、手を上げました。

いつも一緒にいる、腹心の人たちではなくて、

あんまり重要じゃない人を、出してきたみたいですよ。

もちろん、他に立候補がいるはずもなく、  
10分もしないうちに、副委員長は決定しました。

この時の間宮さんは、特に何も感じていないみたいで、  
いつも通りの無表情でした。

この日はこれ以外には、特に何事も起こらなくて、  
無事に1日が終わりました。

クラスでは確実に、門塾さんの力を強めていて、  
今は誰も、それを止められない。

このまま行くと、一体どうなるんだろう。

これは、たとえばわたしが、あの道具を使って暴れても、  
多分解決しなくって、わたしだけが、  
ここにいらなくなるだけだと、思います。

何もしないでいて、良いとは思わないけど、  
何をしても、止まらないような気がします。

この、門塾さんの支配が……

1月21日 門塾さんからの会話

今月のターゲットが宣言されてから、

2週間が経ちました。

でも未だに、格ゲーも行われなくて、前にターゲットにされた、2人の男子が、登校してくるたびに、苛められています。

だから、ターゲットにされない人たちは、面白いものが見れないと、門塾さんたちがいない時だけ、そんな文句を言っているのを、耳にします。

今回のターゲットは、範囲が広いから、みんな、次は自分なんじゃないかって、思っているのが伝わってきます。

門塾さん、ターゲットにして弄ぶのから、ターゲットにされるかも知れないと、怖がっているのを見て、楽しんでいる、そんな気がしてきます。

それとも、まだわたしが判っていない、何か別の意味が、あるのかも……

最初の頃は、よくそれを考えていたけど、この頃になると、この状態に慣れてきて、もうあまり気にせず、過ごしていたんです。

そしたら、今日のお昼休みに、予想もしなかったことが起きました。

あの門塾さんが、わたしの机の脇を、



前へと歩いて行って、わたしの机に当たったんです。

この時、机の隅に置いていた、  
教科書や文房具なんかが、

門塾さんに当たって、床に落ちました。

この時、門塾さんは、

「あ、ごめんなさい」

と言って、すぐにしゃがんで、

落とした物を、自分で拾い始めたんです。

これには、わたしの周りの人も唖然としていたし、  
あの間宮さんですら、注目していました。

わたしは、予期しないことが起こって、  
どうリアクションして良いのか、分からなくて、  
何も言えずにいると、門塾さんは拾ってくれた物を、  
元通りに並べ直してから、わたしの机に置きました。

「本当にごめんなさい、三崎さん」

門塾さんは、すこし屈んでから、

わたしに顔を近づけて、もう一度謝りました。

わたしは、大丈夫だから気にしないで、  
と、答えておこうとした時に、ここで初めて、  
門塾さんの顔を、近くでまじまじと見ました。

門塾さんは、離れていても綺麗だけど、  
近くでも、やはり綺麗でした。

てつきり、メイクが濃いんじゃないかって、  
思っていたけど、まあ、薄くはないですが、  
地が良いみたいだと言うのが、良く判りました。

ロングの黒い髪もつやつやだし、肌も白くて、  
顔も小さくて目は大きくて、胸も大きいのに、  
ウエストは細いし、背も高くて、足も細くて長いです。

声だつて綺麗だし、成績も良い方だし、  
それに、家は製薬会社でお金もあつて、  
何不自由ないはずなのに、  
何で、この人は、こんなに、  
目が、冷たいんだろう……

冷たいし、それに、すごく怖い。

それは多分、人の方を向いているけど、  
本当の意味では、目の前の人を人として、  
見ていないからだと思う。

門塾さんは、ターゲットの人たちも、  
中立の人たちも、目に入っていないんだ。

もしかしたら、取り巻きの人たちすら、  
相手にはしているけど、見てはいないのかも知れない。

そんな門塾さんが、笑顔でわたしを見つめていました。

わたしの目をまっすぐに見据えた、冷たい眼差しは、

わたしの中に、今まで感じたことのない、  
普段感じる怖さとは違う、  
恐ろしさ、みたいなのを感じました。

絡まれた時の、何かひどい目に遭うって言う怖さでもなく、  
榊さん、間宮さん、ヒヨウちゃんの殺気とも違う、  
どう言っていていいか判らないけど、  
妖気って言うか、靈気みたいな、  
そんなのを感じたんです。

まるで、ギリシャ神話のメドゥーサ……

石にされたみたいに、何も言えないわたしに、  
門塾さんは、眼差し以外は笑顔のまま、ゆっくりと、

「三崎さん、随分色々と持っているのね。  
この中に、貴方の大事なもの、  
入ってなかった？」

何も、壊れてなければ、いいのだけど」  
と、落とした物は見ないで、  
わたしの目を見つめたままで、言いました。

え、色々、持ってる？

その後、門塾さんは、視線をそらした後、  
教室の前へと向かって、  
黒髪を揺らしながら、立ち去って行きました。

やけに息苦しいと思ったら、  
今までずっと、息も出来ずにいたからで、  
わたしは、大きく深呼吸をすると、

呪縛みたいなのから、やっと解放された気がしました。

なにこれ？

なんなんだ、今の。

魔法とか、超能力、じゃ、ないよね？

わたしが、あんまり意識しすぎたせい、かな……

やっと、落ち着いてくると、

視線を感じて、隣りを見てみたら、

周りの人、みんな見ていたんですけど、

わたしが感じた視線は、間宮さんでした。

間宮さんは、ここでは滅多に見せることはない、  
驚いた表情を、隠し切れずにいました。

わたしと目が合うと、間宮さんは慌てて席を立って、  
教室を出て行ってしまいました。

間宮さんの視線は、本人は隠そうとしたり、  
出来るだけそうしないように、避けているけど、  
門塾さんとは違って、ちゃんと相手を見ているし、  
そこには人としての、心とか気持ちがあります。

それが判る人たち、葵ちゃんとかは、  
間宮さんの本質を見て、そばにいます。

あの2人の瞳から感じるのは、まるで正反対です。

やっぱり、間宮さんが門埜さんの元にいるのは、  
どう考えてもおかしいです。

それにしても、門埜さんの言葉、  
あれは、文字通りの意味だったのだろうか。

今まで一度も見たことなかった、  
門埜さんが自ら動いて、何も無いなんて、  
絶対、有り得ないと思う。

それは、わたしの思い過ごしじゃない証拠に、  
クラス中の人は、今の出来事で騒然としているし、  
中には、門埜さんが自ら、ターゲットを選んだんだ、  
なんて、叫んでいる人もいました。

たしかに、そう、思えるよなあ、やっぱり。

この事件が、門埜さんのグループには、  
予定通りだったのは、間違いなく、  
門埜さんの、一連の行動の後も、  
取り巻きの人たちは、誰も騒いでいませんでした。

これは、やっぱり、そう言うことなのかなあ。

でもわたしには、いまいちそう思えないんです。

わたしをターゲットにしたのなら、  
多分、そのまま言ってくると思うんです。

それを、あんな遠まわしなやり方するのは、あの言葉に、もっと別の意味がある、そんな気がするんです。

でも、それが何なのかが、まだ全然判りませんが、とても嫌な予感がします。

今はただ、この予感が外れてくれるのを、祈るだけです……

1月23日 テレビのニュース

おとといの、門塾さんとの会話から、2日経ちました。

今のところわたしの周りでは、特に何も、おかしいことはおきてはいなくて、土曜の航海堂でも、変な人たちが来ることもなかったです。

それどころか昨日は逆に、良いことがあったくらいです。

実は今、忍さんが買ってきたオセロが流行っていて、わたしは忍さん以外にも、休み時間に、バイトの人や社員の人たちと、対戦しています。

そのオセロの勝負で、昨日は10戦連勝したんです！

この日に出勤していた人、全員に勝ちました！

今では、勝率はわたしが1位のはずです。

ちなみに、航海堂で一番の強敵は、  
ほとんど対戦してないのも、あるんですけど、  
それは何と、店長です。

店長はオセロ好きでも、昔からやってた訳でもないけど、  
とにかく強いです。

忍さんは、こう言っではなんですけど、  
もう、わたしの敵じゃありません！

と言う感じで、昨日までは何事もなく、  
今のところ、問題なかったのですが、  
お昼ごはんを食べながら、

テレビのローカルニュースを見ていたら、  
『今どきの若者達』とか言う特集で、  
また、カラーギャングのことをやっていました。

最近の動向として、今までよりも、  
集団暴行が組織化しているとか、  
背後に、暴力団の関与があるだとか、  
気になることを言っていました。

それって、まさか、ギルドとか、  
間宮さんのこと、とかじゃ……

この時に、門塾さんの言葉が蘇ってきました。

色々持つてるって、まさかこれのこと？

いや、暗黒女王だって組織だし、暴力団が背後にいる暴走族なんて、たくさんある、と、思う……

テレビでは、この後実際に取材したと言う、

映像を流していたんですが、

かなり距離があつて、いまいちはっきりしない映像で、さらに、顔はみんなモザイク掛かっていたけど、

その姿は、真っ黒な格好のグループと、もう1つのグループが、ケンカしているのが映っていました。

黒い格好の方は、明らかにスカルヘッドです。

何も聞いていなければ、気づかないその映像に、キャスターの人は、ご丁寧に、スカルヘッドと争っている、もう一方の集団は、体の何処かしらに、白い物を身に付けたグループで、白刃というカラーギャングだと、説明していました。

これが、門塾さんの言葉の意味なんだ。

わたしには、今はっきりと判りました。

わたしの持っている物、

それは、わたしの友だちのことで、間宮さんとか、かなのことだ。



でも間宮さんは、もう門埜さんの意のままに、操っているんじゃないのだろうか。

かなは一年の頃から、門埜さんとは敵対していたし、今は白刃に、女王狩りをさせているから、目障りなんだろうか。

やっぱり考え過ぎかもって、思えたりもするけど、予感がもし当たっていたら、と思うと怖いから、わたしは、みんなの安否の確認を、しておこうと決めました。

間宮さんは、力でどうにかされる人じゃないだろうか、そこは心配していないけど、かなは大丈夫かな……

わたしは、かなへとメールを送って、わたしが門埜さんに、話しかけられたことと、その内容を伝えておいて、無事であるかを、尋ねておきました。

さっきのテレビからすると、間宮さんのことも、なのかも知れない。

わざとその情報を漏らして、特集に使わせたとか、門埜さんは、そんなことが出来るのだろうか。

それに、脅迫の材料を公開してしまったら、もう間宮さんを、従わせることは出来ない、となると、あれ以上のネタを握っているのか、

それとも、別の方法を使うのか……

わたしの、知り合いで、間宮さんも知っている、  
といたら、葵ちゃんしかいない。

葵ちゃんは、わたしの周りにいる人の中では、  
一番狙いやすそうから、特に心配だ。

葵ちゃんには、携帯の番号は知らないから、  
直接確認出来ない、どうしよう。

あ、間宮さんなら、知っているはずだ、  
だけど、教えてくれるとは思えない、  
でも今は、うだうだ言っている場合じゃない！

わたしは、間宮さんへと電話しました。

間宮さんは、すぐに電話に出ました。

「何の様だ」

いつも通りに、そっけない間宮さんは、  
特に様子に、変わりはないようで、  
この人は大丈夫だとは思っていたけど、  
やっぱり確認したら、安心出来ました。

あとは葵ちゃんだけで、

間宮さんから聞いてもらっても、いいかと考え直して、  
間宮さんに、葵ちゃんの様子が知りたいから、  
確認して欲しい、と頼むと、

間宮さんは、何の反論もしないで、  
唐突に数字を言い始めて、そして電話は切れました。

あ、あれ？

今の、電話番号だったの？

わたしは、聞いていた番号を書き直してから、  
その数字の番号へと、かけてみました。

すると出たのは、知らない人でした。

慌てて謝ってから、電話を切ると、  
もう一度、よく思い出してみたら、

書いてある数字が、1ヶ所逆なのに気づいて、  
かけ直してみたら、今度は葵ちゃんの携帯でした。

「あ、三崎先輩、ですか？

なんか、お久し振りですね。

でも何で、わたしのケータイの番号

」

葵ちゃんは、話してる途中だったけど、

わたしはそれを遮って、最近身の回りで変なこととか、  
怪しげな人たちが、いたりしないかを、  
すごい勢いで聞きました。

わたしの剣幕に圧倒されて、とりあえず、

答えた方が良く、判断したらしくて、

葵ちゃんは、

「……えっと、変なこと？ ですか？

あ、うーん、べ、別に、大丈夫、です、けど」

と、戸惑いつつ、ゆっくり答えました。

どうやら、まだ特に何もされていないみたいだ……

とりあえず、安心したわたしは、

なら、今後は気をつけてね、と伝えて、

電話を切ろうとしたら、今度は葵ちゃんが、

「ちょ、ちよつとまって！

先輩、質問に答えて下さい！

何でわたしのケータイの番号、判ったんですか！

今の質問、なんなんですか！」

と、怒り出しました。

あ、そうか、何も説明せずに聞いてたんだった。

間宮さんには、何も言わずに通じたもんだから、  
つい、そのままの勢いで話をしてしまった……

わたしは葵ちゃんに、謝ってから、  
状況を簡単に説明して、前みたいに、  
葵ちゃんが、狙われているかも知れないから、  
確認する為に、間宮さんから番号を聞いたと、  
説明しました。

そしたら、葵ちゃんはさっきの勢いはなくなり、  
すっかりへこんだ声に、変わってしまったって、

「そうですか、みこと先輩が。

わたしの番号を、ですか……」

と、とても落ち込んでしまいました。

わたしは、交換もしてないのに、他の人から聞きだしたことを、謝っても、葵ちゃんは、沈んだままでした。

わたしは、間宮さんから無理に聞きだしたんだと、フォローしたんですけど、葵ちゃんは、

「別に、三崎先輩がかけて来たのは、気にしていません。」

わたしのことを、心配して、

連絡して下さったんでしようから。

ただ、前のみこと先輩だったら、

自分で連絡してくれただろうなって思ってた。

もう、わたしとは、話したくないんでしょか……」

と、さらに落ち込んでしまい、この後わたしは、しばらく葵ちゃんを、慰めていました。

30分くらいしたら、葵ちゃんも落ち着いて、最後は元気を出してくれました。

電話を切ったら、今度は、

かなからの返信が届いていて、

早速メールを開くと、

「こっちは特に変わらないよ。」

いま時間ないから、

落ち着いたら連絡するね」

と、手短けど、特に何事もないのは判りました。

これで、わたしが気になった人たちは、

まだ、何かをされたりはしていないのが、判りました。

やっぱり、考え過ぎ、だったのかな……

でも、間宮さんが何も聞かずに、葵ちゃんの連絡先を、教えたのは、隣りで、門埜さんとの会話を聞いて、わたしと同じように、思ったからじゃないの？

絶対、間宮さんも危険だって、感じたんだと思っただけで、それは、わたしの勘違いだったの？

わたしの直感、けっこう当たるはずなんだけど、変だなあ……

1月27日 マラソン大会の練習

先週の、門埜さんとの会話の後から、もう、わたしがターゲットに決まったような扱いで、ただでさえ、ほとんど話もしてくれていなかった、クラスの人たちが、完全にわたしを避けていて、近づきもしなくなっています。

同じように、ターゲットになりそうな人たちは、わたしの巻き添えになるのを、恐れて、目も合わせないし、そうじゃない人たちは、いつ何が始まるのかと、遠巻きにして、わたしを見ているんです。

これじゃまるで、見世物小屋の猛獣です。

本人は、そうは思っていないだろうけど、  
今ではわたしよりも、間宮さんの方が、  
よっぽどクラスの人たちと、馴染んでいる気がします。

今日は体育の授業で、来週に迫った、  
マラソン大会の練習で、  
学校の周りを、同じ距離走らされました。

走る距離は、学年が変わっても変わらず、  
男子は10km、女子は7kmです。

去年は、練習は辛うじて完走だったけど、  
本番は暴走して、あつという間に、  
リタイアだったなあ……

今年はせめて、完走したいです。

だから、この練習も頑張って走りたいけど、  
マラソンの練習は、男女合同で、  
女子も男子も、同じコースを走るから、  
ちょっと怖いんです。

まだ今日まで、門塾さんたちから、  
何も仕掛けてこないから、  
いつ、何をしてくるかが判らなくて、  
それが何よりも、怖いです。

いつもの体育と違って、マラソンのコースは、  
体育の先生の、目が届かないところを通るし、  
もしそこで何かされたら、どうしよう。

まさか、こんな屋外で人目もあるのに、  
何も仕掛けてこないよなあ、  
って、今までと同じなら思えるけど、  
今回は、よく判らない……

体育では、ジャージに着替えているから、  
せっかく習った道具も、持ってなくて心細いし……

とにかく、出来るだけ取り巻きの人たちからは、  
離れるようにしよう、と思って、  
スタート地点に集まると、  
門塾さんは、前の方にいたけど、  
取り巻きの人たちは、全員一番後ろでした。

こうして、とても不安な状況のまま、  
マラソンの練習がスタートしました。

男子も女子も、スタート地点は同じで、  
男子は女子よりも、3km先の地点がゴールになっていて、  
つまり、最初から最後まで、  
ずっと狙われるっていう、最悪なコースです。

取り巻きの人たちの中でも、  
多分、下っ端の人たちの4人が、  
わたしを囲むように、走っていて、  
わたしより後ろに、他の取り巻きの人たちがいました。



これは、もう絶対に、わたしがターゲットなんだ。

そういえば、間宮さんはどこだろう、

陸上部なんだから、余裕で先頭だろうけど。

もしかして、助けてくれないか、なんて、  
期待してしまった。

はあ……

この4人は、先生の見える位置に近づくと、  
フォーメーションを変えて、

先生に怪しまれないように、小細工していました。

そこまでして、わたしをマークするのか。

そこでわたしは、安全だと思えるところは、  
ゆっくりと走って、周囲から完全に死角となる、  
学校の裏側とかは、出来るだけ急いで走って、  
少しでも、危険を減らすように努力しました。

それがどの程度、効果があったのかは判らないけど、  
このマラソンの練習は、結局何も起きずに、  
無事に走り終えました。

今日が無事に済んだのは、どうしてかは判らないけど、  
何かを狙っていて、それが出来なかった、  
そんな風に感じました。

それとも、そう思わせて、

わたしを、精神的に追い詰めるのが目的なのか。

でも、どうしてわたしなんだろう……

2011年 1月 その3(前書き)

変更履歴

2011/04/14	記述修正	一回戦は、	初戦は、
2011/04/23	記述統一	第一、第二、第三	第一、
第2、第3			
2011/05/04	記述統一	一回、二回、三回	一回、
2回、3回			
2011/05/05	記述統一	三戦目	3戦目

2011年 1月 その3

1月30日 間宮さん家でオセロ対決！

とうとうこの日がやって来ました。

航海堂で、武者修行を積み重ねて、  
今では、航海堂最強のオセロ名人となりました！

今日で、間宮さんを倒して、  
いくつも積み重なった、問題を解決させる為の、  
突破口を開きます！

昨日、オセロ盤を忍さんから借りて、  
昨日の夜に、ちょっとすごく興味があつて、  
間宮さんに勝負の場所を、間宮さんの家と伝えてみました。

てっきり拒否されると思ったら、  
これまた、あっさりと、  
「判った」  
の、一言メールが届きました。

そして今日、指定時刻の午後2時、  
わたしは、オセロ盤をトートバッグに入れて、  
間宮さんの、アパートの前と、  
再びやって来ました。

やっぱり、何度見ても、  
うちより古いアパートだなあ、これは。

10分前についてしまって、  
ちよつと早すぎたか、と思っていたら、  
ドアが開いて、上下ジャージ姿の間宮さんが現れて、  
「三崎、上がってくれ」  
と、許可が出たので、お言葉に甘えて、  
部屋に入りました。

間宮さんのアパートは、ワンルームで、  
玄関を開けると、今通つて来た廊下側の面が台所になって、  
左の奥に、冷蔵庫がありました。

右手に扉が1つあつて、正面は6畳の和室で、  
和室の右側に、押入れがあつて、  
突き当たりは、4枚の大きな窓になっていて、  
どうやら外は、ベランダになっているみたいです。

和室には、小さなちゃぶ台みたいなテーブルが1つと、  
左側の手前に、うちにもある通販でよく安売りしている、  
布のカバーの、クローゼットハンガーがあつて、  
その脇に、ゴミ箱が置いてありました。

それと台所と和室の、境の真ん中のところに、  
石油ストーブが置いてあつて、  
窓際には、犬とか猫を入れるケージがひとつ、  
置いてありました。

テーブルの周りには、  
窓側に、座布団が1つだけ置いてあつて、  
間宮さんに促されるままに、座布団の上に座りました。

部屋の中には、テレビやパソコンは見当たりません。

随分、すっきりした部屋だなあ、  
旅館とか、ホテルの部屋の方が、  
まだ、物があるんじゃないかな……

高校に入ってから、かなの大きな家とか、  
なつめの借りてた、高層マンションとか行ったけど、  
やっぱりわたしには、このくらいの狭さが、  
合ってる気がする。

見慣れているからかも知れないけど、この雰囲気、  
初めて上がったとは思えないくらい、  
とても落ち着きます。

「この家に、客を入れることはないので、  
ただの水しか出せない。  
これで我慢してくれ」

間宮さんはそう言うてから、わたしの前に、  
水の入った、ガラスのコップを置くと、  
私と向かい合うように、テーブルの正面に座りました。

わたしは、お構いなく、と言ってから、  
とりあえずコップの水を、ひと口飲みました。

あ、これ、ミネラルウォーターだ。

間宮さんは、どこか落ち着かないと言うか、

なんだかそわそわしていて、  
間宮さんらしくない態度をしていましたが、  
心を決めたようで、わたしを見据えると、  
「三崎、勝負の前に、ひとつ頼みがあるんだ。  
どうか聞いて欲しい」  
と、改まって頼まれました。

わたしは、ちよつと戸惑ったけど、  
間宮さんの、控えめに頼んでいる態度を見て、  
余計なことは言わずに、頷きました。

すると、間宮さんは、  
「実は、今もそこにいるんだが、  
ベランダにいる猫を捕まえて、  
そのこのケージに入れてくれないか」  
と、意外なことを言ったんです。

猫を、捕まえる？  
そう言われて、後ろを向いて窓の外を良く見ると、  
奥行き狭い庭の前にある、ブロック塀の上に、  
白っぽい猫がいるのが見えました。

「ああ、あの猫だ。  
私では、どうしてもこれ以上近づけなくて、  
自分でやろうとすると、あれはすぐに逃げてしまふんだ。  
多分三崎なら、逃げないと思うから、頼む」

近づくだけで、逃げちゃう猫を捕まえさせて、  
どうするんだろう。

間宮さん、飼ってる訳じゃないのかな。

わたしは、そういうことなら、今そこにいるうちに、  
と思つて、立ち上がったってベランダへと向かつて、  
それと同時に、間宮さんは台所へと下がりました。

その間宮さんの動きを、確認していたかのように、  
白い猫は、塀の上からベランダへと跳び降りました。

わたしは窓際のケージを持ち上げて、  
扉を開けて下に置いてから、しゃがんだまま、  
窓をゆっくりと開けました。

それでも猫は逃げないで、そこに座っていたので、  
わたしは猫に手の届くところまで、ゆっくり近づきました。

猫は、近くで良く見ると真っ白ではなくて、  
まるで、汚れているみたいに、  
灰色の斑が、ところどころあつて、  
尻尾もなくて、かなり弱っているように見えます。

それと、この猫全然目を開けないのが、  
気になって見ていたら、瞬きした時に見えた目は、  
両目とも、灰色に濁っていました。

目が見えてないんだ、この猫。

それに、毛並みもボサボサだし、  
あちこち毛が抜けちゃつて、丸く禿げています。



この時、猫は一度短く鳴いたんですけど、その声もしゃがれていて、歯もないみたいです。

この猫、すごく年寄りなのかも……

しばらく間近で見ていると、間宮さんの言った通りで、白い猫は、逃げようとはしないので、わたしはゆっくりと手を伸ばして、猫を両脇から、抱えあげるようにして、持ち上げました。

この時、猫はまた短く鳴いていました。

すごく痩せてるなあ、それに、なんか体がボコボコしてる、なんだろう……

わたしは出来るだけ、一箇所に重みがかからないように、気をつけながら、扉を開けておいたケージに猫を入れました。

猫は、何度か鳴いていたけど、暴れることもなく、ケージに入れられた後は、もう観念したみたいで、大人しくしていました。

わたしは、これでいいの？

と、間宮さんに確認したら、

「助かった、ありがとう」

と、素直にお礼を言われました。

この時の、ケージを見つめる間宮さんの顔は、とても自然な表情をしていました。

やっぱり、普段は身構えたり、装ったりしているんだな。

でも、優しい感じだけど、寂しそうな顔にも見えて、この時の間宮さんの心境は、読みきれませんでした。

ケージから目を離れた間宮さんは、

その態度を、いつもの感じに戻すと、

「さて、本題に入ろうか」

と言って、勝負を促して来ました。

わたしは、座布団の脇に置いていたトートバッグから、借りてきたオセロ盤を、テーブルの上に出しました。

「なあ、最初に聞いておきたいんだが、

このオセロ勝負は、何回勝負なんだ？」

間宮さんから、事前に釘を刺されてしまい、これで前みたいな言い逃れは、出来なくされてしまいました。

一発勝負だと、なんか失敗したときに、もう、取り返しがつかないから、すこし回数は、多めにした方がいいかな……

わたしは、ちよつと考えてから、

5回勝負で、先に3勝した方が勝ちで、引き分けたら、延長戦のサドンデスにして、

先攻後攻については、最初は間宮さんに決定権を与えて、第2戦以降は、負けた方が決めるってことにしました。

これを伝えると、間宮さんから意外な提案がされたんです。

「三崎、私からひとつ提案なんだが、

今回のオセロの勝負、お前が勝ったら勝ちで、

私が勝ったら、この次の勝負を最終決戦にする、

と言う事にしないか。

その代わり、決戦で負けた方は、

勝った方の言う事を何でもきく、と言う風にしたい。

どうだろうか」

この提案について、わたしはしばらく黙って、考えていました。

間宮さんの提案は、わたしには都合が良いものに思えたけど、

あえてそれを提案してくるのは、逆に言えば、

勝負に勝利した時の内容に、

とても意味があるんだろう、と言うことは、

すぐに判りました。

元々は、たしか間宮さんの隠している事を口外しない、  
だったはず。

それを、何でも言う事をきく、に変えてきた。

これって、ギルド全体に対する口止めから、

わたし個人への、何かの依頼に変わってるってことだ。

間宮さんの考えは、何なんだろう、  
一体わたしに、何をさせたいんだろ……

それは、わたしが2回負けなければ、  
判らないことだ。

このオセロ勝負は、かなり自信があるし、  
もし負けたとしても、もう1回チャンスが出来る。

それに、勝てば何でもお願い出来るんだから、  
そのことだって、聞き出せば良いし、  
こっちの方が、わたしにとっても都合がいいな。

わたしは、間宮さんの提案をのみました。

こうして、条件変更の後に、  
オセロ勝負は始まりました。

初戦は、間宮さんは先攻を選びました。

試合は序盤から、わたしの良いように進んで、  
全部のコマを使い切る前に、勝負はつきました。

もちろん、4対56でわたしの圧勝です。

間宮さん、全然大したことないです！

これはもらった！

と、思いつつ間宮さんを見ると、

学校では見たことのない、すごい真面目な顔で、

盤を凝視していました。

わたしはこの様子に、  
忍さんが言っていた言葉を思い出して、  
ちよつと、不吉な予感も感じました。

よく将棋とか囲碁で、テレビだと対戦者同士で、  
対局を振り返ったりしているけど、  
間宮さん、まさかどう打ったのか思い出しているの？

これは早く、次の勝負をした方がいいと感じて、  
間宮さんに声をかけたけど、  
わたしの声は、全く聞こえていないのか、  
無反応のまま、じつとオセロ盤を見ていました。

しばらくしたら、間宮さんが頭を上げて、  
やっと第2戦に入りました。

今度も間宮さんの先攻で、勝負が始まり、  
間宮さんは、さっきとは全く違う手で打ってきて、  
今回は押し気味ではあったけど、圧勝とはいかず、  
コマを全部使い切って、終わりました。

結果は、20対44で、倍以上取ったけど、  
角もひとつ取られました。

なんか、まずいなあ……

またしても間宮さんは、終了後のオセロ盤を眺めていて、  
復習していました。

これが、なんだか怖い。

でも、次に1枚でもいいから多く取れば、これで勝負は決まるんだ。

間宮さんは冷静な表情のまま、盤の確認を終えて、第3戦に入りました。

間宮さんは今回、後攻を選んで勝負は始まり、わたしはこの3戦目で、自分の打ち方が、すっかり覚えられているのが、判りました。

わたしの打ち方は、航海堂で修行しているんな人の、良いところを採用したんです。

だから、自分と同じ打ち方する人となんて、戦ったことは、もちろんありません。

すごく、やりづらいです。

まるで全部手が読まれている、そんな気がします。

それと、間宮さん、なんだか、楽しそうに見える……

勝負は拮抗して、角はお互いに2つずつ取って、同じくらいになりました。

コマを数えてみると、なんと、

32対32の引き分けでした。

これは、本当にまずい……

何とかして、もう一度、1枚差で十分だから、  
と思つてオセロ盤を見ていたら、間宮さんから、

「三崎、よければ次の勝負入ろうか」  
と、逆に催促されました。

うそ、もう見切つたつてこと？

それを聞いて、ますます追い詰められた気がしつ、  
第4戦に入りました。

引き分けの場合は、どっちが先攻後攻を決めるのか、  
決めていなかったなと思つていたら、間宮さんから、

「三崎が決めて構わない」

と言われて、その余裕っぷりに、  
わたしの焦りは高まる一方です。

わたしは後攻を選んで、勝負は始まりました。

対戦は、今までよりもさらに苦しい展開になり、  
間宮さんは、わたしの打ち方ではない、  
新しい打ち方をしてきて、

わたしはそれに押されっぱなしのまま、  
気がついたら、置くコマがなくなっていました。

勝負の結果は、38対26で、

角は2つ取られたから、さっきと一緒なんだけど、

なんか、思ったようにいかずに負けました。

ああ、完全に押されてる……

これで、次の第5戦を間宮さんが勝ったら、  
2勝2敗1引き分けで、サドンデスです。

もうすっかり、間宮さんのペースになっている気がする。

わたしは、気を引き締めて、

満足げな顔をして、わたしを待っている、

間宮さんへと合図して、最終戦へと入りました。

最終戦は、わたしが後攻を選んで勝負を開始しました。

やっぱり間宮さんは、わたしの戦法に対する、

封じ手を見つけているらしくて、中盤までは優勢だったけど、

後半の角の取り合いになると、最終的にわたしが取っても、

思ったようには、周りのコマを取らせてもらえなくて、

それどころか、終盤で一気に逆転されてしまいました。

試合が終わってみれば、

角は、わたしが3つ取っていたのに、

52対12で、わたしの負けです。

こうして、延長戦へと入りました。

わたしは、先攻を選んで勝負を開始しました。

もうわたしには、どうすれば勝てるのか、



判らなくなっていて、とにかく色々試しながら、試合を進めてみたら、中途半端なことをしたせいで、完全に、間宮さんのいいようにされてしまい、終わってみれば、なんと盤は真っ黒に……

0対64で、完全敗北です。

あまりの結果に、目眩を感じて、目の前がちよつと暗くなつてきて、そんなわたしの目に見えたのは、とても満足げな、間宮さんの、すこし笑っている顔でした。

こ、こんなはずじゃ、なかったのに……

わたしを見ながら、間宮さんが叫ぶ声を聞いた後、わたしの視界は暗くなって、この直後、後ろにひっくり返って倒れました。

目を覚ましたら、窓の外はいつの間にか、薄暗くなっていました。

わたしの体には、毛布がかけられていて、起き上がって、窓の外を見ると、もう夕暮れになっていました。

たしか、2時前にここへ来て、猫を捕まえてから、オセロを6回やって、それで倒れたんだよなあ。

負けたのは、たしかにショックだったけど、

まさか気を失うとは、我ながら大袈裟だなあ……

あれ、間宮さんがいない。

部屋を見回しても、間宮さんの姿はなくて、  
トイレも開いていました。

それに、ケージもなくなっているのに気づいて、  
玄関の方を見た時、ちょうどドアが開いて、  
前にも見た、レーザージャケットとジーンズ姿の、  
間宮さんが帰ってきました。

「あ、目を覚ましたか。

具合は大丈夫か？」

と間宮さんは、わたしを心配していました。

わたしは、かなり恥ずかしくて、  
あんまり間宮さんと、目を合わせずに、  
大丈夫、心配かけてごめん、と謝りました。

間宮さんは、まだわたしを見つめていて、

「そうか、それならいいが」

と言いながら、オセロしていた時と、  
同じ場所に座りました。

「お前、急に真っ青な顔して倒れたから、  
驚いたけど、単なる貧血だと判断したが、  
それで良かったか？」

もし、まだ具合が悪いなら、救急車を呼ぼうか？」

間宮さんは、真剣な顔をして、そう言ってきたので、わたしは思い切り首を振って、もう本当に大丈夫だから、そんな大袈裟にしないで、と伝えました。

それよりわたしは、ケージがなくなっているのが気になって、そのことを、間宮さんに尋ねました。

「ああ、お前が眠っている間に、動物病院に、持って行ったんだ。前に、お前の黒い猫を運んだところだ」

ああ、根岸動物病院か。

やっぱり飼い猫だったの、かな？

でも、あの猫、どう見ても若くはなかった、それに間宮さんは、こっちに転校してきたのは、去年の5月くらい、のはず。

野良猫に、餌でもあげていたのかなあ……

でも、近寄れもしない野良猫を、動物病院に、連れて行くかなあ？

それに、あの猫の状態だと、かなり色々悪そうだから、治療は、大変なんじゃないの？

それを尋ねると、間宮さんは、あまり、言いたくなさそうにしてたけど、

「こんなことを言つと、  
気味悪がるんじゃないかと思うんだが、  
それでも聞きたいか？」  
と、わたしに告げました。

わたしは、構わないから、と返して、  
間宮さんに、話してくれるように伝えたと、  
間宮さんは話を始めました。

「私がここに越してきて、しばらくした時に、  
ベランダに猫が死んでいるのを見つけて、  
その亡骸を、庭に埋めようとしたんだ。

その窓の外にある、小さな狭い庭を掘ってみたら、  
かなりの数の、小動物の骨が埋まっていた。  
それも、庭のいたるところにだ。

後日、隣りの爺さんに会った時に、  
死んでいた猫の事を尋ねると、  
あの猫は、この部屋の前の住人だった婆さんが、  
よく世話していた猫だと、教えてくれた。  
婆さんは、野良猫に餌をやっていたんだが、  
その場所はここじゃなくて、近くの公園だった。

ここの大家が、動物アレルギーらしくて、  
このアパートは、ペット禁止で、  
昔ここで餌をやっていて、それが大家にばれて、  
追い出されそうになったらしくて、  
それ以降、婆さんは公園で餌をやっていたんだ。

そうするようになったら、野良猫はほとんど、  
ここには来なくなつて、  
たまに歩いているのを、見かける程度になつた。  
その代わり、この付近をうろついているのを、  
何度か見かけた猫は、しばらくすると、  
姿を消すようになった。

爺さんは、その事を婆さんに尋ねたら、  
婆さんは、あの猫達は私と同じなんだ、  
と、答えにならない事を言つたんだそうだ。

それからしばらくして、婆さんはこの部屋で死んだ。  
脳溢血だつたらしい。

たまたま死んだ翌日が、週に1回来るデイサービスの日で、  
訪問してきた人に、見つけられたそうだ。  
婆さんには身寄りがなくて、孤独死した婆さんは、  
無縁仏として納骨されたらしい。

私はそれを聞いて、判つたんだ。

あの婆さんは、自分の境遇と野良猫を重ねて見ていて、  
自分と同じように、死んでからも疎まれるのが、  
不憫だったから、野良猫達に最期の居場所として、  
死に場所を与えていたんじゃないかって。

多分、野良猫は死期を悟ると、  
ここへ来て、死んだ後に弔ってもらつ為に、  
自分が死ぬのを待っているんだ。

ここに来た猫は、あの白い猫で4匹目だ。

今までの3匹は、何度か姿を見かけたと思っていたら、朝起きて窓を開けると、もうここに死んでいた。

だから、せめてあいつは残りの寿命を確認して、楽にしてやった方がいいなら、

安楽死させようかと

それはダメ！

と、思わずわたしは叫びました。

これには、自分も驚きましたが、  
間宮さんは、もっと驚いていました。

「え！？ ど、どうしてだ。

あの猫はもう満身創痍なのは、見て判るだろう。  
そんなに苦しい状態で、残り僅かな命を、  
長らえさせたって、苦痛が伸びるだけじゃないか」

間宮さんは、突然切れたわたしの剣幕に押されてか、  
ちよつと遠慮がちに、ためらいながら反論しました。

その意見は正論だけど、それはこっちの勝手な判断で、  
猫本人の気持ちじゃない。

猫がここに集まって来るのは、死に場所だからじゃなくて、  
一番居たい場所だから、じゃないかと思う。

きつと、前に住んでいた人は、

ずっと野良猫を可愛がっていて、それを覚えているから、  
最期にここに帰ってくるんじゃないか、

わたしは、そう思ったんです。

そうやって、ここに帰ってきて、最期を迎えた猫たちを、ずっとここに、居させてあげようと思って、この庭に、弔ってあげていたんじゃないだろうか。

だから、あの猫がどんなにひどい状態だとしても、動物病院で、安楽死なんてダメだ。

せめて、ここで見取ってあげるべきだと、わたしは思っています。

そう、間宮さんに力説しました。

わたしには、猫の言葉が判るわけじゃないけど、人間と違って、動物は死にたがりはいらないと思うから、どんなにボロボロになっても、最後まで生きようとするはずだ。

わたしは、ヒヨウちゃんの時のことを思い出しながら、それを間宮さんに、訴えていたら、感極まってしまい、やっぱり泣いてしまいました。

「判った判った、だから、泣かないでくれ。

お前の言う通り、なのかも知れない。

もう安楽死はさせないから、無き止んでくれ」

と、間宮さんは、下を向いて泣いているわたしに、かなり困った声で、言っているのが聞こえました。

間宮さんも、納得してくれたのもあって、

10分くらいしたら、落ち着いて来て、わたしは、すっかり泣き止みました。

それを確認してから、改めて間宮さんは、

「今日のオセロ勝負は、私の勝ちで異存はないな。

これで約束通り、次の勝負が最後の勝負になる。

次回の勝負は、出来るだけ早めになりたい。

そして、早く決着をつけよう」

と言いながら、なぜかその表情は、

そうは思っていない、そう感じました。

でも、言葉ではそう言っているので、

わたしは判ったと返事して、

出来るだけ、早く決めると伝えました。

わたしは間宮さんに、今回のオセロ勝負は、

勝てる自信があったかを尋ねると、

今までオセロは、そんなにしたことなかったけど、

1戦目で、どういう感じで試合が進むかを理解して、

2戦目で、わたしの打ち方を考えて、

3戦目で、わたしに合わせて対抗してみて、

4戦目で、その打ち方に対抗する手を試して、

5戦目で、角をわざと取らせる必勝法を見つけた、

延長戦は、手が崩れていたから、楽勝だった、だそうで。

どうやらわたしは、3回対戦しただけで、

見切られていたみたいです……

そして最後に、

「三崎、オセロと言うのも、



やってみると、なかなか奥深いんだな。  
とても、興味深かったし、面白かった」  
と、感想を伝えられました。

ああ、そうですか……

外はもう、すっかり夕暮れで、  
時計を見ると、5時を過ぎていました。

わたしは間宮さんに、  
介抱してくれたことのお礼を言うと、  
間宮さんは、首を振って、

「いや、礼を言うのは私の方だ。

やはり、お前は私が見込んだ通りの人間だった。

お前なら、きっと大丈夫だ」

と、いまいち意味の分からないことを言われました。

その後、

「あの猫は、検査が終わったら、

またこの庭に、放しておく事にする。

あれのしたいように、させてやるつもりだ。

きつと、それが一番いいんだろうからな」

と、わたしの考えを、理解してくれました。

その言葉を聞いて、わたしは頷いてから、  
挨拶して、間宮さんのアパートを後にしました。

あーあ、負けちゃったなあ。

でもまあ、次があるか。

この試合のおかげで、本当の間宮さんに、すこし近づいたような気もするし、それが見れただけでも、成果があったかなって思います。

帰り道、わたしは御家河の土手を回って、家に帰ってきました。

いつもの場所を通ると、夕暮れに伸びる影のような、河川敷を歩いている、ヒヨウちゃんの姿が見えました。

うん、ヒヨウちゃんは元気そうだ。

それを確認したら、わたしが泣いていた時の、困っている間宮さんを思い出してしまい、この時ちよっとだけ、かわいって思ってしまった、間宮さんを困らせるのが、楽しいって思いました。

今まで、いっぱい泣かされたんだから、これくらい思っても、いいよね。

それと同時に、間宮さんの部屋のことも、頭に浮かんで、気になっていたことを思い出しました。

あの部屋、1人暮らしとは言え、随分とすっきりした部屋に住んでるんだなあ……

うちも、大して物は無いですけど、この部屋の倍くらいは、物があると思う。

これじゃまるで、引っ越してきたばかりか、  
もうすぐ、引越する人みたいだ。

それに、亡くなったお婆さんの話をしていた時の、  
間宮さんの表情は、何だか、すごく気持ち良かった、  
と言っか、気持ちが入っていたって気がする。

まさか、ね……

間宮さんが、何を企んでいるのが、  
すく、気になります……

2011年 2月 その1(前書き)

変更履歴

2011/02/09 記述修正 放浪の騎士がいました。

独りの騎士がいました。

2011/02/09 記述修正 どちらになるかは、お前次第だ

と言われました。

削除

2011/04/05 誤植修正 伺う 窺う

2011/04/13 記述統一 1年生、(中学)2年、高校3

年 1年生、二年、高校三年

2011/04/25 記述統一 1ヶ所、二ヶ月、二ヶ月

1ヶ所、2ヶ月、3ヶ月

2011/08/07 記述統一 一人、二人、三人 1人、

二人、三人

2011年 2月 その1

2月2日 なつめの本心の手紙

今日も学校では、とても嫌な雰囲気だったけど、不気味なくらい何もされずに、無事に授業は終わって、わたしはその後すぐに、航海堂へと向かいました。

今週の月曜日に、持ってくるのを忘れていたオセロ盤を、今日持って行くと、今週は来る予定じゃなかった、珍しく、きちつとスーツを着た忍さんが、ちょうど、航海堂から出て来るところでした。

わたしは、急いでいる忍さんに、貸してもらった、オセロ盤のお礼と、勝負には負けたことだけ、手短かに伝えておきました。

忍さん、就職活動、じゃないと思うけど、今年に入ってから、かなり忙しいみたいで、あまり、お店にも出ていません。

もしかして、もっと忙しくなつて、副店長、辞めちゃったりしないよなあ。

そしたら、かなり寂しいです。

今日のバイトも、いつも通りにこなして、家に帰って来ると、いつもよりも早く、なつめからのエアメールが届いていました。

そういえば、なつめ、  
結局、電話してくれなかった……

そのこと、この手紙に書いてあるのかなあ。

わたしは、夕飯を済ませてから、  
封筒を開けました。

いつもの通り、便箋と1枚の写真が入っていましたが、  
その写真は、今までと違って、  
2人しか写っていませんでした。

なつめと榊さんだけで、クマのミナモがいません。

とうとう、どうしようもなく壊れちゃったのかな。

それと榊さんの姿が、日焼け以外は、  
すっかり元に戻ってました。

この前の返事で、なつめは分かってくれたみたいだ。

なつめ、前よりも痩せたように見えるけど、  
1ヶ月しか経っていないのに、  
普通、そんなに目に見えて痩せるかなあ。

わたしは念の為、前に送られた写真を出して、  
写っているなつめを、比較してみました。

やっぱり、痩せてる……

それに顔色も悪いし、あんまり体調も良くないみたいだ。

わたしは不安を感じながら、便箋を開いて読み始めました。

「親愛なる親友のみなもへ

今回は、少し早めにお便り出しました。

この理由については、後で説明しますね。

写真を見てもらえば、判ると思いますけど、

榊は、イメージチェンジはやめにして、

肌の色以外は、元に戻させました。

やっぱり、見慣れた格好が一番良いですね。

それが判っただけでも、当人は苦い顔をしていたけれど、色々させた甲斐はあったかなと、私としては思っています。

それから、クマのミナモですけど、

わたしがトレーニング出来る状況ではなくなったので、

一足先に、修理に出しました。

あれがなくなったら、十分に広い病室が、

更に広くなりました。

ミナモは、榊の次に存在感があったから、

少し寂しくなりましたね。

でも、もうすぐ特別治療室に入れられてしまうから、

この広くなった病室とも、しばらくはお別れです。

みなものお父さんの事は、驚きました。

賞を取るような、画家の卵だったなんて、

私の方でも、作品を探させてみようと思いますが、

多分、今探しているバイト先の人が詳しそうだから、  
こちらは、あまり当てにしない方が良くも知れませんが、

それと、成績で負けたとの事ですけど、  
間宮つて子は、頭も良いのですか？

私の方でもその子の事、調べさせてみました。  
その子、みなもはもう知っているのかも知れないけど、  
今となつては、どちらの世界でも居場所が無いなんて、  
恵まれない境遇と言う点だけは、  
同情に値するとは思いません。

だけど、本人はもう切れたつもりであっても、  
周りはそうは見えてくれないでしょうし、

間宮と言う苗字がある限り、その道の人間であれば、  
すぐに感づいてしまうでしょうから、  
不憫だとは思いますが、私としては正直言って、  
みなもには、あまり関わって欲しくないです。

ギルドと言う組織を作った、高坂つて子の名前は、  
一年の時にも、何度か聞いた事があつたと思います。  
当時は、やたらと悪い噂ばかりだったのは、  
その子も門塾に敵視されていたからだったのですね。  
この子とも出来る事なら、距離を置いて欲しいけど、  
これは、言っても聞いてはくれないでしょうね。

ある意味一番気になる、門塾の事ですが、  
こちらでも、私に出来る範囲ではあるけど、  
それなりの手配は進めています。  
多分、上手く行くと思います。

結果は、その時にお知らせしますね。



さて、次に私の近況です。

前置きでも書きましたけど、

今回は今までよりも、少し早く手紙を出しました。

先月に伝えた、再発の検査の結果が、

あまり良くなって、明日か明後日には、

また前に行っていた、眠ったままになる、

あの治療に戻るからです。

それと平行して、再発の可能性がある臓器にも、

新しい治療を行うと聞かされています。

どうやら、再発は1ヶ所だけではなかったみたいです。

今回のような治療は、実例がないと告げられていて、

今までで一番難しいだろうと、宣告されました。

ここが私にとって、正念場のようです。

最後に、お願いされていた電話の事ですが、

これから、再発箇所の新治療に入ってしまった、

自由に動けなくなっているから、難しいです。

それとは別の理由もあって、実は今までもあえて、

直接、話はしないようにしていました。

私にとっては、みなもと再会する事を、

抛り所にして、これまで治療に励んできました。

今の段階で、みなもの声を聞いてしまうと、

色々と、決心が挫けてしまうような気がして、

それが怖いから、直接は話せない事にして、

手紙を出していたんです。

今まで嘘をついていて、本当にごめんなさい。

そういう風に、見せていただけであって、

みなもが思っているほど、私は強くなっていません。

もし、私に何かあった時には、  
みなもには榊から連絡が行くと、前に伝えてあるけど、  
それとは別に、榊には手紙を託してあります。  
遺言、と言うほど重いものではないつもりだけど、  
私が見なもへ伝えたかった事を、書いてあります。  
その時が来たら、榊から受け取って下さい。

もうちょっとしたら、私の誕生日だけど、  
私への誕生日のプレゼントは、  
何も物なんて要らないから、  
今度の治療が上手くいく事を、祈っていて欲しいです。  
今の私にとっては、それが何よりも嬉しいから。

そちらも、色々大変だと思うけど、  
私も頑張るから、みなもも頑張って下さい。  
もう一度、お互い笑顔で再会しましょう。

それでは。

かしこ

2011年1月26日

仁科 棗

わたしは手紙を読み終わった後、  
しばらく何も考えられず、ずっと泣いていました。

なつめ……

今までずっと、強がっていただけだったんだ。

前の手紙でも、少しそんな感じはあったけど、  
今回の手紙には、それを正直に書いてきた。

今はもう、耐え切れないくらい怖いんだ。

それを隠して、わたしに強がっていたのは、  
自分自身への、けじめもあつたけど、

わたしに心配かけたくないって、思っていたんじゃないか、  
そう思いました。

なつめの体調のことも、気になるけど、  
なつめが調べた、間宮さんのことも気になりました。

どちらの世界にも、居場所がないって言うのは、  
それは間宮さんの抱える、秘密の核心なんじゃないのかな。

このことを、なつめに聞きたかつたけど、  
多分もう、眠ったままになる治療に、  
入っているんだろうから、確認は出来なさそう。

また榊さんに連絡して、聞いてみよう、  
そうすれば、なつめのことも聞ける。

わたしは時差を計算して、今ならお昼過ぎくらいだから、  
大丈夫だと思つて、榊さんへと電話しました。

榊さんは、1コールで出てくれて、出て早々に、  
「……掛けて来ると思っていた」

と、低いトーンで言われました。

わたしはすぐに、なつめの様子を尋ねると、  
榊さんは、いつもよりも長い沈黙の後に、

「……医者の話では、今の治療が成功する可能性は、  
3割切っているそうだ。

元々ここでの新治療の成功確率は、5割だったから、  
それより高い事は有り得ない。

と言つても、容態が完治する可能性であるから、  
助からない訳ではなくて、もし失敗したとしても、  
今までなら、通院だけで日常生活が送れたのが、  
病室から出られなくなるとか、  
一時的な退院も難しくなるとかだと、聞いている。  
だから生命を失う危険が高い、と言う訳ではない。  
そこは、安心してくれ。

ただ、棗の望んでいた事は大半が、  
人並みに動けなければ、叶わないものばかりだから、  
本人のシヨックは大きいだろう。

何か動きがあれば、そちらに連絡するようによつ  
と、告げられました。

それを聞いてわたしは、泣き止んだばかりなのに、  
また涙ぐんでくるのが分かって、それをこらえながら、  
榊さんへともうひとつ、間宮さんのことを尋ねました。

すると、榊さんは、

「……それについては、調査依頼するように言われて、  
調べさせていたのは俺だが、

その調査結果を見たのは棗だけで、俺は見えていないので、  
調査内容については答えようがない。

その情報について、お前に公開して良いか、  
棗への確認が取れていないから、  
俺の一存では、勝手な行動は取れない。  
それは、棗が目を覚ました時に、  
改めて確認しなければ、応じられない」  
と、断られました。

わたしは、榊さんへとお礼を言ってから、  
電話を切りました。

間宮さんの、過去のことにも気になるけど、  
それよりも今は、なつめのことがとても心配です。

とりあえずわたしは、この後すぐに、  
なつめへのプレゼントを買う予算だった、  
3万円を持って、初詣に行った近くの神社へと、  
自転車で行きました。

そして、その3万円全部を賽銭箱に入れて、  
神様に、なつめを元気にして下さいって、  
ひたすらお願いして来ました。

今はとにかく、なつめの回復を、  
神様に祈るしか、わたしには出来ないから……

2月4日 意外なマラソン大会

門塾さんたちから何かされるかも、と気になっていたけど、

結局何もされないまま、日にちは過ぎて、マラソン大会当日になりました。

走るところは、去年と同じで、

噴水公園にある、サイクリングコースを走ります。

本番で何かされるかもって、思っていたんですが、よく考えてみると、スタート地点は、男女でずれていたのを、当日に思い出しました。

ゴール地点は、同じところですが、これなら、追いつかれなければ大丈夫です。

門塾さん自身が、わたしに何かをして来るのは、多分ないと思うから、取り巻きの男子たちに、追いつかれなければ、いいんだ。

それって、出来るかな……

二年は、普通に学校に登校して、2時間目まで、授業を受けてから、体操着に着替えて、噴水公園に移動しました。

授業中は、どうにかして引き離せないかと、ずっと考えていたけど、自分のペースの遅さを考えると、どう考えても、それは無理な気がする。

クラスの人たちも、今日こそは、何かをやるつもりなんじゃないかって、思っているっぽくて、周りの会話の中に、

わたしの名前が入っているのが、  
聞こえたりしていました。

噴水公園への移動中は、かなり憂鬱な気分で、  
クラスの人たちから、少し離れて歩いていました。

前を見ると、相変わらずいつもの人たちに囲まれて、  
楽しげに歩いている門塾さんや、

そのすぐ後ろについている、間宮さんが見えて、  
間宮さんは、門塾さんに付き従っているように見えます。

いよいよ、何かをされるかも、と思ったら、

この時、だれもわたしの味方をしてくれないことが、  
急に心細くなってきた、自分は独りぼっちなんだって、  
改めて、実感させられました。

今までターゲットにされた人たちも、  
みんな、こんな風に思っていたのかな。

わたしは少しだけ、悲しくなっちゃってしまい、  
涙ぐんでできてしまって、他の人に見られないように、  
うつむいて歩いていました。

そんな時、不意に誰かに肩を叩かれて、  
さっき手を出して来そうな人たちは、  
前にいたはずなのに！

と、かなり驚いて、涙が溢れそうになるのも忘れて、  
振り返って見たら、そこにいたのは、かなでした。

「みなも！」

今日は一緒に、走るからね」

と言いながら、かなはわたしの顔を見て、いつもの、元気そうな笑顔から、少し心配そうな顔に変わって、

肩に置いた手を背中にもわしてから、わたしに顔を寄せて、

「今日はあたしがついてるから、大丈夫だよ。」

だから、安心してね」

と、周りに聞こえないように、小声で言いました。

この後、かなは最初の元気な感じに戻って、

わたしはそれにつられて、

かなと普通に、話をしていました。

何度か前を見ると、門塾さんや間宮さんも、

こっちの様子を窺って、見ているのが判りました。

かなは、わたしと一緒にいて大丈夫なんだろうか、

向こうの方が人数は多いから、

一緒に何かされるかも知れない、

そのことを聞くと、かなは、

周りにいる人たちへと、目配せして見せました。

そしたら、いつのまにか他のクラスの、

グループばかりになっていた、周りからも、

合図が帰ってきて、

「学年単位のイベントだったら、

こっちだって、対抗出来るよ。」

むしろ学校内だったら、

こっちの方が、メンバーは多いんだ。

あたしたちの周りと、向こうにも張り付かせているから、



あの女だって、下手なことは出来ないよ」  
と、笑って答えてくれました。

「もう少しなんだよ、後は証拠さえ揃えばね、あれを、片付けられるところまで来てるのに、それがなかなか、捕まえられないんだ。

向こうもこっちが嗅ぎまわっているのを知ってるから、そろそろ派手なことを、仕掛けてくるはず。

もう、決戦は近いんだ」

と、かなは、いつもわたしには見せない、鋭い視線を、門塾さんへと向けながら、独り言のように、小さく呟いていました。

こうして、わたしはかなと一緒に、集合場所に並んで、準備体操をした後に、スタート地点まで行って、かなと合流しました。

本当なら、かなはわたしよりも全然早いはずだから、上位も狙えるんじゃないかと思って、それを尋ねると、  
「去年それなりに、良い順位だったから、今年はまだ、どうでもいいんだよ。

それに、マラソンの順位なんかよりも、守らないといけないものがあるしね」

と言って、かなはわたしを見ていました。

スタート地点に行った時に、

門塾さんと間宮さんは、周りには見当たらず、時間が来て、スタートしてからも、

かなとギルドのおかげか、

結局は、門塾さんのグループの人たちにも、

一度も会わずに、マラソンは終わりました。

わたしはずっと、かなと一緒に走って、かなは、わたしのペースに合わせたから、ほとんど最下位の順位だったけど、でも、久し振りにかなと長い時間、一緒にいられて、とても嬉しかったです。

かなの方も、前にしたメール以降、わたしのことが、気になっていたので、ゆっくり話せて良かったと、喜んでいました。

かなの話では、多分三年になる前に、決着は着くはずだって言っていて、

「やっと、理想通りになると思ったら、もう受験になっちゃうけど、

でもそれで少なくとも、三年生の1年間は、

平和な学校生活が、送れるはずだよ」「と、かなは言っていました。

もう少しだけ頑張れば、わたしも普通にクラスにいられるのかな。

今までずっと、避けられてきたのに、急に離しかけられるとは、思えないけど、でも、少しずつでも、

普通に接していけるようになれば、それでも、今と比べれば全然良い。

かなやギルドが、やろうとしていることが、

うまく行くように、わたしは祈っています。

そして、それまでの間は、  
もう少し、色々ありそうだけど、  
頑張っ て耐えてみせます！

2月6日 また不思議な夢を見ました

昨日は、マラソン大会の疲れが、  
まだ取れていなかったせいか、  
目が覚めたのは、もうお昼近くでした。

前にもたしか、変な夢を見た時に、  
寝坊した気がする。

これで3回目です。

ただ今日は、日曜日だったから、  
学校にも航海堂にも、影響はなくて良かったです。

今回見た夢は、今までのとはちょっと違って、  
あんまり童話っぽくなかったような、  
どちらかって言うと、なんかの例え話みたいな気がします。

内容はたしか、こんな感じでした……

あるところに、独りの騎士がいました。  
その騎士には、過去の記憶が無い代わりに、

不思議な力があつて、  
自分以外が望んだ物は、何でも出せるし、  
人が望めば、巨人並みの怪力も、  
誰も思いつかない様な知恵も、出す事が出来るのです。  
でもその力を使った後、  
人から好かれると、体が白くなり、  
人から嫌われると、黒くなると言う、  
変わった特徴もありました。  
ある時、夢の中で神様が現れて、  
お前は善行を重ねると、天使に近づき、  
悪行を重ねると、悪魔に近づくから、  
自分の正しいと思う道を選んで、  
進む様に言われました。  
騎士は、ならば天使を目指そうと決めて、  
旅を始めました。

騎士は、とある寂れた村に、立ち寄りました。  
そこは、戦争により男達の戻らない山村でした。  
村人の女達は、男達に帰ってきて欲しいと切に願ひ、  
騎士はそれを叶える事にしました。  
帰って来た男達を見て、村の女達はとても喜び、  
騎士に感謝しました。  
この時、騎士の体は、白くなりました。  
しかし、望んだ相手が現れる事に気付いた女達は、  
自分の望んだ通りの男達を要求して来る様になり、  
騎士はその願ひも、同じ様に叶えてやりました。  
女達の望んだのは、実在しない見た目も理想通りで、  
自分達の代わりに働いてくれる、男達でした。  
村の女達は、そんな理想の男達との、  
情事に溺れてしまい、毎日仕事もせずに、

欲望のままに過ごす様になってしまいました。

この時、騎士の体は黒くなっていました。

それに気づいた騎士は、これは正しく無いと悟って、もつと男が欲しいと喚く、女達から逃れて、

この地を後にしました。

次に騎士は、とある農村に、立ち寄りました。

そこは、凶作によって作物が実らず、

飢えに喘ぐ農村でした。

村の農民達は、貧しくて飢えていて、

食事も満足に出来ない状態なのを見て、

騎士は農民達に、力の付く食べ物を出してあげました。

飢え死に寸前だった農民達は、

与えられた食べ物を見て、とても喜び、

騎士に感謝しました。

この時、騎士の体は、白くなりました。

しかし、騎士の出した食べ物を食べた農民達は、

未だ足りないと言って、更に要求してきました。

今度は、農民達が普段食べていた物を出してやると、

彼等は見向きもせず、こんな物は食えないと、

文句を言うばかりで、もつと美味しい食べ物をと、

際限なく求めて来る様になってしまいました。

この時、騎士の体は黒くなっていました。

それに気づいた騎士は、これは正しく無いと悟って、

もつと多くのご馳走をと叫ぶ、農民達から逃れて、

この地を後にしました。

次に騎士は、とある港町に、立ち寄りました。

そこは、貿易商人が行きかう大きな港町でした。

町の商人の中に、商売で騙された商人が居り、

騎士の噂を聞いたこの商人は、

このままでは、夜逃げしなければならぬと、  
訴えてきて、当座の金を工面して欲しいと、

騎士は頼まれました。

騎士は、この商人を救う為に、

抱えた借金を返せるだけの、お金を与えました。

騙された商人は、これで夜逃げしないで済むと、

騎士に感謝しました。

この時、騎士の体は、白くなりました。

しかし、この救われた商人があちこちで話をした為に、

その話を聞いた他の商人達が、

次々と騎士の所へとやって来ては、

自分も騙されて、借金があると語る様になりました。

騎士は、尋ねてくる商人達の言う通りに、

必要だと訴える額のお金を、用意してやりましたが、  
それは次第に高額になって行き、やがて適当な嘘で、  
金を手に入れる者ばかりになってしまいました。

この時、騎士の体は黒くなっていました。

それに気づいた騎士は、これは正しく無いと悟って、  
際限無く金を欲しがる、商人達から逃れて、

この地を後にしました。

次に騎士は、とある都に、立ち寄りました。

そこは、広い庭と豪邸が立ち並ぶ、

貴族達の住む都でした。

貴族達の中に、領地での税金の徴集が思う様に行かず、  
万策尽きて、どうにもならなくなっている貴族が居り、  
騎士の噂を聞いたその貴族は、

金策に喘いでいて、困り果てていると訴えてきたので、  
騎士は、その資金になる様にと、

宝石を、貴族に与えました。

困っていた貴族は、これで我が領地は救われると、騎士に感謝しました。

この時、騎士の体は、白くなりました。

しかし、その財宝で豊かになつた途端、

貴族は今までの必死の努力はしなくなり、

貰つた宝石も私利私欲に浪費してしまい、

再び騎士へと、宝石を要求して来ました。

急に羽振りの良くなつた貴族を見た他の貴族達も、

同じ様に騎士の所へと訪れるようになり、

中には、同じ貴族が何度も頼みに来て、

前の額では足りなかつただとか、

別の借金があつたのを、忘れていただとか、

新たに理由をつけて来るばかりで、

皆、自分の力で解決しようとは、

しなくなつてしまいました。

この時、騎士の体は黒なくなっていました。

それに気づいた騎士は、これは正しく無いと悟つて、

求めるだけで努力しようとしないう、貴族達から逃れて、

この地を後にしました。

次に騎士は、とある砦に、立ち寄りました。

そこは、相次ぐ隣国や異民族の襲撃に晒されて、

疲弊した兵士達が駐屯する砦でした。

騎士の噂を聞いた、ある兵士が、

前の戦いで、自分の手柄を横取りされた事を訴えて、

手柄として与えられた地位や報酬を、

正当な権利を持つのは自分だから、

取り返したいと頼まれて、

騎士はその訴えを叶えてあげました。

兵士は、本来自分が得る筈だった地位と報酬を得て、騎士に感謝しました。

この時、騎士の体は、白くなりました。

しかしそうすると今度は、奪われた兵士が、

同じ様な事を言い始め、騎士はそれも叶えてやると、

この話を聞いた兵士達が、

次々と手柄や報酬の奪還を要求して来て、

奪い合いが起りました。

奪われた者達は、奪った者へと怒りをぶつけて、

やがて喧嘩が発生し、それは騒動へと発展して、

終には暴動と化してしまいました。

この時、騎士の体は黒くなっていました。

それに気づいた騎士は、これは正しく無いと悟って、

自分の正当性だけを主張して、

相手に怒りをぶつけるだけの、兵士達から逃れて、

この地を後にしました。

次に騎士は、とある宮殿に、立ち寄りました。

そこは、この国の役人の集まる美しい宮殿でした。

騎士の噂を聞いた、役人のひとり、

この国の為にするべき事を、

利己的な理由で阻む役人がいて、

国益の為に、それを排除したいと、

騎士に申し出があつて、騎士はそれを叶えて、

その相手を失脚させました。

役人は、これで国益が守られると感激して、

騎士に感謝しました。

この時、騎士の体は、白くなりました。

しかしこの役人の噂を聞いた、他の役人が、

同じ様に汚職や、買収や、癒着や、



独占の排除を求めて、騎士の力を頼り、騎士はその訴えを、全て聞き入れて、次々と高位の役人達を、失脚させて行きました。やがて誰もが、自分の地位と財力に固執して、自分よりも高い地位や、財力を持つ者を、失墜させるのを、繰り返し始めました。この時、騎士の体は黒くなっていました。それに気づいた騎士は、これは正しく無いと悟って、自分の利権の為に、邪魔な存在を、蹴落とそうとしているだけの、役人達から逃れて、この地を後にしました。

次に騎士は、とある城に、立ち寄りました。

そこは、この国の王様の居る大きな王城でした。

騎士の噂を耳にした、王様から、謁見に応じる様にと求められて、

騎士は王様に会いに行きました。

王様は、周囲の隣国から攻め立てられていて、悩んでいる事を、騎士に伝えました。

そこで騎士は、王様に力を貸して、周囲の敵国との戦争で活躍して、次々と敵国を撃破して行きました。

王の言う通りにすると、騎士の体は白くなりました。

やがて王様は、周囲の国々を平定して、更に遠方にあつた、脅威でも無い小国へ対しても、次々と戦争を始めました。

この時、騎士の体は黒くなっていました。

その事を騎士が問うと、王様は、小国もいずれ大きくなって、我が国の脅威になるから、その前に先手を打って、倒しておく事が、

結果的には皆の為になるのだと、答えました。

これを聞いた騎士は納得し、体は更に白くなりました。

王様の率いる軍勢は、

次々と大陸の各地へ攻め入っては勝利して、

敵国を滅ぼして行き、

その版図を、大陸中に広げて行きました。

やがて、大陸中の国を滅ぼして統一すると、

今度は大艦隊を作って、海を渡り、

他の大陸への遠征を始めました。

その事を騎士が問うと、王様は、

海で繋がっていれば、いずれこの国にも襲って来るから、

その前に先手を打って倒しておく事が、

結果的には皆の為になるのだと、答えました。

これを聞いた騎士は納得し、体は更に白くなりました。

王様の率いる大艦隊は、

他の大陸の国々と、次々と海戦を行っては勝利して、

敵国を滅ぼして行き、

その版図を、世界中に広げて行きました。

やがて世界中の国を滅ぼして、世界を統一すると、

自分の国の、大臣や貴族や将軍を処刑し始めました。

その事を騎士が問うと、王様は、

私の意志に従わない者達も、

いずれ、この平和を揺るがす脅威になるから、

その前に先手を打って倒しておく事が、

結果的には皆の為になるのだと、答えました。

これを聞いた騎士は納得し、体は更に白くなりました。

やがてこの世界には、

王様に逆らう者は、居なくなりました。

王様は騎士に、お前のおかげで、

世界は平和になったのだと、告げました。誰一人として、私に逆らう者も、背く者も居ない、私にとって、理想的な平和な世界が、と。この時の、騎士の体は真っ白で、背中には、立派な翼が生えていました。死人の様に青白い肌と、背中には黒い翼を生やした、天使は天使でも、悪魔と変わらない、墮天使となっていたのです。騎士は、王様の口車に乗せられて、王様の独善的な、偽りの平和を作る為に、最後まで、騙され続けたのでした。その結果、王様の統治の下で、戦争も争いも無い、平和な世の中になりましたが、それは圧政と恐怖による支配が蔓延して、抵抗する気力を失った、王様以外の誰も、不幸な世界になってしまいました。今頃になって、騙された事に気づいた騎士は、王様を倒そうと望む人間を探しましたが、もうこの世界には誰も、王様に挑もうと考える者は、いなくなっていました。王様への反逆を企んだ罪により、今までの功績を剥奪されて、騎士は追放されました。ここまでの展開は、全て王様の筋書き通りで、王様は初めから騎士を騙して、その力を、自分の為に使い尽して、完全な支配が手に入った後は、騎士を始末するつもりだったのです。

全てが、王様に仕組まれた通りになって、何もかも失った騎士は、

終いには、反逆者として賞金首にされて、

追手から逃げ続ける、当ても無い逃避行を続けました。

そんなある日の夜、夢の中に再び現れた神様は、

墮天使となった騎士を見て嘆き、

何故お前は、墮天使になったか分かるかと問われて、

騎士は、悪い王様に騙されたからだと答えました。

それを聞いた神様は、失望して、

お前が墮天使になった理由は、そうではなく、

お前は、人間の望んだ事、欲望だけを叶えて、

正しく導く事をしなかったからだ。

欲する物を与えるのが、善行では無い、

逆境や苦難に耐えて、それを克服する力を与えるのが、

善行なのだ。

失敗したお前の帰るべき場所は地獄だ、この愚か者が！

と告げて、怒った神様は騎士を地獄へ落としました。

こうして墮天使と化した騎士は、

神様によって地獄へと落とされて、再び地上に戻る事なく、

地獄で苦しみなから、永遠に過ごしました。

今までの夢も、そんなに良い終わり方じゃ、

なかった気がするけど、今回の夢は、

それにも増してひどい終わり方な気がする。

この騎士は、間宮さんのことで、

悪い王様が、門塾さんのような気がする。

神様は、間宮さんの親？

いまいち良く判らなかつた。

最後のお城に着く前の、色んな人たちは、きつと世間とか、周囲の人々を表しているっぽいなあ。

この夢を考えてみると、王様の言うことを聞いた騎士は、騙されていることに、気づいた時には、もう、手遅れになっていたから、間宮さんも、気づいていないところで、門塾さんは、何かを企んでいて、それに気づいた時には、間宮さんにとって、決定的に悪いことが起きるとか、そう言うことじゃないだろうか……

だとすると、次の勝負で絶対に勝たないと、もう手遅れになってしまつて、わたしから間宮さんへと、何かを命令出来る機会は、なくなつてしまつのかも知れない。

それに、間宮さんからのお願いつて言うのも、なんか良くない予感がする。

と言うことは次の決戦では、もうどんなことをしても、この勝負に勝たなくちゃいけない、そんな気がします。

それが卑怯であろうと、なんだろうと、勝負の条件さえ、満たしていれば、それ以外は、手段は選んでいられない。

そうしなくちゃ、もうわたしは間宮さんには勝てない。

そう思うから、次の勝負は、  
覚悟を決めて、必ず勝ちに行きます。

たとえば、どんな手を使っても……

2011年 2月 その2(前書き)

変更履歴

2011/04/13 記述統一 1年生、(中学)2年、高校3年  
2011/04/25 記述統一 1年生、二年、高校三年  
1ヶ所、2ヶ月、3ヶ月  
2011/08/08 記述統一 1ヶ所、二ヶ月、二ヶ月  
2人、3人  
2011/09/24 誤植修正 話し話

2011年 2月 その2

なつめの手紙を読んでから、1日考えて、次の最後の勝負を、どうするか決めました。

そして、それを実行する為に、かなに連絡を取って、必要な物と準備を頼みました。

かなは最初、わたしのやろうとしていることに、あまり良い反応はしていなくて、何度かわたしを、思い留めようとしていたけれど、わたしはそれを断って、一生のお願いだからと、頼み込んで、渋々だけど納得させました。

わたしがかなに依頼したことが、一番早く準備出来ても、今週末までかかるとのことだったから、その準備が整ったと、連絡を受けてから、間宮さんへと勝負の通知をしました。

それが、昨日の夜です。

間宮さんには、時間と場所と、準備してくる物だけを伝えておきました。

こんな、勝負の日ぎりぎりの連絡であっても、何をすることも伝えなくても、

間宮さんの返答は、相変わらずの即答でした。

どんな勝負であろうと、わたしには、



負けない自信があるんでしょう。

今日は、その思い込みを打ち砕きます。

勝負のせいで、体を壊すかも知れないと思って、今週は、バイトも休みにしました。

そして今日、指定した時間が迫ってきたので、わたしは支度して、その場所へと向かいました。

外は曇りが降っていて、

予報では、雪になるって言っていました。

天気も味方してくれているな……

荷物は、水泳の道具一式と、

事前になから受け取っていた、

学校の、室内温水プールの鍵です。

指定した時刻は、夜の9時、

場所は、もちろん凧高の室内温水プールです。

わたしが学校に着いて、

室内温水プールの扉の前まで行くと、

もうすでに、間宮さんは来ていました。

「時間通りだな」

2人で会う時と変わらない、いつも通りの様子で、白い息を吐きながら、声をかけて来た間宮さんに、

わたしは何も言わず、扉の鍵を開けて、中へと入りました。

照明をつけると、忍び込んでいるのが見つかるから、灯りはつけなくて、ほとんど真っ暗に近い中、わたしは、間宮さんへと最後の勝負の説明をしました。

最後の勝負は、潜水勝負だと。

間宮さんはそれを聞いて、プールの向こう側を眺めた後に、しゃがんでプールの水面を触っていました。

このプールを見て、自分の勝ちを確信してみたみたいで、

「勝利の条件だが、先に向こう岸に着いても、

勝ちでいいのか？」

と、尋ねてきました。

わたしは、それでもいい、と答えてから、水着に着替えました。

この日の為に、今週は家でも特訓してきたし、今日だって、体を慣れさせてきたんだ。

絶対、負けない。

わたしも間宮さんも、水着に着替え終わって、お互い、準備出来たのを確認すると、真ん中の2つのコースのへりに立ちました。

わたしがスタートの合図をする、と伝えて、

それに、間宮さんが頷いたのを確認してから、わたしは、深呼吸をした後に、位置について、よいい、どん！と叫びました。

それと同時に、わたしは、自分のコースではなく、間宮さんのいる隣りのコースへと向かって、全力で飛びました。

飛び込む直前に、これに気づいた間宮さんは、体をひねって、飛びかかるわたしへと身構えるように、体を反転させてきました。

さすがは間宮さんだ。

わたしは間宮さんにぶつかりながら、2人でくっついた体勢のまま、

間宮さんは背中を下にして、水面へと落ちました。

その瞬間、驚いた間宮さんは、全身を硬直させて、思わず叫びそうになって、口をあけてしまい、空気を吐き出したのが判りました。

ここは、温水プールだけど、今日は水泳部も使っていないなくて、水温は真水です。

でも、プールサイドの近くだけは、熱湯を注いで、上だけは温度が上がるように、仕込んでおいてもらったんです。

だから、このプールは、  
沸かして混ぜてないお風呂と一緒に、  
水面近くはぬるいけど、中は冷たいんです。

さっき、手で触って温度を確認したつもりだった間宮さんは、  
予想外の冷たさに、硬直したんです。

わたしは今週ずっと、冷たいシャワーとか、  
真水のお風呂に入って、  
冷たいのに、体を慣れさせておいたから、  
この隙について、間宮さんを押さえつけながら、  
プールの底へと沈めました。

そこにも、事前に仕込んでおいてもらった、  
ロープが何本か、コースを横切るように漂っていて、  
これは、プールを横断するように、  
重りをつけて沈めてあって、  
これにつかまれば、簡単に自分が沈んでいられるように、  
準備させておいたものです。

わたしは、ロープに手足を絡ませた後、  
もがき始めた、間宮さんの胴体に、  
背中から、手と足をを回して、  
水中で、羽交い絞めにしました。

水中であることと、水の冷たさのせいで、  
さすがの間宮さんも、思うように対処できず、  
わたしの手足を、外すことが出来ません。

泳ぐ速さとか、距離を競うとは言わずに、わたしは、ただ潜水の勝負と言っただけです。

これが、わたしの最後の手段でした。

こうして、間宮さんの不意をうってその分有利にして、純粹な潜水時間で、勝ちに行っただんです。

わたしは、暴れる間宮さんに気を許さずに、間宮さんから負けを認めるか、どちらかが窒息して気を失うまで、放す気はありませんでした。

この勝負は、何があっても勝つ！

絶対に負けられない！

そう思って、必死にしがみついていたら、間宮さんの抵抗は、段々と弱まってきて、それと同時に間宮さんは、口から大きく空気を吐き出したのが判り、その後、完全に無抵抗になりました。

この時間間宮さんは、気を失ったようで、自分から浮き上がるうとする気配が無かったから、わたしは急いで、つかんでいた手足を解いて、ロープを放してから、間宮さんの顔を水面へと上げて、間宮さんを抱えて、コースの脇へと移動しました。

間宮さんは、水面に顔を出したら、

すごく荒いむせるような息と咳をして、  
やっとの思いで、プールから上がると、  
その場に倒れこんでしまいました。

その直後、真つ青な顔で激しく咳き込みながら、  
大量の水を吐き出していました。

わたしは、持ってきたバスタオルを、  
間宮さんの体にかけて、背中をさすっていました。

苦しそうな、間宮さんを見ていたら、  
やりすぎてしまったかと、思えてきてしまい、  
今さら怖くなって、自分の体が震えるのが判りました。

こんな、ひどい目にあわせた張本人だから、大丈夫？  
って言うのも変だし、なんて声をかけて良いのかも、  
良く分からなくて、黙って間宮さんが落ち着くまで、  
体を拭きながら、横向きになって倒れている、  
間宮さんの背中を、ひたすらさすっていました。

どれくらい時間が経ったのか、判らないけど、  
しばらくしたら、飲み込んだ水も吐いて、  
大分呼吸も落ち着いてきた間宮さんは、  
自分で体を起こそうとしたので、  
わたしはそれを手伝って、座らせました。

まだ、浅く口で呼吸はしていたけど、  
さっきに比べれば、顔色もすこしは良くなってきていたし、  
わたしの方をしっかりと見つめているのが判って、  
もう、心配する状態は脱したみたいだと、

判りました。

間宮さんが、もう大丈夫だって判ったら、この状況でなんて言ったら良いのか、判らなくなつて、何も言えずにいると、

「最後、頭を出すの、お前の方が、先だったな」と、きれぎれに間宮さんから聞かれて、それにわたしは、違う、と一言答えました。

そしたら、間宮さんは、

「そうか、判つた。」

そこまで、判つて、やっていたんだな。

三崎、この勝負、私の負けだ」

と、負けを認めました。

間宮さんが、気を失つたと思つた時も、

助けることを優先するなら、まず自分が先に顔を出して、相手を抱えて、顔を出させるところですが、

わたしは、その瞬間も勝負のことを考えていて、これが間宮さんの、捨て身の作戦ではないかと疑つて、まず最初に、間宮さんの顔を水上に出したんです。

それは救助よりも、

自分の勝ちを優先した上での行動でした。

もしかしたら、ほんの数秒の違いだけど、

この行動のせいで、取り返しがつかないことになるかも知れないって、思ったりもしました。

でも、それでもわたしは、勝負を優先しました。

それはこの勝負に賭けた、  
わたしの決意の表れでもあつたんです。

間宮さん、やっぱり、あれは捨て身の反撃だつたんだ。

本当に溺れてまでして、

自分の体より勝負を優先して来たんだ、間宮さん。

あんまり、人のことは言えないけど、

そこまでして、わたしに勝って、

何をさせようとしていたんだろう。

これは、後でゆっくり聞くことにしよう。

まずは、早くここから出ないといけない。

わたしと間宮さんは、着替えてから、

プールを出ると、元通りに鍵をかけて、

学校を後にしました。

すごく寒いと思ったら、

体が冷え切っているせいもあつたけど、

降っていた霰は、すっかり雪に変わっていました。

学校を出たところに、タクシーが止まっていて、

そこから数人の若い人が、降りてくるのが見えました。

それは、かなが用意してくれたハイヤーで、

乗っていたのは、プールの仕込みの後始末をする為に、



ここへ来た人たちで、わたしは予定通りに、この人たちに鍵を渡すと、

間宮さんをタクシーに乗せた後、自分も乗り込みました。

乗り込んだらすぐに、間宮さんから、

「三崎、ひとつ提案なんだが、

まずは体を暖めてから、話をしないか。

それで良ければ、私のアパートへ行こう」

と言う提案がされたので、そうすることにして、

間宮さんのアパートへと向かいました。

アパートに着くと、間宮さんは、

まず石油ストーブを点けて、お風呂を沸かし始めました。

その後、わたしにお茶を出した後に、

先にシャワーを浴びてくると言って、

間宮さんは、お風呂に行きました。

10分くらいしたら、間宮さんは出てきて、

「風呂も沸いたから、入ってくれ」

と言われて、わたしはお言葉に甘えて、

お風呂に入りました。

間宮さんの家のお風呂は、

うちの同じ、給湯器がくつついている、

狭くて深い湯船をした、古いタイプで、

うちのよりも古そうで、すごい音がして怖かったけど、

普通に使えました。

湯船に浸かって、さっきの勝負のことを思い出して、

わたしは勝ったんだなあ、  
と、やっと実感が沸いて来ました。

後は、わたしが聞きたかったことを、  
全部間宮さんから聞き出して、全てを明らかにしてから、  
何をどうするかを考えなきゃいけない。

それと、間宮さんのやろうとしたことも、  
聞いておきたい。

今日は長い夜になりそうだなあ、  
と思いつつ、わたしはお風呂を出ました。

部屋では、ジャージに着替えた間宮さんが、  
座って待っていて、私がテーブルの正面に座ると、  
間宮さんは話し始めました。

「三崎、勝負はお前の勝ちだ。

お前の望みは何だ。

私を殺しかねないところまでしていたんだ、  
それ相応の、命令があるのだろう、それは何だ」

間宮さんの質問に対して、わたしは、  
まず、間宮さんの過去について、  
正直に話して欲しい、と伝えました。

間宮さんは、軽く溜息をついてから、  
「判った、かなり長くなると思うが、  
構わないな？」

と言った後、わたしが頷くのを見てから、

話し始めました。

「私の名前からして、もう正体は判っているとは思いますが、私は指定暴力団の、白永組の今の組長である、  
間宮<sup>まみや</sup> 四良<sup>しろう</sup>の娘だ。」

と、言っても私は両親を良く知らないし、  
実の母とは会った事もない。

母は、体の弱い人で私を生んだ時に、  
死んでしまったからだ。

間宮 四良は、母の死が受け入れられず、  
逆上した拳句、母の死ぬ原因となった私へと、  
憎しみをぶつけて、殺そうとしたらしい。

それを諫めて、命を救ってくれたのが、

間宮 四良の兄にして、臥龍会組長の、  
間宮<sup>まみや</sup> 慶三<sup>けいぞう</sup>だ。

伯父貴は、私を引き取って、  
命と言う名を付けてくれた、名付け親でもあり、  
中学を卒業するまで、育ててくれた恩人だ。

私はずっと、出生の事実を知らされるまで、  
伯父貴の実の娘だと信じて、生きて来た。

幼稚園も、小学校も、中学校も、  
伯父貴は私に配慮して、屋敷から遠くの所を選んで、  
親の事も家の事も、学校では秘密裏にしていたけど、  
そう言う噂は、どうしても漏れてしまうもので、  
結局どこでも私は怖がられて、避けられてきた。  
でも、そんなのは、気にせず生きて来たんだ。

たとえ、友達と呼べる相手がいなくても、  
家に帰れば、優しい伯父貴がいたから。

私は幼稚園に入った頃から、  
伯父貴に体術を習うようになった。

私にとつては、この時間が何よりも好きだった。  
普段は忙しい伯父貴を、私が独占出来たから。

中学に入る頃には、私はかなり強くなっていて、  
一部の組員にしか教えていない、この体術を、  
私は大人の組員と、互角にやり合えるくらいの、  
強さにまで上達していた。

中学二年になった頃、屋敷に見知らぬ客が来た。  
陰険で神経質そうな男と、けばい女の2人だった。  
伯父貴は私を呼んで、その客の前に座らせた後に、  
ここに居るのが、お前の実の父親と継母だと、  
伯父貴から説明された。

その時のそいつらの顔を、私は忘れない。  
あの忌々しそくに私を睨んだ目を。

それが事実なのは、伯父貴はそんな、  
つまらない嘘をつく人ではないから、  
頭では判っていた。

それにこの家には、母親がいた気配が全くなかったし、  
誰もその事を教えてくれなかったから、  
伯父貴の奥さんは、若い時に亡くなっている、  
知らされた時にも、あまり驚かなかった。

でも私は、ずっと伯父貴の娘でいたかつたんだ。  
そう思ったら、こんな冷たい目をした奴らを、  
自分の親だなんて、思いたくなくて、  
普段なら、どんな命令でも、

伯父貴の言葉は絶対だと、信じていたけど、この時ばかりは、いくら伯父貴の命令でも、どうしても聞けなかった。

私は、嘘だと叫んで、その場から逃げ出した。

親父と信じていた伯父貴の口から、

そんな言葉を、聞きたくなかった。

私はこの時、初めて悲しくて泣いたのを覚えている。今までどれだけ避けられようと、耐えて来れたのに、私が悔しかつたのは、あいつらが実の親だと、知ったからじゃなくて、伯父貴が本当に、実の親じゃなかったのが、悔しかったんだ、と思う。

この日の夜に、伯父貴から改めて呼び出されて、

私は、高校生になったら、実の両親の元へと戻って、白永組の娘として、暮らすのだと告げられた。

それはつまり、あいつらの手駒となって、

人生を捧げるって事だと思えて、

私はそれは絶対に嫌だと、伯父貴に訴えた。

そして、私は伯父貴の娘になりたいんだと、

必死で訴えたんだ。

人前で泣くなと言う教えも破って、

人前で見苦しい真似をするなど言う教えも破って、

伯父貴にすがり付いて、駄々をこねて、泣きついて、

土下座もして、何もかもかなぐり捨てて、

必死にお願いした。

でも、それは聞いてもらえなかった。

私が高校生になるまで預かる、と言うのが、

初めからの条件だったと、この後に聞かされた。

だから伯父貴は私に、独りでも生きていける、心の強さを持たせる為に、本来は門外不出の、間宮流体術を教える事で、私の精神を鍛えていた。どれだけごねたところで、

伯父貴の考えは、もう変わらないのが判って、

私は今の態度を詫びてから、判りました、とだけ答えて、この日は部屋に戻った。

私は伯父貴から、この間宮流体術を、

受け継ぐ事で、それを伯父貴との絆にしようと決めて、あの日から、中学を卒業するまでの2年間は、体術の修行を、今まで以上に頑張った。

三年の終わり頃には、伯父貴との勝負でも、かなり張り合えるくらいに上達した。

そして、中学の卒業式が終わって、私は卒業した。

この日の夜に、伯父貴のところへ行って、

今まで育ててくれた事への感謝のお礼と、

私にとっての父親はただ1人、

伯父貴だけだって伝えたんだ。

この時の伯父貴は、難しい顔をしていたよ。

これは、今になって考えると、

まるで嫁ぐ娘の挨拶みたいだったな。

そしてこれが、臥龍会に出入り出来る最後の日になった。

私は伯父貴に絶縁されたんだ。

こうして私は、戻る場所を失って、

あいつらの所へと行った。

家は伯父貴のところの、いかにもヤクザって感じの、料亭みたいな屋敷とは違って、大きなマンションで、それも組の持ちビルだとか、あいつは自慢げに言っていた。そして、私はそのマンションから離れた、小さなワンルールのマンションを与えられて、新しい生活が始まった。

高校生活は、今までとは違って、悪い意味で孤独ではなかった。実は、顔合わせの時には来ていなかった、海外留学中の継母の息子がいて、そいつが組の名前を使って、あちこちで、やりたい放題していたから、間宮の名前を聞くと、大半の奴から白い目で見られて、更にそのうちの半分くらいからは、何かしらのちょっかいを出されたんだ。

一番多かったのは、お前の兄貴に貸しがあるって言って、たかってくる奴らだったよ。どうやら兄である男は、親が白永組だと言っては、偉そうにしているくせに、喧嘩は出来ない根性なしで、すぐに金で解決していたらしいのが判った。それで味をしめた奴らが、たかつてきたから、私はそいつらを全部叩き潰した。そしたら、3カ月で退学になった。

間宮 四良は、私にどうしても高学歴をつけたいから、大金を積んでも、大学卒業まではさせるつもりで、すぐに、次の高校を用意して来た。その裏にあるのは、私を間宮の令嬢にでもして、

血縁関係を結ぶ駒にしたいから、

商品価値を上げようと、企んでいるのが見え見えで、反吐が出る思いだったけど、それなら、

私は顔も知らない兄の、尻拭いをしてやろうと、

間宮の妹と知って、色んな事を言っただけで近づいて来る、馬鹿な奴らを潰し続けた。

勿論、問題を起こす度に、間宮 四良は、

顧問弁護士を連れてきて、取り繕おうとしたけど、

それでもどうしようもない、堅気の世界で力のある、親の馬鹿なガキを叩いてやったら、

さすがに庇いきれなくて、退学になった。

1ヶ所には、どんなに長くても3ヶ月もいなかった。

早い所では1ヶ月も、もたなかった。

それを繰り返して、私の通う学校は、

どんどんあいつの家から、遠ざかって行って、

そして、家からかなり離れた、この風高へとやって来た。

県も越えて、ここまで遠ざかると、

さすがに馬鹿な義兄の存在はなくなっていた。

それと同時に、もう間宮の名前を聞いても、

白永組や臥龍会の事に、気付く人間もいなくなった。

それと同時に、あいつらは世間体を気にしなくても、

良くなったからか、私に与える家は安アパートになって、

生活費もかなり減らされた。

でも私は、そんな事は気にならなかった。

ここまであの家から、遠ざかる事が出来ただけで、十分気が済んだからだ。

でも、間宮 四良もさすがに頭に来ていたようで、



これ以上、問題を起こすようなら、  
高校卒業まで、施設に監禁すると、  
脅されて、これからは、

目立たないようにしなければいけなくなった。

せつかく正体が知られていない所へ来たんだから、  
下手に、周りの人間と関わらずに、  
静かに大人しくしておこう、と思って、  
揉め事も起こさないように、気を使っていた。

その代わり、陸上部に入って、  
足の速さで周りと勝負して、過ごす事にしたんだ。  
せめて、陸上競技で、頑張っていければ、  
それだけでいいと思った。

ここら辺までが、私の過去だろうか。  
ここから先は、お前も知っている、  
この学校での生活だ。

次は、どうすれば良い？」

間宮さんは、わたしに尋ねてきたから、  
わたしは少し考えていると、  
心配していた葵ちゃんのが、頭に浮かんだので、  
陸上部や葵ちゃんのことを、聞きたいと、  
間宮さんに伝えました。

「陸上部では予想通り、私は速くて、  
実力の無い先輩共に、目を付けられたけど、  
そう言うのは慣れていたし、弱い奴には興味も無いから、  
どうでも良かったんだが、

予想外だったのは、葵や他の一年生達だ。  
葵達は何故か、私と話したかった。

それは、予想外の出来事で、最初は戸惑ったけど、  
そのうちに慣れてくると、こういう関係は、  
私が伯父貴を慕っていたのと、同じなのかと思って、  
こいつらは、出来る限り守ってやろうと思った。

わたしは下手な揉め事になるのは、嫌だったから、  
6月末の地区予選は、二年の先輩共から、  
圧力をかけられたら、それに従って出なかったし、  
9月にあった、新人戦の県内地区予選の時は、  
要求通りに、わざとぎりぎりまで負けてやったよ。

この事が、一年生の中でも一番懐いていた、  
葵が気にしてしまつて、余計な気を使わせてしまったのは、  
今でも後悔している。

夏休みに入ってから、門塾からの脅迫があつて、  
頻繁に呼び出されるようになってしまい、  
部活には行けなくなった。  
合宿に出なかつたのも、門塾のせいだ。

これを期に、私は葵達を巻き込みたくなくて、  
距離を置こうと、し始めた。

それで葵には、とても冷たく当たってしまったが、  
あの時は、私から離れて欲しくて、  
心苦しかったけど、これが葵の為だと信じて、  
私は出来るだけ、葵の相手をしないように避けた。

そのせいで、葵がとても悩んでしまったのは知っている。だから、今日の勝負に勝ったら、葵も信頼していたお前に、葵の事を面倒見てもらおうと、託すつもりだったんだ」

間宮さんは、最後に気になることを言ったけど、まず先に、ひと通り話を聞こうと思い、次に、スカルヘッドと門埜さんについて、尋ねました。

「門埜達は、私が編入してすぐに、周りの奴らが、ちょっかいを出してきたが、出来るだけ、問題を起こさないようにしていた。だが、あまりにも鬱陶しかったから、一度軽く倒してやったが、お話しにならないのが、良く判って、二度と手を出さないようにしようと思った。

奴らからの嫌がらせは、体育祭でもあったが、あの程度は、伯父貴との練習に比べれば、なんて事はなかった。

夏休みに入つてすぐに、学校で窃盗事件があった。あれは、門埜達の仕業だ。あれは私の事を確認する為に、手下を使って、盗みに見せかけて、職員室を漁らせたんだ。

あの事件の後に、それは間違いなく門埜の手下であろう、マネージャーと名乗る男から、私は脅迫された。秘密をばらされたくなければ、言う事を聞けってね。

何をさせるのかと思ったら、真っ黒の服を用意してきた、それを着て標的の相手を襲えと、命令された。

こんな奴の言う事を聞くのは、不満ではあつたけど、ここで騒がれると、あの嫌な家に呼び戻されて、身柄を拘束されてしまうかも知れない。

それだけは、絶対に嫌だったから、

渋々だが、言う事を聞いたんだ。

そしたら私は、スカルヘッドのリーダーにさせられた。

スカルヘッドは、私のような門塾に脅された人間が、集められた集団だった。

だから、全員正体が判らないように、

夏なのにマスクまでしていて、

メンバー同士でも、互いに誰かすら判らなかつた。

それを把握していたのは、マネージャーだけだ。

マネージャーは、数人いたのは判っているが、

こいつらの正体は、私も判らない。

多分、門塾の子飼いの人間だとは思うが、

この学校の生徒じゃないだろう。

それと、マネージャー共は、暗黒女王と言う組織の、メンバーでもあるような事を言っていて、

ナイトがどうの、とか、話をしているのを、

聞いたことがあるが、それ以上は良く判らん。

渋々これに付き合っていた私は、

あまり、マネージャーの命令に従順じゃなかつたから、態度が悪かつたのを、門塾に報告したらしくて、

二学期になると、門塾の手下から、

自分達の力を見せてやるとか言い出して、

何をするのかと思えば、あの席替え拒否だった。

これで、担任に言って解決しようとしても、無駄だと示したかったらしい。

そんな事は、とつくに判っていた私が、

一向に態度を変えないのを見て、今度は、

もつと従順な態度を取らないと、

かわいい後輩が、ひどい目に遭うと脅された。

この後、本当に葵や三崎が襲われかけたのを知って、

私はこの新たな脅迫に、屈したんだ。

この後は、もう私はひたすら門塾の飼い犬になった。

言われるがままに、全てを実行した。

あの下らない格ゲーも、あのどうしようもないクラスの、

副委員長も、何だっやってやってやった。

この頃に、偶然だと思うがスカルヘッドとして、

襲撃しているところを、三崎に見られたな。

この後の、スカルヘッドの襲撃の時、

いつもなら、多少は強そうな奴が標的なのに、

女なんて珍しいと思ったら、三崎だったから驚いた。

更に驚いたのは、あの助けに来た男だ。

久し振りに血が騒いだが、それは我慢して、

お前を逃がすのに丁度良いから、黙って見ていたよ。

そしたら、あの男上手くやってくれたから、

助かった。

年末になると、門塾の支配下に無い奴等が暴れ始めて、  
そいつらが白刃って言うチームだと聞かされた。

マネージャーの男は、次の相手は、

こいつらになると言っていた。

それを聞いて、どうやら門塾と対立する、少しはまともな奴等が現れたのか、と思った。

この後に、そいつらはこの尻高の裏組織だった、ギルドに所属するグループだと知らされた。

年が明けた頃になると、学校では平静を装っていたが、裏での門塾の態度は、かなり苛立っている事が増えた。どうもギルドの奴らの動きに、腹を立てていたらしい。

特に、白刃の女王狩りには、暗黒女王のメンバーとしての、門塾の立場も、悪くなる程の効果が出ていたようだ。

門塾は、今年に入ってから何かに気づいたらしい。

その詳細は判らないが、近々スカルヘッドだけではなく、自分の手駒も動員して、派手に何かしようとして、企んでいるようだ。

私を知るのは、その程度だ」

わたしはこの後、間宮さんがわたしのことを、どう思っていたのか興味があつて、聞いてみました。

「最初に見た時は、他のクラスの奴等と同じで、私とまともに、目も合わせられないし、ビビっているのは、すぐに判ったから、どうでもいい奴らの1人だと、見下していた。

ちょっと見直したのは、プールだった。で、ちょっと試してやろうと思って、軽く脅かしてみたんだ。

そしたら水泳のリレーで、意外に根性を見せたから、あの時に、三崎の事を見直したよ。

でも、葵に色々尋ねていたのを聞いて、

私の過去を、嗅ぎまわっていると思った時は、キレてしまつて、三崎をしめた事もあつたな。

あの時は、本当に済まなかつた。

でもそれからお前は、私に付きまとうようになって、その態度が、かなり怪しかつたから、てつきりレズのスーツーカーだと思つてしまった。ただ、葵への配慮もあつて、

あの時は友達として扱うとは言つたものの、

私は、そう言うのに免疫がないから、

あの時は、本当に引いた。

でもそう言う理由で近寄つてきたのなら、自分の正体について、嗅ぎ回っていたのでは、なかつたのが判つて、ほつとしたのも事実だ。

夏休みに、河原のサイクリングコースで、

出会つたのは、完全に予想外だつた。

あの時は、尾行されているのかと疑つたが、

ある意味これは、好かれていふと言ふ事なのか、とも思えて、それほど悪い気はしなかつた。

河原で見たあの黒猫は、私が睨んだ動物の中でも、

5本の指に入るくらい、本当にいい根性をしていた。

私が睨んだら大半の動物は、すぐに逃げ出すのに、

あの猫はぎりぎりまで、睨み返していたからな。

今でなら言える、この飼い主にして、あの猫だったと。

でもその後、河原で泣いている三崎を見つけた時は、とても驚いた。

この時は、うちでも庭で死んでいた猫を弔っていたし、あの動物病院は、この頃から探していて知っていたから、何だか放っておけなくて、手を貸した。

猫を奪った時の、あの時のお前の気迫は、正直驚いた。診察室で倒れたのは、もっと驚いたけどな。

あの帰り道、実のところ私はかなり緊張していたんだ。あまり他人とは、殴る蹴るとか締め技以外で、くつつく事はなかったから。

赤ん坊の頃はあつたのかも知れないが、私は他人から抱擁したり、されたりした記憶がないんだ。だから、とても緊張したのを覚えている。

親しい間柄なら、スキンシップだってあるだろうから、友達ならこういうのは、大した事じゃないんだらうな。でも、胸は普通揉まないよな、とも思ったがな。

夏休みの最後に会った時に、三崎からされた質問には、かなり焦った、と言うよりも怖かったのを覚えている。何でこいつは、名前の事に拘るのかって。

あの頃はスカルヘッドの呼び出しで、かなり苛々していたから、余計に癪に障った。もしかして、こいつも何かつかんでいるのかとか、勘ぐってしまった、それが態度に出てしまった。

二学期が始まって、新人戦の県内地区予選に、三崎が見に来ていたのは気づいていた。



どうして見に来ているのかは、疑問に思っていたが、この時は、夏休みの事もあるし、下手に近づかない方が、良いと思った。それで、お前を避ける為に、いつも走っていたコースを変えた。

そうしても、またお前は現れた。

そして私の事を、追求してきたんだ。

どうして、そこまで知っているのかと言う恐怖と、日々門塾に振り回されて、苛々していたのもあって、ついキレてしまって、お前を殴ってしまった。

あの時は、さっきのお前と同じで、

自分が傷つけた相手を、心配する言葉が浮かばなくて、いたたまれなくなつたのと、

これ以上、お前に追求されるのが怖くて、

あの場所から逃げ出したんだ。

あの時は、本当に申し訳ない事をした。

そんな風に思っていた時に、スカルヘッドとして、三崎がターゲットだと知った時は、とても動揺したんだ。

その後は、せめてもの罪滅ぼしだと思って、

文化祭の演芸の時に、手助けしたりした。

お前の潜水での限界時間は、判っていたから、命懸けでやろうとしている、お前を止める為に、少し小細工もした。

そしてその後は、一番わけが判らなかつた、

決闘の申し込みだ。

うちの前に現れたお前の態度は、門塾共に続いて、こいつにも、全てを知られてしまったのかと、シヨックは大きかった。

内心、お前を信用したいと思っていたのもあって、裏切られたように感じて、悔しい、と言うよりも、なぜか悲しいと感じた。

あの時に、白永組の名前を出される分には、もうこれは仕方がないなど、諦めていたんだ。

だがお前は、臥龍会の名を出した。

伯父貴の名を汚すような真似は、死んでも出来ない。

伯父貴や臥龍会との関わりが知られてしまえば、

私がどうしてそこにいたのかも、

勘ぐられるに決まっている。

そうすれば、私はあいつの本妻の娘ではなく、

妾だった母の子供である事も、そのうちに暴かれる。

そんな子供を、伯父貴が面倒見ていたなんて、

そんなのは臥龍会の恥だ。

だからそれだけは、絶対に何があっても、

知られてはいけなかった。

私にとってこれは、一番知られてはいけない秘密だった。

その秘密をかけて、勝負すると言い出したお前を、私はどうしようかと、悩んでいたよ。

正直、あの場で二度と喋れないように、してしまおうかとも考えた。

だけど、ギルド云々と言っていたから、

こいつ一人の、口を封じても駄目だと判って、

勝負に応じるしかなかった。

あの時のお前の目は、真実を語っている目だったから、その言葉を信じたのも、あるけどな。

そして、成績を賭けた勝負と、オセロ勝負をした。

あれは、私にとっては遊びみたいなものだった。

他人と喧嘩以外で、何かを争ったのは、

あれが初めてだったから、とても楽しかった。

何だか友達みたいで、な。

それに、私が勝ち続ければ、

三崎は止めようとはしなかったし、

勝敗が着くまでは、秘密も口外されないのもあって、

私はこうして、勝負をしているのも、

悪くはないなと、思っていた。

今日の最後の勝負は、見事に負けた。

最後の賭けでもあった、捨て身の手でも、

お前は人命の救出を優先して、

最後の最後で、しくじるのに賭けたんだが、

それにも、冷静に対応してきたし、

それが偶然だった期待を込めて、

かまをかけてみたが、それにも引つかからなかった。

あの時はつきりと、違う、と言い返された時、

初めて、完全に負けたんだって、理解した。

三崎、お前の事は最初はどうでもいい奴だった。

だけど、時間が経つ内に、認める存在になって、

いつの間にか、勝手に友達のように思っていた。

私は自分が思っているよりも、

三崎の事を、気に入っていたみたいだ」

そう言って、間宮さんは話を区切りました。

これで過去については、ひと通り聞きました。

次は、これからのこと、わたしに勝った時、何をしようとしていたのかについて、尋ねました。

「私が、お前に命じたかった事はたった一つ、私がいなくなった後、葬の事を、支えてやって欲しい、それだけだ。私はそれを、お前にやってもらいたくて、この勝負で勝って、終わりにしたかった。

もうそろそろ、この土地に居続けるのも、限界を感じていたところだったし、このままでは、門塾に私の周りの人間が、私のせいで酷い目に遭わされる。だから、これ以上酷い事を仕掛けられないうちに、ここから離れようと考えていた。

こんなに長い間いたのは、中学以来だし、私としても共にいたいと思った相手が出来た、初めての所だったから、出来る事なら、自分の居場所にしたかったが、それは許されないみたいだ。

それともうひとつ、これは実現出来ない事なんだが、実は去年の後半から、伯父貴が体を壊していて、

あまり病状も良くない事を知らされた。  
だから、出来る事なら伯父貴に会いに行きたい。  
でも、もう私は最後の日に、絶縁されていて、  
臥龍会の敷地には、二度と入るのを許されていない。

だから、あの屋敷には戻れないし、見舞いにも行けない。  
けどどうしても心配だし、会って話したい。  
それが叶うなら、この命は惜しくない。

でも、伯父貴からの最後の約束事を破るのは、  
伯父貴の言葉を、軽んじているような気がしていて、  
どうしても、気が引けてしまう。  
だからこれは、叶わない夢なんだ。

私は未来永劫、父と慕う伯父貴に会う事も出来ず、  
実の親だが、他人以下の存在である、間宮 四良から、  
逃れられずに、もがいているだけの、  
この忌々しい血筋に縛られた、  
つまらない人生を送るしか出来ないんだ」

わたしはこの話を聞いて、とても腹が立ちました。

間宮さんは、普段周囲の人を力で威圧しているけど、  
自分のことになったら、過去からも、今の立場からも逃げて、  
立ち向かわなければならぬ、未来からも逃げているだけだ。

その負い目があるから、本来なら、  
何が何でも会いに行くはずの、  
一番大事な、伯父さんのお見舞いにすら、  
後ろめたくて、顔を合わせる事が出来なくて、

伯父さんの最後の言葉を、その言い訳にして、  
伯父さんの所にも、会いにいけないうて、  
言っているんだ、とわたしは思いました。

そしてここからは、門塾さんに追い詰められたのを、  
周りにいる人のせいにして、また逃げようとしている。

間宮さんは、偉そうな態度と言葉で、  
今まで色々言ってたけど、結局は、  
自分が嫌なものから、逃げ続けているだけだ。

そんなことしてたって、何にも解決出来ないし、  
取り返しがつかなくなるものだって、  
このままじゃ、出て来るに決まってる。

それも判っているくせに、間宮さんはまたしても、  
逃げ出そうとしているんだ。

あんなに慕ってくれていた葵ちゃんを、  
わたしに押し付ける、みたいなことまでして。

こういうのは許せないし、そんな身勝手なことはさせない。

ここで逃げたら、今までと同じで、  
これからも、ずっと逃げ続けるんだから。

間宮さんは、そんなつまらない人生を、  
送らなくちゃいけない人だとは思わない。

そう言う人生が、まるで自分に科せられた、

宿命みたいに思っているように思えて、  
こんなに強いくせに、そんなふざけた考えをして、  
全てを諦めているような、間宮さんの言葉に、  
わたしはすごく苛々してきました。

そこでわたしは、間宮さんに、幾つかの命令を出しました。

1つ目は、実家へと行って、

正式に自分を自由にして欲しいと、両親に頼んで来ること。

2つ目は、伯父さんの所へと行って、実家での話と、

自分の気持ちをもう一度、伯父さんに伝えて、

自分の過去を、公開する許可を取ってくること。

3つ目は、ここへ帰ってきて、

葵ちゃんに、今までのことを謝ってから、

もう二度と突き放したり、離れようとしたり、

しないと約束すること。

4つ目は、わたしと友達になって、決して、

勝手にいなくなったりしないと、約束すること。

5つ目は、クラスのみんなの前で、

自分の過去を、告白すること。

6つ目は、自分を頼ってくる人には、

分け隔てなく、協力してあげること。

7つ目は、自分が正しいと思うことをすること。

8つ目は、自分に嘘をつかないこと。

9つ目は、自分の気持ちを誤魔化さないこと。

最後は、自分の気持ちに素直に正直に生きること。

これを全て、実行するようにと、わたしは、間宮さんへと命じました。

間宮さんは、そんなことは無理だと言わんばかりに、とても困った顔をしていました。

でもそんなのは、わたしの知ったことじゃない、勝負に勝った方が、負けた方へと、好きなだけ命令出来るはず、そう間宮さんへと、告げました。

それでも黙ったまま、困惑している間宮さんに、わたしは、間宮さんの両手を握って、過去も、今も、正面から向かい合ってみれば、きつと何かが見えてくるから、だから、もう逃げないで欲しいと、一生懸命、伝えました。

「でも、そんなのはきつと出来ない」と、間宮さんは言い出したのを聞いて、わたしは間宮さんに、一番言いたかったことを、ここで言い返しました。

間宮さんは、自分の行動を、



いつも、出来るか出来ないかだけで、判断している。

人が行動を決めるのは、そうじゃなくって、それをやりたいのかとか、やらなきゃいけないかどうか、だと思っんです。

だから間宮さんは、自分の望むことを目指そうとしない、なぜなら、出来そうもないから。

やりもしないで、出来るも出来ないもないんです。

やらなきゃいけないことは、なんだろうがやるんです。

やってみて、出来なかったんなら、

その時に初めて、諦めれば良いんですから。

どうして、あんなに何でもこなせるくせに、やらず嫌いなのかと、そこを思いつきり叱りました。

間宮さんは、小さい子供みたいに、

何も言い返せなくなつて、しゅんとしてました。

こんな時に不謹慎ですけど、何だかとっても、へこんでる間宮さんが、かわいく見えるのと、いつもやられてばっかりだったから、優越感を感じて、かなり気分が良いです。

間宮さんは、しばらく黙っていたけど、

やがて、小さな声で、  
「判った、やってみる」  
と、答えてくれました。

これで、私の気は済んだし、全て解決する、はず。

ここで窓を見ると、もう明け方近くで、  
カーテンの外側が、明るくなっているのが、  
判りました。

もしかして、徹夜しちゃったの!?

それに気づいたら、急に眠気が襲ってきて、  
とても眠くなりました。

少しだけ休んでから、家に帰れば、  
ここから自転車だと、30分くらいだから、  
ああ、昨日はここまでタクシーで来たから、  
歩いたら、どのくらいだろ……

とか考えているうちに、眠ってしまいました。

「三崎、三崎、おい、三崎、なあ」

遠くから声がする……

かと思つたら、自分の耳元で、間宮さんの声が、  
と思つて目を覚ますと、わたしは布団に寝ていて、  
間宮さんに抱きついていました。

「三崎、これも、その、命令のひとつ、なのか？」

だったら、拒む権利は、ないんだが、

ええと、私はどうすればいいのか、教えてくれないかと、間宮さんは、わたしに抱きしめられた体勢で、困ってはいるものの、真顔で聞いていました。

わたしは慌てて、間宮さんを放してから、布団を転がって飛び出しました。

え、どうなってるんだ！？

なんで、わたしは間宮さんと一緒に寝ていて、そんなもって、抱きついていたの！？

すっかり目も覚めて、動転しているわたしを見て、間宮さんも布団から起きて、説明してくれました。

話が終わった途端に、すぐに眠ってしまったわたしを、間宮さんは1人暮らしだから、1つしかない布団に寝かして、石油代も余裕はないから、暖房を切ると、女同士だから、別にいいかと思って、わたしの逆側に、一緒に寝たんだそうです。

そしたら、わたしが寝返りをうって、間宮さんの方を向いて、名前を呼んだんだそうです。

だから、間宮さんも振り返ったら、そのまま抱きつかれて、わたしはずっと、間宮さんの名前を、呼んでいたんだそうです。

だから間宮さんは、どうして良いか判らなくて、  
わたしを呼んだけど、わたしはずっと、  
ひたすら、名前を呼び続けているだけで、  
それがある意味命令なのかと、間宮さんは深読みして、  
ずっと様子を見ていた、と言われました……

そういえば、かなの時もそうだったけど、  
わたしには、寝てる時に抱きつく癖があるんだった。

ああ、せっかく間宮さんとの話も、  
上手く出来たと、思っていたのに、  
これじゃあ、台無しだあ……

わたしがへこんでいると、  
「三崎、もう、いいのか？」  
と、またも尋ねられてしまい、わたしは間宮さんに、  
今のは、寝惚けていただけだから、  
忘れて欲しいと頼みました。

時計を見ると、もう午後の3時で、  
結構、たっぷり眠っていたみたいです。

ひと眠りした後の、間宮さんは、  
もう、気分を切り替えたみたいで、  
逆にわたしは、寝起きなのと、さっきの事件とで、  
すっかり調子が狂ってしまい、  
間宮さんとは対照的に、あたふたしていました。

わたしが落ち着いて来たところで、

部屋の隅においてあった、ケージが視界に入り、ふと、前に見た白い猫のことを思い出して、間宮さんへと尋ねました。

それを聞いた間宮さんは、

「ああ、言ってくれて、ちょうど良かった。

三崎もぜひ、拜んでやってくれ」

と言って立ち上がると、窓の外のベランダの隅へ行き、最近出来たっぽい、土の山を指差しました。

「昨日の朝、あれは死んだよ。

丸まって座っていたから、最初気がつかなかったが、近づいても逃げないから、逝ったんだって判った。

これで、私の墓守としての仕事は、終わった、と思っただけだな」

と言うと間宮さんは、手を合わせていたわたしに、塀の上を見るように合図したので、そちらを見ると、すごく淡い色の三毛猫が、塀の遠くの端っこの方において、こっちを見ていました。

「まだ、墓守は必要みたいだ」

間宮さんは、三毛猫を見ながらそう呟きました。

この後、お茶だけもらって目を覚ましてから、間宮さんはわたしを、自転車で、家まで送ってくれることになり、身支度を整えて、4時に出発しました。

前の時と同じように、

間宮さんが前で、わたしは後ろです。

昨日降っていた雪は、夜のうちにやんだみたいで、もう道路は半分くらい、乾いていました。

わたしは間宮さんに、

御家河の土手を通って欲しいと、お願いすると、

間宮さんは、黙ってそっちの道へと、進んで行きました。

河川敷には、まだところどころ雪が残っていました。

そんな中に、黒い塊が動いているのが見えた、  
と思ったら、こっちに気づいた途端に、

警戒のポーズで、こちらを睨んでいました。

よしよし、ヒョウちゃんは元気そうだ。

ヒョウちゃんに気づいた、間宮さんは、  
そんなヒョウちゃんの、態度を見ながら、  
わたしに話しかけてきました。

「なあ、三崎。

お前の命令のことなんだけど、

あれって、実行する順番は、

私の自由でいいのか？」

と尋ねられたので、うん、と答えると、

「じゃあ、あの、まずは4番目から、

実行しても、いいか？」

と、訊かれました。

4番目は、何だっけ？

ああ、あれか。

わたしは、その証として、

わたしのことは、下の名前で呼ぶこと、と、  
伝えると、間宮さんも、

「じゃあ、私の事も 同じように呼んでくれ。

私の気に入っている、伯父貴のくれた名で」  
と言いました。

こうして、みこととわたしは、

やっと、互いに認める、友達になれたのでした。

うちのアパートに着くと、みことは、

「ええと、みなも、私は約束を果たす為に、

明日に実家へ帰る事にする。

どの程度、かかるか判らないが、

とにかく、やってみる。

失敗しても、良いんだよな？」

と聞かれて、わたしは、もちろんだよ、

と答えました。

それを聞いて安心した表情になった、みことは、

「じゃあ、行って来る。

必ず帰ってくるから、待っていてくれ」

と言って、帰って行きました。

わたしは、バイバイ、ではなくて、

あえて、行ってらっしゃいって、

答えて、見送りました。

わたしの出した命令は、もしかしたら、  
そのままみことを、戻れなくしてしまうかも知れない、  
だけど、こうしなければ、  
みことは、生き方を変えられないんだ。

だから、頑張つて戻つて来て欲しい、  
そしたら、わたしたちは親友になれると思うから、  
わたしはそう思いながら、みことが見えなくなるまで、  
見送りました。

随分時間がかかっちゃったけど、  
みことには、わたしの気持ちを通じた。

だからきつと大丈夫、だと思う。

きつと、みことは帰ってくる、  
わたしはそう信じて、ずっと待っています……



2011年 2月 その3(前書き)

変更履歴

2011/07/03 記述統一 一つ、二つ、三つ  
一つ、  
二つ、三つ

2011年 2月 その3

2月14日 血のバレンタイン

みことを見送ってから、2日経って月曜日になり、学校へと登校すると、今日みことは、休みでした。

みことの休みの理由は、もう判っているから、心配はありますが、それほど気になりませんでした。

まだ、何の連絡もないから、きつと実家に戻っているんだろうと思います。

それよりも気になったのは、門塾さんが今日、お昼休みに早退したことです。

クラスの人たちは、また何かするのかと、期待していたようで、何もせずに、そのまま、教室を出て行ったのを見ると、取り巻きの人は、残っていたのに、がっかりしている会話も、聞こえていました。

他の取り巻きの人たちは、特にいつもと変わりなく、今日登校していた、前からターゲットになっていた男子を、からかっていました。

それ以外には、特に何も起きずに、逆に、門塾さんがいなくなった午後は、

平和に過ぎて行きました。

午後の授業も終わって、下校時間になったので、航海堂へバイト行こうと、駅に向かって歩いてみると、知らない風高の男子が、声をかけて来ました。

わたしは前にあつたことを思い出して、警戒して足も止めずにいると、その人は、周りの人目を気にしながら、1枚のカードを見せてきました。

「あんたを待っていた。

俺は、白刃のメンバーだ。

高坂からの、伝言を伝えに来たんだ」

たしかに、この人が見せて来たのは、ギルドのメンバー証なのは、間違いなくて、顔写真も、この人でした。

それが判って足を止めたわたしに、その人は、「門塾が、何かを仕掛けてくるかも知れない、と言う噂があつたのは、聞いているだろ？

それがどうやら、今夜らしいのが判って、

こっちは総出で、対決の準備をしているところなんだ。

で、今高坂は、手が放せない状態で、

あんたにも危害が及ぶかも知れないから、

一時的に非難させて欲しいと、

直々に、指示を出したんだ。

避難場所は、この町に用意してあつて、高坂も、後で顔を出すつて言つてたから、そこで待機していて欲しいんだ」

わたしはその人に、確認させて欲しい、と言つてから、かなへと連絡してみると、かなとは連絡がつきませんでした。

メンバー証も本物っぽいし、かなと連絡がつかないのも、嘘じゃないみたいだ。

それに、門塾さんが午後早退していったのも、そういうことなら、話は合うな。

わたしはこの人に、ついでに行くことを伝えて、避難場所へと、案内してもらいました。

その場所は、駅を超えて駅前の通りを通つて、30分くらい歩いた所にある、小さな雑居ビルの前でした。

ビルの前には、2人の人が立っていて、1人は白いニット帽で、もう1人は白のパーカーでした。

わたしをここまで連れて来た人は、この2人に挨拶すると、このうちの1人から、白いマフラーを受け取つて、それを首に巻いていました。

この後、白マフラーの人は、エレベーターの下のボタンを押して、

一緒に乗ると、地下1階へと向かいました。

中に入るとそこは、スナックとかバーがあった後みたいで、壁際には、カウンターがあって、4つのテーブルと、ソファアの椅子がありました。

白マフラーの人は、電気をつけてから、カウンターの奥で何かをした後、

「ここで待っていてくれ。」

電気と水道は、使えるはずだ。

この辺りは、白刃のテリトリーだから、ここまで来れば、大丈夫のはずだけど、念の為、上には上がらない方がいい。

高坂には、無事に匿っていると伝えておくと言いつつ、出て行きました。

わたしは、まず携帯をチェックしてみると、電波の状況は、1本立ったり消えたりで、地下だから、繋がりがそもなくて、一応試してみたら、何度かけても、コールする前に切れてしまいました。

もしかして、わたしは監禁されたの？

と思つて、ドアを開けてみると、普通に開いたし、エレベーターもボタンを押したら、地下に来ました。

別に、閉じ込められている訳じゃないみたいだ。

だったらやっぱり、信じてもいいのか、なあ。

今はまだ、いつでも外に出られるけど、  
念の為に、危なくなった時の、  
逃げ道を確認しておくことにして、  
このお店の中を良く見ると、お店の奥に、  
消えている非常口のランプがあるのが判って、  
その下に、壁紙が張られていて判りづらいけど、  
非常口を見つけました。

ドアの前にあったゴミをどけて、開けづらいのを、  
一生懸命引つ張ると、硬いドアはやつと動いて、  
何とか頭が通るくらいに、開けられました。

とりあえず、その非常口を覗くと階段は真っ暗で、  
ここも、光が当たって見えるところだけでも、  
ゴミだらけなのが判り、ここから逃げるのは、  
最終手段だな、と思いました。

階段の位置からすると、この非常口は、  
さっき入って来たところとは逆側の、  
このビルの裏に出るみたいで、  
仮に、地上へ出るドアも開いていたとしても、  
ビルの裏の、細い路地に出たところで、  
もうその時は、囲まれているような気がする。

わたしが、非常口の確認をし終えた時、  
「そっちから出たところで、通りには出られないぞ」と、  
急に声がして、めっちゃめっちゃ驚いてしまい、  
頭をドアに、思いつきりぶつけました。

「おい、大丈夫か？

下手に怪我でもされると、

守っている俺達の、立場がない」

と言いながら、さっき上にいた、

白パーカーの人が、コンビ二袋を持って、

入り口の前に立っていました。

「そこは、金網の塀でさえぎられているからな。

だから、そこからは脱出も出来ないが、

逆に、外からは施錠されていて、

そこから襲われることも無い。

だから心配はいらない。

それと、これは差し入れだ」

と言って、テーブルにコンビ二袋を置きました。

それだけ行ったら、白いパーカーの人は、  
出て行きました。

ああ、びっくりした。

落ち着いてきたら、少しお腹も減っているのに気づいて、  
ここは地下とは言っても、暖房がなくて寒いのもあって、  
せつかくだから、何か貰うことにしました。

暖かいお茶とか、珈琲やコーンスープなんかの飲み物や、  
肉まん、あんまん、ピザまん、チョコまんや、  
スナック菓子が入っていました。

チョコまん、売ってるのは見たことあるけど、  
買ったことなかったなあ……

そういえば、今年のバレンタインは、色々あったから、何にも準備出来なかったなあ。

もうちょっと、落ち着いたら、

お世話になった人たちに、何か渡すことにしよう。

わたしは、今まで食べたことがない、

チョコまんが、とても気になって、手に取りました。

一応、表面とかに何か変なところはないかを確認してから、匂いも確認して、特に問題なさそうだと判断して、チョコまんを初めて食べようと、思ったけど、やっぱり、なんかあるかもと疑って、やめておきました。

その代わりに、これなら大丈夫かと思って、変な穴とかが、開いていないのを確認してから、ペットボトルのお茶を開けて、一口飲んだ後、ソファーに座って、この後どうするかを考えていました。

まだ騙されていないって、言いきれないから、やっぱり、非常口の先を確認した方がいいよなあ、と考えていたら、だんだん眠くなってきた、ちゃんと確認したはずなのに、どうして!？と思った時には、もう、どうしようもなくて、いつの間にか、眠ってしまいました。

「みなも、みなも、起きてよ」

あれ、かなの声？



似ているけど、何か、違うような、気がする。

どこかで聞いたことあるけど、それはどこだろ。  
たしか、学校で……

学校で聞いた、門埜さんの声だ！

わたしは、まだ朦朧としていたのが、  
一気に目が覚めて、目を開きました。

目の前には、わたしの顔に手を当てている、  
いつもとは全く違う姿をした、門埜さんが、  
笑顔でしゃがんでいました。

微笑んでいる門埜さんは、黒のベレー帽に、  
黒のロングコート、黒いロングブーツで、  
全身真っ黒の格好でした。

これを見た時、頭に思い浮かんだのは、  
真っ黒の女王、まさに暗黒女王です。

その周りには、いつもの取り巻きとは違う人たちが、  
8人いて、その人たちの手には、金属バットとかの、  
武器を持っているのが見えました。

どうやらわたしは、ソファアールから、  
壁際に移動させられていて、

さらに、着ていたダウンジャケットは脱がされて、  
手は背中で縛られていて、足も動かせないように、

何かが巻かれているのが、判りました。

「やっと、お目覚めみたいね、

どう？ 私の声、高坂香奈恵に似てた？」

と、相変わらず笑顔のまま、話しかけてくる、  
門塾さんの顔は、冷やかな笑顔へと変わりました。

「まず最初には、ご挨拶しておこうかしら。

三崎さん、ようこそお出で下さいました、

貴方の為に準備したパーティー、

『血のバレンタイン』へ。

色々と、趣向を凝らしたプレゼントも、

たくさん用意してあるから、

是非楽しんで頂戴ね、ふふふ。

他のお客さん達、ギルドとか白刃とかの方達も、

それぞれの会場で、もてなされている頃だから、

貴方も心行くまで、このパーティーを満喫して。

うふふふ、ふふふふふふ。

それにしても、あっさり引つかかったのね、

貴方の為に、もっと色々と手を用意していたのに、

まさか最初の罠で、かかるとはねえ。

教えてあげる、白刃のメンバーはね、

捕まった時に、正体が判らないように、

ギルドのメンバー証は携帯しないの。

そんなことも知らないなんて、

貴方、馬鹿なの？

それに、知らない人からもらった、食べ物なんて、普通口にはしないものよ？

ちよつと、無用心過ぎじゃない？

ちなみに、貴方を眠らせた薬は、持って来たもの、全てに入っていたし、水道の水にも、混ぜてあったから、何をしようとのみち、貴方は引つかかったの。

ちよつと簡単過ぎちゃって、拍子抜けしちゃった。もしかして、罠なんじゃないかって、

こつちが疑つちやつたじゃない、ふふふ」

と、わたしの右の頬を撫でながら、門塾さんは視線を外さずに、話しかけてきました。

門塾さんは、ギルドのメンバー証のことも、白刃のことも、そんなところまで調べてあったんだ。

それは正直言つて、油断していました。

それに、あのペットボトルも、フタを付ける前に、何かを入れるなんてこと、普通は、出来ないと思うんだけど、そんな偽装の準備までしていたことに、わたしは驚きました。

昔のわたしだったなら、怖くて、恐ろしくて、ただ、怯えているだけだっただろうけど、

修行の成果が出ているみたいで、あまり、動揺はしていません。

それに、こんな面倒な仕掛けとかして、目の前に門塾さん本人が現れたことで、とうとう黒幕が出てきた、と思いました。

だから、ここを何とかすれば、全ての決着が着くんだって、思ったんです。

そう思ったら、今は怖さよりも、今までのことへの怒りが、わたしに、度胸と力を与えていました。

わたしは門塾さんへと、門塾さんが暗黒女王のリーダーだったのかと聞きました。

それを聞くと、門塾さんは、小馬鹿にしたように、軽く鼻で笑った後に、「私が、暗黒女王のリーダー？」

だったら、もっと楽だったのにねえ、残念ながら私は、キングでもクイーンでもない。

私は、ビシヨップ  
とわたしへと告げました。

それから門塾さんは、ポケットから、キラキラ輝く、黒いチェスの駒を取り出して、わたしへと見せてきました。

それは、チェスのビシヨップの駒でした。

そういえば、みことの話の中で、  
暗黒女王に所属している、マネージャーが、  
ナイトがどうのとか、言っていたのは、  
チエスの駒の騎士のことだったんだ。

これが、グループの中の序列でも表しているのか。

「この状況、貴方、判っていないの？」

今までみたいに、助けになんて、

誰も来ない所に監禁されているのが、判らないの？

それとも……」

門埜さんが期待していた、

わたしの怯えるような、リアクションがないので、  
少し苛立ったようで、次第にわたしを脅すようなことを、  
言っ来てたけど、わたしは逆に、

そんな門埜さんを睨み返しました。

それに気づいた門埜さんは、一瞬その目に、  
怒りが見えたと思ったら、わたしは右の頬を、  
倒れるくらいに、強く引っ叩いてきました。

左に倒れた時に、床に置いてあった、  
ダンボール箱に頭もぶつけて、中に入っていた、  
何か硬い物にぶつかって、一瞬気が遠くなりました。

周りにいる人たちの1人が、わたしの体をすぐ起こして、  
元の位置に戻すと、額から何が垂れてくるのが判りました。

倒れた時、頭をどこか切ったみたいだ。

「あーあ、三崎さん、

今ので怪我しちゃったみたいねえ、大丈夫？

それに、頬も私の爪かしら、傷になっちゃってる。

女の子なのに、ごめんなさいね」

と言いながら、門埜さんは心から楽しそうに、

笑っているのを見て、この人はもう、

正気じゃないんじゃないか、と感じました。

ぶつけた頭も痛いし、叩かれた右の頬も痛いけど、

それ以上に、わたしには疑問が湧き上がっていました。

どうして、わたしなの？

どうしてわざわざ、自ら出向いてまでして、

こんなに面倒な仕込みまでして、わたしに手を出したの？

わたしはそれを、思い切って門埜さんへと尋ねました。

その途端に、今度は左の頬を叩かれて、

わたしは叩かれた勢いで、左側に倒れました。

「それを貴方は、私に聞くの？

この場に及んで、私へのあてつけのつもり？

今まで、自分のやって来たことが、

どれだけ、私にとって目障りだったか、

判って、やっていたんでしょう？」

そう言いながら、門埜さんは立ち上がると、

倒れたままの、わたしのお腹を目がけて、ブーツのつま先で蹴り始めました。

手が後で縛られているから、せつかく習った防御も、まともにも出来なくて、体を丸めて、足で、お腹を守るしか出来ません。

「そうやって、しらばっくれるんだ。

もっと弱いつて聞いていたのに、

意外に根性見せるのね。

ま、これはこれで、楽しいからいいけど、ね！」

門塾さんの蹴りは、話しながらその後も続いて、わたしは、足をつま先で蹴られたり、頭や体を踏みつけられるのを、体を丸めて、ひたすらガマンして、耐えていました。

すごく、痛い、けど、まだ頑張れる。

これは、門塾さんとの勝負なんだ。

わたしの手足を縛っているのに、口を塞いでいないのは、わたしをいたぶって、泣き言とか、許しを乞うのを、待っているからだ。

まだ、理由は言わないけど、

門塾さんは、わたしを屈服したいんだ。

わたしから、自分へと、謝らせたいんだ。





すっかり夢中になっていました。

でも、体を鍛えている訳じゃないから、  
わたしが痛さで、音をあげる前に、  
門塾さんの体力の方が、先に切れてしまい、  
喘ぐように大きく息をし始めたと思ったら、  
蹴ってくるのは、一旦止みました。

もうこの時は、体中が痛かったけど、  
でもこの勝負は、わたしが押している気がする、  
そう思えるから、まだ頑張れる、  
いや、頑張るんだ！

わたしは、攻撃が止まった門塾さんへと、  
さっきと同じこと、どうしてわたしなのかを、  
尋ねました。

「やっと、泣き言を言うかと思えば、またそんな質問？  
本当に貴方は、ことごとく私を馬鹿にしているのね。  
その態度、むかつくなあ、ほんと。  
ねえ、こいつを起こして」

門塾さんは、わたしをまた起こさせると、  
今度は、左右に倒れないように、  
そのまま、2人に両側から腕と肩をつかまれました。

わたしの目の前に立った、門塾さんは、  
右手で私の頬を、平手打ちし始めました。

「私の、苦勞を、知らない、くせに、



挫けそうになりました。

わたしはここで、今の状況を考えてみました。

今、門埜さんに負けを認めて泣きついたところで、わたしが救われる可能性なんて、どうせないはずだ。

こんなに、普通に目につく顔を狙っているのは、もう、逃がす気がないからに決まっている。

つまり、どのみち門埜さんは、わたしを、まともに戻す気がないんだ。

監禁するのか、それとも……

それはまだ判らないけど、もうどうしたって、無事には帰れない。

だったらせめて、最後にわたしは勝ちたい。

全ての黒幕だったんだと思う、門埜さんに。

それが今まで、わたしに協力してくれた人たちや、門埜さんから、何かをやられた人たちへの、せめてもの報いだから。

そんなことしたって、何にも残せないし、逆に助かる可能性を、減らしているだけかも、とも思うけど、この門埜さんとの戦いだけは、どうしても負けたくないって、思ったんです。

それが、わたしの最後の意地です！

だから、ここでは絶対に泣かないし、  
門埜さんには屈しない！

そう思つて、門埜さんを睨みつけると、  
門埜さんは、狂喜じみた笑いから冷めて、  
不満そうに、わたしを見ていました。

「なんなの、その目、気に入らないなあ、それ。  
私にそんな目をしていい人間は、いないの。  
誰も、いちやあ、いけないんだよ！」

そう言つて門埜さんは、わたしのお腹に、  
今度は蹴りを入れてきました。

わたしは、苦しくて身を屈めようとするけど、  
両腕で押さえられていて、それも出来なくて、  
痛いのを我慢して、声を上げないように、  
必死で耐えています。

「そうか、やっと判つた、もう痛みでは満足しないのか。  
ああ、すぐに、気づかなくなつて、ごめんなさいね、  
だったら、違う痛みを、もしかすると快感を、  
与えてあげた方が、良いみたいねえ？」

そう言つと門埜さんは、わたしに1歩近づいて、  
叩かれて熱くなっている、頬を触りながら、  
その手を下へとおろして行つて、

顎から首、そして鎖骨を超えて、胸の真ん中を通って、へそを超えて、その下まで動かして、止まりました。

「どうせ貴方、バージンなんですよ？」

だったら、ここで私が奪ってあげる。

ふふふ、怖い？

それとも、処女を卒業出来て、嬉しい？」

門埜さんは、わたしのスカートをまくり上げながら、下着の中に、指を入れようとしてきました。

待ってたよ、この時を。

そこまで、わたしに、近づくのを！

わたしはここで、ふざけんな！

と叫んで、縛られている足で、

門埜さんの手を、思い切り膝で、上へと蹴り上げました。

その後すぐに、無防備の門埜さんの体に向かって、

両足で蹴りを入れて、

門埜さんを、全力で蹴り飛ばしました。

完全に不意を討たれた、門埜さんは、

蹴られた衝撃で、後へと吹っ飛んで倒れました。

やった、狙っていた反撃が出来た！

これで、けっこう、思い残すことは……

まだまだ、いっぱいあるけど、でも、ちよつとは、減ったな。

離れて困んでいた人たちは、みんな焦つて、門埜さんのところへと集まり、門埜さんを起こしていました。

そんな中から、門埜さんの声が聞こえてきました。

「私を、この私を、蹴るなんて、絶対に許さない、絶対に。私を誰だと思っているの？」

暗黒女王のビショップ、スカルヘッドの支配者、学校で最も権力を持つ、この私に対して、一体、何様のつもりなんだ、お前は。

何の権利があつて、そんな真似が出来る？

お前は、何もなくて、

どうして、多くの力を持っている私に対して、そんな事が出来る？

何故、何も持っていないお前が、

私の努力を踏みにじる？

そして、それすら自覚もしていないで、

今も被害者面しているのは、どういう事？

全てを犠牲にして築き上げたものを、

なんでもない顔をして、何故壊せるんだ？

そうだ、お前はずっと、何もしなかった、

私に対して、プラスになる事は、何も。

直接的には何もしていなかった。

おかげで、中々気づかなかつた。

いつもそう、上手く行きかけたと思つて、



門塾さんは、わたしへと怒りをぶつけてから、途中から、意味の通じないことを呟いて、最後には、金切り声で絶叫していました。

その声は困んでいた人や、わたしを押さえていた人も、全員が門塾さんの豹変振りに、焦っていました。

わたしが、かなや、なつめや、みことを、そそのかした？

それは、結果的にはそうなったのかも知れないけど、そもそも、門塾さんのしようとしていたことが、正しくなかったからであって、それを度外視して、怒りをぶつけられたって……

それに、最後のは何のことだか、判らない……

「おい！ その女を犯せ！  
今すぐだ！

早く服を剥ぎ取っちまえ！  
とつととしろよ、このグズ共が！」

門塾さんは、あの絶叫で完全にキレてしまったように、私を指さして叫びました。

その目はもう、いつもの冷静な、冷やかな目ではなく、正気じゃない人間の顔をしていました。

「穴は、3つあるんだ、  
お前らで全部に、突っ込んでやれよ！」



でも、この狂った門塾さんの指示であつても、ここにいた人たちには、命令は絶対のようで、すぐにわたしへと、その手を伸ばしてきました。

「その後は、拘束して、クソと小便させて、  
テメエで撒き散らしたもんを、  
テメエの口で、掃除させてやる！  
吐いたら、ゲロも全部飲ますからな！」

床に倒されたわたしは、すぐに仰向けにされて、制服のジャケットも、ワイシャツも、力づくで破られました。

「その後は、爪を一枚ずつ剥いで、  
その上から、虫の標本みたいに、針で固定してやる！  
体中にピアスの穴開けて、犬の散歩みたく、  
紐で繋いで、引きずり回してやるよ！  
言うこと聞かなかつたり対抗したら、1カ所ずつ、  
ゆっくりゆっくり、引きちぎってやる！」

縛られているから、抵抗のしようもなくて、わたしはただ、悲鳴を上げて暴れながら、足を閉じて、必死に抵抗しました。

でもこんなことしたって、  
相手が8人もいるんだから、勝ち目はない。

本当にレイプされる、  
そう思うと、怖いよりも、負ける悔しさで、

いっぱいになりました。

「テメエのきたねえ穴と言う穴に、熱湯注いで、殺菌消毒してやるよ！」

前も後も、蛆虫やミミズを詰め込んで、焼いたバットを突っ込んでやる！

ヒイヒイ豚みたいに、大声で泣き叫べ！」

死ぬ気の抵抗で、少しは時間を稼いだけど、とうとう完全に、押さえつけられて、わたしの足を開かせようと、縛っていたガムテープを、剥がされたところで、ベルの音が響いてきました。

襲いかかってきていた人たちの手が止まり、誰かが、非常ベルの音だと言いました。

この場所が、エレベーターが止まってしまつと、逃げ場がないのが判っているから、皆、門埜さんにここから離れた方がいいと、言い出していたけど、門埜さんは、「まったく、こんな時に、クソが！」

騒ぐんじゃねえよ、根性なし共！

おい誰か、上行つて様子見て来い！」

と一喝してから、命令して、

1人が入り口のエレベーターへと向かい、上に行こうとしていたけど、一向に出て行きません。

他の1人が、様子を見に行くと、どうやら、エレベーターが1階で止まっていて、降りてこないと、伝えていました。

わたしを押さえつけていた、他の人たちも、  
それどころじゃないと、思い始めて、  
エレベーターの様子を見ていました。

とりあえず、非常口から地上に出た方がいいと、  
門埜さんを説得して、わたしがさつき開けた、  
非常口のドアを開けていました。

開けた途端に、非常口から煙が入ってきたのを見て、  
男の人たちは、パニックになっていました。

煙から遠ざかるように、エレベーターの前に行って、  
扉をガンガン叩いている人や、  
天井から上がって、地上にいけないかと、  
棒で、天井の板を叩きまくっている人や、  
今さら、この場所を選んだ責任の擦りあいとか、  
門埜さん以外、みんなうるたえていました。

でもそんな中でも、門埜さんは、  
「非常口だ！ 非常口を突破しろ、  
水かぶって、突っ込め！」

と指示を出すと、男の人たちは、  
指示に従って、水道から水を出して、  
自分を濡らしてから、非常口へと出て行きました。

その直後、

「うおおおおおおりゃあああああああ！！！」  
と言う声と、すごい打撃音と同時に、  
悲鳴が聞こえて、非常口のドアの隙間から、

発炎筒みたいなのが、何本も投げ込まれました。

部屋の中は、すぐに真っ白になって、  
煙で、息も出来なくなりました。

それと同時に、非常口のドアがすごい音を立てて開き、  
ドアの前にいた人の悲鳴と共に、  
大きな人影が入ってくるのが、見えた気がしました。

ろくに見えないほどの煙で、目も見えなくて、  
息も出来ない状態で、あちこちから悲鳴が上がっている、  
まさに修羅場になっていました。

倒れているわたしには、足元しか見えないけど、  
乱入してきた人は接近戦で、相手を確認しながら  
門塾さんたちと、格闘しているみたいでした。

足元を見ていると、その人は白いスエットとスニーカーで、  
ケイゴさんだと判りました。

あの時の約束通り、助けに来てくれた！

何とかして、合流しなくちゃ！

わたしはもがいて、壁を支えにして立ち上がると、  
ケイゴさんと呼んで、そっちに行こうとしました。

が、すぐに聞こえてきたのは、

「そこかあ！」

と言う、門塾さんの声で、

この直後に、唸る音と共に、わたしの肩を何かがかすめました。

かすった肩のところには、切り傷が出来て、血が溢れ出てきました。

門塾さん、完全に見境もなくなって、何か刃物を振り回しているんだ。

近くにいたら、本当に殺されかねない。

わたしは非常口側に見えた、ケイゴさんの方に向かって、まだ良く見えない煙の中を、必死に走り出しました。

でも、縛られていた足は思うように動かずに、よろけてしまい、誰かにぶつかると、その人は、「三崎さん、みいつけた、もう、逃がさない」と言った、門塾さんでした。

わたしは門塾さんから、逃げると見せかけて、切りつけようと近づいた、門塾さんの顔へと向けて、思いつ切り後へ跳んで、頭突きを食らわしました。

変な悲鳴が聞こえたのと同時に、前に、かすかに見えてきた、白いスウェット姿を確認して、ケイゴさん！

と呼んだら、ガスマスク姿のケイゴさんも、わたしに気づいて、こっちに来てくれました。

これで助かるんだと、思った時、

「逃がすかあ！」

と言う声と共に、背後を何かがかすったのが分かって、斬られたんだと、気づきました。

でもそれが、どのくらいの深手が判らなかつたけど、その瞬間、シヨックで気が遠くなつたせいなのか、眩暈みたいなのを感じて、体が軽くなつたような気がしました。

とにかく今は、ケイゴさんに合流して、ここから、逃げだすことだけを考えて、わたしはもつれる足で、必死に走りました。

「おい、お前大丈夫……」

わたしを見つけて、手をつかんだケイゴさんは、わたしの状態を見て、絶句した後、

つかんだ右手でしっかりと、わたしを引き寄せてから、左手で持っていた、金属バットを振り回して、

「てめえええええらあああああああ……!!」

と叫んで、見えた相手はとにかく殴り倒して、動かなくなるまで、殴りまくっていました。

そして、非常口まで辿り着くと、

真っ暗かと思っていた階段は、

灯りがついていて、1人が階段の途中で倒れていて、上にある地上のドアは、開いているのが見えました。

外に出るともう真っ暗で、すっかり夜になっていて、あの人たちの話だと、ここから出ても、

通りには出られない、らしかつたけど、そこにはあちこちが、くしゃくしゃになっている、軽トラックが止まっています。

つけていた、ガスマスクを外して投げ捨ててから、わたしを助手席に乗せた後、

ケイゴさんは、軽トラックの運転席に乗り込んで、建物が出っ張っていて、狭くなっている路地に、スピードを上げながら、バックのまま突っ込んで行って、車の両側を、壁にこすりながら抜けると、金網のなぎ倒されている所から、道路へと出ました、

前の通りを回って、通り過ぎた時、わたしが最初に見た3人が、ビルの入り口のところで、倒れているのを見えました。

運転しながら、ケイゴさんから、

「手の方は、もうちよつとだけ我慢してくれ。」

そのう、体は、あの、怪我、とかは、大丈夫か」

と聞かれたけど、背中を、と、答えようとして、

ケイゴさんに、止められてしまい、

最後まで、答えさせてもらえませんでした。

それ以外は、あちこち痛いけど、

我慢出来るから、大丈夫、と言うと、

「ひとまず、落ち着いてから、病院へ連れて行く」と、ケイゴさんは答えました。

なんか、最後に背中を切られたと思った時から、なんとなく、変な感じがしていて、

とても心臓の鼓動が早くて、それが治まらなくて、背中の傷を確認するのが、すごく怖かったんです。

そして、しばらく走って遠くに行くと、大きなコインパーキングになっている、ビルに入って、ぐるぐる回ってから前を見た、白い大きな車の横に止めました。

ケイゴさんは、こっちをあんまり見ないようにしながら、手に巻きつけられていた、ガムテープを剥がしてくれて、ここでやっと、両手が自由になりました。

この後、ケイゴさんは、

「ちよつと、待ってる」

と言って、軽トラックを降りてから、自分の車に入って、グレーの服を持ってきました。

それを、ドアの少し開けた隙間から入れて、

「これを着てくれ、フードも被つてた方がいい。

そしたら、こっちに乗り換えて、待つててくれ。

俺は水を買って、すぐに戻る。

俺の言ったこと、理解出来たか」

と訊かれたから、ちゃんと判った、と言う合図で、頷いて見せると、ケイゴさんは車を降りて、走って行ってしまいました。

わたしは、まだかなりさつきまでの出来事と、

そこから逃げてきた今が、繋がらなくて、

すごく、気が動転していたけど、

とにかく、まずは言われたことをしようと思って、



受け取った、大きなグレーのパーカーに、腕を通してから、ジッパを上げて、フードを被ってから、軽トラックを降りました。

この借りたパーカーは、ケイゴさんの服だから、とても大きくて、スカートもほとんど隠れるくらい、裾も袖も長くて、ダボダボでした。

ケイゴさんの車に行つて、助手席に乗り込んでから、指が出るように、袖をまくろうとしたけど、なかなか指が思うように動かなくて、苦労しました。

ここで、車を乗り換えるのに、ちよつと立つて、歩いてみただけでも、やっぱり、頭がフラフラする感じがして、とても不安に感じていると、ケイゴさんが戻ってきました。

「待たせたな、まずは顔を拭いた方がいい。水とタオルが入ってる。

それと、その、あの、鏡、は、ええと、そこに、入ってる……」

それだけ言うと、ケイゴさんは車の外に出ました。

ケイゴさん、なんか、態度が変だなあ……

最初は、服があれだったから、それを気にしてて、気を使ってくれて、こつちを見ないのかなって、思ったけど、今はもう、貸してくれたのを着てるのに、

態度が変わらないのって、やっぱり、  
そんなに、わたし、酷い顔しているのかなあ。

かなり、ぶたれたから、きつとすごいブサイクになってて、  
それでシヨックを受けちゃったのかも。

そんな風に思いながら、わたしはタオルを水に濡らして、  
グローブボックスの中に入っていた、  
小さな手鏡を取って、自分の顔を見ながら、  
少し乾いてきていた血の後を、ふき取りました。

やっぱり、男の人の前で、  
鼻血垂らしてるのは、ちょっと酷いよね。

ほっぺたも、すごく腫れてるし、  
爪の引っかき傷みたいなのも、いっぱい出来てる。

あははは、これは、酷いや。

すごい顔、見られちゃったよ、  
さすがに非常事態とは言え、恥ずかしいな。

あれ、髪が……

わたしはここで、見慣れない短い髪の束が、  
フードから出て来ているのに気づいて、  
この時に、心臓が大きくドクンと脈打つのを感じました。

わたしは、恐る恐るフードを外して、  
服の中から、髪を引っ張り出そうとしました。

あれ？

でも、それは、出来ませんでした。

わたしの、髪、は……？

わたしは、鏡で見えている髪をつかんで、  
肩の手前へと、引っ張ってみたら、  
髪は、つかんでいた位置から、10cmくらいで、  
途切れていました。

逆側をつかんでも、そっちよりは、  
もうちょっとだけ、長かったけど、  
でも、背中くらいまでしかありません。

わたしは、鏡を置いて、両手で首の後ろに手を回して、  
そのまま全部の髪を、指でつかんでから、  
左右で2つに分けて、手前に引き出しました。

だけど、そうしても、自分の髪は、  
ほとんど見れませんでした。

……そっか、どうも、頭がフラフラしてるなって、  
思ったのは、急に頭が、軽くなったからだったんだ。

あの時、門塾さんに切られたのは、  
背中じゃなくて、わたしの髪だったんだ……

切られちゃった……

髪が……

わたしの……

髪……

それが判った途端、わたしは頭の中で、

何かが、ガンガン響き渡るような感覚と、

ぐるぐる目が回りだして、

気持ち悪くなってきた、

周りの物音が、どんどん小さくなっていきました。

「おい！ しっかりしろ！」

遠くから、ケイゴさんが呼ぶ声が聞こえたけど、

どうにも出来なくて、最後にわたしは意識を失って、

シートに倒れました。

2011年 2月 その4(前書き)

変更履歴

2011/03/21	記述修正	携帯	ケータイ
2011/09/25	誤植修正	話し	話

2011年 2月 その4

2月16、17日 知らない世界

目を覚ますと、そこはベッドの上で、あんまりきれいなじゃない、部屋の中にいました。

この部屋には3つベッドがあるけど、窓際のベッドのわたししか、人はいません。

古い病院の病室っぽい感じ、と言うよりは、夜逃げの後の部屋みたいな、あちこち壊れていたり、汚れている、ほとんど何も無い部屋でした。

個室じゃない病室なら、普通はあるはずの、仕切りのカーテンもなくて、なんか変です。

でも、多分、病室、だよなあ……

自分の体を見てみると、あちこちに治療された後があって、ガーゼや、包帯まみれになっているのが判りました。

服はパーカー着てたから、変わっていないなと思ったら、その下に着ていたはずの、制服やワイシャツは着てなくて、パーカーの中は、下着だけになっていました。

ベッドの横の床に、脱衣カゴがあって、その中に、制服が入っていました。

窓の外は、陽射しが差していて、  
もう昼間なのは、間違いありません。

わたしは上半身を起こして、外の風景を見ようとした時、  
奥の方から、引き戸の開く音がしたと同時に、

「お、女子高生、目を覚ましたか」  
と、だみ声で話しかけられました。

そこにいたのは、無精ひげを生やしている、  
ボサボサの頭に、ヨレヨレの汚れた白衣を着た、  
お医者さんの格好した、白髪交じりの、  
中年の痩せた男の人でした。

医者先生にしては、からり目つきが悪いです……

それに、啞えタバコだ……

すごく、怪しい……

わたしは、あからさまに警戒している顔をして、  
この先生みたいな人を、見ていたようで、

「そんだけ、怯えた顔してると、  
趣味じゃねえけど、いいかもとか、  
思っちまうから、やめてくれねえか？

まあいいか、とりあえず、  
不良に言われてるから、説明するぞ。

信じようと信じまいと、それはあなたの自由だ」  
と言うと、ここに来るまでのことを、

説明し始めました。

この怪しげな先生の話では、気を失ったわたしを、ケイゴさんが顔なじみの、この先生のところへと運んで、わたしは治療を受けて、今まで丸1日眠っていたこと、今は、16日の午後2時過ぎで、ケイゴさんは、わたしをここにおいて、後で来るって言って、また出て行った、と言うことでした。

でもこの先生みたいな人は、ケイゴさんのことを、不良って言っているみたいで、わたしはそれを、置き換えて聞いていました。

わたしはこの人に、とりあえず、治療してもらったお礼を言おうとしたら、すぐに止められて、

「今の話で、俺の事を信じたのか？」

もうちょっと、警戒した方がいい。

あの程度の話、何にも知らなくても、適当に作れるぞ。

知らねえ相手の話は、疑ってかからないと、

そんなんじゃない、すぐ騙されるぞ、気をつけな。

でも安心しな、今のは全部本当の話だ。

それから俺には感謝は要らん、現金で頼む。

あ、だけど、あなたの治療代は、

不良が払うって言ってたから、まあいいや」

と言われて、何だか馬鹿にされたような気もしたけど、もっともなことを、言われたような気もして、少し反省しました。



わたしは先生が、どうしてケイゴさんのことを、不良って言うのかを、尋ねると、

「俺にとつては、客の名前なんて、どうでもいいからだよ。」

判りやすい呼び名さえありゃ、十分だ。

それより客に必要なのは、治療する傷や病と、

治療代の現金だな」

と説明した後に、わたしのケガのことを、説明してくれました。

擦り傷と打撲が、全身にあつて、

肩には切創、いわゆる切り傷があつて、

頭にも強打した跡があると云つてから、

でも、骨折はないし、体の傷は治れば消えるが、

頭だけはまともな病院で、

精密検査してもらつた方がいい、

それと、メンタルケアは出来ないから、

精神的な傷は、他を当たつてくれと、

アドバイスみたいに言われました。

それを聞いて、ここは病院じゃないんですか？

と思わず聞いたら、

「ああ、まともな病院じゃあ、ねえだろう。」

俺は、モグリだからなあ」

と、あっさり言われました。

モグリ！？

たしかそれって、医師免許のない、

お医者さんだったような。

そうか、だから患者の名前も聞かないのか……

さらにこの後、先生は、

「ああ、そうだ、あなたの意識が戻ったら、聞こうと思ってたんだがなあ、

レイプされたんなら、事後ピルあるが、いるか？  
あんたがここへ着いてから、

38時間つてとだから、まだ間に合うぞ？」

なんて言い出したから、自分はそんなことは、  
されてないから大丈夫ですって、伝えました。

そしたら、先生はまたしても、

「パンツはきれいだったし、ちゃんと履いてたから、  
多分平気かとは思ってたが、念の為に聞いたんだ。  
それは良かったな。」

後、臭いもほとんどないから、

今んところは性病も大丈夫だ、安心しな」

と、耳を疑う言葉を聞いたような気がして、  
わたしは驚いて、固まってしまいました。

え、わたしは、何をされたの！？

そんなわたしには構わずに、先生は出て行くこうとして、  
ドアのところで、立ち止まりました。

「おっと、あぶねえ、伝言があったんだ。

あの不良からでなあ、『夜までには戻る』だと。

と思ったら、来たみたいだな、

じゃ、後はごゆっくり」

そう言うと、先生は出て行って、入れ替わりに、ケイゴさんが現れて、その手には、わたしのカバンと、ダウンジャケットを持っていました。

ケイゴさんは、

「お前の荷物、これだけだよな。

これ以外は見つからなかった。

体が動くなら、確認してくれ」

と言うと、わたしに渡してから、脇にあった、椅子に座りました。

わたしは、それよりもまず最初に、

今の人はお医者さんなのかを、ケイゴさんに聞くと、自分の顔見知りの医者だと、答えました。

その後に、わたしは治療の時に、

何もされなかったのかを、聞こうとして、

でも、はっきりと聞けずいたら、

ケイゴさんは、わたしの言いたいことを察して、

「ええと、その、お前が治療を受けた時、

意識はなかった。

だから、ジジイが妙なことしないように、

その、俺が見張ってたから、

何もされてはいない、それは保証する。

俺は、離れたところから見てたから、

お前の裸は、その、近くでは見てない。

でも、全く見てないとは言わん、悪い」

と、言いにくそうに言いました。

どんな状況だろうと、知らない男の人にまで、裸にされて、見られたのを怒るべきなのか、それとも、ケガの治療で裸を見られたくらいは、助けてもらったんだから、気にするべきじゃないのか、どっちが正しいのか、判断がつかないけど、少なくとも、ケイゴさんは、嘘をついているようには見えません。

命の恩人に対して、裸を見られたって怒るのは、やっぱり、おかしい気がして、

わたしは、念の為にケイゴさんにもう一度、わたしは変なことはされてないのを、聞いてから、正直に話してくれたことに、お礼を伝えました。

その後に、さっき渡されたカバンの中身を確認して、まず、携帯が入っているのを確認しました。

他の物も、ちゃんと入っているのを確認してから、ケイゴさんに、全部あったことと、持ってきてくれた、お礼を伝えました。

「そうか、なら、良かった」

でも、ケイゴさんの表情は沈んでいて、わたしの顔を見ては、すぐに顔を背けるのを、何度も繰り返していました。

そして、とても言いにくそうに、

「あのう、その、済まなかった。  
もっと早く、見つけられていれば、  
ええと、その、髪を……」

ああ、やっぱり、それが。

今でも、まだなれない、この頭の軽さ。

妙に、首とか背中も涼しいし、  
とても、落ち着かない、感じがする。

髪なんて、勝手に伸びるものなんだし、  
切られたって、痛くもないんだから、  
そんな、大したことじゃ、ないはずなんだけど。

顔の傷とか、体の傷とかの方が、痛いはずなのに。

わたしにとっては、髪を切られたことが、  
一番、痛いし、苦しいし、悲しいんです。

「本当に、済まなかった。  
頼むから、泣かないでくれ」

あれ、わたし、泣いてるの？

ケイゴさんに、謝られて、手で頬を触ったら、  
いつの間にか泣いていました。

今回は、あれだけひどい目に遭わされた時も、  
頑張れたのになあ。

もう、限界みたいだ……

この後わたしは、今までガマンしていた分も、まとめたように、泣いてしまいました。

パーカーの袖で、拭っても拭っても、涙は全然止まらなくて、グレーのパーカーは、どんだん色が変わっていくのを、見つめながら、溢れ出てくる涙を、ひたすら拭っていました。

その間、ケイゴさんはずっと、黙って座っていました。

ケイゴさんの言葉が、きっかけではあったけど、こうなったのは、ケイゴさんのせいじゃない。

だから、気にしないで欲しいって、伝えたいんだけど、今は、無理だ……

かなりの時間、わたしは泣いて、涙も枯れてきたみたいに、治まってきて、腕時計を見てみたら、もう3時半でした。

わたしは1時間以上も、泣いていたんだ……

わたしはケイゴさんに、やっと、ケイゴさんのせいじゃないから、気にしないで欲しいと、伝えることが出来ました。

それを聞いた、ケイゴさんは、  
かなりぎこちなく、少しだけ笑って、  
「そうか」

と、一言だけ答えてくれました。

ケイゴさんって、笑顔がヘタだ。

この後ケイゴさんから、外の様子を聞きました。

ケイゴさんの話では、昨日も今日も、  
門塾さんが集めた、暗黒女王のメンバーのチームが、  
町を徘徊していて、わたしを探しているらしいです。

わたしの家も、見張られていて、  
今すぐに戻るのは、危険だろう、  
とのことで、出来ることなら、

安全な場所に隠れていた方がいいと、言われました。

学校やバイトは、行っちゃダメなのかと、  
念の為に、ケイゴさんに尋ねると、  
やっぱり、どっちも止めた方がいいと、  
言われてしまいました。

母は出張で、来週になるまで帰ってこないから、  
安心だけど、わたしはどうしたらいいんだろう。

晩飯を買ってくるから、何が食べたいかと、  
ケイゴさんに聞かれて、初めて、  
とてもお腹が減っていることに、気づきました。

そっか、ここは食事は出ないんだ。

わたしは何も考えずに、いっぱい食べたい、と、思わず、思っていたことを、そのまま口走ってしまい、それを聞いた、ケイゴさんは、

「そっか、判った、すぐに戻る」

と言って、部屋を出て行ってしまいました。

戻ってきたら後で、ちゃんとお礼を言おう。

そう思いつつ、わたしは、

まず心配だった、かなへと連絡しました。

かなは、すぐに電話に出て、

今まで聞いたことがないほど、動揺した声で、

「みなも！ みなもの！

ねえ！ ちゃんと返事して！

大丈夫なの！ 何とか言っつてよ、みなも！」

と、答えると言う割には、間髪入れずに喋っていて、とても心配してくれていたのが、良く判りました。

わたしはかなに、わたしは大丈夫だから、

落ち着いて、と伝えた後、現状を

昨日襲われて、ケイゴさんに助けられて、

さっき目を覚まして、今病院にいることを、

簡単に説明しました。

そうすると、かなはわたしか説明している途中から、鼻をすすする音が、聞こえてきて、

相づちの声は、涙声に変わっていました。



「そう、判ったよ、今は、大丈夫、なんだね。そっか、良かった、良かったよ、無事で。

みなも、ほんとに、ごめん、ごめんね。

ちゃんと守って、あげられなくて。

「ごめんなさい、ほんとに、ごめんなさい……」

そこまで何とか頑張って話していた、かなは、とうとう、耐え切れなくなってしまって、完全に、泣き声だけに変わりました。

わたしも思わず、もらい泣きしそうだったけど、さっきまで涙が涸れるまで、泣いたばかりだったから、そんなに、大泣きせずに済みました。

先に泣き止んだわたしは、泣きじゃくるかなへと、そんなに気にしないでと、声をかけて慰めていました。

しばらくして、泣き止んだかなは、

「助けてあげられなかった、

せめてものお詫びって、訳じゃないけど、みなもの家だと危ないから、うちに来て。

今回の襲撃のことも、ちゃんと説明したいし、門塾のこのの詳細も、確認させてほしい。

だから、そうして、お願いだから」と、頼まれました。

これは、わたしとしても、

一人で家にいるのも、やっぱり怖いし、

かと言って、他に押しかけて迷惑かけるのも、出来ないから、かなの家に行く約束をして、

そつちに向かえる日時が分かったら、  
また連絡すると伝えて、電話を切りました。

この後、巻き込まれているかも知れないって、  
心配だった、葵ちゃんへも、連絡しました。

葵ちゃんもすぐに電話に出て、

「三崎先輩？　どうかしました？

あ、もしかして、みこと先輩のことですか？

ありがとうございます！」

と、唐突にお礼を言われて、

何だか、すごい温度差を感じていると、

「みこと先輩から、先週の土曜日にですね、

電話がかかってきたんです！

それで、今まで悪かったって、謝ってくれて、

しばらく実家に帰るけど、

戻ったらまた連絡するって、言ってくれたんです！

声の感じも、最近の感じとは違って、

前よりも優しくなっていました！

これって、三崎先輩が話してくれたんですよ！

あれ？　このことじゃないんですか？」

と、みことは、ちゃんとわたしの指示を守っているのは、  
よく判りました。

わたしは葵ちゃんに、おとといは、

何も起きなかったかと、尋ねてみると、

「ああ、あの日、なんかあちこちで、

色々事件が起きてたって、友だちから聞きました。

次の日は、緊急の全校集会でしたもんね、

午前中だけで、授業が終わったのはラッキーだけど、

全部の部活も活動自粛で、3時で帰されちゃいました。

それに夜間の外出を禁止とか、出来る訳ないですよねえ？

あ、すいません、話がずれちゃいましたね、

わたしは別に、大丈夫でしたよ。

え、三崎先輩はもしかして、何か遭ったんですか!？」

と、葵ちゃんが、無事だったのは分かったけど、

余計な心配を、させてしまいました。

わたしは、ちょっとケンカに巻き込まれたけど、

大丈夫だからって伝えて、心配している葵ちゃんを、  
なだめてから、電話を切りました。

あの調子だと、間違いなくみことに伝えちゃうなあ。

今はきつと、みことも大変だろうし、

あんまり心配させたくないから、

言わない方が良いかなくて、思っていたんだけど、

わたし本人が、後から伝えることになるくらいなら、

今のうちに、簡単にでもメールで知らせとこう。

それから、忍さんにも状況を説明しておかないと、

月曜も今日も、バイトを無断で休んじゃってる。

忍さんの携帯に、連絡したけど、

留守電になったので、事件に巻き込まれて、

入院してるけど、一応無事だと言ってるから、

また連絡します、と言っておきました。

忍さんには、連絡が来た時にちゃんと説明しよう。

そう思っていると、

「待たせたな、晩飯だ。」

それと、歯ブラシとかも買ってきた」

と言いながら、ケイゴさんが帰ってきて、

ベッドの食事用のテーブルの上に、

大きなコンビニの袋を置きました。

その中には、前の時みたいに色々な食べ物や飲み物と、

お菓子が入っていて、それと、歯ブラシとか、

石鹸とかシャンプーが入った、セットも入っていました。

「好きなもん、食べてくれ」

今回は、お菓子は少なめで、アイスやカキ氷もなく、  
果物とか暖かい食べ物が多くありました。

ケイゴさんはその中から、自分用に買ってきたっぽい、  
大盛りの焼肉弁当を取って、食べようとしていました。

あ、それ、美味しそうだなあ……

わたしがじっと、見ているのに、

食べる直前で、気づいたケイゴさんから、

「これ、食いたいのか？」

と聞かれたから、頷くとわたしに譲ってくれました。

なんか、わたし、すごくわがままかなあ。

そんな気がしてきて、やっぱり悪いから、

と言って、返そうとしたけど、ケイゴさんは、

「いいから、気にしないで食いたいもんを食ってくれ。  
今の俺には、このくらいしか出来ねえから」  
と言って、肉まんを食べていました。

焼肉弁当は、とても美味しく感じられて、  
かなりの早さで食べ終わると、  
さらにおにぎりを3個と、バナナを3本と、  
カレーパンと、チョココルネと、エクレアを食べて、  
お腹いっぱいになりました。

一度にこんないっぱい食べたのは、初めてかも知れない。  
何にも考えないで、食べたいだけ食べたら、  
なんだか、ちよつとだけ幸せを感じました。

その間にケイゴさんは、わたしが手をつけようとしな  
い、肉まん、ピザまん、あんまん、中華まんを食べて、  
チャーハンと、ミートソースパスタを平らげながら、  
「ジジイと話してくるわ、

ゴミは後で捨ててくるから、適当に置いていてくれ」  
と言いついて、部屋を出て行きました。

わたしは食べ終わったゴミを、ビニール袋に入れて、  
まだ残っている食べ物を、テーブルの脇に置いてから、  
テーブルを足の方へと押して移動させて、  
ベッドに横になると、レモンティーを飲みながら、  
みことへのメールを打って、送っておきました。

この時に、携帯の時計を見ると4時半で、  
ケイゴさんが戻ってきたのは、

それから30分経った、5時でした。

「なあ、退院の日が決まったぞ。

特に問題なければ、明日に出発だ。

まあ、もし何か問題があったら、

こんな場所じゃなくて、すぐにちゃんとした病院へ、  
直行だけどな！」

最初は、わたしへと言っていたっぽい、その言葉は、  
後半になると、ドアの方を向いて大声になって、  
あの先生に対する、文句へと変わっていました。

「まったく、足元見やがって。

これで腕が悪けりや、ぼったくりでモグリの、  
テメエのところなんざ、来ねえよ！」

そう叫んでから、ケイゴさんは、

わたしのベッドの脇にある、椅子に座りました。

今の話はきつと、わたしの治療代のことだと思い、  
やっぱり、払ってもらおう訳にもいかないから、  
いくらなのかを聞きました。

「ただ、ケイゴさんからは、

「治療代？ そりゃあ、気にすんな、  
こっちで話をつけてある。」

それはジジイに対する、俺の今までの貸しで払ったから、  
いくらって聞かれても、答えられねえなあ」

と言われてしまい、いくらなのかは判りませんでした。

「それよりも、明日にはここを出るから、それまでに、安全な行き先を決めないとダメだ。自分の家以外で、かくまってもらえそうな所は、どっかないのか？」

と聞かれて、わたしは、友だちがいるから、そこに行くと言えました。

ケイゴさんは、それを聞くとちょっと顔をしかめて、

「その、友だちの家ってのは、

自分の家よりも、安全なのか？

正直言って、普通の家だったら、

あいつら、仕掛けてくるかも知れねえぞ」

と、気にしていたので、かなの家のセキュリティを考えて、それは多分大丈夫だと思うと、答えました。

「そう、か、なら、いいけど。

じゃあ俺は、明日昼くらいに迎えに来る。

それまでに、出る支度をしておいてくれ。

朝飯は、残りのもんを食ってくれ。

あ、それとここ、電気は来てねえから、

真っ暗になる前に、便所とか行つといた方がいいぞ。

じゃあな」

そう言うとケイゴさんは、ゴミを持って、

部屋を出て行きました。

早くかなに、このことを伝えた方が良かったと思って、すぐにななへと連絡して、明日の午後には、そっちに行くと言えました。

かなは、

「分かったよ、みなも。

こっちも万全の準備をして、待ってるよ。

じゃ、明日ね」

と言っていました。

万全の準備って、なんだろう？

ま、いいか、行けば判るだろうし。

時計を見ると、もう5時半になっていました。

明日も色々大変そうだし、少しでも体を休めようと思って、窓のブラインドを閉めようと、立ち上がりました。

そしたら、かなりフラフラしてしまい、危うく、こけるところでした。

そっか、2日振りに、ご飯食べて歩いたんだ。

立って歩くと、頭の軽さを実感してしまい、

泣いてしまう前と思って、急いで、

壊れかけている、窓のブラインドをなんとか閉じて、真っ暗になる前に終えて、ベッドに戻りました。

やっぱり、意識しないようにしている間は良いけど、

思い出してしまうと、条件反射のように、

涙が出てきてしまいます。

体の傷よりも、こっちの傷が、痛い……



早く寝ようと思っていたのに、しばらくは布団の中で、ずっと泣いてしまい、なかなか寝つけなかったけど、でも、いつの間にか眠ってしまいました。

翌日は、習慣で朝の7時に目を覚ましてしまい、窓の、隙間だらけのブラインドから、朝日が差し込んでいました。

枕を触ると、湿っている程度だったから、昨日は思ったほどは、泣かなかったみたいです。

でもこれだと、きつと歩くたびに泣いてしまう……

わたしは、ちょっと考えてから、着ていたパーカーの、フードを被って、立ち上がってみました。

そうすると、フードに覆われて重さを感じるからか、大丈夫みたいなので、これであることにして、タオルと歯磨きセットを持って、洗面所へと向かいました。

部屋を出て、狭い廊下の左右を見ると、女子トイレのマークは、見当たらず、すぐ近くに、ドアのない入り口があったから、そこを覗いて見ると、トイレでした。

鏡で顔を見ると、両方の頬に張られたガーゼで、傷の具合は分からないけど、

腫れもだいぶ引いていたし、痛みももう、  
ほとんどなくなっていたから、  
大丈夫そうな感じですよ。

まだ、髪がどうなってるのか、  
ちゃんと、見てないな……

わたしは、ガーゼを避けながら、  
顔を濡らしたタオルで拭いて、  
歯磨きしてから、一度フードを払った姿を、  
見てみようと、手を上げたけど、  
その勇気が出なくて、やっぱりやめました。

お昼には、ケイゴさんが来るんだから、  
また泣きべそかいてちゃ、心配させちゃう。

わたしは、自分の姿を確認しないで、  
病室に戻りました。

ベッドのテーブルに残っていた、  
パンやお菓子を食べてから、窓から外を見ると、  
今日は天気も良くて、けっこう暖かかったので、  
わたしは窓を少し開けて、外を眺めました。

そこはけっこう高い階の、部屋だったみたいで、  
下を見ると、5階建てくらいの小さなビルが、  
密集しているのが見えました。

もうすぐ出るから、まあいいんだけど、  
全然知らない町だ、どこだろう、ここ。

そうして、日の当たる窓辺に座っていたら、

「おい、女子高生、検診だぞ。」

服を脱いで、ベッドに仰向けに寝ろ」

と、カルテではなく、救急箱を持って、  
啞えタバコの、先生がやって来ました。

わたしは、椅子に座った先生の前へと行ったら、  
なんだかお酒臭いです。

先生、まさか酔っ払っている？

まさか、ねえ。

診察だから、言われた通りにしようとしたけど、  
どうしても体が拒絶してしまい、  
パーカーのジッパーが下ろせません。

「なあ、脱いでくれないと、治療出来んぞ。」

安心しな、俺はもつと巨乳の外人が趣味だから、  
幼児体型の貧乳には、手は出さんよ。

それに、そんなことしたのがバレたら、  
不良のガキに、ぶっ殺されそうだしなあ。

第一、良く考えてみる？

その体中の治療をしたのは、俺なんだから、  
もうすでに、たっぷり見てるんだ、

今さら恥ずかしがっても、おせえぞ」

と言って、先生はいやらしく笑っていました。

わたしは多分、この時に相当引きつった顔を、  
していたはずだけど、顔はガーゼが貼られていて、

見えなかったはず。

わたしは、見られるのはすごく嫌だけど、でもいつまでも、こうしていても仕方がないから、思い切って、ベッドに乗ってから、パーカーを脱いで、仰向けに寝ました。

「よしよし、良い子だねえ。

やっぱ若いと、肌の張りが違うよなあ。

冬でもすべすべだしなあ、手触りが良い。

俺が良く見る女子高生は、肌もボロボロの、職業が女子高生な、ババアばつかだからなあ」

口ではずつと、変なことばっかり言ってますけど、患部を診る先生の目は、とても真剣で、これは先生なりの冗談なんだって、判りました。

先生は、傷口のガーゼを外して、その下のシートみたいなのを剥がすと、ぐちゅぐちゅで、まだ酷いように見える、傷を見ながら、  
「うん、良い感じだ。

これなら、傷も残らんで治りそうだな。

ブラが邪魔だな、外してくれ。

あ、そこは傷なかったから、やっぱいいや。

なあ、もうちょっと太った方がいいぞ、

はい、今度はうつ伏せな。

ケツにも傷あるから、パンツ少し下ろせ、

ああ、それでいい。

しっかし、ケツも小さいよなあ、

最近の若いのは、痩せ過ぎなんだよ、

これじゃあ、萎えるつつうの。

もう、パンツ上げていいぞ。

足は結構、良い感じだよな、

やっぱこれくらいなの、太ももの太さがいい、

これ以上細いと、棒みたいで気持ち悪くてなあ」

なんて、相変わらず、平然と変なことを言いながら、

シートみたいなのを、傷口にまた貼って、

その上から、ガーゼを貼り直しました。

こうして、何とも言えない診察は完了して、

最後に先生は、

「傷は全て、順調に治ってきている、

次は、そうだな、2日後に交換しな。

その時には、大半は完治してるだろうよ。

もし、まだ治りきってなければ、同じ様に治療しな。

いいか、患部は出来るだけ、乾燥させるな。

洗ったり、消毒したりするなよ、痕が残っちゃう。

それと、胸は男に揉んでもらえ、まだ間に合う。

腰は上に乗って振ってりゃ、そのうちくびれる。

ケツは、デブるしかないかな。

後は、そういうのが趣味なら、別にいいんだが、

ガキみたいな下着は、何とかした方がいい。

いい男と付き合えば、女は綺麗になる。

それが、女への最高の治療法だ」

と、途中で話がすり替わって、ケガのことじゃなくて、

女としての指摘になって、終わりました。

わたしは、服を着ようとして、

この話に思わず、呆気にとられていたけど、とりあえず、ありがとうございますと、答えておきました。

今は、ケガの診察結果を聞いていたのに、どうしてわたしが、ダメ出しされているんだろう。

この先生、ただのエロオヤジだ。

この後先生は、次のタバコに火をつけながら、少し真面目な顔をして、

「なあ、女子高生。

あんまり、詮索はしたくないんだが、

あんたは、不良のガキの女なのか？」

と、尋ねられたので、いいえと答えると、

「あれ？ そうなのか、

おかしいな、俺の勘が外れたか。

てつきり、そういう関係だと思ってたわ。

まあいいや、もしあんたが、

あのガキのことを、少しは想ってるのなら、

早く、今の生活から足を洗うように言っただけやいな。

あいつはまだ若いし、まだ戻れる、

人生捨ててこっちに落ちるには、少し早いんだよ。

かなりのデカブツだが、日の当たる、

まともな世界に、引っ張って行ってやってくれや。

あんたみたいなのが、側にいれば、

多分、大丈夫な気がするからよ」

と言って、先生は煙を吐きながら、

ニヤツと笑いました。

この先生、エロオヤジだけど、意外と良い人だ。

わたしはそう思って、ずっと気になっていたこと、先生の名前を聞いてみました。

そしたら、先生は変な顔をして、

「俺の名前？」

そんなの、聞いてどうすんだ？

いっつも名前は、勝手に付けられる方だからなあ。

例えば、あんたからは、先生だし、

あのガキからは、ジジイだしな。

名前、名前、名前は、藪野、だな」

と、答えました。

藪野さん？ 藪野先生？

「名前は、せきや。

石の矢と書いて、せきや。

これでどうよ？」

藪野 石矢。

ヤブの いしや。

ヤブの医者……

まともに答える気がないのが判って、  
ちよつと怒って、むつとして先生を睨んだら、

「ちょっと、からかったただけだろ？」

お、その怒った目は、ちょっとそそるなあ、

名前はそんな感じだったよ、確か、な。

仕方がねえだろ、本名なんて、もう忘れたよ。

俺には、自分の名前なんてどうでもいい、

患者と、患部と、治療費さえあれば、

後は何だって、構わないんだから。

さあて、今のうちに挨拶しとくか、

じゃあな、女子高生。

久し振りに、まともな素人の子と話が出来て、意外と楽しかった。

ちょっと、昔別れた女に引き取られた娘をな、

思い出しちまったよ。

あれもあんたみたいに、素直に育ってりゃいいが、多分、馬鹿な女になってそうだ。

最後の最後に、言うだけ言っとくな。

髪は生きてりゃ、勝手に伸びてくる。

今はシヨックかも知れんが、髪の長さはそのうち治る。

だから、出来るだけ前向きに考えろ、いいな？

俺は、カウンセリングは専門外だから、

このアドバイスは、サービスにしといてやる。

それと、危ない道渡るのは、ほどほどにしとけ、

饑別にこの救急箱、やるよ。

それじゃ、せいぜい元気だな！

がははははははは！



と言つて最後は笑いながら、部屋を出て行きました。

わたしは、またも呆氣に取られてしまい、何となく流れで、ありがとうございました、と、挨拶してしまいましたが、

まだもう少し、ここに居るのにな、と、思つて時計を確認すると、もう11時半でした。

わたしは大してないけど、荷物を整理したり、ボタンは全部ないし、すっかりボロボロだけど、着てた方が暖かいから、制服の汚れを、出来るだけ落としてから、着替えると、その上からパーカーを着て、ケイゴさんを待つていました。

ケイゴさんは、12時になる前にここに現れて、準備が出来ているわたしを見て、一緒に部屋を出ました。

狭い廊下から、トイレとは逆に進むと、少し急な階段があつて、そこをどんどん下つていきます。

階数が判るようなものがなかったから、降りている時も、今が何階か分からず、だんだん目が回つてきたところで、出口につきました。

あれ、ケイゴさんは、先生に会つて行かないのかな。

そう思つて、尋ねると、

「先生？ ああ、あのジジイのことが、

その前に確認だけど、治療は終わったんだよな？」

と逆に聞かれて、先生の言葉からして、  
終わったっばいから、頷いたら、

「だったら、いい。」

あいつなら、もういないぜ。

俺が来る頃には、姿を消すって言ったた。

別に俺からは、用なんてねえしな。

それとも、どっか調子が悪いのか？」

と、心配されてしまったので、

それは大丈夫と、伝えました。

そうか、あれが最後の挨拶だったのか、  
だからあんなこと、言ってたんだ。

あんな人には、もう二度と会う機会はないだろうし、  
こんな経験ももうない、はず。

藪野先生、色々ありがとうございました。

先生の言ってたケイゴさんのこと、  
よく覚えておきます。

それと、その他のことは、

頭の片隅にでも、置いときます。

わたしはそう思いながら、ビルの前に止めてあった、  
ケイゴさんの車の、助手席に乗ると、  
ケイゴさんに、かなの家の場所を教えて、  
ナビをセットしてから、出発しました。

そしたらすぐに、前の交差点から、  
2台の黒い車がこっちに向かって走ってきて、  
さっきまでわたしたちがいた、ビルの前に止まると、  
いかにも普通の人じゃない、男の人たちが、  
ビルに入って行くのが見えました。

それを見ていたケイゴさんは、

「あのジジイ、本当に鼻が利きやがる。

っていうか、あいつらが来るのを分かっていたんなら、

こっちにも知らせとけてんだよ、ったく。

巻き添え食うところだったじゃねえか」

と、藪野先生へ文句を言っていました。

走り出してから、すぐにコンビニに寄ると、

ケイゴさんが、色々とお昼の食べ物を買って入ってきて、  
車内で、お昼ごはんのおにぎりを食べてから、  
またすぐに出発しました。

お昼代を出しますって、言ったけど、

「女にメシ代払わせられるか」

と、ケイゴさんに言われて、相手にされず、  
仕方ないから、お礼だけ伝えました。

走り出してから、しばらくして、

どのくらいで着くかを、ケイゴさんに尋ねて、  
大体2時間くらいだと聞いて、  
かなにそれをメールした後、  
わたしは、藪野先生のことを聞きました。

ケイゴさんは、変な顔しながらも、

話してくれました。

「どうして、ジジイのことなんて聞くんだ？  
まあ、いいけどよ。」

あいつは借金まみれの、モグリの医者で、  
いつつも、取り立て屋から逃げ回ってる。  
まともな医者には、かかれぬ奴らから、  
馬鹿みてえな高額の治療費で、診てやがるんだよ。

俺の知ってる、そう言う類の医者の中では、  
値段は高いが、腕はたしかだったから、  
奴のところへ連れてったんだ。

ジジイは、余計な詮索もしない、  
ただ単純に、依頼に見合う報酬さえ出せば、  
その仕事をこなす、ただそれだけなんだ。

腕からすると、多分元は、  
ちゃんとした医者だったんだろうが、  
何かしくじって、人生踏み外したんだろうよ。  
今のジジイは、医者としての腕を取ったら、  
酒と女と博打に溺れてる、ただのダメな奴だ。  
また別の町で、身を隠すとか言ってたから、  
しばらくは、会うこともないだろうな」

患者はお客で、病気とかケガを治すっていう依頼と、  
それを診る報酬の、治療代のお金さえあれば、  
いって言うのは、そういうことなんだ……

わたしは、藪野先生の言っていた言葉を思い出して、  
なるほどなあ、と、少し関心していました。

でも先生がどっか行っちゃったら、あの診療所って言うか、病室だった部屋はどうなるんだろっ、と思って聞くと、

「診療所？ そんないいもんじゃねえだろ。」

あの部屋は、ジジイが勝手に使っていただけだ、ジジイが家なんて持つてる訳がねえ。

いつつ、潜伏先を見つけては、

道具をかき集めて、名前を変えて、

飛ばしのケータイ使って、商売してるんだからな。

だから逃げ出す時は、テメエの体ひとつなんだ」と、教えてくれました。

自分の家もなくて、誰も自分の名前を知らなくて、いつも逃げ回りながら、生きるなんて……

そんな生活、わたしには全然考えられません。

なつめの周りの人たちも、わたしからすれば、遠い世界にいる人たちだって、思ったけど、ケイゴさんの、周りの人たちも、なつめの時とは全く逆の方向で、遠い世界の人たちみたいですよ。

ケイゴさんは、これからどうするんだろっ……

わたしはケイゴさんへ、

ケイゴさんは、わたしを送った後、どうするのかを聞きました。

「しばらくは、ここを離れるつもりだ。」

俺1人なら、別にどうにでもなるし、  
奴らの目的は、俺じゃないしな」

だとしたら、かなの家に着いたら、  
ケイゴさんとも、そこでお別れなんだ……

わたしはケイゴさんに、連絡先を教えて欲しいと、  
頼みました。

これだけ色々してもらって、連絡もつかないなんて、  
本当にお礼も出来ないし、それに、  
藪野先生の言葉も、頭をよぎって、  
少しでも、接点を持っていた方が良いと、  
思っただんです。

「だから、それは、前にもダメだって言っただろ。  
何度言われても、ダメなものはダメだ！」

ケイゴさんは、少し怒鳴ったけど、  
わたしは今回は、引く気はなかったから、  
ちよっと、ずるい手を使いました。

それは、被っていたフードを、取っただんです。

すると、頭が重みを感じなくなって、  
やっぱり、思い出し始めてしまい、  
ポロポロと涙が零れてきました。

そんな顔で、わたしはケイゴさんを見つめました。

「うわ、お前！ きたねえぞ！  
あ、いや、違う、何でもない、何でもねえから、  
泣くんじゃねえ、頼むから泣くな！  
ああもう、分かった分かった！  
教えればいいんだろ！ 教えるから！  
教えるって言うてんだろ！  
だから、泣かないでくれよ！  
お前に泣かれると　　！」

そこまで叫んで、ケイゴさんは急に口を閉じました。  
わたしは泣きながらも、今の言葉には、  
何か、引っかかるものを感じただけで、  
良く分からなくて、とりあえず先に連絡先をと思い、  
フードを被って、涙が止まってから、  
わたしはケイゴさんの連絡先と、  
メールのアドレスを聞いて、登録しました。

嘘だと困るから、両方とも試して、  
ケイゴさんの携帯がなっているのを、  
確認しておきました。

これで、連絡は取れるようになりました、  
よかったよかった……

こうして、ケイゴさんの連絡先を聞き出していたら、  
いつの間にか、かなの家のだいぶ近くまで来ていて、  
時計を見ると3時で、お昼を食べたりとか、  
道が渋滞してたりしたから、到着が少し、  
遅くなってしまったようです。

「なあ、あの、警備会社の車が止まってるところで、  
で、いいんだよな？」

と、ケイゴさんに言われて、前を見ると、  
かなの家の前に、警備会社の車が止まっ  
ていて、  
駐車場にも、もう1台大きな車も止まっ  
ていました。

「なるほど、普通の友だちの家じゃねえな、これは。  
警備もプロがいるんなら、安心か。  
しっかし、でけえ家だなあ」

わたしは、かなに連絡して、着いたことを知らせると、  
家の扉が開いて、かなが出てきました。

ケイゴさんは、車をかなの家の前に寄せて止まると、  
「もうしばらくは、危険だから外は気をつけるよ、  
もしここでもダメなら、連絡してくれ。  
何とかする」

と、前を向いたまま、言いました。

わたしはその言葉に、お礼を伝えてから、  
ケイゴさんも気をつけてと、伝えると、  
「おう」  
と、一言だけ返ってきました。

ここでまた、藪野先生の言葉を思い出したけど、  
何て言ったら良いのかが、判らなくて、  
少し戸惑ったけど、結局何も言えず、  
車を降りました。



「みなも！ みなも！ みなも！」

ケイゴさんの車が、走り去って行くのと入れ替わりに、ルームウェア姿のかなが、わたしの名前を呼びながら、走ってきました。

わたしの目の前まで来た、かなは、抱きつこうとして、わたしの顔を見て、触ってもいいの、不安になったみたいに、躊躇していたから、

逆にわたしの方からかなに、抱きつきました。

かなの家やかなの姿を見たら、改めて、普段の日常に、帰って来たのを感じて、また、涙が出て来てしまい、すでに泣き出していた、かなと一緒に、しばらくそこで、泣いていました。

2人とも涙が止まった頃に、わたしは、かなに手を引かれながら、かなの家へと入りました。

わたしのひどい姿を見た、かなは、まず、お風呂と着替えを済まそうと言いだしたけど、わたしはそれを止めて、先に話をしたいと言いました。

フードを取って、切られた髪のこと、泣き出してしまう前に、ちゃんと話が出る、今のうちに、そこまでは話しておきたかったです。

わたしはかなに、今までのこと、  
月曜日の下校から、ここに着くまでの話を、  
まず、簡単に話しました。

かなは、わたしが襲われた時の話を聞くと、  
また泣いていたけど、取り乱したりはせずに、  
啜り泣きながらも、わたしの話を聞いていました。

そして最後に、門埜さんに襲われた時に、  
髪を切られたことを話してから、フードを取りました。

もう、これは精神的な病気なのかも、と思うくらい、  
フードがなくなると、すぐに耐えられなくなって、  
あの時のことを思い出して、涙が溢れてきます。

藪野先生の診察の時は、大丈夫だったから、  
少しは良くなってるのかも、なんて思ったけど、  
そうじゃなくて、先生が変なことを、  
ずっと言ってくれていたから、  
気が紛れていただけだったのが、判りました。

わたしは、悲しみでいっぱいになってしまって、  
かなへ何も言えなくなってしまう、  
黙って泣いていました。

「みなも……」

「ごめんなさい！　ほんとにごめんなさい！

あたしが、巻き込まなければ、

こんなことには、ならなかったのに！

もっと、しっかり守っていれば！

みなもに偉そうに、ギルド作ったとか言っておいて、一番肝心な人が、守れなかったなんて！あたしのやってたことは、無駄だったんだ！ううん、無駄どころか、かえって、取り返しのつかないことに、なっちゃった。ごめん、ごめんなさい、ごめんなさい！どれだけ謝っても、許されいなのは、分かっている。だけど、あたしにはもう、これしか

かなはとても動揺して、前の幼児化した時よりも、ある意味、ひどい状態になっているのが分かって、わたしは、自分の涙も止まらないんだけど、かなの言葉をさえぎって、それは違つと、頑張って叫びました。

泣いているわたしが、反論するとは思っていなかったらしく、かなの言葉は止まって、わたしの顔を見ていました。

わたしには、今回の件の原因は、うまく言えないけど、誰か1人のせいじゃないって、思っていたんです。

もつと、ちゃんと説明したいけど、今はまだこれ以上は、自分でも言葉に出来なくて、かなには、とにかく自分を責めないで欲しい、わたしにとっては、そうやって自分を責めている、そんなかなを見ている方が、よっぽど辛いから、わたしのことを、想ってくれるのなら、そう言う風には、考えないで欲しいと、繰り返してお願いしました。

そう伝えると、かなは、判ってくれて、  
「みなもが、そう言うなら、もう言わないよ。  
これで最後、みなも、ごめんなさい!!!」  
と、大きな声でわたしへと謝りました。

これでかなは、気持ちの切り替えが出来たみたいで、  
「まずは、みなもを綺麗にするよ」  
と言って、支度を始めました。

かなは、着替えを用意してから、お風呂に連れて行って、  
シャワーとかはダメだから、かなにも手伝ってもらって、  
傷をよけて頭を洗ったり、タオルで体を拭いたら、  
かなりさっぱりしました。

頭を洗ってもらっている間は、涙は止まっていたけど、  
やっぱりお風呂を出て、出来るだけ見ないようにしていた、  
短くなった髪が、鏡に映って少しでも見えてしまうと、  
涙が出てしまいます。

「ほら、みなも、ガーゼが濡れちゃうよ。

これで、涙拭いててね」  
と言って、かなからタオルを渡されて、  
わたしはずっと、タオルを目に当てていました。

体のあちこちにある、  
ガーゼや包帯が引つかからないように、注意しながら、  
着替えのルームウェアに着替えると、  
それはフード付でした。

泣いていたわたしに、かなは、

「さっきまでは、平気だったんだから、

これを被れば、泣き止んでくれるよね？」

と言いながら、頭へフードを被らせました。

すると、だんだんと落ち着いてきて、

涙もそれに合わせて、止まりました。

自分で言うのも、なんですが、

もう、なんなんだろう、これ。

大丈夫になったのを、かなに伝えて、

とりあえず、玄関に置いたままだった荷物を取って、

かなの部屋へと行きました。

わたしはここで、家にかかる前に見た、

警備会社の車のことを、かなに聞きました。

そしたらかなは、最近事件が多いから、

ホームセキュリティを、つけて欲しいって、

父親に連絡して許可をもらい、

一番高いプランを、契約したんだそうです。

家の周囲に監視カメラが設置されていて、

外の駐車場に止まっていた大きなミニバンには、

中で、各カメラのチェックを、

24時間体勢でやっていたり、

常時4人の警備の人が待機しているとかで、

請求額を知った時は、めちゃくちゃ怒られそうだと、

笑いながら言っていました。

この後は、かなから、あの事件の日に起きていたことを、色々と教えてもらいました。

門塾さんは、暗黒女王のメンバーをかなり使って、わたし以外にも、ギルドや白刃のメンバーを、あちこちで襲っていたようです。

でもそれは、今までみたいな暴力だけじゃなくて、女の人を使って、痴漢に仕立てられたり、万引きの共犯にされたりして、個別に足止めして、さらに、普段から集まる場所とかに、携帯の電波を、妨害する機械を使って、連絡を取れないように、妨害していたらしいです。

この、あちこちで携帯が繋がらなくなったのは、翌日のニュースでも、出ていたそうですが、あちこちで同時に起きた、色んな事件のことは、全くニュースにならなかったそうです。

どうして、ギルドのメンバーをそこまで、完璧に、狙い打ちに出来たかと言うと、ここは良く判らなかつたんだけど、ギルドの情報を管理する、システムのサーバに、ハッキングされて、情報を盗まれたとか、言っていました。

ギルドの人たちは、この日の攻撃は、てつきり、かなや主要メンバーを潰す陽動なんだと、考えていたそうで、かなも含めた幹部の人たちは、避難していたんだけど、結果的に判ったのは、

実は、かなたちを狙うかのように見せた陽動で、  
本当のターゲットは、門塾さんが逆恨みした相手の、  
わたしだったんだと、かなから言われました。

門塾さん自身については、今日までずっと、  
学校には、来ていないのが判っていて、  
消息は、不明なんだそうです。

かなは、わたしの話した内容から考えて、  
何か行動している、と言うよりも、  
門塾さんも、どっかケガをしていて、  
出てこないのかも知れないって、言っていました。

かなはわたしが説明した話で、門塾さんが口走っていた、  
あのひどい内容に、とても興味を持ったようで、  
そこところを、詳しく聞いていました。

「今までずっと、掴めなかったあの女の尻尾が、  
みなものおかげで、掴めそうだよ。  
これで、チェックだよ、みなも！」

ひと通り聞いたかなは、わたしにそう言いました。

チェック？ チェックって、何？

疑問に思ってたかなに尋ねましたが、  
かなは、ニコニコしているだけで、  
結局、その意味を教えてくださいませんでした。

こうして話しているうちに、夜になりました。

夕食は、ピザを取って2人で食べた後に、わたしはかなに、考えていたお願いをしました。

髪を切つて欲しいって、頼んだんです。

このままじゃ、この先もずっと、フードを被つてなきゃいけないけど、それじゃあ、学校も行けない。

だから、シヨックを断ち切る意味も込めて、どうせ切るなら、かなにやってもらいたいと思って、かなにカットをお願いしたんです。

「あたしでいいの？、みなも」と、かなに尋ねられたけど、わたしははつきりと、頷きました。

これが、わたしなりのケジメのつもりで、切ったら、色々吹っ切る努力をして、気持ちを切り替えるつもりです！

藪野先生も言つてた、髪はまた伸びるんだから、前向きに考えろって。

だからわたしは、これで踏ん切りをつけて、新しく、出直すスタートにするんだ。

それで、新しい自分と共に、髪をまた伸ばそう！そう決めたんです。



わたしのお願いを聞いた、かなは、  
わたしを、さつき入ったのとは、  
別のお風呂へと、連れて行って、  
そこに散髪用の道具と、スツールを持って来ました。

わたしは、スツールに座ったら、  
目を閉じて、フードを取ってから、  
初めて欲しいって、かなにお願いしました。

かなは、わたしの首から下をシートで覆ってから、  
「どんな感じにしたい？」

「やっぱり、出来るだけ残した方が、いいよね？」

と言う、かなにわたしは、  
そのまま伸ばしても、変じゃなくて、  
かなが、似合うと思うようにして、  
って、頼みました。

「判ったよ、ただね、最初に言つとくと、  
一番短いところが、肩に届くくらいしかないから、  
どうしても、あたしより短くなるからね。」

あと、プロじゃないから、凝ったのは出来ないよ  
と言うってから、カットは始まりました。

わたしの髪を切り始めた、かなは、  
かなり手際よく、ザクザク切っていて、  
全然、迷いはないみたいでした。

かなに頭を触られて、髪を切ってもらっている間は、  
涙も出てこなくて、逆に安心出来ると言うか、

気が安らく感じがしました。

かなもわたしも無言で、時間は過ぎて行き、かなの握るハサミの音だけが、ずっと聞こえていました。

そして、どのくらい経ったのか判らないけど、

「よし、出来た」

と言っかなの声がして、わたしが見てもいいかと聞くと、

「あ、まだ待って。」

みなも、今の色だと重いから、

ちよつと髪の色も、変えてみない？」

と言われて、わたしはかなに任せました。

「そんなには変えないから、大丈夫だよ。

頭にもケガしてたから、毛先だけ。

もうちよつとだけ、軽くしたいんだよね」

と言いながら、かなはわたしの髪をいじっていました。

何かを髪に塗ったり、何かを巻いたりする作業の後、

洗面所のシャワーで髪をすすいで、

タオルで拭かれました。

その後は、ドライヤーで乾かされて、

ブラシをかけられて、何だか自分が、

トリミングされてる犬になった気分でした。

そして、またスツールに座らされた後、やっとなついに、

「OK、完成！」

みなも、目を開けていいよ」

と、かなから言われて、思い切つて目を開けました。

あ、なんか、なつめっばい……

わたしは、ショートのパブになってました。

長さは、肩よりちょっと短くて、

前髪や横の髪は、そんなに変わってません。

頭は、さっきよりもさらに軽くなって、

髪は肩にも全く、かからなくなりました。

なんか、首がくすぐったいな。

こんなに短いので、記憶にないや。

プールで溺れた時だって、もっと長かったし、

もっと小さい時でも、背中まであったもんなあ。

なんだか、すごく、新鮮です。

髪の色は、オレンジっぽい茶色になっていて、

前は、頭の近くは真っ黒だったから、

何だか、自分が自分じゃないみたいです。

「あたし的には、似合ってる、と思うけど、

みなもとしては、どう、かな？」

すこし不安げに、わたしへと聞いてきた、かなに、

しばらく鏡を見ていた、わたしは、

正直に、まだよくわかんないけど、

何だか自分じゃないみたい、と伝えました。

その答えに、かなは、

「ほんとに、正直に答えたね、みなも。

そう言う時ってさ、こっちに気を使って、

気に入ったよとか、すごくいいとか、

言っとくもんじゃないの？、普通」

と言って、笑っていました。

こうして、イメージチェンジも出来たところで、

今までの疲れが出たみたいで、眠くなってしまい、

かなに用意してもらった、お姉さんの部屋ではなくて、

すごく久し振りに、かなのベッドと一緒に眠りました。

かなと同じベッドに入った時、

すごくリラックスしていることに、改めて気づいて、

今まで、気づかなかったけど、

とても気を張っていたんだなって、判りました。

これでやっと、本当に安心して、

ゆっくり眠れるんだ。

そう思った時には、わたしはもうすっかり、

深い深い眠りに、落ちてました……

2011年 2月 その5(前書き)

変更履歴

2011/03/21 記述修正 携帯 ケータイ

2011年 2月 その5

2月18日 リハビリ

「ねえ、みなも、みなも、起きて」

遠くから、声が聞こえる……

目の前にいるのに、どうも煙で霞んでいて、  
良く見えない。

だんだん煙が晴れてくると、  
わたしを呼ぶ人の姿が見えて来た。

その姿は、髪の毛の長い……

門塾さん!?

と、思つて飛び起きたら、

思いつきり、頭をぶつけるのと同時に、  
「いったーい！」

と言つかなの声が聞こえて、ベッドの横で尻餅をついて、  
おでこに手を当てている、制服姿のかながいました。

「いたたたたた、朝から頭突きされるとは、  
思わなかつたよ。

おはよう、みなも。

叫んでいたけど、大丈夫？」  
と挨拶されました。

かなは、ぐっすり眠っていたわたしを、  
起こさないようにして、起きて、  
自分は学校に行くから、  
それだけ知らせておこうと思って、  
家を出る前に、わたしを起こそうとしたみたいです。

そしたらわたしはその言葉を聞いて、  
門塾さんの、あの時の言葉を思い出してしまい、  
悪夢を見たようです。

ああ、びっくりした。

わたしは、かなに謝ってから、  
いってらっしゃい、と答えました。

かなは、わたしに携帯を渡してから、  
「出来るだけ、早く帰ってくるつもり。  
遅くても、夜までには戻るから、  
夜は一緒に食べようね。」

お昼は、出前を取って食べて。  
メニユーは、台所のテーブルに置いてあるから。  
お金は、メニユーと一緒に財布が置いてあるから、  
そのお金を使って。  
家の中のものは、好きに使って。  
後、冷蔵庫の中の物も、食べたい物を食べてね。

出来るだけ、控えては欲しいけど、  
もし、どうしても外出したいんなら、

このケータイに登録されている、番号にかけて、外にいる、警備会社の人たちに繋がるから、付き添いを頼めば、同伴してくれるからね。

なんかあったら、ケータイに連絡してくれれば、いつでもすぐに出るよ。

授業中だろうが何だろうが、絶対に出るから。

それじゃ、いつてくるね」

と言って、部屋を出て行きました。

わたしは、部屋を出ていくかなを、玄関まで見送ろうとしたら、

「あ、ここでいいから、ゆっくりしてて、

じゃあね！」

とかなは言って、出て行きました。

かなを、ベッドから見送った後に、

まだ、ちよつと痛い頭をさすりながら、

わたしは、落ち着いた途端に気になり始めた、

首の周りや、背中 of 涼しさを感じると、

涙ぐんでくるのが判りました。

昨日はかなと一緒に、髪を切ってもらった直後は、気持ちが高ぶっていたから、

大丈夫だっただけで、やっぱりまだダメなんだ……

わたしは、色々と思い出してしまっ前に、背中にかかっていたフードを被ってから、またベッドに入りました。



かなも、ああ言ってくれたし、今日くらい、何も考えずに、ゆっくりごろごろしていよう。

そう思って、ベッドの中でボーっとしてました。

まだ痛む頭で、藪野先生の言葉を思い出して、頭は病院で診てもらわなくちゃいけないな、とか、みことは、今どうしているのかな、とか、忍さんも、心配しているだろうな、とか、学校を5日も連続で休んだのは、初めてだ、とか、考えていました。

そうしてごろごろしながら、ふと時計を見ると、もう、お昼になっていました。

わたしは、台所に行って冷蔵庫の中を確認してから、テーブルの上にあった、出前のメニューを眺めていました。

だけど、そんなに食欲もないので、冷蔵庫の中に入っていた、バナナやリンゴを切って、それを食べて、お昼にしました。

午後になって、携帯をチェックすると、みことからのメールが1件と、着信履歴が何件か入っていて、それは全部、忍さんでした。

まず、みことからのメールを開いてみると、件名はなくて、内容は、

「葵から状況聞いた

大丈夫か

もうじき戻る

また連絡する」

と、なんと文章が4行もありました！

みこと、うまくいったのかな、

とりあえずは、メールでこっちは大丈夫だって、  
知らせておこう。

わたしは、みことのメールへと返信してから、  
この後に留守電を確認したら、忍さんから、  
とにかく、連絡出来るようになったら、  
いつでもかけて欲しいと、入っていました。

わたしはこれを聞いて、すぐに、  
忍さんへと、連絡をしました。

忍さんも、すぐに電話に出てくれて、  
「みなもちゃん、今は大丈夫なの？」

と、かなとは違って、落ち着いた声で聞かれたので、  
はいと答えると、忍さんは、

「そっか、その声の感じだと、

本当に大丈夫そうだね、とりあえず無事で良かった。

一昨日に留守電を聞いて、連絡を待ってたんだけど、  
なかったから、気になって、

何回か、こっちから連絡したんだ」

と言われた後に、何があったのかを聞かれたので、

わたしは月曜日から、これまでのことを、  
忍さんへと説明しました。

忍さんはずっと静かに、わたしの話を聞いていて、わたしが襲われたところでも、髪を切られたところでも、

忍さんの態度は変わらず、冷静に聞いていました。

話し終わると、忍さんは、

「そっか、とても色んなことがあったんだ。

大変だったんだね。」

髪の話は、みなもちゃんとしては、

あんなに大事に、伸ばしていたんだから、

とてもショックだったと、思うけど、

その先生も、言っていた通りで、1日でも早く、気持ちを切り替えるのが、一番だと思う。

腕や足とは違って、また伸ばせば元に戻るしね。せつかく友達にカットしてもらったんだし、少しでも早く、短い髪になれるようにした方が、いいんじゃないかな。

精神的なショックがあるからって、

いつまでも逃げてちゃ、前には進めないよ。

頑張ってるって、人に言うのは、

無責任な言葉だから、好きじゃないんだけど、

そこは頑張ってる、克服して欲しい。

私は、元気になった新しいみなもちゃんと、会える事を願っているよ。

航海堂の方は、しばらく休みにしとくから、また来れるようになったら、教えてね」

と言って、電話を切りました。

忍さんの冷静な言葉は、わたしの甘えていた心に、突き刺さるのを、感じました。

そうだ、そのうちに治るのを待って、

シヨックがあるからって、フード被ってたら、

何の為に、かなに髪を切ってもらったのかも判らない。

今日くらいは、じゃなくて、今すぐに、

フードを被るのを、やめよう。

わたしは、この後ずっとフードを被らずに、

客間でテレビを見たりして、過ごしました。

座ってるだけより、歩いた方が良いかと思って、

外は天気も良かったから、屋上のテラスに出たりもしました。

この日は風はほとんどなくて、

日が当たっていれば、上着がなくても暖かいです。

それから、2つある洗面所にも、

自分の姿を、見に行ったりしました。

どこに行くにも、手鏡とケイゴさんからもらった、

タオルを持って行って、自分の短くなった髪を見たり、  
感じたりするたびに、タオルを握り締めて、

こみ上げてくる涙を押さえきれずに、泣いていました。

そして、少し落ち着くたびに、また自分の短い髪を見ては、

悲しくなって泣いてしまうのを、何度も繰り返していました。

短い髪が、歩くと揺れて、首筋に当たる感覚、テラスでは、そよ風でも、軽く揺れる感じ、軽くうつむくだけで、頬を撫でてから、

簡単に視界に入ってくる、明るい色の毛先、このどれもが、わたしの涙へと変換されていくんです。

なんなんだろう、これ。

やっぱりショックから、来てる病気じゃないかって、自分で思ってしまいます。

だんだん、自分でも嫌気がさしてくるんだけど、もう、いい加減にしろって、思うんだけど、でも、それでも治まらなくて、

涙はまるで、暑いから出てくる汗や、ご飯食べている時の、唾液みたいに、それはもう当たり前のように、溢れてきました。

わたしは、屋上や洗面所や、客間やかなの部屋を、ずっと泣きながら、ぐるぐる回っていました。

そして、夕方になって、かなが帰ってくると、ちょうど客間にいた、わたしの顔を見て、とても驚いていました。

わたしは、かなに事情を説明して、フードはもう、被らないでいるつもりだと伝えて、わたしが泣いていても、普通に接して欲しいって、

頼みました。

かなは、それを承知してから、夕食にピザをとって、2人で食べました。

かなはもう、わたしが泣いていてもお構いなく、普通に話しかけてきて、わたしはそれに、出来るだけ普通に答えようと、頑張りました。

かなの話では、今日も門塾さんは来ていなくて、相変わらず、消息不明らしいです。

それでも、もうすぐ決定的な証拠を掴めそうで、そこまで辿り着けたのは、わたしのおかげだって、かなは言っていました。

今日は、藪野先生に言われていた、体中のガーゼと、包帯の交換をする日だったので、かなにも手伝ってもらって、剥がして見ると、傷のうちの半分くらいは、もう綺麗に治っていました。

打撲のあざも、大分治ってきていて、もう、うっすらと青くなっている程度です。

でもまだ、お風呂には入れそうにもないから、拭ける所だけ、お湯で絞ったタオルで体を拭いて、完治していない所には、かなにお願いして、先生からもらった、救急箱に入っていた、ガーゼとシートを、交換してもらいました。

ルームウェアの着替えは、かなに頼んで、  
フードのないのにして欲しいって頼みました。

一応、フード付の方が良いんじゃないかって、  
かなは言ったけど、甘える予知はない方がいいから、  
と、かなに伝えて、フード無しにしてもらっただんです。

そしてこの後は、早めに寝ることにして、  
かなの部屋のベッドに行きました。

今日1日、この髪に慣れようと頑張って、  
少しは良くなっている、と思いたいけど、  
どうなんだろうか、いまいち良く判らない。

タオルは涙を吸って、絞れそうだったし、  
目は泣き続けだから、普段泣いた時は、  
大して変わらないのに、今は真っ赤になってた。

こんな調子で、良くなるのかな。

でも、これが克服出来ないと、  
どこにも行けないし、忍さんにも合わせる顔がない。

だから、頑張ろう。

そう思いながら、眠りました。

2月20日 姉妹の契り

かなの家に来てから、3日目になり、  
だいぶ、わたしは落ち着いてきました。

初日はどうなることかと思っていた、髪の毛も、  
一晩眠って朝になると、かなり馴染んできて、  
やたらと泣きまくるのは、なくなりました。

まだ、何回かは泣いてしまったけど、  
初日に比べれば、全然マシになっていたから、  
これなら、来週中には学校も行けそうです。

でもこれには、かながまだ心配していたけど、  
わたしもいつまでも、学校もバイトも、  
ずっと休んでいる訳には、いかないから、  
来週中には、復帰する予定で行くって、  
かなに、宣言しておきました。

かなは、まだ暗黒女王の手下が、  
いなくなつてはいないのを、とても気にしていて、  
学校は、かなと一緒に登校して、  
帰りはかなが帰れば、一緒に帰って、  
無理な場合は、タクシーでかなの家に直帰、  
バイトは危ないからダメ、  
と言う条件なら、と言っていました。

バイトに関しては、何とか行きたいけど、  
危ないって、言われてしまうと、  
守ってもらっている身としては、  
何も言い返せないなあ……



昨日は1日、かなも一緒に家にいたんだけど、今日は、用事があるとかで、夕食までには帰る、と行って、また午前中に外出していました。

わたしはこの日、一度自分の家に帰ろうかと、考えていました。

なぜかと言うと、1つは制服で、ボロボロになった制服は、もう着れないから、前に、なつめと一緒に襲われた時に、もらった制服を、持って来たいのと、それと、みことから昨日の夜中にメールがあつて、今日、こつちに帰るから会いたいって、書いてあつたんです。

その時間は、午後だったので、自宅に寄った後に、みことの家に行くことにしました。かなにはメールで、出かけるって伝えておいてから、かなから預かっていた携帯で、電話して、外に行きたいと伝えると、すぐにチャイムが鳴って、警備会社の人が、2人やってきました。

わたしは、外に出る時用に渡されていた、ロングコートを羽織って、警備の人に、案内されるままに、家の前に止まっていた、車に乗せられて、自宅へと向かいました。

自宅に入る時も、警備の人たちは周りを警戒したり、家に入る時も、先にその人が入って、安全確認したりして、まるで映画のようです。

映画のワンシーンのような、安全確認が終わって、許可が出たので、わたしは家に入りました。

5日ぶりに家に帰ってから、とりあえずは、明日の学校の支度をしておいて、しまいこんでいた、もらった制服を出して、紙袋に、たたんで入れました。

ちよつと、ヨレヨレになっちゃってるけど、まあ、いいや。

わたしはここで、みことへと連絡を入れてみました。

みことは、すぐに出たので、これからアパートへ向かうけど、大丈夫かを尋ねると、「待っている」

と、短い答えを聞いて、いつも通りのみことだと、安心しながら、電話を切りました。

みこととの約束もあるから、あんまり長居しない方が、いいかなって思って、わたしは、家を出てみことのアパートへと、向かってもらいました。

アパートに着くと、レザージャケット姿のみことが、

外に出て待つていました。

あれ、左手に包帯巻いているけど、怪我したのかな。

なんだか、気になる……

わたしは、警備の人たちに、話をしてくれるので、ここで待つていて欲しい、とお願いしてから、みことと一緒に、家の中に入りました。

みことは、外では無表情でしたが、2人きりになるとすぐに、

「みなも、その怪我はどうしたんだ？

それに短い髪もだ。

急にずっと長かった髪を切るなんて思えない。

やっぱり、門塾の作業なのか？」

と、少し早口に尋ねてきました。

わたしは、正直にありのままをみことに伝えて、今は、かなの家に泊まっているところまで、みことに、話して聞かせました。

そしてその後に、何か言いたそうなみことを、遮って、それよりも、みことの話が聞きたいと、

すぐに左手の包帯のことを尋ねると、みことは、

「まず、実家での話をさせて欲しい。

この手のことは、その中で話す」と言ってから、話を始めました。

「まず最初に行ったのは、実家である、白永組の事務所もある、間宮 四良のマンションだ。そこに行くと、継母の女がいたから、あの男の居場所を聞き出して、今度は別の階にある、白永組の事務所に行ったんだ。

そこで、あの男と会う事が出来て、何しに来たと、忌々しそうに睨むあの男に、私は頭を下げて、親子の縁を切つて欲しいと、頼んだんだ。

あの男は、それを聞いて大笑いしていたよ。

何を言い出すかと思えば、

馬鹿げた事を言い出したな、と。

そんな事を、許可するとも思っているのかと、一笑されて、全く相手にされなかった。

その後と言われたのは、

お前に幾ら使つてると思っているんだ、

日本の法律上、親子の関係は絶縁出来ない、

だからお前は一生、俺の娘なんだ、と言ひ捨てられた。

私はこの男に土下座して、

だったら、この間宮の家から自由にして欲しいと頼んだ。

そしたら、あの男は、この白永組から縁を切りたい、

と言うのなら、組の者としての覚悟を見せてみる、

除籍されて、堅気になりたいのなら、

指を詰める、それがケジメつてもんだ、

詰めたら、考え直してやってもいいぞ。

と言つて、長ドスを出されたんだ。

私はそれを見て、あの男に、  
指何本で、自由をくれるかを聞くと、  
あの男は馬鹿にしたように、笑いながら、  
そうだな、小指が、お前に掛かった金への詫び、  
薬指が、兄貴との取り決めに反故にする詫び、  
中指が、親である俺のメンツを潰した詫び、  
人差し指が、白永組に泥を塗った事への詫び、  
合計、指4本だと、言い放ったんだ。

多分、あの男は私がそんな度胸はないって、  
ガキが息巻いているだけだって、思ったんだろう、  
だから、私の本気で指を詰めようとしているのを見て、  
若い奴らに、止めさせようとしたんだが、  
少し、遅かった。

私は、左手の指を切ったんだ」

そう言ってみことは、左手の包帯を解き始めました。

まさかとは思ったけど、  
本当に指を、詰めちゃったの!?

わたしは、みことが包帯を解いていくのを、  
何も言えずに、見つめていました。

わたしが、命令したことを実行する為に、  
みことは自分の指を、切っちゃった……

まるで、結婚の記者会見で、  
芸能人が指輪を見せるみたいに、左手を見せながら、

やがて、みことの手に巻かれた包帯が、完全に解かれると、親指以外が指ごとに包帯で巻かれていて、その中で小指だけは、不自然に短いのが判りました。

「止められた時には、ドスの刃は半分くらい、食い込んでいて、他の指は骨で止まったんだが、先に刃がかかった、小指だけは、ちょうど、ドスの刃が関節に当たったのと、最初に力がかかったのもあって」

ここまで聞いて、わたしはもう堪えきれずに、みことに謝りながら、大声で泣き出してしまいました。

どうしよう、わたしは取り返しのつかないことを、みことにさせてしまったんだ……！

そう思えば、思うほど、なんてことを、させてしまったんだろうと、どんなに悔やんでも、悔やみきれずに、もうひたすら、みことに泣いて謝ることしか、わたしには、出来ませんでした。

昨日も、散々泣いていたはずなのに、昨日の涙とは別物の、悲しみではなくて後悔の涙が、止め処なく溢れて、止まりません。

そんな時に、

「みなも、じつとしてくれ」

と、突然言われて、顔を上げようとしたら、みことは、右手でわたしの頭を軽く押さえて、

指に包帯を巻いた左手で、黒い小さな器みたいなのを、わたしの顔の下に持って来ているのが、しばらくして、やっと判りました。

え？ 何？ どういうこと？

何だか判らないけど、されるがままになっていたら、「よし、だいぶ入ったな。」

これだけあれば、十分だよ、みなも」

と、みことに言われて、ますます判らなくなりました。

呆気にとられてしまい、涙も引いて来ると、わたしから離れて、黒い器を脇に置いてから、わたしに土下座をして、

「最初に謝っておく、騙して済まなかった」と言ってから、小指の包帯を取りました。

そしたら、単に指を曲げて包帯を巻いていただけで、ちゃんと指は付いていました！

みことは、まだ呆然としていたわたしを見つめながら、「実はどうしても、みなもの涙が欲しくって、

こんな芝居をして騙したんだ、申し訳なかった。

でもこれで、私のやりたいことが出来るよ」「  
と言って、微笑んでいました。

わたしは騙されたことへの、怒りよりも、指を切ったのが嘘で、良かったって思っていました。

それにしてもわたしの涙なんて、何をするんだろう。

それは気になったけど、みことは話を戻して、再び実家のことを、話し始めました。

「私がああ男の前で、指を切ったのは嘘だ。

第一、指を詰めたら、それはそれで堅気にはなれない。だから、ひたすら土下座をして、

ああ男に食い下がって頼み込んだんだ。

でも、何のケジメもつけずに、自由になりたいとは、虫が良すぎるだろうかと、相手にされなかったから、自由にならないのであれば、私はここで死ぬと言って、出されていた長ドスを、首に当てて叫んだんだ。

更に、たとえ私を捕らえたとしても、

いつか必ず、白永組の間宮の娘である限り、最も重要な場面で、それをぶち壊して死んでやると、ああ男に向かって、宣言したんだ。

ああ男は耳を貸さずに、私を捕まえるように、若い奴らに命じたけど、私には体術があるから、チンピラ程度では相手にならずに、全員倒してやった。

間宮 四良は、いわゆるインテリヤクザで、

ずる賢いのかも知れなかったけど、

ケンカは出来ない男だったから、私の強さを見て、思うようには使えないと、判断したらしくて、

この場では、私の話を聞いて、絶縁を約束したんだ。

伯父貴との約束も破棄するし、絶縁状も出すと約束した。私は、その言葉に念を押させてから、



念書を書かせて、マンションを出た。

次に私は、伯父貴の屋敷に向かった。二度と敷地へ踏み入らないと言う約束は、臥龍会、白永組の間宮家の娘としてであつて、今の私はただの間宮 命として、ここへ来た、と告げて、あの男に書かせた念書を見せて、伯父貴のところへと、通してもらった。

伯父貴は話に聞いていたよりも、ずっと容態が悪くなっていた。もう、屋敷の中で寝たきりになっていたんだ。こんなにあつさりと、中に入れてもらえたのは、こういう事情だったから、かも知れない。

伯父貴は最初、私に対してとても怒っていて、どうして戻つて来た、と聞かれた。

私はまず最初に、それは伯父貴に会いたかったからだ、素直に伝えてから、実家での一件を話して、もう私は、あの男の娘ではなくて、

ただの間宮 命として、敷居をくぐつたんだと、伯父貴にも説明してから、

念書と、あの男との会話を録音しておいた物も、証拠として合わせて渡したんだ。

これで、筋が通せているかと言われれば、こじつけでしかないのは、判っていたけど、そんな事をしてまで、ここへ来た理由は、ちゃんと、伯父貴に判つてもらいたかった。娘として、親である伯父貴の見舞いに、

どうあっても、来たかった事だけは。

私はこの時に、血が繋がっていないと知ってから、呼ばないようになっていた呼び名で、

伯父貴の事を呼んだんだ、お父さんって。

正直言っつて、伯父貴に何て言われるのが、全然判らなくて、とても怖かったよ。

その場で行けとか言われたら、どうしようかと思った。

でも、伯父貴の反応は、そんなじゃなかった。

やっぱり、子供は親に似ちまうのか、

派手な落とし前つけて来たところは、

臥龍会、間宮慶三の娘だなんて、言ったんだ。

この時の伯父貴の顔は、苦笑い、に見えたな。

私は伯父貴に、認めてもらえたんだ。

この後、伯父貴は私に、

自分の命はもうそんなに長くないって、言ってから、

伯父貴は体を起こして、隣りの部屋へと、

私を連れて来た。

そこには、黒い盃が用意してあって、

私と盃を挟んで、向かい合わせに座って、

これが私と、生きて会う最後の日になるだろう、

と、言われて、水盃を交わしたんだ。

伯父貴は、儀式が終わった後に、

もうこれで、思い残すことは無いって言っていた。

やっぱり伯父貴も、私に会いたかったんだと知って、

それを聞いて、私はまた伯父貴の前で泣いてしまった。  
そんな私を、伯父貴はその弱さを、  
責める事なく慰めてくれた。

私は一生忘れない、この日の事を。

伯父貴は私に、臥龍会として私の復縁回状を出して、  
私と白永組との絶縁を、明らかにしてから、  
改めて、破門と断つていった。

これで私は、白永組の間宮じゃなくなる。

法律上は、変わっていないけど、

そんなことよりも、私にとっては、

伯父貴の口から、俺の娘、と聞けただけで、  
十分だった。

そんな機会を与えてくれた、みなも、

みなもには、どれだけ感謝しても足りない。

私は、みなもにその気持ちの形にして伝えたい。

だから、私と盃を交わして、

私と姉妹の契りを結んで欲しい」

そう言うと、みことは、テーブルをどけて、  
さつき持っていた黒い器と、

小さいお酒のビンみたいなのを、前においてから、  
それを挟んで、わたしの正面の向かい側に、  
正座して座りました。

みことの目は真剣で、これが悪戯とか、  
遊びではないのは、ひしひしと感じました。

でもそう言われても、それが何を意味するのが、

何も判ってないわたしは、どうすべきなのかが、判らなくて困ってしまいました。

これって、結婚式とかの三々九度みたいなもの？

いや、どっちかって言うと、義兄弟とかの盃？

そこのところを、みことに尋ねてみると、

「どっちかと言えば、兄弟盃だ。」

私はみなもに兄貴分、じゃなくて、姉貴分になつて欲しいんだ。

もちろん、本当に法的な姉妹になる訳でもないし、

呼び方を変えるとかも、しなくていいし、

付き合い方も、何も特別にしなくていいんだ。

ただ、私とこの盃を交わして欲しい、それだけなんだ。

この盃は、伯父貴と交わした水盃の1つだ。

伯父貴からもらった、言わば形見になる。

私は唯一の肉親である、伯父貴に、

みなもと姉妹になるのを、この盃を介して、見届けてもらいたい。

それが、法的には認められていなくても、

たとえ義理でも、姉がいると思えば、

私には、とても大きな心の支えになる。

近いうちに、伯父貴は死ぬだろう。

伯父貴が死ねば、私には、

身内と呼べる人間はいなくなつて、孤独になる。

私を独りにしないで欲しい。

「この通り、どうか、お願いします」

と言って、わたしへと土下座をしていました。

わたしが、姉で、みことが、妹……

さっきの涙は、この為に必要だったのか。

わたしはしばらく、みことの言っていることを、考えていました。

そんなこと、しなくったって、

わたしはみことを信じているし、

みことだって、わたしを信じてくれているって思う。

だけど、そういう形のある関係を作ってあげた方が、

みことにとっても、大義名分、見たいな感じで、

わたしと、付き合いやすいのかも知れない。

逆に考えれば、これがある限り、

姉であるわたしが、命じておけば。

みことは、変なことはしないはず。

なら、いいかな。

わたしはみことへと、判ったよ、と返事して、盃を交わすのを、了解したことを伝えました。

「ありがとう、みなも」

そう言うともみことは、自分の言う通りにして欲しい、  
と言ってから、まず正座するように言われて、  
足を正して正座すると、さっきわたしの涙を受けていた、  
伯父さんから、もらってきたって言うていた、  
黒い小さな盃に、部屋の隅に置いてあった、  
小さい御神酒のビンを開けて、  
盃いっぱい、お酒を注ぎました。

あれ、そういえばわたしの涙を、  
盃に入れていたけど、みことは無いの？  
と、疑問に思つて尋ねてみると、  
「ああ、それはもう、こっちに入れてある」  
と言って、ビンを指さしていました。

それにしても、血をお酒に入れるって言うのは、  
何かの話に、あつたような気がするけど、  
涙って言うのは、聞いたことない。

それを、みことに聞いたら、  
「血を入れたら、違う意味の儀式になつてしまう。  
それに、私達は女だから、体を傷つけるのはな。  
これは私自身が納得する形で、執り行えさえすれば、  
別にいいから、涙にしたんだ」  
とのことで、わたしは納得しました。

「さあ、みなも、この盃の酒を、  
六分、半分と少し、飲んでから、  
盃を床に戻してくれ」  
と言われて、わたしは黒い盃を、緊張しながら、  
慎重に両手で持ち上げると、口元まで持ち上げてから、

盃に口をつけて、ゆっくりと傾けました。

中身は、自分の涙でちよつとは薄まっているとは言え、やっぱり普通のお酒でした。

これは儀式だから、ちゃんとやらないと思って、だいたい半分くらいかな、と思うくらい飲んで、口を離して、置いてあった辺りに戻しました。

今度は、みことが盃を両手で持ち上げてから、なんの躊躇もなく、さっと残りを飲み干してしまい、盃を空けてから、脇に置いてあった、白い紙で包んでから、脇に置きました。

「本当は、懐に収めるんだけど、ジャケットじゃ出来ないから、これでいい、完了だ」

そう言い終わった後に、みことはわたしを見て、「これで、私とみことは姉妹になった。

みなもは私の、姉貴分で、私はみなもの、妹分になったんだ」

と、嬉しそうに言いました。

でもこの時のわたしは、さっき飲んだお酒で、酔っ払ってしまったらしくて、かなり、頭がフラフラしていて、

この後に、みことが言っていた言葉を、

「明日は必ず学校に来てくれ」

と、聞いたところで、倒れたみたいです。

何だか、そばで誰かが口論していたりとか、  
両腕を誰かに持たれて、担がれていたような、  
記憶があるんだけど、

それはみことだったのか、警備の人だったのか、  
それすら思い出せませんでした。

目を覚ましたら、かなの家に戻っていて、  
かながわたしの顔を、だいぶ距離を開けて、  
見ているのが判りました。

かなの話では、夕方に警備会社の人から連絡があつて、  
わたしが気を失った、と言われたから、

何があつたのかと思つたら、わたしが酔いつぶれて、  
ベッドで眠らされていたんだそうで、

みことは一応、警備の人に多少お酒を飲んだと、  
説明したんだけど、なかなか信じなくて、

かなの家に帰るのに、時間がかかったみたいでした。

かなは、とっても怒っていて、

「あたしがいないところで何してんの！」

と、まるでわたしは、奥さんに説教される、

だらしない旦那さんみたいに、なつてしまいました。

でもすぐに、かなの怒りは治まったから、

この後に、今日はお寿司をとって、

2人で夕食を食べました。

食べ終わってから、わたしはかなに、

みこととの約束もあつたから、



明日、学校へ行くと言えました。

かなはまだ、不安そうな顔をしていたけど、もうかなり、この頭にも慣れてきたから、きつと大丈夫だし、みこともいてくれるから、学校でいきなり、襲われることはないと思うって、かなに伝えて、お願いしました。

それを聞いても、納得はしていない様子のかなだったけど、わたしは、明日どうしても行かないといけないって、かなを説得したんです。

みことが、学校に来て欲しいって言っているのは、きつと、約束を果たす為だと思う。

だったら、それは絶対に見届けなくちゃ行けない。

それが、姉になったわたしの役目だと思う。

正直、髪の毛のトラウマも完全に治ってはないし、クラスの人に髪の毛のことを、何か言われたりしたら、また、泣いてしまうかも知れないけど、それでも明日だけは、行かなくちゃいけない。

だから、頑張って、いってきます。

2011年 2月 その6(前書き)

変更履歴

2011/03/20	2月21日	決着	の命の告白に記述追加
(スカルヘッド関連)			
2011/03/21	記述修正	携帯	ケータイ
2011/04/05	誤植修正	伺う	窺う
2011/04/13	記述統一	1年生、	(中学)2年、高校3
年 1年生、2年、	高校3年		
2011/08/20	誤植修正	例え	たとえ

2011年 2月 その6

2月21日 決着

今朝は緊張もあって、7時の目覚ましよりも、かなよりも先に起きてしまい、洗面所に行って、顔を洗うついでに、1週間経っても、まだ残っている傷の1つの、右の頬の傷を確認していました。

ガーゼをめくって、シートを少し剥がして見たら、まだ完治していないのが判って、

仕方なくガーゼを貼ったままで、学校に行くしかない、諦めて貼り直してから、ガーゼを避けて顔を洗いました。

出来ればこれは目立つから、治っていてほしかったけど、顔に傷痕は残したくないから、ガマンします。

わたしがかなの部屋に戻ると、ちょうど7時で、かなが目覚ましを止めて、そのまま寝ようとしていたので、かなから布団を剥ぎ取って、起こしました。

かなはまだ寝惚けていて、とても不満そうだったけど、一緒に学校へ行くんだから、支度してくれないと、こっちが困るんです。

最初はぶつぶつ文句を言っていた、かなも、支度して朝食を食べる頃には、もういつも通りです。

この日は、登校中に何かされるのを避けると言って、タクシーで登校になりました。

タクシーの中で、わたしと雑談していたかなは、携帯のメールを見ると、真面目な顔に変わって、「今日、あの女も1週間ぶりに出てくるみたい」と、わたしに言いました。

かなが言う、あの女って言うたらただ1人、門塾さんのことしかありません。

向こうも、1週間ぶりなのか……

さすがに、それを聞いても何ともない、なんてことはなくて、1週間前のことを思い出して、ちよっと怖くなりました。

「みなも、別に無理して今日行かなくても、いいんじゃないの？」

と、かなはわたしの様子を見て、言ってくれたけど、わたしは首を振って、行くと答えました。

みこととの、約束があるんだから、今日は、絶対に行かなくちゃいけないんだ。

タクシーで、学校前まで行ってしまったから、降りる時は注目的で、とても目立ってしまったって、ただでさえ、右の頬の大きなガーゼが目立つし、短くなつた茶髪の髪も、気になるのも重なって、とても、恥ずかしかったです。

校舎に入って、かなと別れる時に、

「何かあったら、すぐにケータイ鳴らして。」

どうにかするから」

と、学校の中でも何かして来るんじゃないかって、最後まで心配していました。

わたしは、分かったと答えて、かなと判れて、自分のクラスに向かいました。

教室には、もう半分くらいの人に来ていて、わたしを見た数人の人は、一度何気なく見た後に、驚いた顔をして、二度見してから、話をしていた友だちに、声をかけていて、次第に、みんなわたしを見て何かを言っていました。

1週間ぶりに出てきたから、色々と噂されていて、こうなるだろうなどは、覚悟はしていたんだけど、今は注目されるのは、まだ結構辛いです。

わたしは周りの視線と、目が合わないように、下を向いて、自分の席に向かいました。

自分の席の隣を見ると、すでにみことが来ていて、わたしが席に近づくと、こっちを向いて、

「おはよう、みなも。」

よく来てくれた、ありがとう」と、挨拶されました。

みことが、教室でわたしに挨拶するなんて……

クラスの席の近い友だちが、朝に声をかけてくるなんて、常識で考えれば、全然普通のことだけど、わたしにとって見れば、それは二年になってから、初めてだったんです。

わたしはその言葉を聞いただけで、ちょっと感動してしまい、いきなり泣きそうになってしまいました。

みことがわたしに、声をかけたのを見て、周りの人たちは、さらに驚いていたけど、もう、そんなのは目に入りません。

みことは、わたしのことを気にしながら、

「みなも、もうちょっとだけ頑張ってくれ、そうすれば、全てが終わるから。」

結末を、最後まで見届けて欲しい、

この約束、守ってくれるか？」

と、肩に手を置かれて尋ねられました。

わたしとの約束を、実行するから、

見届けて欲しいってことだ、と違って、

わたしは頷いて、答えました。

それを確認したみことは、軽く笑っていたけど、後ろの出入り口から、大きな話し声が聞こえて来たら、怖い顔になって、そちらに顔を向けました。

クラスの人も、皆そっちを向いたのが分かって、わたしもそちらを見ると、そこには、

白いロングコートを羽織って、  
白のロングマフラーを首にかけた、  
右目に眼帯をした、門埜さんと、  
取り巻きの人たちが、入ってくるところで、  
わたしが見た途端に、門埜さんと視線がぶつかりました。

門埜さんは、周りの取り巻きの人たちとは、  
会話をしていなくて、その顔は無表情でした。

不機嫌そうに、口をつぐんでいるけど、  
左目はあの時の、狂気じみた目ではなくて、  
今までと同じ、冷やかな眼差しを向けていました。

あの右目の眼帯は多分、わたしが頭突きしたケガだろうな、  
たしかそれ以外、門埜さんはケガしてないはずだから、  
まさか、失明とかさせてないよなあ……

あの状況で、わたしだって命懸けだったんだから、  
向こうが、どれだけのケガを負っていたようと、  
謝るつもりなんて、全くなかったんだけど、  
失明させたとしたら、それはさすがに……

わたしがそんなことを、思っていたら、  
門埜さんの方から、こっちに近づいて来て、

「おはよう、三崎さん、

その怪我、三崎さんも先週の事件に巻き込まれたの？

私もあの日、襲われてしまったね、

右目の上を殴られて、病院で診て貰ったら、

頭蓋骨の線上骨折だって診断されたの。

おまけに右目も出血して、真っ赤になってしまったわ。

ほら、こんな」

そう言いながら、門埜さんはわたしへと、必要以上に顔を近づけて、眼帯を外しました。

その右目は、白目が全部真っ赤に染まっていて、  
瞼も内出血しているのか、黒く変色していました。

でもそれよりも、それを無表情でわたしに見せながら、  
こちらを見つめている、門埜さん自身が、  
とても不気味で怖かったです。

赤い右目を見せた時の、門埜さんからは、  
あの時の、狂気みたいなのを感じたんです。

「ね、ひどいでしょ？」

この怪我のおかげで、1週間、  
ずっと自宅で療養していたの。

ああ、退屈だった」

そう言い終えたら、門埜さんは口元だけ笑って、  
眼帯を戻してから、自分の席へと向かいました。

さすがにこれを見ていた、クラスの人たちも、  
いつもなら騒ぐところだけど、絶句していました。

この間、みことは無言で門埜さんを睨んでいて、  
その視線には、殺気みたいなのも少し感じました。

なんだか、すごく不安を感じるんだけど、  
それが何かが分からないまま、予鈴がなって、



鈴木先生が、クラスに入ってきました。

先生は、わたしや門塾さんを見て、とても驚いた顔をしながら、

わたしと門塾さんに、話が聞きたいから、放課後に職員室に来るようにと、言いました。

その途端、

「その必要はない。」

後ほど、私から全てを伝える」

と、みことは先生の言葉を否定して、席を立つと前に出て行って、無言の圧力で、先生を、教卓から退かせてから、そこに立って、正面を向きました。

その顔は、今までにない厳しい表情で、緊迫感がこっちにまで伝わってきました。

「私はこの場を借りて、話したい事がある。」

どうか、聞いて欲しい。

これ以降は、如何なる妨害があるかと、

中断するつもりはない、必ず最後まで聞いてもらおう。

これに不服なら、今すぐ反論なり退出なりしてくれ」

みことはそう言うと、クラスを見渡しました。

誰もが、みことの気迫に圧倒されて、

先生が話していた時とは違って、

クラスは水を打ったように、静かになりました。

「反論意見がないので、容認されたと判断する。私が時間をもらって話したい事は、全部で3つある。順番に話をしていこうと思う。」

まず最初話すのは、私の過去についてだ。知っての通り私の苗字は、間宮だ。

この地域では、あまり知られていないが、別の地域では、これは有名な苗字で、指定暴力団の臥龍会や、その直系の組織である、白永組の組長の家系だ。

私は、白永組の現組長の妻の娘だ」

ここで、少しざわめきが起きたけど、みこことが話を続ける意思表示で、こちらを睨むと、また静かになって、みこことは続きを話し始めました。

「しかし今の私は、育ての親である、臥龍会の組長の娘だ。」

これは、学校側も知らなかったはずだ、なあ、鈴木先生？」

みこことに、唐突に聞かれた鈴木先生は、多分先生たちの間では、秘密にするようにと、言われてたみたいで、もうパニックになっていて、はい、とも、いいえ、とも答えられず、動揺しきっていました。

そんな様子の先生に比べて、後ろを見てみると、取り巻きの人たちが、小声で話していて、明らかに、こっちも焦っているのが判りました。

でもその中で門埜さんは、不気味なほどに冷静で、みことの様子を、静観し続けていました。

「鈴木先生が否定しないのは、学校側も、組から買収されて、圧力をかけられて、ヤクザの娘を入れても、騒ぎにしないように、教師達全員に言われていたからだ。

それともうひとつ、私は隠していた顔がある。今年の夏ごろから、風高狩りが横行していたのは、皆知っていると思う。

それを行っていたのが、黒い格好をした集団、スカルヘッドだと言うのも、もう聞いているだろう。そのスカルヘッドの、リーダーとして、率いていたのは、この私だ。

これがずっと隠していた、私の正体だ。これ以上何も、後ろめたい隠し事はない。だから、もう私は何者にも縛られない」

最後の言葉は、門埜さんに向けられたものだろうか、そう思っていると、みことはすこし間を開けて、続きを話し始めました。

「次に話すのは、これからの事だ。

私は今までに、色々とクラスに迷惑をかけて来た。暴力による威圧や、見下した態度も取っていた。まずこの事を謝りたい。

無礼で、申し訳ない事をしていたと思う。

本当に、ごめんなさい」

そう言うときみことは、教卓に頭が着くくらいに、深々と下げて、謝りました。

しばらく頭を下げ続けてから、頭を上げると、みことは話を再開しました。

「こうして、頭を下げたくらいでは、皆への償いには、ならないと思う。

そこで私は、償いとして様々な問題を解決する為に、これから、全力で取り組もうと思う。

私はある人から、自分のすべき事を教えてもらった。

それは、自分が正しいと思う事をする事だ。

私は、このクラスを正常化したいと思う。

どう考えても、このクラスの雰囲気は、あるべきものではないからだ。

まずは、そこから着手しようと思う。

だから、皆も私と共感してもらえるのなら、是非協力して欲しい。

これは、命令ではなく、お願いだ。

こう言っても、皆はまだ信じられないし、

今までの流れもあるから、たとえ動いてもいいと思うってくれていても、声を上げづらいだろう。

だから手始めに、こうなった全ての元凶を、私の手で排除して、そこから浄化して、

それをきっかけにしてもらいたいと、考えている。

皆は、協力出来ると思ってくれた時に、

動いてくれれば良い」

みことは、ここでまた言葉を一旦切ると、話の流れを察して、ざわめき始めた人たち、特に後ろの方が、動き出すのが判りました。

「最後に話すのは、私のこの最初の作業についてだ。私はここに宣言する。

このクラス、いや学校全体に悪影響を与えている、門塾 怜、お前を排除する」

そう言い終わった途端に、取り巻きの人たちのうち、4人がその手に、特殊警棒みたいなものを持って、叫びながら、みことに向かってきて、

みことはその人たちを、迎え撃つように構えながら、「怪我したくなければ、ここから逃げる！」とクラス全体に向かって、叫びました。

この声で、啞然としていたクラスの人たちは、急いで前後の出口へと向かい、大混乱になりました。

みことは、あつという間に人がいなくなった、窓際へと移動して、囲んできた取り巻きの人たちと、向かい合っていました。

4人が次々と特殊警棒を振り上げて、襲いかかると、みことはその隙間を縫うように、すっと動いては、1人ずつ倒していました。

10秒もしないうちに、4人は倒されてしまい、

失神しているらしく、全く動いていません。

その時門埜さんは、残りの2人の取り巻きと一緒に、混乱に紛れて、教室を出ていくところでした。

「お前だけは絶対に許さない、門埜！」

と、みことは叫んで、廊下側の窓へと向かって、

近くの椅子を掴んで、投げつけてから、

とび蹴りを食らわして、窓を壊して廊下に出たのを見て、

わたしも、急いで割られた窓から、

みことを追いかけました。

廊下では、残る取り巻きの2人が盾になって、

門埜さんを守っていて、門埜さんは携帯を弄っていて、ちょうど閉じるところでした。

「カミングアウトして、暴力沙汰で解決とは、

全くヤクザの子供らしい、物騒な事をするのね。

でもこっちも、簡単にはやられない」

門埜さんは、みことにそう言い放った時に、

他のクラスから、門埜さんの息のかかった人たちが、

手に何か武器を持って、次々と現れました。

「伊達に私が、ここで兵隊増やしてないって事を、

貴方に教えてあげる」

そう言うと門埜さんは、うちのクラスから逃げ出してきた人や、

他のクラスの野次馬を、取り巻きの2人にどけさせながら、

他のクラスの援軍の人と入れ替わるように、

廊下の奥へと下がって、そのまま逃げ出しました。

左右のクラスから出てきた、8人の新しい援軍の人たちは、ナイフや特殊警棒を持って、みことを包囲していて、さらに、周りのクラスで授業をしていた、男の先生までが、ケンカを止めようと、みことに立ちふさがりました。

みことは、相手が凶器を持っていようが、先生だろうがお構いなく、あの体術でもって、次々と一撃で、倒して行きました。

先生の中には、柔道の先生もいたけど、それでもみことを止められず、みことは、邪魔する人間を全て倒しながら、逃げる門塾さんたちを、追いかけて行きました。

この展開に野次馬の人たちも、後を追いかけて始めていて、騒ぎは、どんどん大きくなって行きました。

わたしもみことと交わした、最後まで見届けると言う、約束を果たす為に、野次馬の中に混じって、一生懸命走って、追いかけてました。

この時わたしは、みことたちから、すっかり引き離されてしまって、直接、その姿を見てはいなかったんだけど、通り過ぎて行く、廊下や階段には、二年の他のクラスの人だけじゃなくて、他の学年の人や、先生も倒れていて、中には、女の先生もいました。

今やこの校舎内は、門埜さんとみことを追う、野次馬の集団が、あちこち走り回っていて、今どこにいるのかの、噂を聞きあつては、そこへと向かうのを、繰り返していました。

周りの、野次馬の人たちの話から、門埜さんは学校を出ようと、1階を目指そうとして、逃がっているんだけど、それを門埜さんが阻止して、だんだんと、上の階に追い詰められているようでした。

わたしは、この校舎の屋上へと通じる階段を登って、屋上に向かいました。

普段なら、昼休み以外は閉まっているはずの扉が、なぜか開いていて、すでに野次馬の人たちも、たくさんここに集まっていました。

わたしは必死で、前に割り込んでいって、2人が見える位置まで、進みました。

門埜さんは、屋上の扉から離れた校舎の端に追い込まれて、いつの間にか取り巻きの人たちも、いなくなつて、1人きりになっていました。

みことの方は、最初と全然変わっていないけど、それに比べて、門埜さんの方は、さつき見ていた時とは違っていて、体力の違いなのか、大きく息をして、もう走り疲れてしまっているようです。



「さあ、もう逃げ場もなくなつたし、助けも来ないみたいだな。どうした、これで終わりか？」

みことの挑発に、門埜さんは最後の意地なのか、虚勢を張って、余裕を見せようと、

「こんな派手な事して、

たとえ、私を倒したとしても、その後どうする気？

私は暗黒女王のビショップ。

暗黒女王のメンツを潰しておいて、

無事に済む訳ない事くらい、単細胞の貴方だって、理解出来るでしょう？」

と言いながら、首から提げていた、

黒い水晶で出来た、ビショップの駒を取り出して、見せました。

「それがどうした。

お前が、暗黒女王の何であろうと、

私の信じる道に、立ちふさがるのなら、何者であろうと、全て排除するだけだ。

もう私は、如何なる脅しにも屈しない。

これは、さつきも言つたはずだ」

みことは、ビショップの駒を見ても、

何の脅威にも、感じていないようで、

動じることはなく、その態度は全く揺らぎません。

取り付く島もないみことに対して、門埜さんは、両手を上げて、諦めたようにしながら、

「分かった分かった、私の負けを認めるわ。  
あんたの強さは、良く判ったし、  
私1人が何をしても、勝てないのも判ってる。

貴方の言う通りにすれば、いいんでしょ？  
どうすればいいの？

退学届でも出せばいいの？」  
と言いながら、みことに近づいていきました。

門塾さん、何か企んでるのではと思ったら、  
あと5mくらいに、近づいた時に、  
制服のジャケットの内側から、  
黒い特殊警棒みたいな棒を取り出すと、  
鞘を抜きました。

それは、黒い刃をしたナイフで、  
門塾さんはそれをみことへと突き出して、  
「んなこと、する訳ねえだろうが！  
消えるのはテメエの方だ！

くたばれ！」  
と叫ぶと同時に、金属音がして、  
なんとナイフが飛びました！

それと同時に、みことが交わすように動いて、  
叩き落したかに見えたんだけど、  
短いうめき声と共に、みことはしゃがみこんで、  
ナイフが当たった、わき腹の下辺りのワイシャツから、  
赤く血が滲んでいるのが見えました。

それを見た門塾さんは、勝ち誇ったように、

みことへと近づきながら、話し始めました。

「うふふ、ふふふふ、あははははは、  
ったく、重いし、邪魔くさいし、  
これで使いもんにならなかつたら、  
どうしようかと思っただけど、  
あんな玩具でも、役に立って良かった。

どう？ 輸入禁止の武器の効果は。  
ナイフが飛び出すなんて、思わなかつたでしょ？  
いくらヤクザでも、格闘技やっていようと、  
油断すれば、こんなものよね。

もちろん、ただ刺してやるだけなんて、  
芸の無い事はしてないから、安心して。  
あのナイフの刃には、神経系の毒が塗ってあるの。  
だから、貴方のご自慢の格闘技も、  
もつじき出来なくな

「  
門塾さんは、言い終わる前に、  
立ち上がると同時に放った、みことの中断蹴りを喰らって、  
後ろに吹っ飛びました。」

背後の金網のフェンスまで飛ばされて、  
その攻撃よりも、そんな動きをしたみことを見て、  
目を見開いて驚いている、門塾さんを、  
冷やかに見つめながら、みことは、  
「残念だったな、ヤクザには毒は効かないんだよ」  
と言ってから、足元に落ちていた黒いナイフを、  
拾い上げて、野次馬の居ない方へ投げました。

「そんな、馬鹿な、有り得ない……」

門塾さんは、まだ動揺していたけど、だんだん大きくなってきた、騒音に気づいて、下に見える校門を見ると、再び笑い出しました。

「間宮、校門のあれが見える？」

あれはさっき私が呼んだ、暗黒女王傘下のチームよ」

校門の方を見ると、ここまで聞こえるくらい、空ぶかししながら、大きな騒音を立てて、数台の車が、校内に浸入してきて、校庭の真ん中に止まるのが見えました。

全部で6台の車から、降りてきた人たちは、20人以上いて、みんなその手には、金属バットや、ゴルフクラブを持っていて、中には、クロスボウみたいなのを持っている人までいて、明らかに、ケンカどころじゃない感じです。

「じきに、私がここにいるのは判るわ、

いくら、貴方が強くても、

あれだけの人数と、飛び道具まであつたら、勝ち目はないんじゃない？」

門塾さんは、自信たっぷりで言いましたが、みことはそれを聞いても、動じた風ではなく、むしろ、呆れたような口振りで、

「なあ、門塾。

今、お前が頼りにしている奴らは、  
校庭のど真ん中で、男1人相手に、  
片っ端から張り倒されている、奴らの事か？」  
と、尋ねました。

校庭の方を、もう一度見てみると、  
後からやってきた、1台の青い車から降りた、  
体の大きな、スーツ姿の男の人が、  
集団の中に乱入して、次々と倒しているのが見えました。

青い車に、大きなスーツ姿の男の人、  
あれ、どっかで見したことあるような、  
あれって、榊さん!?

片手をお腹の、血が滲んだ箇所当てたまま、  
門塾さんへと近づいた、みことは、

「お前の援軍ってのは、仲間割れでもしているのか？  
まあ、どうでもいいか、そんなことは。

大事なのは、頼みの援軍も壊滅したって事だよな。

さて、これで終いだな？

じゃあ、今度はこっちの番だ、

覚悟しろよ」

と言うと、門塾さんへと蹴りを入れ始めました。

命乞いをして、倒れても、泣き出しても、  
みことは一切反応せずに、  
ひたすら、うずくまる門塾さんを蹴り続けていました。

もうすでにこの時、門塾さんの様子も、

少しおかしくなっていて、

「やめて、もうやめて、ゆるして」  
を延々と繰り返して呟いていました。

反応に変化がなくなってきた、門埜さんを見て、  
みことは、蹴るのを一旦止めると、

「おい、服を脱げ」

と、門埜さんに命令しました。

門埜さんは、それを聞くと、

「脱いだら許してくれるの？」

と、しきりに、みことにすがって聞いていて、  
みことがそれを無視して、また蹴ると、

門埜さんは泣きながら、

「ごめんなさい、ゆるして、おねがいだから」

と、繰り返しながら、制服を脱いで下着姿になりました。

そうさせてからも、みことはまた蹴り始めたけど、

今度は、フェンスの隅から少し離れて、

わざと、逃げ道を開けてやっていて、

門埜さんは、泣き喚きながら、

四つん這いで、必死に逃げ出し始めました。

門埜さんが動き出したら、みことは、

「おい！ みなも、こっちに来い！」

と、わたしの名を呼んだから、

わたしがみことの所へ行くと、

「ちゃんと見ているな、いよいよ最後だ、

一緒に来てくれ」

と言って、ついて来るように言われて、

わたしは、みことの後について行きました。

屋上の階段を目指して、惨めな姿で逃げ惑う門塾さんを、野次馬の人たちは、通り道を開けて眺めていました。

そのうちに野次馬の中の誰かから、罵声とともに、上履きが投げつけられて、それに呼応して、あちこちから、上履きが門塾さんへと、投げつけられていました。

こうして、上履きだらけになった道を、門塾さんを足やお尻を、後ろから蹴りながら、みことは後をついて行きました。

門塾さんは這いずりながら、屋上を出て行って、階段を転げ落ちて、踊り場で止まり、また動き出しては、転がり落ちてを繰り返して、屋上から1階まで降りました。

この間でも、先回りして、階段や廊下に集まっていた、野次馬たちは、教室の物や、廊下にあった道具とかを、手当たり次第に、門塾さんに投げつけていました。

門塾さんは、泣き喚きながら逃げていましたが、その行き先は、後から追いかけるみことに誘導されて、渡り廊下を通って、体育館へと向かわされてきました。

体育館では、一年がバレーボールの授業をしていたけど、それは中断してしまい、体育の先生が、

勝手に入ってきた、明らかに普通じゃない門塾さんや、その後に、蹴りながらついて来るわたしたちを、止めようとしたけど、またしてもみことが、一撃で倒してしまいました。

門塾さんは体育館の真ん中まで、蹴られながら進むと、みことはそこで、門塾さんを止めて、

「ここがお前の、最後の場所だ。」

これ以上動かれると、面倒だから、

まずは、動けなくするか」

と言って体育館を半分に仕切っていた、天井から下がったネットを、中央に寄せて集めました。

その後門塾さんの髪を掴んで、引っ張って立たせると、その恐怖のせいなのか、門塾さんはそれと同時に、悲鳴を上げて、失禁してしまいました。

この時に野次馬たちからは、罵声が上がったけど、みことは、それでも態度を変えずに、もう、ほどくのは無理なくらいに、ネットに何重にも、髪を縛りつけていました。

門塾さんは、座ることも出来ずに、もう自分が漏らしたことすら、認識していないみたいで、両手で身を守るようにしながら、立ち尽くしていました。

今はもう、かつての冷たいけど綺麗だった人とは思えないくらいに、それはもう惨めな姿でした。

下着姿の全身は、すり傷とあざだらけで、



オシッコまで漏らして、

恐怖のせいで体中が震えていて、ずっと、

「たすけて、ゆるして」

を震える声で、繰り返していました。

そして、もうまともな意識がなくなっていそうな、

門埜さんに対してみことは、

「私がする報復は、ここまです。」

後は、お前自身の罪が、お前を罰するだろう。

こうして集まってくる生徒達が、

お前を助けるのか、それとも更に痛めつけるのか、

それが、全ての答えになるだろう。」

と言うと、門埜さんから離れました。

みことが髪を縛って、離れた後も、

野次馬たちの勢いは収まらなくて、

罵声と物を投げ付けるのが、ここでも始まりました。

門埜さんはもう、手で青や体を庇うこともせず、

ぶつけられるがままに、なっていました。

みことは、少しふらつきながら、こっちに来て、

わたしの方によるめて倒れました。

慌ててみことを見ると、お腹の出血が、

ひどくなっているのが判りました。

わたしはあのナイフの毒が体に回ったんじゃないかと、

焦って、どうしようかと戸惑っていたら、

「みなも、これの毒なら、心配しなくていいよ。」

と、10人くらいの人を引き連れた、かなが、あの黒いナイフを持って、体育館へと入ってきました。

「このナイフの刃には、血が付いていないから、

その子の出血は、このナイフが刺さった訳じゃないよ。

「これが、その証拠だよ」

そう言うと、かなはナイフをわたしに渡してから、

みことがお腹を押さえていた手を、どけました。

かなの言う通り、ナイフの刃には血は付いていないし、

みことのワイシャツに、破れ目がありません。

「つまりこの出血の傷は、あの女と戦う前からあったんだ、

その傷口が、これを受け流した時に開いただけ。

あんだだけ大活躍すれば、そりゃあ出血もひどくなるよね。

この子はうちらで、保健室に運んであげるから、

みなもは、わたしの後始末を見て行って」

そう言うとかなは、仲間の人たちに、

みことを保健室に運ぶように、と、

野次馬たちを一旦黙らせるように、指示を出しました。

かなの仲間の2人がみことを抱えて、運び出して行き、

残りの人たちは、野次馬たちを黙らせて、

その間にかなは、ぐったりして動かない、

門塾さんのところへと、近づきました。

そのかなの顔は、いつになく冷酷な感じで、

わたしの知るいつものかなとは、別人みたいです。

「随分見違える姿になったね、あんた。

あーあ、オシッコまで漏らしちゃって、  
もしかして、もう失神してる？

ねえ、水持ってきて」

と、かなが言うのと、仲間の人が1人、  
防火用のバケツに、水を汲んできて、  
それを、門埜さんの頭からかけました。

すると、目を覚ました門埜さんは、  
理性を取り戻したようで、

この時に、かけられた水の勢いで眼帯が外れて、  
またあの赤い目を開くと、かなを睨んで、

「高坂 香奈恵……」

と、恨めしそうに呟きました。

「せっかく、かつてのライバルのよしみで、

お漏らしを洗い流してあげたのに、

お礼もないんだ、まあいいや。

あんたから、礼なんて聞きたくもないしね。

正気を取り戻したところで、

早速だけど、失望してもらおうかな？

これ、なあんだ？」

そう言いながら、かなは門埜さんに写真を見せていました。

それを見た門埜さんは、写真に焦点があつた途端に、  
さっきまで、みことにやられていた時とは、

また違う反応で半狂乱になって、叫び始めました。

必死で手を伸ばして、かなから写真を奪い取るうとしたけど、かなはそんな門塾さんの手を、余裕でかわしながら、手が届かない位置まで、後ろに下がりました。

「うわあ、急に大きな声出されたから、

耳がおかしくなっちゃった。

もう、うるさいなあ。

これ、そんなに大事なの？

だったら、えい！」

かなは掛け声と共に、持っていた写真の束を、野次馬たちの頭上に向かって、放り投げました。

写真はバラバラになって、野次馬たちに降り注いで、みんなその写真を手にとって、見始めた途端、今までにない、驚く声が聞こえてきました。

「どう？ 自分の性癖の証拠写真を公開した気分は、

あれだけ、アブノーマルなプレイしていると、

ある意味今の状況でも、感じるんじゃないの？

羞恥プレイだって、思えばさ」

かなは、そう言って、楽しそうに笑っていました。

門塾さんに匹敵するくらい、冷たい顔で。

この時初めて、本当に怖いかなの一面を見た気がする。

わたしはかなに恐る恐る、ばら撒いた写真のことを尋ねると、かなは少し柔らかい声で、

「あれは、みなも見ない方がいいよ、

気分が悪くなるだけだからね。

どういう内容かって言うと、

前にさ、みなもがこいつに捕まった時に、色々やってやるって、脅されてたでしょ？

あれを全部、実際にやってる写真だよ。

こいつはね、自分にされたことを、

報復としてみなにも、しようとしていたんだよ」

と、答えられて、とても驚きました。

あれを全部、やっていたなんて、信じられない……

この時門塾さんは、すっかり呆けていたと思ったら、

もう何もかも失って、逆に居直ったようで、

その目には、再び殺気が込められていました。

「高坂、お前だけは、殺す。

どれだけの代償を払っても、絶対に……！」

と、憎悪をかなへと向けて、何とかしてかなへと、

近づこうとして、もがいていました。

今の門塾さんからは、とても強い殺気を感じて、

かなの身が、危ないんじゃないかと思っ

声をかけようとしたら、その前にはかなは門塾さんへ、

「そんなに上手くは行かないよ。

ねえ、もうリザインって、言った方がいいんじゃない？」

と、意味の判らないことを言いました。

リザインって、何？

それを聞いた門塾さんは、目を見開いて固まりました。

今までの、すごい殺気も憎悪も、  
一瞬で凍りついてしまったようで、  
今は、ただ啞然としていました。

「な、何故、それを知っている……？」

焦っている門塾さんへと、かなは1歩近寄ると、  
門塾さんは、たじろいで後ずさりながら、

「まさか、お前……」

と言って、声が途絶えたのを引き継ぐように、  
満足げな表情の、かなが言葉を繋いで、

「何で、そんな言葉を知っているんだ、かな？」

あんたが、言いたいの。

ようやく理解してくれたんだねえ、

暗黒女王の絶対のルール、下位は上位に絶対服従。

さて、これは何でしょう？」

と言って、かなはポケットから、

チエスの駒を取り出しました。

それは、ルークの駒でした。

黒い水晶で出来たその駒は、門塾さんが持っていたのと、  
同じ材質であるのは間違いないです。

「ルーク、お前が、ルークだと……！」

と、動揺して口走った門塾さんへと、

「そう、あたしはルーク。」

あんたよりも上位の幹部。

ちょっと前にね、就任したんだよ。

最近の幹部会に、出席していないから、情報に疎いんだよ、あんたは。

あんたみたいに、抱かれたり金や薬を貢がなくなつて、あたしの人脈を使えば、これくらいは手に入るんだ。ちなみに、あんたのバックにいるのもルークで、そいつも抑えているのは、あの写真を見れば、判ってくれてるよね？

あんたを下僕にして楽しんでいた、ルークのご主人様は、あなたの擁護者の立場から、手を引いたよ。

で、その証として、あの写真を受け取って来たんだ。もう、あんたには後ろ盾はいない。

これで、チエックメイトだよ」と、言い放ちました。

これでもう、完全に終わったかと思つたら、門塾さんは、壊れたように笑い出して、

「ふふふふ、ふふふふふふふ、ふふふふふふふふふ、高坂、私は1人じゃ死なないよ。

私の親は、この学校に多額の寄付金を落としてやってんだ。

この騒ぎの事を、親父に伝えて、学校に圧力をかけて、お前達全員を退学にさせてやる。お前らも道連れにしてやるよ！」

と、叫んでから、門塾さんは笑い出しました。

これには、かなも言い返せなくて、無言でいると、

「……三崎、バリストティック・ナイフとは、

随分と、懐かしいものを持つてるな。

その髪型の所為で、中々お前だと判らなかつたぞ」と、わたしの手から、ナイフを抜き取った榊さんが、刃の部分を眺めながら、呟いていました。

やっぱり、さつき外にいたのは、

榊さんだっただと思つて、外での格闘のことを聞くと、榊さんは、ポケットからハンカチを出しながら、

「……あの外のガキ共なら、もう警察に引き渡した。

つたく、俺の一張羅を破りやがって」

と、ばやいた後、面倒くさそうに、

「……今この縛られているガキが言つた事は、実現出来ないな。」

門塾製薬は、明日には最大の寄付者ではなくなるし、恐らく今後は、学校側から一切の寄付を断るだろう。今、そういう契約を、棗の親父の顧問弁護士が、交わしているところだ。

一応伝えておくが、何かを仕掛けようとしても、仁科家の顧問弁護士と、聖アナの弁護士団も、介入してくるだろうから、門塾製薬程度の力では、政財界のパイプを考えれば、勝ち目はないぞ。

しかし、こんなガキに棗が苛められていたのか、子供のくせに面倒な事しやがって、つたく。

この為に、棗よりひと足先に戻つて見れば、こんなクソガキ共の、修羅場に遭うとはな。全く、俺はついてない。



こんなに色々と、棗に説明するのは面倒だ。

おい三崎、お前から連絡して説明しておいてくれ、今頃はもう、電話に出られるはずだ。

じゃあ、またな」

と言いながら、ナイフの刃をハンカチでふき取って、わたしの手に戻すと、榊さんは出て行きました。

「だってよ、今の人って確か、仁科棗のボディガードだね。どうやらあたしたちは助かるみたい。

他に何か手があるなら言ってみなよ、どうなの？」

と問い詰めるかなの言葉に、門埜さんは力なく崩れて、縛られた髪で、体を傾けて立っていました。

もうその目は、宙へと向けられていて、誰も何も、見てはいないようでした。

何も言わなくなった門埜さんを見て、かなは、

「最後は、みなもがやりなよ。

切られた髪の復讐だよ」

と言って、わたしが持っていたナイフを見てから、門埜さんを指さしました。

復讐、報復、仕返し……

そんなことに、何か意味があるのかって、少し思ったりもするけど、

切られて、やられっぱなしは、納得出来ない。

多分、これが門埜さんと対面する、最後じゃないかって、思ったら、

やっぱり、やり返しておかなくちゃ、  
気が済まないって、思い直して、  
わたしはかなに頷いて、答えてから、  
門埜さんの目の前まで、近づきました。

「結局、全てはお前だった、三崎 水面。  
私から全てを奪わせたのは、お前だ……」

虚ろな顔をして、わたしを白と赤の目で見ながら、  
門埜さんは、そう言いました。

わたしは無言で、首を振って、  
自業自得だよ、とだけ言うと門埜さんは、

「私はある日、お前を殺そうと思っていた、  
復讐するなら、いつその事、私を殺せ……」  
と呟いていたけど、わたしはそれを無視して、  
門埜さんの縛られた髪を、ナイフで切断しました。

門埜さんは、髪を切られた途端に、  
まるで操り人形の糸を、切ったみたいに、  
力尽きて、体育館の床に崩れ落ちました。

こうして、門埜さんによって引き起こされていた、  
あらゆる問題は、この日で全て終わりました。

ついに、とうとう、本当に、  
全てが終わったんです……

そう思ったら、わたしは体の力が抜けてしまい、  
気を失って、その場に倒れました。

2月28日 事件のその後

あの事件から、1週間が経ちました。

あれだけの、大事件だったにも関わらず、  
ニユースになったのは、校内に部外者の若者が乱入して、  
補導されたと言う、ローカルニユースだけでした。

どうやら、マスコミは棗がお父さんを動かして、  
何とかしているみたいです。

学校では、壊れた教室の窓が修理されて、  
綺麗になったのと、上履きをなくした人が大量に出て、  
一時、購買で品薄になったくらいです。

後は、体育の先生たちの、  
自分の力を誇示するような、言動は減りました。

体育会系の部活では、すごく影響が出ていそうですけど、  
わたしは良く知りません。

屋上から体育館まで、点々と続いていた、  
門塾さんの血の後は、すっかり綺麗になくなっていました。

噂では、みことを止められなかった男の先生たちが、  
夜に掃除したらしいです。

あの日を境にして、あれだけ力を持っていた、門塾さんの派閥は、跡形もなく消滅しました。

屋上が開いていた件に関しては、

昼休み解放の時に、管理の当番だった先生が、閉め忘れたのではないかとされて、

無期限で、常時閉鎖になってしまいました。

屋上が開いていたから、

この事件が起こった訳じゃないのにな……

今回の責任を取らされたのか、

鈴木先生は、しばらく休職してしまいました。

まあ、あの先生は、わたしから見ても、

あんまり教師には、向いていないんじゃないかって、思っていたので、鈴木先生も、

色々と、良く考えてもらえればと思います。

決して、全て悪いとは言いませんが、

責任は、ゼロでも無いって思っているのです。

その代わりに、代理の担任になったのは、

たまたま当日は学校にいなかった、一年、二年とも体育の担当だった、

口の悪い、わたしは大嫌いな山田先生です。

こんな人に、進路とか相談するのは、嫌だなあ。

でも教師としては、少なくとも生徒に振り回されたり、

生徒の顔色を窺うような先生ではないから、鈴木先生みたいなことには、ならないと思います。

門埜さんはあの日、わたしが倒れた後も、体育館へと、報復に来る生徒は耐えなくて、みんな、体育倉庫からボールとか、投げつけられる物を、片っ端から、ぶつけていたみたいでした。

一応、かなも含めてギルドから、10人くらいの人が、ずっと見張っていて、あまりに危険なものは、没収していたそうです。

かなも、報復と追放はしたいけど、事件になってしまっから、取り返しのつかないケガまでは、させたくないと言う、配慮だったみたいです。

このリンチは、夕方まで続いて、生徒がみんな帰って、誰も来なくなっってから、ギルドの人たちが、後始末を先生に任せて、帰ったそうです。

多分、門埜さんは先生に助けられて、病院にでも、運ばれたんだと思います。

でも多分その病院は、この事件を隠蔽する為に、棗のお父さんの息のかかった、病院らしいです。

次の日から門埜さんは、ずっと休み続けていて、あれだけの醜態を晒したからには、もう学校には、出てこないだろうって、

噂になっています。

取り巻きの人たちは、クラスでも居場所はなく、みことにやられたケガは、大したことなかったけど、あんまり登校してこなくなりました。

みことの方は、あの後保健室で応急処置を受けました。

実は実家に戻った時に、死を覚悟している決意を見せる為に、長ドスで急所を外して、お腹を刺していたんだけど、わたしに心配させないように、言わなかったんだそうで、これを聞いて、わたしはみことに怒りました。

みことはしおらしくして、もう二度としないし、何でも正直に言うって、約束させました。

あれだけ暴れて、大騒ぎになったけど、こっちも、何らかの圧力がかかったのか、3日間の自宅謹慎処分だけで、済みました。

その後は、普通に学校に来ています。

今ではすっかり、生徒たちの英雄になっていて、もう、とつくに終わっているのに、男女問わず、バレンタインのチョコを、もらっていたり、手紙をもらったりしています。

そのせいで今は、色んな人に対して、どう断ったり、遠慮したらいいのかを悩んでいて、コミュニケーションの本を見ながら、

日々勉強しています。

みこと曰く、ケンカの挨拶や捨て台詞は知ってるが、丁寧に断ったり、遠慮したりする時の話し方は、るくに知らないとのこと。

でも、どんな問題でも、自力で解決しているから、みことは何があっても、もう大丈夫だと思います。

ただ、葵ちゃんは、みことの大人気振りに、かなり、やきもきしているみたいで、

先週は、あの事件の次の日から、  
昼休みは毎日、うちのクラスに顔を出しています。

でも、みことはなんだかんだと忙しくて、  
ほとんど葵ちゃんを、構ってあげられないから、  
葵ちゃんは、代わりにわたしを呼び出して、  
酔っ払いのように、ずっとわたしに絡んでいるんです。

なので、お昼は毎日、葵ちゃんと食べていて、  
午後の授業中に、葵ちゃんの愚痴を、  
みことへと伝えては、お詫びのメールの文面を、  
相談されています。

みこと曰く、他人を謝らせるのは良くやっていたが、  
自分が謝るのは苦手だとか、言っていました。

全く、世話が焼けるとか文句を言つと、みことは、  
妹の世話を焼くのは、姉の仕事だ、  
と言われてしまい、これには言い返せません。

かなはと言うと、あの日以降も門塾さんに関する、後始末をしていたようです。

暗黒女王には、また門塾さんみたいなのが現れないように、抑止力として、自分は所属しておくと言っていたのが、あんまり良くないんじゃないかって、思うけど、自分が、そういう役をやっておけば、他の人は救われるんだからって、言っていました。

まあ、わたしが知る限り、そう言うのを上手く操るのは、かなが一番、適任なのは事実だから、これ以上、何も言いませんでした。

今のかなは、門塾さんの派閥が消えたことで、ギルドでの最後の大仕事として、メンバー拡大に、動いているようで、

これでギルドが、風高で最大の組織になるのは、間違いなさそうです。

と、言いたいのですが、どうも別の動きが起きています。

それは何かと言うと、今までわたしみたいに、やられる側にいた人たち、今まで友だちとかの、グループに入ってなかったような、人たちが、門塾さんを倒した、みことのことを、英雄として、リーダーにしようとしているんです。

その人たちは、みことを生徒会長にしようと、しているらしくて、みことはわたしとの約束でも、



それを望む生徒が多くいるのなら、  
その希望には答えて、自分なりの正義を貫くと、  
言っていたから、次の3月にある選挙に、  
立候補しそうです。

でもこれは、かなのいるギルドからすると、  
あんまり嬉しくないんじゃないかって、思えて、  
今から少し、心配です。

忍さんには、先週の水曜日からバイトに復帰して、  
会ってきました。

わたしの姿、特に髪を見たら、  
忍さんに、無言で抱きしめられて、  
その時、思わずわたしは泣いてしまいました。

これで、色々な問題が片づいたことを伝えると、  
忍さんは喜んでくれて、快気祝いに、  
父の絵を、必ず手に入れてみせるって、  
約束してくれました。

わたしが話し終わった後に、忍さんから一言、  
まるで北風と太陽だねって、言われたんです。

どういう意味ですかって、尋ねたら、  
門塾さんが北風で、わたしが太陽で、  
かなと、なつめと、みことが旅人だそうです。

北風は、旅人のコートである彼女達の心の壁を、  
強引に脱がせようとして、失敗したけど、

太陽は、暖かさで心の壁を溶かして、打ち解ける事で、旅人のコートを脱がせることが出来たよねって、言われました。

わたしが太陽、なんて、初めて言われた……

なんだか、主役になれたみたいで、ちよっと嬉しかったです。

なつめには、榊さんから言われていたから、昨日電話しました。

そしたら、なつめは電話に出て、元気そうにわたしへと、自分の功績を語ってから、この借りについての、清算方法を考えとくと、とても偉そうに話してから、色々大変だったねって、優しい言葉をかけてくれました。

まだ、あんまり長くは話せないけど、治療の方は成功して、4月からは復学するって、言っていました。

これでまた、なつめと一緒に通えそうです。

だけどなつめは、二年として復学するので、わたしは、先輩になるんじゃないのって、言ったら、自分よりも、お馬鹿な先輩なんて、そう呼ばれる資格、あると思ってる？  
なんて、手厳しいことを言われました……

病み上がりだからって、からかうんじゃないな。

でも、とても元気そうで、ひと安心です。

電話での声が鼻声に聞こえたのは、もしかして、  
涙ぐんでいたのかも、知れないな。

今度、あの時実は泣いてたんじゃないの？  
って、聞いてみようかなあ……

それから昨日は、御家河にも行って来て、  
ヒヨウちゃんにも、久し振りにゆっくり会ってきました。

今回は、ちゃんとご飯も持って行ったから、  
ヒヨウちゃんは体を撫でて、  
嫌そうな声は、出しませんでした。

やっぱり、ご飯なのかな、わたしの価値って。

でも、まあ、元気ならそれでもいいや。

それから、ケイゴさんにも連絡しました。

ケイゴさんは、今関西の方にいるらしくて、  
生活費を稼ぐ為に、日雇いしているって、  
言っていました。

もう、戻ってきてても大丈夫になったことを伝えると、  
そのうちに戻るって、そっけなく言っていました。

戻ってきたら、絶対に会って下さいって、  
お願いしたら、ものすごく焦っていたような、  
感じがしたんだけど、何でだろう。

わたしとしては、単にお礼がしたいだけなんだけど、  
どうしたんだろう……

最後にわたしですが、あの日は倒れた後、  
みことと同じく、保健室に運ばれて、  
しばらく眠っていたけど、じきに目を覚まして、  
かなは、ずっと見張りするってメールが来てたから、  
先に治療を終えていた、みことと一緒に学校を出て、  
自宅へと帰りました。

そして翌日からは、もう普通に通っています。

顔や体の傷も全部、綺麗に治っていて、

今ではどこに傷があったのかも、全然判りません。

クラスでは、周りの席の中立だった人たちや、  
やられる側にいた人たちは、みことと仲が良いわたしにも、  
声をかけてきてくれるようになりました。

もう今では、短い髪を気にして泣いてしまったり、  
他の人から言われて、気になったりもしなくて、  
普通に過せるようになりました。

復讐したからって訳じゃないけど、  
あれでやっと、吹っ切れたって気がします。

結局、わたしの感情が安定しなかったのは、自分の分身とも思っていた、髪を切られた悔しさ、だったのかも知れません。

それは、自分の子供を殺された親みたいな気持ちで、わたしは自覚していなかったけど、そう捉えていた、みたいです。

だから、その仇を討てたから、気が済んで、吹っ切れたんじゃないかって、思います。

今回の事件のせいで、わたしは大事に伸ばしていた髪を、切られて失ってしまいました。

このことは、今回の事件に関わったわたしの周りの人たち、みんな、自分のせいだと思って、わたしに謝ったりとか、償いをしようとしていました。

初めから、なんとなく感じていたんだけど、この事故は、誰かのせいで起きたって言うんじゃないって、そんな気がしていたんです。

守れなかったと言っていた、かなのせいでもないし、実際に切った当人なのは、間違いないけど、門塾さんのせいとも、思っなくて、助けに来てくれたけど、阻止出来なかった、ケイゴさんのせいだとも、思っないし、門塾さんの罠にかかった、自分がいけない、わたしのせい、とも考えてません。

これは、運命だったんじゃないかって、思っんです。

わたしの人生の中での、転換期、と言うか、ターニングポイントみたいなもので、その切り替えのために、今までずっとしがみついていた物を、代償として払ったんじゃないかって。

そう思えば、犠牲になったのが、取り返しのつかない物ではなくて、また伸ばせば、取り戻せる髪で良かったって、逆に思えます。

今では、この頭の軽さも普通になってきて、だんだん良い所も、気づき始めました。

走るのが速くなったり、朝の支度も楽になったり、髪を乾かすのなんて、タオルで拭くだけでよくなったり、とっても快適です。

短い髪もいいかって、少しは思ったけど、でも多分、また伸ばすと思います。

なぜって、わたしの親友たちはみんな、髪の長いわたしが、本来のわたしだって、思っているから。

わたし自身も、やっぱりそう思います。

わたしは一度、あの事件で、次の新しい人生の流れに乗ったんだって、考えています。

だからその新たな生活と共に、また髪を伸ばしていつて、この新しい髪とともに、新しい道を歩んで行こうって、心に誓いました。

ここまで来るのに、ずいぶん時間がかかってしまったけど、まだわたしの高校生活は、残っています。

だから、これからでも今までの分も取り戻して、人生で一度きりの高校生活を、しっかり楽しみたいって、思います！

2011年 3月 その1(前書き)

変更履歴

2011/04/23	記述統一 第一、第二、第三	第一、
第2、第3		
2011/04/30	記述統一 一匹、二匹、三匹	1匹、
2匹、3匹		



2011年 3月 その1

3月2日 生徒会選挙

今日は、来年度の生徒会役員を決める、選挙がありました。

この選挙、あの事件が起きる前までは、誰も、特に注目していなくて、今期に副会長や、書記をしていた人たちが、ひとつ上がって、生徒会長や副会長になるのが、今までのパターンだったんですが、今回は、みことがぎりぎり立候補したから、大波乱が起きました。

選挙活動なんて、全くしていなくて、立候補したのが、土日を挟んで投票日の5日前と言っ、直前だったにも関わらず、みことは前副会長を押さえて、見事に当選してしまいました。

これも全て、あの事件のおかげです。

まあ、あれがなければ、みことは立候補なんてしてないから、そう言う意味では、なるべくしてなったのかも知れません。

ギルドでも、現行の生徒会の書記のひとりで、ギルドの息のかかった、生徒会長の候補者を立てて、生徒会を、ギルドの下位組織に組み込もうと、計画していたらしかっただけど、

これで、失敗に終わってしまったようです。

実はこの大波乱、別の波乱を巻き起こしそうなんです。

かなのギルドは、自分たちの望むものは、みんなで協力して掴み取ろう、が信条で、自分たちに利益になることを、

出来るだけ早く、実現していく為の組織で、その為だったら、多少の悪い事は必要悪だと思っている。

それに対して、みことの信条は、正しい行いをしている人は、報われなければいけない、それを阻害する者は、絶対に許さない。

ギルドやかなは、門塾さんを倒したみことのやり方は、決して喜ばしい物ではなく、むしろギルドからすると、計画の進行を狂わせた、思っているみたいです。

ひとりの生徒が、カリスマ性を持つこと自体を、独善に繋がることだと、良く思っていないくて、第2の門塾さんに、なりかねないって、警戒しているそうです。

それに対してみことの方は、門塾さんに対抗していた、ギルドの姿勢は、評価していたけど、善悪ではなく、自分たちの立場から見た、利益だけを求めている、あり方を知って、それが、利己的な考えに見えたらしくて、自分たちだけよければ、良いつて言う考えが、気に食わないって、言っていました。

2人の考え方は、どっちも目指しているところは、同じような気がするんだけど、そのルートは、ずれている気がします。

だから、どうしても主張し合えば、いつかどこかで、ぶつかることになるとは思ったけど、まさか、みことがこんなに早く、大きな力を手に入れるとは、思わなかった。

わたしとしては、出来るだけ2人の衝突を避けるように、間に入って、お互いの意見を伝えたりして、双方歩み寄って、仲良くしてもらえればって、考えています。

せっかく、門塾さんって言う、大きな障害が、なくなったんだから、みんなで仲良く、過ごして行きたいんだけど、その為には、どうすればいいんだろう……

わたしが頼み込めば、変わるものでもなさそうだし、いまいち、判りません……

3月5、6日 かなからの誕生日

今日は、4日早いけど、

かながわたしの誕生日をしてくれる、とのことので、かなの家に、遊びに行って来ました。

本当だったら、かなの予定として、門塾さんの撃退は、今月の14日を、予定していたんだそうで、

『血のバレンタイン』に対抗して、

『逆襲のホワイトデー』にするつもりだったと、言っていました。

門塾さんを片付けた後は、試験休みまでに後任者へ、ギルドの引継ぎをして、他のメンバーに任せてから、春休みに、わたしの誕生日も兼ねて、

2人で旅行に行こうと、思っていたんだそうです。

だけど、ギルドが生徒会を、押さえられなかったことから、まだ、ギルドの幹部メンバーから、抜けられなくなってしまったって、ばやいていました。

これって、半分くらいは、わたしのせいかなって思って、思わずかなに、謝ってしまいました。

かなは、なんで謝るの？

って顔してたけど、なんとなく、

わたしがみことを、たきつけたって気もして……

そんな訳で、誕生日としての旅行の予定が、立たなくなっただから、別の形で、

お祝いしてもらおうことになったんです。

で、かなにどうして欲しいかって聞かれて、

わたしはかなに、2人でゆっくり過ごしたいって、伝えました。

今はそれが、一番の贅沢じゃないかなって思うし、かなとも、ゆっくり話したいし……

だからこの土日はずっと、かなの家と一緒に、朝から晩まで、なんとなく過ごしました。

バイトが終わったら、そのままかなの家に行って、お互い、面倒な話題はなしにして、昔みたい、何気ないお喋りをして、晩ご飯は、中華の出前を取って食べました。

北京ダックとか、フカヒレのスープとか、ツバメの巢のスープとか、エビチリとかも、とても美味しかったけど、わたしが一番気に入ったのは、花巻です。

具の入ってない、蒸しパンみたいで、妙に気に入りました。

でも何かをつけて食べないと、本当に、味のないただの蒸しパンですけどね。

これなら、家でも作れそうだ……

ケーキは、今となってはちょっと懐かしい、かながまだ所属している、チーズケーキ同好会で、今年度の、最優秀チーズケーキに選ばれたらしい、チーズケーキと、特別賞だったらしい、フルーツケーキの、ふたつありました。

チーズケーキは、上の段がスフレチーズケーキで、下の段がレアチーズケーキになっていて、食べてみると、食感も風味も少し違っているのが、美味しかったです。

フルーツケーキは、苺のショートケーキの代わりに、色んなフルーツが入ってるケーキで、生クリームよりも甘い、色んなフルーツと、甘さ控えめの、生クリームの組み合わせが、とても意外で、美味しかったです。

その後は、ジャグジーのお風呂にゆっくり入りました。

やっぱり、かなの家のジャグジーは最高です。

お風呂では、かなから体の傷が綺麗に治って、良かったって言われたのは良いんだけど、その後、「ねえ、太った？」って言って、お腹の肉をつまめました！

頭に来て、やり返そうとしたら、かなのお腹には、そんなに贅肉はなくて、ウエストも、前より細くなっている様な気がするし、胸も、綺麗に大きくなっている気がして、それを見て、とてもとてもへこみました。

そんなわたしに、かなは、

「大丈夫、人間の価値はスタイルじゃないよ！」なんて、上から目線のフォローを入れられて、

余計に入こまされました。

お風呂を上がった後も、客間でくつろいでいて、  
ここでも、かなとはどうでもいい話ばかりして、  
時間を過ごしました。

そうしているうちに、夜も遅くなったので、  
2人でかなの部屋に行って、休みました。

次の日、目を覚ましたら、無意識にかなに抱きついていて、  
目の前にいる、あきれた顔をした、かなから、

「おはよう、みなも。」

やっぱり、この癖は直ってないんだね。

欲求不満なんじゃない？

誰か、紹介しようか？」

と、いきなり言われてしまいました。

そんなことは、ないと、思うんだけどなあ……

そうなのかなあ……

とりあえず、かなには、今はいいって言って、  
断っておきました。

目を覚ましてからも、ずっとベッドでゴロゴロしていて、  
どうでもいい会話をしていたら、もうお昼になっていました。

お昼は、昨日の残りを適当に食べて、  
午後はジャグジーのお風呂や、屋上のウッドデッキとかで、  
ひたすら何もせずに、2人でくつろいでいました。

この時の話題で、かなから2人で行く旅行で、  
行きたい所はないかって尋ねられて、  
わたしは少し、考えてみました。

かなと一緒に行きたいところ、ねえ……

海は、やめた方が良さそうだなあ、  
かなと水着で人前で並んで立つなんて、  
自殺行為だ。

それにどうせなら、人がいっぱいいるところよりも、  
自然が多いところが良いな。

春休みはダメになったって、言ってたから、  
時期としては、やっぱり夏休みかあ。

夏だったら、避暑地にある森の中の別荘とかで、  
絵でも描きながら、ゆっくりしていたい……

なんて希望を、かなに伝えると、

「昨日から、結構まったり過ごしているって思うけど、

みなも、まだ、足りないんだ……

ま、色々とあったから、何にも考えたくないってのも、  
判らないでもないけどね。

でも、あんまりポーっとしてると、

ボケるんじゃない？」

なんて言われたけど、とりあえず、  
わたしの要望にそって、探しておくって、  
かなは言っていました。



せつかく、ゆつくり出来るんなら、  
精一杯ゆつくりして、何が悪いんだ！

って思うんだけど、やっぱりまだ疲れてるのかな……

夕方になったら、かなが、

「みなもが、まったりモードなのは、

きつと、パワーが足りないんじゃないかな。

だから、夕食はがつり肉を喰おうじゃないか！」

と言い出して、前に冷麺を食べた、

焼肉屋さんへと行って、焼肉を食べました。

かなは、色んなのをどんどん注文して、

お肉の皿で、テーブルがいっぱいになったけど、

ご飯は頼まないで、サンチュで巻いて食べたので、

意外といっぱい食べられました。

実はかなが、こつてりしたホルモンが大好きなのを、  
今日初めて知ったんです。

それを、一番辛いタレにつけて、

キムチもいっぱい入れるのが、好きみたいで、

わたしの3倍は、キムチ食べてました。

わたしはどのお肉も、みんな美味しかったんですけど、  
やっぱり、牛タンとか、ハラミが美味しかったです。

それをタレじゃなくて、レモン汁とか塩だけで食べるのが、  
一番良かったです。

これには理由があつて、普段食べられない良いお肉だから、出来るだけ、お肉の味が判る食べ方で、あんまり他の物も、混ぜないで食べたかったから、こうなりました。

お腹いっぱい食べて、デザートも、シャーベットと杏仁豆腐を食べて、そのまま、かなに駅まで見送ってもらつて、駅で別れて、帰つて来ました。

この2日間、かなとはあの事件のことも、みこのことも、ギルドのことも、全く話しませんでした。

そうしたら、かなと出会つた頃の、2人とも、お互いのことしか考えてなかった頃を、思い出せたような気がして、こういう時間を作れたのは、良かったなつて、改めて感じました。

この後、旅行の約束のことが頭をよぎつて、これつて随分前から、行こうつて言つてたなつて、思い出していました。

前々からの、かなとの約束だから、次こそは、予定通り行けると良いなあ……

3月9日 わたしの誕生日

今日は、わたしの17歳の誕生日です。

そして珍しく、母が出張から午後には帰って来たので、バイトは休みにして、母と過ごすことにしました。

家に帰ると、母は食事の支度をしていました。

母の料理を食べるのは、何だかとても、すぐく、久し振りの気がします。

そのことを伝えると母から、ここ最近出張が続いて、家のことを任せきりにしていたことを、謝られてしまい、わたしとしては、そんなに気にしていなかったので、大丈夫だよって、答えました。

母が用意した夕飯は、近くのケーキ屋さんで買ってきた、1ホールだけど小さめのショートケーキと、カレーでした。

母のカレーは、久し振りの気がする。

母の作るカレーは、本当に普通のカレーで、具は、豚肉と、ジャガイモと、ニンジンと、玉ねぎで、ルーだって、母が辛いのが苦手だから、市販の甘口です。

小さい時なら、甘口でちょうど良かったけど、もう高校生にもなったら、辛口がいいかって思って、自分が作る時は、いくつかルーは混ぜても、中辛くらいになるようにしています。

今日、久し振りに食べた母のカレーは、

やっぱり甘口ですごく甘いけど、とても懐かしい味で、予想以上に美味しいって、思いました。

もう、自分で作るカレーの方が、絶対に美味しいだろうって、思っていたから、これはかなり意外でした。

ケーキは2人で1ホールだと、ちょっと多いから、半分を2つに分けて、食べました。

食事が終わってから、忍さんが、父の絵を探してくれていることを伝えて、どうしてうちには、1枚も残っていないのかを、わたしは母に尋ねました。

この話は、前々から母に聞きたかったけど、父の他の話題なら、昔話を喜んでするのに、絵のことになると何となく、避けたがっている気がして、わたしも聞きづらく感じてしまい、いつの間にか、自然と、そこに触れないようになっていたんです。

今日は、あんまり関係ないけど、わたしの誕生日だし、忍さんも頑張っているから、良い機会だと思って、思い切って聞いてみました。

母は、少し暗い表情になって、わたしが全く予想していなかった、意外なことを言いました。

実は父は、家で静養するようになってからは、

1枚も絵を描いてなかったって、言ったんです。

でもわたしはたしかに、幼稚園だったけど、一緒に河原に行った父が、

絵を描いていたのを、見たって反論すると、

母は、ため息をつきながら、

それは、描いていたんじゃない、

塗りつぶしていたんだって、答えました。

父はいつも、絵を描いていたんじゃない、描いた絵を消していた!?

そう言われて考えてみると、父が描いている姿や、

描き途中の絵や、真っ白なキャンパスは、

何度か見た気がするけど、

完成した絵を、見た記憶がありません。

なんで、そんなことしていたの？

わたしがそれを、母へと尋ねようとしたら、

その前に母は席を立て、タンスの引き出しを開けて、何か手紙を持って、戻ってきました。

母は、これはお父さんが、お前へ宛てた手紙だよ、  
と言って、わたしへと差し出したんです。

それは、少し色が変わり始めている、

どこにでも売っている、茶色の封筒で、

表には、『水面へ』とだけ書かれていて、

裏には、父の名の『三崎 了』と書かれていました。

そんな手紙があることを、初めて知らされたわたしは、  
どうして今まで、教えてくれなかったのかと、  
母を問い詰めました。

わたしが父に、懐いていたことは知っていたのに、  
どうして今まで隠してたんだって、怒りました。

そしたら母は、これは父の遺志で、  
わたしが、父の絵のことを聞いた時、  
この手紙を渡すように、言われていたから、  
今まで知らせなかったんだ、と言われました。

この後母は、父のことで知っていることを、  
教えてくれました。

聖アンの、ホスピスに入っていた父は、  
最期は自宅で過ごしたいと望んで、  
ホスピスを出て、自宅で過ごし始めてから、  
それは始まったそうです。

今まで、学生時代から描き溜めていた絵を、  
1枚ずつ、消して行く作業を始めました。

最初母は、遺作として残すべき作品を、  
選んでいるのだと思って、特に気にしなかったんだけど、  
残したくない作品なら、もっと簡単な処分方法があるのに、  
どうしてわざわざ消したり、塗りつぶすのかと、  
疑問に思ったそうです。

それを父に尋ねても、父は、自分の作品は、この世から全て消さなくてはいけない、そう言うばかりで、その本当の理由は、最後まで、教えてくれなかったそうです。

母としては、父が精神的に疲れてしまつて、奇行を始めたのかとか、凡人には判りようもない、芸術家としての感性が、そうさせているのかとか、色々気にしたんだけど、

その行動以外の父の行動は、以前と変わりなく、変なところはなかったから、

父の気の済むように、すればいいと思うことにして、最後は、何も言わなかったそうです。

そうして父は、自分の絵を消す作業を続けたけど、全ての自分の絵を、消すことは出来なくて、死ぬ間際にも、全てを消しきれなかったことを、ずっと悔やんでいたと、教えられました。

どうして、せつかくの絵を、わたしも好きだった絵を、わざわざ自分で消してしまったの、お父さん……

その理由は、この最後の手紙の中に、記されているのかも知れない。

そう思ったけど、なぜか手紙を見るのが怖いと感じて、わたしは受け取った手紙の封を、開けられずにいました。

母の話も終わって、お風呂に入って、寝る時間になつたけど、やっぱり手紙は見れなくて、

手にとっては、また置くのを繰り返していました。

開けちゃいけないって、気がするのは、  
何となく、これはまだ、  
読む時じゃないって、ことなのかな……

わたしはそう思って、お守りじゃないけど、  
いつでも、見たくなったら読めるようにと、  
学校のカバンに、入れておきました。

一体、何が書いてあるんだろう。

お父さんが、わたしへと伝えたかったこと。

気になるけど、すごく気になるけど、  
なぜか、どうしても開けられません……

3月11日 忍さんに相談

今日は、休みに入る前の、最後のバイトの日です。

テストも近いので、明日から、  
航海堂のバイトは、テストが終わるまで、  
休みにしたんです。

この日は、忍さんも閉店直前に顔を出したので、  
バイトが終わってから、忍さんに時間をもらって、  
母から聞いた、父の話をしました。



美大生の忍さんなら、もしかしたら、父の心境が、何か判るかもって思って、尋ねてみたんです。

手紙をもらったと聞いた時の、忍さんは、とても驚いたような、顔をしていて、そんな忍さんを見て、わたしの方まで、驚いてしまいました。

わたしの話を聞き終えた、忍さんは、とても、渋い表情をしていました。

「うーん、自分の絵を、消す、か。

私でも、そう言う気持ちは無くは無だよ。

思ったように描けていない絵とか、

失敗した彫刻とかは、失敗作が目の前にあると、

自分の失敗を悔やんで、苛つくからってのが、

私の場合の理由かなあ。

だから、そう言う事をするのは、

作品が失敗したと気づいた、すぐ後だけで、

昔の作品には、衝動的な感情は沸かないかな」

忍さんでも、やっぱり父の心境は判らないみたいです。

やっぱり、忍さんの絵を探す為の情報も、

何かあるかも知れないから、手紙を読んだ方が良かったって、

忍さんに聞いてみたら、忍さんは、

「みなもちゃんとしては、その手紙はまだ、

見たくないんですよ？」

だったら、無理に見る事はないって思うよ。

その手紙の中に、ヒントがあるかも知れないけど、私はそもそも、それを知る立場に無いんだから、ヒントがあるうがなかるうが、

私は、絵を探し続けるだけ。

これは、みなもちゃんの為でもあるけど、自分が手に入りたいからって言う、理由もある。

だから、もしみなもちゃんが手紙を読んで、

何か絵を探す、良い情報が書いてあれば、

その時に、教えてくれればいいからね」

と、笑って言うてくれました。

わたしは忍さんに、頷いて答えてから、

父の絵の搜索の方は、どうなのかを聞いてみると、

忍さんは、笑顔から苦笑に変わって、

「実はね、結構行方を追うのに苦労してる。

所有者が色々変わっててさ、

足取りが追いきれないんだ。

でも、必ず手に入れるつもりだから、

安心して待ってて」

と、答えてくれました。

だけど、この時の忍さん、

なんか、態度に違和感を感じたんです。

なんなんだろう、この違和感。

今の忍さんの言葉には、嘘はないって判る。

それに、忍さんがわたしにひどいことを、  
しようとするはずもないから、  
ますますこの違和感が、何だか判らない。

わたしは忍さんに、それを聞こうかと思って、  
良いかけたけど、何だか忍さんのことを、  
疑っているのが嫌だと思って、やっぱりやめて、  
何か判ったら知らせますって言って、  
また絵を描いたら、見て下さいとも伝えて、  
この日は帰りました。

忍さんを感じた、違和感、  
私の気のせい、なのかなあ……

3月12日 みことと試験勉強

来週からは、学年末試験が始まります。

そこで、最後の追い込みで、みことと一緒に、  
試験勉強することにして、みことのアパートに来ました。

前の成績勝負の時で、みことの頭が良いのは判っているから、  
わたしは、どちらかと言うと教えてもらうつもりです。

みことのアパートに着いてすぐに、みことから、  
まずベランダへと来て欲しいと、頼まれました。

この前に見た、三毛猫のことかと思つて聞いてみると、みことは頷いて、

「来てもらつて、いきなりこんな事を頼んでしまつて、申し訳ない。」

「ただ、こうして祈つてやれるのは、

私だけでは、こいつらも寂しいだろうから、

悪いが、付き合つて欲しい」

と言いながら、わたしにお線香を渡しました。

今はただ、狭い庭のあちこちに、土の小山の上に、手の平くらいの石が、点々と置いてあるだけの、寂しいお墓に、わたしはその石のひとつひとつに、手を合わせて、お線香を立てておきました。

わたしが手を合わせている間、みことはそれを見ながら、

「あの三毛猫と、その後にもう一匹死んだ。」

今のところは、他には見ていない。

今のうちに、あいつらの墓標でも作つておくかな、

でも名前も判らないから、何て書けば良いんだろう」と、呟いていました。

供養を済ませてから、わたしたちは勉強を始めました。

やっぱり予想していた通り、

一緒に勉強している、と言うよりは、

わたしがみことに、教えてもらうばかりで、みことは、家庭教師みたいになっていました。

でも人に教えるのも、きつと勉強だよ、ね、  
そう信じておくことにします。

休憩をしている時に、ふと気になって、  
みことに、陸上部のことを尋ねると、  
生徒会長になったから、部活はやめたんだそうで、  
何だか、勿体ない気がしたけど、  
みこととしては、あれは誰かと争っていたいと言う、  
闘争本能を満たす為に、やっていたただけだから、  
別に、未練はないとのことでした。

ただ、葵ちゃんがものすごく怒っていて、  
どうやってなだめれば良いかは、今後の課題みたいです。

なんだか最近の葵ちゃん、  
だんだん、みことの恋人みたいになってきてるなあ……

でも、今まで冷たい扱いを受けたりしたんだから、  
そついうことを言う権利はあるかな。

ま、なんだかんだ言っても、  
2人は仲が良さそうだから、良いんですけどね。

この後は、夕方まで勉強してから、  
2人で夕飯を食べてから、帰ってきたんだけど、  
ファーストフードのお店で、  
ハンバーガーを食べてから帰りました。

わたしは普段、節約で外食はしないから、  
たまに食べると一番安いのも、美味しいなって思います。

1人なら、下手に作るよりも安上がりだし、

忙しかったりしたら、買って食べちゃうかもなあ。

でも冷めたら、味はどうなんだろう、これ。

みこことがいつも何を食べているのかが、気になって、ご飯はいつも、どうしているのかを尋ねたら、

みこことは、鍋とかはあっても自炊はしていなくて、

コンビニかこう言う店で、食べてるって言っていました。

いつも、ファーストフードとコンビニのお弁当ってのは、あんまり体に良くないな……

明日来る時は、勉強教えてもらってるお礼も兼ねて、何かご飯を作ることにして、

みこことに食べたい物を聞いたら、みこことは、

「だったから、カレーを作って欲しい」

と、リクエストされました。

みここと、わたしのカレーを気に入ってくれるかな……

3月14日 ホワイトデー

今日は、ホワイトデー、ですが、

今年は色々あって、何にもしてなかったから、

お返しも、何にもありません。

みこことは当選してから、色々いっぱいもらっていたけど、受け取る時に、お返しは出来ない」と、

全員に、繰り返して言っていたので、  
公言通り、特に何もしないみたいです。

今日はそれどころではなく、学年末試験の初日でした。

でも試験勉強は、みことの家で対策してきたから、  
けっこう万全で、今日もほとんど問題なく、  
それなりに出来たと思います。

昨日、みことに勉強のお礼として作ったカレーは、  
食べようとした時に、みことがいきなり、  
カレーに、ソースをかけようとしていたから、  
思わずソースを持っていた手をつかんで、  
止めてしまいました。

みことは、とても不思議そうな顔をして、  
「いつも伯父貴は、こうしていたから、  
これが、本来の食べ方だって思ったんだが、  
この食べ方は、間違っているのか？」  
と、質問されてしまいました。

わたしはみことに、まずはそのまま食べて、  
感想を聞かせて欲しいって、お願いして、  
そのまま、食べてもらいました。

そしたらみことは、  
「みなものカレーは、このままでも美味しいな」  
って、言っていました。

みこと、今まで伯父さんのところで、

どんなカレーを食べてたんだろ……

食べ終わった後にみことは、

「このカレーの作り方を、教えて欲しい」

って言ってたから、試験が終わってから、

試験休みにでも、みことに料理を教えようと思います。

どうやら、自炊する気になったみたいですが、

よかった、よかった。

でも今はまず、テストを片付けるのが先なので、

赤点になって、補習にならないように、

テストに専念します！



2011年 3月 その2(前書き)

変更履歴

2011/09/10 誤植修正 位 くらい

2011年 3月 その2

3月18日 葵ちゃんの合同誕生日会

今日は、学年末試験の最終日です。

テストの方は、まあまあ出来たので、  
とりあえず補習はしのいだ、はず。

この後は、葵ちゃん主催のお誕生会です。

実はみことの誕生日が、わたしと1日違いの、  
3月8日だったんです。

これを知ったのは、試験期間中に葵ちゃんから連絡があつて、  
みことの誕生日をやりたいうって、連絡してきた時でした。

その時に、わたしの誕生日を聞かれて答えたら、  
わたしたちの、誕生日が近いのを知った葵ちゃんが、  
予定を変更して、2人の合同誕生日会をやるって、  
言っていたんです。

これを聞いて、わたしもみことに何かをあげないと、  
と、思っていたんだけど、

この連絡があつた翌日に、みことから呼ばれて、  
2人の間では、これまでもう色々、  
やりとりはしてきたから、今回は今年のうち、  
お互いに欲しい物が出来た時、相手にそれを、  
頼むことにしよう、ってことになりました。

テストは午前中で終わって、葵ちゃんに指示された通りに、みことと2人で、校門のところに向かうと、もうすでに、葵ちゃんが待っていました。

葵ちゃんは、わたしたちを見つけると、どこの小学生かと、思うくらいに、飛び跳ねながら、こっちに手を振っていました。

「みこと先輩！ 三崎先輩！

もう、遅いですよ！

早く行きましょう！」

そう言いながら葵ちゃんは、わたしたちの手を引っ張って、駅へと向かって、歩き出しました。

葵ちゃんはまるで、遊んでもらっている子犬のように、すぐはしゃいでいて、とっても楽しそうだし、笑顔が絶えません。

いつでも、かなり元気な葵ちゃんだけど、

ここまで無邪気な感じなのは、

わたしという時では、見たことないなあ。

やっぱり、みことと一緒にいられるってのが、

きっと嬉しいんだろうなあ……

葵ちゃんは、駅へと向かう道中も、

みこととわたしに、途切れることなく喋り続けていて、今までずっと、抑えられていた気持ちが、

ここに来て、一気に爆発している感じです。

今日のみことは、それに全力で答える姿勢なのが、葵ちゃんにも伝わって、それが余計に嬉しいんだなって、わたしは思いました。

12時くらいに駅に着いてから、みことが葵ちゃんに、今日の予定を尋ねると、葵ちゃんは少し冷静になって、「あ、えつとですね、

場所は、隣の駅の駅前にある、

カラオケボックスです！

でも、そこに行く前に、ちょっと寄り道します」と言っていました。

カラオケボックス、中学の時に一度だけ、行ったことがあるだけです。

でもその時は、何にも歌わないで、ずっとジューズ飲んで、人が歌ってるのを、聞いていただけだった気がする。

わたしは普段から、あんまりテレビも見ないし、音楽を聴く趣味もないから、最近の歌なんて、全然知らないんです。

とりあえず、2人の歌うのを聞いてればいいかな。

でもそう言う意味だと、過去の話を聞いた感じからして、みことも、そんなにカラオケ行ってそうもないんだけど、何を歌うんだろう。

これはちょっと気になるな……

そんな風に思いつつ、わたしはみことを見ると、みこともわたしを見て、目が合ってしまった。

この時の、みことの顔を見たわたしは、きつとみことも、わたしと同じことを、考えていたんじゃないかって、思いました。

わたしたちは、葵ちゃんに連れられて、うちに帰る方向にある、ひと駅隣の駅で降りました。

改札を出る時に、葵ちゃんは、

「ここから、わたしの家は走って10分なんです」と言っていて、歩いて何分ではなくて、走って何分って言うのが、葵ちゃんらしいです。

葵ちゃんはまず、改札を出たところにある、駅のロッカーに向かうと、紙袋を取り出してから、駅前のロータリーを渡って、駅の通りあった、ケーキ屋さんに入りました。

この店で、予約してあったケーキっぽい、大きな紙袋を、受け取ってから、

今度は、ファーストフードのお店に入って、フライドチキンや、ハンバーガーや、サラダや、ポテトや、他にもたくさん頼んでいました。

これ、3人分じゃない気がする……

それにしても、今の葵ちゃん、  
スマイルが基本の、店員さんよりも笑顔全開だ……

ここでも大きくて重そうな紙袋を、受け取って、  
持ちきれなくなった、葵ちゃんを、  
見かねたみことが、重そうな紙袋を持ってあげて、  
お店を出ました。

「さあ、いよいよカラオケボックスに行きますよ！  
急ぎましょう！」

よっぽど楽しみらしい、葵ちゃんは、  
カラオケボックスに向かって、走り出していて、  
みことはともかく、わたしは荷物はないけど、  
そんなハンディは、ほとんど意味はなくて、  
陸上部で走っていた、2人を追いかけるのに必死でした。

でもカラオケボックスは、そんなに遠くなかったから、  
すぐく離される前に、目的地に着いたので、  
助かりました。

わたしはもう、息が上がってしまったけど、  
みことと葵ちゃんは、何でもなくて、

「さあ、入りましょう！」

三崎先輩も、早く早く！」

と、葵ちゃんに手を引かれながら、  
店内へと入りました。

ここでも、部屋を予約してあったようで、

待たずにすんなりと入れました。

部屋へと向かう途中で、葵ちゃんは、

「このお店は、食べ物の持ち込みが出来るから、

こういうイベントでは、便利なんです！」

と、教えてくれました。

へえ、食べ物の持ち込みが出来るんなら、

安く済むし、いいなあ。

部屋に着いたら葵ちゃんは、

みとこに持ってもらっていた、紙袋を受け取ると、

「わたしが準備しますから、先輩達は座ってて下さいね」と言いながら、支度を始めていました。

葵ちゃんは最初に、食べ物を全部テーブルに並べてから、

ケーキの入っている紙袋から、

買ってきたケーキの箱を出しました。

やけに、紙袋が大きいとは思ったけど、

このケーキの箱、明らかに普通に売っているケーキより、ひと回り大きいです。

これ、何人分のケーキなんだろう……

葵ちゃんが箱を開けるのを、期待と不安を感じつつ、

見ていたら、箱を少し開けた途端に突然、

「ああああ……！」

と、葵ちゃんが叫んだんです。

「ケーキが、崩れちゃいました……」

葵ちゃんはへこんだ声になって、肩を落としながら、そう言いました。

ケーキを見てみると、ケーキが箱にくっついていて、2ヶ所が少し潰れていました。

そうか、走ってきたから、ケーキが土台からずれて、箱の内側に当たっちゃったのか。

このアクシデントで、いきなりテンションが、下がってしまった葵ちゃんへと、

わたしとみことは、そんなの気にしないからって言って、慰めてあげると、葵ちゃんは少ししゅんとして、  
「すみません、わたし、浮かれてしまって、ちっちゃい子みたいですよね。」

でも今日は、すごく楽しみにしてたから、どうしても、落ち着いていられなくて……

これ以上、失敗したり、変なことしたくないし、先輩達に迷惑かけたら、申し訳ないから、少し、大人しくした方がいいですよね……」  
と、小さな声で言っていました。

でもこれを聞いたみことは、わたしが反論する前に、  
「いや、葵、今日は何も我慢しなくていい。」

これはお前の企画してくれた、誕生会で、私達は、葵のもてなしを受けさせてもらう客だから、お前のやりたいように、やってくれ。



私達もそれを望んでいるから、変に気を使わなくていい。  
なあ、みなもも、それでいいよな？」  
と、わたしへと同意を求めてきました。

わたしも、葵ちゃんにみことと同じ意見だし、  
元気な葵ちゃんの方がいいって、伝えました。

「……本当、ですか？」

ありがとうございます！

だったら、やりたいようにやります！」

と言うと、葵ちゃんはまた元気に戻りました。

この切り替えの早さは、すごいと思いながら、  
これは、みことが葵ちゃんにとって、  
正確には後輩なんだけど、

陸上部の、信頼していた先輩だからって言う、  
理由があるのかなって、思いました。

多分、わたしが同じように、いくら慰めてあげても、  
きっとここまでは、切り替わらないと思う……

元のテンションに戻った、葵ちゃんは、  
ケーキをセッティングして、ローソクに火をつけると、  
部屋の証明を消して、お誕生会は始まりました。

最初にわたしとみことで、ローソクを吹き消してから、  
葵ちゃんが、ケーキを切り分けた後、  
その次は、葵ちゃんからわたしたちへと、  
誕生日プレゼントの、贈呈でした。

駅のロッカーから出して、持っていた紙袋の中に、2つの紙袋が入っていて、それを、それぞれ渡されました。

大きさを割りにかなり軽いな、これ……

「葵、中身は何だ？」

と尋ねるみことへと、葵ちゃんは、

「わたしの、とっておきの戦利品です！

一番のお気に入り、揃えました！」

と満面の笑みで、返してきました。

戦利品、と言うことは……

わたしよりも早く袋を開けた、みことは、中身を取り出して、しばらく考えてから、

「これ、何なんだ、葵？」

と、どっかで見たとようなぬいぐるみを持って、質問していました。

この変な顔は、間違いない、

ああ、これ、ぶさ彘もんだ。

でも、前に取ったのと少し違うような……

わたしが考えていたら、葵ちゃんは自信満々で、

「どうですか？ かわいいでしょ！

これ、二代目ぶさ彘もんです！

全部で5種類あるんです！

お2人の為に、2セットコンプリートしました！

「気に入ってもらえました？」

と、目をキラキラさせながら言われました。

二代目、か……

わたしも袋を開けて、中身を見てみたら、ポーズと色が違う、ぶさゑもんが5個入っていて、手にしている武器が、刀じゃないのに気づいて、葵ちゃんに聞いてみたら、

「そうなんですよ、三崎先輩！」

二代目は忍者に、再就職してるんですよ！

ちなみに一代目は、失業中の侍だったんです！

やっぱり、この顔が良いんですねえ」

と言つて、嬉しそうに説明してくれました……

忍者に再就職、ねえ。

やけに現実的な、設定だったんだなあ、今の時勢を、反映した設定なのかなあ……

とりあえず、わたしとみことは、

葵ちゃんに、お礼を伝えておきました。

ちゃんと、顔は引きつらずに言えたはず、です。

この後は、ひたすら喋りながら食べてました。

葵ちゃんは知つての通り、いっぱい食べるし、行儀は悪いけど、食べながらお喋りもしていました。

よく口をかまないよなあと、感心するほど、  
良く食べて、良く喋って、良く笑っている、  
葵ちゃんの相手をしながら、  
みことはと言うと、葵ちゃんに劣らず、  
淡々と、結構な勢いで食べていました。

前にカレーを作った時も、わたしの倍は食べてたから、  
わたしからすると、5人以上あるように見える食べ物も、  
この2人の食べる勢いで、それなりのスピードで、  
なくなっていきました。

食べ物が半分くらい、なくなった辺りで、

葵ちゃんは立ち上がると、カラオケに手を出して、

「さて、ここからは、ガンガン歌いますよ！」

まず最初は、わたしが歌いますから、

その間に、お2人も予約して下さいね！」

と言いながら、手馴れた様子でリモコンを操作して、  
曲を予約していました。

葵ちゃんは、本を見ないで予約していて、

どうやら、番号を暗記しているみたいです。

すごい常連なんだなあ、葵ちゃん。

葵ちゃんの選曲は、やっぱり今流行っている曲ばかりで、  
サビになると、これ聞いたことあるって思う、  
そんな曲ばかりを歌っていました。

それにしても、葵ちゃん、歌上手いなあ、  
それに、すごく歌いなれている感じがする。

歌ってる時も、自然に体が動いてるって感じで、  
とっても楽しそうに、歌ってました。

そんな葵ちゃんを見ながら、わたしは、  
手拍子とか、盛り上げる為の楽器を持って、  
葵ちゃんの歌を、聞いていました。

葵ちゃんは、あの短い時間で6曲も予約していて、  
立て続けに歌い続けていました。

その間、みことはと言うと、葵ちゃんの歌っている間、  
曲の乗っている本を、パラパラ見ていました。

何を探しているんだろう、と気になって、  
どのジャンルのページなのかを、見ようとしたら、  
みことは本を閉じて、リモコンで登録を始めました。

わたしはみことに、何を歌うのかを尋ねると、  
「うーん、知っている歌なんだが、  
自分で歌った事はない歌だ。」

どうなるか判らないが、そこは気合と根性だ」  
と、何か間違っている気もしますが、  
葵ちゃんの用意してくれた、もてなしを満喫しようとする、  
その意気込みだけは、わたしにも判りました。

そして、葵ちゃんのステージが一旦終わった後、  
みことの選曲した歌になりました。

わたしも、葵ちゃんも、何を入れたのかと、

テレビの画面を見ていたら、それは、なんと……

演歌、でした……

これには、葵ちゃんも驚いたようで、

「みこと先輩!？」

と、言ったまま固まっていました。

「私が知っている歌と言うと、

伯父貴が歌っていたのしか、知らないんだ」

とマイクで弁解してから、みことは歌い始めました。

最初の曲はただ、曲に合わせて歌詞を言ってるだけでしたが、次の曲になると、もう何かを掴んだのか、それっぽく歌っていて、3曲目では普通に演歌です。

そして最後の4曲目では、こぶしも回して、歌い上げていました。

みことの熱唱中に、

「三崎先輩は、みこと先輩の持ち歌、

知ってたんですか？」

と、リモコンを片手に持った葵ちゃんに聞かれたので、今日、初めて知ったことを、伝えると、

「これは、予想してませんでした。

ああ、びっくりした。

あの選曲は、わたしもあんまり合わせられないです。

あ、次は三崎先輩の番ですよ、はいこれ」

と言いながら、予約完了したりリモコンを、渡されてしまいました。

みことが歌い終わって戻ってくるのと、入れ替わって、葵ちゃんが、前に行きました。

わたしは、戻って来たみことに、さっきの歌のことを、聞いてみると、

「ああ、伯父貴は演歌好きだったから、たまに歌っていたんだ。

それを思い出して、歌ってみた。

どう歌えば良いかは、何となく判った。

後は、聞き覚えのある曲の、

曲名を思い出せるかどうかだな。

ところで、みなもは歌わないのか？」

と、逆に聞き返されました。

そう言われてもなあ、わたしは歌ったのなんて、音楽の授業や、合唱会とかだけだよ……

どうしようかと思って、本をパラパラと見ていると、合唱とか、童謡のページが目に入って、こんなのもあるんだなあ、と思いつつ見ていると、小学校や中学の頃に、授業で歌ったことのある曲が、いくつかありました。

ああ、これなら歌える気がするけど、こんなの入れちゃっても、いいかなあ、と、気にしていたら、みことから、「みなも、こういうのを歌うのか？」

と言われて、興味深そうに見つめられました。

わたしはここで正直に、実はカラオケって、全然来たことないし、音楽もほとんど聞かないから、歌えるのがないんだって、みことに伝えました。

「なあんだ、それなら私と一緒にだ。」

とりあえずは、知ってる曲を入れて歌ってみれば、後は、何とかなるだろう。

だから、まずは予約だ」

と、何だか歌わせる気が満々なのを感じて、

その勢いに押されてしまい、わたしは合唱で歌った曲を、一曲だけ入れました。

そしてその後はみことが、曲名を思い出したらしくて、演歌を何曲か、予約していました。

みこと、もうすっかりカラオケに、はまっている感じがする。

でもまあ、みことの場合は、どんなことでも、初挑戦でもちよっとやるだけで、すぐに上達していたから、それと同じなだけか……

葵ちゃんが歌い終わってから、とうとうわたしの番が来て、わたしは覚悟を決めて、前に出ました。

見ているのは、みことと葵ちゃんしかいないけど、これは意外と、緊張するなあ。

みことみたいに、すぐに挽回してちゃんと歌えるとは、



とても思えないから、ずっと外れっぱなしになると、かなり痛いなあ……

なんて気にしていたら、みことと話していた葵ちゃんが、画面に映っていた曲名を見て、

「三崎先輩、これは知ってる歌だから、

わたしも一緒に、歌っていいですか？」

と、前に来た葵ちゃんに言われて、

わたしは葵ちゃんと、一緒に歌いました。

最初はおっかなびっくりで、全然声も出せなかったけど、葵ちゃんが、リードしてくれたから、それに合わせて歌っていたら、自然と歌えていました。

ほとんど、葵ちゃんのおかげだけど、ちゃんと歌えると、結構気分が良いもんだなあ……

わたしが歌っている間、みことはわたしと葵ちゃんを、微笑んで見ていました。

歌い終えた後、次の番のみことが歌っている間、葵ちゃんにお礼を伝えると、

「フォーローしろって言ったのは、みこと先輩です。

わたしは歌い始めるまで、様子を見るつもりでしたから。

歌えるのに、一緒に歌われると、

邪魔って人もいますからね。

わたし、大抵の歌は歌えますから、

1人じゃ歌いづらかったら、言って下さい、

一緒に歌いますよ！」

と、胸を張って断言した後に、

「ただ、古い演歌は、判んないんですよね、だから、みこと先輩のフォローは、出来ませんけど、あの調子じゃ要らなそうですね」と言っつて、苦笑いしながら、握り拳で、こぶしをきかせて、熱唱しているみことへと、顔を向けていました。

この後は、葵ちゃんは演歌以外の色々なジャンルを、幅広く歌っていて、どの歌もみんな上手かったです。

わたしは葵ちゃんと一緒に、合唱曲とか、童謡とか、小さい頃に見ていた、アニメの歌なんかを歌って、

みことは、古い演歌から今度は軍歌に変わって、さらに誰もついていけない境地へと、行ってしまいました。

それにしても葵ちゃん、どうしてこんなに、色々な曲を知っているのが、不思議で、みことの熱唱中に、聞いてみたら、

「わたしの友だちに、アニメ好きな子がいて、その子と一緒にだと、アニメの曲しか歌わないから、それで覚えたんです。

他のジャンルの曲も、カラオケに良く行く友だちと一緒に歌って覚えているだけです。

わたしはそんなに、音楽が趣味って訳じゃないですよ。まあこれは、付き合いのスキルみたいなもんですね」と言っつて、笑っていました。

友だちとの付き合いで、こんなに色々覚えているのか、それはそれで、すごいなあ、と、

わたしは、感心してしまいました。

わたしだったら、たとえこれが、  
学校のテストに出るって、言われても、  
絶対に、覚えられない自信があります。

こういう、順応性の高いところかも、  
やっぱり葵ちゃんは、みことについていける、  
力を持った子なんだって、改めて感じました。

食べて、飲んで、喋って、歌って、と、  
楽しい時間は過ぎて行き、  
部屋の中の電話が鳴って、葵ちゃんが応対した後、  
わたしたちへと、もうじき予約時間の終了だと伝えました。

そういえば、何時間で予約していたのかを、  
確認していなかったなって、思いつつ、  
時計を見たら、もう夜の11時でした！

ええ！？ なにこれ！  
たしかここに着いたのは、午後1時前くらいだったから  
もう10時間もいたってこと！？

そんなに時間が経っていたかと、  
わたしは、とても驚きました。

それと、10時間もよく居られたなと思って、  
葵ちゃんに聞いてみたら、  
わたしとみことの、終電の時間ギリギリまで、  
予約したんだと、言っていました。

こうして、葵ちゃん主催による、  
わたしとみことの、合同誕生会は終わりました。

お祝いしてくれた、葵ちゃんに、  
何か、お返ししてあげたいなあ。

でも今は、何も持ってないし……

あ、そうだ！

わたしは葵ちゃんに、声をかけて、  
これからは葵ちゃんにも、みことと同じように、  
わたしのことを名前で呼んで欲しいって、伝えました。

わたしからすれば、大したものじゃないけど、  
葵ちゃんからすれば、大きな意味があったみたいで、  
葵ちゃんは、予想以上に喜んでくれました。

この後は、葵ちゃんがわたしたちを、  
駅まで見送ってくれたんですが、  
最後に葵ちゃんは、改札での別れ際に、

「みこと先輩！ みなも先輩！

また一緒に遊びましょうね！」

と言いながら、わたしたちへと手を振っていました。

駅のホームで電車を待っている間、みことは、

「葵、今日はいつもの倍は楽しそうだった」  
と、笑顔で言っていました。

そう言うみことだつて、かなり熱唱していて、かなり楽しそうだったよつて言つたら、みことは一言、「与えられた目標は、何事にも全力で立ち向かう。これが、私の心情だからな」と言っていました。

やがて電車が来て乗り込んで、走り出してから、空いていた席に座ると、みことが、

「今日は、葵に名前と呼ばせてやってくれて、ありがとう。」

これは葵には、とても大きなプレゼントだったよ。

葵は、体育会系だからと言うのもあるが、

他の人への呼び名を、結構気にしているんだ、

やっぱり苗字ではなく、名前で呼ぶのは、

葵にとって、友達以上の証だと思っている。

だから今日は、みなもに友人として認められたつて、思ったに違いない。

本当にありがとうな、みなも。

これからも、葵を可愛がってやってくれ」

と言つて、わたしへと頭を下げました。

それを聞いたわたしは、首を振つて見せて、意外そうな顔をした、みことへと、

わたしは葵ちゃんと、友だちとして付き合うだけだよ、と伝えてから、それよりもまず、わたしより、

葵ちゃんを、もっと可愛がらないといけないのは、みことでしょと、逆にみことに言いました。

これを聞いたみことは、

「その通りだな」

と言って、苦笑していました。

この後も、みことと今日の話をしていると、みことの最寄駅の、わたしの降りる駅の1つ手前に着いて、そこでみことと別れました。

わたしはひとりになって、今日の合同誕生会のことを、改めて思い出していました。

あれだけあった食べ物も、全部食べきったし、カラオケも最後の方は、1人で歌えるようになったし、みことは、すっかり演歌歌手だったし、葵ちゃんも楽しそうで、良かった。

でも、まさか10時間も経っているとは、思わなかったなあ……

明日、声出なさそうだなあ、でも楽しかったから、いいか。

みんなでまた、カラオケに行けるといいな……

3月20日 なつめの帰国

今日は、前々から予告のあった、なつめがついに、日本に帰ってくる日です。

ちょっと前にあった、榊さんからの知らせだと、

3月の最終週あたりって、聞いていたんだけど、急に予定が早まったらしくて、昨日の夜に、なつめからメールが来ていました。

本当に直前と言うか、戻っている道中で、連絡してきたんじゃないかって、思うくらい、ギリギリです。

なのでわたしは、今朝このメールに気づいて、慌てて支度していたら、今度は榊さんから連絡が来て、今家の前にいるから、早く支度して降りて来いって、言われました。

まず榊さんが、なつめのところにいなくて、日本にいるのに、かなり驚きました。

もしかすると、前に学校に来た時から、ずっと戻らずに、日本にいたのかな。

それにしても、もし、わたしがまだ寝ていたら、一体、どうするつもりだったんだろうって、疑問に思ったけど、まあ、間に合ったからいいか。

こうしてわたしは、朝食を取る暇もなく、アパートの前に、止まっていた、なつめの青い車に乗りました。

そうすると榊さんから、大きなバスケットを渡されて、中を見てみるとそれは、色んな具のサンドイッチが、ぎっしりと、詰め込まれていました。

さらにその後、大きな水筒も2つ投げ渡されて、中身を確認したら、レモンティーとコンソメスープでした。

「……食ってないだろ、朝食だ」

榊さんは一言だけ、わたしに伝えると、空港目指して、車を出しました。

わたしは、車の外の風景を眺めつつ、もらったサンドイッチを食べながら、暖かいコンソメスープを、飲んでいました。

この風景は、1年前にみことを見送って通った道だ。

あの日からもう、1年近く経っているんだ、時が経つのは早いなあ……

1年前のお別れの時は、わたしは泣き出してしまって、最後まで、なつめに慰められたんだっけ。

今回は、あの時の雪辱を晴らすぞと、心に誓いました。

手紙では、ずっとやりとりしていたし、写真も見ていたから、なつめの現状は、それなりに、判っているつもりなんだけど、最後の手紙の状態から、どうなったかは、全然判っていません。



それを、榊さんに尋ねてみると、

「……お前と学校で会ってから、向こうに戻って、

帰国後の準備やらの、雑用をやる為に、

ひと足先に、1週間前日本に戻ったが、

最近の棗は、回復してきているとは思う。

だが、まだ少し違って見えるかもな」

と、言っていました。

なつめの最後の手紙は、2月の頭だから、

わたしが見た、手紙の写真からは、

約2ヶ月経っているのか。

たしかあの写真では、かなり顔色も悪くて、

痩せちゃってたんだよなあ、なつめ。

それと変わってないってことは、

やっぱり帰国出来るところまで、治療は終わったけど、

回復したとは、違うのかも知れない。

わたしは、痛々しいなつめの姿を見ても、

出来るだけ、動揺したりしないようにしようと、

気を引き締め直しました。

高速に乗って、都心に入った途端に、

かなり長い渋滞に、巻き込まれましたが、

この風景も、なつめがまだ入院していた頃の、

お見舞いに通っていた時に見ていたのを、思い出して、

もうあの日々から、1年以上経っているんだなあって、

懐かしく思い出しながら、外を眺めていました。

空港へは、4時間近くかかりましたが、なつめの乗る飛行機は、午後1時に到着するから、1時間は余裕がある、と言っていました。

昼食をどうするかを、榊さんに聞かれて、なつめは、どうするのが気になって、わたしが逆に尋ねたら、

「……棗か、棗は機内で食べてくると思うぞ。どちらにしても、この辺の店では、

あれが食える食事を探すのは、難しいだろうからな。

だから、お前も食べておいた方がいい。

何か食べたい物はあるか」

とのことなので、わたしはどこでも良いと答えると、

「……なら、俺の趣味でいいな」

と言って、洋食のレストランへと入りました。

そこで榊さんは、昼からステーキを頼んで、それを、まるで獲物を襲う肉食獣のように、すごい勢いで、食べていました。

この食べっぷりは、前にいっぱい食べていた、葵ちゃんやみことでも、かなわない迫力です。

わたしは、そんな榊さんを見ながら、たらこスパゲティを、食べていました。

10分もしないうちに、セットの大盛りのライスも、スープも、コーヒーも間食した榊さんは、

「……俺も今日は、朝食抜きだったからな」

と、聞いてないのに、がつついていた言い訳をしていました。

わたしが食べ終わる頃には、ちょうど、到着時間近くになったので、レストランを出て、到着ロビーの、ミーティングスペースで、ソファアに座って待っていました。

しばらくすると、腕時計を見ていた榊さんが立ち上がって、「……迎えに行ってくるから、

ここで待っていてくれ」  
と言い残して、なつめを迎えに行きました。

いよいよだ、ついになつめと再会するんだ。

わたしはそう思っただけで、少し目が潤んできてしまい、今回は、絶対に泣かないって、心に強く念じながら、なつめを待ちました。

それから、10分後……

見間違いようもない、大きな体の榊さんに、小さなスーツケースを、引いてもらう、高そうなワンピースに、ハーフコートを羽織った、今のわたしと、同じ様な髪型をした、華奢な女の子の姿が、見えました。

そしてその女の子は、わたしの姿を見ると、一旦、足を止めました。

なつめ、お人形みたいだなあ……

立ち止まったなつめを見た、わたしの第一印象は、  
一年の後半の頃の、華奢で儂げだった時の、  
『なつめちゃん』を思い出しました。

でもそれは、なつめが、『なつめちゃん』へと、  
戻ってしまった、とは思わなくて、

これは一時的な心境の変化で、そう見えるんだって、  
わたしは思いました。

わたしは、立ち止まったままのなつめへと近づいて、  
それを見た榊さんは、なつめの背中を押して、  
前に進めと、無言で促していました。

なつめは戸惑ったように、榊さんの方を見ていたけど、  
やがてわたしの方を向いて、ゆっくりと進み出しました。

わたしとなつめの、距離が縮まるにつれて、

わたしは、なつめに笑顔を向けたけど、

なつめはわたしに、口を結んで瞬きを繰り返しながら、  
途中から少し俯いたまま、何も言わずに歩いてきました。

そして、2人の距離が、1メートルまで縮まった時、  
わたしは俯いたままのなつめへと、おかえりって、  
声をかけたんです。

でも下を向いたなつめからは、

なんの反応もなくて、わたしはしばらく待ってから、  
もう一度、なつめに声をかけてみました。

そしたら、なつめは小さな声で、

「……つてきめてたのに」  
と言うのだけが聞こえて、わたしが聞き返そうとした時、  
「絶対泣かないって決めてたのに！」  
と叫んで、勢いよくわたしに抱きつくくと、  
一生懸命、声を上げないようにして、  
啜り泣きをしていました。

わたしはそんななつめを、抱き止めてあげてから、  
帰国後の最初の勝負は、わたしの勝ちだから、  
もう諦めて、泣いていいよって言うと、  
なつめは、わたしの名前を呼びながら、  
子供みたいに、泣き出してしまいました。

これで周りにいた人たちの視線を、集めちゃったけど、  
今はもう、そんなのどうでもいいって思って、  
わたしはなつめの頭を撫でて、背中をさすりながら、  
泣きじゃくるなつめを、抱きしめていました。

やっぱりなつめ、華奢だなあ。

ちっちゃくてスタイルの良い、かなよりも、  
なつめの体は細くて、実際には、  
そこまでは脆くないのは、判っているけど、  
あんまり手に力を入れると、壊れるんじゃないかって、  
気がしてしまいます。

泣きながら、わたしへと話しかける、  
なつめの言動は、何を言っているのか聞き取りづらくて、  
はつきりとは判らなかつたけど、多分、  
すぐく会いたかった、と

ずっと不安だった、と、  
もう会えないかもって思った、と、  
また会えて本当に嬉しい、だと思えます。

やっぱり、強がっていたただけだったんだね、なつめ。

わたしは、そんななつめの言葉に、  
相づちを返して、答えていました。

わたしの予想では、しばらく泣き続けて、  
少し落ち着いてきたら、  
最後には、強気のなつめに戻って、  
もう、これ以降は負けないうって、  
きつと言っただろうなと、思っていたんです。

だけど、落ち着いて来たなつめは、わたしへと、

「みな、私に勝ったつもりでしょ？」

自分の顔に、手を当ててみなよ」  
と言ってきたから、どうしても思いつつ、  
手を当てたら、頬が濡れていました。

あれ？　なんで？

「最初の勝負は、引き分けだからね、みな」

少し落ち着いた声になった、なつめは、  
自信ありげに、そう言いました。

どうやらわたしは、自分で気づかないうちに、  
泣いてしまっていたようです。

でもこれは、どう考えてもわたしの勝ちだと思っけど、わたしの顔を見ないで、泣いているのを当てた、なつめの直感に免じて、認めてあげることにしました。

わたしとなつめが、だいぶ落ち着いて、泣き止んで来た頃に、少し離れたソファに座って、わたしたちの様子を見ていた、榊さんがやってきて、  
「……そろそろいいだろ、帰るぞ」  
と言って、3人で駐車場へと向かいました。

もうこの時には、なつめからお人形みたいな感じは、あんまりしなくなっで、これなら明日には、強気ななつめに戻りそうだなと、感じて、一時的なものだと、思っではいたけど、確信はなかつたから、これでもう安心です。

車の中でなつめは、改めてわたしの姿を、特に髪を、見ていました。

すっかり短くなっで茶髪になつた髪を見て、  
「私の真似？」  
なんて冗談を言っでたけど、その後、どうして、髪を切つたのかを聞かれたから、わたしは門塾さんの件を、簡単に説明しておきました。

それを聞いたなつめは、真剣な表情で、  
「ごめん、みな。」

私をもつと早くに、手を打つていたら、  
「そんな事には、ならなかつたかも知れない」

と、謝られてしまったから、それは誰のせいでもないから、気にしないで欲しいと、伝えました。

わたしは、話題を変えようと思って、なつめの姿を見て、最後にもらった写真よりも、かなり体調が良さそうになってるって、言ったら、

「1月末の写真は、一番酷かった時だから、相当、やつれていたと思う。」

でもあれからは、回復に向かって、こうして、ミュンヘンから半日近い、

飛行機の長旅だって、出来るようになったから。

まだ、普通の人と同じように、運動するのは、厳しいけど、定期的な通院治療を続けるだけで、前みたいに、普通に生活出来るの。」

と、答えた後に、

「それで、みな、今日なんだけど、

今日は、私はまた検査があるから、

このまま、病院に行って、

検査を受けないと、いけないの。

わざわざ迎えに来てもらったのに、ごめんなさい。

私の検査の間、ずっと病院で待たせるのも悪いから、今日は病院に着いたら、柵に送らせるから。」

と、申し訳なさそうに、言っていました。

で、その後に、なつめから、

「帰国が急に早まったから、

みなさんの予定を聞けなかったけど、

明日はみなさんの、誕生祝いをしたいと思っているの。

何か予定があったのなら、



日を改めるけど、どう？」

と、言われて、今日はバイトも休みにしといたし、明日は元から何もないから、大丈夫だって伝えると、ほっとしたように、なつめは笑って、

「そう、良かった。」

実は、明後日からまたしばらくは検査入院で、明日が駄目だと、3月中は難しそうだから、本当に良かった。

出来る事なら、前に約束していた、

ドライブで遠出したいけど、

それは、もうしばらくは無理そう。

だから明日はうちのマンションで、お祝いさせて。

じゃあまた今日と同じように、朝に迎えに行くから、

待ってるよ、みな」

って、言いました。

わたしはこの後に、なつめに聞きたかったことを、

確認してみようと思って、色々もある、

聞きたかったことの中から、今でもよく判っていない、

門塾さんを追い詰めた、あの事件の日に、

榊さんを、凧高に來させていたのは、

一体何をしたのかを、尋ねてみたんです。

すると、なつめは淡々と、

「ああ、あれは簡単な事。」

私が門塾に苛められていたって、父に言ったの。

それと、私が帰国したら、

また凧高に復学したいと、思っているってね。

自分の経営する企業の、子会社の子供に、

自分の子供が、苛められてるって聞いて、

あの子煩惱で、私を溺愛している父が、黙っているはずはなかったから、まあ、予定通り上手くいったみたい。勿論、手を打ってくれた後には、ちやんと、お礼の連絡もしておいたよ。やっぱり、持つべきものは、財力と権力かしら、なあんてね」  
なんて言ってから、笑っていました。

その後に真面目な顔になった、なつめは、  
「私はね、みな。

権力だって、お金だって、  
それらが、どれだけあったって、  
手に入れられない物を、守る為なら、  
使えるだけ使うつもり。

それが、金持ちの我儘と罵られようが、  
横暴だと、他人から恨まれようがね。

それで、かけがえのない、  
大事な友達が、守れるのなら、  
いくら使っても、安いつて思えるから。

私にとって、父の資産を全て使っても、  
みなのような親友は、見つからないって、  
思っているの」

そう言っただけは、わたしの手を握った後に、  
照れ隠しらしく、恥ずかしそうに笑っていました。

こうして病院への道は、なつめと話をしていたら、  
すぐに時間が過ぎてしまい、気づいたらもう、  
懐かしい聖アンナの、4つの高層ビルがくっついた、  
大きな建物の近くに来ていました。

わたしは、6階の病院棟受付にある、特別病棟直通エレベーターの前まで、なつめを見送ってから、また降りてきた榊さんと一緒に、車で自宅まで、送ってもらいました。

この時に、ロビーで白衣姿のメガネをかけた、髪をまとめた女の人と、すれ違いました。

あれ、汐月さん？

わたしは思わず、声が出てしまい、その女の人は立ち止まって、振り返りましたが、その人は、汐月さんじゃありませんでした。

帰りの車内では、汐月さんのことが気になって、榊さんに聞いてみたら、

「……あんな女の事なんか、知るかと、そっけない一言で終わってしまいました。

そういえば、榊さんと汐月さんって、昔も仲は良くはなかったから、しょうがないか。

せっかく病院まで、来たんだから、もしまた会えたら、挨拶くらいしたかったけど、向こうは、そんなに暇じゃないか……

この後、自分では気づかなかったけど、疲れてしまったようで、いつの間にか眠ってしまい、榊さんに起こされたら、もうアパートの前でした。

榊さんは、わたしを起こした後に、  
「……今日は、朝から急がせたから、  
疲れさせたみたいだな、申し訳なかった。  
明日は、9時くらいに迎えにくるから、  
ゆっくり休んでくれ」  
と、少し心配させたみたいです。

わたしは大丈夫ですと、答えた後に、  
明日もよろしくお願いします、と伝えて、  
また病院へと戻って行く、榊さんの車を見送りました。

明日は、なつめも本調子になって、  
きつと強気なキャラに、戻ってるだろうから、  
わたしも、気を引き締めていかなくちやなあ。

だから今日は、しっかり寝て、  
明日に備えようと思います！

2011年 3月 その3(前書き)

変更履歴

2011/04/09 記述統一 1学期、2学期、3学期  
一学期、二学期、三学期

2011年 3月 その3

3月21日 誕生祝いと快気祝い

昨日は今日の為に、早く寝たから、  
普段よりも早く、目を覚ましてしまい、  
6時半には、もう起きていました。

榊さんは、9時に迎えに来るって言っていたから、  
それまでには、余裕で支度出来ます。

朝ご飯を食べながら、テレビのニュースを、  
何気なく見ていたら、知った名前が耳に入ってきて、  
思わず手を止めて、テレビに注目しました。

そのニュース番組で、トップニュースで報じていたのは、  
門塾製薬の、組織的な治験データ改ざん疑惑で、  
今朝、本社と社長や役員宅に、家宅捜索が入った、  
と言ったものでした。

門塾製薬って、門塾さんの親が経営者だったはず。

この時期にこのニュース、これって偶然なのかな……

ニュースによれば、過去に提出された治験データも、  
改ざんがあったとして、門塾製薬の薬全般の、  
使用と販売を当面制限し、全ての製品を回収するらしいです。

なつめ、この件で何か知っているかも知れない、

後で、メールで聞いてみよう。

このニュースも気になったけど、天気予報の前に、キャスターが読み上げていた、最後のニュースにも、また、聞き覚えのある名前があっただんです。

医師法違反の容疑で、

藪野石矢容疑者逮捕、です！

これって、藪野先生！？

その名前、本名だったの！？

それとも、警察にまで適当な名前を言ったの？

どちらにせよ、映像はなかったけどこの名前は、あの先生以外には、絶対あり得ないと思う。

先生、捕まっちゃったんだ……

しばらく身を隠すって、捕まって、

世間から離れるって言う、意味だったのかなあ……

門塾製薬のニュースも、びっくりしたけど、こっちの方が、もっと驚きました。

もし、何か縁があれば、面会とか、行けるのかなあ……

そんなことを考えていたら、次のコーナーの、

スニーカー対策特集が始まって、  
取材先はなんと、あの至心館でした！

神谷さんや、能都さんが、相変わらずの笑顔で、  
トレーニングの風景とか、インタビューに答えていて、  
神谷さんは良いんですけど……

能都さん、やっぱり語尾延ばして喋ってるよ、  
それじゃ、言葉が軽すぎです。

どう見ても、ふざけているようにしか見えない……

あれでちゃんと、宣伝になっているのか、  
まあテレビで出ただけでも、すごい宣伝になるんだろうから、  
大丈夫だとは思っけど、なあ……

なんて思っただけなら、能都さんがリポーターへと、  
「以前にいた、運動神経ゼロの、  
女子高生の学生さんでも、

それなりに身を守る技術が、身につきましたから、  
運動に自信がない方でも、是非一度ご連絡下さい」  
って言っただけ、手を振ってました。

これって、もしかしてわたしのことなんじゃ……

特集も終わって、天気予報になって、  
今日も天気は良いらしいのを、確認した後、  
時計を見ると、もう8時半になっていました。

この後、急いでご飯を食べてから、



支度をし終わった頃に、榊さんから連絡が入りました。

まだ時間には15分くらい早いけど、どうしたんだろう。

電話に出ると、榊さんは、

「……悪い、少し予定を変更した。

外に出歩いてても、寒くない格好をしてくれ。

時間は、予定通りに行く」

と言っていました。

どこかに出かけるのかなと、思いつつ、

まだ陽射しは暖かいけど、風は寒いと思って、

結局買い換えていないから、あんまり好きじゃない、

ダウンジャケットを、用意してから、

時間が近づいたので、それを着て外に出ました。

そしたら、ちょうどなつめの青い車が、

こっちへと、来るのが見えたので、

わたしはそのまま家を出て、下へと降りました。

わたしのところに停まった、車の車内を見ると、

中には、後ろの席になつめも乗っていて、

とりあえずわたしは、なつめの隣の席へと、

乗り込みました。

「……よし乗ったな、出発するぞ、

シートベルトを忘れるなよ」

わたしが乗り込んだのを、

バックミラーで確認した榊さんは、

そう言うと、車を出しました。

隣に座っているなつめも、ファーのついた、ベージュの冬のコートを着てて、膝の上には、白いマフラーを乗せていたので、榊さんは、わたしたちをどこか屋外へと、連れて行くつもりなんだって、思いました。

でも、どこへだろう、

昨日の話では、まだ遠出出来ないから、ドライブは無理だって、言ってたんだけど、思っている、なつめから、

「みな、急に予定が変わって、ごめんなさい。

今日の予定、榊が急に全部変えてしまったの。

どこに行くのかは、秘密だって言うし。

もう、何の真似なの、榊！」

と言われて、最後は榊さんへと、ちょっと怒りながら、質問をぶつけていました。

「……まあ、そう言うな。

今日は、三崎の誕生祝いと、

棗の快気祝いだから、こっちで段取りした。

目的地が、気に食わなければ、

その時また、文句を言ってくれ。

これから先は、少し飛ばすぞ」

そう言うと榊さんは、二車線の幹線道路を飛ばして、やがて、高速に入りました。

高速に入ったら、車のスピードはさらに上がり、

今まで、乗ったことない速さになっていました。

周りの車が、まるで止まっているみたいに、あつという間に、通り過ぎて行きます。

わたしが窓を、開けようとしたら、

「……風の巻き込みが、酷すぎるから、

窓は、開けない方がいい」

と言われて、少し顔色の悪くなっているなつめが、榊さんへ、何キロ出しているのかを聞いたら、

「……今は、250ちょい、だな、

チッ」

と言うのが、聞こえたと思ったら、

微かにサイレンみたいな音が、一瞬間聞こえました。

なつめは、素早く後を振り向くと、

「ねえ、榊？

今、覆面パトカー抜かなかった？

あの赤いの、パトカーでしょ？」

と言って、榊さんを睨んでいました。

わたしも後ろを見ると、はるか後ろに、

小さく赤い光が見えました。

「……今日は急いでいるから、後で処理しとく。

覆面か、面倒だな」

とぶつぶつ言いながら、なつめの言葉にも、

それほど、気にしていないようで、

相変わらずのスピードで、走り続けていました。

この後ももう2台、赤いライトをつけている、  
覆面パトカーがいたけど、これも抜いてしまい、  
最初のよりは、もう少しついて来たんだけど、  
結局最後は、引き離してしまいました。

あれって、この車をマークしていたみたいだけど、  
大丈夫なのかなあ……

それを見た、なつめは、

「榊、ここはアウトバーンじゃないの、

判ってるでしょ？

これ、私の車だって事も、判ってるの？

これを私達に、体験させたかったわけ？」

と言つて、とても怒っていました。

なつめ、怒るのはもつともなんだけど、  
ずいぶん神経質な感じの、怒り方だなあ。

何だかそれだけじゃ、ないような気が……

わたし的には、ジェットコースターみたいで、  
けっこう楽しいです。

それと、高速道路を走ってるパトカーは、  
どんなスピード違反の車にも、追いつくくらい、  
スピード出るって、思ってたんですけど、  
意外とパトカーって、遅いんだなって、  
思ったりもしました。

250kmって言ったら、新幹線くらいかあ……

わたしは興味本位で、榊さんに、  
もっとスピードは出るのかを、聞いてみると、

「……この車のスペックでは、最高285kmだ。

ここから直線だし、試してみるか？」

とバックミラー越しに、こっちを見てから言っ

わたしは何も答えていないのに、スピードは速くなりました。

わあ！　すごい速いなあ、

景色や車が、さらにすごい勢いで流れてく……

なんて思いながら、わたしは窓の外を見ていたら、

「ちょっと、ちょっと、榊！

もう、あ、危ないから、やめて！

あぶないでしょ！　ゆっくり走ってよ！」

と、本気で怖がっているなつめが、

かなり必死に、涙目で訴えていました。

「……棗、怖いのか？」

もうしばらく、頑張ってくれ。

これでも少し、時間が押しているんだ」

わたしは、なつめの手を握って、

多分、大丈夫だよって、何の根拠もないけど、  
慰めてみたら、なつめは、

「どうして、みなは、そんなに楽しそうなの？

ここは日本なの、ドイツじゃないの！

最高速度は、80kmなの！

200kmオーバーなの！

信じられない！」

と叫んで、とつても怖がっていました。

この後は、わたしにしがみついていたなつめを、頭を抱えるように、してあげて、スピードに反応して、なつめの血圧が、これ以上、上がらないようにしながら、わたしは外を眺めていました。

途中、カーブで車体がぐつと揺れて、今まで味わったことない、体全体が引つ張られるような横Gを感じるたびに、なつめはキヤーキヤー叫んで、わたしに、しっかりとしがみついていました。

わたしはジェットコースターとかは、全然ダメだけど、車はいくら速くても、平気みたいです。

どうしてだろうなあ……

榊さんはこの間、運転に集中しているかと思つたら、どこかに連絡していて、

話の内容からして、覆面がどうこうとか、交機がどうのとか、言ってたから、

多分、振り切ったパトカーの対策をしていたみたいです。

こうして、なつめの悲鳴が響く中、文字通りの、高速道路は終わって、一般道に下りました。

この道、前に見たことあるような気がする。

スピードが遅くなって、  
やっとわたしから離れて、顔を上げたなつめは、  
青ざめた怖い顔をして、何も言わずに榊さんを、  
ずっと睨んでいました。

そんなに怖かったのかな、なつめ。

それとも、信頼している人から、  
嫌がることをされたから、むくれているのかな？

とりあえず、体調には異常はなさそうだから、  
わたしはそんななつめへと、気づいたことを、  
この道に見覚えがないかって、聞いたんです。

「え、この道？

そういえば、前にも見たような……」

なつめは考えていましたが、思いつかないみたいです。

「……三崎、どうして気づいた？

前とは違う道だから、着かなければ、  
判らないと、思っていたのだがな」

榊さんは、そう言った後、

「これで棗にも判るだろう、到着だ」  
と言って、交差点を曲がると、そこは、

昔に棗と一緒に来た、なつめの別荘の入り口でした。

それを見たなつめは、

「どうして、ここに来るのに、

わざわざ遠回りして、あんなに飛ばして来たの！

いつもの道で来れば、あんな馬鹿なことしないで、  
来れたんじゃないの!？」

と言って、また怒り出してしまったけど、

榊さんは、全く動じずに、

「……いや、お前の定時検診を行うには、

どうしても、飛ばす必要があった。

いつもと違うルートで、遠回りしたのは急ぐ為だ。

お前を外に、連れ出す為の条件が、

1時間おきの検診と治療を、実行可能である事だった。

だから、あれだけ飛ばした、それだけだ。

棗は下りたらずくに、寝室へ向かえ。

医者は先に待機させてあるから、急げ」

と答えつつ、車を停めました。

別荘の前には、救急車が停まっているのが見えて、

榊さんの言葉に答えず、車を降りたなつめは、

出迎えて来た、2人の看護師の人に連れられて、

別荘の中へと、入って行きました。

「……5分オーバーか、始末書がもう1枚増えたな」

腕時計を見て、そう呟いた榊さんは、

車を降りて、わたしも車を降りました。

もうなつめは、別荘の中へと入っていて、

看護師の人たちもいません。

海の方を見ると、前に来た時のことを思い出しました。



たしかあの時は、二学期の終業式の日で、  
汐月さんも一緒だった。

あの頃のなつめは、すごくか弱くて儂げで、  
そして、もう諦めているみたいだった。

それが今ではすっかり変わったなあ……

なんて物思いに耽っていると、

「……10時か、この時間の診察と治療には、

大体、1時間はかかる。

それが終わったら、次は12時までには空くから、  
それまでは、中で待っていてくれ。

今回は、ここに来た時間は早いが、

1時間おきに、治療が割り込むから、  
あまり、ゆっくりはさせてやれない。

すまん」

と榊さんに、言われました。

わたしは榊さんに、ここにまた連れて来てくれるのが、  
榊さんからの誕生日プレゼントですかって、聞くと、

「……まあな」

と、短く返されました。

きつと、なつめを連れ出すのに、

相当苦労したんじゃないかって、思って、

わたしは、それを聞いてみたら、

「……そんな事は、気にしなくていい」

とそっけなく返された後、中に入るように言われて、  
榊さんの後に、ついて行きました。

この別荘、前回来た時は中には、12月だったけど、テラスで食事したのを思い出しました。

今回は、なつめの体調もあるから、室内で食事なんだろうなと、思いながら、榊さんに案内されて、リビングへと通されました。

室内は、夏場に来るリゾートホテルみたいな感じで、冬にはまいち、合っていませんでした。

でも、ちゃんと暖房は入っていて、玄関も廊下も、床下暖房で暖かいです。

これなら、テレビのCMみたいに、床で、ゴロゴロしていたくなります。

わたしは、リビングから繋がっている、前の時食事をしたテラスと、その先に見える、砂浜や海を、眺めていました。

そうしていたら、予定よりも早く終わったみたいで、11時になる前に、なつめが現れました。

なつめは、コートは着ていなくて、患者衣姿になっていました。

「みな、すこし早いけど11時にランチにしよう。

12時に、また私は検査があるけど、それは10分くらいで、終わるから、

その後、一緒に砂浜へ行こう。

1時間したら、戻ってこないと行けないけどね」

この後は、なつめと話しながら、

宅配サービスが到着するのを、待っていました。

なつめの話は、終始榊さんへの文句で、

来る時に飛ばしたのが、よっぽど怖かったみたいです。

わたしはなつめを、ひたすらなだめていると、

やっと機嫌も直ってきて、その後、

デリバリーが到着して、お昼ご飯になりました。

ランチのメニューは、パツと見はハンバーグ定食で、

2人とも全く同じものでした。

この時点で、なつめの表情は、

また少し、不機嫌になり始めていました。

早速食べてみると、何だか味が薄いです。

素材は、かなり良い物を使っているみたいだけど、とにかく味が薄いなあ、もしかしてこれって……

わたしはリビングの奥で、外を見ていた榊さんに、このメニューのことを聞きました。

わたしのメニューが、自分の特別メニューと、

一緒なのに気づいた、なつめも、

どうして、私と同じメニューにしたのかと、

榊さんに、聞いていました。

「……それは棗が普段食べている、食事と同じ物だ。もう少し、体調が改善してくれば、もっと普通の物が、食べられるようになるかも知れない。でも当分は今までと同じ、こんな薄味の、いまいち何だか判らない、料理を食べ続ける事になる。そんな味でも、この食事は、そこら辺の、レストランのメニューなんかより、ずつと値が張る食事だ。」

三崎、お前は棗の親友なんだよな？  
だったら、通常では滅多に味わえない、棗がどれだけ不満を感じても、食べざるを得ない、棗用の特別食を食べて、棗の日常を知ってもらう、いい機会だと思って、これを用意させた。  
これが、お前への俺からの誕生日祝いだ。

そして棗、お前に必要なのは、無意味に強がる事じゃない。  
弱みや泣き言を、さらけ出す強さってのもある。  
まずはそれが出来る相手を、お前に与えたい。  
それが、三崎だ」

榊さんはそう言い終わると、リビングを出て行きました。

「何言ってるの、榊は！  
ごめんね、みな、美味しくないランチで。  
勝手に予定を変えたと思ったら、  
こんなことするなんて、何考えてんの榊は！」

それに、私が無意味に強がってるとか、  
みなを私に与えるとか、  
何を偉そうに、説教してるの！  
本当にムカつく！」

なつめは、とても怒っていたけど、  
榊さんの言いたいことと、望んでいることは、  
わたしには、何となく判りました。

わたしは、ハンバーグを口に入れて、  
その味と食感を考えて、なつめへと、  
このハンバーグについて、感想を聞きました。

「え、このハンバーグの、味？  
うーん、ハンバーグ味？  
そんなのは、ないか。」

脂が少なく、少しパサついてる気がするけど。  
後は、塩分も少ないかな」  
と、一言ずつ考えながら、答えました。

このハンバーグ、わたしの感想としては、  
ささみで出来てるっぽいです。

とにかく脂肪がなくて、その分を、  
ソースのところで、補っているみたいだと言うと、  
なつめも頷いて、

「そうそう、ソースを絡めるか、  
スープと一緒にしないと、

わたしは症状で、唾液が出づらい時があって、

「たまに、飲み込めない時があるんだ」と教えてくれました。

なつめはいつも、自分だけが特別なものを食べて、普通の料理の味なんて、ほとんど知らないんだ。

だから、前にわたしがなつめに、食事の楽しさを、教えようとして、みんなで一緒に食べたり、なつめに作らせたりした。

でもそれ以上に、なつめと同じ物を食べて、その境遇を共有することで、なつめの孤独を、癒してあげられたんだって、今頃になって、気づきました。

榊さんは、わたしにこれを理解する機会をくれたのか……

この後は、なつめからもメニューについての、感想や不満や、意見なんかも出てきて、特別なご飯じゃなくて、普段のなつめのご飯でも、なつめは元気、とはちょっと違うけど、食事に興味を持って、食べることが出来たと思います。

なつめ自身も、途中からこのことに気づいて、もう榊さんの文句は、言わなくなっていました。

そして、ランチを食べ終えた後になつめは、「みな、もし良かったら、

また一緒に、ご飯を食べて欲しい、私と同じメニューを。

それで、食べながら一緒に話がしたい。  
「どうかね」

と、尋ねてきたので、わたしは、  
ひとつだけ条件として、後で榊さんに素直に謝ってから、  
ちゃんと、感謝の言葉を伝えたら、  
御馳走になるよって、答えておきました。

なつめはこれを聞いて、少し困った顔をしていました。

ランチの後は、なつめがまた短い治療に入るので、  
わたしは、ここで待っていると伝えたら、  
なつめから、一緒に来て欲しいと言われて、  
寝室へと行きました。

寝室では、ベッドに座わったなつめが、  
患者衣を脱いでから、下着姿になって、  
仰向けで横になったら、看護師の人が2人で左右から、  
何本も、色んな大きさの注射を、  
なつめの体中に、打っていました。

腕や足に打っている、小さいサイズのもは、  
予防接種とかで、打つような小ささだけど、  
胸やお腹に打っているのは、大きくて、  
なつめも、かなり痛そうです。

なつめは、これを見せるために呼んだのか……

なつめの真意は、聞いていないから、  
判ってはいないけど、わたしへと見せる為だと思って、  
わたしはずっと、なつめのことを見ていました。

左右合わせて、20本くらい打ち終わって、ひと通り終わったかと思ったら、今度は、うつ伏せになって、背中を向けました。

今度は背中を中心に、こっちはさっきよりは少なくて、左右で合わせて10本くらい、打っていました。

なつめの体の傷、ちょっとは良くなっている気がする。

手術の傷は、変わってないけど、色が変わってるところは、大きさが小さくなってる。

少しずつ、良くなってきたなあ……

治療が終わった後は、なつめと2人で、海岸へと散歩に行きました。

海風が少し吹いていて、ちょっとだけ肌寒くて、なつめに、寒くないかと尋ねると、

「コートとマフラーしてるから、それは大丈夫」と、答えた後に、

「ねえ、みな。

正直に、教えて欲しいんだけど、

さっき、私の体を見て、どう思った？」

と、質問されました。

わたしは、なつめの顔を見ながら、どう答えるかを、ちょっと考えてから、

これになつめの聞きたいことだと、思う答えを、



わたしは伝えました。

それは、良くなって来てる、ではなく、  
まだまだ全然治ってないし、ひどいと思う。

あざが治った程度じゃ、やっぱり意味がない、  
ひどい手術痕の傷を、きれいにしないと、  
とても、人には見せられない。

その体を見たらきつと、気持ち悪がられるし、  
すごい顔で見られて、避けられるだろうし、  
どんなこと言われるか、判らないと思う。

こう、伝えました。

なつめは、それを聞いて、

「そう、それで、どこが一番目についた？」  
と、さらに聞かれたから、わたしは出来るだけ細かく、  
見ていて思ったことを、なつめへと話しました。

なつめは、わたしの話を聞きながら、  
途中から少し笑い出して、どうしたのかと思って、  
わたしが聞くと、

「やっぱり、みなは、わたしの気持ちを、  
何にも言わなくても、判ってくれると思ったらね、  
そう思ったら、何だか可笑しくて。

何で私、こんなに可笑しいんだろうね、みな」  
と、言いながら、笑っていました。

それは多分、なつめにとって、

嬉しいこと、だったからじゃないのかなって、わたしは思ったけど、あえて言いませんでした。

この後になつめは、海の方を見ながら、

「私の体の事を、医者達に聞いても、

誰1人、思っている事を言わないで、

回復の傾向に、あるだとか、

整形外科の手術を受けられれば、後で綺麗に出来るとか、そんな、筋違いの答えしか返さない。

私の質問に、ちゃんと答えてくれたのは、みなと榊だけ。

ちなみに榊の答えは、見れたもんじゃない体だって。

十代の女の子の体を見て、本当に失礼。

この時は、まだ中学生だったから、

すぐくシヨックで、傷ついたら、

榊の事、殺してやろうかと思っただけど、

この感想が、私自身も一番正しいって思ってたから、

やっと見たままの、本音を言う人がいたって、

今では逆に、感謝してる。

もちろん、みなのもね」

と、わたしに話しました。

なつめ、すぐく文句を言っていたけど、

内心では、榊さんの言っていたこと、

ちゃんと判ってたんだって、思いました。

気がつくともう、戻らないといけない時間になっていて、

2人で急いで、別荘へと戻りました。

別荘に戻って来てからの治療では、

わたしは、最初から寝室にいて、なつめの治療を、ずっと見ていました。

さつきとは違う、1時間かかる治療と言っても、別に手術する訳ではなく、注射以外に、点滴みたいなのを、体のあちこちから、器械を使って、体内に入れてみるみたいでした。

なつめの説明では、どちらかって言うと、人工透析に近いって、言っていて、けっこう痛かったり、痺れがあったり、色々きついつて、ばやいていました。

こんなに細かい、治療への不平不満は、今まで言ってきたことは、ない気がする。

どうやら、なつめの心境に変化があったて、強がったり、ガマンしたりしないで、素直な気持ちで、わたしへと、伝えてくれるようになったみたいです。

この治療の最中も、ベッドに横になっているだけで、なつめの意識は、しっかりしていたので、わたしたちはずっと、話をしていました。

なつめが聞きたがっていたのは、自分の体の傷のことで、もっと具体的に聞きたがっていた、なつめへと、わたしは正直に、思ったこと、

お腹よりも、背中の方がひどいとか、背中の右脇が、少しへこんでるとか、

太ももが、左右で太さが違ってるとか、  
気づいたことを全部、伝えました。

この会話を、看護師の人たちは、  
聞いていない振りをしていただけ、  
わたしの言動に、何度が驚いていたり、  
こっちを睨んでいたりしました。

治療も終わり間際に、榊さんが部屋に来て、  
榊さんの話では、これ以上遅くなると、  
道が込んでしまい時間がオーバーする、とのことで、  
治療が完了したら戻ると告げて、出て行きました。

もう少し、ここにいたかったけど、  
仕方ないか……

この後、最後になつめは、

「今回はもまた、榊に連れて来てもらったけど、  
前に約束した通り、来年には免許を取って、  
私の運転で、ドライブに行くから。」

みな、それまで待っていて  
と言って、わたしの手を握って言ったから、  
わたしはそれに答えて、頷きました。

こうして、話をしていたら治療も終わって、  
もう、帰る時間になりました。

帰りの車の中では、なつめはやっぱり、  
とても怖がっていて、悲鳴を上げ続けていました。

でも行きとは違って、怖いってことを認めて、  
「怖いからやめて！」  
って、叫んでいたことです。

どうやら、強がったりごまかすのをやめて、  
素直に心境を、表すようにしたようです。

でも、どれだけなつめが叫んでも、  
榊さんは行きと変わらずに、飛ばしていて、  
料金所のところで、止まっていた、  
どう見てもさつき抜いた、覆面パトカーに見える車に、  
真後ろに来られた時は、どうなるかと思いました。

ここで捕まっちゃうの!?

まさか、現行犯逮捕とかないよね!?

なんて、心配したんだけど、  
榊さんは、気づいていないのか、  
何事もなく、また飛ばし始めて、  
後ろについた車は、料金所を抜けた後すぐに、  
また、引き離してしまいました。

でも今回はもう、赤いライトをつけて、  
追っても来なかったから、  
榊さんの方で、何か手を回したのかも知れません。

こうして、また300km近いスピードで、  
あっという間に、なつめのマンションまで戻りました。

まだ時間は、3時半だったけど、この後は、またなつめの注射の治療した後、夜には、病院へと行かなくちゃ行けないから、今日はここまでと言うことで、わたしのアパートの前まで、送ってもらいました。

車を降りる前に、なつめはわたしへと、一緒にご飯食べる条件を、今ここでやるからって言って、榊さんへと、少し照れながらだったけど、はつきりと、今日別荘へと連れて来てくれた、感謝の言葉とお礼を、いつもの口調じゃなく、しおらしい感じで、伝えていました。

でもそれを聞いた榊さんは、いつもと変わらず一言、「……………ああ」で、終わってしまいましたが、きっと、なつめの心境の変化には気づいている、はず。

せっかく、なつめが素直にお礼を言ったんだから、もう少し何か、リアクションがあっても、いいと思うんだけど、榊さんのキャラじゃあ、それはないのかなあ……………

今日は珍しく、榊さんが、考えていることを、ちゃんと話してくれたから、この日くらいは、会話の返事は変わるかと、思ったんだけど、そうでもなかったです。

この次に、なつめと会うのは、来週の金曜日に、退院する予定だから、

その時にまた、迎えに来てもらって、  
迎えに行くと、なつめへ約束しました。

そして、わたしも榊さんに今日のお礼を伝えて、  
なつめにも挨拶した後、車を降りて、  
走り去る車を見送りました。

なつめ、4月からは復学かあ。

学年は違っちゃうのは、少し残念だけど、  
でも、また一緒に登校出来そうだから、  
それでもやっぱり、嬉しいです。

来週の金曜日って、4月1日だから、  
まさか、エイプリルフールとか言って、  
嘘だったりしないよなあ。

とりあえずは、この退院の日を、  
楽しみに、待とうと思います。

2011年 3月 その4(前書き)

変更履歴

2011/04/25 記述統一 1ヶ所、二ヶ月、二ヶ月

1ヶ所、2ヶ月、3ヶ月

2011/09/26 誤植修正 話し 話



2011年 3月 その4

3月22日 みことからの訃報

今日は、終日バイトの予定が入っていて、朝ご飯を食べた後、携帯を確認したら、早朝に、みことから連絡が入っていました。

こんな時間に連絡してくるなんて、何かあったのかな……

留守電を確認すると、昨日の夜に、みことの伯父さんが、亡くなって、今日と明日の、葬儀に出るから、実家に行く、と言う報告でした。

これで、あの時に使った盃は、本当に、形見になっちゃったのか……

でも伯父さんとは、再会した時に話をしていたからか、留守電のみことの声は、とても落ち着いていて、普段と変わりなく聞こえました。

みことは最後に、終業式までには戻ると言っていました。

わたしからは、気をつけて行って来てって、メールを返しておきました。

伯父さんの立場があれだから、きつと普通のお葬式とは、

違うんだろっけど、とにかくみことには、  
無事にお別れを終えて、帰ってきて欲しい、  
そう思います……

3月25日 終業式

今日は、二年最後の登校日で、終業式です。

おとといと昨日にあった、みことの伯父さんのお葬式は、  
新聞に、小さな記事で載っているだけでした。

そのニュースよりも、門塾製薬の不正のニュースが、  
あれから毎日出ていて、次々と関係者が逮捕されています。

門塾さんは、どうなったのかな……

そんなことを気にしつつ、学校に行きました。

教室に入ると、今までずっと、

休学していた人たちの姿が見えて、

その人たちのところに、

みことが声をかけているのが、見えました。

あの人たち、みんなどうしたんだろう、

みことが話しているから、何か知ってそう。

後でみことに聞いてみよう。

予鈴がなって、みことが席に戻ってきた時に、話していたことを尋ねてみたら、

「あの事件の後から、今まで門塾に絡んで、学校に来なくなっていた生徒達の所に、何度が回っていたんだ。」

私がした事の謝罪と、もう学校は安全だから、是非出てきて欲しいと伝えて、

せめて今日だけでも、来てくれるように頼んでおいた。

今日は、全員ではないが、

来てくれた生徒もいて、挨拶していたんだ」と、笑顔で説明してくれました。

みこと、そんなことをしてたのか、全然、知らなかった……

それにしても、みこと、伯父さんの葬儀のすぐ後なのに、とっても、いい笑顔をしているなあ。

きっと、声をかけた人たちが、みことの呼びかけに応えて、来てくれたことが、嬉しいんだなって、思いました。

この後にわたしは、お葬式のことを聞こうとしたんだけど、臨時の担任の、山田先生が来たので、終業式の後に、改めて話をすることにしました。

山田先生は来て早々に、門塾さんが自主退学したと、本来の担任だった鈴木先生も、退職したことを伝えました。これを聞いても、クラスの人たちは、

連日やっている、門塾製薬のニュースもあって、驚いていると言うよりは、予想通りだったみたいで、それほど、ざわつくこともなかったです。

このHRの後は終業式で、体育館へと向かいました。

終業式は、あの日の事件にも触れずに、何事もなかったように進んで、終わりました。

終業式が終わって、教室に戻ってから、通知表と、試験の答案が配られました。

テストの出来は、予想よりもちょっと良くて、補習も大丈夫でした。

よかったよかった。

ちなみにみことの成績は、前よりも良くて、学年で30位になっていました。

これは、忍さんの言っていた、集中力の違いなのでしょうが……

HRが終わって、解散になった後に、わたしはみことに、お葬式の話聞いてみたら、みことは少しだけ、寂しそうな顔をしていたけど、話をしてくれました。

「元々私は、伯父貴の葬儀には出られないはずだったんだ。私の破門回状が回れば、もう今度こそ、

敷居を跨ぐ事は許されない。

だが伯父貴は私の破門を、自分の葬儀の後にするように、遺言を残してくれた。

だから、私の所にも連絡が来て、葬儀に参列する事が、許されたんだ。

私は伯父貴の親族として、葬儀に参加させてもらえた。

間宮 四良の姿も、同じ親族席にあったが、席も離れていて、一度も口を利かなかった。

死んだ伯父貴の顔は安らかで、月並みな表現だが、まるで、眠っているようだった。

通夜も告別式も、盛大に行われたよ。

喪主は、次期組長に襲名した、

伯父貴の右腕だった、幹部の椎名が執り行った。

この椎名と言う男は、幹部の中では一番の若手だが、体術の実力では、伯父貴の次に強かった男で、

私も何度か勝負したけど、勝てた事はなかった。

火葬の後の骨拾いで、伯父貴の遺骨は、

椎名の配慮で、私にも分骨してもらえる事になって、それを小さな骨壺に入れて、受け取った。

この後は、親族での形見分けだった。

私には、何も無いと思っていたから、

もうこっちに戻る支度をしていると、

椎名がやって来て、形見として、

家紋の入った、白木の鞘の匕首を差し出された。

堅気の人間には、ドスなんて不要なものなんだが、せっかくだからありがたく、受け取っておいたよ。

葬儀が、つつがなく終わった後に、  
椎名から、破門回状について聞かれた。  
破門ではなく、除籍通知にしても、  
構わないと言われたんだ。

破門は言わば組からの罰で、除籍の場合は、  
特に非はなくて、自らやめる場合に使われるものなんだ。  
椎名からの、好意の申し出だったが、  
私は伯父貴との約束通り、私への扱いは破門で、  
すぐに出して欲しいと伝えた。

私はあの日、伯父貴との言いつけを破って、  
伯父貴の元へと帰って来た。

これは伯父貴個人としては、喜んでくれたと思うが、  
組としては、許されない事だ。  
だから、ケジメをつける意味でも、  
伯父貴は破門にすると、言っていたに違いない。  
私は、伯父貴の遺志に従いたい。  
だから、約束通りに破門にしてもらった。

これで、臥龍会とも、伯父貴との縁も、  
切れてしまったけど、遺骨も形見もあるし、  
何よりも、伯父貴との絆は、  
私の記憶の中にあるから、大丈夫だ。

私は伯父貴の家の墓に、入る事は出来ないから、  
血縁の間宮の墓ではない、自分で墓を立てて、  
そこに、伯父貴の遺骨を納めようと思っている。  
そこにいつか、私も入れればそれでいい。

前に、誕生祝いのお話をした時、  
何か思いついたらと、話したよな。  
それで、私からのお願いなんだが、  
伯父貴の四十九日が済んで、喪が明けたら、  
私と一緒に、伯父貴の墓参りに来て欲しい。  
せめて墓前にでも、伯父貴にみなもの事を、  
紹介したいんだ」

これを聞いてわたしは、頷いて答えました。

みことと、そこまで話した時、  
みことの所へと、声をかけて来た人たちがいて、  
その人へと受け答えをした後に、みことは、  
「すまない、みなも。」

これから、入院中の生徒の所に、  
その生徒の友人と共に、通知表を届けに行くんだ。  
また近いうちに連絡する、それじゃあな」

と言って、その人たちと一緒に教室を出て行きました。

この日はかなもギルドで忙しくて、すぐに帰っていたから、  
この後わたしは、1人で帰ってきました。

明日からは春休みです。

そして1週間後には4月になって、  
もうわたしも、三年生になってしまいます。

なんだか、時間が経つのが早くて、  
いまいち実感がありません。

色々、考えたり、やらなきゃいけないことが、  
沢山あるけど、今はまだ考えたくないなって、  
思っています。

せめてこの春休みくらいは、何事もない日常を、  
満喫しようと思います！

3月28日 忍さんとの約束

今日は終日、航海堂のバイトでした。

久しぶりに忍さんが、午前中に顔を出したので、  
一緒にお昼を食べることになったんです。

何だかすごく懐かしいな、なんて思ってしまったって、  
どうして、そんな風に思うんだろうって、  
考えてみると、忍さんと前に会って話したのは、  
2週間以上前でした。

忍さんの方は、最近は週に1日くらいは、  
お店に出ているみたいだけど、  
わたしの方は、テスト期間中は休んだし、  
その後も、何日かバイトを休んでいて、  
どうも、日にちが合わなかったみたいです。

忍さん、最初にわたしと目があつた時に、  
「みなもちゃん、久しぶり」  
なんて、言っていました。



今日は、夕方にはもう出ないといけないって、  
言っていたから、特別にお昼休みを1時間延ばして、  
イタリアンのレストランで、ゆったりランチです。

忍さんは、お店に向かう途中で、

「イタリア人並みの、昼休みだね。

店長には内緒だよ、みなもちゃん」

と言っていて、怒られるからかなあって思って、  
尋ねてみたら、忍さんは首を振って、

「いいや、違うよ、怒られるのなんて、

別に良いんだけどさ、

減給されるのが、かなり痛くてね。

最近は、金銭的にピンチが続いててさ、

少し、借金している身分だから、

叔父さんには、頭が上がらないんだ」

と言って、苦笑していました。

お店に入って、席に着くと忍さんは、

「この席、前に私の昔話を聞かせたのと、

同じ座席だね、なんだか懐かしいな」

と言っていて、それを聞いてわたしも、

その時のことを、思い出しました。

あの日は絵画展に、連れて行ってもらって、

その後、ここで夕食をおごってもらったんだっけ。

あの日の忍さんの過去の話は、色々驚いたなあ、  
なんて思っていたら、忍さんは少し改まって、

わたしに真剣な顔で、話し始めました。

「ねえ、みなもちゃん、今日は何だか、元気がない気がするんだけど、

何かあったの？」

と聞かれて、わたしは精一杯、

普通にしていたつもりだったけど、

忍さんには、気づかれてしまったのが判って、その理由を話しました。

実は昨日の夜に、なつめからのメールが来ていました。

内容は、前に門塾製薬のことを聞いた回答で、

「門塾の件で、私から直接やった事は、

みなに話した事だけ。

門塾製薬に対する、ニュースの件は、

多分、父が仕掛けた事じゃないかと思う。

どんな企業でも、何かしら不正なんてあるから、

それを片っ端から 新聞や雑誌の記者を使って調べさせて、

ある事ない事、噂も含めて、リークさせたんでしょう。

因果応報、自業自得、だと思うけど、

そんなに気になるんだったら、確認させておくよ」

と、書いてありました。

あれは、なつめのことに対する、仕返しなんだ……

これって元を辿れば、わたしがなつめに色々と言ったから、その結果として、起きたことなんじゃないのかな。

わたしは、今までずっと被害者のつもりでいたけど、

もしかしたら、加害者なのかも知れない……

そう思ったら、何だか気が重くなってしまって、昨日から、それをずっと考えていました。

そのことを忍さんに話すと、忍さんのことだから、てっきり、明るく慰めてくれると思ったら、わたし以上に、沈んだ表情になってしまい、低いトーンで話し始めました。

「それはきつと、みなもちゃんのせいじゃない。みなもちゃんも、被害者なんだよ。門塾製薬が、摘発されることになった、大元にあるのは、私なんだと思う。」

そもそも、門塾の妹が2月の事件を引き起こしたのは、それより前の、虐待が原因としてあって、虐待に対する反動で、ああなったんだと思うんだ。で、虐待の原因が何だったかって言うと、門塾の兄のチームだった、皇を潰した事だと思うんだよ。全てはそこから始まっている。つまり、あの時に私がやった事が、全ての元凶なんだ。

私はあの時も、司を完全には守りきれなかったし、今回も、みなもちゃんを救えなかった。私は周りの人を、不幸にしてばかりだ」

そう言って、忍さんは申し訳なさそうに、弱々しくわたしへと謝りました。

こんなに沈んだ忍さんは、前にここで話した時以来だ。

忍さんは、今まで起きた事件を、  
全て自分が悪いんじゃないかって、考えている。

でもそれだったら、大乱闘の原因になった、  
忍さんの妹の司さんに、ちよっかいを出してきた、  
門埜さんのお兄さんが、本当の元凶だと思うけど、  
でもきつと、こんな犯人探してみたいなことは、  
どれだけやっても、無意味なんだと思う。

多分、門埜さんのお兄さんに聞けば、  
どう言う理由かは、判らないけど、  
何か理由があつて、その原因には、  
また別の人たちがいるんじゃないだろうか。

誰かから傷つけたり、誰かを傷つけられたり、  
こういうのは、ずっと繰り返されるもので、  
それはもう、仕方がないんじゃないかと思うんです。

だからそれを突き詰めて、誰かを犯人にするんじゃないかと、  
もつと前向きに、考えていくべきじゃないかって、  
思います。

何よりわたしが、忍さんに判って欲しいのは、  
わたしは、忍さんと関わったせいで、  
不幸になったなんて、思つてないし、  
これからだって、一緒に居たいって思つてる。

それは多分、亡くなった司さんだって、

同じように思っていたって、思う。

だから、そんなに自分を責めないで欲しいって、忍さんへと、言葉をかけました。

忍さんは、わたしの言葉を聞いて、まだ声の力は弱かったけど、少し笑ってくれて、「ありがとう、みなもちゃん。」

そう言ってもらえると、気が楽になるよ。

今日はみなもちゃんの、悩みを聞くはずだったのに、すっかり逆になっちゃったな。

でも今の言葉は、みなもちゃん自身にだって、当てはまるんだから、みなもちゃんこそ、

罪悪感を、感じる必要はなくて、気にしなくてもいいんだよ。

だから、みなもちゃんも気持ちを切り替えて、元気だして、ね？」

と、答えてくれたから、わたしは、忍さんの方こそ、と返して、やっと、2人とも笑顔になれました。

この後わたしと忍さんは、お互いに気持ちを切り替えて、自分自身はもう責めないって、約束し合った後に、ランチを、すごくいっぱい注文して、お腹いっぱい、食べまくったら、そしたらかなり、元気が出てきました。

決して、忘れられた訳ではないけど、でもこれで、気持ちは切り替えられたって気がします。

午後は、すっかりいつも通りで、  
バイトに専念出来たし、忍さんも、  
いつもの調子に戻っていました。

これからは、忍さんとも約束したし、  
出来るだけ、思い悩まないようにしよう、  
そう、心に誓いました。

3月30日 天罰

春休みも、後4日で終わりです。

休みに入って、気温もかなり上がっていて、  
もう春は間近です。

そのせいか、それともすっかり不安がなくなった反動なのか、  
まさに、春眠暁を覚えず、で、  
毎日やたらと、眠くて眠くて、眠いです。

夜も早く寝てても、朝も7時には起きれなくて、  
毎日、朝寝坊しています。

航海堂のバイトの時間までには、間に合うように、  
寝坊しているから、誰にも迷惑はかけてないけど、  
気が緩みきってるせいかなあ……

今日は天気は良くて、風も南風で暖かくて、  
絶好の散歩日和です。

せっかくだから、荏田川まで足を伸ばして、桜並木を見に行きました。

さすがにまだ、お花見に来ている人もいなくて、散歩したり、ジョギングしたりしてる人が、すれ違う程度です。

一応並木道を端から端まで、見てきました。

桜はまだ蕾か、ほんの少しだけ、咲き始めている木も、ちょっとだけあるけど、桜が満開になる、お花見の時期は、4月上旬くらいだと思いました。

やっぱり、桜の散り際が見たいから、4月中旬にでも、見に来よう。

この後に、ヒヨウちゃんのいる御家河へと向かいました。

土手の道を、自転車で走っている時、白い大きな車が、通り過ぎるのを見て、一瞬、ケイゴさんの車かと思って、振り向いて見たら、別の車でした。

実は昨日、ケイゴさんに連絡してみたんです。

でも、留守電になってしまって、直接話は、出来ませんでした。

ケイゴさんは、いつこつちに戻って来るのかなあ。

ケイゴさんには、お礼以外に、  
聞いてみたいことが、あるんだけど、  
いつ聞けるかな……

そんなことを、考えながら、  
目的の場所まで、走っていきました。

絵を描いていた、いつもの場所に着くと、  
いつも通りにやって来た、ヒヨウちゃんへと、  
家から持って来た、ご飯と水をあげました。

ヒヨウちゃんは、今日は珍しく、  
ご飯よりも、わたしの顔を見上げていて、  
わたしに興味があるっぽいです。

ヒヨウちゃんは、しきりにわたしの顔を気にしながら、  
ご飯を食べていました。

もしかして、髪が短いからかと思ったけど、  
この前に、髪を短くした後にも、  
何度か来ているから、それじゃないし、  
ご飯もいつも通りだから、ご飯に不満があるって訳でも、  
ないと思うけど、どうしたんだろう……

まあ、いいか。

わたしは、ヒヨウちゃんの背中を撫でながら、  
河の方を眺めていました。



今日はなんとなく、父からの手紙を見れそうな気がして、いつもは学校のカバンに、入れていた手紙を、トートバッグに入れて、持ってきていました。

お父さんはわたしに、最後に何を伝えようとしたのか、これを読めば、判るはずで、絵を消してしまった理由も、きっとここに書かれている、それは、間違いないと思っています。

わたしが手紙を手にしたら、ヒョウちゃんは、手紙に関心を示していて、「ご飯を食べるのもやめて、じっと手紙を見ていました。」

威嚇じゃなくて、1ヶ所をじっと見ているのは、わたしの記憶では、普通に元気な時のヒョウちゃんでは、あまり見たことない気がします。

そんなヒョウちゃんを見た後に、わたしは、手紙の封を開けようとして、視線を、ヒョウちゃんから手元の手紙へと移した時、すごい眠気と同時に、目の前が暗くなって、座っていたのに、立ち眩みのような眩暈がしました。

あ、これは眠いんじゃないんだ、なんか頭の中で、音がしたような、なんだろう、これ。

この時、手足も力が入らずに、手紙を落としたのが判ったけど、指にも力が入らず、

指からすり抜けていくのを、感じました。

この後真っ暗になった途端に、  
今までの出来事が、色々と浮かんできたんです。

これって、もしかして、走馬灯……

その中には、忘れていたことが、  
ひとつ入っていたんです。

それは藪野先生に、精密検査を受けろって、  
言われていたことです。

今それを思い出したけど、  
多分、少し遅かったみたいです。

よくよく考えれば、門埜さんが、  
頭蓋骨に、線上骨折だっけ、多分頭の骨に、  
ひびが入ったんだと、思うんだけど、  
それだけのすごい衝撃が、あつたんだから、  
わたしの方だけ無事ってことは、ないよなあ。

色々あつて、すっかり忘れてたけど、  
これって、自業自得、なのかなあ。

そういえば、なつめのメールに、  
門埜さんたちのことだったげけど、  
因果応報って、書いてあつたな……

忍さんとは、気にしないって約束したけど、

門塾さんを、最後に追い込んだのがわたしなのは、やっぱり、変えられない事実なのかも知れない。

それは、どんな理由があつたとしても、追い詰めた罰を受けないと、いけないのかも。

門塾さんのお兄さんは、忍さんに半殺しにされた。

忍さんは、交通事故で司さんを失った。

わたしは、周りの誰も失わずに済んだけど、伸ばしていた髪を、失った。

でも、代償はこれだけじゃ、足りなかったのかも知れない。

やっとこれから、平和な学生生活が過ごせるって、期待してたんだけど、そんなに世の中、甘くない、みたいです。

これは、門塾さんを酷い目に遭わせた、天罰……

そんなことを、考えながら、わたしは、意識を失いました……

2011年 ?月

?月???日 真つ暗闇

結構長い時間、思い出していました、  
自分の高校時代のこと。

今までの話は全部、わたしの頭の中にある思い出です。

高校生になる時、思い切ってブログでも始めようって、  
思ったけど、やっぱり出来ませんでした。

それまでも、平凡な人生しか送っていない、  
わたしのことなんて、ブログに書いたってつまんなくて、  
誰も見てくれそうもないし、やっぱり恥ずかしいから、  
だから結局、やらなかったんです。

でも、今にして思い返すと、  
すごい事件もあったし、それなりに面白かったのかも、  
なんて、今さらながら思います。

でも、それを思い出すのも、  
ついに終わっちゃったなあ……

今のわたしには、こんなことしか出来ません。

3月末に、河原で意識を失ってから、  
何日か経っていて、今はもう4月、  
だと思いません、多分。

もう、そのくらいは経ってるんじゃないかって、  
思うんです。

わたしは目を覚ましたけど、そこは、  
河原でも、家でも、病室でも、天国でもなくて、  
真っ暗なところでした。

目を開けているつもりだけど、何にも見えない。

そもそも、目を開けたのかも良く判らなくて、  
自分の体の感覚は、まるでありません。

やっぱりわたし、死んじやったんじゃないかって、  
思ったりして悲しくなってきたも、涙も出ません。

何も見えないし、何も聞こえないし、  
何も触れないし、何も感じない。

ただ、わたしの意識があるだけなんです。

今頃みんな、心配してるのかなあ、  
それとも、こんなことになっているのも、  
気づいてもらえていないのかな……

自分の体がどうなっているのかも、  
全く判らない。

病院に運び込まれて、眠っているのかなあ、  
それとも、御家河の土手に倒れたままなのか、

もしかして、土手の下の茂みに落ちちゃって、  
まだ、誰にも見つけてもらってないとか……

ああ、そんなの嫌だよ……

そう言うのも、どれだけ考えたって、  
今のわたしには全然判りません。

だから仕方なく、ずっと自分の高校生活を、  
振り返っていました。

でももう、それも終わってしまった。

こんなに長い間、時間を潰したのに、  
何にも変わらなくて、真っ暗なまま。

あと、出来ることと言えば、眠ることだけ。

これをしたら、消えてなくなってしまうって、  
本当にそこで、終わってしまいそうだったから、  
ずっと、頑張って避けてきたんだけど、  
もう、この眠気に耐えられそうにありません。

まだやりたいこと、結構残ってたんだけど、  
わたしの人生、これで終わり、なのかなあ……

2011年 ??月

??月??日 思い出せない夢

あれからずいぶん、時間が経ちました。

最初に眠った時は、

きつともうダメなんだって思ったんだけど、

でも実際には、眠っても何事も起きませんでした。

消えもしなかったけど、良いことも何も起きません。

それからは、そのまんまですけど、

起きていられる間は、起きていて、

眠たくなったら、寝てました。

最初の頃は、今は何日目とか数えてたんですが、

途中で、そんなことしても意味がないって思って、

数えるのも、もうやめてしまいました。

だから、どのくらい時間が経っているか判らないけど、

もう何ヶ月も経っている気がします。

眠ってしまうようになってから、

気のせいかも知れないけど、少しずつ、

起きていられる時間が、短くなってる気がする。

その代わりじゃないんだらうけど、

何か夢を見ているような、そんな気がします。

でも、起きた時には覚えていなくて、何かを見ている気がするのに、何も思い出せないんです。せめて夢の中でもいいから、誰かと会いたいと思って、必死に思い出そうとするけど、やっぱり思い出せません。たぶん誰かが出てきてて、わたしに何かを言っている、そんな気がするんだけど……

だけど、その姿も思い出せなくて、声も聞いたことある気がするけど、判らないんです。

これって、もしかして、誰かがわたしに呼びかけているのが、夢の中に出ているんじゃないかって、思うんです、というか、そう信じたい。

でも、そう思えば思うほど、わたしがそうであって欲しいって、願っていて、そうだって、思い込んでいるだけなんじゃないか、そう信じたいだけかもって気もします。

でも、思い込みでもいいから、それが本当じゃなくてもいいから、嘘でも幻でもいいから、誰かに会いたい。

ひとりぼっちは、すごく寂しいです……





201?年 ??月 その1(前書き)

変更履歴

2011/06/15 記述追加 わたし自身のことや、倒れてか  
ら今までのことを話してから、追加

201?年 ??月 その1

??月??日

またあれからずいぶん、時間が経ちました。

眠り始めた頃よりも今の方が、何十倍も早く、  
時間が流れてしまっている気がします。

そしてやっぱり、こうして目を覚ましている時間は、  
どんどん短くなって行って、  
もう、何年も過ぎてしまっている、  
そんな気がして仕方ありません。

でもその代わりに、眠っている間の夢は、  
どんだんはつきりしてきています。

今では目が覚めてからでも、ちゃんと覚えている夢も、  
良く見るようになりました。

でもそういうのは、ほとんどが、  
怖かったり、辛かったり、悲しい夢ばかりです。

??月??日 予期せぬ再会

気がつくところには、さっき座っていた土手の下の草むらで、  
わたしは仰向けになって、空を見ていました。

どうやらわたしは、土手を転がり落ちてしまった後、  
気を失ってしまい、眠ってしまったようです。

あれから結構、時間は経っているみたいで、  
空はそろそろ青から赤へと、変わり始めていました。

ヒョウちゃんも視界には見えず、どうやら、  
落っこちたわたしを見捨てて、帰ったみたいです。

ご飯あげてるのに、あの白状者め、  
もうご飯あげないぞ。

それは冗談として、早く帰らないと。

そう思って、体を起こそうとしたんだけど、  
全然動かないのに気づきました。

体を起こすどころか、指一本、瞬きひとつ出来ません。

あれ？ これってどう言うこと!？

さっぱり訳が判らず、ジタバタと、  
実際には出来ていないけど、していると、  
土手の上をこっちに向かって走って来る、  
自転車が1台見えました。

あ、あれはみことだ。

わたしは必死に声を張り上げているつもりなのですが、

何にも声は出ていなくて、みことを呼び止められません。

みことは、わたしがさっきまで座っていた、  
土手の辺りで止まりました。

もしかして、心の声が聞こえたのかも！

と思ったらそうではなくて、置きっぱなしになっていた、  
わたしのトートと自転車に気がついたただけでした。

なあんだ、でもこれで見つけてもらえる！

そう思ったんですが、こっちの方を眺めていたみことは、  
何故か、わたしの名前を呼びながら、  
すぐに自転車に乗って、遠くへ離れて行ってしまいました。

下にいたんだけど、

気づいてもらえなかったのかなあ……

真下に落っこちているとは思わないか、普通。

わたしの視界の周りは、ススキで覆われているから、  
多分だけど、草むらの真ん中に落ちてしまつて、  
上からは見えづらいのかも知れない。

みことがいなくなつてから、しばらく時間が経つて、  
空がすっかり茜色に染まつた頃に、わたしの所へと、  
誰かが近づいて来る足音が聞こえてきました。

きつと、みことが戻つてきてくれたんだ！

そして段々と音は近づいてきて、  
わたしの足元の方から、人影が現れました。

でもそれは、みことではなく、  
とても意外な人でした。

え、なんで!?

何でこんなところに門塾さんがいるの!?

なぜか、退学したはずなのに、  
夙高の制服を着た門塾さんは、

あの時、わたしが切った髪型のままで現れました。

右眼には眼帯を付けていて、

右手には、みことに攻撃していた時に持っていた、

髪を切った時にも使った、黒いナイフを持っていました。

門塾さんはわたしを見つけると、

嬉しそうに左眼を細めて、笑顔を浮かべていました。

あのナイフ、何で持っているの!?

あの時のナイフはたしか、あれ?

どうしたのか思い出せない!

今はそれどころじゃない、だれか助けて!

わたしのそんな思いも、誰にも通じなくて、

門塾さんはゆっくりと、倒れているわたしをまたいで、お腹の上に、馬乗りになりました。

その後、右眼の眼帯を外してから、体を伏せて来て、わたしの顔の目の前に、自分の顔を近づけました。

眼帯をしていた右眼は閉じられていて、骨折したって言う傷は見当たらなかったけど、やけに窪んでいる瞼が、とても不気味でした。

口元だけで笑った門塾さんは、わたしの目の前で、閉じていた瞼を開きました。

そこには、何もありませんでした。

あるはずの目がなくて、ただの真っ黒な穴になっていて、その奥には何かが、動いているような

わたしは気分が悪くなって、目を背けたかったけど、それも出来ず、気持ち悪いのと、あまりにも怖いのが混ざって、吐き気がこみ上げてきました。

でも体は動かなくて、吐くことも出来なくて、ただずっと、門塾さんの眼に空いた穴を、見させられ続けているしかありません。

それがどれだけの時間だったのか、

数秒だったのか、何分もあったのか、全然判らなかつたけど、門塾さんは気が済んだらしく、  
瞼を閉じて、眼帯を戻しました。

この後門塾さんは、体を起こしてから、  
左手でわたしの顔を押さえると、  
右手に持っている黒いナイフを、  
わたしの額の上に移動させました。

そして、冷たい笑みを浮かべたままで、  
声に出さずに口だけを動かして、  
ゆっくりと一文字ずつ、何かを言いました。

『こ』

『れ』

『の』

『お』

『か』

『え』

『し』

門塾さんは、こつ言っただと思つ。

目を奪われた『お返し』をするって。



わたしは必死で、門埜さんから逃れようと、もがいたり、声を上げようとしたけど、何をしても、体は全然動きません。

門埜さんの持つナイフの黒い刃は、ゆっくりと、わたしの右目へと近づいてきます。

だけどわたしは、目を瞑ることも出来なくて、近づくナイフの切っ先が、目の前まで来て、さらに目に触れた、その瞬間

わたしは目が覚めました。

??月??日 わたしと私

意識を取り戻すと、そこは真っ暗な病室で、就寝時間に入っているみたいでした。

暗い病室でベッドに眠っていて、そして今日目を開けた、そんな『私』を、『わたし』は見ていたんです。

わたしは自分の体を、もっと高い場所から見下ろしていて、寝ていた私自身を、真上から見えていました。

これだけなら幽体離脱だって、思うだけなんだけど、なぜかわたしの体は今、目を開けてわたしを見ているんです。

普通こういう時って、体の中には魂とかいなくて、死んじゃってるみたいに、動かないものじゃないの!?

わたしが混乱していると、

不思議そうに、こちらを見ていた私が、

「お前は誰だ」

って、声をかけてきたんです。

ええ!?

私のくせにわたしが判らないって、どう言っこと!?

と言うか、そっちこそ誰!?

とか思ったけど、今の状況を考えると、

体が向こうに乗っ取られてるような気がして来ました。

ここは、慎重に話をしなくちゃと思って、

わたし自身のことや、倒れてから今までのことを話してから、

あなたが入っているのは、本当はわたしの体で、

あなたは誰なのかも聞きました。

わたしの話を、黙って聞いていた私は、

意外と物分りの良い人?

だったみたいで、話の内容には納得していた様でした。

だけど最後の質問には、自分でも判らないみたいで、

自分には記憶がないから、誰かは判らないとか、

どうもわたしには、良く分からない説明をした後に、

わたしの望みは、何なのかと聞かれました。

わたしは少し考えて、目を覚ますことって答えたら、  
「それなら、願いは叶ったのか」  
と言われたので、私は首を振って、  
こういう風に目を覚ますことじゃなくて、  
わたしは、その体に入って目を覚ましたって、  
伝えました。

その後に私からは、お前は召喚者なのかとか、  
器の力がどうか、生贄とか糧とか、  
さらに意味の分からないことを、  
いくつも質問されました。

その質問は、わたしには何が何だか判らず、  
全部、判りませんとしか答えられません。

わたしの体に入っている人は、わたしに何を聞いても、  
無駄だと諦めたみたいでしたが、  
どうも、今の質問に答えられないと、  
わたしの望みは叶えられない、  
みたいなことを、言われてしまい、  
どうしたら良いのか判らなくて、  
だんだん、悲しくなってきました。

もう、このままわたしの体は、  
この人が入ったままになってしまい、  
わたしはお化けみたいに、こうやって、  
宙を漂っているしかないの？

こんな形で、目を覚ますのなんて、

わたしは望んでない……

こんなの、ぜったいいやだ……

わたしがそう思っていたら、ずっと黙っていた私から、

「そう望むのであれば、どうなるかは判らないが、

とりあえず試してみよう」

と言われて、わたしへと手を伸ばしてきました。

わたしも、自分の半透明の手を伸ばして、

私の手を掴もうと頑張りました。

今のわたしの体は、上に登るのは簡単だけど、

下に降りるのはすごく大変で、

まるで何か見えない壁でもあって、

その壁を押しているみたいに、全然進みません。

だから伸ばした腕も、もうちょっとのところでは届かなくて、  
全力で頑張っても、あと1cmが縮まりません。

もう駄目なのかも知れない、と思ったら、

わたしの体が、勝手に浮き上がってしまった、

私の指との距離が広がり出してしまい、

諦めたら、本当に駄目になるんだと判って、

もう本当に、必死で頑張りました。

そしたら、隙間はまた少しずつ縮まって行って、

そしてわたしと私の中指の指先が、

ほんのちよっとだけ、かすりしました！

その瞬間に、わたしは自分の体に引きずり込まれて、天井を眺めている視界へと変わり、わたしと入れ替わった、私らしい半透明の人影が、わたしの上に、浮いているのが見えました。

わたしはその人影に向かって、お礼を言おうとしたけど、言い終える前に、人影は消えてしまいました。

戻るのを手伝ってもらって、

ちゃんとお礼を言えなかったのは、残念だけど、これで、わたしは助かったんだと思ったら、急に眠くなってきてしまいました。

何となく、ここで眠っちゃいけない気がして、ナースコールを押そうとしたけど、伸ばした手はボタンに届かず、眠りに落ちそうになって、意識がなくなりかけていました。

で、この時に、寝ちゃダメだ！  
って思ってた起きたら、本当に目が覚めました。

??月??日 束の間の幸せ

周りから、わたしの名前を呼ぶ声がして目を開けると、そこはいつも寝ている、家の4畳半の寝室でした。

聞こえていた声は、布団に寝ているわたしを、取り囲むように座っている人たちの声でした。

そこには、葵ちゃん、かな、なつめ、みこと、  
それと母がいました。

みんな、わたしが目を覚ましたことを喜んでいて、  
わたしもみんなに、心配かけたことを謝ってから、  
お見舞いに来てくれた4人に、お礼を言いました。

みんな、いつから来てくれていたのかが気になって、  
それを尋ねてみると、葵ちゃんが、  
先輩が目を覚ますちょっと前ですって、答えました。

けっこう良いタイミングで、  
わたしは起きたんだなって思いながら、  
その答えに返事をする、お客さんが来て、  
部屋に入って来ました。

それは、忍さんと、店長でした。

忍さんから、店長も今日は時間があつたから、  
一緒に見舞いに行こうと、誘ったんだって、  
挨拶しながら説明されました。

忍さんだけじゃなくて、店長まで来てくれるなんて、  
何だか申し訳なくて、わたしは2人に、  
また心配かけてしまったことを謝りました。

2人とも、気にしないでいいと言ってくれて、  
目が覚めて本当に良かったねと、声をかけてもらい、  
わたしはそれに対して、返事を返していました。

わたしは自分が、どのくらい眠っていたのか、それを尋ねると、今度はかなが、それは心配しなくても大丈夫だよと、答えました。

だったら、思ったほど時間は経ってなかったのかと、安心していたら、また誰かが入って来ました。

誰かと思ったら、今度は榊さんと汐月さんで、2人はなぜか、口論しながらやってきました。

なつめが、わたしが目を覚ましそうだから、2人に来て欲しいって頼んだと、言っていました。

部屋に入って座ると、2人のケンカはやんで、2人とも、わたしの目を覚めたことを、喜んでくれていました。

わたしはどうやってここに運ばれたのか、それを尋ねると、今度はなつめが、まあいいじゃない、目が覚めたんだから、と言われました。

まあそれはそうだけど、教えてくれても良いのになと、反論しようとした時、また誰かが入って来ました。

次に来たのは、神谷さんと能都さんで、今度は榊さんが、俺が呼んだと、言葉少なく説明しました。

2人はわたしに、久し振りと言った後に、  
たまたまこつちに来る用があつて、  
榊から連絡があつたものだから、  
その帰りに立ち寄つたんだと、  
神谷さんが説明しました。

この2人も、目が覚めて良かったと言つてくれたので、  
わたしもお礼の言葉を返しました。

2人との会話の後、今は一体いつなんだろうと、  
気になつて尋ねると、今度はみことが、  
それはすぐに判ると、答えました。

それってどう言う意味かを尋ねたけど、  
わたしの声と重なるタイミングで、  
また誰かが入つて来ました。

それは、何とケイゴさんと藪野先生でした。

ケイゴさんはともかく、たしか藪野先生、  
捕まつてたはずじゃ、と思つた時、  
汐月さんが、ケイゴさんに連絡して呼んだと言つてから、  
次にケイゴさんが、ジジイは仮釈放中で、  
俺が連れて来たと答えました。

まさかこの2人にまで会えるなんて、  
とてもびつくりしました。

2人からも、目が覚めて良かったと言われて、  
それぞれにお礼の言葉を返しました。



わたしはここで、妙なことに気づきました。

うちの寝室は4畳半で、タンスが2つと、クローゼットハンガーもあって、わたしが布団で寝ているから、空いているスペースは3畳もないのに、どうやって12人も座ってるんだらう？

わたしは改めて、部屋を見回して、妙に広がっているみたいに見える寝室を見て、不安を感じながら、尋ねました。

これって、夢じゃないよなって。

すると母が一言、わたしへと答えてから、その後にもみなも口々に、同じ言葉を言いました。

これは、夢じゃないって。

これは夢じゃない。

これはゆめじゃない。

いえ、正確にはこうでした。

これはゆめじゃない？

そう言われて、わたしは目が覚めたんです。



201?年 ??月 その2

??月??日 最後のご飯

頭や体中のあちこちが痛くて、目を覚ますと、そこは、河原の草むらでした。

どうやらわたしは、手紙を読もうとした時に、貧血が何かで、眩暈を起こしてしまって、土手の下に転げ落ちたみたいです。

それにしても、体中が痛い。

どこも切ったりはしてないみたいだけど、あちこち、ぶつけてしまったらしくて、全身いろんなところが痛みます。

でも、大したケガはしてなさそうだと思って、立ち上がると、目の前が真っ暗になりました。

良く見ると真っ暗じゃなくて、真っ黒い壁。

と言うか真っ黒の毛の壁です。

何かと思って後ずさると、それは、大きな大きなヒョウちゃんでした。

立っているわたしの目の高さが、座っているヒョウちゃん、半分くらいしかなくて、

私の目の前は、ヒョウちゃんの胸の位置です。

全長5mくらいはありそうな、  
とつても大きくなったヒョウちゃんが、  
目の前に座っていました。

わたしはどういうことが判らなくて、  
びっくりして、大きなヒョウちゃんを見上げると、  
ヒョウちゃんはこっちを見ながら、

「じはん」

って言ったんです。

え、ご飯？

ああ、そう言えば今日は何にも持ってこなかったなあ……

って、そうじゃなくて、

なんで普通に言葉を喋ってるの!？

その前に、どうしてこんなに大きいの!？

そんな疑問が浮かぶけど、

今は何をどうすれば良いのか、良く判らなくて、  
とりあえず、ヒョウちゃんへと、

ご飯は持って来てないって、説明してみました。

そしたらヒョウちゃんは、

大きな頭を傾げて、しばらくわたしを見ていました。

言葉を話したんだからきつと、わたしの言葉も、

多分、判つてくれるんじゃないかと思つただけで、  
ちゃんと通じたかなあ……

なんて思っていたら、ヒヨウちゃんは目を細めて、  
疑っているような顔をしてから、

「うそだ、ごはん、ある」  
つて言つたんです。

今手に持っているのは、読もうと思つていた父の手紙だけ。

まさかこれを、ご飯だと思つていないよね？

念の為に、ごはんつてこれのことかつて聞いてみると、  
ヒヨウちゃんは、大きな頭を横に振っていました。

やっぱり判つてるよねえ……

この時のわたしは、トートも持っていないから、  
食べ物を容れられるお弁当のような入れ物は、  
持つてないし、入るところもありません。

わたしはヒヨウちゃんに、  
あげられるものは持つてないよつて、言つと、  
ヒヨウちゃんはわたしへと顔を近づけてきて、  
大きな鼻で匂いを嗅いでから、

「ある、ここ、まるいの」  
と大迫力のアップで言いました。

口を開けた時に見える歯は、  
トラやライオンよりも大きくて、

すごい迫力です。

なんか食べ物の匂いでも、ついているのかと思って、一応確認してみると、なんか生臭いです。

念の為に、パーカーのポケットを確認すると、入れた覚えがないのだから、もちろん何も無い……

と、思ったらポケットに何か、掌に収まるくらいの、丸いものが入ってます。

ヒョウちゃんの言ってたのはこれかな？

でもこれ何だろう、そもそも普段から、ポケットに物は入れないから、何かを入れたまま、忘れてるってことも、ないはずなんだけどなあ……

そう思いながら、それをポケットから出しました。

それは、白くて丸い、

尻尾みたいに、植物の根みたいな紐のついてる、黒っぽい色の丸い模様の入った、

人間の眼球でした。

なんでこんな物がポケットに入ってるの!?

これは誰の

まさか、門塾さんの!?

わたしは気持ちが悪くて、  
それを投げ捨てようと思いました。

でもそれは手にくっついてしまい、  
どんなに振り回しても、全然離れません。

それに何だか、やけに暖かくて、  
根みたいなのが伸びて、まわりついて来てるような……

そうしていると、生暖かい風が前から吹いて、  
前を見ると、ヒョウちゃんが舌なめずりをしました。

こんなもの食べる気なの！？

でも、そうすれば手からは取れる……

でも、こんな気持ちの悪いもの、  
食べさせない方が、良いような気がするし……

でもこのままだと、取れなくなるだけじゃ、  
済まない事が起こるかも知れない……

そんなことを色々と考えて、  
やっぱりこれを、ヒョウちゃんにあげようと思って、  
振り回していた手を止めてから、  
ヒョウちゃんの鼻先へと、腕を伸ばしました。

すると、それを待っていたかのように、  
ヒョウちゃんは素早く動いて、

わたしの手ごと、咬みついて

と思ったらそうではなくて、ヒョウちゃんは手じゃなく、わたしの顔へと向かってきたんです。

え、どうしてこっちに来るの？

なんて尋ねる暇もなく、

目の前が、見たことないほど口を大きく開けた、

ヒョウちゃんの顔だけになった途端にすぐ、

視界は真っ暗になりました。

そして顔の周りが急に生暖かくなって、首の前と後から、何か硬いものが当たって、食い込むのを感じた途端

わたしは目が覚めました。

??月???日 河原での出会い

気がつくと、わたしはなぜか河の中に立っていました。

たしか土手の上で気が遠くなって、

そのまま、気を失った気がしたんだけど、

なんで河の中に立ってるんだろう……

空は良い天気だったはずなのに、

今見上げると、どんより曇っていました。



たしか橋のそばにいたはずなんだけど、  
上流を見ても下流を見ても、橋が見当たりません。

いつの間に別の場所に移動したんだろう……

それを考えていると、後ろの方から、  
わたしの名前を呼ぶ声が聞こえました。

それははっきりとは聞き取れない、小さな声だけど、  
聞き覚えのある声が、いくつか呼んでいる気がして、  
振り向いて、確認しようと思いました。

だけど、今まで見たことがないくらい、  
濃い霧か煙か判らないけど、それがかなり濃くて、  
向こう岸が良く見えません。

御家河に霧が出たなんて、一度も聞いたことないし、  
見たこともないから、火事の煙とかかなあ。

でも煙たくないし、それに煙なら上に昇るはずだから、  
やっぱり煙じゃないみたい。

どうも良く判らないなあ……

とりあえずこっちから、その声に返事してみただけど、  
どうも聞こえてないみたいです。

しょうがないから、よく見えないけど、  
水かさも膝より下で、意外と浅いから、  
何とかなるかと思って、歩いて河を渡るうとしました。

だけど、立っていた場所までが浅瀬だったみたいで、  
1歩進んだだけで、膝よりも深くなってるし、  
深いところは流れがきつくて、流されそうになってしまい、  
これ以上はとて進めません。

仕方がないから、聞こえる声とは逆だけど、  
岸が近い方から上がって、橋のある所まで、  
回って行くしかないかなあ……

わたしはそう思って、もう一度振り返ってから、  
浅瀬を岸に向かって進み出しました。

こっちは霧も晴れていて、河の底も見えているし、  
歩きやすいから、楽に進めます。

でも御家河って、こんなに石ばっかりの河原だったっけなあ、  
もっと草むらとか、地面が多かった気がするんだけど……

ここって、御家河って言うよりも乍川の河原に似ているけど、  
あっちだとしたら、こんなに川の幅は広くないから、  
やっぱり違う気がする……

そんなことを考えながら進んでいたら、  
わたしの向かっている岸辺のところに、  
誰かが立っているのが見えました。

誰か判らないけど、制服っぽい格好をしてるから、  
かなか、なつめか、それともみこと？

でも髪が長いから、みことじゃなさそうだなあ。

あと一歩で、河原に上がるところに来た時に、そこにいたのは、わたしが知らない高校の制服を着た、女の子でした。

黒いストレートの髪が、胸のところくらいまであって、かわいいと言うよりは、切れ長の目をしたきれいな人で、左目の下にホクロがありました。

制服は、袖や襟に白いラインのあるグレーのセーラー服で、白いスカーフをしていました。

スカートは膝上くらいで、普通に短くしてる感じで、黒のハイソックスに黒のローファーです。

その人は、わたしをじっと見ていて、向こうは明らかに、わたしを待っていたみたいに見えます。

この人、どっかで見たことある気がするんだけど、でもやっぱり、思い出せません。

この人が着ている制服は、見覚えがないから、私服の時に、どこかで会ってるのかなあ……

それにしても、着ている制服なんだけど、なんか、ずいぶん汚れてるっていうか、濡れているみたいいな色に見えます。

まるで、墨汁かインクでもかけたみたいに、

大きな黒い染みで、セーラー服もスカートも、半分くらい染まっています。

河原で転んだって、こんなには汚れないと思うし、それに顔や手や足は全然汚れてないから、違っっぽい。

もしかして、苛められているのかも……

そんなことを考えながら、歩いていると、わたしをずっと見ていた、この人は、わたしが河原に上がろうとした途端に、「ダメ」

と、右手を突き出してから言われました。

この声、誰かに似てる気がする！

だけど、その時に頭に浮かんだ名前は、

この目の前にいる人ではない、別の人でした。

でも、その人の姿が浮かんだ時に、

この人が誰なのか、気づいたんです。

もしかして、司さん！？

この人は、特に声が忍さんに良く似てる。

でも、司さんはもうすでに……

司さんはたしか、交通事故で……

あの制服の黒い染みは、もしかして……

だとしたら、ここって……

「みなもちゃん」

わたしが混乱していると、司さんから声をかけられて、わたしは我に返りました。

「貴方はまだこっちに来ちゃダメだよ。

私の代わりに、お姉ちゃんをよろしくね。

あの人、意外としっかりしている様に見せてるだけで、けっこう抜けてるし、気分屋だったりで、手のかかる姉だけど、悪い人じゃないから、

これから構ってあげて」

と言った司さんは、忍さんに似た笑顔で、わたしへと微笑んでいました。

やっぱりこの人は、忍さんの妹の司さんなんだ！

でもどうして、わたしの名前を知っているの？

やっぱりここって、三途の川の賽の河原？

司さんは成仏していないの？

わたしはどうやってたら戻れるの？

聞きたいことはたくさんあったけど、それを聞くこうとする前に、司さんは、

何かを確認するように、後ろを振り向いていました。

そしてまたこちらを見ると、

司さんは少し真面目な表情になって、

「もう時間がない、しょうがないか。

ちょっと痛いかも知れないけど、ゴメンね」

と言われて、何のことかと思った途端、

司さんに、両手で思いつきり突き飛ばされました。

この衝撃は、後ろに倒れるどころじゃなくて、

まるでマンガの格闘シーンみたいに、

ずっと後ろまで弾き飛ばされて、視界がぐるぐる回って、

すっかり訳が判らなくなつて、そして

目が覚めました。

??月??日

どんな夢を見ても、結局目を覚ますと、

いつもの真つ暗な場所です。

夢の中では、色々とびっくりさせられたり、

酷い目に遭ったりしているけど、

それでも、この何もない場所よりは、

まだましな気がします。

自分が死んじゃう夢の方が良いなんて、

本当だつたらと思つたら、あり得ないことなんだけど、

それでも、知っている人たちと会えるなら、やはり嬉しいです。

たとえそれが、とても怖い人たちでもです。

わたしにナイフを突きつけて、脅した後に目を突き刺した、門塾さんでも、わたしの頭に咬みついて、首を食いちぎった、とても大きなヒョウちゃんでも。

これらは全部、私の夢なのだから、想像でしかないのは判っています。

それでも、知っている人たちや、多分、私の想像した姿の司さんにも、その姿を見たり、会えたり出来るのは、やっぱり嬉しいんです。

夢から覚めるたびに、最初は無事で良かったって思うけど、すぐにまた、独りなんだと感じて悲しくなります。

やっぱり、独りぼっちで誰にも会えないのが、何よりも一番辛いです……

20??年 ??月 その1

??月??日

もういつからこんな状態になっているのか、  
思い出せなくなり始めています。

本当のわたしは、意識もないままで、  
何十年も、寝たきりになっているんじゃないか、  
その間に見ている、夢なんじゃないかって、  
思えて仕方ありません。

意識だけのわたしは、相変わらずで、  
夢を見ては暗闇で目を覚まして、またすぐに次の夢を見る、  
これを延々と、繰り返し続けています。

今では、見た夢をほとんど覚えていますが、  
真っ暗な起きている時間は、多分もう1時間もないような、  
そんな気がしています。

そのうちに、全部が夢になってしまうのかな。

でもそうしたら、夢の中のわたしは夢でしかないから、  
わたしの意思是、どこにもなくなってしまっ気がする。

そしたらわたしは、どうなっちゃうんだろう。

ただずっと、自由にならない夢だけ見ているの？



脳死状態の人って、実はこんな心境なのかなあ……

お医者さんから、意識は回復しないって言われて、家族から、もう楽にさせてやって欲しいとか言われて、生命維持装置を止められて、殺されちゃう。

本人の声は、もう周りの人には届かないし、脳死の人には、意識は失われていて、

声も聞こえないってことになっているけど、

実はそんなことなかったら、

実は周りで話している声も、全部聞こえていたら、そこで、自分の運命を決める話をしていたら……

自分が殺されちゃう時の気持ちって、どうなんだろう。

死にたくないって、思うのかな……

それとも、納得出来るのかな……

諦められるものなのかなあ……

そのうち、わたしもそうなるのかも知れないけど、今は、考えたくありません。

どっどっはつきりしてくる夢の内容は、

実際に何十年も時が経っていて、

それに夢の内容も、合わせているみたいに、

かなりの時間が経っているのが多いです。

だから余計に、それが勘違いじゃないのかもって思えて、

すごく不安になるんです。

わたしの未来が、  
本当にこんななんじゃないかって思えて……

??月??日 遅すぎた目覚め

目を覚ますとそこは、病院っぽい、  
真っ白な天井の場所で、  
わたしは、真上を向いて横になっていました。

でも何だか、よくある病院の天井には見えなくって、  
何かがないって思ってた見ていたら、  
天井に、照明器具が見当たらないのに気づきました。

普通は、蛍光灯とかが天井からぶら下がっているか、  
天井に埋め込まれている気がするんだけど、  
この天井には、それが見当たらず、  
天井全体が光っているように見えます。

わたしは、周りを見ようとと思って、  
頭を動かそうとしたんだけど、  
全く力が入らなくて、動かないし、  
それに頭も体も、まるでぬるま湯の中みたいに、  
あまり感覚がないのに気づきました。

意識を取り戻したんだから、誰かが来て、  
きつと今の状況の説明も、してくれろと信じて、

わたしは誰かが来てくれるのを待っていました。

しばらくしたら、看護師さんらしい人が来たんだけど、まだ目の焦点が合わないみたいで、

白くぼやけてしまつて、顔も服も全然はつきり見えなくて、看護師さんが男の人なのか女の人なのかも、判りません。

で、更に何かを言われているんだけど、

それも全然聞き取れないくらい、小さな声で、何を言われているのか、さっぱり判りません。

どうして、そんなに小声で話し掛けてくるのか、目を覚ましたばかりの患者が、

驚かないようにでもしているのかな、

なんて、思っていました。

よく見えない看護師さんは、この後もう一人やって来て、ベッドを動かして、わたしの体を起こし始めました。

ゆっくりとベッドの背中部分が持ち上がって、

それと同時に、視界が天井から壁に移っていくと、

ここには、なつめの病室でも見たことがないような、

大きな冷蔵庫と変わらないような機械が、

壁一面に並んでいて、そこからケーブルとか、

チューブが10本以上は、こっちに伸びていました。

更に、ベッドの背中部分が上がってくると、

寝ているベッドの足の方も見え始めてきて、

大きな機械から、いっぱい出ているケーブルやチューブは、全部わたしの足元に掛かっている布団へと伸びていて、

そこでほとんどが、掛け布団の下に入っていました。

もしかしてこれ全部、わたしに繋がっているの？

なつめを見た時でも、かなりショックだったのに、それよりも多く、今わたしの体に付けられている……

それが判った途端に、わたしは不安に感じて、それと同時に、胸が苦しくなり始めました。

そんなわたしの体調の変化で、機械が反応したらしく、突然、いくつかの機械が光ったり、警告音みたいな音を出し始めました。

看護師さんたちは、それに気づいて、1人が急いで、その機械の方へと向かって、もう1人がわたしへと、何かを言っているけど、やっぱり全然聞こえないままです。

声を掛けていた看護師さんは、布団をめくってわたしの腕を持ち上げたので、何か処置をしようとしているのが、視界に入りました。

その時に見えた、わたしの腕は、枯れ木のように細くて、黒くなっていたんです。

それはまるで、干からびたミイラでした。

わたしの体は一体どうなっているの!？

それを見たわたしは、驚くのと同時に怖くなって、パニックを起こしてしまい、悲鳴を上げて、必死に体を動かそうと、もがきました。

機械は更に、騒々しく鳴り始めて、わたしは、看護師さんたちに取り押さえられた、ような気がしました。

そして、いくつもの注射みたいなのを打たれながら、やっと聞こえる声で、告げられたんです。

あなたは100歳を越える老人なんだから、無理をしてはいけないって。

今は2099年で、わたしは88年間眠り続けていて、今までずっと、生命維持装置で生かされていたって。

そっか、わたしはすごいお婆ちゃんになっちゃったのか。だから、腕もあんなになっちゃってだし、目が良く見えないのも、耳が遠いのも、全部、体が老化した結果だったんだ。

もう、この世界にはわたしの知っている人は、誰もいないんだろうなあ、多分。

そんな絶望感を感じながら、どんどん強まる胸の痛みに苦しんでいると、その内に意識が遠くなってきて、そして……

目が覚めました。

??月??日 変わり果てたわたし

目を覚ますと、そこは病院の手術台の上、  
みたいな大きな眩しい照明に、  
横たわった状態で、照らされていました。

とにかく眩しくて何も見えないので、周りが良く見えませんが、  
音は聞こえていて、モーターが唸っているような、  
短い音がいくつも重なって、ずっと聞こえて来ていました。

すっかり眩んでしまって、見えなくなった目を閉じると、  
次に気になり始めたのは、ここの臭いでした。

何か、油のような臭いや、金属が焼ける臭いもして、  
とても病院とは思えません。

しばらく目を閉じてから、  
何度か瞬きしたりして、目を開けるのですが、  
まだ、ほとんど見えないままになっていて、  
わたしが横になっているこの場所や、  
今の自分の状態が、確認出来ません。

仕方がないので、とりあえずこの位置で寝ていたら、  
眩しいままなので、少しでも体勢を変えようとして、  
もがいたのですが、何か引掛かっているみたいで、  
横向きになるのも出来ません。

どこも縛られたりとか、繋がれている感覚は、  
全然ないんだけどなあ。

もしかして、足とか下半身とかが麻痺してて、  
そう言うのが、自覚出来ないのかも知れない……

少なくとも、何事もなくちゃんと動かしているっぽい手で、  
自分の体を触って、確認してみることにしました。

念の為、顔から触り始めました。

首も、ちゃんと判りました。

胸も、ちゃんと判りました。

お腹も、ちゃんと判りました。

腰も、ちゃんと……ない、いや、あった、けど、  
なんか、違う。

お腹の下が、あるにはあったけど、  
ものすごく、へこんでるし、それに、  
ここから、体を触ってる感覚が、ありません。

それに、形がおかしい。

手で丁度握れるくらいの、  
太さの金属のチューブみたいなのが、  
何本か繋がってる感じがする。

それより先は手が届かなくて、良く判りません。

なんなの、これ……

とても怖かったけど、自分の体が、

判らなくないままの方が、もっと恐ろしくて、

わたしは、目が眩んでいたのもすっかり忘れて、  
自分の体を見ました。

この時、まだ目が良く見えなければ、

わたしにとっては、良かったのかも知れないけど、  
もうこの時には、視力は回復していたんです。

この時わたしが見たのは、金属の台に寝ている、

上半身までは、SFに出て来るサイボーグみたいな、  
金属の体で、腰から下が未完成になっている、

組み立てている途中の、わたしの体でした。

天井から伸びている、3本のチューブに繋がれて、

天井から生えている、ロボットのアームみたいなのが、  
わたしの体の左右で、止まっているのが判りました。

組み立て中の部分に、わたしが手を入れたから、

ロボットアームの動作が止まっていて、  
警告音のような、アラームが鳴り響いていました。

わたしはどうしたら良いのか判らなくなつて、

とにかくここから逃げ出そうとして、  
腰に繋がっているチューブを外そうとしました。



手でつかんで、思い切りひねったり引つ張ったりすると、チューブは外れて、茶色いオイルみたいなのが、流れ出ていて、それを見てわたしはもつと怖くなって、残りのチューブも、無理やり外して、更に、緑色や透明の液体を垂れ流しながら、台からもがいて、逃げ出そうとしました。

それを妨害するように、わたしの上に、ロボットアームが伸びてきたのを、夢中で手で振り払って、何かしてくるのを防いでいたら、こっちに近づいて来る、金属の足音が聞こえて来ました。

すぐにそつちを確認すると、そこには、大きな人型のロボットが2つ、近づいて来ていて、わたしはそれらに取り押さえられてしまい、頭をつかまれたと思ったら、急に体中の感覚がなくなって、体が動かなくなりました。

目も閉じたつもりはないのに、視界もどんどん暗くなっていきます。

そんな状態のわたしに、2人のロボットは、左右から耳の辺りで、何かをしていたんですが、その時に聞こえたのは、人の声でした。

人型の大型ロボットの中には、人が乗っているようで、その人たちの話し声が聞こえて来たんです。

「まったく、またかよ、ラインが止まっちゃった。

作業時間をわざわざ延ばしやがって」

「これで今日も残業決定だな。

おい、脳波と聴覚がオフラインにならないぞ」

「別にいいだろ、どうせ他はオフラインだから動かんし、記憶も再調整するんだからよ」

「それもそうか」

そう言いながら、わたしはどうも、台車みたいなものに乗せられて、どこかへと、運ばれて行くみたいな音がしていました。

その間も、2人の話し声が聞こえていました。

「これだから、生体脳儀体は面倒なんだよ」

「未完成で起動するから、パニックを起こしやがる。黙って眠っていれば、余計な事は気づかないで、何も疑わずに目覚められたのに」

「これでまた、記憶消去の再申請になっちまった。今週だけでももう5件目だぞ」

「おい、これ、随分古い生体脳を使ってるぞ。半世紀以上前のだよ、骨董品だなこりゃ」

「それは珍しいな、なんかの実験用かもな」

「今や希少種の完全生体のシミュレーションとかか？」

「今の培養生体の性能なんて、糞みたいなもんだぞ。

こんな高機能な工学義体が浸透しているんだから、今さら脆弱でろくな機能もなくて、

維持費が莫大に掛かるだけの生体に戻るなんて、

とても考えられねえ」

「失われた生体への懐古趣味ってか？

そんなのは富裕層の嗜好の範疇だな」

「擬似生体化でも満足出来ない金持ち共が、不自由で脆い生体を手に入れて、

生身の足で歩いたり口から声を出して喋ったりして、

自分で生きて動いている実感を楽しむ。

なんて無駄な贅沢なんだろうなあ」

この人たちは何を言っているの？

半世紀以上前って、今はすごい未来なの？

わたしは今までどうしていたの？

わたしの元の体はどうなったの？

今のわたしはどこにいるの？

そんな疑問を感じるけど、何も判らないままです。

この後も、2人の会話は続きました。

「それにしてもこれ、少し気にならないか。確か他のも、このタイミングだった気がするんだよなあ」

「何がだ？」

「視覚制御の再起動中に、意識を取り戻すと、視界回復と仮想視覚化の間にタイムラグがあって、その瞬間にまだ仮想化されていない現実を見て……」

「で、パニックを起こすって？」

「ああ、そんな気がする」

「でもログ上では、視覚回復から、 $0.2\text{ ns}$ で仮想視覚化は機能開始しているぞ。それは有り得ないんじゃないか？」

「ログ上では、な。多分これは、仮想視覚のバグだと思っている、わざわざ報告する気もないが」

「それが無難だな、下手に文句つければ、しがないライン担当者なんて、すぐにクビだ」

「このラインも、早く完全義体専門にならんかなあ。脳内情報を完全データ化した義体脳にしておけば、未完成で起動なんて有り得ないから、こんな面倒は絶対に発生しないのによ」

「いや、あれも色々問題があるらしいから、なかなかそうはなりそうもない。

一番の理由は、義体脳自体のコストの高さだろうが、それ以外にも一部の固体で、生体脳からのコピーミスが起きるらしい」

「それ、どうなるんだ？」

「運が良くて、目を覚ましたら記憶喪失」

「運が悪いと？」

「発狂して、暴走した後に突然死」

「そりゃひでえなあ、まるでこれと同じじゃん」

「だから、記憶コピーの完全義体の方が、現状ではリスクが高いんだとよ」

「ふうん、そうなのか」

「それにしても不思議なもんだ、  
どうして生体脳はオフラインなのに、  
勝手に起動出来るんだろうなあ」

「生体の脳だけに、生命の神秘って奴か」

そう言っつて、2人は笑っていました。

これからわたしは、どこに運ばれて行くの？

わたしの記憶、消されちゃうの？

わたしはこれから、どうなっちゃうの？

更に増える疑問も、尋ねることも出来ずに、  
わたしの意識はどんどん薄れていって、  
そのまま消える寸前に、

「消されるのなんて、絶対嫌だ！」  
って叫んだら、そこで目が覚めました。

20??年 ??月 その2

??月??日 父の正体

目を覚ますとそこは、一面銀色の場所で、わたしは仰向けの姿勢で、寝ていました。

丸く光る照明に、銀色の天井が見えていて、周りからは、歯医者さんで聞くような、小さくて甲高い音が、遠くから聞こえていました。

手を上げようとする、途中で何かにぶつかり、そこで始めて、わたしはガラスみたいなの、透明のケースに入っているのが判りました。

左右を見ると、透明なのは前だけで、横は白くて柔らかい、ビニールのクッションみたいになっていました。

このケースの中はかなり狭くて、わたしの体とほとんどぴったりで、全然動けないし、ガラスの蓋もぴったり閉じていて、隙間なんて全くありません。

でも、普通に呼吸も出来ているし、寝心地もかなり快適です。

それにしても、ここはどこなんだろう。

どこかの病院の施設？

そう思った時、病室でのなつめの姿を思い出しました。

でもそれと比べると、今のわたしの体には、何も付けられてなくて、それっぽくありません。

と言うか、何も付いてないどころか、服も何も着ていないのに気づいて、少し焦りました。

まさか、実は死んじゃってて、これは死体を保管する機械、なんてことないよね……

不安になってきて、手が当たっている足を触ってみると、ちゃんと感覚はありました。

次に、声は出るのかが気になって、ちよつと小声を出した途端に、大きな音が鳴って、ガラスの蓋が開きました！

最初はてつきり、声で開くようになっていたのかと、思ったのですが、そうではなくなつて、何かの異常な状態と機械が判断して、開いたみたいで、その大きな音は、非常ベルみたいな警告音に切り替わりました。

ガラスの蓋が開いたのは良いんだけど、何も着ていないから、出るに出られない……

だけど外の様子が気になって、



顔だけ出して、周りを見てみると、そこには壁も床も、天井と同じような、一面銀色の、とても大きな部屋でした。

それっぽく見えないから、判らないだけなのか、この部屋には、ドアや窓が見当たりません。

わたしが入っているのと、同じ形をしたのが、たくさん並んでいて、その真上に、

わたしの最初に見た、丸く光る照明がありました。

でもガラスの蓋の中は、どれもみんな、白っぽく曇っていて、外側からは中は見えません。

何とか中が見えないかと、覗いていたら、その時わたしへと、どこからか声がかけられた、と言うか、声？、が聞こえてきたんです。

「

「!

それは聞こえてはいたけど、全く意味が判らない言葉でした。

もっと正確に言うと、耳から聞こえているんじゃないかと、どこか別のところから、聞こえているような感じでした。

そんな声と言うか、音は聞いたこともなくて、言葉なのかどうか、よく判りません。

「

「!

何かを言われているのだけは、判るけど、何を言われているのか、全然判らないし、それに、誰に言われているのかも判りません。

わたしは周囲を何度も見渡しましたが、

この部屋の中に人影らしいものは、見つけれませんでした。

何となく、怒られているようにも聞こえるけど、どうしたらいいんだろう……

格好も格好だし、困ってしまっただけだと動けないでいると、突然真横に銀色の塊が現われて、それが、

「  
「！」

と叫んでいました！

水銀で出来た雫のような、銀色のそれは、まるで、無重力空間に浮かんだ水滴のように、形を常に変えながら、宙に浮かんでいて、声を出したのと同時に、表面に波紋のようなのが広がっていました。

わたしはびっくりしてしまって、

自分の体を隠すのも忘れて、それを見つめていました。

するとそれは、しばらく黙っていましたけど、どうも、わたしから思ったような答えが返って来ないので、しびれを切らしたみたいで、また別の言葉を発したんです。

「ミナモ、ワタシガワカラナイノカ、ミナモ！」

なんと今度は日本語で、  
それも、わたしの名前を呼んでいました！

一体これは何！？

どうしてわたしの名前を知ってるの！？

そう反射的に思ったら、

「ワカラナイワケガナイジヤナイカ。

ソノナマエヲツケタノハワタシダシ、

ソノスガタニシタノモワタシナノダカラ」

と、思っていたことに、返事が返ってきました。

この銀色の液体みたいなのは、わたしを知っている？

それもまるで昔から、わたしが生まれた時から？

「ソレハトウゼンダロウ。

ナゼナラワタシハオマエノチチオヤナノダカラ。

ヤットメザメテクレタネ。

オカエリ、ミナモ」

チチオヤ？、父親！？

それはつまり、これが亡くなった父の、

三崎 了だって言っているの！？

混乱していたわたしは、思っていただけなのか、  
それとも思わず喋っていたのかも判らないまま、  
父だと名乗ったそれと、会話をしていました。

「ワタシノチキュウデノナマエハミサキリヨウ。  
オマエノチチダ。

ワタシノシヨウタイハミテノトオリ、  
チキュウジヨウノセイプツデハナイ。

チキュウニハケンサレタウチユウジンナダヨ。

ワタシタチノモクテキハ、

チキュウデハンエイスルブンメイノチヨウサダッタ。

ワタシタチハエージエントトシテ、

ニンゲンノシャカイニセンニユウシテイタノダヨ」

何かとんでもない話だけど、話を聞いているうちに、  
わたしも少しは落ち着いて来ました。

「ソノホカノニンムトシテハ、

ニンゲンノセイタイジヨウホウノサイシュモアリ、

ソノタメニワタシハケツコンシテ、

ニンゲンノボタイニセイタイサンプルヲツクラセタ。

ソレガオマエダヨ、ミナモ」

セイタイサンプル？

ツクラセタ？

それがわたしの!？

嫌だ、そんなの信じない。

と言っか、絶対信じたくない。

サンプルって、そんな扱いひどすぎる！

第一、父はずっと昔に死んじゃってるんだから、こんなところにいるはずない！

こんな状況だけど、わたしにとっては、絶対納得出来ないことを言ってきた、父だと名乗った銀色の塊を睨みました。

そうすると、銀色の球体は、その証拠となる話をし始めたんです。

「ワタシハチキュウデノニクタイヲウシナウトキニ、オマエニテガミヲノコシタハズダ。ソレニハワタシガシヨウメツシテカラ、チキュウレキデ4210ニチゴニムカエニクルト、カイトオイタノダガミテイナカッタノカ？」

父からの手紙……

そうだ、わたしはそれを読もうとして、その時に意識を失ったんだっただ。

最初は半信半疑だったけど、手紙のことを知っているのは、わたしと両親以外には忍さんだけ。

だとすると、まさか本当にお父さんなの？

じゃあやっぱり、わたしは……

わたしは、人間と宇宙人のハーフで、  
実験材料みたいなものなの？

でもあの時、土手で意識を失うまでは、  
普通の人間として、ずっと生活してきたのに。

身体検査だって、変じゃなかったし。

なのに、どうして……？

「ワタシトニンゲンノオンナカラウマレタオマエハ、  
ソノスガタヲカエルチカラモフカンゼンダツタ。  
ソコデワタシガニンゲンノカタチニコテイシテオイタ。  
シカシソレハズットモツモノデハナクテ、  
ジカンテキナゲンカイガアツタノダ。  
ソノキゲンガ4210ニチゴダツタトイウコトダヨ」

それじゃあ、わたしの人間としての寿命は、  
生まれた時から決まっっていて、あの日までだったの？

あれ、そういえば、さっきの説明では、

“ワタシタチエージェント”って言っていた。

“ワタシタチ”ってことは……

ここでわたしは、改めて周りを見渡しました。

そこにはたくさんの方、自分が入っているのと同じ、  
ガラスの蓋のケースが並んでいます。

これ全部……

「ソノトオリダヨ、ミナモ。」

コレハカクチノエージエントガツクリダシテモチカエッタ、  
オマエトオナジセイタイサンプルタチダ。

ホカノサンプルモオマエトオナジデ、

スガタヲカエルチカラハナカッタ。

ダカラソノキゲンデアルチキュウレキデ18ネンヲモツテ、

チヨウサヲシュウリョウシ、

チキュウカラタチサルコトニシタンダヨ」

地球から、立ち去る……

そうなるよ、ここって……

「ボセイニカエルウチュウセンノセンナイダ」

わたしは、こんな銀色の塊たちばかりがいる世界に、  
連れて行かれちゃうの？

「ホカノサンプルタチハモウモドツテイルヨ。

モウジキニオマエモナカマニモドレルカラ、

シンパイハイライナイ」

モドルって、他のケースが曇っていたのは、

こんな風に、液体になっていたから、

そう言う風に見えていただけだったこと？

そんな、そんなの嫌だよ……

いくら何でも、これは酷すぎるよ……

信じられない展開に、すっかり失望して、わたしは悲しくなって、涙が出てきました。

溢れる涙を手で拭くと、その涙は銀色をしていました。

え！？

「カイフクノタメノチリヨウハカンリヨウシタ。  
アレカラチキュウレキデ50ネンモカカタ。  
ダケドモウスグモトニモドレルカラ、  
ワタシタチトオナジスガタニ。  
スベテハソレカラダヨ」

その言葉を聞き終えて、間もなく、わたしの体の表面は、水風船のように膨らんだ後に弾けて、中から銀色の液体が溢れ出てきたところで、目が覚めました。

???月???日 バラバラな世界

目を覚ますと、そこは座っていた河原の土手でした。

どうやら、いつの間にか、眠ってしまっていたみたいで、空はもう、夕焼けに変わっていました。



まだ側にいたヒヨウちゃんを見ると、  
わたしが起きたのを見て、  
短く鳴いてから、立ち去っていきました。

その時に、ヒヨウちゃんの仕草が、  
何となく変だと感じたのですが、  
具体的には、何が変だったのかが判らなくて、  
あまり気にせずに、わたしも帰ろうと立ち上がると、  
少しだけですけど、眩暈みたいなを感じました。

もしかして風邪引いたかな、早く帰ろう。

自転車に乗っても、何だかふらつくような感覚がして、  
やっぱり風邪引いたんだと思って、  
この後、買い物に行くつもりでしたが、  
それはやめて、まっすぐに帰りました。

家に着いたら、熱っぽくはなかったけど、  
頭はボーっとするのもあって、  
念の為熱を測ると、ほんのちょっとだけ微熱でした。

でもやっぱり、何だか調子が悪いので、  
今日も母は出張だから、適当でいいやと思って、  
昨日の残りの煮物と、冷蔵庫の余り物で、  
適当におかずを作って、夕飯にしました。

あれ、昨日作った煮物は味が濃すぎて、  
失敗したはずなんだけど、  
今度は逆に、暖める時に薄めすぎちゃったのか、  
味が全然なくなっちゃってるなあ。

そんなに薄めたつもりはなかったんだけど、  
これも調子が悪いせい、かなあ……

もしかして、お腹がいっぱいになったら、  
治るかな、なんて思ったけど、  
ご飯を食べても治りませんでした。

いまいち薄味な晩御飯を食べてから、  
お風呂場に向かいました。

多少具合が悪くても、これはわたしの生き甲斐なので、  
お風呂だけは、何としても入るんです。

具合は、だんだん悪くなっているみたいで、  
普段なら視力も1.5はあるから、  
景色がぼやけて見えるとかはないのですが、  
今は目が悪くなったみたいに、少しぼやけていています。

風邪で急に目が悪くなるなんて、聞いたことないけど、  
ポーンとするのとの関係あるのかなあ。

でもちょっとだけ、ぼやけて見えているだけなので、  
とりあえず、お風呂には入りました。

普段通り、シャワーを浴びて体を洗ってから、  
湯船に浸かっても、何かいつもと違っていている気がします。

何て言うか、お風呂に入っているんだけど、  
何だか、お風呂に入っている気がしないんです。

これも具合が悪いせい、なのかなあ。

もしかして、自分が思っているよりも、

すぐく調子が悪くて、それすら気づいていないとか？

考えれば考えるほど、悪い方に考えてしまつて、

少し怖くなってきてしまい、

いつもなら、1時間は湯船に浸かっているとこを、

今日は早めに30分で切り上げて、上がりました。

まだ時間は8時前だったんですが、もう寝ることにして、もつと具合が悪くなっていても、どうにかなるように、枕元に、着替えと携帯と保険証とお財布を用意してから、布団に入りました。

これだけ準備しておけば、多分大丈夫、なはず。

まさか、ここで眠ったら、

もう二度と目が覚めないとか、ないよね？

なんて不安も少し思いつつ、眠りました。

この日は夢も見ずに、ぐっすりと眠っていたみたいで、翌日には無意識に、いつも通りの起床時間に、自然に目が覚めたんです。

でも……

目が覚めた時に感じたのは、

全てがバラバラってことでした。

見える景色も、聞こえる音も、匂いも味も、  
手や、足や、体の感覚も、どれひとつ合っていない、  
全部がバラバラの感覚。

わたしは家の布団の中で、目を覚ましたはずなのに……

右眼には、かなの家の屋上が見えていて、  
隣にはかなが座っていて、こつちを見ているのが見えました。

左眼には、なつめの病室が見えていて、  
なつめはベッドで、静かに眠っているのが見えました。

右耳からは、カラオケの音と共に、  
みことと葵ちゃんの、ふたりの話し声が聞こえていました。

左耳からは、ケイゴさんの話し声と、  
ケイゴさんの車の、大きな音が聞こえていました。

鼻からは、荏田川の桜並木に咲いている、  
桜の花の香りがしていました。

口からは、門塾さんに殴られた時に味わった、  
血の味がしていました。

右手からは、ペンを持っていて、  
何かを書いている感じがしていました。

左手からは、ヒョウちゃんの背中を撫でているような、

毛の手触りの感じがしていました。

お腹からは、至心館での稽古の時にやられたような、強く押されるような感じがしていました。

背中からは、水泳の時みたいに、水の中にいる様な冷たさを感じていました。

右足からは、マラソン大会の時みたいに、ずっと走っているような、膝の痛みがしていました。

左足からは、プールの授業の時の、強い日差しに照らされたコンクリートの上を、素足で歩いているような、そんな感じがしていました。

なんなの、これ。

見えるものも、聞こえるものも、触れるものも、何一つ合っていない……

一体どれが本当なの!?

今のわたしはどうなってるの!?

わたしはどうしたら良いのかわからずに、怖くなって悲鳴を上げました。

そうすると、全ての感覚が、まるで一時停止したみたいに次々と止まり、そしてパツと消え始めました。

その時、今まで一度も聞いたことのない声が、  
かすかにだけど、頭の中に聞こえて来たんです。

「固体情報確認。

製品名、VR生体管理システム、ウンディーネ。

製品識別、第4世代量産型。

拡張機能なし、制限機能なし、特殊機能なし。

製品型式、CNVRS310。

シリアルNO、2091 1571256。

OSバージョン、4.661F。

実行ログ確認。

障害、予期しないエラー発生。

障害、視覚VRシステム不整合許容誤差範囲オーバー。

警告、生体に不整合情報知覚の可能性があります。

障害、聴覚VRシステム不整合許容誤差範囲オーバー。

警告、生体に不整合情報知覚の可能性があります。

障害、嗅覚VRシステム不整合許容誤差範囲オーバー。

警告、生体に不整合情報知覚の可能性があります。

障害、味覚VRシステム不整合許容誤差範囲オーバー。

警告、生体に不整合情報知覚の可能性があります。

障害、触覚VRシステム不整合許容誤差範囲オーバー。

警告、生体に不整合情報知覚の可能性があります。

障害、温覚VRシステム不整合許容誤差範囲オーバー。

警告、生体に不整合情報知覚の可能性があります。

障害、冷覚VRシステム不整合許容誤差範囲オーバー。

警告、生体に不整合情報知覚の可能性があります。

障害、痛覚VRシステム不整合許容誤差範囲オーバー。

警告、生体に不整合情報知覚の可能性があります。

障害、圧覚VRシステム不整合許容誤差範囲オーバー。

警告、生体に不整合情報知覚の可能性があります。  
VR 神経同期システム復旧処理異常終了。  
感覚不整合情報復旧処理開始。  
障害、予期しないエラー発生。  
警告、不整合記憶情報の整合性調整が必要です。  
感覚不整合情報復旧処理異常終了。  
VR 感覚情報制御システム再起動処理開始。  
障害、予期しないエラー発生。  
警告、VR 正常化には全システム再起動が必要です。  
VR 感覚情報制御システム再起動処理異常終了。  
全システム再起動処理開始。  
中枢神経遮断処理開始。  
障害、予期しないエラー発生。  
警告、不整合記憶情報の破棄が必要です。  
中枢神経遮断処理異常終了。  
覚醒意識保護処理開始。  
障害、予期しないエラー発生。  
警告、不整合記憶情報の破棄が必要です。  
覚醒意識保護処理異常終了。  
警告、全システム再起動処理続行。  
一時記憶退避処理開始。  
障害、予期しないエラー発生。  
警告、現段階の状態情報の復旧が必要です。  
一時記憶退避処理異常終了。  
一時記憶復旧処理開始。  
障害、予期しないエラー発生。  
警告、現段階の状態情報の再構築が必要です。  
一時記憶復旧処理異常終了。  
警告、全システム再起動処理続行。  
警告、10 秒後に全システム再起動を強制実行。

秒読みの声が終わると同時に、わたしは目が覚めました。

0 1、 2、 3、 4、 5、 6、 7、 8、 9、 10秒前、



20??年 ??月 その3

??月??日 時をかけるわたし

目を覚ますとそこは、聞いたことのある騒音のする場所、ケイゴさんの車の助手席でした。

隣を見ると、ケイゴさんが座っていて、いつになく真剣な顔をして運転していました。

ケイゴさん、こっちに帰って来てたんだ。

まだ目が覚めたばかりで、何も考えられなくて、窓の外の風景を、何気なく見てみると、そこはトンネルなのか、外は暗くて、すごい速さで光が流れていました。

前を見ると、その光の線は車の上や横側だけじゃなくて、下にもあるのが見えていました。

あれ、トンネルの照明って天井とか壁以外に、地面にもついてたっけ？

それに前に車に乗せてもらった時は、かなり揺れていた気がするけど、今はほとんど揺れてないなあ。

これってまるで、宇宙船のワープみたいだ……

なんか変だなと思って、

ケイゴさんに聞いてみようと思って、そっちを見ると、ケイゴさんの格好が、いつもと違うのに気づきました。

いつもの大きな白いスウェットじゃなくて、

なんかSFに出てきそうな、ちゃんとサイズの合っている、銀色の制服みたいなのを着ていました。

なんか、いつもと違って見えるからだと思うけど、

気のせいかも知れないけど、ちょっとだけかっこいいかも。

わたしが声をかけようとすると、

先にケイゴさんから、話しかけられました。

「気がついたか、気分はどうだ？」

まだ眩暈がするかも知れないが、それは時間が経てば治る」

ああ、この頭がボーっとするのは、

寝起きだからじゃないんだあ、と、

まだ寝惚けたような状態で聞いてから、

わたしは色々と尋ねようとしてみたけど、全然頭が回らなくて、何から聞けていけばいいのか、判らなくなってしまう、

言葉が続きません。

そしたらケイゴさんは、ゆっくりと、

すぐく聞き慣れない呼び名で、わたしを呼んだんです。

「ばあちゃん、冷静に聞いてくれ」

え、ばあちゃん？

なにそれ、聞き違い？

ポーっとしてるから、ちゃんと聞こえなかったのかなあ。

でもやっぱり、ばあちゃんって、言っただよなあ。

どういふこと？

この後、混乱しているわたしへと、

ケイゴさんから、色々と夢のような話をされました。

まず、わたしが河原で急に倒れたのは、

何者かに狙われて、撃たれたのだそうで、

そのまま放置していたら死んでいた、とか。

でもそうなることは、ケイゴさんは事前に判っていて、

わたしを狙った犯人を欺くように、

わたしの身代わりの死体と入れ替えておいた、とか。

犯人の目的は、わたしの人生を改竄することで、

今までも何度となく改竄を試みては、

ケイゴさんたちが、それを防いでいて、

犯人はだんだんと手段を選ばなくなってきた、とか。

今は、犯人が唯一自ら手を下す為に、

行動を起こす時代の場所へと向かっている、

これからそこで犯人を捕らえる、とか。

この犯人には、時間法での過去改竄罪と、

時間航行法での、無許可の不正航行と言う、  
2つの重い罪状がかかっていて、  
場合によっては危険なことになるかも知れない、とか。

だけどまだ犯人の正体は判っていない、とか。

ケイゴさんは、実は未来から来た人間で、  
時間維持局に所属する時制官と言う立場で、  
過去の歴史を改竄から守る仕事をしている、とか。

ケイゴさんは、実はわたしの孫にあたる、とか。

はあ！？ 何それ！？

よくある小説とかマンガの設定みたいな、  
そんな話を、ケイゴさんは、大真面目な顔で語っていました。

そして、そこまで語った後にこちらを向いて、  
もうすぐ到着すると、わたしに告げました。

ケイゴさんは未来の人？

わたしは、ケイゴさんのおばあちゃん……？

冗談、にしては、このセットが良く出来てるよなあ。

それに、あの面倒くさがりなケイゴさんが、  
こんな凝った演技なんて、絶対出来そうもないし……

ってことは、やっぱりこれって、本当？

わたしはまだ、その話が半信半疑だったし、まだ10代の高校生なのに、

『ばあちゃん』と呼ばれるのには、とても不満だけど、その頃の自分が、一体どんななのが気になって、ケイゴさんに聞いてみたんです。

だけどケイゴさんは、ばあちゃんとは、未来で直接会ったことはないから、それは判らないと言われてしまい、結局どんなだったのかは、判りませんでした。

どんな風に言われるのか、すごく興味があっただけど、はぐらかされてしまったみたいで、残念です。

そんな話をしていると、車に見える宇宙船は振動し始めて、この直後、視界が真っ白になって、眩しくて目を閉じて、しばらくしてから目を開くと、そこは、どこかの駐車場に変わっていました。

どっかで見たことあるような場所だと思いながら、窓の外を眺めていると、ケイゴさんから、500円玉くらいの大きさをした、

銀色のバッジみたいなものを、右の肩につけられました。

何でもそれは、この時代の人たちから、姿や気配を判らないようにする装置だそうで、それをつけている限り、誰にも見つからないから、何があっても、絶対に外すなと言われた後に、わたしについているのは、言わば子機みたいなもので、

有効範囲があまり広くはないから、あまり俺から離れるなども、忠告されました。

それと同じのをケイゴさんもつけてから、外に出ました。

この宇宙船、中もわたしのよく知る普通の車だったけど、やっぱり外から見ても、ただの大きな車にしか見えないなあ。

車内からでは、あまり判らなかつたけど、

ここの季節は真夏のように、

セミの泣き声が、あちこちから聞こえていて、

その場所は、幼い頃に来たことのある、

市営プールの駐車場だと思い出しました。

ここにも人は、沢山いたんですが、

誰も、わたしたちの方を見てもいないし、

ぶつかりそうになって、相手がよろけても、

まるでこっちには気づいていなくて、

歩いてきた人は、地面を気にしているだけでした。

この風景全部が、立体映像みたいなものなの？

それとも本当に、これは未来の科学の力なの？

どういう仕組みなのか、ケイゴさんに聞いてみたけど、

時間軸の異なるあらゆる存在は素粒子レベルで、

自らが属する時間軸の経過と共に連動して変動する、

波動係数を持っていて、この振動の共鳴によって、

同次元に属する物質同士として互いの存在を認知しており、

この時間軸の係数変動に合わせて、

全ての素粒子も共に変動し続けているのだけど、物質が本来帰属する時間軸から離れた時間軸に移動すると、その物質の共鳴限界値を超えてしまい、素粒子間の共鳴が起きなくなり、その存在が物理的に認識出来なくなる特性を利用して、係数が近似値である時間軸内においても、意図的に自己の持つ波動係数を範囲外に変調する、のだそうです。

何を言っているのか全然判らないので、理解するのは諦めました……

でも、こんな難しそうなことを、一度もかまわずに、真顔で説明した、凜々しいケイゴさんを見て、これは本当に未来の人なのかもって、思いました。

ケイゴさんは、プールの入り口に向かいながら、わたしが小さい頃、プールで溺れたことがあるはずだと言って、その歴史を改竄して、犯人はわたしを、その時に、溺死させるつもりなんだと説明していました。

プールで、溺れたこと……

あ、あった、髪が排水溝に吸い込まれた時だ。

そっか、と言うことはここは、あの時のプールなんだ……

そう言われて見ると、見覚えがある気がする。

話を聞いただけでは、いまいち信じられなかったけど、

この昔の風景の再現なんて、出来るはずないよなあ。

そう考えると、やっぱりここは過去なのかな。

だとしたらまだ小さいわたしが、ここにいるんだ。

あの時はたしか、監視員の人に助けてもらったはずだけど、  
そこでその犯人はわたしを殺すの？

もしそうだったら、わたしの孫であるケイゴさんは、  
生まれなくなってしまうから、  
もしそうだったら、ケイゴさんは消えてしまう？

あれ、そうすると今のわたしも消えちゃうの？

でも、その犯人がこの時を狙うのが判るのは、  
何かが起きてからじゃないのかなあ。

でも起きた後だったら、もうわたしは消えてるはず？

あ、未来からなら過去の出来事は全部判っているから、  
そういうのも事前に判るの？

でも過去を変える前までは、そうなることは判らないから、  
やっぱり判らない？

どういうことだか、よく判らなくなったところで、  
ケイゴさんは立ち止まり、わたしも止まりました。

この日のプールはとても混んでいて、



排水溝のある流れるプールは、人でいっぱいでした。

そしてそんな中に、まずプールサイドに座っている、昔の母の姿を見つけました。

あ、やっぱりまだ若いなあ、  
本当にここは昔なんだ……

たしかこの時、わたしはひとりで勝手に、  
流れるプールで遊んでいたんだよなあ。

浮き輪も持たずに、潜ったり浮き上がったりを、  
繰り返していたような気がするけど、  
どこらへんにいたんだろう。

そんな風に思っていた時、

「あいつだ！」

とケイゴさんが叫んで走り出しました。

その向かう先を見ると、まだ長い髪を伸ばしっぱなしで、  
水面に広がるワカメみたいな頭をした、  
幼いわたしが流れるプールで、プカプカ浮いていました。

この時に、つけているバツジみたいなのを外して、  
幼いわたしに、プールから出るように言えば、  
事故も起こらず、髪を切らないで済むんだろうけど、  
それはきつと、やってはいけないのだろうと思って、  
これから溺れて怖い目に遭うはずの、  
呑気に仰向けで漂っている、小さな自分から目を離して、  
さらにその先へと目を向けました。

もう少し進んだ先には、排水溝があり、そこに最も近い監視員に、声を掛けている女の人があります。

ケイゴさんは、そこに向かって走っていき、見えるはずのない、ケイゴさんに気づいたその人は、すぐに逃げ出しました。

ケイゴさんに気づいたと言うことは、あれはこの時代の人じゃないから、つまり犯人なんだ！

わたしも急いで、2人の後を追いかけます。

わたしが足が遅くて、かなり離されてしまい、離れてはいけないと言われていたのを思い出して、わたしは焦って、ケイゴさんの名前を呼びながら、見失った方向へと走りました。

そうすると、プールの敷地の奥にある、救護室のある建物の裏の方から声が聞こえて、わたしも後を追って、そこにいきました。

そこは周囲からは、死角になっていて、狭い隙間の奥は、行き止まりになっている場所でした。

そこにいたのは、若い女の人で、誰かに似ている気がするんだけど、はっきりとは判りません。

その人は、わたしの姿を見て驚いた顔を見ると、

「どうしてここに!？」  
って叫んでいました。

その声を聞いて、思い出しました。

この人、巴ちゃんや恵ちゃんに似てるんだ!

わたしはこの時、それを口走ってしまい、  
女の人は、わたしに気を取られたケイゴさんの隙について、  
腕につけていた、腕時計みたいなものを触りました。

そしたら、犯人はどんどん透明になって、  
消えてしまいました。

この直後、舌打ちしたケイゴさんは、  
わたしの腕を掴んで、元来た方向に走り出しました。

車へと急いで戻りながら、ケイゴさんはわたしに早口で、  
さっきの犯人が誰に似ていたのかを、聞いてきたんです。

わたしは、親戚のいとこの姉妹に似ていたことを伝えると、  
ケイゴさんは、通信する機械みたいなもので、  
誰かに連絡していました。

その後に早口で、時間航行可能な人間にとって、  
邪魔な人間を消すのに必要なのは、  
その人間の名前が最も重要で、それさえあれば、  
後は、どの時代のどの場所にいたかを探り出して、  
過去の殺しやすい時期まで遡航して、  
隙について、殺害すればいいだけなんだと言いました。

そして、さっきのわたしの言葉で、  
こちらも向こうも、相手の正体を知る情報を得たから、  
これから先は、犯人の正体を探り当てて身柄を拘束するか、  
こちらが先に犯人に始末されて、消えるかを賭けた、  
時間との勝負になった、と言いました。

つまりそれって、わたしが何も考えないで、  
名前を呼んだりしたから、いけなかったの？

そのせいで、ケイゴさんが危険になっちゃったの？

わたしは、取り返しのつかないことをしてしまったのかと、  
とても不安になってきて、泣きそうになりながら、  
ケイゴさんに謝りました。

そんなわたしを見ながら、ケイゴさんはこっちを向いて、  
「なあ、そう泣くなよ、ばあちゃん。

この勝負はきつと勝てる。

こちらには過去の人間全ての行動を記録した、  
時間情報局のデータベースがある。

それで調べれば、あれだけ絞り込まれた人間の行動なんて、  
すぐに特定出来るんだ。

向こうが俺の名前を把握したところで、ただの民間人では、  
過去の確認なんてすぐには出来ないし、こっちは組織だ、  
動いているのは俺1人じゃない。

たった1人の犯罪者が、組織の包囲網をかいくぐれやしない。  
それにしても、かあちゃんが涙脆かったのは、  
親譲りだったんだな」

と言って、笑っていました。

そっか、大丈夫なんだ、良かった……

この後、車に乗り込んで、

ケイゴさんが、出発の準備をしていると、

その間に犯人のことが判つたらしくて、

また誰かと連絡していました。

そしてナビの画面に表示された、見慣れない画面を操作して、

いつに行くかを決める、西暦っぽい数字と、

どこに行くかを決める、経度や緯度や高度っぽい数字を、

画面に入力していました。

それが終わると、すぐに窓の外は真っ暗になって、

また、ワープみたいなのが始まりました。

「こっちはもう、犯人の居場所を掴んでいる。

後はそこに向かって、まだ何も判っていない犯人を拘束する。

それで全て終わりだ」

そう言ったケイゴさんに、わたしは、

さっき、犯人はどうして消えたのかを尋ねると、

本来は徐々に変動させる波動係数を急変させる事により、

まるで消えるようにその時間軸に属する物質から、

存在を消失させることが可能なんだけど、

これは本来緩やかな流れである時間の経過を超えた、

急激な波動の変化をその物体に与える事になり、

素粒子レベルの損傷が発生して物質的に不安定になり、

非常に危険なんだそうです。

物質的な結合の強度が高い物ほど波動の変動耐性は高く、波動係数の齟齬限界期間は有機化合物では平均10年、無機化合物では平均40年なんだそう、この期間を超えると、あの装置のような干渉措置無しでは認識出来ないだけでなく、存在そのものが物理的に消滅してしまう、らしいです。

波動係数の変動率の干渉現象には段階があり、その作用は実際にはこれほど単純ではないのだけど、非常に単純に説明すると、初期段階は有機化合物間のみが干渉不能になり、第2段階には有機化合物と無機化合物間が干渉不能になり、最終段階は無機化合物間も干渉不能になるのだそう、今のわたし達は第2段階で、この装置によって、認識出来なくなる境界値を維持するように制御されていて、それをあの時の犯人は最終段階まで変動させていた、らしいです。

時制官に支給される正規の制御装置では、そのような急激な変動が出来ないようになっているけど、その規制を外しているものが裏で出回っていて、犯人はそういう改造された制御装置を使って、あの場から逃げ出したようで、もしかすると、もうすでに犯人は無事ではないかも知れないと、ケイゴさんは言っていました。

その後わたしはケイゴさんへと、ずっと疑問だった、巴ちゃんや恵ちゃんに似た犯人は、どうしてわたしを狙っていたのかを尋ねると、その理由を気づいているっぽい、ケイゴさんは、  
「それは……」

と少し言いにくそうな顔をしていたけど、次に口を開いた瞬間、ケイゴさんの姿が、パツと消えました。

え！？ ケイゴさん！？

驚いている間にも、目的の場所へと到着したようで、車はまた振動を始めていて、そして再び、周囲は真っ白に変わりました。

目を開くとそこは、父のお墓のある場所でした。

視界が戻ってからすぐに隣を見ましたが、やはりケイゴさんはいません。

そんな、さっき、大丈夫って言ったのに……

犯人の方が、ケイゴさんよりも早かったんだ。

だからケイゴさんは消えちゃったんだ。

わたしのせいで、こんなことになったのかと思うと、悲しくて涙が溢れて来ましたが、よく考えると、今は、泣いている場合ではないのに気づきました。

と言うことは、わたしはどこかも判らない時代に、独りぼつちで放り出されたんだ……

そうだ、ナビの画面、画面を見られれば、今がいつかは判るかも知れない。

到着してから、ずっと真つ暗になっている画面に、ケイゴさんがしていたみたいに、触ってみたけど、何も表示されません。

もしかして、登録されている人以外だと、反応しないようになってるのかな。

どれだけ試しても、やっぱり画面は表示されず、これで今がいつかを確認するのは諦めました。

わたしは、これからどうしたらいいんだろう。

ここは、父のお墓の近く……

そうだ、お墓だ、お墓を見ればある程度なら、今がいつかは判るかも。

そう思って、わたしは外に出て、父のお墓のところに向かいました。

お墓は前と変わらずに、そこにありましたが、随分長い間、手入れされていない感じがです。

わたしはお墓の脇にある、墓誌を確認しました。

するとそこには、以前のお墓参りでも見ていた、おじいちゃんやおばあちゃん、それから父の名が刻まれていました。



その隣には、母の名がありました。

母は平成43年に63歳で亡くなっていました。

そして、その手前にもうひとり、

そこには、わたしの名前がありました……

わたしは、母よりも早く、

平成34年に29歳で亡くなっていました。

わたし、あと11年しか生きられない、

30まで生きられないんだ……

正直、自分の名前があるとは思っていなかったのもあって、  
ショックで呆然としてしまい、

残り11年の寿命すら、なくなりつつあるのに、

この時、すぐには気づきませんでした。

呆然とした状態から、正気に戻ったのは、

何となく、体の感覚が変になっているのに気づいたからで、

それは氷が溶けるみたいに、表面からじゃなくて、

電子レンジで、食べ物の中から温まるみたいな感じで、

熱くなったと思ったら、今度はその熱さが冷めてくると、

それと同時に、感覚もなくなっていくんです。

そうか、判った、このバツジだ、

ケイゴさんが消えちゃったから、

これが機能しなくなっちゃったんだ。

今の時代は少なくとも、母の命日から考えて、

わたしの生きていた時代から、20年は経っていて、  
ケイゴさんの話にあった、時間軸の波動の、  
有機化合物のなんたらかんたらとか言う、  
別の時代にいられる、期間の限界が10年だから、  
わたしは、この時代では存在出来ないんだ……

それを理解して、どんどん体の感覚がなくなっていく中で、  
最後に見えたのは、このお墓に近づいて来る、  
本当なら、ケイゴさんが捕まえるはずだった、  
まだ何も知らない犯人の、小さな姿でしたが、  
それも誰かが判らないうちに、わたしは消えてなくなり、  
そして、目が覚めました。

2???.?年 ??月 その1(前書き)

変更履歴

2011/11/27 小題修正 20??年 ??月 その4

2???.?年 ??月 その1

2011/11/27 冒頭文追加

2011/11/27 記述修正 これは、学校が近づくと更に酷  
くなくて、 電車を下りて学校が近づくと、避けられるのは更  
に酷くなって、

2011/11/27 中吊りの広告の記述追加

2???.?年 ??月 その1

??月??日

もう、どのくらいの時間が過ぎたのか、よく判らなくなっています。

実はわたしは、とつくの昔に死んでいて、それを気づかないで、お化けになって、ずっと気づかないまま、何百年も経っているんじゃないかとか、最近はその思っています。

あまりにも、夢を見ている時間が長すぎるから……  
もう数え切れないくらい、夢を見たんです。

色んな夢を見ては、目を覚ますんですけど、そこもまた夢の中、みたいな展開ばかりになっていて、何が何だか判りません。

まるで、自分が出演した覚えのない、自分とそっくりな人が出ている、短編映画を延々と見ている様な、そんな、他人事みたいな気持ちになってきます。

でもいつも、出ているのは間違いなくわたしで、夢の中では自分の意思で考えて、行動している、と思う。

だからいつも、もしかしたら思って思うけど、  
やっぱり最後は夢なんです。

そんな、果てしない夢の内容なんですけど、  
だんだんと、変わってきています。

どう言うことかって言うと、  
派手になってるって言うか、  
めちやくちゃになってるって言うか、  
更に現実味がなくなって来ています。

こうなっちゃうと、悪夢だって判った後でも、  
とても疲れる気がするんです。

せめて、もっと穏やかな夢を見たいです……

??月??日 へんてこな世界

目を覚ますと、もう夕方になっていて、  
どうやらわたしは、いつの間にか眠っていたようです。

あれ、たしかわたし、  
何かをしようとしていた気がするんだけど、  
なんだったっけ……？

うーん、思い出せない。

まあ、いいや。

とりあえず、早く家に帰って、夕飯の買い物に行かなくちゃ。

わたしは急いで家に帰ってから、スーパーへと買い物に行ったんですけど、何となく、雰囲気を変な気が。

何となくなんですけど、周りの人たちから、避けられているような気がする。

わたしと視線が合いそうになると、顔を背けてる気もするし……

それが気になって、何度か確認したけど、自分に別に変なところはないし、いつも通りなのになあ。

何だかよく判らないけど、とにかく買い物済ませて、家に帰りました。

明日になれば、いつも通りになるかなって思って、何気なくテレビを見ていたら、てっきり今日は、3月31日だと思っていたのに、4月3日だったんです。

一瞬、エイプリルフルかとも思って、携帯で確認しても、やっぱり4月3日で、明日はもう登校日でした。

おかしいなあ、まだ春休みだと思っていたのに。

何だか、お休みを3日分損した気分です……

この日は明日の支度をして、早々に寝てしまい、そして翌日になって、登校日になりました。

今日からわたしも高校三年生ですが、全然実感はないし、昨日感じていた、避けられている感じ、それも相変わらず、今日も続いています。

そのおかげで、電車はかなり込んでいるのに、わたしの周りだけ余裕があつて、乗りやすいけど、何だかなあ……

何となく車内を見渡すと、中吊りの広告が目にとまりました。

そこには、週刊誌の見出しが載っていて、『徹底検証！ おバカアイドルは本当に馬鹿なのか！？』  
つて書いてあつて、そのアイドルらしい、女の人の写真が載っていたんですが、すっごいバカっぽい顔をしているけど、どう見てもそれが、かなに見えるんです。

別人とは思えないほど、良く似てるけど、かなはあんな顔しないし、凧高じゃ有名でも、さすがにアイドルじゃないしね。

それにしても、良く似てるなあ……

その隣の中吊りは、バイオリンコンサートの宣伝で、

『世紀の天才バイオリニスト 初の日本凱旋公演』

って書いてあって、純白のドレス姿でバイオリンを弾いている、色白で長い黒髪の女の人が載っていました。

でもその人、顔がすごく、みことっぽい……

今まで想像したことなかったけど、

みことって、髪長いと全然イメージが変わるんだなあ。

こっちも良く似てる……

その広告を、もっと確認したかったんだけど、

もう降りる駅に着いてしまい、

バイオリン奏者やアイドルの名前までは、判りませんでした。

帰りの電車でも、また中吊りを探してみよう。

その前に、クラス替えがどうなってるか判らないけど、

もしふたりに会えたら、絶対このことを話そう。

電車を下りて学校が近づくと、避けられるのは更に酷くなって、

風高の制服を着ている、普通の生徒は、

みんな、わたしに近づかないようにしているし、

わたしの姿を見るだけで、

早足になって逃げていく人たちも多いです。

うわぁ、思いつきり避けられてる、

何なんだろう……



更に違和感があるのが、逆にわたしに近づいてきて、頭を下げて、挨拶してくる人たちもいるんですけど、そう言う人たちは、どう見てもヤンキーの人とか、怖そうな人ばかりです。

何がどうなっているのか判らないけど、わたしは、すごく偉い立場の人になったみたいです。

もう違和感しかないけど、前に酷い目に遭わされた人たちから、頭を下げられるのは、ちょっと気分がいいです。

そんな風に思っていたら、後ろから、今までとは違う感じで、わたしを呼ぶ声が聞こえました。

「三崎」

あ、この声はなつめだ！  
でもなんで苗字？

とりあえず振り返ると、そこには、日に焼けた浅黒い肌に、ショートカットの髪、上はジャージで下は短パンを着ている、今まで見たことも、想像も出来ないような、颯爽とした姿のなつめがいました。

え、これ、なつめ！？

わたしが驚いていると、そんなわたしの態度にはお構いなく、色黒ななつめはわたしを睨みながら、

力強い大きな声で、話し始めました。

「私は卑怯な事が大嫌いなんだ、だから、お前らみたいなのが一番許せないし、絶対にお前らみたいなのは、つるまない。」

お前、またうちの部員にちよっかい出しただろ、今度また手を出してきたら、許さないから覚えとけ」

そう言うと、体育会系ななつめは、すごい速さで走って行ってしまいました。

なつめの足、傷もあざも全然なくて、すぐきれいだった……

よく判らないけど、わたしはなつめのいる部の部員に、何かをしてそれを怒っていた、みたいです。

もう、何が何だかさっぱり判らないけど、とりあえず教室へ行って、考えよう。

そう思って、わたしは新しい教室へと向かいました。

校舎に入ると、わたしの姿を見ただけで、廊下にいる人たちは、壁際に並んで道を空けていて、まるで王様にでもなったみたいです。

気分はいいけど、ほんと何なんだろうなあ、これ。

わたしが新しい教室に入ると、教室の前に人だけが出ていて、

どうやら、誰かが囲まれているように見えます。

わたしの姿を見ると、

集まっていた人たちは、すぐに道を空けて、  
その中でうずくまっている女子が見えました。

長い黒髪を三つ編みにしている、

制服も普通で、スカートの丈もかなり長い、

わたしが言うのも何ですが、とても地味な女子で、  
小さく啾り泣く声が聞こえています。

その女子は体を起こして、こちらを見たんですが、  
どこかで見たことある顔に見えるんだけど、  
どうしても誰だか思い出せません。

この人、絶対知っていると思っただけどなあ、  
どうしても思い出せないだろう。

「あ、ああの、あの、ああ、ううう、

すすす、すい、まま、せん、ああ、あの、

ご、ごめん、なさい……、

ま、まだ、あ、あの、その……」

わたしが考えていると、

その女子は、鼻をすすりながら、

涙声で、わたしに謝っているみたいでした。

でも、それ以上のことは聞いていても判らなくて、  
何が言いたいんだろうと思って、それを訊こうとしたら、  
わたしが声をかけるよりも前に、

取り囲んでいた人の中のひとりが、

「こいつ、今日の分の金が用意出来てないんですよ。

門塾の分以外はここに揃ってます、

三崎さん、どうぞお納め下さい。

俺たちへの罰は、どうか勘弁して下さい!」

と言って、わたしへと、

やけに分厚い、白い封筒を差し出されて、

周りにいた人だけじゃなくて、

クラスの全員が立ち上がって、深く頭を下げていました。

ん？ 門塾？

この地味な女子が、門塾さん!?

眉、かなり太いなあ、

それに、こんなに目ちっちゃかったんだ、

でもやっぱり、メイク映えしそうな美人顔してる……

「どう、か、あの、あ、あの、どうか、

もう、日、だけ、うう、あ、あの、

待って、く、くだ、さい……

うう、う、お、おねが、い、します……」

こんな中で地味な門塾さんは、すっぴんの顔を、

涙と鼻水まみれにしながら、ぐしゃぐしゃに歪めて、

何度も床におでこをぶつけて、

わたしへと土下座して、謝っていました。

白い封筒の中を見ると、

たくさんのお札が詰め込まれていました。

お納め下さいってことは、  
これはわたしにくれたお金、なんだ。

で、それが払えなかった地味な門塾さんは、  
わたしに土下座して謝っている……

この展開だと、わたしって、かなりの悪い人？

ああ、この状況、ますます判らないよ。

この場はとにかく、無難に済まして、  
状況を訊ける相手を見つけよう。

わたしは門塾さんに、支払いの延期を認めてあげてから、  
自分の席へと向かいました。

この後地味な門塾さんは、お金を工面しに向かったようで、  
すぐに走って教室を出て行きました。

ちょっとだけ、ほんのちょっとだけですが、  
もう少し泣きじゃくって、わたしへと謝る姿を、  
眺めていたかったような気もするけど、  
今はそれどころじゃない。

誰か、今のわたしのことを詳しく知ってて、  
そういうことを、ちゃんと教えてくれそうな人、  
いないのかな、と思っていたら、  
遠くからやけにうるさい、  
原付バイクみたいな音がしてきました。

ここって4階なんだけど、どうしてバイクの音が？

この騒音は、廊下の方からで、  
だんだんとその音は大きくなって、

この教室の前に来たと思つたら、  
原付に乗った金髪の女子が、突っ込んできました！

クラスメイトがふたり、体当たりされていたけど、  
それには目もくれず、そのバイクの人は、  
バイクに乗ったまま、わたしの前にやってきました。

メッシュが入った金髪のショートヘア、耳にはピアス、  
細い眉に、真っ赤な口紅で、啞えタバコ。

右の頬には絆創膏が貼ってあって、  
両手には指輪、じゃなくて、ケンカで使う、  
武器みたいなものをつけて、  
左手で持った黒い木刀を肩にかけていました。

短くしているスカートから伸びる足は、  
両足とも、太もものところに包帯が巻かれていて、  
膝から下は、絆創膏とあざだらけです。

そして、その人はわたしへと、  
「姉貴、チーッス。

二年の分の上納金、回収完了しましたあ、  
いつも通り、正午までには、  
いつもの口座に振り込ませますんでえ、  
しっかし姉貴はいつも変わらず地味っスねえ。

夜はあんなに凶暴なのに」「  
と、気だるい感じだけども聞き覚えのある声で言ってから、  
けらけら笑っていました。

……この人、葵ちゃんだ。

そう気づいてみると、  
今の葵ちゃんの、ギラギラした鋭い目つきは、  
わたしが覚えている、可愛かった葵ちゃんが、  
夢中でUFOキャッチャーをやっていた時にしていた、  
キラキラしていた目に、似ているような、似てないような……

まあとにかく、わたしのことを姉貴って呼んでたし、  
今までで、一番親しげな態度だから、  
きっと、今のわたしに近い立場なのかもと思い、  
わたしはヤンキーの葵ちゃんの手を掴んで、  
人のいなそうな、屋上へと向かいました。

「どうしたんすか、姉貴、  
今日はらしくないっすよ、  
それ、新しいキャラ設定っすか？  
ほんと、姉貴は化け猫っすねえ」

わたしの態度がいつもと違ってるとっばくて、  
それを訊かれてるっばいけど、  
とりあえず、他に誰もいない、  
屋上についてから、話をした方がいいと思って、  
無言で葵ちゃんの手を引っ張っていきました。

そして、無事に誰もいない屋上について、

わたしは改めて、金髪の葵ちゃんへと、  
わたし自身のことを尋ねたんです。

葵ちゃんは、それを冗談だと思ったらしく、  
それに付き合うように、話してくれました。

「何の真似なんスかあ、それ、  
記憶喪失ごつことかあ？」

それ、なんか楽しいんスかあ？

そおんなに自分の武勇伝、語らせたいってんなら、  
わかりましたよ、言えばいいんでしょ言えば。

姉貴はあ、この凧高を統括している、

チーム『リンクス』のリーダーで、

普段は地味な格好だけど、闇討ちと奇襲を得意としてて、  
勝つためには手段を選ばなくって、

普段の地味な姿と、突然相手に不幸を与えるところから、

昼間の通り名は『黒猫』で、

一度キれると、半殺しどころか、

相手が動かなくなるまで笑いながらボコる極悪さと、

その表の顔からの豹変っぷりから、

夜は『化け猫』の通り名を持つ、

名実ともにこの地域で最強のリーダー。

で、私はその化け猫の妹分、

こんなもんで、いいっスか？」

わたしは、チームのリーダーで、黒猫、化け猫……

そうか、だからみんな避けるわけだ……

「こんなん語ってたら、まあた思い出した、



去年、私が姉貴に半殺しにされたこと。  
あんどきゃあ、マジで殺されるかと思いましたよお。  
後にも先にも、私がビビったのはそれっきりっス、  
それまで、負けたことなかったのになあ」

この、かなり危なそうな葵ちゃんを、  
わたしが、半殺しにした……

「それよりも姉貴、聞いて下さいよ、  
ケルベロスの狂犬のヤローが、まあた手え出して来たんスよ。  
あいつら最近調子乗ってっから、またシメてやりましょうよ！  
頭のケイゴさえ潰せば、残りはザコばっかだし楽勝っスよ。  
ねえ、姉貴？ 聞いてます？」

ケイゴ？ ケイゴってケイゴさんのこと？

「姉貴い、まあだその記憶喪失ごっこですかあ？  
そんなあ、すつとぼけた顔しちやってえ。

ケイゴはあ、暴走族のチーム『ケルベロス』の、  
新リーダーでしょ？

この前だって、姉貴も食らったじゃないですか、  
あいつの原チャリ投げを。

あいつぜつてー、頭おかしいっスよ。

普通、原チャは乗るもんだろっ、あんなクソ重いもん。  
それを、振り回して投げつけてくるんだから、  
ぜつてー狂ってる。

あんな化ケモン相手に、まともに殺り合う必要ないっスよ、  
車で轢いちまえば、楽に殺れると思うんスけど、  
どつっスかねえ？」

ケイゴさんは、暴走族のリーダーで、わたしとも、前にケンカしてる……

葵ちゃんの衝撃的な話に、全く対応出来なくて、ずっと黙っていたら、葵ちゃんから声をかけられました。

「姉貴、ホントにどうしたんスか？

顔色真っ青っスよ。

……姉貴、もしかしてマジで記憶がないんスか？

勘弁して下さいよお。

だったら、ちょっとツラ貸して下さいよ」

そう言うときと葵ちゃんは、さっきとは逆に、

わたしの手を掴んで、屋上から校舎へと戻りました。

何処へ連れて行く気なのかと思いつながら、

腕を引かれるままに歩いていくと、

女子トイレの中へと、連れ込まれました。

ここで、何する気なんだろう……

そう思っていると、葵ちゃんは、

「姉貴、いつまでも寝惚けてる場合じゃないっス。

自分自身を見れば、すぐに思い出すっしょ、

いいから、早く脱いで下さいよ！」

と怒鳴ってから、洗面台の鏡の前に立たせて、わたしの制服を脱がし始めました。

この時、わたしは抵抗しようとしたんだけど、葵ちゃんの剣幕が、すごく怖かったのと、

前に門塾さんに襲われた時のことを、  
思い出してしまったのもあって、  
体がすくんでしまつて抵抗出来ず、されるがままに、  
ブレザーとワイシャツを脱がされました。

「あれ、サラシ巻いてないんスね、  
いつつも巻いてるのに。」

それにしても、白の無地つて、  
すっげえ地味なブラっスねえ、  
まあいいや、それより背中背中！」

そう言うと葵ちゃんは、背中中のブラのフックを外してから、  
わたしを、洗面台に背を向けるように立たせました。

ここで思わず、悲鳴を上げそうになつてしまい、  
慌てて両手で胸を押さえながら、  
わたしの背中に、何かあるんだらうと思いつつ、  
振り返つて鏡を見ると、私の背中が映つていて、  
その背中には、ほぼ一面に大きく、  
ヒョウちゃんみたいな、黒い猫の絵も映っていました。

え、なにこれ……

啞然としているわたしへと、  
自信满满的な、葵ちゃんの声が聞こえました。

「どんなにとぼけても、自分の体のタトウーなら、  
さすがに誤魔化せねえっしょ！  
チームリンクスのリーダーは、  
黒猫のタトウーを入れるって、

姉貴が自分で決めて、実践したんスからねえ。

「これでもまあだ、そのふざけた遊びを続けるんスか？」

今までは、自分以外の周りが変だったただけだけど、これは、わたし自身にある証拠だ。

でも、わたしはこんなの知らない。

つまり、ここにいるわたしは、

わたしの思っている、わたしじゃないんだ。

じゃあ本当に、わたしは記憶喪失なの！？

この時、わたしはすごく動揺して、

血の気が引いていくのが、自分でも判り、  
もうどうして良いか、判らなくなってしまい、  
ショックでその場に座り込んでしまいました。

そんなわたしを見下ろすように、

前に立った葵ちゃんは、しばらく黙って、  
わたしの様子を見ていました。

そして、さつきとは少し変わった冷めた口調で、  
葵ちゃんから声をかけられました。

「……これでも、戻らないんスか、姉貴。

どうやらマジで姉貴は、私の知ってる姉貴じゃあ、  
なくなってるみたいっスねえ。

だったらもう、どうしても私が勝てなかった、  
常勝の化け猫じゃあねえんだあ。

こおんな腑抜けた黒猫なんて、私は認めねえ、  
私はねえ、自分より弱えヤツに従う気なんてねえんだよ。  
だからあ、ここでえ、あんたの首とって、  
私が尻の頭とリンクスのリーダー継いでやるよ！」

そう叫んだ葵ちゃんは、わたしに向かって、  
振り上げた木刀で殴りかかって来て、  
わたしの頭は、スイカ割りのスイカみたいに、  
木刀で叩き割られた

と、思ったところで、目が覚めました。

2???年 ??月 その2

??月??日 GAME OVER?

気がつくとわたしは、

土手で横になって倒れていました。

あれ、もしかして寝てた？

なんかいつつも、

こんなのを繰り返している気がするけど、  
これって、気のせいかなあ……

周りを見渡すと、

もうヒョウちゃんもいなくなっていて、  
空は茜色になっていました。

かなり寝てたみたいだなあ、

急いで帰らないと。

立ち上がるうとした時に、一瞬強いめまいを感じて、  
また、その場に座り込んでしまいました。

でもそれは、すぐに治まったから、

あんまり気にせず、すぐに帰りました。

帰り道でも家でも、一瞬なんだけど、

何度かめまいを感じて、気が遠くなってしまう、

これは無理しない方が良さそうだと思うって、

この日は、家の余り物を適当に料理して、夕飯を済ませてから、早めに寝ました。

次の日の朝になったら、

治っていればいいなと思っただけど、

相変わらずで、急な強いめまいがしていました。

これが気になるけど、

とりあえず、朝ごはんを食べている時に、

父の手紙のことを思い出して、

昨日持つて行っていた、トートの中を探したけど、手紙は見つかりません。

きつと、あの土手で落としてきたんだ。

大事な手紙だったのに、失くしちゃうなんて……

昨日から雨は降ってないし、風も強くなかったから、多分そんなに遠くへは行ってない、はず。

まだあの辺に落ちてるかもしれない。

体の調子はあまり良くないけど、

まだ読んでもいない、大事な父からの手紙を、

絶対に探し出して、見つけたい。

そこでわたしは、朝ごはんを食べるとすぐに、

昨日と同じ場所へと出かけました。

御家河の川沿いのサイクリングロードを、

自転車で走っていると、何だかちょっとだけ、風景に違和感を感じました。

もつと家が、ずらつと並んでいた気がするんだけど、こんなにこの道、空き地が多かったわけ？

昨日通った時は、全然気にならなかったけど、帰りは急いでいたのと、もう暗くなってたから、良く見えなくて、あんまり感じなかっただけかも……

でもたった一晩で、きれいに空き地になるはずないし、気のせいだよな、きっと。

今はそんなことよりも、急いで手紙を探さないよ。

わたしは頭を切り替えて、手紙がありそうな場所は、どの辺かを考えながら、急いで昨日の場所に向かいました。

そして昨日いた場所に到着すると、自転車を降りて、土手の上の道や、土手の下の藪や河川敷なんかを、あちこち探してみたんですが、父の手紙は見つかりません。

もしかして、河の方じゃなくて、

土手の内側の道の方にあるのかも、とも思っただけ、道路沿いも見て回ったけど、やっぱり見つかりません。

これ以上広い範囲は、わたしひとりじゃ探せないと思い、みことに手伝ってもらおうと、携帯で連絡しようとしたら、携帯を家に忘れてきたのに気づきました。



ここからなら、携帯を家に取りに帰るより、みことのアパートへ、直接行った方が早いので、留守かも知れないけど、家にいる方に賭けて、みことのアパートに向かいました。

みことのアパートは、もう何回か行っているし、道も覚えているはずなのに、何故か、見覚えがない道に見えるんです。

前に来たのは、まだ1カ月も経ってないから、忘れたりはないと思うんだけど。

おかしいなあ……

何度か道を間違いながら、でもどうにか、みことのアパートまで、辿り着くことが出来たので、呼び鈴を鳴らしてみただけど、

留守なのか、出て来る気配はありません。

でもなんか、様子が違う気がする……

そう感じて、何気なく辺りを眺めると、その理由に気づきました。

間宮って言う表札が、ドアにありません。

それに、ドアの壁沿いにある台所の窓のところも、何にも物が見当たりません。

たしか前に来た時は、多くはなかったけど、

窓際に台所用品とかが並んでいたはず。

これじゃあまるで、空き家だ……

わたしはドアをノックして、なつめの名前を呼んだけど、やっぱり反応はありませんでした。

みことは黙って、どこかに行っちゃったの？

そうだ、携帯で連絡してみよう！

わたしは急いで家に帰って、  
携帯のみことの連絡先を探しました。

だけど、どれだけ見直してもみことの名前は、  
登録されていませんでした。

メールの履歴も、通話の履歴も、  
何にも残っていません。

どういふことなのか、全然判らないけど、  
みことの名がデータが消えちゃってる……

他の人は大丈夫か気になって、確認すると、  
かなはちゃんと残っていたけど、  
なつめのデータも無くなってました。

とにかく、なつめのところに行って、  
確認しよう。

わたしはこの後すぐに、  
なつめのマンションへと向かいました。

電車に乗っている時、もう何度も学校からの帰り道で、  
見慣れた風景のはずなのに、  
どうしてなのか、見慣れない街並みを見ている気がして、  
とても不安になってきました。

それに、もうひとつ気になっていたのが、  
めまいの起きる頻度が増えているのと、  
めまいを感じている時間が、少しずつだけど、  
長くなってきていることです。

そうなつてから気づいたのが、  
めまいと同時に、気が遠くなっているみたいで、  
もしかすると、少し気を失っているのかも知れない。

これと、色々おかしな風を感じるのと、  
関係あるのかも……

そんな不安を感じながら、電車に揺られていると、  
なつめのマンションがある、隣の駅に着きました。

だけど、わたしは電車から降りませんでした。

駅に近づいた段階で、なつめの住んでた高層マンションが、  
無くなっているのが判ったんです。

どうして……？

せめて、かなに連絡をと思い、  
もう電車の中でも気にせず、携帯を取り出して、  
連絡しようとしたら、この時にはもう、  
かなの連絡先も無くなっていました。

この時のわたしは、もうどうしていいか判んなくて、  
泣きそうになっていましたが、  
もしかしたらと、わずかな期待を込めて、  
この先にある、かなの家に向かいました。

このまま電車に乗っていけば、  
かなの家の最寄り駅に着くから、  
すぐに確認出来る。

かなまで消えている可能性は、とても高いけど、  
でも、もしかしたら大丈夫かもしれないし、  
万にひとつでも、無事でいて欲しい……

そう思っていたのに、かなの家がどうなっているのか、  
それを確認することすら、出来ませんでした。

なぜなら、最寄の駅自体、消えていたんです。

電車が、止まるはずの場所に近づいたはずなのに、  
そこには駅も駅ビルもなくて、  
ただ線路が続いているだけでした。

そして電車は、そこでは止まらずに通り過ぎて、  
となりの駅で止まりました。

わたしは駅に降りて、しばらくベンチに座って、涙をこらえながら、携帯の連絡先を確認していました。

わたしの知っている人たちの連絡先、それがもう、ほとんど無くなっていました。

こうなつてから、その人たちを探しに行つても、もう手遅れなんだ……

わたしはこらえきれなくなつて、駅のトイレにこもつて、中でしばらく泣いていました。

それで、多少は落ち着いてから、逆方向の電車に乗つて、家に帰りました。

トイレでも、戻る電車の車内でも、めまいと気が遠くなるのは、ずっと続いていて、間隔はどんどん短くなつていくし、それと反比例して、その症状が続く時間は、長くなるばかりです。

下りる駅について、自転車置き場まで行くと、目の前にいた車が、この症状の直後に消えたのを、はっきりと目撃しました。

やっぱり、これが起きる度に、何かが消えていつてるんだ！

でもどうして!？

それに、わたしはどうすればいいの!?

そんなの全く判らないけど、とにかく家に帰ろうと思い、自転車を飛ばして、急いで帰りました。

でも、途中の土手の道を走っている時、我慢できないくらいに、強いめまいに襲われて、気が遠くなった途端、ハンドルを取られて、わたしは自転車ごと、土手の下の河原に落ちました。

ごろごろ転がり落ちて、すっかり訳が判らなくなってしまい、多分、しばらく気を失っていたらしく、わたしは空を見上げた、仰向けの状態で、意識を取り戻しました。

体中、あちこちぶつけて痛いし、それにまだ、めまいも続いている気がしたけど、それだけじゃなくて、周りの様子が変わるのに気づきました。

すぐに気づいたのは、全く音がしていないことです。

人の声も、鳥の鳴き声も、車の音も、風の音も、何も聞こえない。

この後、起き上がろうとしたけれど、体が全然動きません。

空を良く見ると、

いくつかの白い雲が浮かんでいる以外に、  
何故か青空なのに、少し暗い気がして良く見ると、  
何か白いけど雲じゃない、  
もっとはっきりした形の、半透明の何かが、  
大きく空に浮かんでいるのが判りました。

あれは、何だろう、  
文字、みたい見える……

『 b      Z E 』

それはわたしから見ると、そう見えました。  
なにこれ？

逆さのAとか、あとZもやけにまるっこい……

しばらく眺めていて、やっと気づきました。

ああそっか、これ逆なんだ！

丸っこいZは鏡文字のSで、  
逆のAやUをひっくり返すと、

『 P A U S E 』っ書いてあるんだ！

P A U S E っって、一時停止の、ポーズ？

ゲームとかで止めることの、ポーズ？

それがどうして空に、それもあんなに、

大きな字で浮かんでいるの……？

そんな疑問を感じていたら、今度は、文字とは別の、半透明じゃない白い矢印が表れて、空をクルクルと輪を描くように、飛んでいました。

あれ、どこかで見たことある気がする……

ああ、判った！

かなの家で、ノートPC使ってた時に見た、マウスカーソルだ！

とつても大きなマウスカーソルが、空をさまよっているんです！

それだけでも、十分意味が判らないのに、マウスカーソルが、向こう岸にあった建物の上に来ると、半透明の英語で書かれているっぽい、まるで、マンガの吹き出しみたいな、四角いメニューみたいなのが、建物から出てきました。

メニューは英語で何行か書いてあって、カーソルがその上を通ると、その行が反転して表示されていて、カーソルは一番下の、  
“Delete Object”って、書いてあるっぽいの上で、止まりました。



その後、メニューが消えると同時に、  
メニューの吹き出しが繋がっていた建物は、  
パツと消えてしまつて、

その場所は、何もない空き地に変わりました。

……そつか、わたしがめまいを感じたり、

一瞬気が遠くなつたりしている間に、

毎回こんな状態になつていて、

どんだん色んなものが、ああやって消されていたんだ。

土手から落ちたおかげなのか、

他の理由があるのかは、よく判らないけど、

わたしだけが、ポーズの状態でも、

意識が残っているんだ……

その後カーソルは、また別の建物の上空に向かつては、  
メニューを表示して、次々と建物を消し始めました。

あれの近くにいたら、そのうちこっちにも来て、  
わたしも消されるんじゃない……

どうにかして、少しでも遠くに逃げなくちゃ！

と思つて、必至に体を動かそうと、

ジタバタもがいていたら、

ちよつとずつ、体が動くようになって、

金縛りみたいのを解くことが出来ました。

いきなり立ち上がつて、走り出したりしたら、

目立ってしまったって、すぐに見つかりそうなので、

自転車に乗るまでは、出来るだけゆっくり目立たないように、土手の上に上がりつつ、少し上に倒れていた、自転車を引きずりながら、土手の上に上がりました。

そして、上がりきったところで、急いで自転車を起こして乗ったら、全力で、家に向かって走り出しました。

土手の道には、通行していた人たちが、マネキンの様に、道で固まっているのを避けながら、とにかく全力で走りました。

これでちよつとでも、カーソルから離れられればって思ったけど、後ろを見ると、カーソルは、もう、対岸からこっちに移動していて、まるで、わたしの後を追いかけているみたいに、さつき通り過ぎた人たちを、消し始めていました。

やっぱりあれが、かなや、なつめや、みことを……

出来ることなら、みんなを元に戻したい、だけど今はまず、わたしが逃げ切らないといけない。

カーソルの移動するスピードは、一気に河を渡ってきたから、かなり近づいていたけど、こっち側に来てからは、周りのものを消しながらなので、意外と遅くて、だんだんと、距離は離れ始めていました。

やがて、かなり家にも近づいて、  
もうすぐ土手の道から、外れるところまで戻っていました。

住宅街に入ってしまったえば、  
多分だけど逃げ切れる、気がする、  
もう少しだ！

と、思ったなら、自分の周りが急に暗くなりました。

嫌な予感がして、空を見上げると、  
わたしの真上に、白いカーソルがありました。

結構、引き離していたはずなのに、  
一瞬でわたしのところまでやって来たそれは、  
わたしを指す様に、カーソルの先端を向けていました。

ああ、これでもう終わりだ、  
わたしも消されちゃうんだ……

そう思って、わたしは諦めて、  
自転車を止めて、降りました。

消されると飽きられた途端に、  
今まであった出来事を、急に思い出したりして、  
これが走馬灯なのかなあ、とか思いました。

何だか判らないけど、  
自分の最期にいた場所が河の近くだったのは、  
わたしとしては、まだ良かったかな……

そんな感傷に耽りながら、もう諦めて、御家河の方を眺めていたんですが、いつまで経っても、何も起こりません。

カーソルが何かを消すのを、わたしが見ていた時は、こんなに時間が掛かっていなかったけど、どうしたんだろう……

わたしは不思議に思って、もう一度空を見上げると、カーソルは、細かく震える様に動きながら、グルグル頭上を回ったりしてから、また、わたしのところに戻ったりしていました。

そのうちに、近くの人や車を消してから、また戻ってくるのですが、やっぱりわたしからは、あの半透明のメニューが表示されることはなくて、マウスカーソルは、苛々しているみたいに、ずっと動き続けています。

もしかして、あのマウスカーソル、わたしが消せないんじゃない……

本当なら、止まっているはずが動いているし、今のわたしは、他とは違う存在になっているのかも。

これならまだ、消された人たちを、どうにかするチャンスも残っているかも知れない！

と、一瞬喜んだけど、この後カーソルは、それどころじゃないことをし始めました。

わたしを消せない腹いせみたいに、  
周りのものを、片っ端からどんどん消し始めたんです。

人や車や建物だけじゃなくて、道路や橋や河も、  
わたしの立っている堤防の道も、次々と消してしまい、  
カーソルはすごいスピードで動き回っていて、  
ものの10分くらいで、わたし以外には、  
地平線の果てまで、空と平らな地面だけしかない、  
本当に何にもない世界へと、変えられてしまいました。

もうわたしには、帰る家も、通う学校も、  
話す相手も無くなりました。

本当に、何もなくなってしまうた……

こんな何もない世界に、わたしだけが取り残されている。

これからわたしは、どうしたらいいんだろう。

そんなありえない悩みを、すぐに断ち切るように、  
空には新しい何かが現れました。

それは、マウスカーソルよりも全然大きな、  
長方形をした、メッセージウィンドウみたいで、  
2行の英文と、その下にふたつのボタンが見えました。

こっちからだと裏返しだから、読み辛かったけど、  
カーソルは、なかなかボタンをクリックしようとしなくて、  
ずっとウィンドウの上をうろちょろしていたから、

文章を読む時間はありません。

そのメッセージは、

『Exit the game .

Do you want the current

data will be destroyed?』

と、書いてあって、ふたつのボタンには、

『OK』と『Cancel』と書いてありました。

意味は、多分、

『ゲームを終了します、

このデータは壊されるけどいいですか』  
かな。

……やっぱり、これはゲームなんだ。

今あのカーソルは、わたしがどうしても消せなくなって、

ゲームがうまく進まなくなっちゃったから、

全てを破棄して、やり直そうとしているんだ。

でもそうになったら、わたしは消えちゃうの？

またやり直した時のわたしは、新しいわたし？

やり直して、一体いつから？

もしかして、やり直しなんてされなくて、

このまま全部が消えて終わりなの？

この世界って、一体なんだったの!？

わたしの混乱した頭が、疑問で一杯になった時、  
見えないプレイヤーは、ついに決断してしまい、  
カーソルは、『OK』のボタンを押して、  
その途端に視界が真っ暗になって

わたしは目が覚めました。

2???年 ??月 その3

??月??日 キャベツ畑の青虫

気がつくとわたしは、意識を失った時にいた、河を眺めていました。

でもそれは、いつも見ている風景とは違って、まるで、橋の上から河を見ているみたいな、見下ろしている景色になっていました。

だけど、わたしは橋にいるわけではなくて、何も無い土手の上の方から、下を見ているのです。

わたしが今見ている風景の中には、ついさっきまで、わたしが座っていた場所も、入っていて、そこには、倒れているわたしの姿が見えました。

……これ、幽体離脱？

こういうの、前にもどっかであったような……

だけど何となく、前とは様子が違うって気がするの、わたしはどんどん、地面から遠ざかっているんです。

これじゃあ、まるで、天に召される魂みたい。

あれ？



それってつまり、もしかして、わたし、  
死んじゃったってこと！？

え、そんなあ……

健康だけには、けっこう自信あったつもりだったのに。

あの時ちよつと、めまいがしたただけだと思ったのに。

まさか、あれで死んじゃうなんて、  
そんなに簡単に、人って死んじゃうものかなあ。

色々と納得は出来なかったけど、でも現にわたしは、  
天国があるはずの空へと、どンドン昇っています。

まだ、自分の体のところに戻れば、  
何とかなるかも知れない。

たしか前もそうだった、ような気がするし。

で、下りようと頑張ってみました、  
どれだけでもかいても、昇っているのには逆らえなくて、  
もう、生き返ったりは出来ないんだって、判りました。

あ、そつか、前の時は、夢だったもんなあ、  
やっぱり、あんなうまくは行かないんだなあ。

ああ、まだ色々したいことがあったけど、  
もう出来ないんだ……

わたしは、どんどん遠ざかっていく、  
倒れたままの自分を、見ていたのですが、  
少し離れた場所でも、わたしみたいに、  
倒れている人がいたり、

何かにぶつかって、止まってる車とか、  
火事みたいなの、黒い煙が昇っていたり、  
爆発音みたいなもの、聞こえて来るのに気づきました。

でも消防車のサイレンは、どこからも聞こえないし、  
騒ぎになっている感じでもありません。

それどころか、そういう爆発や事故の音以外してなくて、  
いつも普通に聞こえるはずの、人の声とか、  
騒音とかも全くしていません。

それで気になって、改めて河原をよく見ると、  
河に浮かんで、流されている魚とか、  
鳥が地面に落ちてしているのも、たくさん見つけました。

そして、そういう倒れている人や動物の上には、  
白っぽいもやみみたいなのが、煙みたいに、  
空に向かって昇っているのが、見えるんです。

もしかして、これって、魂………？

あちこちで昇っている、その白い煙は、  
風に流されることもなく、ひたすら真上へと上がっていて、  
繁華街の方の空を眺めると、白く霞んで見えるほど、  
いっぱい浮かんでいるのが判りました。

まるで、ひつじ雲みたいだ、  
あ、でも真つ白だから、どっちかって言うと、  
うるこ雲っぽいかも。

あれも全部、生き物の魂なのかなあ……

いまいちよく分からないけど、毒ガスとか、  
生物兵器みたいなのが、撒かれちゃって、  
みんな、死んじゃったのかもしれない。

もしかして、この辺だけじゃなくって、  
実はこれが、世界の終わりだったりして。

そんな風に思っていたら、近くに見えていた白い魂が、  
段々と薄くなっているのに気づきました。

この白いのって、このままずっと昇って行って、  
オゾン層にでもなっちゃうのかもって、  
思ったんだけど、なくなっちゃうんだ。

だったら、わたしもそのうちに、  
消えちゃうんだなあ……

出来れば、場所として理想を言えば、  
乍川だったら、本望だったかな。

まあ、でも、まだ御家河だったら、  
そんなに悪くはないから、いつかなあ。

どっちみち、もう手遅れみたいだから、

嫌だと思っても、変えられそうもないし。

この後は、自分の約18年の人生を振り返ったり、走馬灯じゃないけど、昔の思い出とか、やり残したなあって思った、最近のこととか、色々と考えていました。

そのうち、人生を振り返るのも終わってしまったけど、だけどわたしは、自分が消えていつてると感覚が、全然してきません。

変だなあ、どうして、わたしだけ消えないんだろう……

そのうち周りには、他の魂はなくなってしまったって、わたしだけが、青空をどんどん昇っていました。

下を見ても、もう景色と言うよりは、地図を見ているような感じになっているし、なんだか空の色も、変わってきている気がする。

体がないからなんでしょうが、暑いとか、寒いとか、苦しいとかもないし、勝手に上がってるだけなので、疲れもしないけど、このまま行くと、どうなるんだろう。

空って、絹雲が一番高くって、たしか対流圏にあって、それより上は、ええと、オゾン層？

じゃなくって、あ、思い出した、成層圏だ。

で、その上が、ええっと、なんだっけ？

まだ他にも、何とか層とかあった気がするけど、忘れちゃった。

で、わたしはその辺も越えて、宇宙に行っちゃうのかなあ。

天国って、宇宙にあるとは思えないんだけど、でも、空の上にあるってことは、やっぱり、宇宙にあるってことになるの？

わたしの天国のイメージは、雲の上の明るい場所で、かわいい小さな子供の天使が、飛び回っているんだけど、宇宙空間にいるのって、宇宙人だよなあ。

そうになると、天使も全部、宇宙人ってこと？

……なんか、それってやだなあ。

天国はともかく、まさか、このまま人工衛星みたいに、宇宙を永遠にさまよったり、しないよね？

それって、すごいロマンを感じるけど、帰れなくなつて、ずっとそのままっていうのは、ちょっとあれだし、それに宇宙をさまよう魂って、なんだか、SFと伝奇ものが混ざってるみたいで、変な気がする。

まあ、それ以前に、もう帰る場所も、みんないなくなってるから、そういう意味では、

なくなっちゃってるんだけど。

そんな取り留めもないことを、延々と思いながら、  
どんだん色が濃くなってくる空と、

もう日本地図レベルの、下の景色を眺めつつ、  
わたしはさらに上へと、昇っていきました。

そしてついに、わたしは、  
丸い地球を見ました……

すごく、きれい……

宇宙飛行士の人も言ってたけど、

地球はたしかに、青くって、  
とってもとっても、きれいでした……

こんな状況だけど、今まで見てきた景色の中で、  
一番感動しました……

ちょっとだけですが、よくある写真とか模型とかも、  
実際は違うんじゃないかって、疑ってたんです。

地球ってほんと、汚い星なんじゃないかって。

でも本物は、よくある写真とかと一緒に、  
実際に自分の目で見たら、そのすごい存在感で、  
すっかり圧倒されてしまいました。

もっとうまく、言い表せれば良かったんだけど、  
ボキャブラリーがなくて、とにかく、

すごい、と、きれい、しか浮かびません。

これだけ、すごいものを目の前にすると、  
今まで悩んでいたことや、こだわっていたことなんて、  
とっても小さな、つまらないことに思えてきて、  
もう、どうでもよくなっしまいました。

人はすぐに、損得や、優劣や、貧富の差で、  
いがみあったり、奪いあったり、殺しあったりしてるけど、  
そんなことをしてちゃ、いけないんです。

たったひとつの、大事な、大事な、  
この美しい、かけがえのない星を大切に、  
地球規模で、色んな物事を考えて、  
仲良くしていくべきなんです！

だって、わたしたちは、みんな同じ地球人なんですから！

……なあって、思ったりしました。

そのくらい、青い地球はきれいだったんです。

こういうのが、たくさん見れるんだったら、  
ずっとさまよっても、いいかもしれない……

でも、どれだけすごいものを見ても、  
誰にも伝えられないと思うと、悲しいです。

どんどん遠ざかっていく、地球を眺めながら、  
ふと、考えないようにしていた訳じゃないけど、

あまり考えたくないことが、頭をよぎりました。

そういえば、わたし、最後はどうなるんだろう。

やっぱり、ブラックホールに吸い込まれるの？

それとも、ズーっと宇宙の果てまで飛んでいく？

どっちにしても、何かすごいものが見れる気もする。

もう、これから先の人生？

と、言っているのか、分からないけど、  
開き直って、前向きに考えていこう。

だって、もうそれしかないんだから。

だいぶ地球から離れたし、そろそろ別の星も、  
見えて来るんじゃないかと思って、

周りを見てみたんですが、距離があるからか、  
ひとつも見つかりません。

あれ？ それってなんか変じゃない？

どうして、わたしがいた時は昼間で、  
今だって、地球は丸く見えているのに、  
後ろに太陽がないの？

それに気づいたのと同時に、  
想像外の変化が起きました。



突然、視界が歪んだかと思ったら、すぐに直ったけど、もうそこは、今までいた宇宙じゃない、全然ちがう場所が変わっていたんです。

まさか、ほんとに天国についたの!?

と、最初は思っただんですが、そこをちょっと見ただけで、すぐにそうじゃないって、気づきました。

なに、これ……? ?

それに、ここは、どこ?

わたしの前には、さっきまで見つめていた地球があるけど、それは、天井から床まで伸びている、ガラスの筒っぽい、ちよつど回転ドアくらいの大きさの、大きなチューブみたいな、透明のケースの中にあつて、まるで生き物の標本みたいに、浮いていたんです。

これが、さっきまで見ていた、地球のような気もするけど、でも、どうみてもこれ、

バスケットボールくらいの大きさに見える。

今までずっと、そこに住んでいた場所が、そんなに小さいはずがない、はず。

でも、途中で視界は変になつたけど、それでもずっと、これを見つめていた、はず。

さらにこのケースは、1個じゃなくて、

左右にもたくさん並んでいて、それが前にも後ろにもあって、その列の向こうにも、また別のケースの列があつて、とにかくたくさんさんのケースがあつて、その中には星みたいなのが、ひとつずつ入っているんです。

この場所は照明もない、広い倉庫みたいなところで、ケースだけが薄く光っていて、何の音も聞こえないし、ケースの並ぶ列は、果てしなく並んでいて、わたしの目では、途切れているところまでは、とても見きれません。

どっちかの方向に移動してみたけど、わたし自身の状況は、さっきまでと、変わっていないみたいで、周りを見ることは出来ても、動くのは出来ません。

仕方がないから、近くのケースの中に浮いている、星を見比べていたら、最初は全部同じなのかと思つたけど、よく見てみると、ひとつずつ違っているのに気づきました。

青い海と、茶色や緑や白い大地の、形と割合とかは、どれも違っています。

それから、全体的な色合いは、すごく鮮やかな色をした星もあれば、濁っていたり、煙っているみたいのもありました。

中には、完全に青い星や、黄色い星もあつたりして、これなんかは、海しかない星だったり、砂漠の星みたいに見えます。

で、わたしの目の前にあつたのは、  
見覚えのある、大陸の形をした、  
色のきれいな方に入る星でした。

これ、やっぱり、地球……？

もしそうだとしたら、地球って、  
大量生産された、ひとつの星だったってこと？

このケースをよく見ると、床に接している一番下のところに、  
5cmくらいの幅で、電光表示みたいなのがついていて、  
そこが光って、何か表示されているみたいんだけど、  
見たこともない文字で、全く読めません。

でもケースによって、その文字の色が違っているのは、  
判りました。

青い文字のケースは、表示内容は短くて、  
黄色い文字のケースは、文字もかなり長くて、  
赤い文字のケースは、一番文字数が少ないです。

ちなみに、わたしの目の前にあつたケースは、  
赤い文字でした。

これ、何か意味があるっぽいけど、  
どういう意味なんだろう……

それを考えていた時、右の方から、  
ゲームの効果音みたいなの、

すごい低い、低周波のノイズっぽい、短い音が聞こえ始めました。

その音はずっと、規則的に繰り返して聞こえてきて、こっちに近づいているみたいで、段々と、音が大きくなっていました。

何かは判らないけど、何だか嫌な感じがする……

わたしは近づいて来る、その音の正体を見ようと、音が響いてくる通路の右の方を、じっと見つめていました。

そしたら、その音に合わせて、並んでいるケースのうち、いくつかが、暗くなつていくのに気づきました。

どうやら、右の奥の方から順番に、その列の中のケースが、いくつか選ばれて、照明が消されているのと同時に、その音がしているみたいでした。

そして、もっと音は大きくなって、照明が消されていくケースの列が、かなり近づいて来ると、この音の正体が判りました。

それは、中に入っている星が、下に吸い込まれていく音で、

中の星は落ちて行く時に、引っ張られて、引き裂かれるみたいに、形がゆがんで、崩れながら、下へと落ちていました。

そして、照明が消えたケースには、もう星はなくなって、ただのからっぽな、ガラスの筒になっていました。

これってまるで、工場とかで、出来損ないの製品を、取り除いているところみたい……

この様子を見ていて、気になったのは、下に吸い込まれた星は、どうなったのかってことと、吸い込まれる対象の星は、どう決められているのかです。

ここでわたしは、下の電光表示を思い出して、ちょうど今、吸い込まれていくケースの、土台の部分を確認すると、それは赤い表示でした。

と言うことは、わたしがいたはずの地球も!?

もしかして、わたしが今ここにいる原因は、この赤い表示と、関係しているんじゃない……

つまり、みんな死んでしまったのは、星ごと処分する為の、前準備みたいなものだったとか。

まるで、出荷前の商品を消毒してるみたいだ……

わたしたちは、そんなにいくらでもある、たくさん作られている、星の中のひとつに住んできた、ほとんど価値もない、どうでもいい生き物だったってこと?

それどころか、表面に巣食った、  
雑菌や微生物みたいなものだったの？

今ここにいるわたしって、一体、何……？

ここでふと頭に浮かんだのは、  
広いキャベツ畑で、キャベツを食べる青虫です。

青虫としては、いつか蝶になる為に、  
一生懸命生きてるつもりだけど、  
キャベツを育てている、農家の人からすれば、  
大切な商品のキャベツを食い荒らす、ただの害虫です。

だから、駆除されてしまいます。

キャベツを植えて育てたのは、農家の人だから、  
青虫が悪いのでしょうか。

そんなこと言われても、  
始めからキャベツにくっついて生まれて、  
それを食べて成長するしか出来ないし、  
キャベツを食べて大きくなって、  
蝶になるしか考えられない青虫には、  
それしか出来ないんです。

これって、地球に巣食う人間と、  
同じじゃないですか？

そう思った時、地球のひとつ前の列の処理が終わって、  
いよいよ次が、地球のある列の番になりました。

これで、もう地球も処分されちゃうんだと思ったら、  
すごく甲高い、サイレンみたいな音が鳴り響いて、  
理由は判らないけど、星の廃棄処理が止まりました。

もう、生き物はいないのかも知れないけど、  
それでも、目の前で自分の生まれ育った地球が、  
壊されるのは見たくなかったから、  
良かったと思つた時、突然声が聞こえました。

「¥§%\*? @#&〒\$× ±！」

でもそれは、全く理解出来ないもので、  
何を言われたのかを、考える間もなく、  
何もないと思つていた天井から、  
曲がった棒のような物が、何本も出てきました。

その棒の先が全部、わたしの方に向いたと思つたら、  
先端が赤く光つて、その瞬間、  
目の前が真っ赤になって、そして

そして、目が覚めました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3270n/>

---

『水面の記憶』

2012年1月1日01時52分発行